

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第50集

きよ す じょう か まち
清洲城下町遺跡Ⅲ
そと まち
外 町 遺 跡

1 9 9 4

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

私たちが現在生活している大地の下には、さまざまな歴史の痕跡が広がっています。これは、私たちの先人が残された生活の跡であり、発掘調査によってのみ、その具体的な姿を明らかにすることができます。

原始・古代や中世と比べますと、近世の遺構・遺物の研究は、まだここ数十年と浅いわけではありますが、考古学は、文献史・建築史などの多くの分野の協力を得て、次々に新しい事実の発見を行っております。

このたび、清洲城下町遺跡では、県道清洲・新川線拡幅に伴い、また、外町遺跡では、県道新川・甚目寺線建設に伴い、発掘調査が必要となり、(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、愛知県教育委員会を通じ、愛知県土木部より委託を受け、事前調査を実施いたしました。

調査の結果、清洲城下町遺跡では、戦国時代の遺構・遺物だけでなく、古代から近世へと連綿と続く人々の生活の痕跡が確認され、また、外町遺跡でも、江戸時代の遺構・遺物の他に、戦国時代の城下町の頃や鎌倉時代中期の遺構・遺物も発見され、新たな知見を多く得ることができました。本書は、その成果をまとめたものであり、歴史研究の資料として活用されるとともに、埋蔵文化財の理解への一助ともなれば幸いと考えます。

最後になりましたが、調査に対して御理解、御協力を賜った関係諸機関、並びに、発掘調査に参加協力していただきました多くの方々に厚く御礼を申し上げる次第であります。

平成6年3月

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター
理事長 高木鐘三

総目次

清洲城下町遺跡Ⅲ

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査の経緯	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境 ...	2
第3節 調査の方法と経過	4

第Ⅱ章 遺構

第1節 基本層序	5
第2節 古代・中世の遺構	10
第3節 城下町期の遺構	14
第4節 近世の遺構	18

第Ⅲ章 遺物

第1節 古代・中世の遺物	19
第2節 城下町期の遺物	25
第3節 近世の遺物	37

第Ⅳ章 まとめ

第1節 古代集落の変遷	39
第2節 城下町期以降の遺構変遷	40
第3節 まとめ	40

付表

図版

外町遺跡

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査の経緯	1
第2節 立地と歴史的環境	4

第Ⅱ章 遺構

第1節 基本層序	7
第2節 中世～江戸時代中期の遺構 ...	9
第3節 江戸時代後期の遺構	13

第Ⅲ章 遺物

第1節 出土遺物の概要	23
第2節 古代の遺物	23
第3節 中世の遺物	25
第4節 近世の遺物	26

第Ⅳ章 科学分析

第1節 ¹⁴ C年代測定	107
第2節 出土木製品の樹種	108
第3節 胎土重鉍物分析	110

第Ⅴ章 結語

第1節 グリッド別遺物出土状況 ...	117
第2節 遺物組成	118
第3節 まとめ	121

図版

清洲城下町遺跡Ⅲ

例 言

- 1、本書は愛知県にしがすが いぐんきよすちやう西春日井郡清洲町に所在する清洲城下町遺跡きよすじやうかまち いせきの発掘調査報告書である。
- 2、調査は県道清洲新川線建設に伴う事前調査として、愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受け、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが平成元年度から平成4年度にかけて行った。
- 3、調査担当者は、城ヶ谷和広（主査・現千種高等学校）・大竹正吾（主査）・遠藤才文（調査研究員・現名古屋南高等学校）・小嶋廣也（調査研究員）・鈴木正貴（同左）・蟹江吉弘（同左）・加藤とよ江（嘱託・現西尾市教育委員会）である。なお、各調査区の発掘調査期間・調査担当者は別に記載した通り（第Ⅰ章）である。
- 4、調査に当たっては次の各機関の御指導・御協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県土木部名古屋土木事務所・清洲町教育委員会
- 5、調査記録及び出土遺物の整理等については次の方々の協力を得た。
岡田智子・中垣内薫・八木佳素実（以上調査研究補助員）
加藤豊子・小桧山洋子・竹川裕見子・多田富代・土井てる子・早川久美・平野みどり・星野和子・堀田順子・本所千恵子（以上整理補助員・敬称略）
- 6、本書の編集は鈴木正貴が担当し、執筆の担当は以下の通りである。
第Ⅱ章第1節 大竹正吾
第Ⅲ章第1節 城ヶ谷和広
第Ⅰ章、第Ⅱ章第2節～第4節、第Ⅲ章第2節～第3節、第Ⅳ章 鈴木正貴
- 7、遺構の旧番号と新番号の対照、遺物の登録番号については付表に掲載した。
- 8、本書の作成に当たっては、以下の各氏の御指導・御協力を得た。
赤羽一郎・伊藤晃・梅本博志・下村信博・野口哲也・藤澤良祐
- 9、調査記録の座標は、国土座標第Ⅶ座標系に準拠する。
- 10、調査記録は（財）愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
- 11、出土遺物は愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。
愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24

目 次

例 言

第Ⅰ章	調査概要	1
第1節	調査の経緯	1
第2節	遺跡周辺の歴史的環境	2
第3節	調査の方法と経過	3
第Ⅱ章	遺構	5
第1節	基本層序	5
第2節	古代・中世の遺構	10
第3節	城下町期（戦国時代）の遺構	14
第4節	近世の遺構	18
第Ⅲ章	遺物	19
第1節	古代・中世の遺物	19
第2節	城下町期（戦国時代）の遺物	25
第3節	近世の遺物	37
第Ⅳ章	まとめ	39
第1節	古代集落の変遷	39
第2節	城下町期以降の遺構変遷	40
第3節	まとめ	40
付 表		41
図 版		

挿図目次

第1図	遺跡位置図	1
第2図	調査区位置図	2
第3図	周辺の遺跡分布図	4
第4図	基本層序模式図	5
第5図	92A区北壁断面実測図	6
第6図	92A区・92B区北壁断面実測図	7
第7図	93A区南壁断面実測図	8
第8図	遺跡周辺の自然堤防	9
第9図	S B 502実測図	11
第10図	S B 504・S B 505・S B 506実測図	11
第11図	S B 501実測図	12
第12図	S B 401セクション実測図	12
第13図	S B 402実測図	12
第14図	S B 403・S B 404実測図	13
第15図	S D 603セクション実測図	13
第16図	城下町期の遺構配置図	14
第17図	S A 002実測図	15
第18図	S A 001実測図	15
第19図	S K 045セクション実測図	16
第20図	S K 250等セクション実測図	16
第21図	91D区北壁セクション実測図	17
第22図	遺物実測図(1)古代：遺構出土遺物	20
第23図	遺物実測図(2)古代：遺構出土遺物	21
第24図	遺物実測図(3)古代：遺構外出土遺物	23
第25図	遺物実測図(4)古代・中世：遺構外出土遺物	24
第26図	遺物実測図(5)城下町期：陶磁器・土器(1)	25
第27図	遺物実測図(6)城下町期：陶磁器・土器(2)	26
第28図	遺物実測図(7)城下町期：陶磁器・土器(3)	27
第29図	遺物実測図(8)城下町期：陶磁器・土器(4)	28
第30図	遺物実測図(9)城下町期：陶磁器・土器(5)	29
第31図	遺物実測図(10)城下町期：木製品(1)	31
第32図	遺物実測図(11)城下町期：木製品(2)	32
第33図	遺物実測図(12)城下町期：石製品	36
第34図	遺物実測図(13)近世	38
第35図	遺構変遷図(1)古代集落の変遷	39
第36図	遺構変遷図(2)城下町期以降の変遷	40

表目次

第1表	調査区一覧表	1
第2表	竪穴住居一覧表	10
第3表	遺物集計表	30
第4表	S K 626出土柿経釈文一覧表	33

図版目次

図版1	調査区位置図
図版2	遺構図Ⅰ（第1面）
図版3	遺構図Ⅰ（第2面）
図版4	遺構図Ⅰ（第3面）
図版5	遺構図Ⅱ（第1面）
図版6	遺構図Ⅱ（第2面）
図版7	遺構図Ⅱ（第3面）
図版8	遺構図Ⅲ（第1面）
図版9	遺構図Ⅲ（第2面）
図版10	遺構図Ⅲ（第3面）
図版11	遺構図Ⅳ（第1面）
図版12	遺構図Ⅳ（第2面）
図版13	遺構図Ⅳ（第3面）
図版14	遺構図Ⅳ（第4面）
図版15	遺構図Ⅴ（第1面）
図版16	遺構図Ⅴ（第2面）
図版17	遺構図Ⅴ（第3面）
図版18	遺構図Ⅴ（第4面）
図版19	遺構図Ⅵ
図版20	遺構図Ⅶ
図版21	遺構図Ⅷ
図版22	調査区全景
図版23	89G・90G・90H区
図版24	91D・91E区
図版25	91E区
図版26	92A区
図版27	92B区
図版28	古代の遺物
図版29	城下町期の遺物・土器類
図版30	城下町期の遺物・柿経
図版31	城下町期の遺物・柿経

第 I 章 調査概要



第Ⅰ章 調査概要 目次

第1節 調査の経緯	1
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	2
第3節 調査の方法と経過	3

第 1 節 調査の経緯

愛知県土木部は、愛知県西春日井郡清洲町内の都市計画道路建設の一環として、同郡清洲町地内に県道清洲新川線の拡幅工事を計画した。工事予定地は西春日井郡清洲町大字田中町・大字清洲地内にあり、清洲城下町遺跡（遺跡番号 21002）^①の範囲内に含まれていたため、事前の発掘調査が必要となった。発掘調査は、愛知県土木部より、県教育委員会を通じて委託を受けた財愛知県埋蔵文化財センターが担当した。調査面積の合計は2,297㎡である。

工事予定地は、既に昭和62年度から昭和63年度までの期間に発掘調査が実施された県道新川清洲線内に隣接しており、実質的にはこの時の発掘調査に継続するような形で行われた。従って、今回の発掘調査はこれら過年度の成果を様々な形で踏まえている。なお、本報告書には、県道新川清洲線関連の発掘調査の内、一部未発表であった調査成果が含まれていることを付記しておく。

本報告書で掲載する発掘調査区は、89G区から92B区までの8調査区である。各調査区別の調査期間・調査面積・調査担当者は下記の通りである。

註（1）『愛知県遺跡分布地図（Ⅰ）尾張地区』1986愛知県教育委員会による。

第 1 表 調査区一覧表

年 度	調査区	面 積	調 査 担 当 者	調 査 期 間
平成元年度（1989）	89G区	50㎡	鈴木	1990年 2 月
平成 2 年度（1990）	90G区	180㎡	城ヶ谷・鈴木	1990年11月～1990年12月
	（1990） 90H区	160㎡	城ヶ谷・鈴木	1990年11月～1990年12月
	（1990） 90I区	50㎡	遠藤・加藤	1991年 1 月
平成 3 年度（1991）	91D区	500㎡	城ヶ谷・鈴木・小嶋	1991年 8 月～1991年 9 月
	（1991） 91E区	347㎡	城ヶ谷・鈴木・小嶋	1991年 8 月～1991年 9 月
平成 4 年度（1992）	92A区	400㎡	大竹・蟹江	1992年 7 月～1992年 9 月
	（1992） 92B区	610㎡	大竹・蟹江	1992年 7 月～1992年 9 月



第 1 図 遺跡位置図

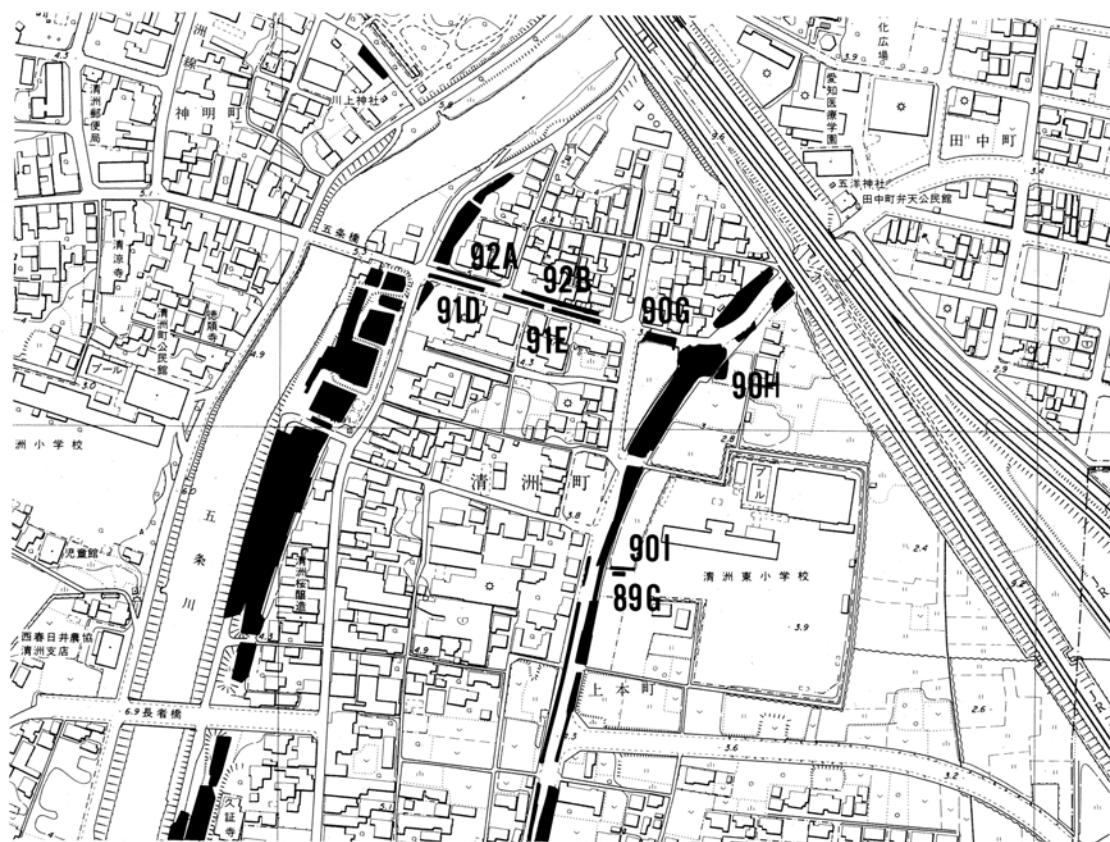
第2節 遺跡周辺の歴史的環境

清洲城下町遺跡は、濃尾平野の南東部を南流する五条川流域に所在する。遺跡は海拔2～5mを測る低平な地形に立地しているが、遺跡の範囲は東西約1.5km、南北約2.7kmと広大で、自然堤防や後背湿地・河床部等を含んでいるため、微地形的には非常に変化に富んだ状況となっている。調査地点によって遺跡の状況が異なるのは、主としてこのことに拠るものである。

このような低平な地形を古来人々は様々な形で開発・耕作・居住してきた。遺跡周辺には、縄文時代後期前後から生活が認められる朝日遺跡が存在し、遺跡の所在は点々と移り変わって行くものの、弥生時代以降、平野部での生活は連綿と受け継がれていたと思われる。このことは、清洲城下町遺跡の範囲内でもある程度伺うことができる。主体となる16世紀前後の清須城下町関連の遺構は遺跡全域で確認されているが、これ以外の時期の遺構も随所で確認されており、その様相・存続年代は地点によって相違している。これらの状況から、弥生時代以降、時代によって居住域を複雑に変化させてきて、戦国時代から江戸時代初期に至って、この地域では最大規模の広大な居住域を設定していたことが言えよう。

今回の調査地点周辺においては、古墳時代後期以降平安時代までの集落と、14世紀を主体とする集落の存在、及び16世紀を主体とする清須城下町の遺構群が既に判明している⁽¹⁾。一連の集落変遷の動向を更に詳細に把握する上で、今回の調査地点の成果は重要な資料となるものと思われる。

註(1)『清洲城下町遺跡』1990 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集による。



第2図 調査区位置図 (S=1/10000 黒塗部が調査区)

第3節 調査の方法と経過

発掘調査は、まず各調査区毎に重機による表土はぎを行い、過年度の調査成果を踏まえ2～5面の遺構面を捉えて実施した。なお、道路や住宅地に囲まれた調査区の安全を確保するために発掘調査区は狭小なものとならざるを得なかった。測量・遺物の取り上げに際しては、建設省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠して座標軸を定め、これから5mグリッドを設定している。遺構図版・遺構一覧表中のグリッド表記はこの座標に基づいて上2文字は100mグリッドの位置を、下2文字は5mグリッドの位置を示している。測量に当たっては、狭小な調査区で複数の遺構面にわたるため、遺構掘削完了後平板測量を実施した。なお、ほとんどの調査区で、調査終了後直ちに道路建設の工事に着手している。各調査区毎の調査経過と概要を以下に記述する。

89G区 清洲東小学校前の歩道橋建設に伴い、当時駐車場であった地点を発掘調査した。この地点は駐車場が設置される前は水田であり、水田耕作土を除去した遺構検出面は標高約2mであった。灰黒色粘土が充填された土坑を検出し、この土坑から柿経が多数出土した。ここは昭和62・63年度に調査された中堀に隣接する地点であり、柿経出土の背景を知る上で興味深い資料である。

90G区・90H区 62E区に接する調査区で、調査前は水田であった。耕作土を除去すると黄褐色シルト層が古代から近世までの重複した遺構検出面として確認された。62E区で確認された古代の溝の延長部や竪穴住居を確認した以外は、特に目だった成果は得られていない。

90I区 89G区の北隣に所在する。調査時点での現況は水田で、黄褐色シルト層がベースである。柿経が出土した土坑の続きが検出される予定であったが、89G区と90I区の調査区の境界部ではほぼ収束しており、柿経の追加資料は得られなかった。

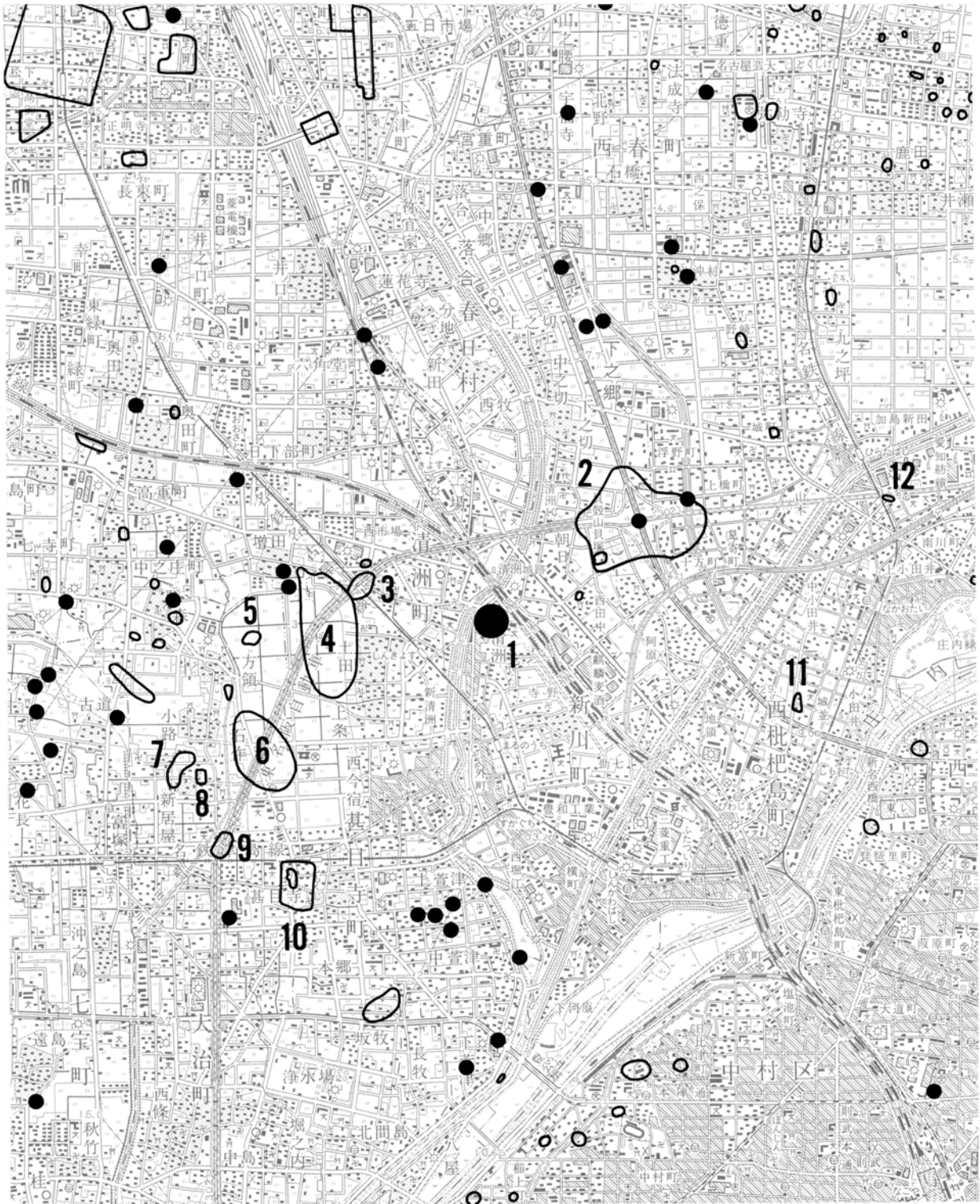
91D区・91E区 五条橋の東延長部分の道路予定地で、平成4年度と併せて片側半分づつ調査を実施した。五条川改修関連の調査区と県道新川清洲線関連の調査区の間を結ぶ位置に相当する。調査当時は道路用地で、地表面の標高は5m前後を測り、東に向かう程低くなっている。狭小な調査区ではあったが、旧地形を復元・想定する上で注目された。調査の結果、91D区は旧五条川の河床部分・91E区はこの自然堤防部に相当することが判明し、91D区では戦国時代の遺構・遺物、91E区では古代から戦国時代までの成果が得られた。

92A区・92B区 91D区・91E区の北隣の細長い調査区であった。遺構の状況は基本的には平成3年度の調査成果と同様であったが、近世の井戸群の存在が新たな知見となった。また、戦国時代の成果としては、旧五条川の埋積の年代を決める土坑などの確認・埋積過程の地学的検討などを行うことができたことは特筆される。

なお、調査成果の概要は基本的には各年度の年報に記載されているが、この他にも以下の関係文献が存在する。但し、現地説明会などの一般的な普及活動は調査区の制約上できなかった。

(鈴木正貴)

鈴木正貴 1990「清洲城下町遺跡出土の柿経」『埋蔵文化財愛知No.21』



第3図 周辺の遺跡分布図（国土地理院1/50000『名古屋北部』をもとに作成した。）

1. 清洲城下町遺跡 2. 朝日遺跡 3. 廻間遺跡 4. 土田遺跡 5. 方領遺跡 6. 阿弥陀寺遺跡
7. 清明遺跡 8. 法性寺跡 9. 大測遺跡 10. 甚目寺跡 11. 比良城跡 12. 貴生町遺跡

第Ⅱ章 遺 構



第Ⅱ章 遺構 目次

第1節 基本層序 5

第2節 古代・中世の遺構 10

 A、概要 10

 B、竪穴住居 10

 C、溝 13

 D、土坑 13

第3節 城下町期（戦国時代）の遺構 14

 A、概要 14

 B、掘立柱建物 14

 C、溝 15

 D、土坑 15

 E、砂利敷遺構 17

 F、焼土層 17

第4節 近世の遺構 18

 A、概要 18

 B、井戸 18

 C、土坑 18

時期区分一覧表		
古代	古代1期	6世紀後半～7世紀初頭
	古代2期	7世紀前葉～7世紀中葉
	古代3期	7世紀中葉～7世紀後葉
	古代4期	7世紀末～8世紀前葉
	古代5期	8世紀中葉～8世紀後葉
	古代6期	8世紀後葉～9世紀前葉
	古代7期	9世紀中葉～10世紀前葉
中世		
城下町期	城下町期Ⅰ－1期	15世紀末～16世紀初頭
	城下町期Ⅰ－2期	16世紀前葉
	城下町期Ⅱ－1期	16世紀中葉
	城下町期Ⅱ－2期	16世紀後葉
	城下町期Ⅲ－1期	16世紀末～17世紀初頭
	城下町期Ⅲ－2期	17世紀前葉
近世		

第1節 基本層序

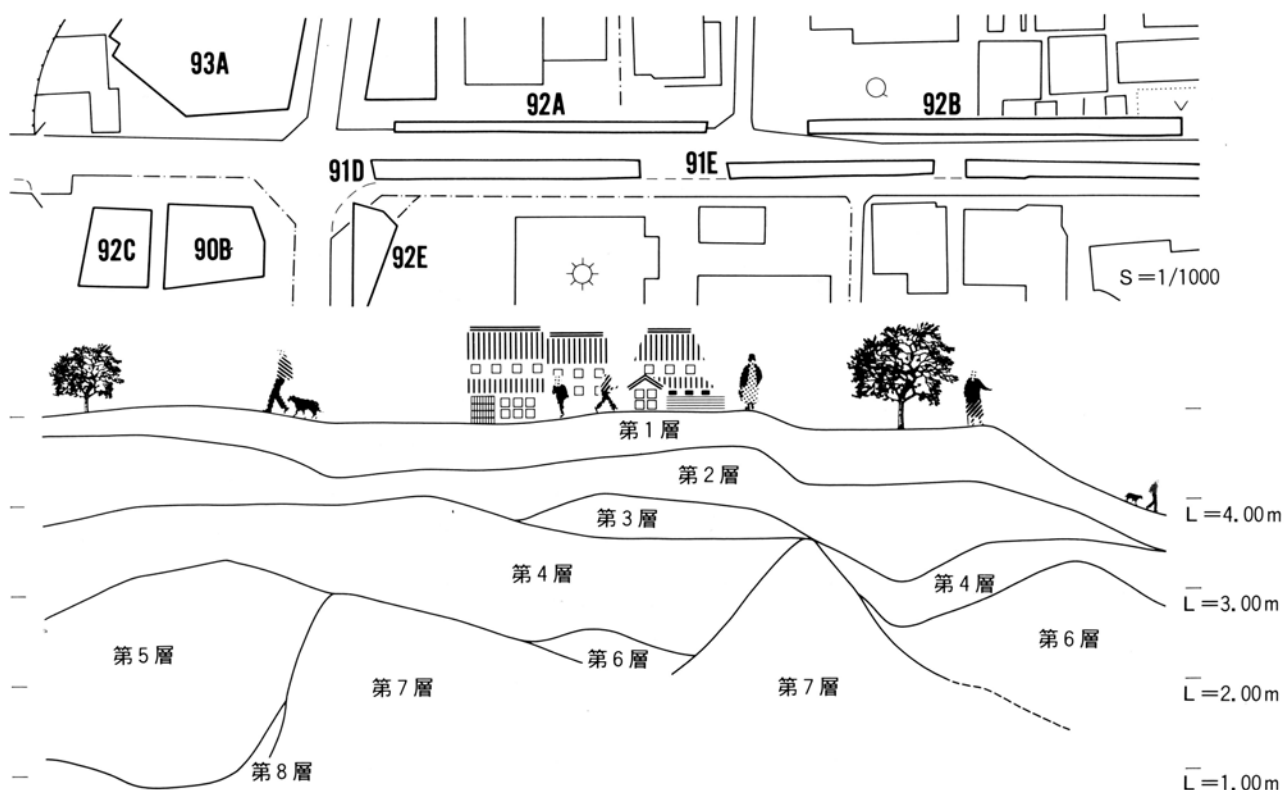
濃尾平野は、主に木曽川・長良川・揖斐川によって形成された沖積平野である。この地域の人々は、上記の木曽三川をはじめとして、大小の川と深い結び付きを持って生活してきた。清洲周辺の人々も、現在は庄内川水系である五条川と関わりを持ってきている。

この五条川は、1609年の「御囲堤」の築堤により木曽川からの流入が閉鎖されて上流部が放棄されるまでは、木曽川の分流の一之枝川として、犬山から犬山扇状地、濃尾平野の南東部へと流れていた。自然堤防はこの河道に沿う形で発達している。清洲城下町遺跡は、こうした自然堤防上に主として展開している。

調査区は、五条川左岸の自然堤防とその後背湿地上に位置し、現地表の標高は2 mから5 mである。西端の92A区付近が最も高く、東に向かってなだらかに傾斜して低くなっている。90I区・89G区付近は后背湿地上に位置する。自然堤防上の調査区と后背湿地上の調査区は、堆積状況が異なるため土質の状態も異なっている。東西方向の基本的な層序は、

第1層：にぶい黄褐色シルト

第2層：黄褐色シルト



第4図 基本層序模式図

第3層：灰黄褐色シルト

第4層：暗灰黄色砂質シルト

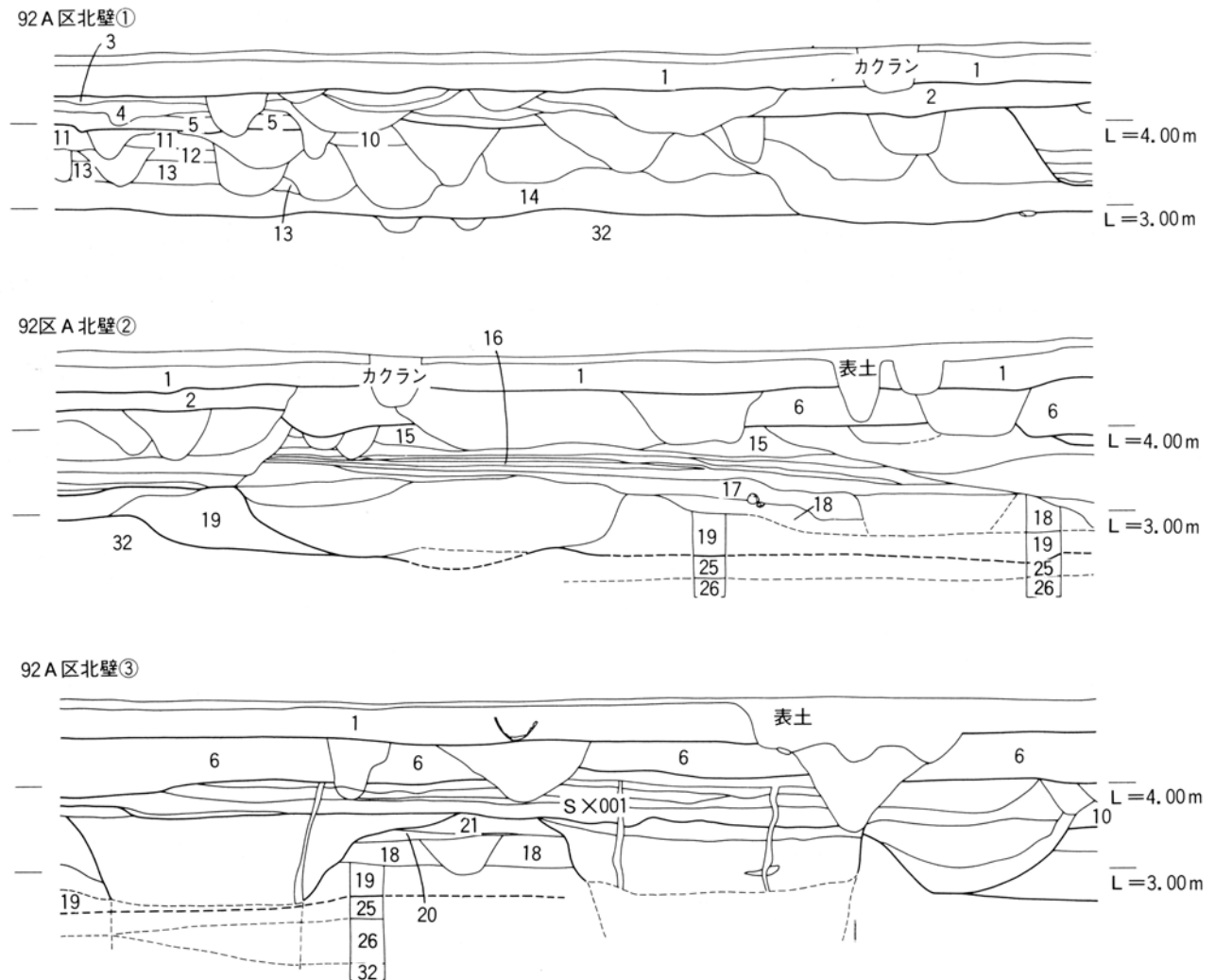
第5層：暗灰色・灰青色シルト・粘土と、暗灰色・褐色砂

第6層：灰色・黄褐色粘質シルト

第7層：褐色粘質土

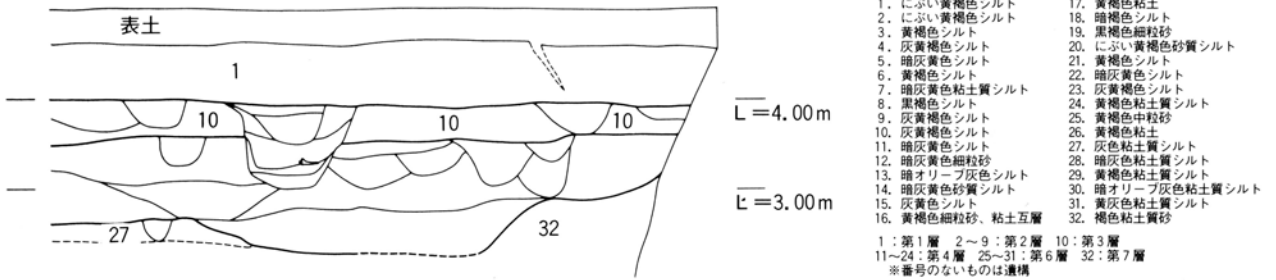
第8層：青灰色細粒砂

となっている。第1層は、現地表面と同じ様になだらかに傾斜しており、宿場町期の遺物を含んでいる。この層は比較的遺構に切られていない。第2層は城下町期の遺物を多く含んでおり、この上面で宿場町期の遺構が多く掘り込まれている。92A区の西端では、第2層中にラミナが見られ、この層は五条川の増水によって形成された堆積物と考えられる。この層の下面の標高は約4mであり、五条川の増水の規模が想像できる。第3層にも城下町期の遺物が含まれる。この第3・4層の上面から城下

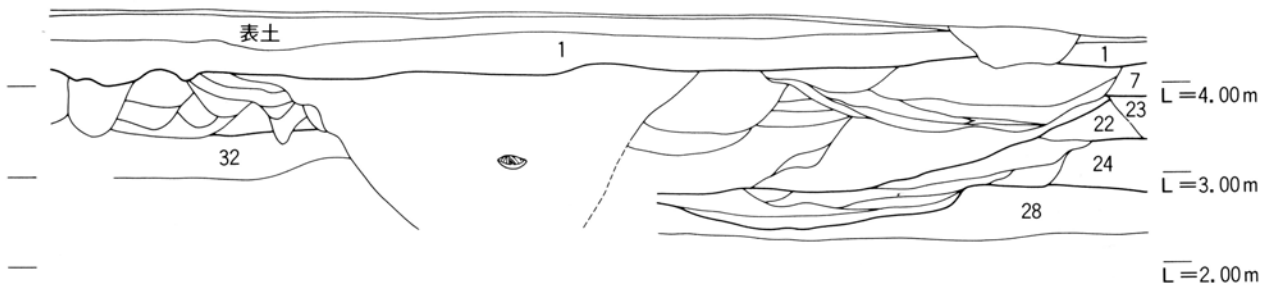


第5図 92A区北壁断面実測図 (S=1/80)

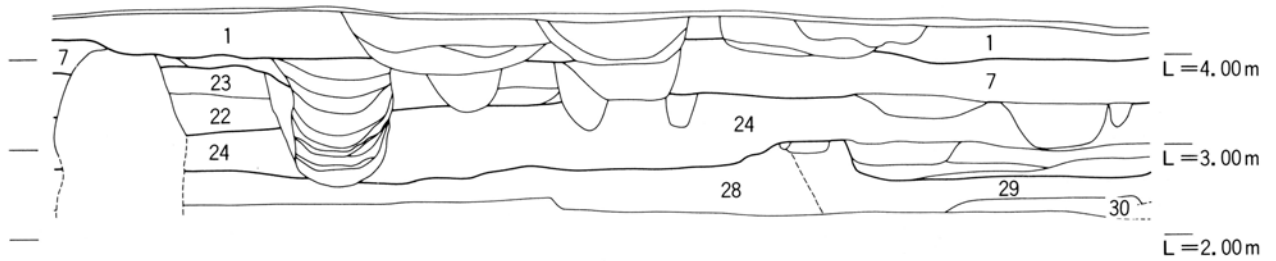
92A区北壁④



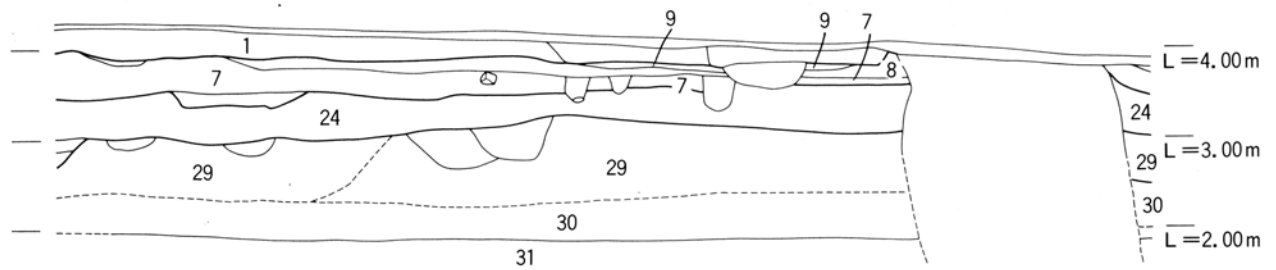
92B区北壁①



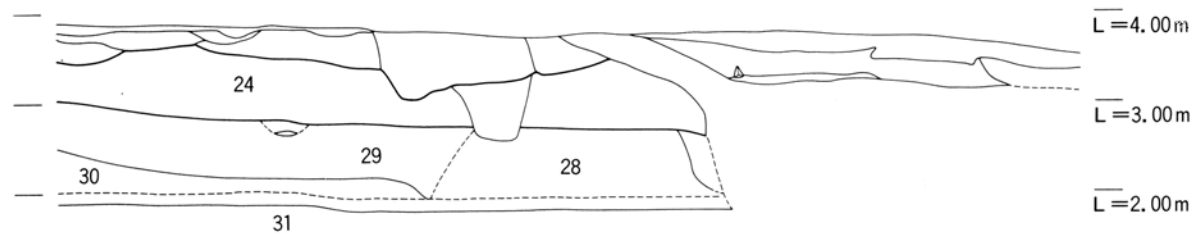
92B区北壁②



92B区北壁③



92B区北壁④



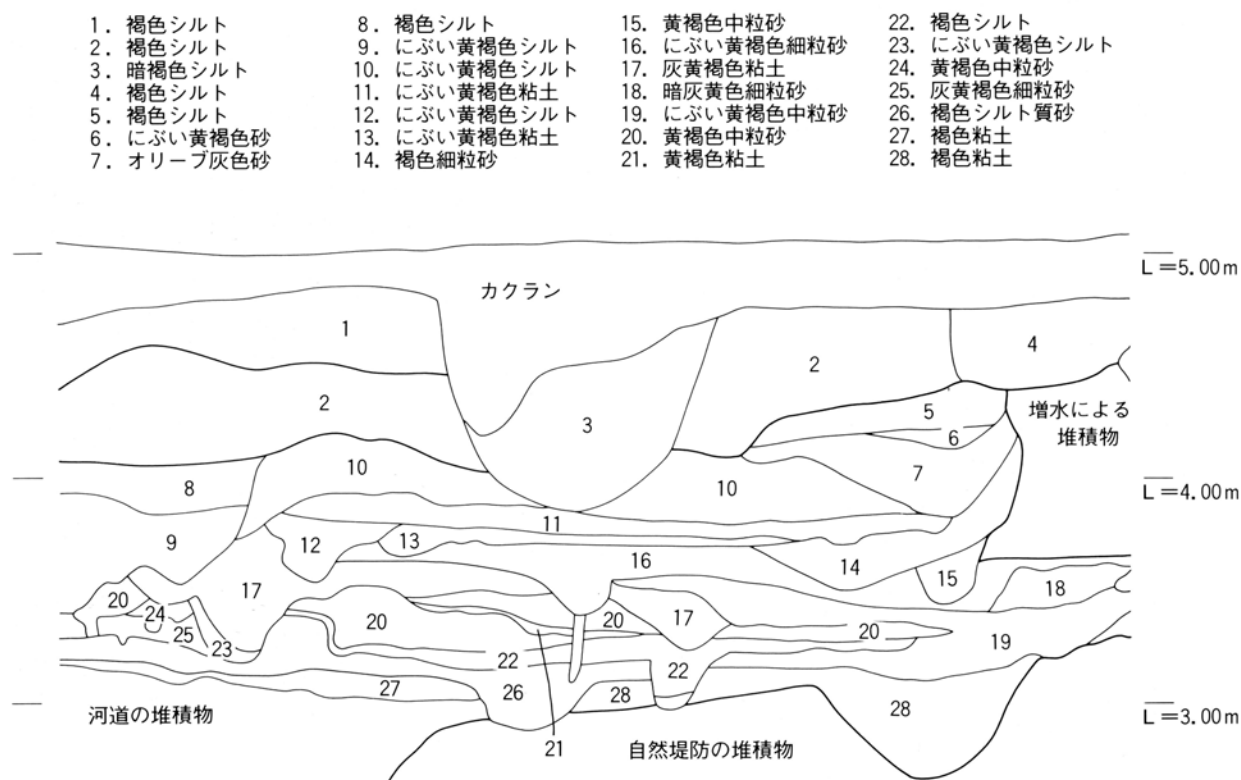
第6図 92A区・92B区北壁断面実測図 (S=1/80)

町期の遺構が掘り込まれている。特に、西側では遺構によって切られているのが目立ち、本来の堆積物が判りにくくなっている。また、一部の調査区では五条川の増水によって形成されたと考えられる砂とシルト・粘土の互層が見られる。第5層は五条川の河道の堆積物である。この層は東から西へと順に堆積していた。粘性が高いシルトが多いことから、五条川の流れが比較的緩やかであったと推定できる。第6層は後背湿地の堆積物と考えられ、その上面で古代（奈良時代）の竪穴住居が検出された。第7層は、自然堤防を形成する堆積物と思われる。第7・8層が遺跡の基盤層となるが、二つの層の関係についてははっきりしない。

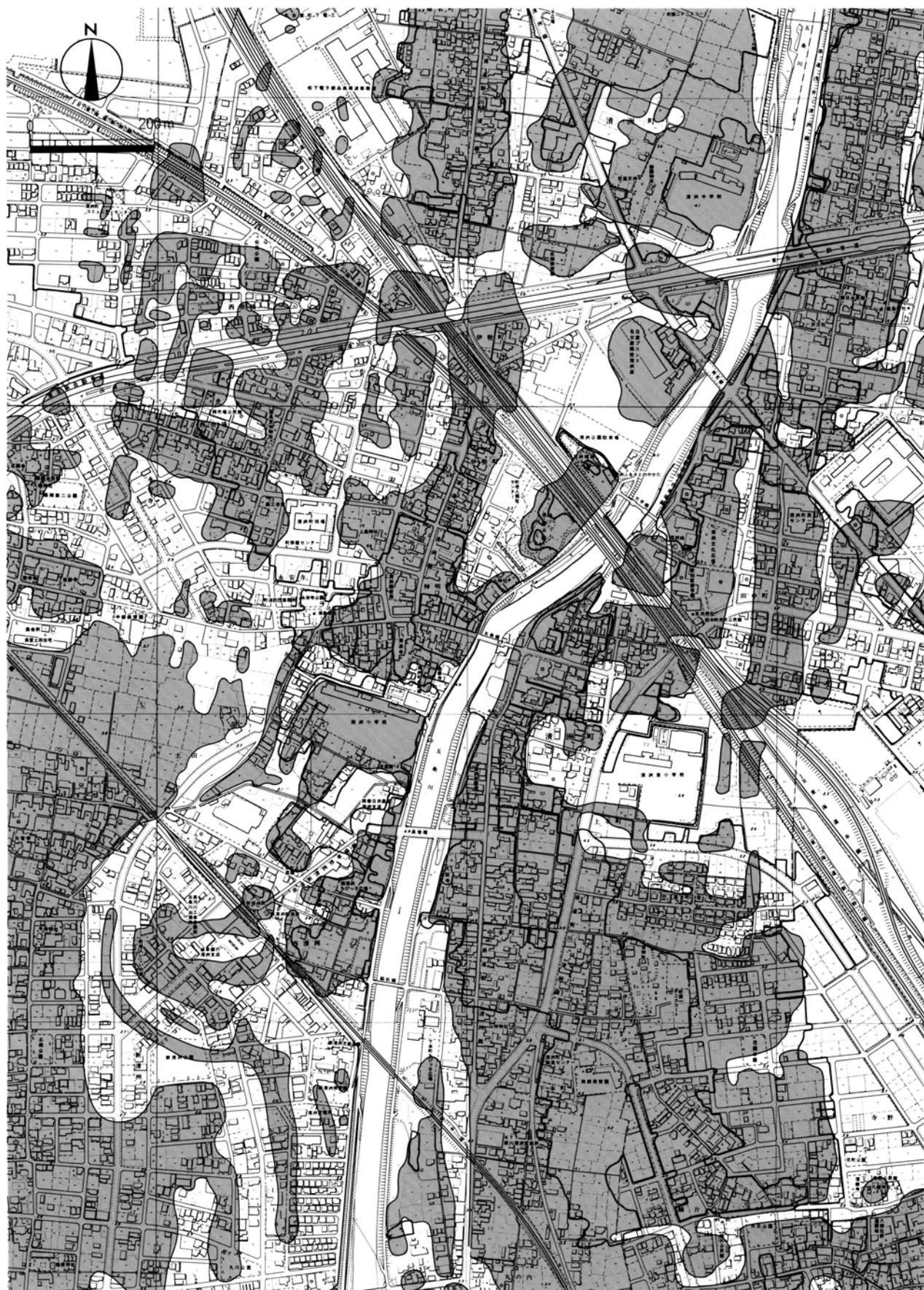
自然堤防 第7・8層で形成された基盤層上面は、現在の五条川から92A区にかけて急に上がり、その比高差は2 m以上を測る。そこから東へなだらかに下り、92B区で再び一つのピークを作っている。この二つの高まりが自然堤防となっている。この自然堤防は、93A区において第7層上面に古代末の遺構が掘られていること、第7層よりも上位に存在する第6層上面に古代の遺構が見られること等から、古代（奈良時代）以前には形成されていたと考えられる。

河道の堆積物 第5層の五条川の河道の堆積物はその出土遺物から城下町期に堆積したと考えられ、おおよそ約200年で2 m以上の地層が五条川により堆積している。このことは、当時の五条川での堆積速度が現在地質学的に考えられている速度よりもはるかに速いことを示している。また、93A区（第7図：五条川改修関連の調査区）では、自然堤防の堆積物の上に河道の堆積物が乗り、河道の堆積物の上に五条川の増水による堆積物が乗っていることが確認された。このことから、92A区以西は自然堤防の高さが低く、五条川の水位が上昇する度に堆積を繰り返していたと考えられる。

（大竹正吾）



第7図 93A区南壁断面実測図（S=3/100）



第8図 遺跡周辺の自然堤防（地図は平成3年3月清洲町作成）

凡例 アミは自然堤防
等高線は1m間隔

第2節 古代・中世の遺構

A、概要

古代の遺構は、旧五条川流路内に相当する91D区・92A区を除いた全調査区で検出された。検出された遺構は五条川左岸の自然堤防から後背湿地にかけて分布している黄褐色シルト層上に掘削されている。埋土はほとんどが基盤と同様のシルトであり、遺構の検出は困難であった。今回の調査で確認されたこの時期の遺構には竪穴住居25棟・溝3条・土坑20基などがある。この結果、この清洲町田中町地区での古代の竪穴住居は合計で95棟を数えることとなった。今回の調査で確認された竪穴住居は8世紀代が中心となっており、6～7世紀にまで遡るものは検出できなかった。また、弥生時代の土器の細片もわずかに出土したが、該期の遺構は確認できなかった。

中世の遺構は今回の調査では、遺物を伴った明瞭な遺構は検出できなかった。しかしながら該期の遺物はかなり見られることから付近に遺構の存在が想定されよう。特に、91E区の東端部で検出されたピット群は、遺物がほとんど出土しないものの、埋土が城下町期特有の暗褐色の砂混じりシルトではなく、黄褐色の砂混じりシルトであったため、城下町期よりも遡る遺構である可能性が高い。

B、竪穴住居

竪穴住居は、その可能性のあるものも含めると25棟存在する。調査区の制約のため住居の全容は把握できないが、平面形は全て隅丸方形を呈していたと思われる。これまでの調査では、竪穴住居は平面規模で4群に区分されていたが、今回確認した竪穴住居がいつれに該当するかは不詳である。主軸の方位は、これまで①N・②N16°E・③N33°E・④N38°Wの4種の存在が確認されていたが、90H・90I・89G区の住居は上記の分類にはほぼ該当する一方、91E・92B区の住居は新たに⑤N15°Wを示す一群であることが明かとなった。91E・92B区の住居群は年代的にも8世紀後半から9世紀中頃に位置付けられているが、この時期の遺構はこれまで63F・K区といった北部の調査区で確認されたのみであった。このような状況からこの住居群は、63F・K区の居住域とは異なる支群を形成していたものと想定できる。以下に代表的な竪穴住居を取り上げて詳説し、他は下記の一覧表に記載するにとどめる。

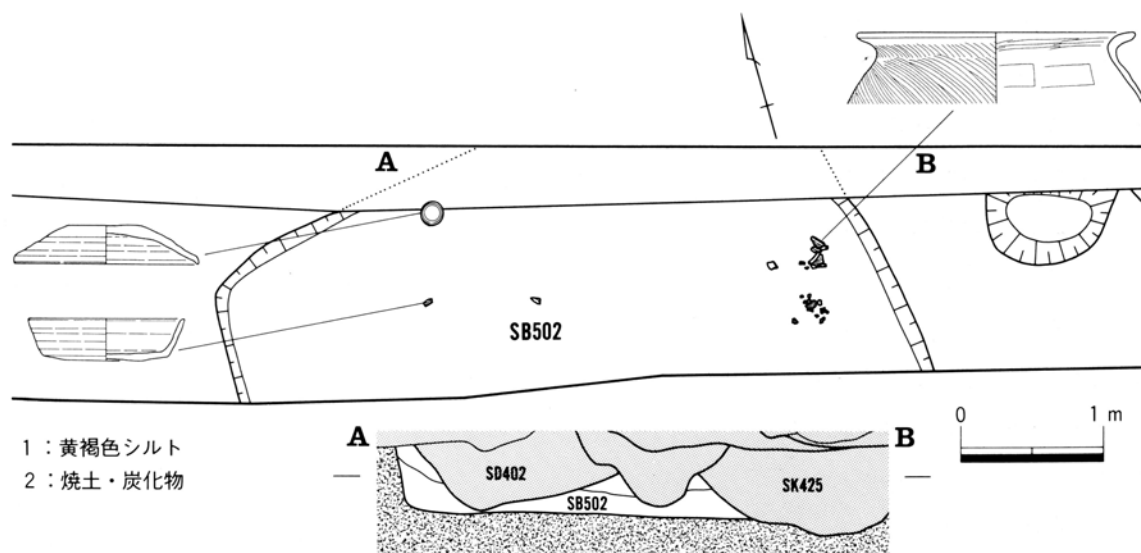
第2表 竪穴住居一覧表（時期は遺物の時期区分による）

番号	規模(cm)	方位	カマド	焼土	周溝	柱穴	時期	S B 506	(102)×(101)×17	N15° W	無	無	無	不明	6
S B 401	363×(176)×46	N15° W	無	無	無	1ヶ	7	S B 507	(272)×(98)×13	N 5° W	無	無	無	1ヶ	4
S B 402	(195)×－×39	N15° W	無	無	無	不明	7	S B 508	(374)×(104)×35	N 5° W	無	無	無	1ヶ	
S B 403	350×(240)×32	N 5° W	無	無	無	不明	6	S B 601	(375)×(356)×－	N 5° E	無	無	無	不明	3
S B 404	(274)×(85)×16	N15° W	無	無	無	1ヶ	6	S B 602	438×361×34	N40° W	無	無	無	1ヶ	6
S B 405	(377)×(114)×42	N15° W	無	無	無	不明		S B 603	438×(359)×38	N35° E	無	無	無	不明	2
S B 406	(127)×－×11	N40° E	無	無	無	不明	5・6	S B 604	(284)×(185)×11	N15° E	無	無	無	不明	4
S B 407	(240)×(155)×28	N35° W	無	無	無	不明		S B 605	267×(202)×13	N 5° W	無	無	無	不明	
S B 501	(309)×(285)×50	N20° W	無	無	無	不明	6	S B 606	(598)×(508)×17	N25° W	無	無	無	不明	3
S B 502	(433)×(268)×56	N15° W	無	無	無	不明	6	S B 607	(135)×(131)×18	N	無	無	無	不明	
S B 503	(247)×(168)×17	N20° W	無	無	無	不明		S B 608	(292)×(137)×21	N 5° W	無	無	無	1ヶ	
S B 504	(323)×(251)×24	N30° W	無	無	無	不明		S B 609	(549)×(333)×23	N25° E	無	無	無	不明	
S B 505	(339)×(220)×6	N15° W	無	無	無	不明	5	S B 610	(239)×(106)×27	N	無	無	無	不明	

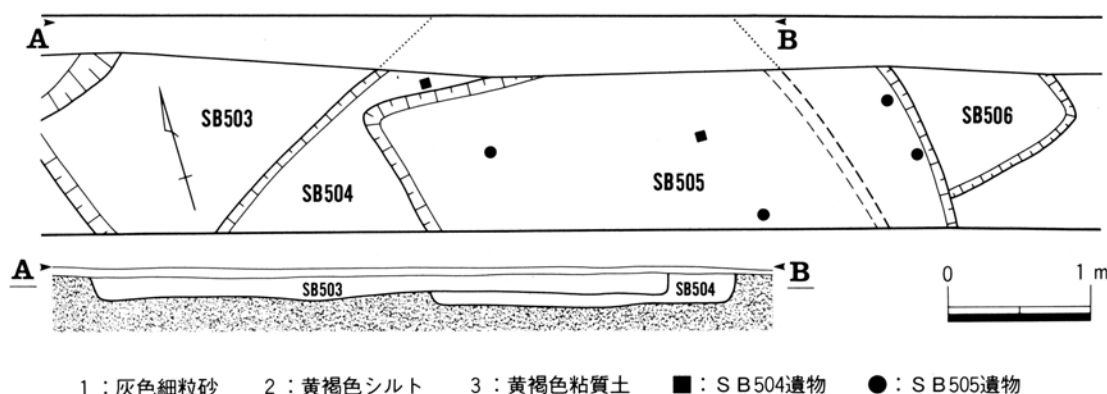
S B 502 (第9図) 91 E 区に位置する竪穴住居である。北東端と南半部が調査区外に広がっており全容は不明であるが、平面形は一边が4.4m弱の隅丸方形であると推定できる。現存する深さは56cmを測るが、検出時に検出面を掘削した可能性があり、もう少し深かったと推定される。周溝・カマド・柱穴は確認できなかった。しかし、住居の東端部に焼土の広がりがあり若干認められ、この周辺から土師器の甕が出土している。この焼土面はカマドまたは炉跡の可能性はある。一方、住居の西部では須恵器の杯身と杯蓋の出土がみられ、住居内の機能的な分化が認められよう。出土遺物から8世紀後半から9世紀初頭に位置付けられる。

S B 504 (第10図) 91 E 区の中央部に所在する竪穴住居で、S B 505に切られて重複している。四隅が調査区外にあって規模は不明であるが、方位はN 30° Wを測り、この周辺の住居の方位とは異なる。時期は不明。

S B 505 (第10図) 91 E 区の中央部に所在する竪穴住居で、S B 504・506を切る。南部が調査区外に展開するが、平面プランはややいびつな隅丸方形と考えられる。住居内の施設は特に確認されなかった。遺物は床面に散在して出土しており、時期はこれらから8世紀中葉に位置付けられる。



第9図 S B 502実測図

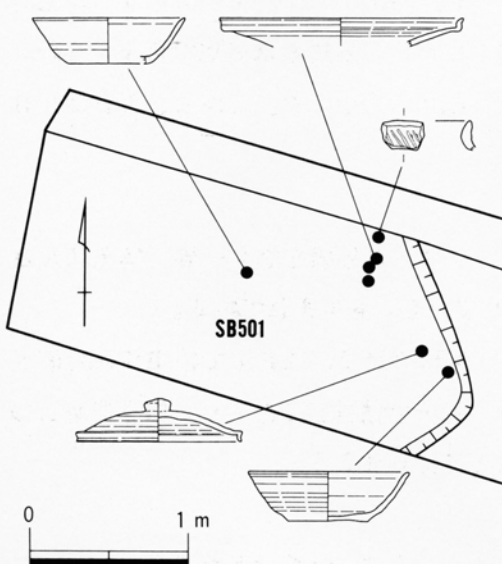


第10図 S B 504・S B 505・S B 506実測図

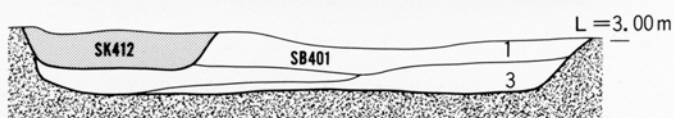
S B 501（第11図） 91E区東区の西端部に位置する竪穴住居で、南東隅部のみを検出した。主軸の方位はN20°W前後である。周溝や柱穴は確認されず、須恵器杯身等の遺物が南東隅部に集中して出土している。部分的に床面から焼土が確認された。時期は出土遺物から8世紀後半から9世紀初頭に位置付けられる。

S B 401（第12図） 92B区の中央部にある竪穴住居で、北半部を検出した。主軸の方位はN15°W前後を測り、床面には炭化物層が広がっていた。焼土層は認められなかった。柱穴は1ヶ確認されたが、そのほかの施設は検出できなかった。遺物は比較的まとまって出土しており、これらから8世紀中葉の住居と比定できる。

S B 402（第13図） 91E区の西部に位置する竪穴住居で、東辺のみを検出した。西辺はS D 402によって破壊され遺存しない。周溝・カマド・柱穴などの住居内施設は確認できなかった。出土遺物は住居内に散在しており、これらから時期的には9世紀中葉に相当する住居である。

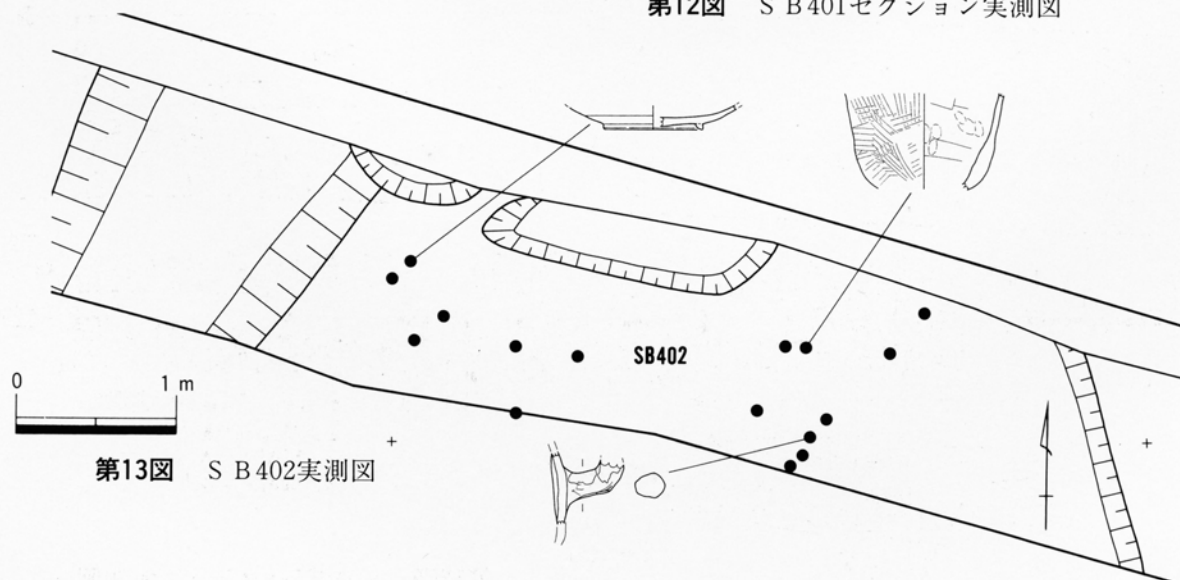


第11図 S B 501実測図



1：黄灰色シルト 2：暗灰黄色シルト 3：黒色シルト（焼土含）

第12図 S B 401セクション実測図



第13図 S B 402実測図

S B 403 (第14図) 91 E 区の中央部に所在する竪穴住居で、S B 404を切る。一辺が3.5mの隅丸方形プランと想定され、柱穴と思われるピットが南東部に1基存在する。その他の内部施設は遺存しない。方位はN 5°Wを測る。時期は出土遺物から8世紀後半から9世紀初頭に位置付けられる。

S B 603 90 G 区の中央部に位置する住居で、S B 602・604に切られている。また北西隅部などが攪乱によって破壊され全容を把握しにくい、一辺が4.4mの隅丸方形の竪穴住居と推定される。周溝や柱穴は確認されず、また、北辺と西辺が遺存しているにもかかわらずカマドは存在しない。時期は出土遺物から7世紀中葉である。

S B 606 90 G 区の東端部に所在する竪穴住居である。調査で確認し得たのは北辺部のみで南端部の状況は湧水が著しく検出できなかった。周溝や柱穴も同様な事情のため確認できなかったが、カマドと思われる痕跡や焼土などは存在しなかった。出土遺物から7世紀後半に位置づけられる住居である。

S B 609 90 H 区の西部で検出された竪穴住居で、戦国時代から江戸時代にかけての土坑によって住居内はかなり攪乱されている。東隅部のみを検出したが、内部施設は確認できなかった。時期は7世紀後半に比定されるが、住居埋土からは弥生土器の細片も出土した。しかし、これはS B 609に伴うものとは考えられない。

C、溝

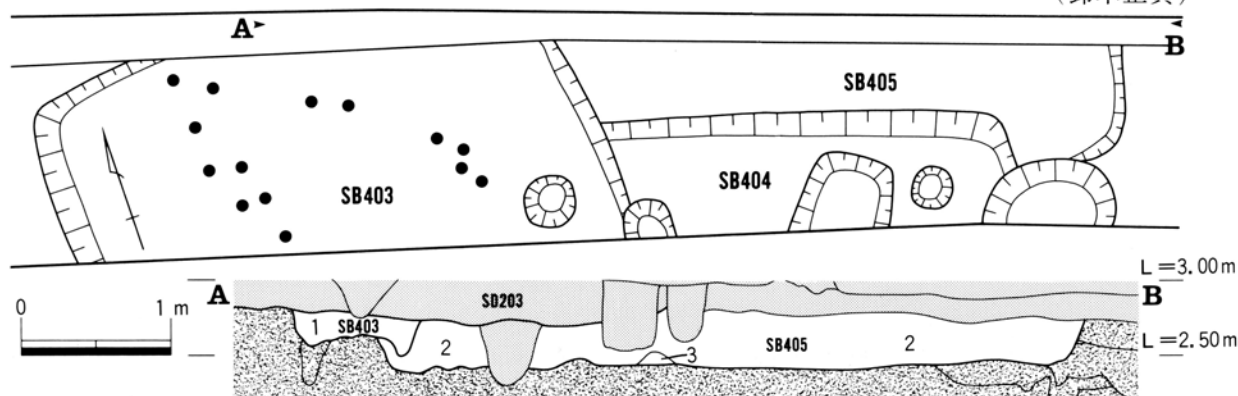
この時期の溝には、断面形がV字形を呈するS D 601と浅い船底状の形態をなす一群(例えばS D 402等)がある。中には調査区が狭小であるため、溝と確定し難いものも含まれている。

S D 603 (第15図) 90 H 区の北半部で検出された断面形がV字形の溝で、62 E 区で検出された溝S D 07に接続するものである。幅は約2.0m~2.4mを測り、埋土は灰色粘質土であった。調査当時この溝を完掘すると若干の湧水がみられた。集落の境界を示す溝と考えられよう。

D、土坑

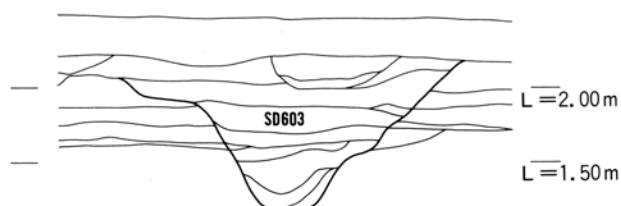
この時期の土坑はほとんどが竪穴住居に伴わないもので、各々の土坑の性格は不明である。

(鈴木正貴)



第14図 S B 403・S B 404実測図

1. 灰褐色砂質シルト
2. 灰褐色シルト
3. 黄褐色シルト



第15図 S D 603セクション実測図

第3節 城下町期（戦国時代）の遺構

A、概要

戦国時代から江戸時代の初期までの遺構を城下町期の遺構として以下に記述する。この時期の遺構は調査区全域で検出されたが、その様相は調査地点によって異なる。91D・92A区では16世紀の前半には埋積してしまった旧五条川が存在し、五条川埋積後には焼土面や砂利層に伴って16世紀後半以降の遺構が検出されている。一方、91E・92B区ではシルト層の上で遺構面が検出されていて、15世紀末以降の遺構が確認されている。遺構には掘立柱建物・溝・土坑などがあるが、調査区が狭小なため、溝か土坑かの認定や建物の平面プランの想定が困難である場合が多い。ここでは、遺構の種類毎に記述を進める。なお、城下町期の時期区分は『清洲城下町遺跡Ⅳ』1994¹⁾に依拠する。

B、掘立柱建物

掘立柱建物は柱穴列が3例検出された。検出分のみで検討すればいずれも柵列と判断できるが、調査区外に延びる可能性もあり、建物の全容を把握するのは難しい。ここでは柵列としてS A番号を付けた。

S A001（第18図） 91E区の西部で検出された東西方向の柵列である。S K093とS K094の前後関係が不明であるが、S K094を主に考えると4間分が確認されたこととなり、柱間は西から各々2.2m・1.9m・1.8m・2.6mを測る。全ての柱穴に根石が1個から2個平坦面を上にして納められている。



第16図 城下町期の遺構配置図（S=1/2500）

明治17年の地籍図（愛知県公文書館）より作成。

S K 097・S D 007などが廃絶された後に設置されており、城下町期Ⅲ期に所属すると考えられる。

S A 002 (第17図) 92B区の中央部で検出された東西方向の柵列である。4間分が確認され、柱間は西から各々4.3m・2.1m・2.0m・2.1mを測る。いずれの柱穴も柱根部が深く段状に掘り込まれており、根石は設置されていない。主軸の方位はN75°Wであり、現在の道路の方向とほぼ同一である。S D 002廃絶後に建てられており、柱穴内の出土遺物から16世紀後半に位置づけられる。

S A 003 91E区・92B区の中央部で検出された南北方向の柵列で、根石が納められた柱穴が2基確認された。この柱間は5.8mを測り、おそらく中間の未調査地点に柱穴が2基程度存在したと思われる。主軸の方位はN15°Eで、S A 001・S A 002と直交する位置関係になる。

C、溝

この時期の溝は10数例検出されたが、調査区が狭いために溝と確定できるものは少ない。また、区画を表示すると考えられるものも僅少であった。

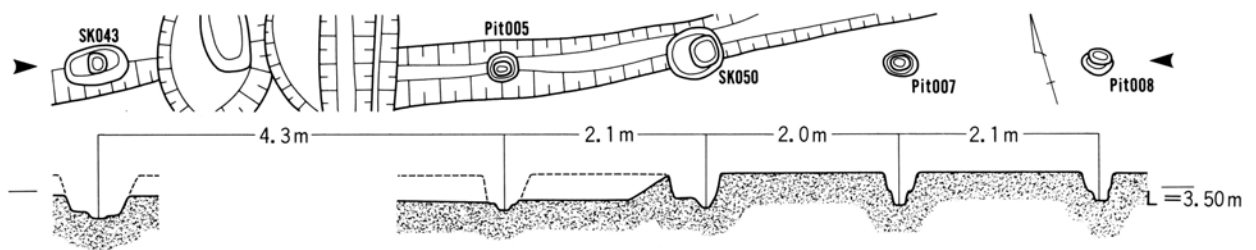
S D 007・S D 008 91E区で検出された溝で、この2本は平行して走る。溝の方位はN15°E、溝心間距離(間隔)は約5.5m(3間)を測る。掘立柱建物S A 001に切られており、時期は城下町期Ⅲ期以前と考えられる。短冊型地割の境界を示す遺構かあるいは道路の側溝と推定できる。

S D 001・S D 009 92B区・91E区で検出された方位がN15°Eの溝である。S D 001とS D 009は検出幅が若干異なるが、同一のものと思われる。S D 008との溝心間距離(間隔)は約13mを測る。

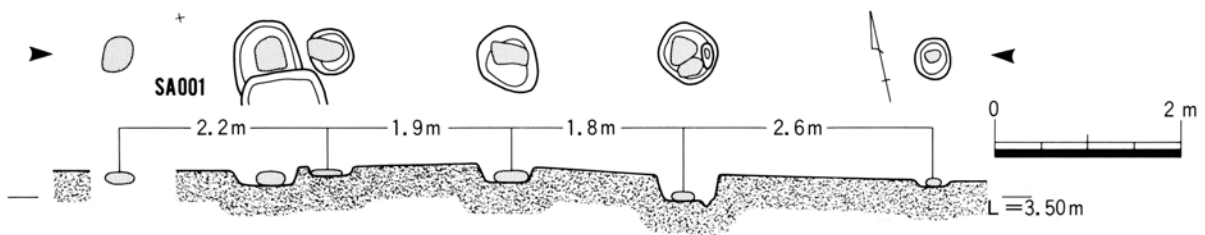
D、土坑

土坑は多数検出されているが、大半のものは性格が判明しない。ここでは主要な土坑について例示するのみにとどめる。

S K 024 (写真) 92A区に所在する長軸が1.45m・深さ1m弱を測る隅丸方形の土坑である。埋土中に炭化物・焼けた壁土が多量に包含されており、中から土師器の皿が8枚余(口縁部計測法で換算)の他、羽付鍋・内耳鍋がほぼ完形で出土した。土師器皿は墨書されたものや穿孔されたものが存在する。詳細な出土状況は不明である。遺物のセット関係から地鎮めなどの祭祀的な遺構と考えられるよう。時期は16世紀後葉に位置づけられる。



第17図 S A 002実測図



第18図 S A 001実測図

S K 045（第19図） 92 B 区で検出された S K 046 に切られる土坑である。埋土の堆積状況は炭化物・焼土・シルトなどが層状に重なっており、比較的深い掘形を持つ。時期は16世紀前葉か。

S K 067 91 D 区の中央部で検出された平面形が不定形の土坑である。中から土師器の皿が5枚余（口縁部計測法で換算）出土した。出土遺物は城下町期前期に属するが、旧五条川の埋積後に掘削されていることから、城下町期Ⅱ期に位置づけられる。

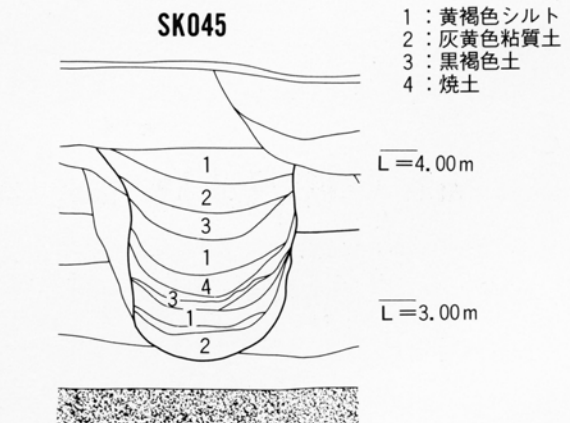
S K 109 91 E 区に所在する直径約3 mの円形の土坑で播鉢状に掘り込まれていた。出土遺物の総破片数は454点を数えるが、若干近世の遺物も混入している。

S K 110 91 E 区に位置する直径3 m弱のほぼ円形の土坑で播鉢状に掘り込まれていた。埋土は暗褐色粘質土が充填されており、底から宝篋印塔の九輪部が単独で出土している。石塔類のこうした出土例は堀の底部から出土する事例²が知られているが、S K 110の場合も似たような用法があるものと思われる。時期は16世紀前半である。

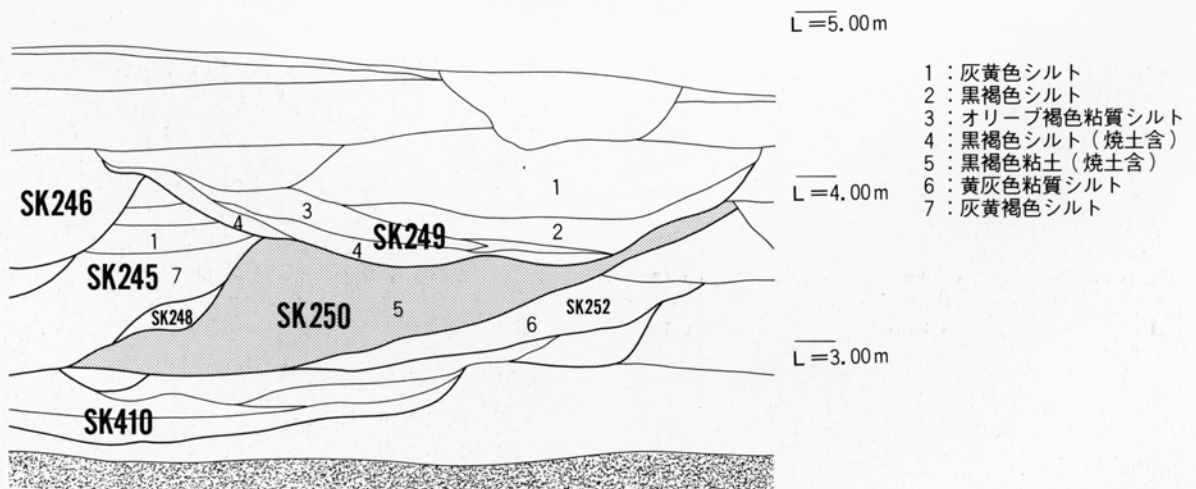
S K 250（第20図） 92 B 区で検出された土坑である。この土坑は旧五条川の埋積後に掘削されており、S K 245・S K 249などに切られていることから遺構の時期の前後関係がはっきりと捉えられるものである。中からは四耳壺などの豊富な器種を持った大窯第1段階³を中心とした遺物が出土した。この事例から、旧五条川は大窯第1段階にはある程度埋積していたことが明かとなった。



S K 024



第19図 S K 045セクション実測図



第20図 S K 250等セクション実測図

柿経埋納遺構 S K 626 (写真) 清須城中堀の北辺に隣接する89G区で検出されたなだらかにくぼんだ極めて浅い土坑で、灰黒色粘土が充填されていた。粘土中からは法華経を書写した柿経がいくつかの束になった状態で出土した。出土状況からみて、滞水している窪地に柿経を流した(納めた)ものと見られる。また薄板の未製品とみられる木片も出土した。土器類の出土は全く認められない、この遺構は城下町期Ⅲ期の遺構 S D 605に切られていることから、城下町期Ⅲ期以前の可能性が高い。なお、この遺構は90 I 区では北肩部のみがわずかに検出された。

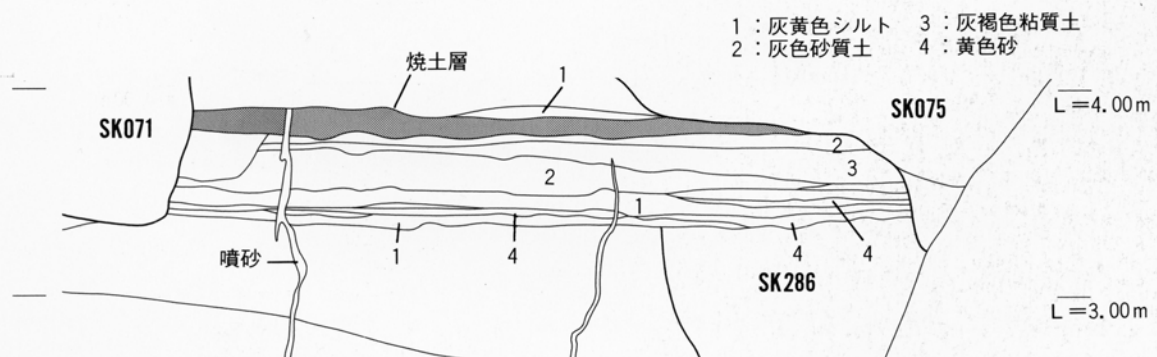
E、砂利敷遺構

S X 001 (写真) 92A区で検出された砂利が幅9.3mに互って敷きつめられた遺構である。砂利層の上面は標高約3.8m~3.9mで、厚さは最大30cmを測る。砂利は1~3cmの亜角礫のチャートで構成され、ここから遺物は出土しなかった。S K 017等の城下町期の遺構に切られていることから、S X 001の時期は城下町期の範囲内に納まるものと思われる。

F、焼土層 (第21図)

91D区・92A区の一部で焼土層が確認された。この焼土層は炭化物を余り含まず赤色の2cm大の焼土ブロックが最大15cmの厚さで堆積している。おそらくこの層位自体が焼けたのではなく、焼けた壁土などの土塊を整地したものと判断される。上面の標高は約3.9mを測り、時期不明の噴砂がこの層を貫いており、S K 071、S K 075等には切られている。従って時期は16世紀第3四半期前後と推定できる。

(鈴木正貴)



第21図 91D区北壁セクション実測図



S K 626柿経出土状況



S X 001セクション

第4節 近世の遺構

A、概要

近世の遺構は92A・B区を中心に分布している。主な遺構は井戸、廃棄土坑、溝などである。特に井戸は92B区で現道沿いに3基検出され、道路に沿って並ぶ短冊型地割の屋敷地が展開していた可能性を指摘できる。遺構の年代は18世紀～19世紀と考えられ、後期宿場町⁽⁴⁾に関連した遺構群であると考えられる。

B、井戸

S E 001 92B区の西端部に所在する井戸で、内部構造物は検出できなかった。掘削当初、埋土が比較的均一であったため溝として調査したが、掘り形が深く円形のプランとなったため井戸と判断した。時期は出土遺物から18世紀後半から明治年間まで使用されたものである。

S E 002 92B区の中央部に位置する井戸で、内部構造物は不明である。時期は19世紀。

S E 003 92B区の中央部に存在する井戸で、内部構造物に漆喰を用いている。S E 002の約4.5m東に所在する。時期は19世紀。

C、土坑

土坑は他の時期と同様、性格不明のものが多いが、二、三特徴的な土坑を取り上げる。

S K 042 (写真) 92B区の中央部にある不定形の土坑である。中から常滑窯産の甕が破壊された状態で出土した。廃棄土坑と考えられる。

S K 055 (写真) 92B区の中央部に位置する不定形の土坑で、中から常滑窯産の甕の他多数の陶磁器類が出土した。19世紀の廃棄土坑と思われる。
(鈴木正貴)

註 (1)『清洲城下町遺跡Ⅳ』1994(財)愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集

(2) 柴田龍司1992「堀跡や曲輪から出土する石塔」『中世城郭研究6』

(3) 藤沢良祐1985「瀬戸大窯の編年的研究」『研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館

(4) 梅本博志他1990「清洲城下町遺跡」『年報平成元年度』(財)愛知県埋蔵文化財センター



S K 042出土状況



S K 055出土状況

第三章 遺物



第Ⅲ章 遺物 目次

第1節 古代・中世の遺物	19
A、概要	19
B、遺構出土遺物	19
C、遺構外出土遺物	22
第2節 城下町期（戦国時代）の遺物	25
A、陶磁器・土器類	25
B、木製品	31
C、石製品	36
第3節 近世の遺物	37
A、概要	37
B、遺構出土遺物	37

第1節 古代・中世の遺物

A、概要

清洲城下町遺跡は中・近世城下町の遺構をよく残しているが、一方で五条川左岸に発達した自然堤防上にはかなり長期にわたる古代集落遺構が存在している。今までの数次にわたる調査で100基前後の竪穴住居と掘立柱建物が検出されている。出土している遺物も比較的豊富で、特に竪穴住居や土坑からは一括と思われる土器群がいくつか見つかり、類例の少なかった古代尾張の集落遺跡の土器様相を考える上で良好な資料を提供した。今回の調査でも25棟の竪穴住居とそれにとまなう遺物が出土しているが、調査区が狭長なため、まとまった一括資料はあまりない。

古代の遺物としては須恵器、灰釉陶器・緑釉陶器、土師器、土錘などがある。これらの遺物は今回の調査地点の東側に多く出土しており、遺構の密度と一致する。時期的には7世紀～11世紀代のものがみられる。7世紀代の遺物は90G区・I区など東部の調査区にみられるが、量的には少ないものである。古代の遺物の主体となるのは8世紀後半の遺物で、ほぼ全ての調査区から出土した。また、灰釉陶器についてはこれまでの調査であまり検出されていなかった9世紀中～後葉代のものが、91E区・92B区で見つかり、集落の変遷を考える上で良好な資料を得たといえる。

中世の遺物としては山茶碗、土師器、施釉陶器、焼き締め陶器などが出土したが、遺構にとまなうものではなく、分散的で量的にも多いものではない。

以下、それぞれ遺構出土のものでまとまったものを中心にとりあげて述べることにする。なお、本文中で使用する時期区分については前回の調査報告（『清洲城下町遺跡』1990）⁽¹⁾で設定した清洲城下町遺跡下層土器編年1期～6期に加えて今回検出されたものを7期として7時期を設定した。年代等についてはおおよそ1期（6世紀後半から7世紀前葉：猿投窯編年東山44号窯期およびその直前の型式）、2期（7世紀前～中葉：岩崎50号窯期）、3期（7世紀中～後葉：岩崎17号窯期）、4期（7世紀末～8世紀前葉：岩崎41・高蔵寺2号窯期）、5期（8世紀中～後葉：岩崎25・鳴海32号窯期）、6期（8世紀後葉～9世紀前葉：折戸10・井ヶ谷78号窯期）、7期（9世紀中葉～10世紀前葉：黒笹14・黒笹90号窯期）である。

B、遺構出土遺物

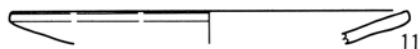
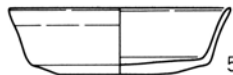
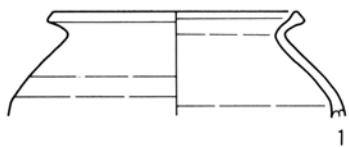
今回の調査では竪穴住居が25棟検出され、それにとまなう出土資料もいくつか得られた。この項では竪穴住居より出土した遺物を中心にしてその様相を述べる。

S B 401（第22図－2～14） この竪穴住居からは須恵器杯A⁽²⁾・B、杯蓋、碗A・D、盤B、高盤、鉢、甕や土師器杯、甕Cなどが出土した。

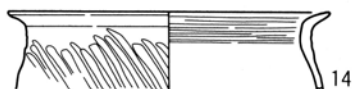
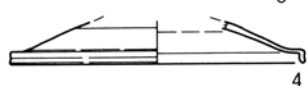
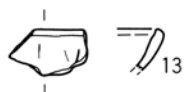
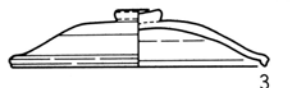
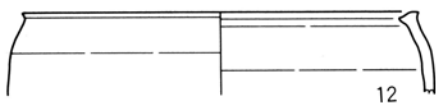
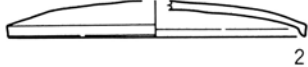
杯A（5・7）は底部外面を稜線を作りながら回転ヘラ削り調整するものである。杯B（8）は高台が外端面接地で高い高台を有するものである。盤Bは口縁端部が屈曲するものとそのまま引き上げるタイプがある。土師器は供膳形態が出土していることに注目したい。13は口縁端部を少しなかへ折り曲げるもので、内面には1段の放射状暗文を持つ。同じような土師器供膳具は包含層中からも数点出土しているが、おそらく畿内よりの搬入品であると思われる⁽³⁾。

時期的には5期に遡るもの（2・10）もあるが、基本的には6期であると思われる。

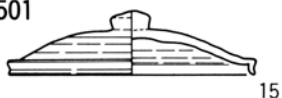
S B 507



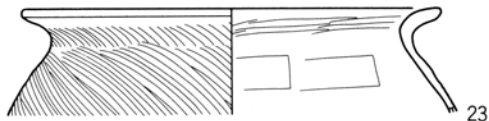
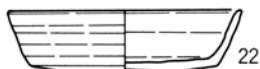
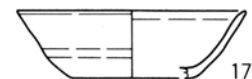
S B 401



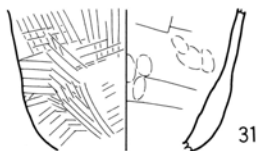
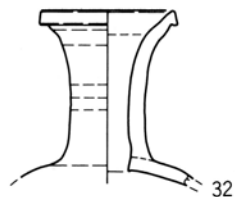
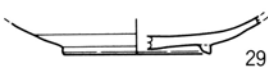
S B 501



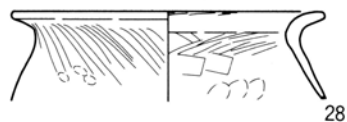
S B 502



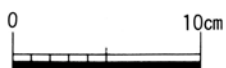
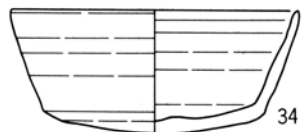
S B 402



S B 602



S B 404



第22図 遺物実測図(1) 古代：遺構出土遺物

S B 501（第22図-15～19） S B 501から出土した遺物には須恵器杯A・B、蓋B、椀A、盤B、土師器甕C・Dなどがある。

椀A（16・17）は底部の回転糸切り痕がそのまま残るものである。

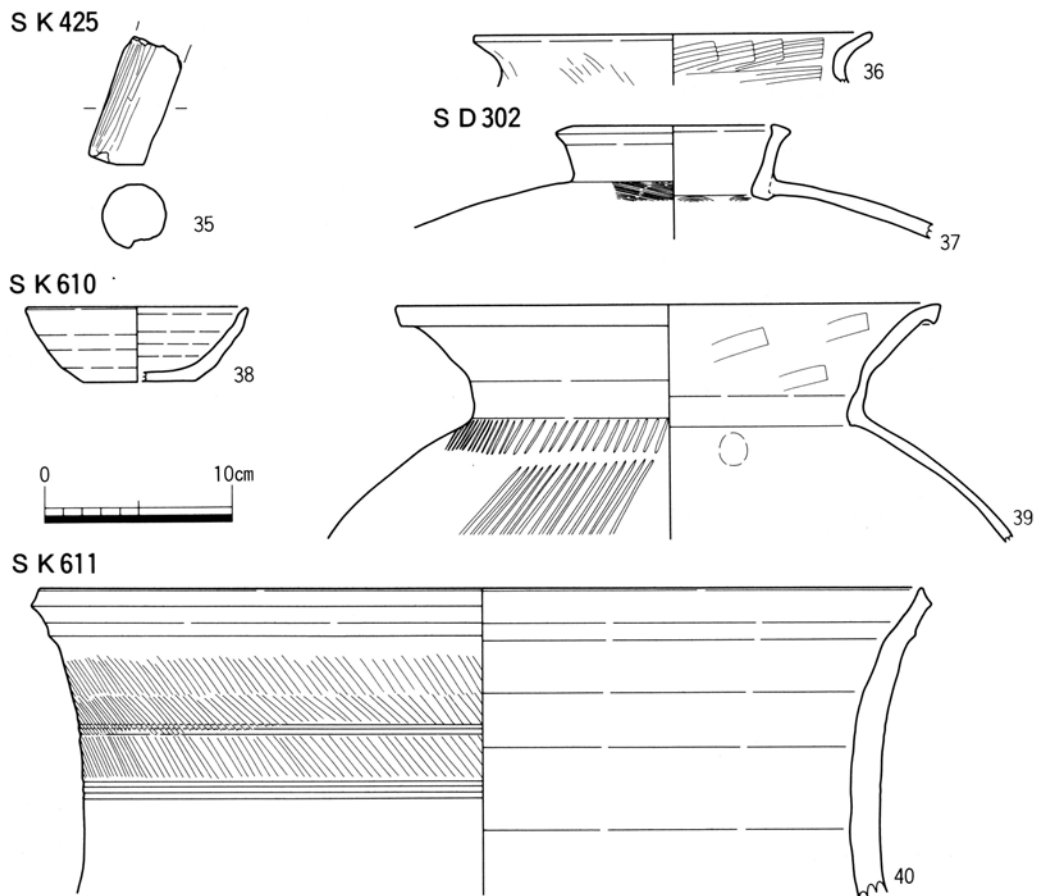
時期は6期であると思われる。

S B 502（第22図-20～24） S B 502からは土師器甕の細片が多数出土している。須恵器は杯A・B、杯蓋、鉢、土師器甕Cなどが出土している。

杯蓋では20はつまみが剥離しているが、21はつまみのつかないタイプのもので天井部は回転糸切りの後、軽くナデ調整するのみである。21は、22の杯Aとセットになって出土しているが、両者ともほぼ完形である。土師器甕Cは口縁部がやや肥厚し、内面横方向、外面全体は斜め方向の荒いハケメ調整を施す。24は土師器の脚部である。このような形態の脚部は尾張周辺ではあまり類例がなく、釜のような器形が想定されるが全形を復元し得ない。胎土は土師器甕Cと同じ荒い砂粒を含むもので、タテ方向に荒いハケメ調整をする。包含層中からも数点出土しているが、いずれも体部近くにはススが付着している。

時期は6期であると思われる。

S B 402（第22図-25～32） S B 402は今回の調査で初めて検出された9世紀中～後葉、猿投窯黒笹14号窯期に平行する時期の竪穴住居である。出土遺物は余り多いものではなく須恵器杯A・B、椀A、



第23図 遺物実測図(2) 古代：遺構出土遺物

盤B、甑、灰釉陶器皿、土師器甕などがある。

須恵器杯A(26)は完形で出土したもので、底部は回転ヘラ削り調整をする。碗A(25)もほぼ完形で出土している。底部は静止糸切り不調整である。盤B(27)は高台が高めで口縁部の屈曲が強い。30は甑の把手であると思われる。灰釉陶器皿(29)は灰白色の緻密な胎土に内面全面に灰釉を施釉する。底部は全面回転ヘラ削り調整をする。土師器甕は口縁部が肥厚するものである。

時期的には25・26と32の須恵器細頸瓶が時期的に遡るが、それ以外のものは7期に属するものと思われる。

S K 425 (第23図-35・36) S K 425から出土した遺物には土師器甕Cなどがある。35はS B 502出土のものと同じ形態である。時期的には6期であると思われる。

S K 610 (第23図-38・39) 38は須恵器碗Aである。底部は回転糸切り痕跡が明瞭である。

S K 611 (第23図-40) 40の須恵器甕は口縁端部に稜線を有する7世紀代のタイプである。

C、遺構外出土遺物 (第24・25図-41~108)

包含層等から出土した古代・中世の遺物は7世紀から14世紀までのものが見られる。全体的には8世紀後半代の遺物が多い。特徴的なものについてのみ述べることとする。

須恵器 (第24図-41~66) 須恵器のなかで最も古いものは41・42の須恵器杯Hである。これらは天井部のヘラ削り調整や稜などから1期後半、7世紀初頭のものと考えられる。60は高盤である。

61~62は碗Dである。碗Dは8世紀後半に特徴的にみられる器種で、口縁端部はそのまま丸くおさめる。整形・調整は比較的丁寧で、とくに62は胎土が灰色できわめて丁寧な回転ナデ調整を施す。64は大型の平瓶である。体部は肩の稜線が明瞭で体部外面全体に回転ヘラ削り調整をする。

灰釉陶器 (第24図67~80) 灰釉陶器は量的にはあまり多いものではないが、調査区中央部を中心にみられる。出土したのはほとんど碗皿のみで、全体的に角高台を有する黒笹14号窯期のものが多い。

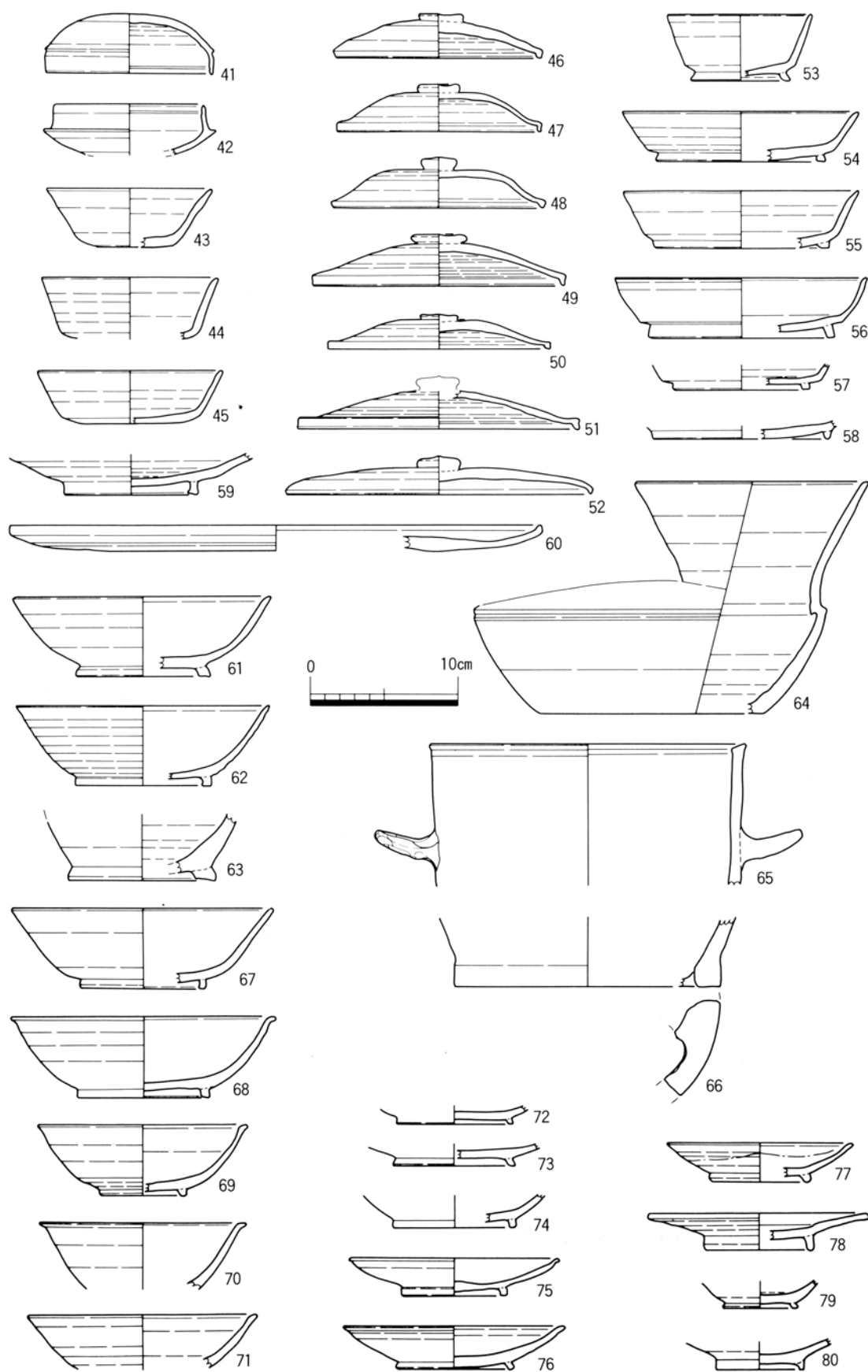
土師器 (第25図-93~108) 土師器は93・94が杯である。これらは先にもふれたが搬入品の可能性がある。甕は95のような細かなハケメをもつものは少なく、荒いハケメを持つ平底のものが主体を占める。

中世土器 (第25図-81~92) 中世土器は全調査区に散在的にみられる。ほとんどが山茶碗で南部系のB類(82・84・85)と北部系C類(83・86)であるが全体的にみると前者が多い。92は青磁蓮弁文碗である。(城ヶ谷和広)

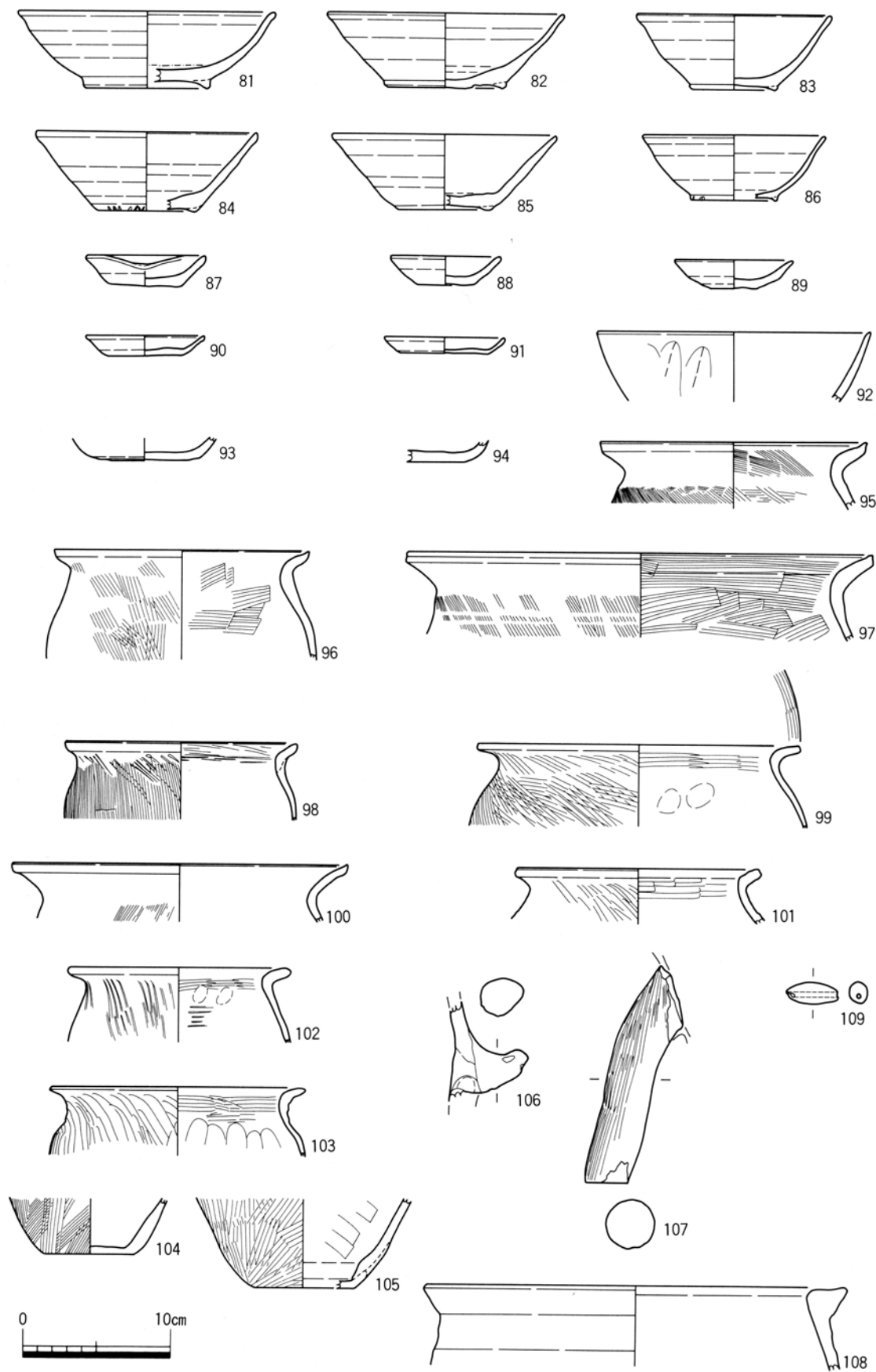
註(1)『清洲城下町遺跡』1990財愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第17集。なお、中世については、城ヶ谷和広1991「土田遺跡に於ける中世土器の様相」『土田遺跡Ⅱ』(財愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第23集によるものとする。

(2) 古代の遺物の器種分類については、清洲城下町遺跡の前の報告書(註(1)文献)で用いた分類によるが、基本的には供膳具では無台形態をA、有台形態をB、脚のついたものをC形態とする。

(3) 尾張における土師器のあり方については供膳具はほとんど出土せず、畿内を中心とした搬入品が8世紀前半を中心としてみられる。(城ヶ谷和広1992「古代尾張の土師器—6世紀後半から11世紀の様相—」『年報平成3年度』(財愛知県埋蔵文化財センター)



第24図 遺物実測図(3) 古代：遺構外出土遺物



第25図 遺物実測図(4) 古代・中世：遺構外出土遺物

第2節 城下町期（戦国時代）の遺物

この時期の出土遺物には陶磁器・土器類、瓦類、木製品、石製品、金属製品などがある。本節では、材質別毎に項目を設定し、その中で遺構出土資料を中心に記述したい。

A、陶磁器・土器類

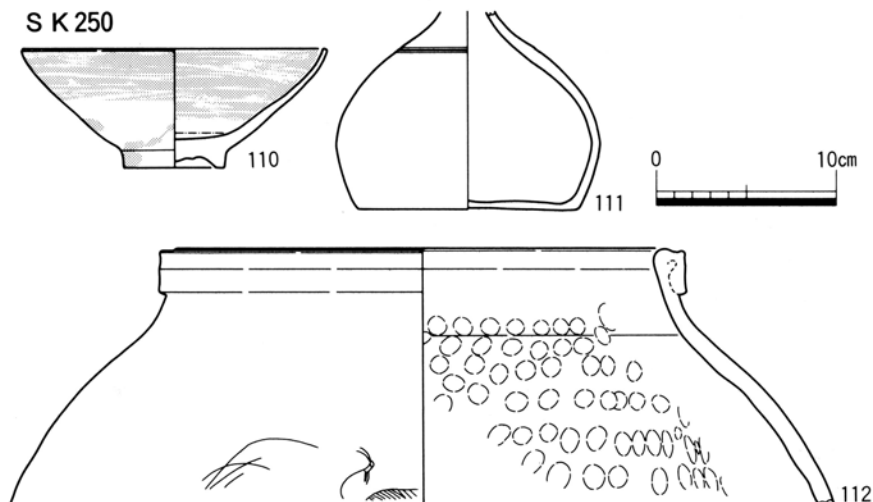
出土遺物の大半は陶磁器・土器類が占めている。この陶磁器・土器類の分類と分析方法是『清洲城下町遺跡Ⅳ』1994¹⁾に依拠したため、詳細は同書を参考されたい。

この調査で出土した陶磁器・土器類は、遺構・包含層などから総破片数14507点、口縁部計測法による個体数換算値で約600点が出土した。陶器類は、産地別にみると瀬戸美濃窯産・常滑窯産・備前窯産の陶器類が出土し、瀬戸美濃窯産の陶器が大多数を占める。器種としては碗・皿・浅鉢・播鉢等がある。土器類は土師器の皿・鍋・釜等があり、産地は特定し得ないが、尾張独特の形態からおそらく在地産のものと思われる。また、磁器類は全て中国窯産の青磁・白磁・青花であるが量的には非常に少ない。なお、各産地別組成・器種別組成については全出土遺物をカウントした第3表を参照されたい。

S K 250（第26～28図－110～139） この土坑からは、瀬戸美濃窯産の天目茶碗・緑釉皿・香炉・鉢・甕・壺や土師器の皿・鍋等の他、特異な遺物として刻絵のある常滑窯産の甕・朝鮮産の碗・瓶も出土している。一般に喫茶具と考えられる器種が比較的多く出土している。

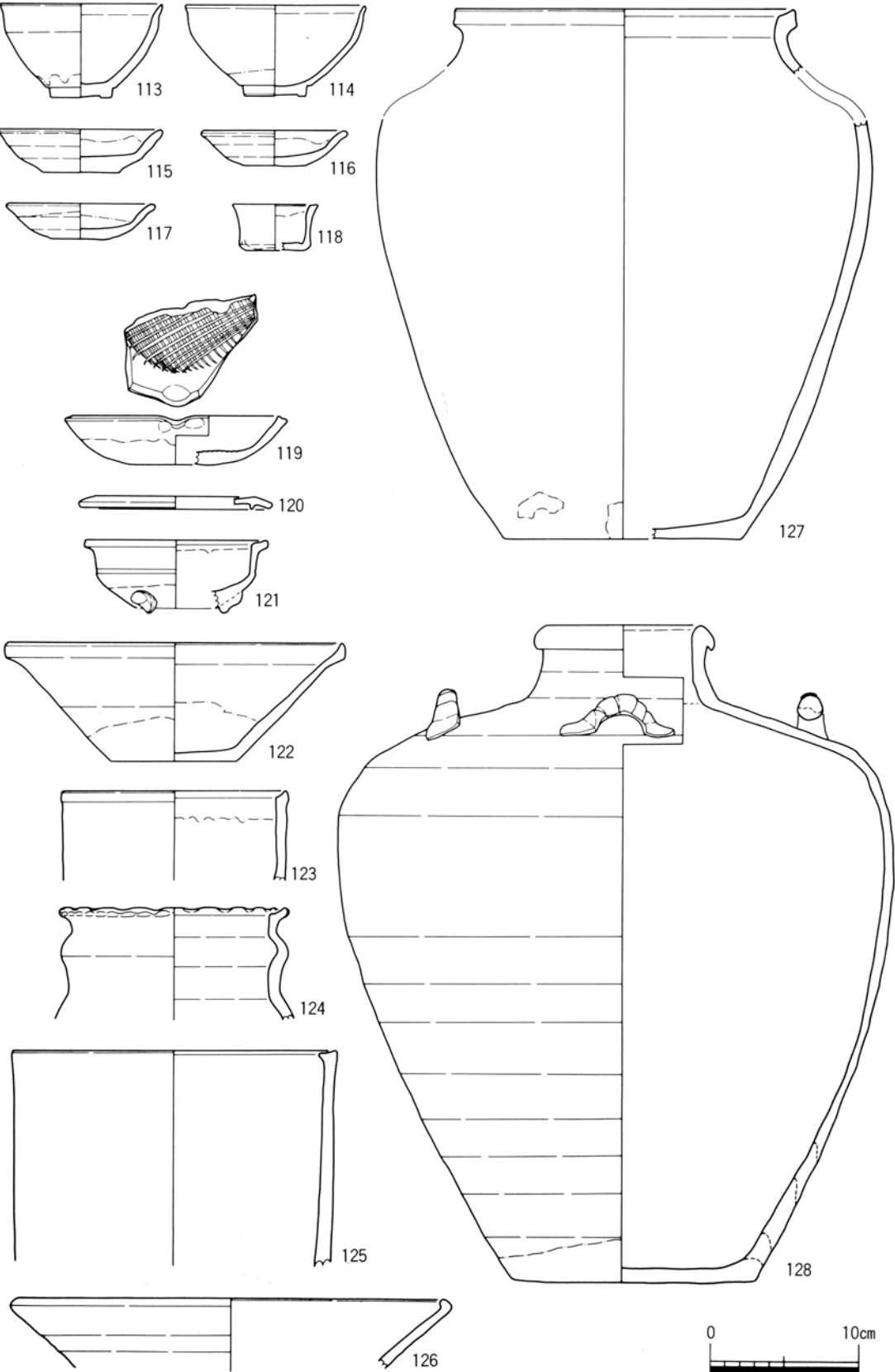
朝鮮産の碗（110）は黒灰色の胎土で、内面と体部外面に白泥をハケ塗りした粉青沙器刷毛目茶碗で、全面に透明な釉薬が施されている。見込み部と高台部に胎土目の痕跡が認められる。朝鮮産の瓶（111）は器壁が薄いどっしりとした船徳利形で、肩部に沈線が巡る。表面に透明な釉薬が施されたいわゆる雑釉徳利である。常滑窯産の甕（112）は、N字状折り返し口縁が頸部に張り付いた形態で、体部に鳥と草の紋様が線刻されている。

瀬戸美濃窯産の陶器は、化粧掛のある輪高台の天目茶碗（113・114）、緑釉皿（115～117・119）、断面が三角形の緑釉浅鉢（122）、口縁端部を上方につまみ上げる播鉢（126）などがあり、これらは窖窯後期末から大窯第1段階に位置づけられる²⁾遺物である。115・116は内面に赤色の付着物が認

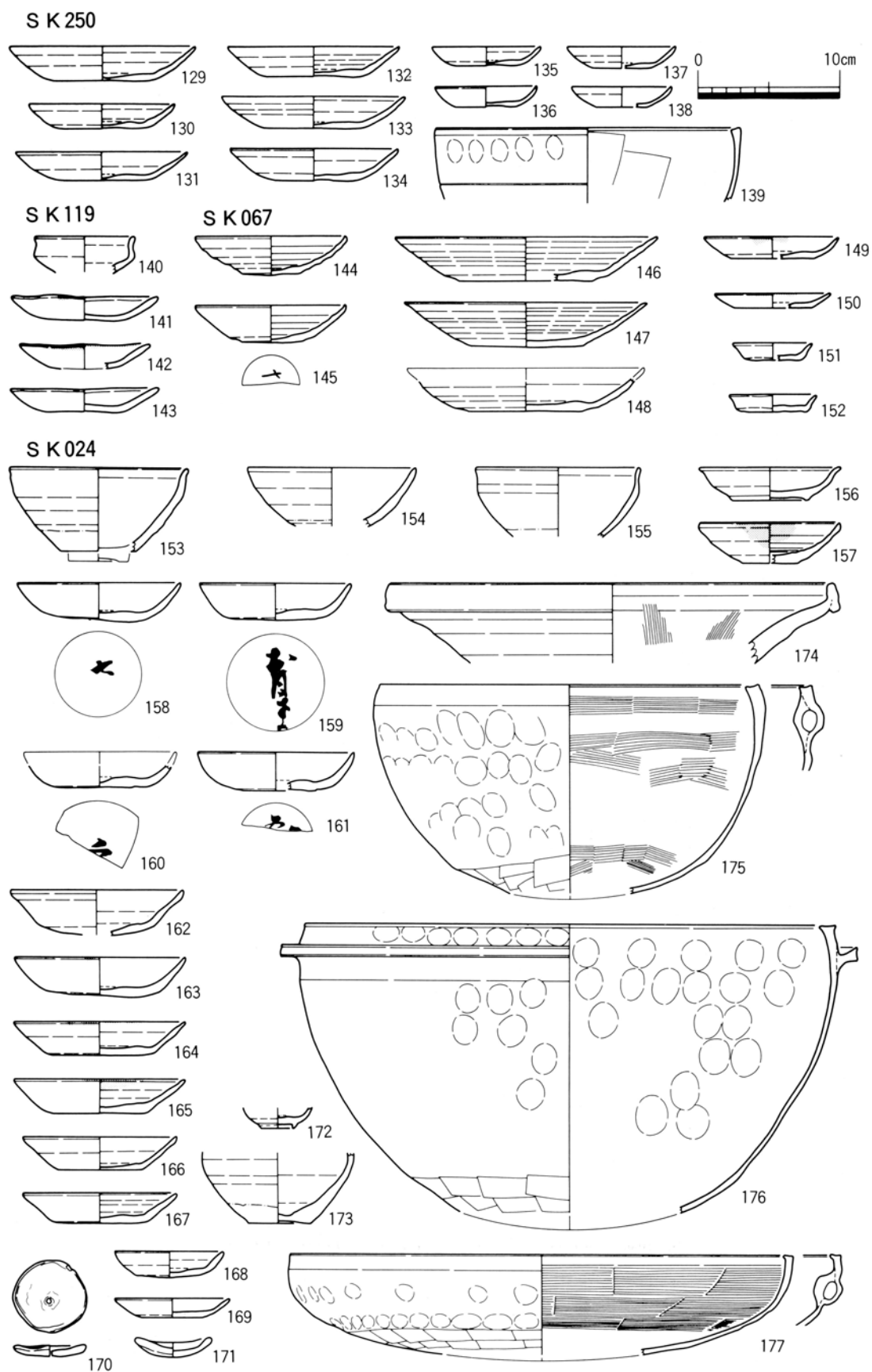


第26図 遺物実測図(5) 城下町期：陶磁器・土器(1)

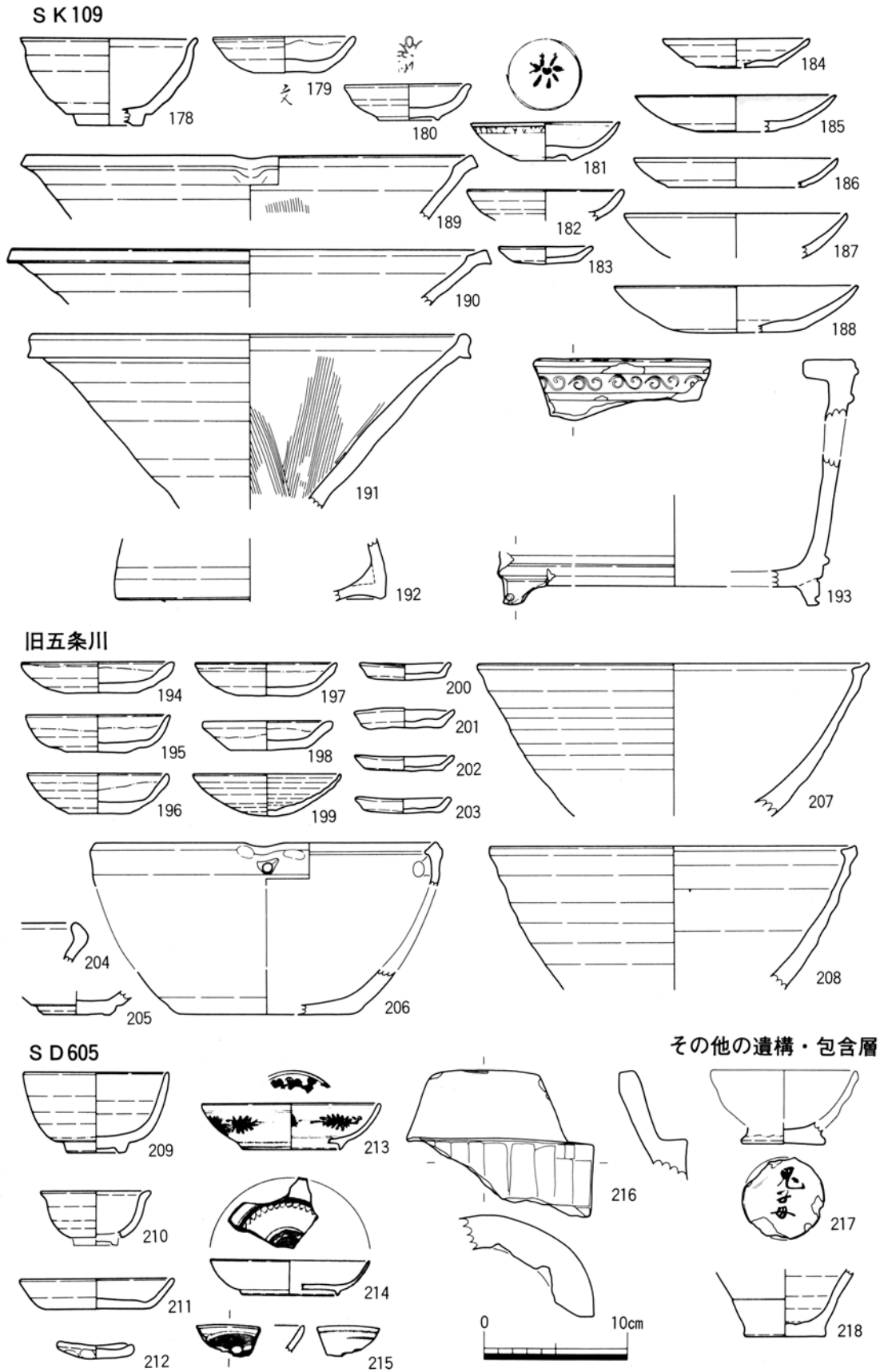
S K 250



第27図 遺物実測図(6) 城下町期：陶磁器・土器(2)



第28図 遺物実測図(7) 城下町期：陶磁器・土器(3)



第29図 遺物実測図(8) 城下町期：陶磁器・土器(4)

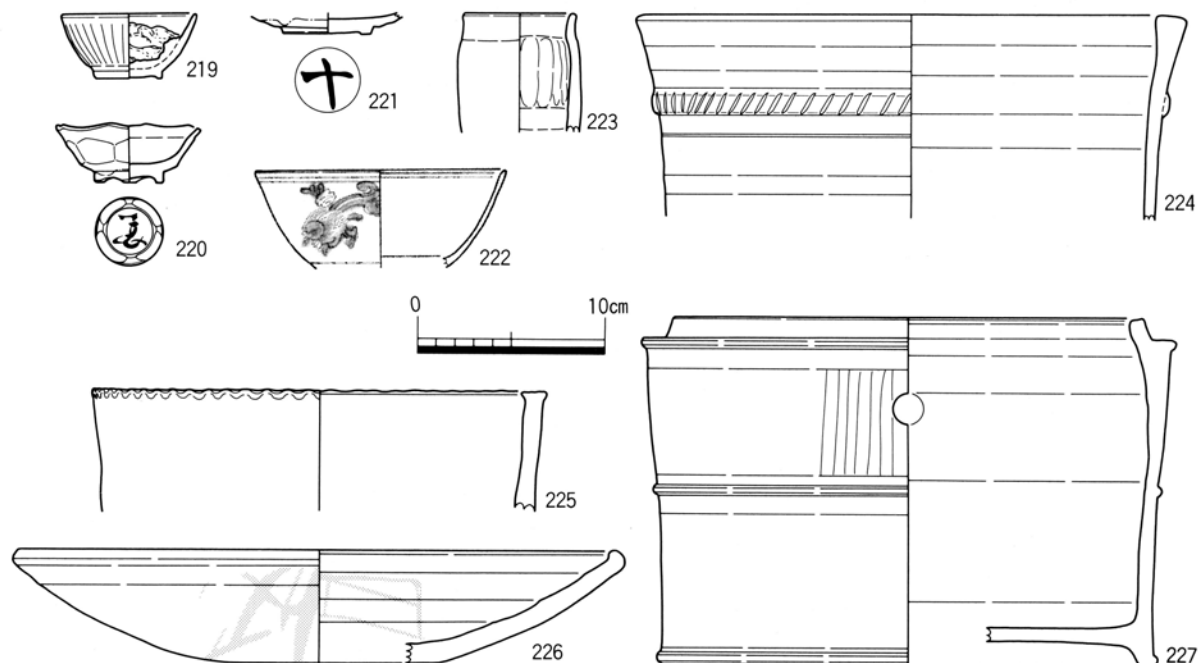
められる。土師器皿は口径が約12cmで体部が直線的に伸びるロクロ成形のものと、口径が約8cmで口縁端部がやや内彎するロクロ成形のものの2者がある。土師器鍋は体部が直立し、沈線が1条巡る半球型の内耳鍋である。時期的には15世紀末から16世紀初頭の良い一括資料である。

SK119 (第28図-140~143) 瀬戸美濃窯産の小椀(140)と手づくね成形の土師器皿(141~143)がある。後者は比較的精良な胎土を持ち、口縁端部を厚く作るもので、通常城下町期に認められる土師器皿とは形態が異なっている。口縁部にタールが付着している。

SK024 (第28図-153~177) 瀬戸美濃窯産の天目茶碗(153~155)・灰釉端反皿(156)・同心円の圈線が内面に巡る重圈皿(157)・縁帯を持つ播鉢(174)等の他は、大半が土師器の製品である。特に、土師器皿は墨書が存在するもの・穿孔されたものなど特殊な形態のものが認められ、土師器鍋の出土と考え合わせると地鎮めの祭具の可能性も指摘できる。

土師器皿はロクロ成形のものと非ロクロ成形のものがある。前者は体部が直線的に開くもの(Ⅰ類164~167)、体部が内彎するもの(Ⅱ類158~163)、口径が約8cmを測る小形のもの(Ⅲ類168・169)がある。後者は体部にヨコナデを施さない小形のもの(Ⅳ類170・171)である。墨書はⅡ類のみに認められ、数を表現したものが多い。また、穿孔はⅣ類に見られる。土師器鍋はほぼ完形の状態で3点出土した。半球型の内耳鍋(175)はやや厚手の口縁部が内彎するタイプで、内面にヨコハケを施す。羽付鍋(いわゆる羽釜176)は底部外面がヘラケズリされる。炮烙鍋は体部が丸みを持って立ち上がり、内面にヨコハケが残存している。また、173は土師器の小形壺の下半部で、底部外面に回転糸切り痕が認められる。時期は16世紀中葉~後葉に比定できる。

その他の遺構・包含層



第30図 遺物実測図(9) 城下町期：陶磁器・土器(5)

旧五条川（第29図－194～208） 瀬戸美濃窯産の緑釉皿（194～198）・螺旋状の圈線がある重圈皿（199）・口縁部をつまみだした播鉢（204）・内耳鍋（206～208）、ヨコナデを施した非ロクロ成形の土師器皿（200～203）等が出土した。陶器の内耳鍋（206～208）は、表面に薄い茶色の錆釉を塗布し、口縁端部を強くナデて内彎させている。外面には煤が付着している。206は内耳が剥離した後、穿孔して耳を作っている。15世紀後葉に位置づけられる。

S D 605（第29図－209～216） 柿経埋納遺構 S K 626を切る遺構で、長石釉を施した瀬戸美濃窯産の丸椀（209）や瓦（216）などが出土した。ヨコナデのない非ロクロ成形の土師器皿（212）等から16世紀末から17世紀初頭に所属するであろう。

その他の遺構・包含層（第29・30図－217～227） ここでは特徴のある遺物を個別に取り上げる。

217は瀬戸美濃窯産の台付椀（仏供）で底部の露胎部に「鬼子母」と墨書される。218は土師器の小形壺の下半部で、底部外面に回転糸切り痕が認められる。219は瀬戸美濃窯産の小椀で、全体に強く火を受けており、表面がただれている。外面に蓮弁を模倣した線刻があり、灰釉を掛けたものか。内面に緑色の溶解物が付着している。220は割高台の白磁の皿で底部に墨書がある。221は灰釉腰折皿で底部に「十」が墨書される。225は常滑窯産の筒形鉢で口縁部にひだが存在する。226は備前窯産の大皿で、内外面に火櫨の文様が存在する。227は筒形の瓦器で、体部に円形の孔があり、外面は丁寧に縦方向に磨かれている。時期は不明。

註（1）『清洲城下町遺跡Ⅳ』1994（財）愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集

（2）藤澤良祐1985「瀬戸大窯の編年的研究」『研究紀要Ⅴ』瀬戸市歴史民俗資料館

第3表 遺物集計表（破片数）

	89 G 区	90 G 区	90 H 区	90 I 区	91 D 区	91 E 区	92 A 区	92 B 区	総合計
瀬戸美濃窯産陶器	11	45	30	14	1176	911	1177	1104	4468
土師器	53	74	5	32	2207	2033	2380	1862	8646
瓦器	0	2	2	0	23	10	17	14	68
常滑窯産陶器	0	4	3	2	126	174	140	221	670
楽窯産陶器	0	0	0	0	1	1	1	1	4
信楽窯産陶器	0	0	0	0	0	2	0	0	2
備前窯産陶器	0	0	0	4	0	1	0	0	5
唐津窯産陶器	0	0	0	0	0	0	0	0	0
朝鮮窯産陶器	0	0	0	0	0	0	0	13	13
中国窯産陶磁器	0	2	1	7	27	29	34	20	120
瓦	1	3	3	0	75	26	22	22	152
その他	0	0	0	1	132	23	43	160	359
総合計	65	130	44	60	3767	3210	3814	3417	14507

瀬戸美濃	0	9	9	0	169	161	178	169	695
皿	2	17	3	6	462	242	406	259	1397
浅鉢	0	1	3	2	53	49	46	47	201
播鉢	6	8	8	4	282	218	293	323	1142
大形製品	3	9	3	1	185	191	199	264	855
小形製品	0	1	1	0	7	13	11	11	44
香炉	0	0	1	0	5	2	8	2	18
鍋・釜	0	0	0	0	3	19	9	6	37
その他	0	0	0	0	2	2	6	2	12
不明	0	0	2	1	8	14	21	21	67
土師器	0	0	0	0	0	0	0	3	3
椀	52	35	5	31	1910	1564	1714	1281	6592
皿（ロクロ成形）	52	26	5	25	1753	1457	1545	1141	6004
皿（非ロクロ成形）	0	9	0	6	145	107	157	127	551
大形製品	0	0	0	0	0	4	1	1	6
小形製品	0	0	0	0	0	3	0	0	3
鍋・釜	1	39	0	1	296	462	664	571	2034
（羽付鍋）	0	1	0	0	3	11	35	18	68
（内耳鍋）	0	18	0	0	78	87	138	154	475
（炮烙鍋）	0	0	0	0	0	2	48	0	50
（釜）	0	2	0	0	7	23	12	22	66
その他	0	0	0	0	0	0	1	3	4
不明	0	0	0	0	1	0	0	3	4
常滑	0	4	0	2	88	63	88	133	378
真焼	0	0	3	0	38	111	52	88	292
赤物	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中国	0	2	0	2	8	13	11	9	45
青磁	0	0	0	0	11	5	12	3	31
白磁	0	0	1	5	8	11	11	8	44
青花	0	0	0	0	0	0	0	0	0

B、木製品

木製品は堆積状況により遺存率が異なるため、今回の調査では滞水状況を呈していたS K 626のみで確認され、その他の遺構からは全く出土しなかった。

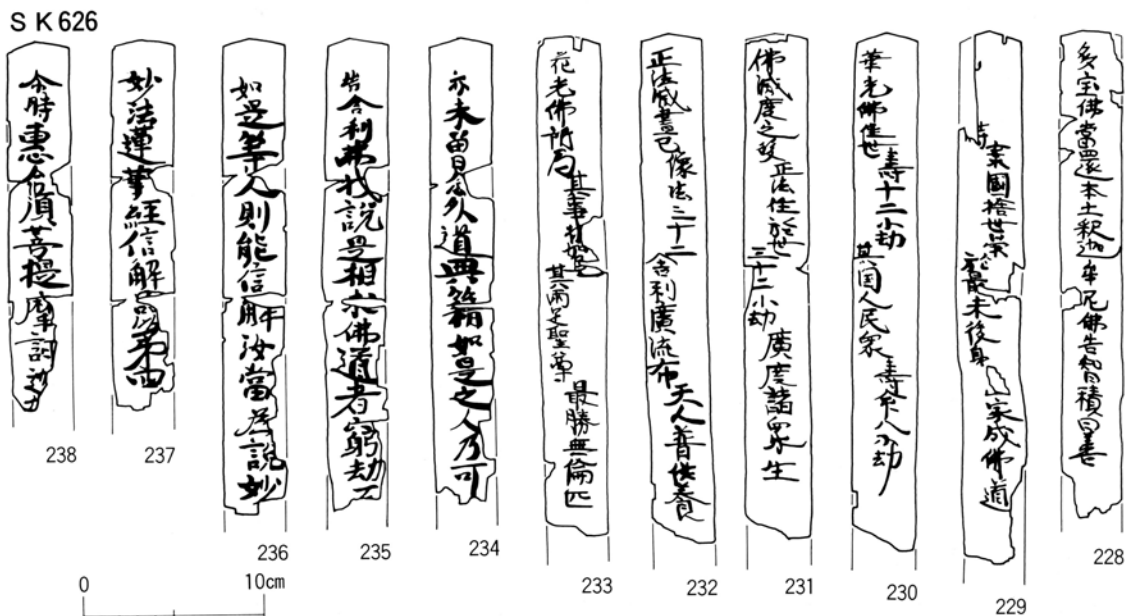
S K 626 (第31・32図-228~267) S K 626からは柿経が多数出土し、その他の遺物は全く出土しなかった。柿経は極めて薄い板を用いており、従って破損して全形をとどめないものが多かった。また、柿経は概ね20枚を一束として、重なった状態で出土しており、これらは経文の順に重ねられている。

柿経は幅約3.5cm、長さ約33.0cm、厚さ0.1cm以下を測る薄い柾目板を用い、片面だけに墨書で経文を記している。頭部の形態はややばらつきが見られるものの、基本的には圭頭状に加工している。最下部は特別な加工を施さず、短冊形となっている。経文の原典は、同定の結果、妙法蓮華經（法華經）八卷一部を書写したもので、出土したものはこの内のほんの一部分に過ぎない。書体は複数のものが認められ、書写は多人数で行われたと推定されるが、一束の中では同一の書体で統一されている。誤字・脱字等の誤謬や訂正が行われたものも見られる。

本柿経は小破片まで含めると千点に近い量が出土しているが、実際には取り上げ時に破損して復元できなくなったものが多い。従って、正確な出土点数は不明である。これまでに経文の同定が完了したものは186点を数え、第4表にその釈文と経文の位置を表示した。この記載方法は『清洲城下町遺跡Ⅱ』（1992）の報告と同一である。以下にその概要を示す。

妙法蓮華經（法華經）は八巻で構成され、更に28の品に分かれている。また実際の内容は、本文に相当する「経文」と詩に相当する「偈頌」に区分される。通常、妙法蓮華經（法華經）を書写する場合、品毎に表題を付けて、経文の部分は1行17字・偈頌の部分は1行に16字もしくは20字で区切って、記載するのが一般的であり、本柿経もこの書式で記載されている。従って、各行に書かれる経文は固定されていることになり、行の位置を特定することで、経文のどの位置に相当するかが判別できる。表示の方法は、巻番号・品番号・行番号（各品に行番号を新たに付ける）^①の順に示した。

註（1）経文同定にあたっては次の文献を参考にした。『井相田C遺跡Ⅱ』1988福岡県教育委員会



第31図 遺物実測図(10) 城下町期：木製品(1)

S K 626



第32図 遺物実測図(1) 城下町期：木製品(2)

第4表 SK 626 柿經釈文一覽表

凡例

文頭のアルファベットは出土した束を基準にした記号である。

(大文字は束記号・小文字は各々の束における記号である。)

釈文は原則として復元したものを呈示した。

(釈文中の()は欠損している部分である。)

(旧字体・異体字は通常の文字に変換している。)

(誤字・脱字は釈文中では本来の形で訂正している。ただし、余字は釈文中に挿入した。)

文末の「」は経文の所在地を番号で表示したものであり、表示方法は本文に記載している。

Aa (羅) 三藐三(菩提者必以大乗而得度脫然我)	[2・3・10]
Ab (等) 不解方便(隨宣所說初聞仏法遇便信受)	[2・3・11]
Ba (仏為王子) 時棄國捨世榮於最末後身出家成仏道	[2・3・81]
Bb 華光仏住世壽十二小劫其國人民衆壽命八小劫	[2・3・82]
Bc 仏滅度之後正法住於世三十二小劫度諸衆生	[2・3・83]
Bd 正法滅盡已像法三十二舍利広流布天人普供養	[2・3・84]
Be 華光仏所為其事皆如其兩足聖尊最勝無倫匹	[2・3・85]
Bf (彼) 即是汝身宣(応自欣慶)	[2・3・86]
Bg (爾時) 四部衆比(丘比丘尼優婆塞優婆夷天)	[2・3・87]
Bh 龍夜叉乾闥(婆阿修羅迦樓羅緊那羅摩睺)	[2・3・88]
Bi 羅伽等大衆見(舍利弗於仏前受阿耨多羅)	[2・3・89]
Bj 三藐三菩提記心(大歡喜踊躍無量各各脫)	[2・3・90]
Bk 身所著上衣以供(養仏釈提桓因梵天王等)	[2・3・91]
Bl 与無數天子亦以(天妙衣天曼) 陀羅華摩訶	[2・3・92]
Bm 曼陀羅華等(供養於仏) 所散天衣住虛空(中)	[2・3・93]
Bn 而自廻轉諸天(伎樂百千万) 種於虛空中一	[2・3・94]
Bo 時俱作雨衆天(華而作是言) 仏昔於波羅奈	[2・3・95]
Bp 初轉法輪今乃復轉(無上最大) 法輪爾時諸	[2・3・96]
Bq 天子欲重宣此義而(說偈言)	[2・3・97]
Br 昔於波羅(奈転四諦法輪分別説諸) 法五衆之生滅	[2・3・98]
Ca (世尊說是) 法我等皆隨喜大智(舍利弗今得受尊記)	[2・3・101]
Cb (我等亦如) 是必當得作仏於一切(世間最尊無有上)	[2・3・102]
Cc (仏道匠) 思議方便隨宜説我所(有福業今世若過世)	[2・3・103]

Cd (及見) 仏功德盡廻向仏道	[2・3・104]
Ce 爾時舍利弗白仏言(世尊) 我今無復疑悔親	[2・3・105]
Cf 於仏前得受阿耨多羅三藐三菩提記是諸	[2・3・106]
Da 聞不能(解亦勿為) 說若人不信(毀謗此經)	[2・3・341]
Db 則斷一切世間(仏) 種或復瞋瞋而懷(疑惑)	[2・3・342]
Dc 汝當聽說此人罪報若仏在世若滅(度後)	[2・3・343]
Dd 其有誹謗如斯經典見有讀誦書(持經者)	[2・3・344]
De 輕賤憎嫉而(懷結) 恨此人罪報汝今(復聽)	[2・3・345]
Df 其人命終(入阿鼻獄具足) 一劫劫尽更(生)	[2・3・346]
Ea (捨惡知識親近善友如) 是之人乃可(為說)	[2・3・382]
Eb 若見仏子(持戒) 清潔(如) 淨明珠求(大乘經)	[2・3・383]
Ec 如是之人乃(可) 為說(若) 人無瞋質質(直柔軟)	[2・3・384]
Ed 常慙一切恭(敬) 諸仏如是之人乃可為說	[2・3・385]
Ee 復有仏子於(大) 衆中以清淨心種種因縁	[2・3・386]
Ef 譬喻言(辭) 說法無礙如是之人乃可為(說)	[2・3・387]
Eg 若(有) 比丘為一切知四方求法合掌頂(受)	[2・3・388]
Uh 但樂受持(大) 乘經典乃至不受余(經一偈)	[2・3・389]
Ei (如) 是之人乃可為說如人至心求仏(舍利)	[2・3・340]
Ej 如是求經得已頂受其人不復志(求余經)	[2・3・341]
Ek 亦未曾念外道典籍如是之人乃可(為說)	[2・3・342]
El 告舍利弗我說是相求仏道者窮劫不(盡)	[2・3・343]
En 如是等人則能信解汝當為說妙(法華經)	[2・3・344]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・236]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・237]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・238]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・239]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・240]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・241]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・242]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・243]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・244]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・245]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・246]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・247]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・248]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・249]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・250]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・251]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・252]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・253]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・254]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・255]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・256]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・257]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・258]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・259]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・260]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・261]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・262]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・263]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・264]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・265]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・266]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・267]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・268]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・269]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・270]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・271]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・272]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・273]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・274]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・275]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・276]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・277]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・278]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・279]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・280]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・281]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・282]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・283]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・284]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・285]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・286]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・287]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・288]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・289]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・290]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・291]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・292]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・293]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・294]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・295]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・296]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・297]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・298]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・299]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・300]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・301]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・302]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・303]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・304]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・305]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・306]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・307]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・308]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・309]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・310]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・311]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・312]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・313]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・314]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・315]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・316]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・317]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・318]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・319]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・320]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・321]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・322]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・323]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・324]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・325]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・326]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・327]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・328]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・329]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・330]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・331]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・332]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・333]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・334]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・335]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・336]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・337]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・338]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・339]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・340]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・341]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・342]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・343]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・344]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・345]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・346]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・347]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・348]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・349]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・350]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・351]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・352]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・353]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・354]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・355]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・356]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・357]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・358]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・359]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・360]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・361]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・362]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・363]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・364]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・365]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・366]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・367]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・368]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・369]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・370]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・371]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・372]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・373]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・374]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・375]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・376]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・377]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・378]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・379]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・380]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・381]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・382]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・383]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・384]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・385]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・386]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・387]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・388]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・389]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・390]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・391]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・392]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・393]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・394]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・395]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・396]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・397]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・398]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・399]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・400]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・401]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・402]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・403]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・404]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・405]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・406]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・407]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・408]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・409]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・410]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・411]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・412]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・413]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・414]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・415]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・416]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・417]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・418]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・419]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・420]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・421]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・422]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・423]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・424]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・425]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・426]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・427]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・428]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・429]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・430]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・431]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・432]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・433]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・434]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・435]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・436]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・437]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・438]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・439]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・440]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・441]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・442]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・443]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・444]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・445]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・446]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・447]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・448]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・449]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・450]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・451]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・452]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・453]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・454]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・455]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・456]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・457]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・458]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・459]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・460]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・461]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・462]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・463]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・464]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・465]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・466]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・467]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・468]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・469]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・470]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・471]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・472]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・473]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・474]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・475]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・476]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・477]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・478]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・479]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・480]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・481]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・482]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・483]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・484]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・485]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・486]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・487]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・488]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・489]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・490]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・491]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・492]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・493]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・494]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・495]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・496]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・497]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・498]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・499]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・500]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・501]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・502]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・503]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・504]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・505]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・506]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・507]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・508]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・509]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・510]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・511]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・512]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・513]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・514]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・515]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・516]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・517]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・518]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・519]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・520]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・521]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・522]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・523]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・524]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・525]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・526]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・527]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・528]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・529]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・530]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・531]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・532]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・533]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・534]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・535]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・536]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・537]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・538]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・539]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・540]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・541]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・542]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・543]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・544]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・545]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・546]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・547]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・548]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・549]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・550]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・551]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・552]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・553]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・554]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・555]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・556]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・557]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・558]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・559]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・560]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・561]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・562]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・563]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・564]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・565]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・566]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・567]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・568]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・569]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・570]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・571]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・572]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・573]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・574]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・575]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・576]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・577]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・578]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・579]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・580]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・581]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・582]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・583]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・584]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・585]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・586]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・587]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・588]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・589]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・590]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・591]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・592]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・593]
En 妙法蓮華經信解品第四	[2・3・594]
En 妙法蓮	

Gd 樂於小法便見縱捨（不為分別汝等當有如）	[2・4・99]
Ge 來知見寶藏之分（世尊以方便力說如來智）	[2・4・100]
Gf 慧我等從得涅槃（一日之價以為大得於）	[2・4・101]
Gg 此大乘無有志求我（等又因如來智慧為諸）	[2・4・102]
Gh 菩薩開示演說而（自於此無有志願所以者）	[2・4・103]
Gi 何仏知我等心樂小法（以方便力隨我等說）	[2・4・104]
Gj 而我等不知真是（仏子今我等方知世尊於）	[2・4・105]
Ha 智勝（如來處於道場菩薩樹下坐師子座諸）	[3・7・103]
Hb 天竜王（乾闥婆緊（那羅摩睺羅伽人非人等）	[3・7・104]
Hc 恭敬圍（邊及見一六王子請仏轉法輪時諸）	[3・7・105]
Hd 梵天王頭面礼仏遶百千即以天華（而散）	[3・7・106]
He 仏上所散之華如須弥山并以供養仏（菩提）	[3・7・107]
Hf 樹華供養已各以宮殿奉上彼仏而作是（言）	[3・7・108]
Hg 唯見哀愍饒益我等所獻宮殿願（垂納処爾）	[3・7・109]
Hi 時諸梵天王即於仏前一心同声以偈（頌曰）	[3・7・110]
Hi 聖主天中天迦陵頻伽声哀愍衆（生者我等今敬礼）	[3・7・111]
Hj 世尊甚希有久遠乃一現一百八十劫空（過無有仏）	[3・7・112]
Hk 三惡道充滿諸天衆減少今仏出於世（為衆生作眼）	[3・7・113]
Hi 世間所歸趣救護於一切為衆生之父（哀愍饒益者）	[3・7・114]
Hn 我等宿福慶今得值世尊	[3・7・115]
Hn 爾時諸梵天王偈讚仏已各作是言唯願（世）	[3・7・116]
Ho 尊哀愍一切転於法輪度脫衆生時諸（梵天）	[3・7・117]
Hp 王一心同声而說偈言	[3・7・118]
Hq 大聖転法輪顯示諸法相度苦惱衆（生令得大歡喜）	[3・7・119]
Hr 衆生聞此法得道若生天諸惡（道減少忍善者增益）	[3・7・120]
Hs 爾時大通智勝如來默然許之又諸比丘（南）	[3・7・121]
Ia 長子猶如今也是踏七宝華（仏国土莊嚴壽）	[4・9・48]
Ib 命劫數所化弟子正法像法亦如（山海慧自）	[4・9・49]
Ic 在通王如來無異亦為此仏而（作長子過）是	[4・9・50]
Id 已後當得阿耨多羅三藐三菩提爾時世（尊）	[4・9・51]
Ie 欲重宣此義而說偈言	[4・9・52]
If 我為太子時羅睺為長子我今成仏道受（法為法子）	[4・9・53]
Ig 於未來世中見無量億仏皆為其長子一心（求仏道）	[4・9・54]
260 259 258 257	
Ih 羅睺密行唯我能知之現為我長子以示諸（衆生）	[4・9・55]
Ii 無量億千万功德不可數安住於仏法以求（無上道）	[4・9・56]
Ij 爾時世尊見學無學二千人其意柔軟寂（然）	[4・9・57]
Ik 清淨一心觀仏告阿難汝見是學無學（二）	[4・9・58]
Il 千人不唯然已見阿難是諸人等當供養（五）	[4・9・59]
Im 十世界微塵數諸仏如來恭敬尊重護（持法）	[4・9・60]
In 歲末後同時於十方國各得成仏皆同一号	[4・9・61]
Io 名曰実相如來應供正遍（知明）行足善（逝世）	[4・9・62]
Ip 問解無上士調御丈夫天人師仏世尊（壽命）	[4・9・63]
Iq 一劫国土莊嚴声聞菩薩（正法像法皆悉同）	[4・9・64]
Ir 等爾時世尊欲重宣此義而（說偈言）	[4・9・65]
Is 是二千声聞今於我前住悉皆（与授記未來当成仏）	[4・9・66]
Ja（有如來）全身乃往過去東方無量千万億（阿）	[4・11・22]
Jb（僧祇世）界国名宝淨彼中有仏号曰多宝（其）	[4・11・23]
Jc（仏）本行菩薩道時作大誓願若我成仏滅度	[4・11・24]
Jd 之後於十方国土有說法華經処我之塔廟	[4・11・25]
Je 為聽是經故涌現其前為作証明讚言善哉	[4・11・26]
Jf 彼仏成道已臨滅度時於天人大衆中告諸	[4・11・27]
Jg 比丘我滅度後欲供養我全身者起一大	[4・11・28]
Jh 塔其仏以神通願力十方世界在在処処若	[4・11・29]
Ji 有說法華經者彼之宝塔皆涌出其前全身	[4・11・30]
Jj 在於塔中讚言善哉善哉大衆說今多宝如	[4・11・31]
Jk 來塔聞說法華經故從地涌出讚言善哉善	[4・11・32]
Jl 哉是時大衆說菩薩以如來神力故白仏言	[4・11・33]
Jm 世尊我等願欲見此仏身仏告大衆說菩薩	[4・11・34]
Ka 大海江河及目真鄰陀山摩訶目（真鄰陀山）	[4・11・68]
Kb 鉄閉山大鉄閉山須弥山等諸山王（通為一）	[4・11・69]
Kc 仏国土宝地平正宝交露輦遍覆其（上懸諸）	[4・11・70]
La 議衆（生發）善（提心至不退転仏告諸比丘末）	[5・12・41]
Lb 來世（中若有善男子善女人聞妙法華）經提	[5・12・42]
Lc 婆達（多品淨）心信敬（不生）疑惑者不墮地獄	[5・12・43]
Ld 餓鬼畜（生）生十方仏前所生之處常聞此經	[5・12・44]
Le 若生人天中（受）勝妙（樂）若在仏前蓮華化生	[5・12・45]
261	
[義]善と併記	
[能]は脱字	
[遍]は誤字	

Lf	於時下方多宝世尊所從菩薩名曰智積啓	[5・12・46]
Lg	多宝仏当還本土釈迦牟尼仏告智積曰善	[5・12・47]
Lh	男子且待須臾此有菩薩名文殊師利可與	[5・12・48]
Li	相見論說妙法可還本土爾時文殊師利坐	[5・12・49]
Lj	千葉蓮華大如車輪俱來菩薩亦坐宝蓮華	[5・12・50]
Lk	從於大海婆竭羅電宮自然涌出住虛空中	[5・12・51]
Li	諸靈鷲山從蓮華下(至)於仏前頭面敬礼二	[5・12・52]
Ln	世尊足修敬已畢往智積所共相慰問却坐	[5・12・53]
Lo	(衆)生其數幾何文殊師利言其數無量不(可)	[5・12・54]
Lp	(稱)計非口所宣非心所測且待須臾自有	[5・12・55]
Lq	(証所言)未竟無數菩薩坐宝蓮華從海(涌出)	[5・12・56]
Lr	諸靈(鷲)山(住在虚空)此諸菩薩皆(是文殊師)	[5・12・57]
Ma	(諸比丘尼說是偈已白仏言世)尊我等亦能	[5・12・58]
Mb	(於他方国土廣宣此經)	[5・13・37]
Mc	(爾時世尊視八十萬億那由他)諸菩薩摩訶	[5・13・38]
Md	(薩是諸菩薩皆是阿惟越致軀不)退法輪得	[5・13・39]
Me	(諸陀羅尼即從座起至於仏前)一心合掌而	[5・13・40]
Mf	(作是念若世尊告勸我等持説)此經者當如	[5・13・41]
Mg	(仏教廣宣斯法復作是念仏今)默然不見告	[5・13・42]
Mh	(勸我當云何時諸菩薩敬順仏意)并欲自滿	[5・13・43]
Mi	(本願便於仏前作師子吼而發)誓言世尊我	[5・13・44]
Mj	(等於如来滅後周旋往返十方世界)能令衆	[5・13・45]
Mk	(生書寫此經受持誦誦説其)義如法修行	[5・13・46]
Ml	(正憶念皆是仏之威力唯願世尊)在於他方	[5・13・47]
Mn	(遙見守護即時諸菩薩俱同發)声而説偈言	[5・13・48]
Mo	(唯願不為慮於仏滅度後恐怖惡世中)我等當廣説	[5・13・49]
Mp	(有諸無智人惡口罵詈等及加刀杖者)我等皆當忍	[5・13・50]
Mq	(惡世中比丘邪智心諂曲未得謂為得)我慢心充滿	[5・13・51]
Mr	(或有阿練若衲衣在空閑自謂行真道)輕賤人間者	[5・13・52]
Ms	(貪著利養故与白衣説法為世所恭敬如六通)羅漢	[5・13・53]
Mt	(是人懷惡心常念世俗事假名阿練若好出我)等過過	[5・13・54]
Mu	(而作如是言此諸比丘等為貪利養故分別)説是經	[5・13・55]
Mv		[5・13・56]
Mw		[5・13・57]
Mx		[5・13・58]
My		[5・13・59]
Mz		[5・13・60]
Nn	(常在衆中欲毀我等故向国王大臣)婆羅門居士	[5・13・61]
Na	菩薩常樂(安穩説法於)清淨地而起施(牀座)	[5・13・62]
Nb	以油漆身深(浴)塵穢著新淨衣内外俱淨	[5・13・63]
Nc	安処法座隨(問)為説若有比丘及比丘尼	[5・13・64]
Nd	諸優婆塞(及)優婆夷国王王子群臣士民	[5・13・65]
Ne	以微妙義(和顔)為説若有難(問)隨義而答	[5・13・66]
Nf	因緣譬(喻)敷演分別以是方便皆使發心	[5・13・67]
Ng	漸漸增益入於仏道除憊惰意及懈怠想	[5・13・68]
Nh	離諸憂惱慈心説法昼夜常説無上道教	[5・13・69]
Ni	以諸因緣無量華譬喻開示衆生咸令歡喜	[5・13・70]
Nj	衣服臥具飲食醫藥而於其中無所憚望	[5・13・71]
Nk	但一心念説法因緣願(成仏道)令衆亦爾	[5・13・72]
Nl	是則大利安樂供養我滅(度後)若有比丘	[5・13・73]
Nm	能演説斯妙法華經心(無嫉恚)諸惱障礙	[5・13・74]
Nn	亦無憂愁及罵詈者(又)無怖畏加刀杖等	[5・13・75]
No	亦無擯出安住忍故智者如(是善)修其心	[5・13・76]
Np	能住安樂如我上説其人功(德千)万億劫	[5・13・77]
Nq	算數譬喻説(不能)盡	[5・13・78]
Nr	又文殊(師利善)薩摩訶薩於後(末世)法欲滅	[5・13・79]
Oa	(何此經是一切過)去未(來現在)諸仏神力(所)	[5・13・80]
Ob	護故文殊師利是法(華經)於無量国(中)乃(至)	[5・13・81]
Oc	名字不可得聞何況得見受持誦誦文殊(師)	[5・13・82]
Od	利譬如強力軀輪聖王欲以威勢降伏諸国	[5・13・83]
Oe	而諸小王不順其命時軀輪王起種種兵而	[5・13・84]
Of	往討罰王見兵衆戰有功者即大歡喜隨功	[5・13・85]
Og	賞賜或与田宅聚落城邑或与衣服嚴身之	[5・13・86]
Oh	具或与種種珍宝金銀琉璃磚磤碼磤珊瑚	[5・13・87]
Oi	与之所以者何獨王頂上有此一珠若以与	[5・13・88]
Oj	之王諸眷屬必大驚怪文殊師利如来(亦復)	[5・13・89]
Ok	如是以禪定智慧力得法国土王於三界而	[5・13・90]
Ol	諸魔王不肯順伏如来賢聖諸將与之共戰	[5・13・91]
Om		[5・13・92]
On		[5・13・93]
Oo		[5・13・94]
Op		[5・13・95]
Oq		[5・13・96]
Or		[5・13・97]
Os		[5・13・98]
Ot		[5・13・99]
Ou		[5・13・100]
Ov		[5・13・101]
Ow		[5・13・102]
Ox		[5・13・103]
Oy		[5・13・104]
Oz		[5・13・105]
Pa		[5・13・106]
Pb		[5・13・107]
Pc		[5・13・108]
Pd		[5・13・109]
Pe		[5・13・110]
Pf		[5・13・111]
Pg		[5・13・112]
Pq		[5・13・113]
Pr		[5・13・114]
Ps		[5・13・115]
Pt		[5・13・116]
Pu		[5・13・117]
Pv		[5・13・118]
Pw		[5・13・119]
Px		[5・13・120]
Py		[5・13・121]
Pz		[5・13・122]
Qa		[5・13・123]
Qb		[5・13・124]
Qc		[5・13・125]
Qd		[5・13・126]
Qe		[5・13・127]
Qf		[5・13・128]
Qg		[5・13・129]
Qh		[5・13・130]
Qi		[5・13・131]
Qj		[5・13・132]
Qk		[5・13・133]
Ql		[5・13・134]
Qm		[5・13・135]
Qn		[5・13・136]
Qo		[5・13・137]
Qp		[5・13・138]
Qq		[5・13・139]
Qr		[5・13・140]
Qs		[5・13・141]
Qt		[5・13・142]
Qu		[5・13・143]
Qv		[5・13・144]
Qw		[5・13・145]
Qx		[5・13・146]
Qy		[5・13・147]
Qz		[5・13・148]
Ra		[5・13・149]
Rb		[5・13・150]
Rc		[5・13・151]
Rd		[5・13・152]
Re		[5・13・153]
Rf		[5・13・154]
Rg		[5・13・155]
Rh		[5・13・156]
Ri		[5・13・157]
Rj		[5・13・158]
Rk		[5・13・159]
Rl		[5・13・160]
Rm		[5・13・161]
Rn		[5・13・162]
Ro		[5・13・163]
Rp		[5・13・164]
Rq		[5・13・165]
Rr		[5・13・166]
Rs		[5・13・167]
Rt		[5・13・168]
Ru		[5・13・169]
Rv		[5・13・170]
Rw		[5・13・171]
Rx		[5・13・172]
Ry		[5・13・173]
Rz		[5・13・174]
Sa		[5・13・175]
Sb		[5・13・176]
Sc		[5・13・177]
Sd		[5・13・178]
Se		[5・13・179]
Sf		[5・13・180]
Sg		[5・13・181]
Sh		[5・13・182]
Si		[5・13・183]
Sj		[5・13・184]
Sk		[5・13・185]
Sl		[5・13・186]
Sm		[5・13・187]
Sn		[5・13・188]
So		[5・13・189]
Sp		[5・13・190]
Sq		[5・13・191]
Sr		[5・13・192]
Ss		[5・13・193]
St		[5・13・194]
Su		[5・13・195]
Sw		[5・13・196]
Sx		[5・13・197]
Sy		[5・13・198]
Sz		[5・13・199]
Ta		[5・13・200]
Tb		[5・13・201]
Tc		[5・13・202]
Td		[5・13・203]
Te		[5・13・204]
Tf		[5・13・205]
Tg		[5・13・206]
Th		[5・13・207]
Ti		[5・13・208]
Tj		[5・13・209]
Tk		[5・13・210]
Tl		[5・13・211]
Tm		[5・13・212]
Tn		[5・13・213]
To		[5・13・214]
Tp		[5・13・215]
Tq		[5・13・216]
Tr		[5・13・217]
Ts		[5・13・218]
Tt		[5・13・219]
Tu		[5・13・220]
Tv		[5・13・221]
Tw		[5・13・222]
Tx		[5・13・223]
Ty		[5・13・224]
Tz		[5・13・225]
Ua		[5・13・226]
Ub		[5・13・227]
Uc		[5・13・228]
Ud		[5・13・229]
Ue		[5・13・230]
Uf		[5・13・231]
Ug		[5・13・232]
Uh		[5・13・233]
Ui		[5・13・234]
Uj		[5・13・235]
Uk		[5・13・236]
Ul		[5・13・237]
Um		[5・13・238]
Un		[5・13・239]
Uo		[5・13・240]
Up		[5・13・241]
Uq		[5・13・242]
Ur		[5・13・243]
Us		[5・13・244]
Ut		[5・13・245]
Uu		[5・13・246]
Uv		[5・13・247]
Uw		[5・13・248]
Ux		[5・13・249]
Uy		[5・13・250]
Uz		[5・13・251]
Va		[5・13・252]
Vb		[5・13・253]
Vc		[5・13・254]
Vd		[5・13・255]
Ve		[5・13・256]
Vf		[5・13・257]
Vg		[5・13・258]
Vh		[5・13・259]
Vi		[5・13・260]
Vj		[5・13・261]
Vk		[5・13・262]
Vl		[5・13・263]
Vm		[5・13・264]
Vn		[5・13・265]
Vp		[5・13・266]
Vq		[5・13・267]
Vr		[5・13・268]
Vs		[5・13・269]
Vt		[5・13・270]
Vu		[5・13・271]
Vv		[5・13・272]
Vw		[5・13・273]
Vx		[5・13・274]
Vy		[5・13・275]
Vz		[5・13・276]
Wa		[5・13・277]
Wb		[5・13・278]
Wc		[5・13・279]
Wd		[5・13・280]
We		[5・13・281]
Wf		[5・13・282]
Wg		[5・13・283]
Wh		[5・13・284]
Wi		[5・13・285]
Wj		[5・13・286]
Wk		[5・13・287]
Wl		[5・13・288]
Wm		[5・13・289]
Wn		[5・13・290]
Wo		[5・13・291]
Wp		[5・13・292]
Wq		[5・13・293]
Wr		[5・13・294]
Ws		[5・13・295]
Wt		[5・13・296]
Wu		[5・13・297]
Wv		[5・13・298]
Ww		[5・13・299]
Wx		[5・13・300]
Wy		[5・13・301]
Wz		[5・13・302]
Xa		[5・13・303]
Xb		[5・13・304]
Xc		[5・13・305]
Xd		[5・13・306]
Xe		[5・13・307]
Xf		[5・13・308]
Xg		[5・13・309]
Xh		[5・13・310]
Xi		[5・13・311]
Xj		[5・13・312]
Xk		[5・13・313]
Xl		[5・13・314]
Xm		[5・13・315]
Xn		[5・13・316]
Xo		[5・13・317]
Xp		[5・13・318]
Xq		[5・13・319]
Xr		[5・13・320]
Xs		[5・13・321]
Xt		[5・13・322]
Xu		[5・13・323]
Xv		[5・13・324]
Xw		[5・13・325]
Xx		[5・13・326]
Xy		[5・13・327]
Xz		[5・13・328]
Ya		[5・13・329]
Yb		[5・13・330]
Yc		[5・13・331]
Yd		[5・13・332]
Ye		[5・13・333]
Yf		[5・13・334]
Yg		[5・13・335]
Yh		[5・13・336]
Yi		[5・13・337]
Yj		[5・13・338]
Yk		[5・13・339]
Yl		[5・13・340]
Ym		[5・13・341]
Yn		[5・13・342]
Yo		[5・13・343]
Yp		[5・13・344]
Yq		[5・13・345]
Yr		[5・13・346]
Ys		[5・13・347]
Yt		[5・13・348]
Yu		[5・13・349]
Yv		[5・13・350]
Yw		[5・13・351]
Yx		[5・13・352]
Yy		[5・13・353]
Yz		[5・13・354]
Za		[5・13・355]
Zb		[5・13・356]
Zc		[5・13・357]
Zd		[5・13・358]
Ze		[5・13・359]
Zf		[5・13・360]
Zg		[5・13・361]
Zh		[5・13・362]
Zi		[5・13・363]
Zj		[5・13・364]
Zk		[5・13・365]
Zl		[5・13・366]
Zm		[5・13・367]
Zn		[5・13・368]
Zo		[5・13・369]
Zp		[5・13・370]
Zq		[5・13・371]
Zr		[5・13・372]
Zs		[5・13・373]
Zt		[5・13・374]
Zu		[5・13・375]
Zv		[5・13・376]
Zw		[5・13・377]
Zx		[5・13・378]
Zy		[5・13・379]
Zz		[5・13・380]

C、石製品（第33図）

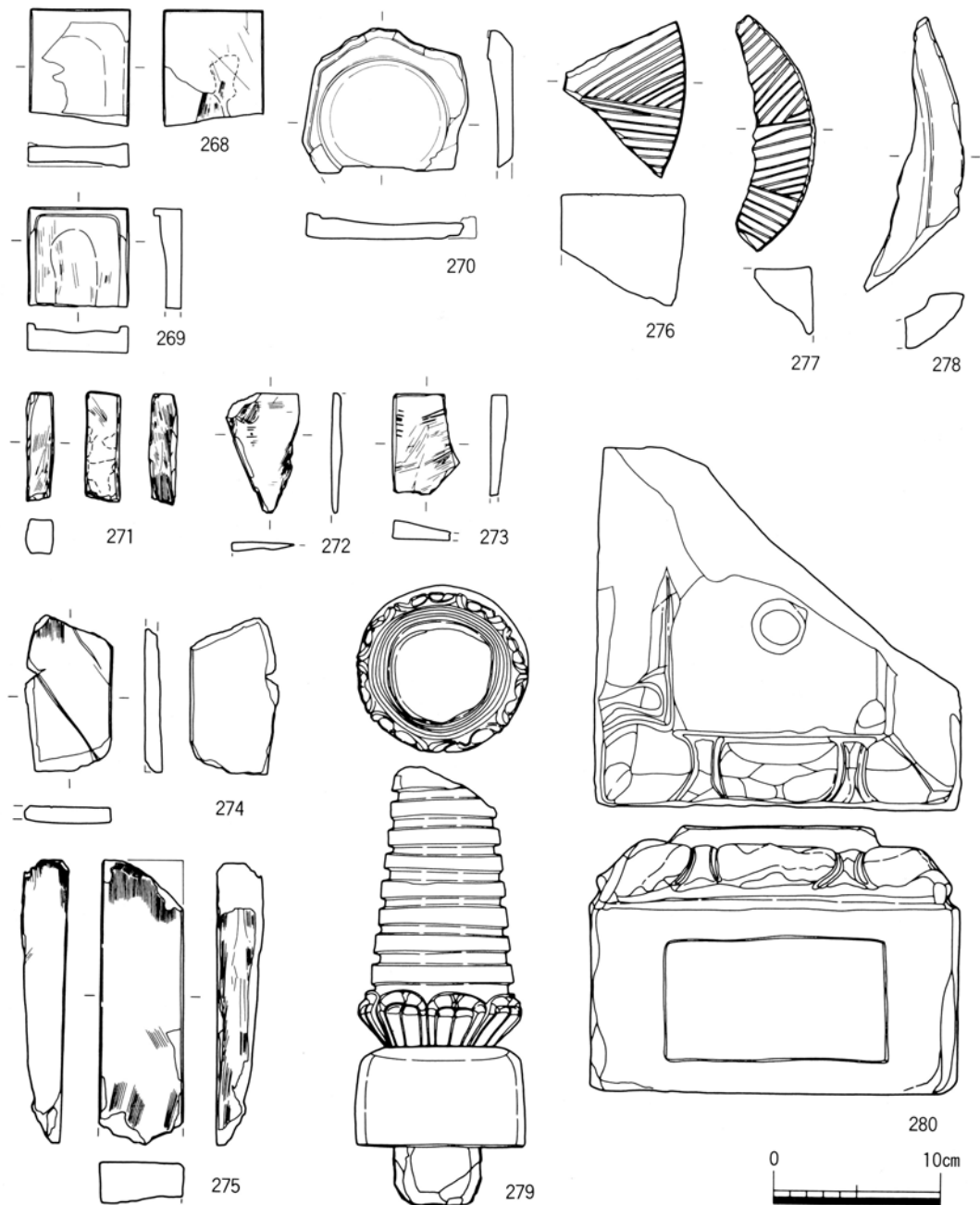
石製品には、硯、砥石、臼、墓塔類がある。ここでは出土量が少ないため、種別に記載する。

硯 硯は長方硯（268・269）と不定形硯（270）がある。268の裏面には微細な傷が存在する。

砥石 砥石はいずれも石材が精良な仕上砥石と思われる。271は平面形が長方形・断面形が方形を呈する小形のものである。272～274は薄い板状の砥石である。275は細長い長方形のやや大形の砥石である。

臼 臼は花崗岩製の挽臼の他、茶臼と呼ばれる比較的精良なものが出土した。276・277は上臼か下臼かは不明である。278は茶臼の下臼で受け皿の部分である。

墓塔類 墓塔類は宝篋印塔の台部と九輪部が存在する。特に279はS K 110の底部から単独で出土した宝篋印塔の九輪部である。280は上部に蓮弁紋を施したものである。（鈴木正貴）



第33図 遺物実測図(12) 城下町期：石製品

第3節 近世の遺物

A、概要

近世の出土遺物は、陶磁器類を主体に土器類・瓦類・石製品・金属製品が出土している。表土や包含層ばかりではなく、井戸や土坑などから一括して出土する場合も多数認められた。ここでは遺構毎に、陶磁器類と土器類を中心に紹介し、その概要を記述する。なお、石製品・金属製品は近世に所属するものもあると思われるが、城下町期と区分が難しく遺構に伴わない場合も多いため、近世の石製品・金属製品としてはあえて報告しないこととした。また、木製品は遺存状況が不良であったためか、全く出土しなかった。

陶磁器類は肥前窯産の磁器・瀬戸美濃窯産の磁器や陶器・常滑窯産のいわゆる赤物と呼ばれる陶器・土師器の鍋類などがある。統計的な分析は行っていないが、おそらく、瀬戸美濃窯産の陶器類が量的に多く出土していると思われる。また、時期的には17世紀後半から18世紀に属する遺物も一定量が見られるが、瀬戸美濃窯産の磁器等の19世紀に所属する遺物も多数見られること等から、この調査区の近世における主体は、近世後期にあるものと考えられよう。

また、近世の遺物の分布状況であるが、調査区によって顕著な差が認められる。91D区・91E区・92A区・92B区では近世の遺物が比較的多く出土しているのに対し、逆に89G区・90G区・90H区・90I区といった美濃街道から離れた現在水田や畑となっている地点では、それほど多くの遺物は出土していない。

B、遺構出土遺物

S K 055（第34図－281～289） 肥前窯産の磁器類や瀬戸美濃窯産の陶器類・土師器の炮烙鍋が出土した。281・282は見込み部に五弁花紋が描かれた外面に青磁釉を施した磁器碗である。283・284は呉須を掛けた瀬戸美濃窯産の小碗（湯呑）である。289は底部にスタンプを押印した土師器の炮烙鍋で外面の下半部にヘラケズリが施されている。時期は18世紀末から19世紀前半と考えられよう。

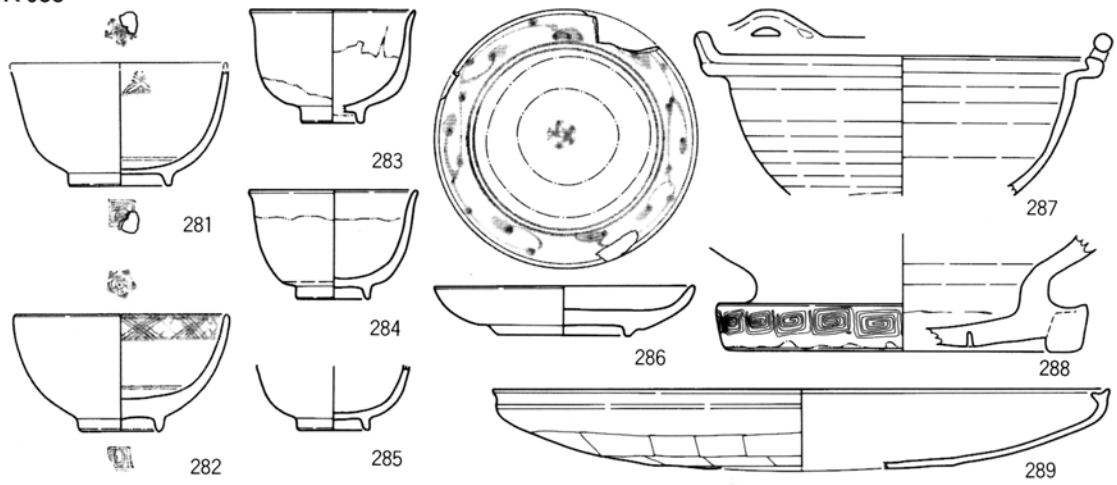
S E 001（第34図－290～302） 肥前窯産の磁器類や瀬戸美濃窯産の磁器類・陶器類が出土している。器種的には碗・皿が主体を占めるが、瓶（301）、土瓶（300）、花瓶（302）、仏飯具（299）、蛸唐草紋を施した肥前窯産の蓋（297・298）なども存在している。碗は丸碗が多数を占めるが、筒形碗（294）も認められる。コバルトを用いた摺絵が施された瀬戸美濃窯産の磁器碗（290）などから、19世紀後半に位置づけられよう。

S E 003（第34図－307） 307は口紅を施した肥前窯産の磁器杯で、高台内に成化年製と記されている。

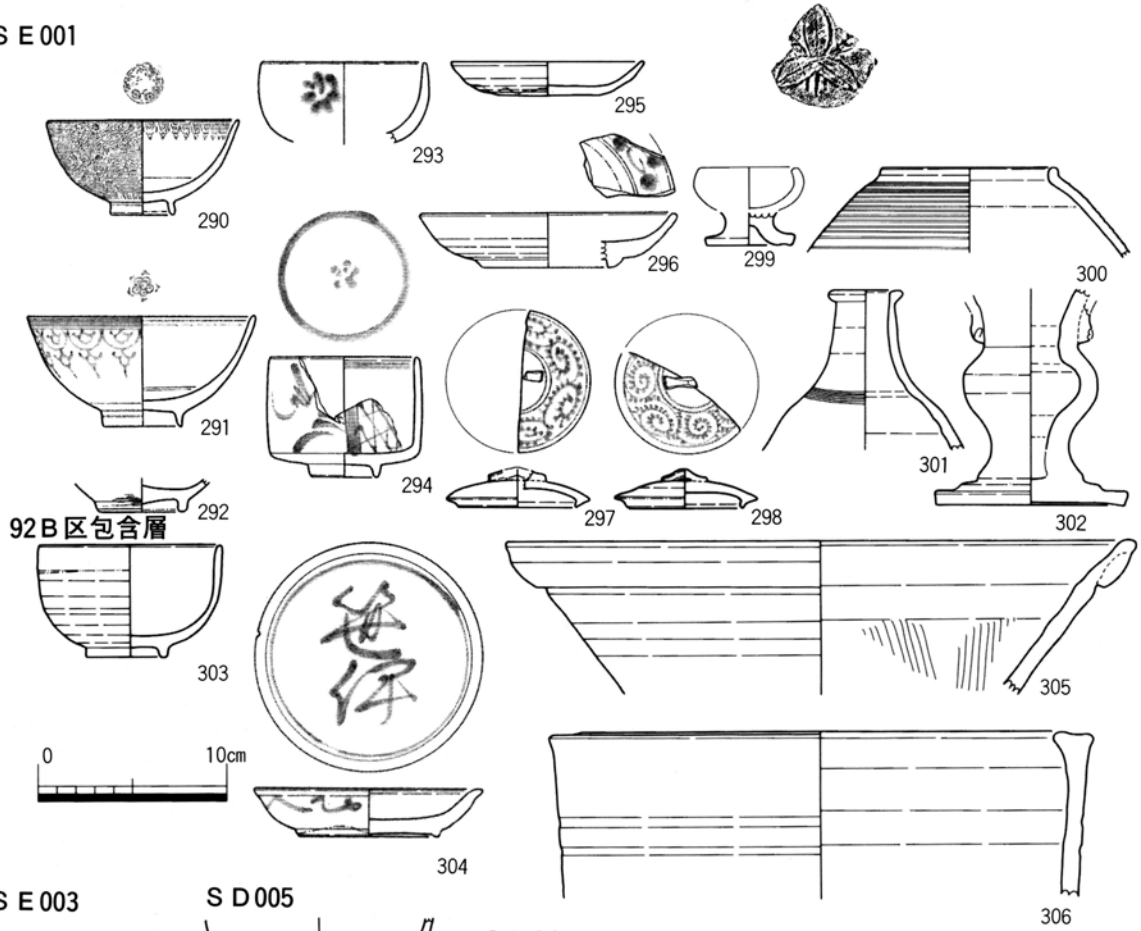
S D 005（第34図－308・309） 瀬戸美濃窯産の陶器が少量出土した。香炉（308）や汁次（309）等の器種がある。

S K 042（第34図－310） 瀬戸美濃窯産の陶器播鉢（310）が出土し、口縁部の形態から18世紀前半に位置づけられる遺物である。（鈴木正貴）

S K 055



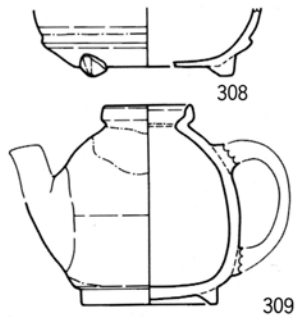
S E 001



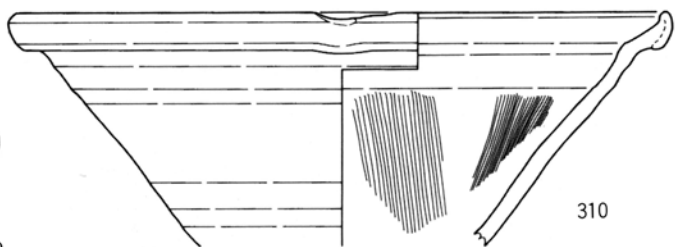
S E 003



S D 005



S K 042



第34図 遺物実測図(13) 近世

第Ⅳ章 まとめ



第Ⅳ章 まとめ 目次

第1節	古代集落の変遷	39
第2節	城下町期以降の遺構変遷 ...	40
第3節	まとめ	40

第1節 古代集落の変遷

今回の調査では主として古代と城下町期で大きな成果を得た。本章ではこの2時期について取り上げ、遺構の変遷を概観し、まとめとしたい。

今回の調査区で検出された古代の主な遺構・遺物を列挙すると、以下の3点があげられる。

- ①古墳時代後期以降（7世紀代）の溝を追認した。
- ②8世紀を中心とする竪穴住居群が91E区・92B区で検出され、集落の西の範囲が確定された。
- ③これまで確認されなかった9世紀中葉から後葉の資料を得た。

これらに報告書が既に完了している『清洲城下町遺跡Ⅰ』1987清洲町教育委員会と『清洲城下町遺跡』1990(財)愛知県埋蔵文化財センターの成果を加えて、各時期の遺構分布の変遷を概観したい。

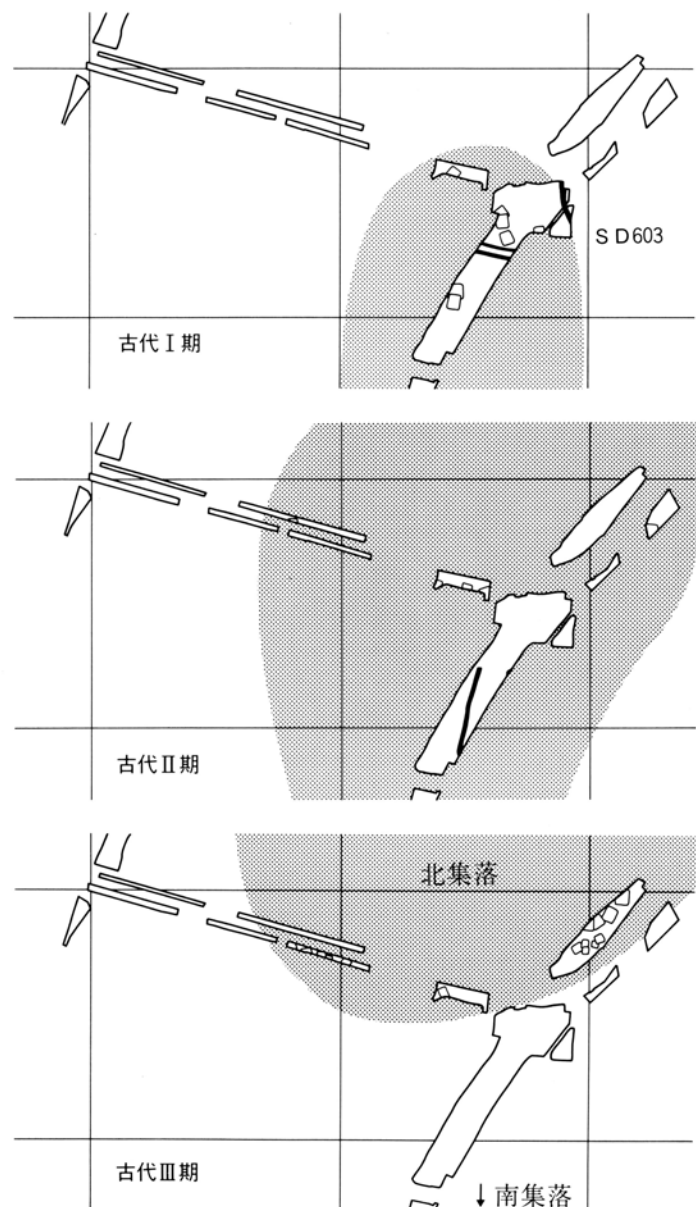
『清洲城下町遺跡』1990では、遺構の時期区分をⅠ期（遺物の1期・2期）・Ⅱ期（遺物の3期～5期）・Ⅲ期（遺物の6期）とした。今回の調査で新たに遺物の時期区分で7期を追加したため、これをⅢ期に含めて検討する（第35図）。

Ⅰ期は居住域を画するS D 603を検出したのみで、91E区・92B区以西で遺構が存在しないことから、この時期の遺構分布は62E区を限りとしていたと考えられる。

Ⅱ期は91E区・92B区で竪穴住居が検出され、Ⅰ期に比べ集落は北へ拡大していたことが追認された。こうした状況は『清洲城下町遺跡』1990で明らかなように、Ⅱ-2期で顕著であった。

Ⅲ期は集落が二分された時期である。91E区で遺物の7期の遺構を確認したこと等から、今回の調査区は、北集落の南端部に該当し、集落の存続期間も10世紀前葉まで継続していたことが明らかとなった。

（鈴木正貴）



第35図 遺構変遷図(1) 古代集落の変遷

第2節 城下町期以降の遺構変遷

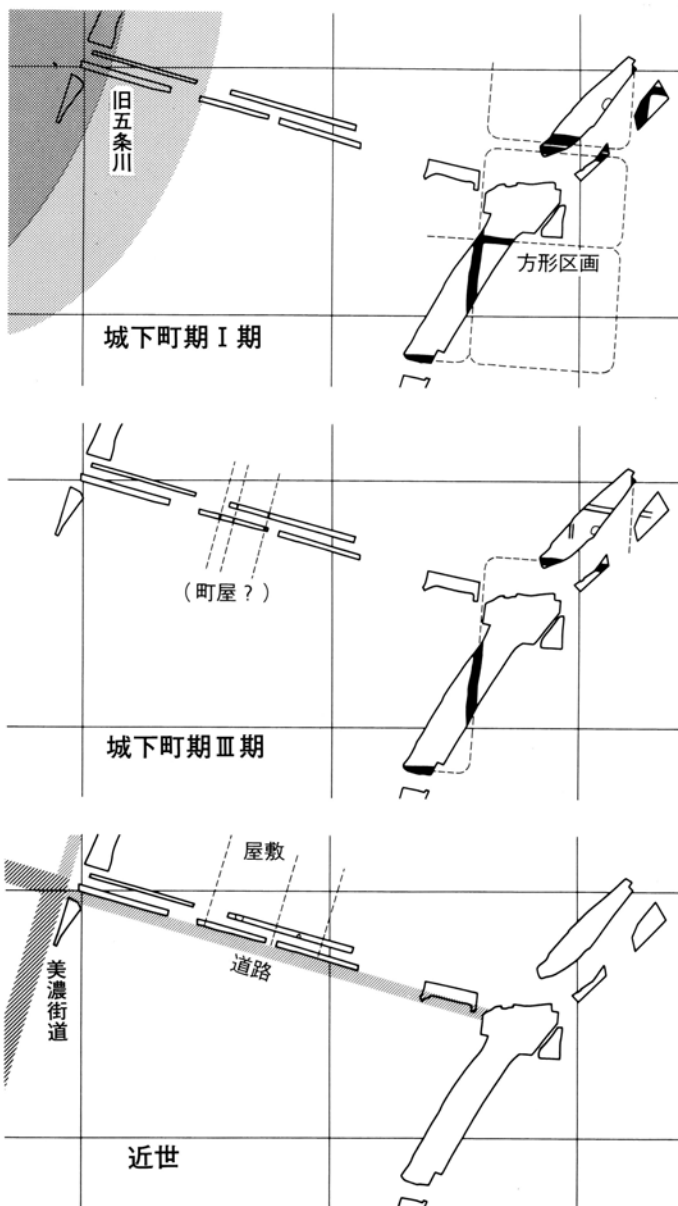
城下町期はこれまで前期（1478～1586）と後期（1586～1613）に区分されてきた。この他に『清洲城下町遺跡Ⅳ』1994では遺物の検討から前期を二分してⅢ期区分を呈示している。ここでは、後者の時期区分を踏襲し、近世の状況も併せて記述する。

城下町期Ⅰ期は、西部が旧五条川、東部は居住域であったと言える。調査区東部の遺構展開は、以前の調査で幅3～5mの区画溝で囲まれた約40m四方の方形屋敷があったと考えられる。今回の調査では、調査不能地点に遺構存在が予想されるものの、区画溝や建物等の明確な遺構が発見されなかった。

旧五条川と方形屋敷群の間は空白地が広がっていたかもしれない。

城下町期Ⅱ期には旧五条川が埋積し、城下町期Ⅲ期になると比較的規模の小さな溝や建物が検出されている。溝の規模・遺構の配置等から推定すると、町屋に相当する屋敷が考えられよう。

清須越以降はしばらく遺構・遺物が希薄になる。19世紀になると井戸などが作られ屋敷が展開した事が判明している。井戸は現道に並行して点在しており、美濃街道が屈曲する延長線上の道路に面して短冊型地割の屋敷が展開したと考えられる。このことは清洲宿場町の拡大を示していると思われる。（鈴木正貴）



第36図 遺構変遷図(2) 城下町期以降の変遷

第3節 まとめ

今回の調査区は狭小な面積であったが、得られた成果は古代集落や戦国城下町の研究に対しての資料を追加したといえる。また『清洲城下町遺跡』1990地点と五条川関連地点との成果をつなぐ意味で重要な意義を持っている。この重要性を十分に記述できなかったが、今後の研究の深化を期待したい。

付 表

1. 遺構一覧表

凡例 1. 計測値はmで表示し、頭に「残」と記したものは残存した部分の数値を示す。

2. 時期は古代を「古」、中世を「中」、城下町期を「城」、近世を「近」と略した。

遺構番号	調査区	旧遺構番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
Pit001	92A	Pit54	IVG20e	0.19	0.17	0.06	—
Pit002	92A	Pit53	VG1g	残0.35	0.27	0.06	—
Pit003	92A	Pit51	VG2i	残0.33	残0.22	残0.04	—
Pit004	92B	—	VG3n	0.29	0.27	?	—
Pit005	92B	Pit10	VG3-4p	0.33	0.31	0.31	城
Pit006	92B	—	VG4p	0.37	0.35	0.05	—
Pit007	92B	Pit09	VG4q	0.35	0.27	0.26	城Ⅰ2
Pit008	92B	Pit08	VG4q	0.31	0.30	0.20	城Ⅱ2
Pit009	92B	Pit07	VG4r	残0.33	残0.28	残0.22	城Ⅰ
Pit010	92B	—	VG4r	残0.36	残0.30	残*0.28	—
Pit011	92B	Pit06	VG4r	残0.37	残0.21	残0.08	城
Pit012	92B	Pit05	VG4r	残0.37	残0.18	残*0.39	城
Pit013	92B	Pit02	VG4r	0.30	0.21	0.50	城
Pit014	92B	Pit45	VG5t	0.39	0.34	0.07	—
Pit015	91D	—	VG2g	残0.32	残0.15	残0.06	—
Pit016	91E	—	VG4l	0.22	0.21	?	—
Pit017	91E	—	VG4l	0.34	0.30	?	—
Pit018	91E	—	VG5r	残0.33	残0.31	残0.11	—
Pit019	91E	—	VG5r	残0.31	残0.22	?	—
Pit020	91E	SK33	VG5rs	残0.35	残0.27	残0.09	城
Pit021	91E	—	VG6t	残0.30	残0.25	残0.08	—
Pit022	91E	—	VG6t	0.21	0.21	0.01	—
Pit023	91E	—	VH6a	0.15	残0.09	0.06	—
Pit024	91E	—	VH6a	0.26	0.20	0.29	—
Pit025	91E	—	VH6a	残0.16	残0.14	?	—
Pit026	91E	—	VH6a	残0.15	残0.15	?	—
Pit027	91E	—	VH6ab	0.30	残0.24	残0.13	—
Pit028	91E	—	VH6-7a	0.29	0.24	0.08	—
Pit029	91E	—	VH6b	残0.31	残0.12	残0.06	—
Pit030	91E	—	VH6b	0.32	0.27	0.17	—
Pit031	91E	—	VH6b	残0.29	0.21	?	—
Pit032	91E	—	VH6b	残0.27	0.23	残0.08	—
Pit033	91E	—	VH6b	残0.37	残0.31	?	—
Pit034	91E	—	VH6b	残0.24	残0.10	?	—
Pit035	91E	—	VH7b	0.31	0.22	0.10	—
Pit036	91E	—	VH7b	残0.30	0.24	残0.09	—
Pit037	91E	Pit05	VH7b	0.33	0.28	0.12	—
Pit038	91E	Pit03	VH7b	0.26	0.22	0.13	城
Pit039	91E	Pit02	VH7b	0.38	0.23	0.22	—
Pit040	91E	—	VH7b	0.30	0.18	0.03	—
Pit041	91E	—	VH7b	残0.36	0.21	?	—
Pit042	91E	—	VH7b	0.36	0.27	0.12	—
Pit043	91E	—	VH7b	0.33	残0.17	残0.11	—
Pit044	91E	—	VH7b	0.27	0.24	0.15	—
Pit045	91E	—	VH7b	残0.30	残0.25	残0.09	—
Pit046	91E	—	VH7b	0.20	0.17	0.07	—
Pit047	91E	—	VH7b	0.31	0.31	0.17	—
Pit048	91E	—	VH7b	0.27	0.23	0.09	—
Pit049	91E	—	VH7b	残0.22	残0.19	残0.11	—
Pit050	91E	—	VH7b	0.25	0.20	0.12	—
Pit051	91E	—	VH7b	残0.38	残0.25	残0.07	—
Pit052	91E	—	VH7b	0.20	残0.19	残0.11	—
Pit053	91E	SK26	VH7bc	残0.38	残0.16	残0.18	古
Pit054	91E	—	VH7b	残0.31	残0.17	残0.08	—
Pit055	91E	—	VH7b	残0.21	残0.09	残0.13	—
Pit056	91E	—	VH7bc	残0.24	0.21	残0.04	—
Pit201	92A	Pit81	IVG19a	0.33	0.32	0.23	—
Pit202	92A	Pit74	VG1f	0.20	0.18	0.08	城
Pit203	92A	—	VG1gh	0.37	0.32	0.07	—
Pit204	92B	Pit37	VG2i	0.37	0.35	0.11	—

遺構番号	調査区	旧遺構番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
Pit205	92B	Pit34	VG3l	残0.31	0.16	残0.09	城
Pit206	92B	Pit33	VG3l	0.27	0.23	0.30	城Ⅰ
Pit207	92B	Pit32	VG3l	0.35	0.25	0.19	城
Pit208	92B	Pit49	VG3l	0.33	0.32	0.24	城
Pit209	92B	Pit35	VG3l	0.16	0.12	0.20	—
Pit210	92B	Pit31	VG3l	残0.22	0.17	残0.14	城
Pit211	92B	Pit39	VG2-3m	残*0.50	残0.09	残*0.46	—
Pit212	92B	Pit40	VG3m	0.20	0.17	0.17	城
Pit213	92B	Pit41	VG3m	残0.23	残0.22	残0.25	城
Pit214	92B	Pit59	VG3p	0.29	0.22	?	中
Pit215	92B	Pit61	VG3p	残*0.34	残0.19	残*0.36	—
Pit216	92B	Pit30	VG3p	0.27	0.25	0.22	—
Pit217	92B	Pit29	VG4q	残0.28	0.23	残*0.28	—
Pit218	92B	Pit28	VG4q	残0.27	残0.19	残0.26	—
Pit219	92B	Pit26	VG4q	残0.34	残0.18	残0.10	城
Pit220	92B	Pit62	VG4q	0.28	0.22	0.22	城
		Pit70					
Pit221	92B	Pit24	VG4r	0.28	0.24	0.29	城Ⅰ—Ⅱ
		Pit63					
Pit222	92B	—	VG4r	残0.39	残0.26	?	—
Pit223	92B	Pit22	VG4r	0.20	0.20	0.22	城
Pit224	92B	Pit23	VG4r	0.33	0.31	0.25?	城
		Pit72					
Pit225	92B	Pit21	VG4r	残0.39	残0.29	残0.11	—
Pit226	92B	Pit20	VG4r	0.31	0.27	0.22	城
Pit227	92B	Pit19	VG4s	0.25	0.21	0.22	—
Pit228	92B	Pit18	VG4s	残0.36	残0.16	残0.10	—
Pit229	92B	Pit47	VG5t	0.28	0.23	0.05	—
Pit230	91E	—	VG4l	残0.39	残0.24	残0.10	—
Pit231	91E	Pit01	VG4l	0.14	0.13	0.08	—
Pit232	91E	—	VG4l	残0.25	残0.24	残0.21	—
Pit233	91E	SK107	VG4l	0.38	0.28	0.28	城
Pit234	91E	—	VG4l	0.10	0.10	0.20	—
Pit235	91E	SK110	VG4m	残0.37	残0.22	残*0.51	城
Pit236	91E	—	VG4n	0.26	0.26	0.19	—
Pit237	91E	—	VG4o	0.33	0.30	0.07	—
Pit238	91E	—	VG4o	残0.30	残0.20	残0.14	—
Pit239	91E	—	VG6s	0.27	0.25	0.09	—
Pit240	91E	—	VG6s	0.27	0.20	0.08	—
Pit241	91E	—	VG6s	残0.32	残0.27	残0.16	—
Pit242	91E	—	VG6s	0.13	0.13	0.06	—
Pit243	91E	—	VG6t	0.29	0.25	0.12	—
Pit244	91E	—	VG6t	0.23	残0.15	0.13	—
Pit245	91E	—	VG6t	0.26	0.25	0.89?	—
Pit246	91E	—	VH6a	残0.36	残0.25	?	—
Pit247	91E	—	VH6a	0.21	0.18	?	—
Pit248	91E	—	VH6a	残0.24	残0.14	?	—
Pit249	91E	—	VH6a	0.33	残0.24	?	—
Pit250	91E	—	VH6a	残0.31	残0.21	?	—
Pit401	92A	Pit88	IVG20e	0.36	0.33	0.10	—
Pit402	92A	Pit89	VG1g	0.15	0.09	0.11	—
Pit403	92A	Pit90	VG1h	残*0.33	0.25	残*0.33	城Ⅰ2
Pit404	92B	—	VG4p	残0.36	残0.30	残0.07	—
Pit405	92B	Pit69	VG4q	0.22	0.14	0.10	古
Pit406	92B	Pit71	VG4r	0.27	0.26	0.05	古
Pit407	92B	Pit77	VG4r	残0.39	残0.21	?	—
Pit408	92B	Pit75	VG4r	残0.37	残0.17	残0.12	—
Pit409	91E	Pit202	VG3k	0.29	0.21	?	城
Pit410	91E	—	VG6s	0.35	0.35	0.08	—
Pit411	91E	SK203	VG6s	残0.39	残0.35	残0.27	古

遺構番号	調査区	旧遺構番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
Pit412	91E	—	V G6t	0.30	0.29	0.16	—
Pit502	91E	—	V G6t	残0.35	0.29	0.11	—
Pit502	91E	—	V H6b	0.20	0.19	0.09	—
Pit601	90H	—	V H14s	0.32	0.30	?	—
Pit602	89G	Pit02	V H19-20e	残0.36	0.36	残0.12	—
Pit603	89G	Pit01	V H20e	残0.30	0.30	残0.17	城
Pit604	89G	Pit05	V H20e	0.26	0.23	?	—
SA001	91E	—	V G4klm	8.62			城
SB401	92B	SB01	V G4pq	3.63	残1.76	*0.46	古7
SB402	91E	SB205	V G5qr, 6r	残1.95	?	*0.39	古7
SB403	91E	SB201	V G5-6s	3.50	残2.40	*0.32	古6
SB404	91E	SB202	V G6st	残2.74	残0.85	0.16	古6
SB405	91E	SB203	V G6st	残3.77	残1.14	*0.42	—
SB406	91E	SB204	V G6t, V H6a	残1.27	?	0.11	古5～6
SB407	91E	SK206	V H7b	残2.40	残1.55	残0.28	—
SB501	91E	SB301	V G5pq	残3.09	残2.85	*0.50	古6
SB502	91E	SB302	V G5q, 5-6r	残4.33	残2.68	*0.56	古6
SB503	91E	SB401	V G5-6s, 6t	残2.47	残1.68	*0.17	—
SB504	91E	SB402	V G6st	残3.23	残2.51	*0.24	—
SB505	91E	SB303	V G6st	残3.39	残2.20	0.06	古5
SB506	91E	SB304	V G6t	残1.02	残1.01	0.17?	古6
SB507	91E	SB403	V G6t, V H6a	残2.72	残0.98	0.13	古4
SB508	91E	SB404	V H6-7b	残3.74	残1.04	*0.35	—
SB601	90G	SB01	V H9hi	残3.75	残3.56	?	古3
SB602	90G	SB02	V H9hi	推4.38	3.61	*0.34	古6
SB603	90G	SB03	V H9ij	推4.38	残3.59	残*0.38	古2
SB604	90G	SB04	V H9jk	残2.84	残1.85	0.11	古4
SB605	90G	SB05	V H9k	2.67	残2.02	0.13	古
SB606	90G	SB06	V H9-10kl	残5.98	5.08	0.17	古3
SB607	90H	SB01	V H12s	残1.35	残1.31	0.18	古
SB608	90H	SB02	V H14rs	残2.92	残1.37	0.21	—
SB609	90H	SB03	V H13-14r	残5.49	残3.33	0.23	—
SB610	89G	SB01	V H20de	残2.39	残1.06	*0.27	—
SD001	92B	—	V G3op	残1.32	0.59	*0.49	—
SD002	92B	SD04	V G3p, 4pq	残6.92	0.62	*0.27	城
SD003	92B	SD03	V G4rs	残4.76	残1.02	0.34	城ⅠⅠ
SD004	91D	SD02	V G2ef	2.24	0.26	0.13	城
SD005	91D	SD01	V G2f	残2.19	0.57	*0.43	城
SD006	91D	SD03	V G2fg	残6.85	残0.28	残0.33	城ⅢⅠ
SD007	91E	SD02	V G3-4k, 3l	残1.85	*1.29	*0.60	城
SD008	91E	SD05	V G4lm	残1.68	0.78	*0.23	城
SD009	91E	SD03	V G4-5o	残1.64	*1.45	*0.76	近
SD201	92B	SD05	V G4rs, 5s	残2.28	残0.48	残0.18	—
SD202	91E	SD101	V G3-4kl	残1.72	*1.37	*0.52	城ⅡⅠ
SD203	91E	SD102	V G6s	残1.51	残*2.97	残*0.18	古6
SD401	92B	SD08	V G4q	残1.53	残0.75	残*0.20	城ⅡⅠ
SD402	91E	SD201	V G5q	残1.58	残2.00	*0.55	—
SD501	91E	SD302	V G6t, V H6-7ab	残1.36	推5.00	*0.52	—
SD502	91E	SD301	V H7bc	残1.29	残1.75	0.37	古5～6
SD601	90G	SD01	V H9i	残1.29	0.56	*0.39	—
SD602	90G	SD02	V H9i	残0.67	0.51	0.07	—
SD603	90H	SD01	V H12-13s	残4.66	1.92	*0.54	古2
SD604	90I	SD01	V H19fg	残5.52	0.65	0.17	城ⅡⅠ
SD605	89G	SD01	V H19-20ef	残3.22	4.60	0.19	城
SD606	89G	SD02	V H20e	残1.15	0.33	0.10	—
SE001	92B	SE02	V G3mn	残*5.25	残1.93		近
SE002	92B	SK01	V G4r	残2.09	残2.07	?	近
SE003	92B	SE01	V G4-5s	残3.30	残2.55		近
SK001	92A	SK46	V G19a	残*1.00	残0.36	残*0.48	城
SK002	92A	Pit64	V G19a	残0.53	残0.51	0.26	城
SK003	92A	SK45	V G19ab	残*1.53	残0.41	残*0.57	城ⅠⅡ
SK004	92A	SK44	V G19b	残*1.34	残0.42	残*0.79	城Ⅰ
SK005	92A	Pit67	V G19b	残*1.52	残0.20	残*0.70	城
SK006	92A	SK47	V G20b	残1.60	残0.25	残0.39	—
SK007	92A	SK68	V G20c	残*1.32	残0.41	残*0.52	城ⅠⅡ
SK008	92A	SK67	V G20cd	残1.54	残0.45	0.11	—
SK009	92A	SK66	V G20d	残1.51	1.08	残*0.41	城
SK010	92A	SK65	V G20de	残*3.19	残0.31	残*0.75	城ⅠⅠ

遺構番号	調査区	旧遺構番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SK011	92A	SK64	V G20e	残*1.68	残0.49	残*0.68	城
SK012	92A	SK63	V G20e, V G1e	1.37	0.67	0.14	城Ⅲ
SK013	92A	SK61	V G20ef, V G1ef	残*1.36	残0.67	残*0.56	城ⅠⅠ
SK014	92A	SK62	V G20e, V G1e	残2.81	残0.17	残0.18	城
SK015	92A	SK60	V G20f, V G1f	残0.73	残0.34	残0.08	城
SK016	92A	SK59	V G1f	残0.70	残0.35	残0.16	城
SK017	92A	Pit52	V G1g	残*1.85	残0.27	残*0.78	城ⅠⅡ
SK018	92A	SK72	V G1h	残*1.60	残2.07	残*1.06	城ⅠⅡ
SK019	92A	SK58	V G1h	残1.45	残0.80	残0.16	城
SK020	92A	SK57	V G1h	残1.14	残0.98	残0.70	城ⅡⅠ
SK021	92A	SK55	V G1h	残1.30	残0.47	残*0.34	城ⅡⅠ
SK022	92A	SK54	V G1h	残1.11	残0.67	残*0.38	城ⅠⅠ
SK023	92A	SK56	V G1h	残0.75	残0.64	残0.12	城
SK024	92A	SK53	V G1-2i	*1.45	残0.68	残*0.93	城Ⅲ
SK025	92A	SK52	V G1-2i	0.92	0.46	0.41	城ⅡⅠ
SK026	92A	SK43	V G2i	残*0.86	残0.56	残*0.35	城ⅠⅡ
SK027	92A	Pit50	V G2i	残*0.61	残0.26	残*0.24	城ⅡⅠ
SK028	92A	SK42	V G2i	残1.70	残0.85	残0.20	城ⅠⅡ
SK029	92B	Pit15	V G2i	残0.39	残0.23	残*0.63	城
SK030	92B	Pit14	V G2i	0.42	0.30	残*0.66	城
SK031	92B	SK20	V G2i	残*0.86	残0.55	残*0.67	城ⅢⅠ
SK032	92B	SK18	V G2-3lm	残1.26	残0.61	残*0.48	城ⅡⅠ
SK033	92B	SK21	V G2-3i	残0.49	残0.31	残0.26	城ⅢⅠ
SK034	92B	Pit16	V G2-3i	0.43	0.40	0.28	城
SK035	92B	Pit17	V G3i	残0.50	残0.45	0.27	城
SK036	92B	SK22	V G3i	残0.81	残0.52	残0.41	城ⅠⅡ
SK037	92B	Pit12	V G3i	残0.50	残0.47	残0.63	城ⅠⅡ
SK038	92B	SK14	V G3lm	残1.81	残1.49	残0.45	城Ⅱ
SK039	92B	Pit13	V G2-3m	0.41	0.34	残*0.30	城
SK040	92B	SK17	V G3m	0.60	残0.38	残0.22	城
SK041	92B	SK09	V G3m	残1.07	残0.19	残0.21	城Ⅱ
SK042	92B	SK08	V G3n	残2.03	残1.81	残0.32	城Ⅱ
SK043	92B	SK06	V G3no	残3.80	残1.15	残0.33	城Ⅱ-Ⅲ
SK044	92B	SK19	V G3o	0.67	0.44	0.22	城Ⅱ
SK045	92B	SK12	V G3o	残1.49	残1.31	残*1.42	城Ⅰ
SK046	92B	SK16	V G3o	残0.57	残0.48	残0.45	城Ⅲ
SK047	92B	SK05	V G3o	残1.70	残1.62	残*0.44	城ⅡⅡ
SK048	92B	SK11	V G4op	2.10	残0.73	残0.14	城Ⅱ
SK049	92B	SK07	V G3p	残*1.32	残0.24	残*0.58	—
SK050	92B	Pit01	V G4p	0.59	0.52	0.37	城Ⅱ
SK051	92B	Pit11	V G4q	0.47	0.47	0.25	—
SK052	92B	—	V G4q	0.40	0.40	0.02	—
SK053	92B	SK15	V G4q	1.06	0.96	0.47	城ⅢⅠ
SK054	92B	—	V G4q	0.43	0.43	?	—
SK055	92B	SK02	V G4qr	残2.49	残2.29	残0.31	近
SK056	92B	SK04	V G4-5rs	残2.06	残0.78	残0.17	城ⅠⅡ
SK057	92B	Pit03	V G4s	残0.46	残0.33	残0.09	—
SK058	92B	—	V G5t	0.44	0.21	0.08	—
SK059	92B	—	V G5t	0.85	0.21	0.06	—
SK060	92B	SK03	V G5t	残1.70	残1.26	残0.14	城
SK061	92B	SK37	V G5t	残*0.91	残0.21	残*0.75	—
SK062	92B	Pit04	V G5t	0.62	0.58	0.10	—
SK063	91D	SK05	V F1t, V G1a	残1.45	残0.70	残0.14	城ⅢⅠ
SK064	91D	SK06	V G1a	1.04	1.01	0.75	城
SK065	91D	SK08	V G1b	残1.68	残1.38	残0.14	城
SK066	91D	—	V G1c	残0.68	0.53	?	—
SK067	91D	SK02	V G1c	残1.72	残1.64	残0.25	城ⅠⅡ
SK068	91D	SK09	V G1c	残1.07	残0.99	残0.32	城
SK069	91D	SK03	V G1-2de	残*5.49	残2.34	残*1.08	城ⅡⅠ
SK070	91D	SK07	V G2e	残0.97	残0.80	残0.29	城
SK071	91D	SK01	V G2fg	残1.45	残0.79	残*0.96	城ⅠⅡ
SK072	91D	—	V G2fg	残0.89	残0.46	残0.15	—
SK073	91D	SK17	V G2g	残0.54	残0.24	残0.22	城
SK074	91D	SE01	V G2g	残2.06	0.99		城ⅠⅡ
SK075	91D	SK04	V G2g	残2.50	残1.42	残*0.97	城
SK076	91D	SK16	V G2g	残0.51	残0.39	残0.33	城
SK077	91E	SK61	V G3j	残2.19	残1.68	?	城Ⅱ-Ⅲ
SK078	91E	SK62	V G3j	残1.82	残1.05	残0.02	城ⅠⅡ
SK079	91E	SK10	V G3-4k	残0.92	残0.66	残0.15	城

清洲城下町遺跡

遺構番号	調査区	旧遺構番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SK080	91E	SK11	V G3-4kl	0.76	0.60	0.23	城
SK081	91E	SK09	V G4k	残0.44	残0.21	残0.12	中
SK082	91E	SK08	V G4k	残0.60	残0.36	?	城
SK083	91E	SK57	V G3l	残*0.90	残0.38	残*1.23	城
		SK104					
SK084	91E	SK58	V G3-4l	残*0.80	残0.27	残*0.95	城
SK085	91E	SK20	V G3-4l	0.65	0.51	0.40	—
SK086	91E	SK36	V G4l	残*1.13	残0.49	残*0.80	城Ⅱ2
SK087	91E	SK13	V G4l	残0.93	残0.83	残0.27	—
SK088	91E	SK12	V G4l	0.44	0.38	0.34	城
SK089	91E	SK19	V G4l	0.58	0.41	0.28	城
SK090	91E	SK28	V G4l	0.53	0.52	0.52	城
SK091	91E	SK29	V G4l	残2.67	残0.58	残0.41	城Ⅱ2
SK092	91E	SK59	V G4l	残0.78	残0.60	?	城Ⅱ1
SK093	91E	SK14	V G4l	残0.91	残0.73	残0.19	—
SK094	91E	SK15	V G4l	0.51	0.48	0.11	城
SK095	91E	SK40	V G4l	0.72	0.62	0.20	城
SK096	91E	SK49	V G4lm	0.67	0.62	0.33	城
SK097	91E	SK56	V G4m	0.43	0.36	0.10	—
SK098	91E	SE01	V G4m	残4.23	残1.95	残*1.70	城Ⅱ
		SK50					
SK099	91E	SK51	V G4n	*0.50	残0.39	残*0.65	城
SK100	91E	SK52	V G4n	残0.46	0.45	残0.10	—
SK101	91E	SK53	V G4n	残*1.81	残0.54	残*0.51	城Ⅰ2
SK102	91E	—	V G4no	残*1.45	残0.34	残*0.57	—
SK103	91E	SK45	V G4-5n	残2.90	残1.28	残*0.68	城Ⅱ
SK104	91E	SK39	V G4-5no	残1.44	残0.97	残0.40	城Ⅰ2
SK105	91E	—	V G4o	残*1.45	残0.70	残*0.40	—
SK106	91E	SK54	V G4o	残0.76	残0.26	残0.14	城Ⅱ1
SK107	91E	SK55	V G4-5o	残0.93	残0.49	残0.20	城Ⅲ
SK108	91E	—	V G5o	残0.50	残0.36	?	—
SK109	91E	SK21	V G5p	残2.50	残1.84	残*1.13	近
SK110	91E	SK04	V G5pq	残2.67	残1.73	残*0.80	城Ⅱ1
SK111	91E	SK127	V G5q	0.41	0.38	0.28	—
SK112	91E	—	V G5q	残0.65	残0.21	?	—
SK113	91E	SK22	V G5q	残2.09	残1.69	残0.28	城Ⅲ
SK114	91E	SK35	V G5q	残0.68	0.45	残*0.49	城
SK115	91E	SK47	V G5q	残0.41	残0.19	残0.06	城
SK116	91E	SK46	V G5q	残0.63	残0.21	残0.11	城
SK117	91E	SK41	V G5qr	残*1.44	残0.99	残*0.72	—
SK118	91E	SK42	V G5qr	残1.26	残0.92	残0.34	城
SK119	91E	SK16	V G5r	残2.93	残0.61	残*0.76	城Ⅰ2
		SK128					
SK120	91E	SK37	V G5r	残0.51	残0.47	残0.27	城
SK121	91E	SK23	V G5r	0.49	0.40	0.34	城
SK122	91E	SK32	V G5r	残0.39	0.39	0.14	—
SK123	91E	SK38	V G5-6r	0.49	0.44	0.44	城
SK123	91E	SK38	V G5-6r	0.49	0.44	0.44	城
SK125	91E	SK31	V G5r	0.42	0.39	0.24	城
SK126	91E	SK30	V G5-6r	残0.45	残0.29	残0.07	城
SK127	91E	—	V G6s	0.48	0.43	0.15	—
SK128	91E	SK17	V G6s	残0.50	残0.25	残0.10	古
SK129	91E	—	V G6s	0.56	0.40	0.07	—
SK130	91E	SK18	V G6s	0.48	0.47	0.56	城
SK131	91E	SK07	V G6st	残3.18	残1.35	残0.16	城
SK132	91E	SK25	V G6t	0.65	0.43	0.10	城
SK133	91E	—	V G6t	0.47	0.46	?	—
SK134	91E	SK05	V G6t	残1.05	残0.70	残*0.34	—
SK135	91E	SK06	V G6t, V H6a	残1.67	残0.90	残0.41	城Ⅱ2
SK136	91E	SD01	V H6a	残0.73	0.49	0.22	近
SK137	91E	SK03	V H6a	1.00	0.43	0.36	城
SK138	91E	—	V H6a	残0.78	残0.32	残0.09	—
SK139	91E	—	V H6a	残0.64	残0.41	残0.07	—
SK140	91E	—	V H7a	残0.50	残0.15	残0.11	—
SK141	91E	SK48	V H6a	0.64	0.54	0.26	城
SK142	91E	SK43	V H6a	0.47	0.46	0.16	—
SK143	91E	—	V H6a	0.45	0.34	0.10	—
SK144	91E	—	V H6a	0.41	0.16	0.07	—
SK145	91E	—	V H6a	0.40	0.31	0.07	—
SK146	91E	SK34	V H6a	残0.68	残0.68	0.18	城

遺構番号	調査区	旧遺構番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SK147	91E	Pit06	V H6b	残0.45	0.30	0.24	—
SK148	91E	Pit04	V H6-7b	残0.41	0.36	0.36	—
SK149	91E	SK02	V H7b	0.55	0.55	0.39	城
SK150	91E	SK27	V H7b	0.50	0.21	0.12	城
SK151	91E	—	V H7b	残1.44	残0.43	残0.12	—
SK152	91E	SK01	V H7bc	残1.68	残1.63	?	城
SK201	92A	—	V G19a	残0.54	残0.27	残0.10	—
SK202	92A	—	V G19a	残0.53	残0.41	残0.28	—
SK203	92A	Pit79	V G19a	残0.65	残0.42	残0.29	城
SK204	92A	Pit80	V G19a	残0.60	残0.44	残0.11	—
SK205	92A	SK89	V G19ab	*0.90	残0.48	残*0.63	城
SK206	92A	Pit82	V G19ab	0.45	0.38	0.18	城
SK207	92A	SK99	V G19ab, 20b	残1.90	残0.37	残0.20	—
SK208	92A	Pit78	V G19b	0.48	0.42	0.13	城
SK209	92A	Pit83	V G19-20b	残0.54	残0.40	残0.23	—
SK210	92A	Pit84	V G19-20b	残0.46	残0.41	残0.14	城
SK211	92A	SK90	V G20b	残2.01	残0.63	残0.20	—
SK212	92A	SK87	V G20b	0.78	残0.55	残0.19	—
SK213	92A	SK91	V G20cd	残*6.40	残0.85	残*1.16	城Ⅱ
SK214	92A	SK98	V G20d	残*2.12	0.65	残*0.40	城
SK215	92A	SK93	V G20e	残0.69	残0.37	残0.06	城
SK216	92A	SK92	V G20ef, V G1ef	残*1.92	残0.66	残*0.60	城Ⅰ1
SK217	92A	SK83	V G1f	残0.80	残0.40	残0.44	城Ⅱ1
SK218	92A	SK82	V G1fg	残0.72	残0.36	残0.16	城Ⅰ-Ⅱ
SK219	92A	SK81	V G1fg	残2.59	残0.62	残0.49	城Ⅰ2
SK220	92A	SK104	V G1g	残1.14	残0.45	残0.07	城Ⅱ2
SK221	92A	SK96	V G1h	残2.31	残0.93	残*0.64	城Ⅰ2
SK222	92A	SK86	V G1h	0.75	0.69	0.11	城
SK223	92A	SK80	V G1h	残0.63	残0.61	残*0.32	城
SK224	92A	Pit85	V G1h	残0.63	残0.30	残0.42	城Ⅰ2
		SK85					
SK225	92A	—	V G1-2hi	3.33	2.34	残*1.05?	—
SK226	92A	SK100	V G1-2hi	残0.99	残0.39	残0.27	城
SK227	92A	SK103	V G1-2i	残1.12	残0.77	残*0.41	城
SK228	92A	SK101	V G1-2i	残*0.76	残0.50	残*0.50	城
SK229	92A	SK79	V G1-2i	残0.73	0.48	0.16	城
SK230	92A	SK78	V G1-2i	0.54	0.48	0.21	城Ⅱ1
SK231	92A	SK97	V G2i	残0.86	残0.29	残0.12	城Ⅱ
SK232	92A	Pit87	V G2i	残0.43	残0.22	残0.22	—
SK233	92A	SK102	V G2i	残*0.96	残0.47	残*0.52	城Ⅱ1
SK234	92A	SK77	V G2i	残0.92	残0.70	残0.31	城Ⅰ
SK235	92A	Pit86	V G2i	残*0.60	残0.32	残*0.59	城Ⅰ-Ⅱ
SK236	92B	Pit36	V G2-3l	残0.49	残0.27	残0.15	城
SK237	92B	SK48	V G2-3l	残0.71	残0.68	残0.04	—
SK238	92B	SK41	V G2-3lm	残*1.49	残0.46	残*0.30	—
SK239	92B	Pit38	V G2m	残*0.45	残0.27	残*0.42	城
SK240	92B	SK40	V G2-3m	残1.25	?	残0.07	城
SK241	92B	SK35	V G3m	残0.92	?	残0.14	城
SK242	92B	—	V G3m	0.74	0.37	0.14	—
SK243	92B	SK33	V G3mn	残*1.40	残0.45	残*0.37	—
SK244	92B	SK34	V G3mn	残0.51	残0.20	残0.15	城Ⅱ1
SK245	92B	SK71	V G3mn	残*2.50	残0.45	残*0.87	城Ⅰ-Ⅱ
SK246	92B	SK32	V G3mn	残*1.62	残1.23	残*0.81	城Ⅱ2
SK247	92B	SK50	V G3mn	残1.43	残1.10	残0.13	城Ⅰ2
SK248	92B	SK49	V G3n	残0.82	残0.33	残*0.37	—
SK249	92B	SK30	V G3n	残*3.96	残0.75	残*0.67	城
SK250	92B	SK39	V G3n	残*4.03	?	残*1.05	城Ⅰ2
SK251	92B	SK38	V G3n	残0.83	残0.57	残0.10	城Ⅱ2
SK252	92B	SK84	V G3n	残*0.93	?	残*0.37	—
SK253	92B	SK69	V G3no	残1.43	残1.14	残0.50	城Ⅱ1
SK254	92B	Pit57	V G3o	0.42	0.41	0.17	城Ⅲ
SK255	92B	Pit58	V G3o	0.51	残0.41	0.13	城
SK256	92B	Pit43	V G3o	残0.40	0.37	0.42	城Ⅱ1
SK257	92B	Pit42	V G3o	0.41	0.37	0.05	城
SK258	92B	SK29	V G3op	残*0.81	残0.42	残*0.25	—
SK259	92B	Pit44	V G4o	残0.48	残0.19	?	古
SK260	92B	SK26	V G4op	残3.28	残0.21	残0.18	—
SK261	92B	SK27	V G3p	残0.66	残0.21	残*0.76	城Ⅱ1
SK262	92B	Pit60	V G3-4p	0.77	0.65	0.16	古5-6
SK263	92B	SK25	V G4p	残1.45	残0.27	残0.18	—

遺構番号	調査区	旧遺構番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SK264	92B	SK24	VG4p	残0.50	残0.36	残0.12	—
SK265	92B	SK23	VG4q	残1.24	残1.15	残*0.50	城
SK266	92B	Pit25	VG4q	残0.49	残0.42	残0.16	—
SK267	92B	Pit27	VG4q	残0.45	残0.23	残0.12	—
SK268	92B	SK70	VG4r	0.62	残0.51	0.07	城
SK269	92B	Pit46	VG5t	0.43	0.42	0.06	—
SK270	91D	SE02	IF20t, IFG20a, VG1a	残1.33	残0.40		城Ⅱ2
SK271	91D	SK11	IFG20a, VG1a	0.74	0.47	0.27	城Ⅰ1
SK272	91D	SK12	IFG20a, VG1a	0.41	0.41	0.34	城
SK273	91D	SK13	IFG20a, VG1a	残1.20	残1.05	残0.28	城Ⅰ2
SK274	91D	SK10	IFG20a, VG1a	残1.02	残0.79	残*0.60	城Ⅰ2
SK275	91D	SK14	VG1a	残0.85	残0.68	残0.17	城
SK276	91D	—	VG1e	残1.50	残0.63	残0.26	—
SK277	91D	—	VG2e	残0.42	残0.40	残0.55	—
SK278	91D	SK18	VG2e	残0.71	残0.26	残0.21	城
SK279	91D	SK101	VG2e	残*1.20	?	残*0.72	城
SK280	91D	SK201	VG2ef	残*1.65	?	残*0.20	城
SK281	91D	—	VG2f	0.53	0.27	0.15	—
SK282	91D	SK202	VG2f	残*0.86	?	残*0.30	城
SK283	91D	SK203	VG2f	残*0.63	?	残*0.28	—
SK284	91D	SK204	VG2f	残*1.26	?	残*0.70	城
SK285	91D	SK102	VG2f	残*0.68	?	残*0.40	城Ⅰ
SK286	91D	SK205	VG2g	残*1.28	?	残*1.41	城Ⅰ
SK287	91E	SK101	VG3-4k	0.74	0.40	0.46	城
SK288	91E	SK102	VG4k	残1.00	残0.70	残0.44	城
SK289	91E	SK103	VG4kl	0.73	残0.52	残0.56	城
SK290	91E	—	VG3l	残*0.57	残0.22	残*0.66	—
SK291	91E	SK105	VG3-4l	0.59	残0.31	残0.43	城Ⅱ2
SK292	91E	SK106	VG4l	0.56	残0.34	残0.25	城
SK293	91E	—	VG4l	残0.46	残0.23	残0.15	—
SK294	91E	—	VG4l	残0.50	残0.35	残0.14	—
SK295	91E	—	VG4l	残0.45	残0.24	残0.37	—
SK296	91E	SK109	VG4l	残0.44	残0.30	残*0.66	城Ⅱ1
SK297	91E	SK108	VG4l	残0.69	残0.54	残*0.91	城
SK298	91E	SK111	VG4lm	残0.67	残0.40	残*0.41	城Ⅱ1
SK299	91E	—	VG4lm	残0.44	残0.24	残0.24	—
SK300	91E	SK132	VG4n	残1.01	残0.70	残*0.28	中
SK301	91E	SK131	VG4n	0.49	0.35	0.18	城
SK302	91E	—	VG4-5o	残1.48	?	残*0.92	—
SK303	91E	SK130	VG5q	残0.50	残0.30	残0.28	城
SK304	91E	—	VG5q	残1.55	0.43	残0.09	—
SK305	91E	—	VG5q	0.49	0.46	0.35	—
SK306	91E	SK129	VG5q	残1.06	残0.83	残0.44	城
SK307	91E	—	VG5r	残*1.05	残0.25	残*0.57	—
SK308	91E	—	VG5r	残0.50	残0.38	残0.16	—
SK309	91E	SK112	VG5-6r	0.79	0.70	0.44	古4～6
SK310	91E	SK113	VG6r	残0.78	残0.45	残0.57	古4～6
SK311	91E	SK114	VG6s	残0.80	残0.27	残0.09	中
SK312	91E	SK120	VG6s	0.54	0.44	0.33	—
SK313	91E	SK116	VG6s	0.60	0.43	0.38	古5～6
SK314	91E	—	VG6s	0.50	0.43	?	—
SK315	91E	SK117	VG6s	残0.71	残0.42	残0.18	中
SK316	91E	—	VG6st	残0.44	残0.29	0.09	—
SK317	91E	SK118	VG6st	残0.58	残0.30	残0.17	古
SK318	91E	SK119	VG6t	残0.45	残0.38	残0.06	古
SK319	91E	SK123	VG6t	残1.19	残0.71	残0.29	古6
SK320	91E	SK124	VG6t	残1.11	残0.59	残0.20	—
SK321	91E	SK121	VG6t	残0.76	残0.47	残0.17	中
SK322	91E	SK134	VG6t	残1.89	残1.16	?	古5～6
SK323	91E	SK125	VG6t, VH6a	残0.79	残0.54	残0.23	中
SK324	91E	SK126	VH6a	残0.38	0.21	?	古
SK401	92A	SK105	IFG19a	残0.51	残0.41	残0.35	—
SK402	92A	SK106	IFG19a	0.48	0.34	0.35	—
SK403	92A	SK107	IFG19a	残0.64	0.46	0.33	—
SK404	92A	SK108	IFG19-20b	0.60	残0.42	0.35	—
SK405	92A	SK113	VG1f	残*1.23	残0.49	残*0.49	中
SK406	92A	SK112	VG1f	残*4.67	残0.73	残*1.11	中
SK407	92A	SK110	VG1g	残*0.86	残0.24	残*0.46	—
SK408	92A	SK111	VG1gh	残*3.82	残0.80	残*0.92	城Ⅱ1
SK409	92A	SK109	VG2i	残0.50	残0.41	残0.24	城

遺構番号	調査区	旧遺構番号	グリッド	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	時期
SK410	92B	—	VG3mn	残0.73	残*3.43	残*0.48	—
SK411	92B	SK73	VG3-4p	残0.63	残0.61	残*0.16	城
SK412	92B	SK74	VG4p	残*1.30	残0.38	残*0.29	城
SK413	92B	SK75	VG4q	残0.94	残0.61	0.22	城
SK414	92B	SK95	VG4r	残*0.92	残0.46	残*0.50	—
SK415	92B	Pit76	VG4r	0.42	0.41	0.07	—
SK416	92B	SK76	VG5t, VH5a	残2.15	残1.41	残*0.73	城Ⅰ1
SK417	91E	SK209	VG3j	残2.31	残0.92	残*0.51	城Ⅱ1
SK418	91E	SK210	VG3jk	残*1.72	残0.74	残*1.00	城Ⅰ2
SK419	91E	SK211	VG3k	残1.49	残0.28	残*0.69	城Ⅱ1
SK420	91E	Pit201	VG3k	残0.45	残0.30	?	城
SK421	91E	SK208	VG3-4k	残2.75	残1.30	残0.74	近
SK422	91E	SK204	VG5pq	残*2.14	残1.10	残*0.83	古6
SK423	91E	SK207	VG5q	残*1.60	残1.58	残*0.61	古7
SK424	91E	—	VG5qr	残0.89	残0.25	残0.34	—
SK425	91E	SK201	VG5r	残1.93	残0.40	残*0.61	古7
SK426	91E	SK205	VG6t	残0.77	残0.63	残0.10	古6
SK427	91E	SK202	VG6t	残0.89	残0.43	残0.31	古5～6
SK428	91E	—	VG6t	残0.88	残0.50	残0.26	—
SK429	91E	—	VH6a	残0.91	残0.31	残0.24	—
SK430	91E	—	VH6ab	残2.17	残0.71	残0.22	—
SK501	91E	—	VG5rs	残0.84	残0.56	残0.14	—
SK502	91E	—	VG5-6s	残1.47	残0.49	残0.15	—
SK503	91E	—	VH6a	0.67	0.50	0.08	—
SK601	90G	SK02	VH8-9hi	残1.61	残0.86	残0.78	古6
SK602	90G	SK01	VH9h	1.29	残0.92	残0.30	古4
SK603	90G	—	VH9i	0.41	0.33	0.11	—
SK604	90G	SK03	VH9ij	残1.43	残0.91	残0.12	—
SK605	90G	SK04	VH9j	0.80	0.58	0.18	—
SK606	90G	SK05	VH9jk	残1.30	残0.54	残0.62	城Ⅲ
SK607	90G	SK06	VH9k	1.95	1.61	0.46	城Ⅲ
SK608	90G	SK07	VH9l	1.63	0.70	0.14	城
SK609	90G	SK08	VH10l	残1.18	残0.67	残0.27	—
SK610	90H	SK01	VH12s	2.02	1.32	?	城Ⅰ2
SK611	90H	SK02	VH12s	残2.03	残0.97	*0.33	古2
SK612	90H	SK03	VH13rs	1.11	0.52	0.13	—
SK613	90H	SK05	VH13-14r	残3.81	残1.24	残0.24	城Ⅰ2
SK614	90H	SK04	VH13-14r	3.97	1.38	0.20	城
SK615	90H	SK07	VH14qr	2.57	残1.60	残0.31	中
SK616	90H	SK06	VH14r	残2.34	残1.55	残0.35	城Ⅲ1
SK617	90H	—	VH14r	残1.92	残1.43	0.23	—
SK618	90I	—	VH19d	残0.55	残0.23	残0.20	—
SK619	90I	SK04	VH19d	残1.22	残0.66	残*0.26	古～中
SK620	90I	SK01	VH19d	残3.78	残1.42	残*0.62	城
SK621	90I	SK08	VH19e	推1.18	0.58	0.15	—
SK622	90I	SK07	VH19e	残0.55	残0.18	0.09	—
SK623	90I	SK05	VH19e	残1.05	残0.15	*0.71	城
SK624	90I	SK03	VH19e	0.73	推0.40	0.16	城
SK625	90I	SK06	VH19e	0.60	推0.58	0.08	—
SK626	89G	SK01	VH19ef, 20e	残4.67	残1.80	残*0.57	城Ⅱ2
SK627	89G	Pit03	VH19e	残0.58	残0.27	残0.09	城
SK628	89G	Pit04	VH19-20ef	残0.89	残0.56	残0.11	—
SK629	89G	Pit06	VH20e	残0.53	残0.37	残0.01	—
SK630	89G	Pit07	VH20ef	残0.53	残0.50	残0.16	—
ST001	92B	SD01	VH5ab, 6b	残2.15	残8.68	残*1.31	現代
SX001	92A	SX06	VG1fg	残*9.94	残1.38	残*0.61	城Ⅱ1
SX001	92A	SX07			・		
SX201	92A	石集積	IFG20e				城～近

2. 遺物観察表

- 凡例 1. 計測値はcmで表示し、頭に「推」と記したものは復元推定値を、頭に「残」と記したものは残存した部分の数値をそれぞれ示している。
2. 残存率は口縁部の残存率を示す。

図版番号	登録番号	遺構番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	釉薬・調整／内面	釉薬・調整／外面	胎土	備考	残存率
1	91E-E-116	SB507	須恵器	壺B	推12.8	残6.5	—	回転ナデ	回転ナデ	橙色	口縁部自然釉掛る	4/12
2	92B-E-104	SB401	須恵器	杯蓋B	15.6	残1.9		回転ナデ	自然釉、回転ナデ+回転ヘラナズリ	青灰色	内側面磨減	2/12
3	92B-E-110	SB401	須恵器	杯蓋B	13.4	3.0		回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ+回転糸切り	赤褐色	紐～外側面磨減	2/12
4	92B-E-135	SB401	須恵器	杯蓋B	15.4	残2.2			ナデ+回転ヘラナズリ	黒灰色		4/12
5	92B-E-113	SB401	須恵器	杯A	11.6	3.5		回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	暗灰褐色	外面腰部磨減、外底面ヘラ記号	11/12
6	92B-E-103	SB401	須恵器	碗A	11.8	3.6	6.2	回転ナデ	回転ナデ+回転糸切り	淡青灰色	口縁内面・外底面端部磨減	4/12
7	92B-E-101	SB401	須恵器	杯A	12.4	4.0	6.4	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	淡褐色	口縁・外面腰部磨減	4/12
8	92B-E-102	SB401	須恵器	杯B	17.6	4.2	13.7	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	灰黒色	口縁・外面腰部・高台磨減	4/12
9	92B-E-107	SB401	須恵器	盤B	11.4	残1.2	—	自然釉、回転ナデ	回転ナデ	灰黒～黒紫色		2/12
10	92B-E-112	SB401	須恵器	盤B	19.2	3.7	11.1	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	明赤褐色	内面・高台磨減	6/12
11	92B-E-106	SB401	須恵器	高盤	21.0	残1.7	—	自然釉、回転ナデ	回転ナデ	淡赤褐色	口縁少し磨減	2/12
12	92B-E-109	SB401	須恵器	鉢A	21.0	残4.4	—	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色		3/12
13	92B-E-108	SB401	土師器	皿	—	—		ナデ+放射状暗文	ヨコ方向ヘラミナズ	浅黄褐色	畿内?	1/12
14	92B-E-111	SB401	土師器	甕C	17.0	残4.2		ヨコハナメ(粗)ナデ	ヨコナデ+ナメハナメ(粗)	灰白～淡赤灰色		3/12
15	91E-E-128	SB501	須恵器	杯蓋B	13.0	3.4		回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	明赤褐色	内面頂部・紐部磨減	8/12
16	91E-E-140	SB501	須恵器	碗A	12.6	3.9	6.4	回転ナデ	回転ナデ+回転糸切り	暗褐色	口縁内面磨減	4/12
17	91E-E-138	SB501	須恵器	杯A	12.0	3.5		回転ナデ	回転ナデ+回転糸切り	淡青灰色	口縁内面磨減	1/12
18	91E-E-139	SB501	須恵器	盤B	19.4	残2.2	—	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色	口縁外面少し磨減	2/12
19	91E-E-145	SB501	土師器	甕	—	—			ナデハナメ(粗)	灰白色	口縁内面磨減	1/12
20	91E-E-127	SB502	須恵器	杯蓋B	推16.8	残3.7		回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	灰黒色	口縁端部磨減	2/12
21	91E-E-111	SB502	須恵器	蓋C	14.6	3.0	5.9	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ+回転糸切り後ナデ	暗褐色	外面腰部磨減	12/12
22	91E-E-112	SB502	須恵器	杯A	12.3	3.3	5.8	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	暗灰褐色	外面腰部磨減、E-11とセット	12/12
23	91E-E-115	SB502	土師器	甕C	推21.8	残5.7	—	ヨコナデ+ヨコハナメ(粗)	ヨコナデ+ハナメ(粗)	淡褐色	外側面薄く煤つく	10/12
24	91E-E-150	SB502	土師器	不明(脚部)	—	残15.6			ナデハナメ(粗)	淡褐色	煤付着、底部へうで面取り	0/12
25	91E-E-110	SB402	須恵器	碗A	11.6	3.9	5.0	回転ナデ	回転ナデ+静止糸切り	暗灰色	外底面端部やや磨減	12/12
26	91E-E-109	SB402	須恵器	杯A	12.2	3.9	5.5	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	暗灰褐色	外底面端部磨減、一部自然釉掛る	12/12
27	91E-E-129	SB402	須恵器	盤B	推19.4	3.2	推9.5	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐色	内側面・高台磨減	4/12
28	91E-E-124	包含層	土師器	甕C	16.3	残4.7	—	ヨコナデ+ヨコハナメ	ヨコナデ+ナメハナメ	淡赤褐色	口縁内面煤	1/12
29	91E-E-141	SB402	灰釉陶器	皿	—	残1.9	7.6	灰釉	回転ナデ+回転ヘラナズリ	灰白色		0/12
30	91E-E-144	SB402	須恵器	甕(把手)	—	—		ナデ		淡灰褐色		0/12
31	91E-E-135	SB402	土師器	甕C	—	残7.5	—	ナデヨキエキヨコヘラナズリ	ナデハナメ+ナメハナメ	灰黒色		0/12
32	91E-E-143	SB402	須恵器	細頸壺	推7.0	残9.2	—	自然釉、回転ナデ+ナデナデ	回転ナデ+ヨコナデ	明赤色		12/12
33	90G-E-104	SB602	土師器	甕(把手)	—	—		ヨコハナメ		灰白色	外面煤少し	0/12
34	91E-E-101	SB404	須恵器	杯A	推15.2	6.6		回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	明灰色	外面腰部釉着痕、磨減若干	8/12
35	91E-E-151	SK425	土師器	不明(脚部)	—	残6.8			ナデハナメ(粗)	淡褐色	煤付着、底部面取り	0/12
36	91E-E-147	SK425	土師器	甕C	21.0	残2.7		ヨコハナメ	ヨコナデ+ナメハナメ	褐色	頸部内面一部煤	1/12
37	91E-E-107	SD302	須恵器	横瓶	推10.4	残6.1	—	回転ナデ	回転ナデ+平行ナデ	淡青灰色	頸部黒色の自然釉掛る、一部釉着物あり	4/12
38	90H-E-104	SK610	須恵器	碗A	11.6	3.9	5.8	回転ナデ+ナデ	回転ナデ+回転糸切り	暗灰色	内底面・外底面端部磨減	2/12
39	90H-E-101	SK610	須恵器	甕A	28.8	残12.4	—	回転ナデ+ナデ	回転ナデ+ナメナデナデ	灰色	口縁～頸部内面黄土塗布	3/12
40	90H-E-102	SK611	須恵器	甕A	推46.8	残16.2	—	自然釉、回転ナデ	自然釉、回転ナデ	灰色	ヘラ描き文	2/12
41	90I-E-101	包含層	須恵器	杯蓋H	11.2	4.0		回転ナデ	自然釉(天井部)、回転ナデ+回転ヘラナズリ	灰黒色	磨減なし	5/12
42	90G-E-101	包含層	須恵器	杯H	10.0	残3.4		回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	暗灰色	口縁磨減	1/12
43	91E-E-121	包含層	須恵器	杯A	推11.0	4.0	推4.4	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	灰色	口縁内面・外面腰部磨減	5/12
44	91E-E-126	包含層	須恵器	杯A	11.8	残4.1	—	回転ナデ	回転ナデ	淡黄褐色	口縁内面磨減	3/12
45	91E-E-137	包含層	須恵器	杯A	12.4	3.6		回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ+回転糸切り	淡褐～灰色	口縁内面・外底面端部磨減	4/12
46	92B-E-114	包含層	須恵器	杯蓋B	13.8	3.0				明褐色	内底面・紐磨減	9/12
47	92B-E-128	包含層	須恵器	杯蓋B	推13.6	3.2		回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	淡青灰色	紐磨減	2/12
48	92B-E-127	包含層	須恵器	杯蓋B	推14.2	3.5		回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	暗灰褐色	内面頂部・外側面磨減	1/12
49	92B-E-115	包含層	須恵器	杯蓋B	17.0	3.5		回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	青紫色	内底面・口縁部・紐磨減	3/12
50	91E-E-108	SD102	須恵器	杯蓋B	推15.0	2.3		回転ナデ+ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	セピア色	紐部若干磨減	1/12
51	92B-E-129	包含層	須恵器	杯蓋B	19.0	残2.6		回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ(丁寧)	明赤褐色	外側面磨減	3/12
52	91E-E-131	包含層	須恵器	杯蓋B	推20.6	2.6		回転ナデ+ナデナデ	自然釉	灰色	焼き歪、釉着あり	5/12
53	91E-E-122	包含層	須恵器	杯B	推9.7	4.5	推6.6	回転ナデ	自然釉、回転ナデ	淡赤褐色	口縁内面・高台磨減	1/12
54	92B-E-119	包含層	須恵器	杯B	15.8	3.9	11.4	自然釉、回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	灰色	内底面・高台磨減、内底面釉着、黒斑あり	4/12

図版番号	登録番号	遺構番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	釉薬・調整／内面	釉薬・調整／外面	胎土	備考	残存率
55	91E-E-132	包含層	須恵器	杯B	推15.9	3.9	推11.9	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	淡褐色	口縁内面・高台磨減	1/12
56	92B-E-145	包含層	須恵器	杯B	17.1	5.1	11.8	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	紫褐色	口縁・高台磨減	1/12
57	92B-E-125	包含層	須恵器	杯B	—	残1.7	推9.2	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	暗紫色	高台磨減	0/12
58	91E-E-134	包含層	須恵器	杯B	—	残0.8	推11.8	回転ナデ	回転ヘラナズリ	淡褐色	内底面・高台磨減	0/12
59	92B-E-126	包含層	須恵器	盤B	—	残2.8	推9.0	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	灰色	内面少し磨減	0/12
60	91E-E-130	包含層	須恵器	高盤	推36.0	残1.7	—	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	明灰色	—	1/12
61	91E-E-123	包含層	須恵器	碗D	推17.2	5.4	推9.0	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	赤橙色	口縁内面・高台磨減	2/12
62	91E-E-104	包含層	須恵器	碗B	推17.1	5.4	推9.2	—	回転ヘラナズリ	青灰色	内底面端部、高台磨減、黒斑若干あり	1/12
63	92B-E-131	包含層	灰釉陶器	長頸瓶	—	残4.5	9.9	自然釉、回転ナデ	自然釉、回転ヘラナズリ+回転ナデ	淡灰色	高台稜or葉痕あり	0/12
64	92B-E-120	包含層	須恵器	平瓶	15.7	15.8	14.8	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	灰色	—	1/12
65	92B-E-140	包含層	須恵器	甗	推21.2	残9.7	—	回転ナデ	回転ナデ	暗赤橙色	—	1/12
66	92B-E-117	包含層	須恵器	甗	—	残4.7	推18.0	回転ナデ	回転ナデ	灰黒～赤橙色	—	0/12
67	91E-E-118	包含層	須恵器	碗D	推17.6	8.4	5.4	回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	灰色	口縁内面・高台磨減、調整はきわめて丁寧である	4/12
68	92B-E-130	包含層	灰釉陶器	碗	17.6	5.5	8.8	灰釉	ナデ+回転ヘラナズリ	灰白色	—	6/12
69	92B-E-132	包含層	灰釉陶器	碗	14.0	4.8	5.4	灰釉、回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	灰白色	—	5/12
70	91E-E-117	包含層	灰釉陶器	碗	推14.0	残4.5	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白色	黒斑あり	2/12
71	92B-E-133	包含層	灰釉陶器	碗	15.3	残3.7	—	灰釉	回転ヘラナズリ	淡灰褐色	—	2/12
72	92B-E-124	包含層	灰釉陶器	皿	—	残1.3	7.8	灰釉	回転ヘラナズリ	灰白色	角高台	0/12
73	91E-E-105	包含層	灰釉陶器	皿	—	残1.5	推8.2	灰釉(剥離)	回転ヘラナズリ+回転ナデ	灰白色	高台少し磨減、外面自然釉かかる	0/12
74	91E-E-103	包含層	灰釉陶器	碗	—	残2.2	推8.0	灰釉	回転ヘラナズリ+回転ナデ	灰白色	高台少し磨減	0/12
75	92B-E-144	包含層	灰釉陶器	皿	13.8	2.6	6.9	灰釉、回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	灰白色	ハケ塗り	4/12
76	91E-E-114	SK137	灰釉陶器	皿	14.8	2.9	7.4	灰釉	回転ナデ+回転ヘラナズリ	淡灰色	外側面～高台磨減	6/12
77	91E-E-120	SK098	灰釉陶器	皿	推12.5	2.6	推2.6	灰釉、回転ナデ	灰釉、回転ナデ	灰白色	浸け掛け 美濃	2/12
78	92B-E-134	包含層	灰釉陶器	段皿	14.7	2.5	7.1	灰釉、回転ナデ	回転ナデ+回転ヘラナズリ	暗灰色	釉気泡化	6/12
79	91E-E-106	包含層	灰釉陶器	小碗	—	残1.9	推5.0	灰釉	回転ナデ+回転糸切り	淡灰色	高台少し磨減、黒斑少しあり	0/12
80	91E-E-119	SK098	灰釉陶器	皿	—	残2.0	5.9	灰釉、ナデ	回転ナデ	灰色	篠岡	0/12
81	90G-E-102	包含層	山茶碗	碗A1	17.2	5.2	8.0	自然釉、回転ナデ	回転ナデ+回転糸切り	淡灰色	内底面・高台磨減、内底面煤	1/12
82	92B-E-143	包含層	山茶碗	碗	15.8	5.1	7.7	ヨコナデ+ナデオサエ	ヨコナデ	灰白色	板圧痕、高台稜痕少し	1/12
83	90H-E-106	SK613	山茶碗	碗C	13.0	5.1	5.4	回転ナデ	回転ナデ+回転糸切り	灰白色	口縁外面磨減、内底面煤、高台稜痕、均質手	1/12
84	91E-E-102	包含層	山茶碗	碗B2	推14.8	5.3	6.5	ナデ+オサエ	稜殻痕	灰白色	内面磨減 瀬戸	3/12
85	90H-E-103	SK615	山茶碗	碗B2	15.0	5.1	6.0	回転ナデ+ナデ	回転ナデ+ナデ	灰白色	高台稜痕、外底面板目痕、黒斑あり	3/12
86	92A-E-101	包含層	山茶碗	碗	12.2	4.4	5.6	回転ナデ	回転ナデ+ナデ	灰白色	高台稜痕、黒斑多い 美濃	3/12
87	92B-E-138	SK043	山茶碗	皿	7.9	2.1	4.6	回転ナデ	回転ナデ+回転糸切り	灰色	約1/3内外面とも煤	12/12
88	92B-E-136	SK045	山茶碗	皿	7.2	1.9	3.6	—	ナデ+回転糸切り	灰色	内面少し磨減 常滑	5/12
89	92B-E-137	SK048	山茶碗	皿	7.9	1.9	3.0	—	回転ナデ+回転糸切り	淡灰色	美濃	3/12
90	91E-E-113	SK091	山茶碗	皿C	7.9	1.4	4.9	回転ナデ+ナデ	回転ナデ+ナデ	灰白色	内底面磨減、内側面一部自然釉 美濃	12/12
91	90H-E-105	SK615	山茶碗	皿C	8.0	1.1	5.8	回転ナデ+ナデ	回転ナデ+回転糸切り	灰白色	—	8/12
92	90H-E-107	SK615	中国・青磁	蓮弁文碗	18.6	残4.7	—	—	片切彫	暗緑色	内側面少し磨減	1/12
93	91E-E-133	包含層	土師器	杯A	—	残1.5	推5.8	回転ナデ+ナデ	回転ナデ	明赤褐色	内底面磨減、外底面格子状圧痕あり	0/12
94	92B-E-121	包含層	土師器	杯	—	残1.5	—	ヨコ方向ヘラミダシ	不定方向ヘラミダシ	明赤褐色	畿内	0/12
95	91E-E-142	包含層	土師器	甕B	推11.9	残4.5	—	ナメハケメ+ナデ+ヨコハケメ	ヨコナデ+ナメハケメ	明赤褐色	内面全面煤付着	1/12
96	90I-E-102	包含層	土師器	甕B	17.2	残7.5	—	ヨコハケメ	ヨコナデ+ナメハケメ	明赤褐色	—	1/12
97	90G-E-103	包含層	土師器	甕B	31.2	残5.5	—	ヨコハケメ+ナメハケメ	ヨコナデ+ナメハケメ	淡褐色	—	1/12
98	92B-E-116	包含層	土師器	甕C	推15.6	残5.2	—	ヨコハケメ(粗)+ヨコナデ	ヨコナデ+ナメハケメ(粗)	灰白色	—	2/12
99	91E-E-125	包含層	土師器	甕C	21.6	残5.5	—	ヨコハケメ(粗)+ナデ	ヨコナデ+ナメハケメ(粗)	明赤褐色	内面やや黒色化	6/12
100	92B-E-118	包含層	土師器	甕C	推22.6	残3.9	—	ヨコナデ+ナデ	ヨコナデ+ナメハケメ	乳白～黒色	内面黒色化	1/12
101	92B-E-142	包含層	土師器	甕C	16.3	残3.7	—	ヨコナデ	ヨコナデ+ナメハケメ(粗)	淡褐色	—	2/12
102	92B-E-123	包含層	土師器	甕C	14.6	5.1	—	ヨコハケメ(細)+ナデ	ヨコナデ+ナメハケメ(粗)	赤褐色	—	1/12
103	92B-E-141	包含層	土師器	甕C	16.8	残4.6	—	ヨコハケメ(粗)+ヨコナデ	ヨコナデ+ナメハケメ(粗)	淡褐色	—	3/12
104	91E-E-146	包含層	土師器	甕C	—	残3.8	6.0	ナデ+ナデナデ	ナメハケメ	淡褐色	外面煤	0/12
105	91E-E-136	包含層	土師器	甕C	—	残6.1	推6.8	ナメハケメ+ヨコナデ	ナメハケメ+ナデ	淡褐色	—	0/12
106	92B-E-122	包含層	土師器	甕or甗？(把手)	—	—	—	ヨコナデ	—	灰白～淡赤褐色	—	0/12
107	91E-E-149	包含層	土師器	不明(脚部)	—	残14.7	—	—	ナメハケメ(粗)	淡褐色	煤付着、底部へうで面取り	0/12
108	92B-E-139	包含層	土師器	甕H	推28.3	残5.6	—	ヨコナデ	ヨコナデ+ナデオサエ	暗褐色	内外面煤少し	1/12
109	91E-E-148	SK321	土師器	鉢	—	—	—	—	—	暗褐色	—	12/12
110	92B-E-60	SK250	朝鮮	平碗	16.7	6.6	5.4	白化粧土+透明釉	白化粧土+透明釉	黒褐色	刷毛目茶碗	7/12
111	92B-E-61	SK250	朝鮮	德利	—	11.0	12.2	透明釉	透明釉	黒褐色	内面剥離あり	0/12
112	92B-E-59	SK250	常滑	甕	27.0	残14.3	—	指オサエ	—	暗褐色	刻絵あり	2/12
113	92B-E-34	SK250	瀬戸美濃	天目茶碗	11.0	6.3	4.1	鉄釉	鉄釉+錆釉	灰白色	—	1/12
114	92B-E-33	SK250	瀬戸美濃	天目茶碗	12.2	6.1	4.2	鉄釉	鉄釉+錆釉	灰白色	—	5/12
115	92B-E-35	SK250	瀬戸美濃	緑釉皿	11.0	2.9	5.2	灰釉	灰釉	灰白色	口縁部に煤付着	6/12
116	92B-E-36	SK250	瀬戸美濃	緑釉皿	9.8	2.4	4.2	灰釉	灰釉	灰白色	内面朱の痕跡	7/12
117	92B-E-37	SK250	瀬戸美濃	緑釉皿	10.0	2.4	4.0	灰釉	灰釉	灰白色	内面朱の痕跡	3/12
118	92B-E-51	SK250	瀬戸美濃	香炉	5.7	3.1	3.8	鉄釉+露胎	鉄釉+露胎	黄白色	—	5/12
119	92B-E-65	SK250	瀬戸美濃	鉦し皿	15.0	3.3	6.2	灰釉	灰釉	黄白色	—	1/12
120	92B-E-50	SK250	瀬戸美濃	蓋	13.0	0.8	—	錆釉	錆釉	黄白色	—	3/12
121	92B-E-64	SK250	瀬戸美濃	香炉	12.4	4.9	5.5	鉄釉	鉄釉	黄白色	—	4/12

清洲城下町遺跡

図版番号	登録番号	遺構番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	釉薬・調整／内面	釉薬・調整／外面	胎土	備考	残存率
122	92B-E-56	SK250	瀬戸美濃	浅鉢	23.0	8.0	8.4	鉄釉+露胎	鉄釉+露胎、ヘラケズリ	黄白色		4/12
123	92B-E-62	SK250	瀬戸美濃	筒形容器	15.4	残6.1	—	鉄釉+露胎	鉄釉	黄白色		9/12
124	92B-E-52	SK250	瀬戸美濃	筒形容器	15.4	残7.6	—	鉄釉	鉄釉	黄白色		4/12
125	92B-E-53	SK250	瀬戸美濃	筒形容器	22.0	残14.5	—	鉄釉	鉄釉	淡褐色		5/12
126	92B-E-54	SK250	瀬戸美濃	浅鉢	29.6	残4.7	—	鉄釉	鉄釉	黄白色		1/12
127	92B-E-57	SK250	瀬戸美濃	浅鉢	23.0	—	16.0	鉄釉	鉄釉	黄白色		6/12
128	92B-E-58	SK250	瀬戸美濃	四耳壺	12.0	44.5	16.3	露胎、ナデ+指ナシ	鉄釉+露胎、回転ヘラケズリ	黄白色	2本のねじり耳4カ所	12/12
129	92B-E-40	SK250	土師器	皿	13.0	2.4	6.8	ナデ	ナデ	黄白色	ワコロ成形、内外面煤付着	5/12
130	92B-E-44	SK250	土師器	皿	10.2	1.7	4.4	ナデ	ナデ	黄白色	ワコロ成形、内面煤付着	10/12
131	92B-E-43	SK250	土師器	皿	12.0	2.0	6.4	ナデ	ナデ	黄白色	ワコロ成形	8/12
132	92B-E-38	SK250	土師器	皿	12.0	2.1	6.4	ナデ	ナデ	黄白色	ワコロ成形	4/12
133	92B-E-41	SK250	土師器	皿	12.8	2.2	6.8	ナデ	ナデ	黄白色	ワコロ成形	7/12
134	92B-E-47	SK250	土師器	皿	11.8	2.2	5.4	ナデ	底部圧痕ナデ	黄白色	ワコロ成形	3/12
135	92B-E-48	SK250	土師器	皿	7.9	1.3	4.0	ナデ	ナデ	黄白色	ワコロ成形、内面煤付着	1/12
136	92B-E-45	SK250	土師器	皿	7.8	1.4	4.2	ナデ	ナデ	黄白色	ワコロ成形	3/12
137	92B-E-39	SK250	土師器	皿	7.6	1.5	4.0	ナデ	ナデ	黄白色	ワコロ成形	2/12
138	92B-E-42	SK250	土師器	皿	7.0	1.4	3.6	ナデ	ナデ	黄白色	ワコロ成形	2/12
139	92B-E-49	SK250	土師器	内耳鍋	21.4	残5.2	—	指ナシ+沈線	指ナシ+沈線	黄白色	全体煤付着	2/12
140	91E-E-30	SK119	瀬戸美濃	小椀	7.0	残2.6	—	鉄釉	鉄釉	黄白色		3/12
141	91E-E-31	SK119	土師器	皿	10.2	1.7	—	巾広に1回転ナデ	板状圧痕	黄灰色	非ワコロ成形、口縁ナデ付着	12/12
142	91E-E-33	SK119	土師器	皿	9.2	1.7	—	巾広に1回転ナデ	板状圧痕	黄灰～黒灰色	非ワコロ成形、口縁ナデ付着	1/12
143	91E-E-32	SK119	土師器	皿	10.3	1.7	—	巾広に1回転ナデ	板状圧痕	黄灰～黒灰色	非ワコロ成形、口縁ナデ付着	12/12
144	91D-E-19	SK067	瀬戸美濃	重圈皿	10.6	2.7	4.1	無釉	無釉、ナデ	黄色		6/12
145	91D-E-20	SK067	瀬戸美濃	重圈皿	10.6	2.6	4.3	無釉	無釉、ナデ	白～クリーム色	外底面墨書	6/12
146	91D-E-31	SK067	土師器	皿	18.3	3.1	9.4	横ナデ	回転糸切り+板状圧痕	黄灰～淡褐色	ワコロ成形	3/12
147	91D-E-22	SK067	土師器	皿	17.0	3.0	7.9	ナデ	ナデ	黄褐色	ワコロ成形	2/12
148	91D-E-26	SK067	土師器	皿	—	残2.3	7.8	横ナデ	横ナデ	黄灰色	ワコロ成形	0/12
149	91D-E-28	SK067	土師器	皿	9.3	1.5	6.0	横ナデ	横ナデ	黄灰色	ワコロ成形、口縁ナデ付着	2/12
150	91D-E-32	SK067	土師器	皿	8.0	1.0	5.4	ナデ	ナデ	灰黄色	ワコロ成形、口縁ナデ付着	6/12
151	91D-E-29	SK067	土師器	皿	5.6	1.2	3.5	横ナデ	横ナデ+指ナシ	黄灰色	非ワコロ成形、外底面煤付着	3/12
152	91D-E-30	SK067	土師器	皿	6.1	1.2	4.6	横ナデ+方向ナデ?	横ナデ+ナシ	淡褐色	非ワコロ成形	9/12
153	92A-E-2	SK024	瀬戸美濃	天目茶碗	12.4	残5.8	—	鉄釉	鉄釉+錆釉、回転ヘラケズリ	灰白～黄白色		4/12
154	92A-E-5	SK024	瀬戸美濃	台付碗	11.6	残4.1	—	鉄釉	鉄釉	黄白色	焦げ痕あり	3/12
155	92A-E-8	SK024	瀬戸美濃	天目茶碗	11.2	残4.9	—	鉄釉	鉄釉+露胎	黄灰色	口縁端部に重ね焼き痕	7/12
156	92A-E-4	SK024	瀬戸美濃	端反皿	9.8	2.3	5.0	灰釉	灰釉、ナデ	黄灰色	外底面輪ナシ	2/12
157	92A-E-3	SK024	瀬戸美濃	重圈皿	9.8	2.9	4.0	無釉	無釉、ナデ	淡褐色	口縁ナデ付着、同心円文	2/12
158	92A-E-20	SK024	土師器	皿	11.4	2.7	6.0	横ナデ	横ナデ	黄褐色	ワコロ成形、外底面墨書「七」	7/12
159	92A-E-18	SK024	土師器	皿	10.8	2.6	6.8	横ナデ	横ナデ	黄褐色	ワコロ成形、外底面墨書「正月吉日」?	3/12
160	92A-E-19	SK024	土師器	皿	—	残1.6	6.4	横ナデ	横ナデ	暗黄灰色	ワコロ成形、外底面墨書「口」	0/12
161	92A-E-21	SK024	土師器	皿	11.0	2.7	5.6	横ナデ	横ナデ	黄褐色	ワコロ成形、外底面墨書「五口」	4/12
162	92A-E-12	SK024	土師器	皿	12.0	残3.1	7.8	横ナデ×2段	横ナデ	黄灰色	ワコロ成形、内面に焦げ痕が若干残る	30/12
163	92A-E-17	SK024	土師器	皿	12.0	7.6	2.8	横ナデ	横ナデ	灰褐色	ワコロ成形、口縁ナデ付着	10/12
164	92A-E-16	SK024	土師器	皿	11.8	2.3	7.2	横ナデ	回転糸切り+板状圧痕	灰褐色	ワコロ成形、口縁ナデ付着	3/12
165	92A-E-15	SK024	土師器	皿	11.8	2.4	6.6	横ナデ	横ナデ	黄褐～黄灰色	ワコロ成形、口縁ナデ付着	7/12
166	92A-E-13	SK024	土師器	皿	10.7	2.3	5.6	ナデ	ナデ	灰褐色	ワコロ成形、内側面ナデ付着	2/12
167	92A-E-10	SK024	土師器	皿	10.6	2.1	6.4	横ナデ	横ナデ	暗灰褐色	ワコロ成形、焦げ痕あり	3/12
168	92A-E-9	SK024	土師器	皿	7.4	1.8	4.5	横ナデ	回転糸切り+板状圧痕	黒褐色	ワコロ成形、口縁ナデ付着、全面焦げる	8/12
169	92A-E-14	SK024	土師器	皿	8.0	1.3	3.8	横ナデ	回転糸切り+板状圧痕	黄灰色	ワコロ成形	2/12
170	92A-E-6	SK024	土師器	皿	4.8	0.8	—	方向ナデ	指ナシ	黄白色	非ワコロ成形、焼成後穿孔	12/12
171	92A-E-7	SK024	土師器	皿	5.1	1.3	—	方向ナデ	指ナシ	灰黄色	非ワコロ成形	6/12
172	92A-E-25	SK024	中国・白磁	小碗	—	残1.5	2.2	透明釉+露胎	透明釉	白色		0/12
173	92A-E-1	SK024	瀬戸美濃	小壺	—	残5.0	4.2	鉄釉	鉄釉+露胎、ナデ	黄白～灰色	露胎部半分に煤付着	0/12
174	92A-E-11	SK024	瀬戸美濃	浅鉢	31.1	残5.6	—	錆釉	錆釉	淡褐色	櫛目12本	2/12
175	92A-E-23	SK024	土師器	内耳鍋	26.6	残14.7	—	横ナシ	横ナデ+指ナシ+ヘラケズリ	灰褐色	内底面・外面煤付着	12/12
176	92A-E-22	SK024	土師器	羽付鍋	37.0	残20.3	—	指ナシ+ナデ+ナシ	指ナシ+ナデ+ナシ+ヘラケズリ	黄灰色	内底面・外面鋳部以下煤付着	3/12
177	92A-E-24	SK024	土師器	焙烙鍋	34.2	残7.0	—	横ナシ	ナデ+指ナシ+ヘラケズリ+砂敷?	暗灰褐色	外面煤付着	9/12
178	91E-E-14	SK109	瀬戸美濃	天目茶碗	12.0	6.1	4.6	鉄釉	鉄釉+露胎	淡灰褐色	胎土に褐色土を用いる	5/12
179	91E-E-17	SK109	瀬戸美濃	緑釉皿	10.8	2.4	5.2	灰釉	灰釉	灰白色	外底面墨書「文」	4/12
180	91E-E-16	SK109	瀬戸美濃	端反皿	8.4	残2.4	4.0	灰釉、印花	灰釉	灰褐色		3/12
181	91E-E-15	SK109	中国・青花	皿	10.4	2.6	3.5	透明釉+呉須	透明釉+呉須+露胎	灰白～明褐色	漆継痕	4/12
182	91E-E-18	SK109	瀬戸美濃	丸皿	10.8	残2.2	—	灰釉	灰釉	黄灰色		4/12
183	91E-E-24	SK109	土師器	皿	6.4	1.2	—	ナデ	横ナデ+指圧痕	黄褐色	非ワコロ成形	4/12
184	91E-E-23	SK109	土師器	皿	10.2	2.0	5.8	ナデ	ナデ	淡褐色	ワコロ成形	2/12
185	91E-E-20	SK109	土師器	皿	14.0	2.5	5.6	ナデ	ナデ	淡褐色	ワコロ成形、口縁ナデ付着	1/12
186	91E-E-21	SK109	土師器	皿	14.2	2.0	9.4	ナデ	ナデ	淡褐色	ワコロ成形	1/12
187	91E-E-19	SK109	土師器	皿	15.4	残3.1	—	ナデ	ナデ	暗黄灰色	ワコロ成形、表面が若干こげている	3/12
188	91E-E-22	SK109	土師器	皿	16.8	3.2	9.2	ナデ	ナデ	暗黄褐色	ワコロ成形	1/12
189	91E-E-27	SK109	瀬戸美濃	浅鉢	31.0	残4.4	—	錆釉	錆釉	淡褐色	櫛目16本(3.1cm)	2/12
190	91E-E-26	SK109	瀬戸美濃	浅鉢	33.0	残3.8	—	錆釉	錆釉	黄白色		2/12

図版番号	登録番号	遺構番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	釉薬・調整／内面	釉薬・調整／外面	胎土	備考	残存率
191	91E-E-25	SK109	瀬戸美濃	描鉢	30.2	残12.2	—	錆釉	錆釉	黄灰色	櫛目20本(4.1cm)、内面磨減	1/12
192	91E-E-3	SK109	瀬戸美濃	瓶?	—	残3.9	—	錆釉	錆釉、ナデ+ヘラケズリ	明褐色		0/12
193	91E-E-28	SK109	瓦器	火鉢				ケズリ+ナデ+指圧痕+ヘラナデ	ミダキ+棒状工具横ナデ+ケズリ+砂敷?	灰褐色		(2/12)
194	91D-E-1	包含層	瀬戸美濃	緑釉皿	10.4	2.2	5.2	灰釉	灰釉	黄白色	内面・外側面磨減	12/12
195	91D-E-2	包含層	瀬戸美濃	緑釉皿	10.0	2.1	4.4	灰釉	灰釉	黄白色	内底面トナ痕	12/12
196	91D-E-3	包含層	瀬戸美濃	緑釉皿	9.6	2.8	4.5	灰釉	灰釉	黄白色	内面少し磨減	12/12
197	91D-E-4	包含層	瀬戸美濃	緑釉皿	9.8	2.3	4.4	灰釉	灰釉	灰白色	内外面磨減、内底面トナ痕	12/12
198	91D-E-5	包含層	瀬戸美濃	緑釉皿	8.9	2.1	3.0	鉄釉	鉄釉	黄白色		12/12
199	91D-E-6	包含層	瀬戸美濃	重圈皿	10.2	2.9	6.2	無釉	無釉	灰褐色		7/12
200	91D-E-7	包含層	土師器	皿	6.5	1.2	5.0	横ナデ+一方向ナデ	横ナデ+指ナデ	黄灰色	非ロクロ成形	12/12
201	91D-E-8	包含層	土師器	皿	7.0	1.4	5.2	横ナデ+ナデ	横ナデ+指ナデ	黄褐色	非ロクロ成形、歪大きい	12/12
202	91D-E-9	包含層	土師器	皿	7.0	1.1	5.3	ナデ	横ナデ+指ナデ	黄褐色	非ロクロ成形	12/12
203	91D-E-10	包含層	土師器	皿	6.8	1.1	5.0	横ナデ+ナデ	横ナデ+指ナデ	淡褐色	非ロクロ成形	12/12
204	91E-E-6	SK417	瀬戸美濃	描鉢		残2.8	—	錆釉	錆釉	黄褐色		1/12
205	91E-E-7	SK417	瀬戸美濃	平碗?	—	残1.6	5.2	灰釉	灰釉、回転ヘラケズリ	黄色		0/12
206	91E-E-29	SK417	瀬戸美濃	内耳鍋	23.4	12.0	12.1	錆釉、ナデ	ヘラケズリ+回転ヘラケズリ	黄白色	外底面こげ、片口下焼成後穿孔	1/12
207	91E-E-4	SK417	瀬戸美濃	内耳鍋	27.0	残10.7	—	錆釉	錆釉	灰白色	内面磨減、外面煤付着	3/12
208	91E-E-5	SK417	瀬戸美濃	内耳鍋	25.4	残10.0	—	錆釉	錆釉、ケズリ	黄白色	外面煤付着?	4/12
209	89G-E-1	SK626	瀬戸美濃	丸碗	10.0	5.6	4.0	長石釉	長石釉	灰白色	外面底部煤付着	12/12
210	89G-E-2	SK626	瀬戸美濃	小碗	7.6	残3.2	—	長石釉	長石釉	灰白色	外側面重ね焼き痕	3/12
211	89G-E-7	SK626	土師器	皿	10.6	2.1	7.0	横ナデ	回転糸切り+板状圧痕	淡灰黄色	内外半面ナデ付着	3/12
212	89G-E-6	SK626	土師器	皿	5.3	1.0	—	ナデ	指ナデ	淡黄褐色	非ロクロ成形	10/12
213	89G-E-5	SK626	中国・青花	皿	10.4	3.2	6.8	透明釉+呉須	透明釉+呉須	白色	二次的に火を受ける?	3/12
214	89G-E-4	SK626	中国・青花	皿	11.0	2.4	6.6	透明釉+呉須	透明釉	白色		1/12
215	89G-E-3	SK626	中国・青花	大皿Ⅱ類	—	—	—	透明釉+呉須	透明釉+呉須	淡褐色		1/12
216	89G-E-8	SK626	瓦	丸瓦				ヘラケズリ+布目痕+縄痕	ナデ+ヘラケズリ	白色		-
217	91E-E-35	包含層	瀬戸美濃	台付碗	—	残1.6	5.6	錆釉	錆釉	黄褐～淡褐色	外底面墨書「鬼子母」	0/12
218	91E-E-34	包含層	土師器	壺?	—	残4.7	5.5	横ナデ	横ナデ	灰白～淡褐色		0/12
219	91D-E-36		瀬戸美濃	小碗	7.0	3.4	3.4	?釉	?釉、線刻	灰色	内面金属(銅?)付着	6/12
220	92A-E-27	包含層	中国・白磁	割高台皿	7.6	3.0	3.5	白磁釉?	白磁釉?、面取り	白色	口縁八角形、外底面墨書「口」	3/12
221	91D-E-34	瀬戸美濃	腰折皿	—	残1.1	2.3	灰釉	灰釉	灰白色	内底面トナ痕、外底面墨書「十」		0/12
222	92B-E-66	SK053	中国・青花	碗	13.2	残5.1	—	透明釉+呉須	透明釉+呉須	白色	口縁部欠	3/12
223	92B-E-68	包含層	土師器	焼塩壺	5.6	残6.3	—	横ナデ	ナデ	淡赤褐色		3/12
224	91D-E-16	-	瀬戸美濃	緒桶	29.2	残10.8	—	鉄釉	鉄釉	黄白色	簾張付・ヘラ状工具による文様	3/12
225	92B-E-69	包含層	常滑	筒形容器	24.0	残6.4	—			黒灰色	焼締、外面自然釉	2/12
226	90I-E-1	包含層	備前	盤	31.0	6.0	12.6	火摩	火摩、ケズリ	赤褐色	外側面重ね焼き痕	1/12
227	91D-E-37		瓦器	筒形容器	22.8	18.5	26.0	横ナデ	ミダキ?+横ナデ+砂敷	灰白色		3/12
281	92B-E-3	SK055	肥前・青磁染付	碗	—	残6.2	5.3	白磁釉+呉須	青磁釉+白磁釉+呉須	白色		0/12
282	92B-E-7	SK055	肥前・青磁染付	碗	11.2	6.2	4.0	透明釉+呉須	青磁釉+透明釉+呉須	灰白色		3/12
283	92B-E-2	SK055	瀬戸?	湯呑	8.6	6.0	3.2	透明(灰?)釉+呉須釉	透明(灰?)釉+呉須釉	乳白色		2/12
284	92B-E-5	SK055	瀬戸美濃	碗	8.7	5.8	3.9	鉄釉+灰釉	鉄釉+灰釉	黄白色		1/12
285	92B-E-4	SK055	瀬戸美濃	碗	—	残3.5	3.8	透明(灰)釉	透明(灰)釉	黄白色		0/12
286	92B-E-1	SK055	肥前・染付	皿	13.8	2.6	7.0	透明釉+呉須+露胎	透明釉+呉須、回転ヘラナデ+砂敷	白色	内底面輪禿、重ね焼き痕	11/12
287	92B-E-6	SK055	瀬戸美濃	鍋	20.0	残7.4	—	柿釉	柿釉	黄白色		4/12
288	92B-E-9	SK055	瀬戸美濃	瓶掛	—	残6.2	17.8	錆釉(薄)	緑釉、ヘラケズリ	黄白色	内面磨減、外底面穴1箇所	0/12
289	92B-E-8	SK055	土師器	焙烙鍋	32.6	残4.3	—	?	ナデ+ケズリ?	明褐色	外底面スタンプ、外面煤付着	1/12
290	92B-E-21	SE001	瀬戸美濃・染付	碗	10.0	5.0	3.2	透明釉+コバルト	透明釉+コバルト	白色	銅版プリント、コバルト染付	8/12
291	92B-E-29	SE001	肥前?・染付	碗	12.0	5.9	4.0	透明釉+呉須	透明釉+呉須	灰白色		7/12
292	92B-E-19	SE001	肥前・赤絵磁器	壺類?	—	残1.7	4.6	露胎	透明釉+赤絵	灰白色		0/12
293	92B-E-15	SE001	瀬戸美濃	碗	8.7	残4.2	—	透明(灰)釉	透明(灰)釉+呉須	灰白色		4/12
294	92B-E-30	SE001	瀬戸美濃・陶胎染付	湯呑	7.6	6.4	3.5	透明釉+呉須	透明釉+呉須	灰白色		5/12
295	92B-E-18	SE001	瀬戸美濃	灯明皿?	10.0	1.8	5.4	錆釉	錆釉、回転ヘラケズリ	灰褐色	内底面輪トナ痕	8/12
296	92B-E-28	SE001	瀬戸美濃?・染付	皿	13.2	2.8	6.8	透明釉+呉須+露胎	透明釉	灰白色		1/12
297	92B-E-23	SE001	肥前・染付	蓋	6.4	残1.9	—	透明釉	透明釉+呉須	白色	蛸唐草文	6/12
298	92B-E-24	SE001	肥前・染付	蓋	6.1	2.1	—	透明釉	透明釉+呉須	白色	蛸唐草文	6/12
299	92B-E-20	SE001	瀬戸美濃	仏具	—	残1.8	4.4	?	露胎	黄白色		0/12
300	92B-E-16	SE001	瀬戸美濃	土瓶	9.2	残5.7	—	灰釉+透明釉(薄)	灰釉	灰白色		2/12
301	92B-E-26	SE001	瀬戸美濃	徳利	3.7	残8.5	—	鉛釉?	鉛釉?	灰白色	尾呂徳利?	7/12
302	92B-E-27	SE001	瀬戸美濃	花瓶	—	残11.5	9.8	灰釉	灰釉+錆釉	灰色		0/12
303	92B-E-12	包含層	瀬戸美濃	湯呑	9.5	6.0	3.8	灰釉	灰釉+鉄釉	灰白色		2/12

清洲城下町遺跡

図版番号	登録番号	遺構番号	産地・材質	器種	口径	器高	底径	釉薬・調整／内面	釉薬・調整／外面	胎土	備考	残存率
304	92B-E-11	包含層	？・染付	皿	11.9	2.5	7.3	透明釉+呉須	透明釉+呉須+露胎、 回転ヘラナズリ	黄灰色	外底面輪切痕	12/12
305	92B-E-13	包含層	瀬戸美濃	搦鉢	33.0	残8.2	—	錆釉	錆釉	黄色	櫛目9本以上	2/12
306	92B-E-14	包含層	瀬戸美濃	筒形容器	25.4	残8.8	—	鉄釉	鉄釉	黄白色		3/12
307	92B-E-25	SE003	肥前・染付	杯	6.4	5.3	3.4	透明釉+呉須	透明釉+呉須	白色	口紅、銘「成化年製」	2/12
308	91D-E-15	SD005	瀬戸美濃	香炉？	—	残3.5	7.6	露胎	灰釉+緑釉+露胎、回 転ヘラナズリ	黄白色	近世、脚1ヶ残	0/12
309	91D-E-17	SD005	瀬戸美濃	瓶(汁次)	4.6	10.6	7.2	鉄釉+露胎	鉄釉+灰釉流し+露胎、 ヘラ切り後横ナズ	黄白色		12/12
310	92B-E-10	SK042	瀬戸美濃	搦鉢	34.4	残12.5	—	鉄(錆)釉	鉄(錆)釉、ナズナズリ	黄色	櫛目21本(4.6cm)、片口あり	2/12

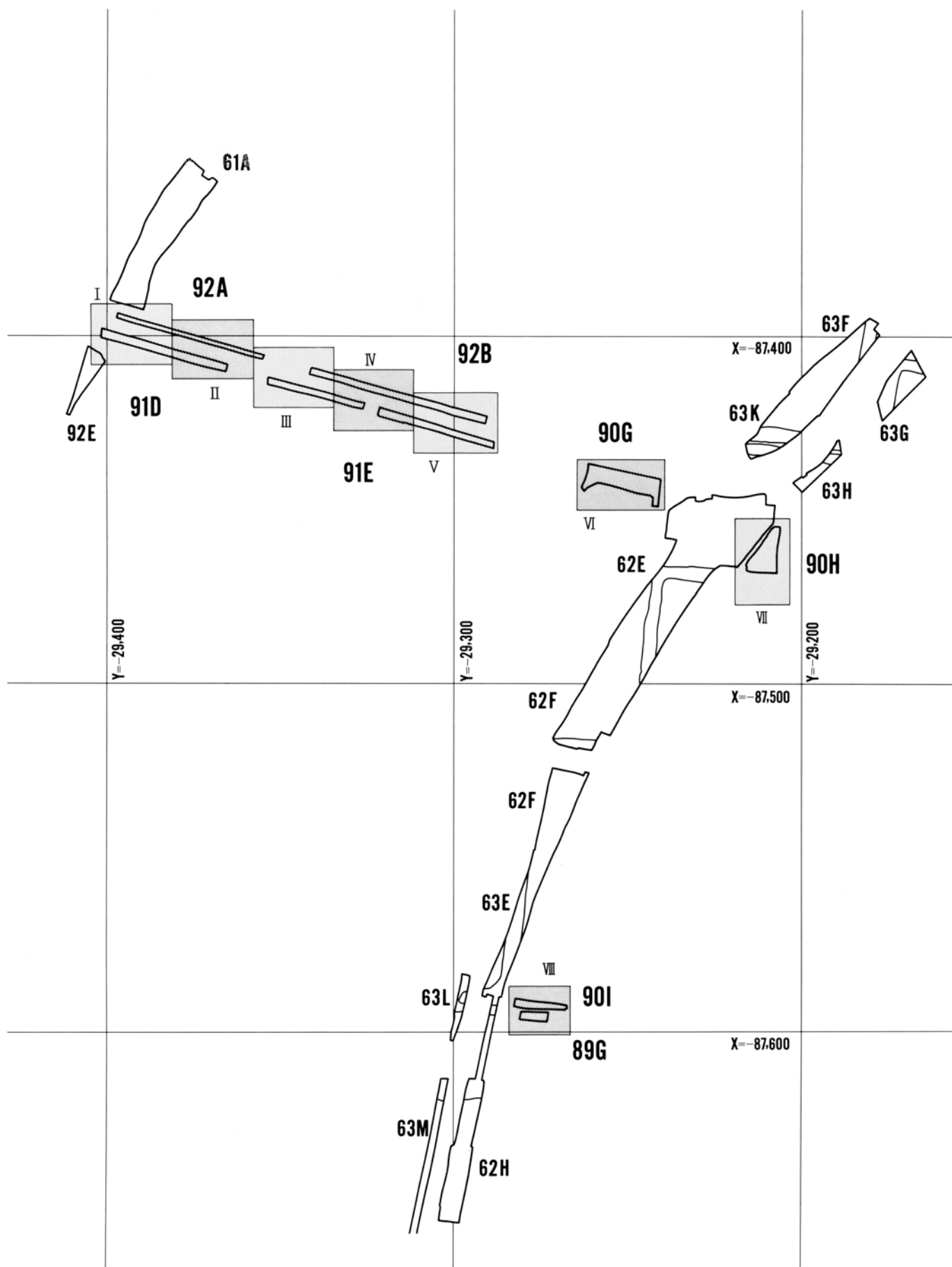
図版番号	登録番号	遺構番号	種別	材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)
228	89G-W-1	SK626	柿経	—	残26.0	3.3	—
229	89G-W-2	SK626	柿経	—	残28.5	3.5	—
230	89G-W-3	SK626	柿経	—	残27.0	3.5	—
231	89G-W-4	SK626	柿経	—	残27.0	3.5	—
232	89G-W-5	SK626	柿経	—	残27.0	3.3	—
233	89G-W-6	SK626	柿経	—	残26.5	3.6	—
234	89G-W-7	SK626	柿経	—	残25.0	3.5	—
235	89G-W-8	SK626	柿経	—	残25.0	3.5	—
236	89G-W-9	SK626	柿経	—	残25.5	3.5	—
237	89G-W-10	SK626	柿経	—	残20.0	3.5	—
238	89G-W-11	SK626	柿経	—	残19.5	3.5	—
239	89G-W-12	SK626	柿経	—	残16.5	3.5	—
240	89G-W-13	SK626	柿経	—	残16.0	3.8	—
241	89G-W-14	SK626	柿経	—	残16.5	3.7	—
242	89G-W-15	SK626	柿経	—	残16.5	3.6	—
243	89G-W-16	SK626	柿経	—	残16.0	3.6	—
244	89G-W-17	SK626	柿経	—	残16.0	3.6	—
245	89G-W-18	SK626	柿経	—	残15.5	3.7	—
246	89G-W-19	SK626	柿経	—	残18.5	3.5	—
247	89G-W-20	SK626	柿経	—	残18.6	3.6	—
248	89G-W-21	SK626	柿経	—	残18.5	3.5	—
249	89G-W-22	SK626	柿経	—	残19.0	3.8	—
250	89G-W-23	SK626	柿経	—	残18.8	3.8	—
251	89G-W-24	SK626	柿経	—	残19.0	3.8	—
252	89G-W-25	SK626	柿経	—	残19.0	3.7	—
253	89G-W-26	SK626	柿経	—	残34.0	3.5	—

図版番号	登録番号	遺構番号	種別	材質	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)
254	89G-W-27	SK626	柿経	—	残33.5	3.5	—
255	89G-W-28	SK626	柿経	—	残34.0	3.6	—
256	89G-W-29	SK626	柿経	—	残34.2	3.5	—
257	89G-W-30	SK626	柿経	—	残24.4	3.5	—
258	89G-W-31	SK626	柿経	—	残24.7	3.6	—
259	89G-W-32	SK626	柿経	—	残24.5	3.7	—
260	89G-W-33	SK626	柿経	—	残24.5	3.6	—
261	89G-W-34	SK626	柿経	—	残24.2	3.5	—
262	89G-W-35	SK626	柿経	—	残24.2	3.5	—
263	89G-W-36	SK626	柿経	—	残19.2	3.5	—
264	89G-W-37	SK626	柿経	—	残19.0	3.4	—
265	89G-W-38	SK626	柿経	—	残19.0	3.6	—
267	89G-W-39	SK626	柿経	—	残18.8	3.5	—
268	91D-S-4	包含層	硯	泥質凝灰岩	残6.5	6.0	0.8
269	92B-S-2	包含層	硯	泥質凝灰岩	残5.9	6.0	1.6
270	92A-S-1	包含層	硯	凝灰岩	残8.8	残9.9	1.5
271	91D-S-3	SD006	砥石	凝灰岩	6.5	1.7	2.0
272	91D-S-2	包含層	砥石	泥質凝灰岩	残7.2	残3.8	残0.5
273	91D-S-1	SK270	砥石	凝灰岩	残8.8	5.1	1.0
274	92B-S-1	包含層	砥石	泥質凝灰岩	6.1	残4.0	1.1
275	91E-S-2	SK421	砥石	泥岩	残17.2	5.0	2.3
276	91D-S-5	包含層	石臼	ヒン岩	—	残7.6	残5.3
277	91D-S-6	SK270	石臼	ハンレイ岩	—	—	残4.0
278	91D-S-7	包含層	石臼	ハンレイ岩	—	—	1.8
279	91E-S-1	SK110	宝篋印塔	安山岩	残26.7	10.3	10.1
280	92B-S-4	SK250	宝篋印塔	ヒン岩	残21.7	26.7	16.2

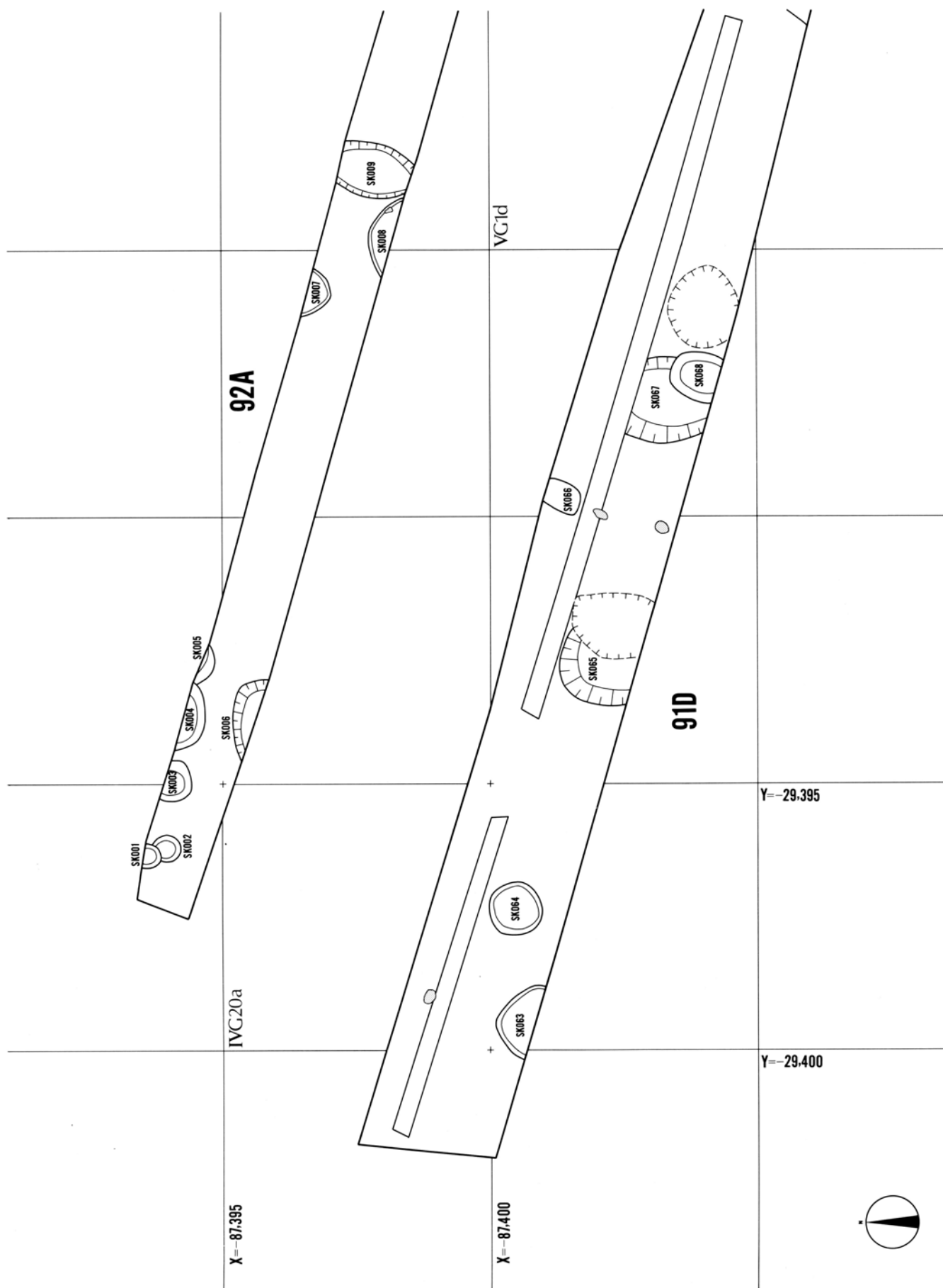
図 版

調査区位置図 S = 1 : 1500

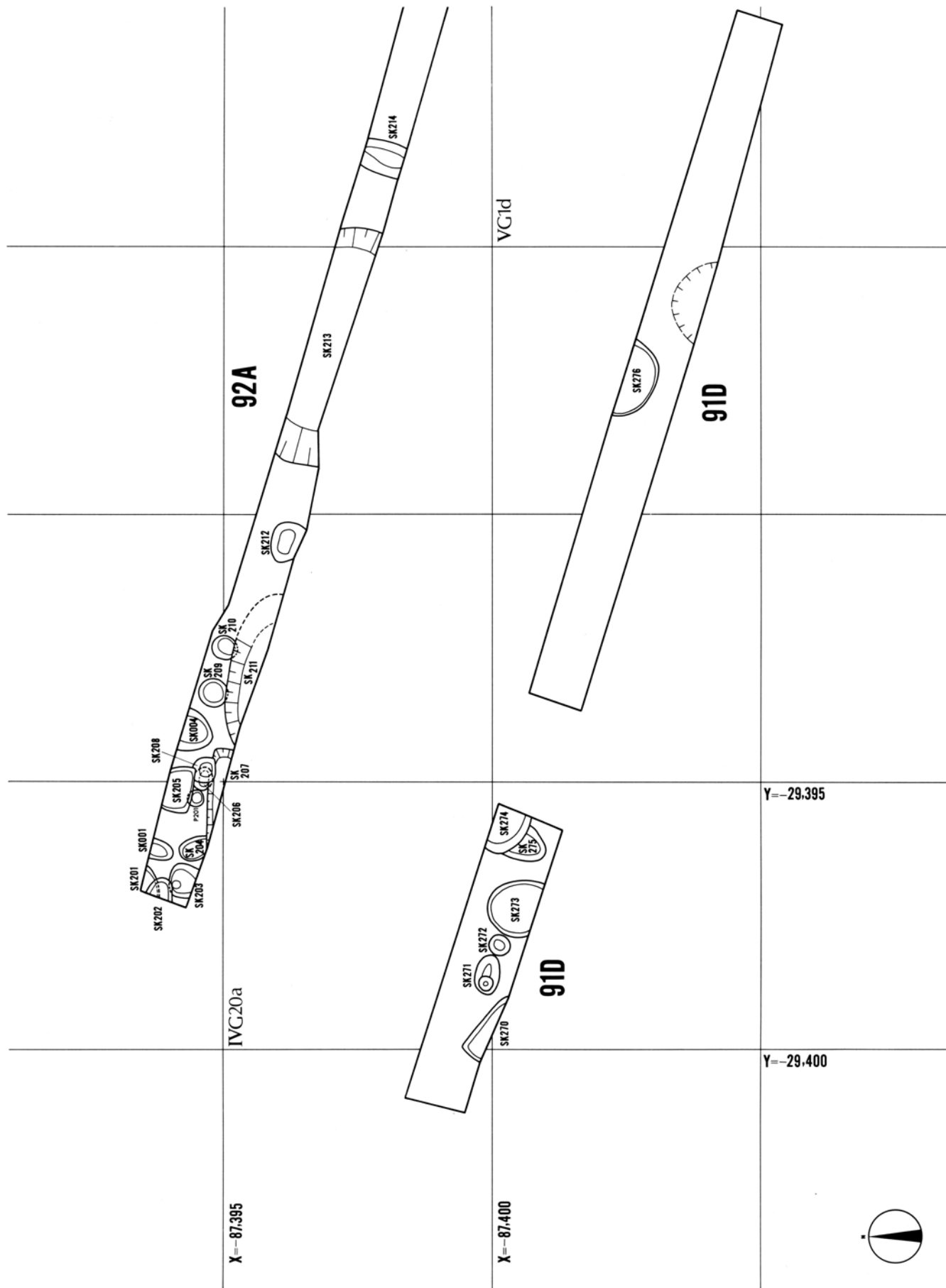
遺構図 S = 1 : 200



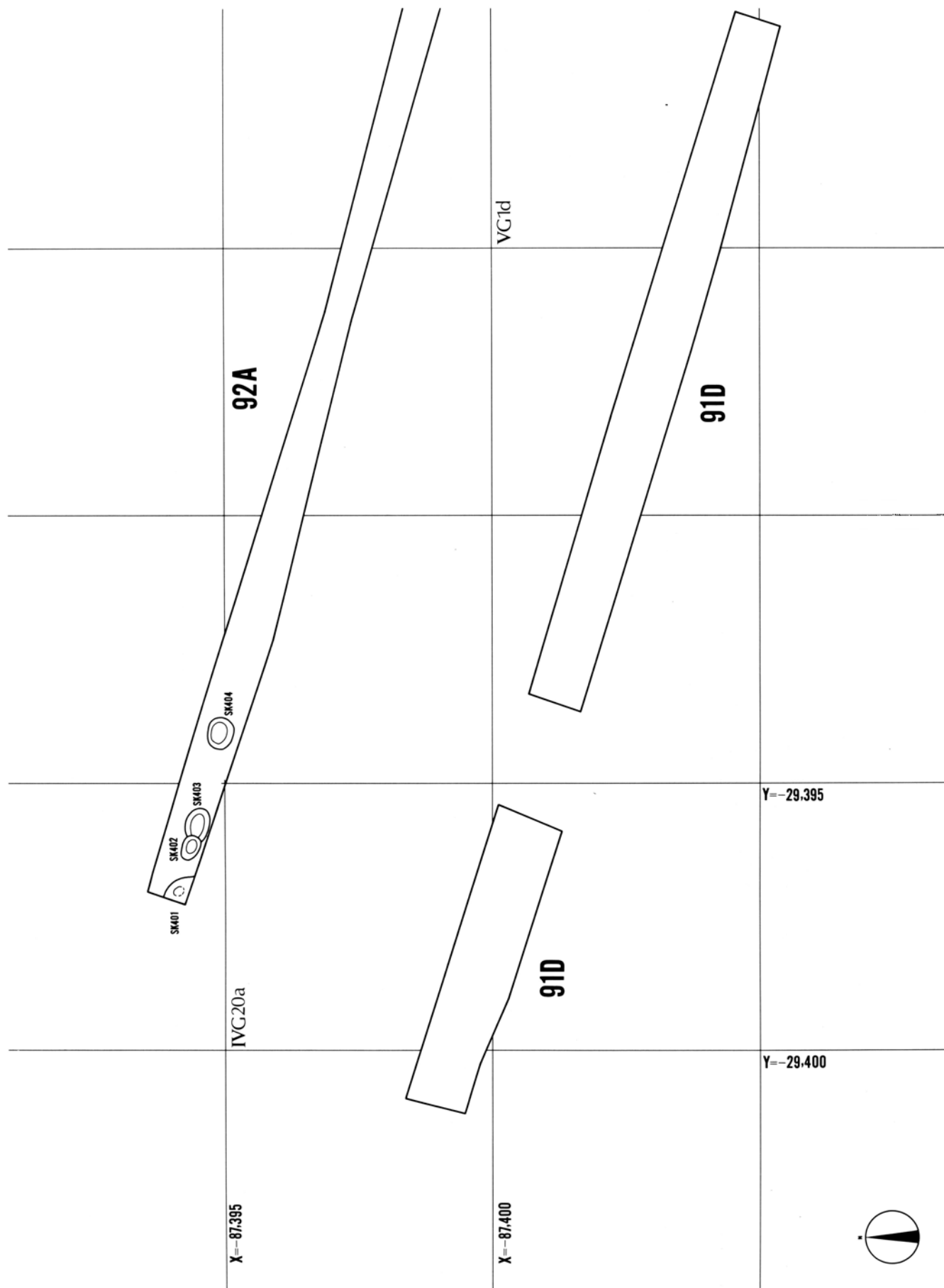
図版 1 調査区位置図



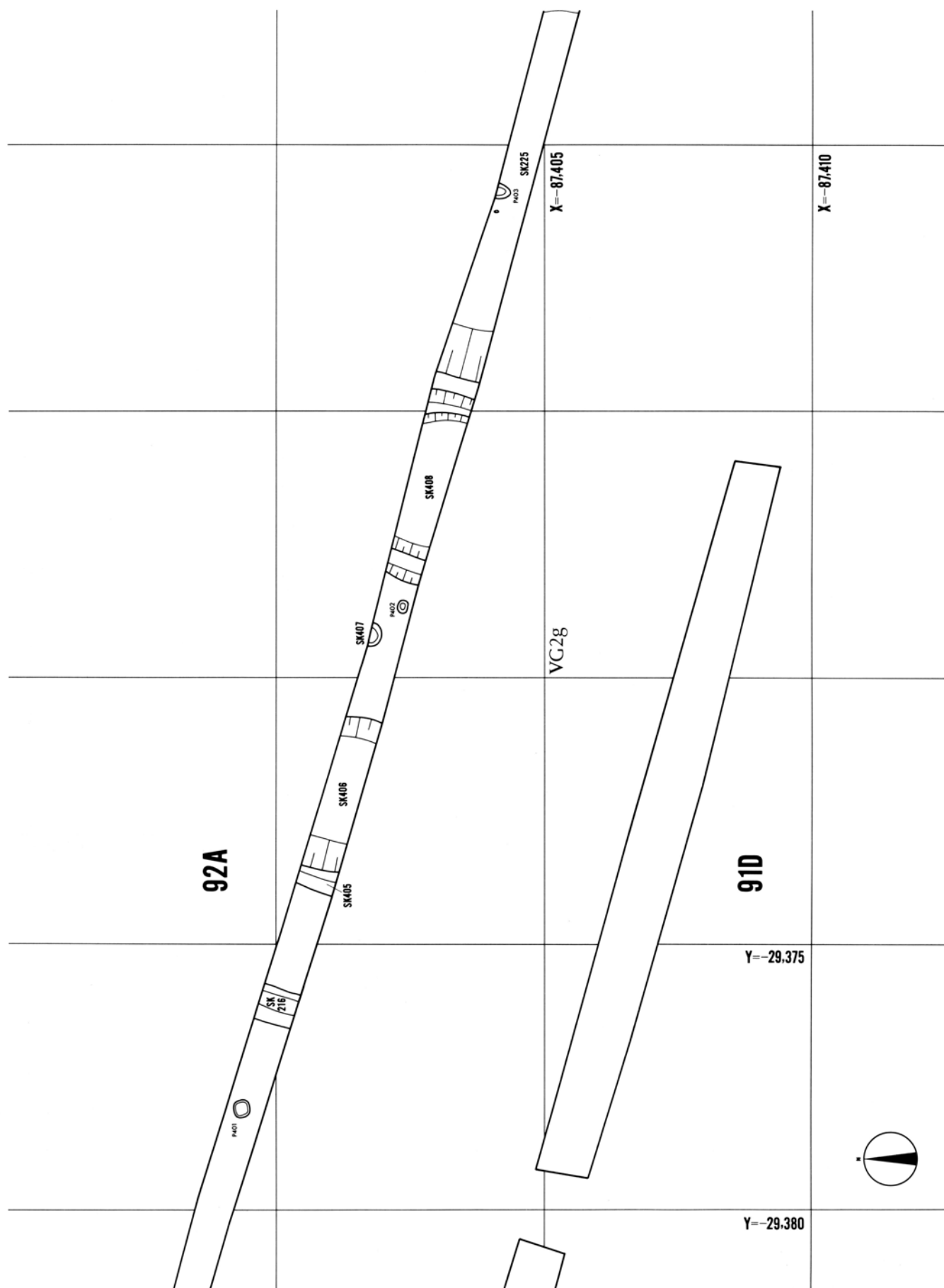
図版 2 遺構図 I (第 1 面)



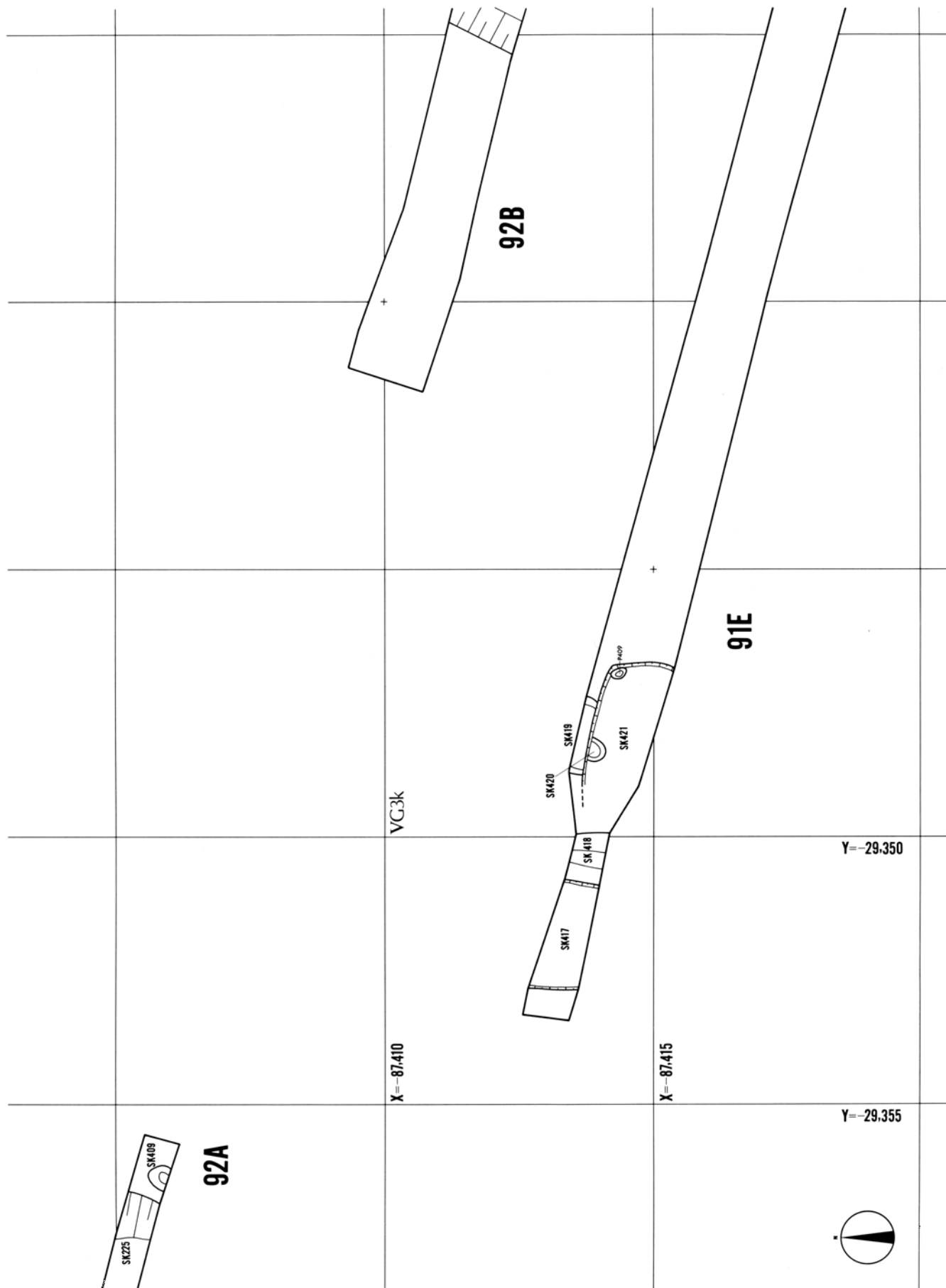
図版 3 遺構図 I (第 2 面)



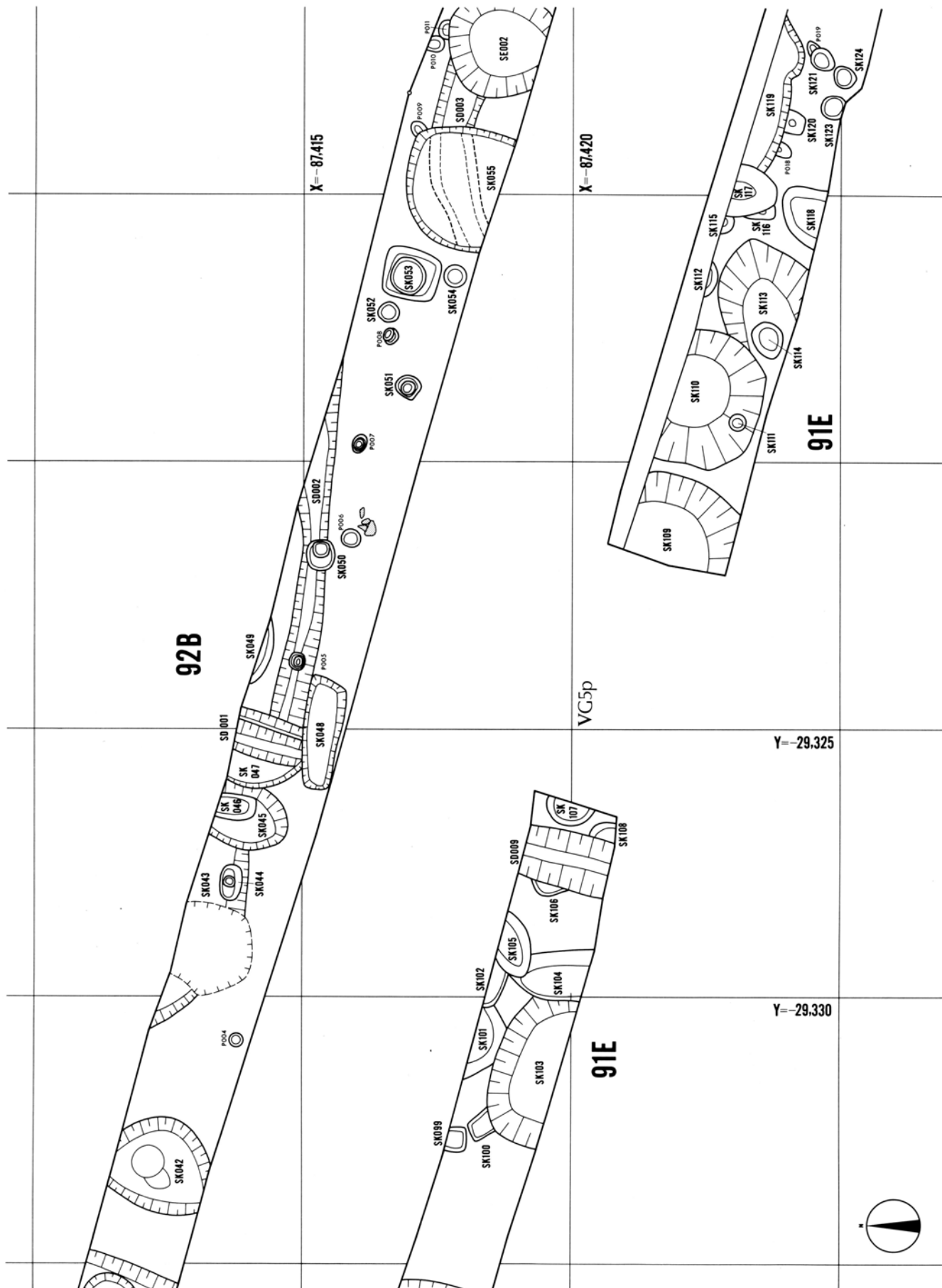
図版 4 遺構図 I (第 3 面)



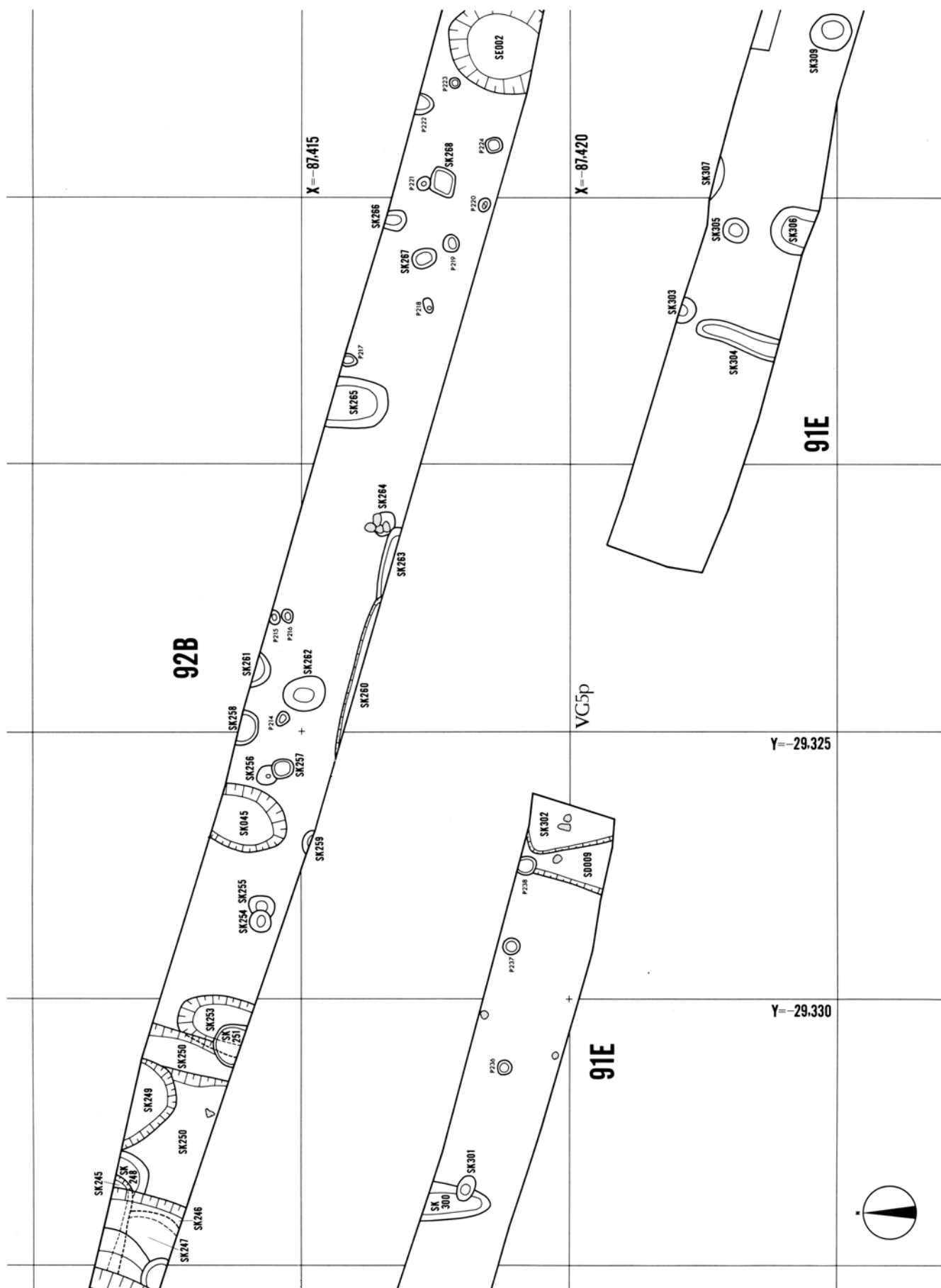
図版7 遺構図Ⅱ（第3面）



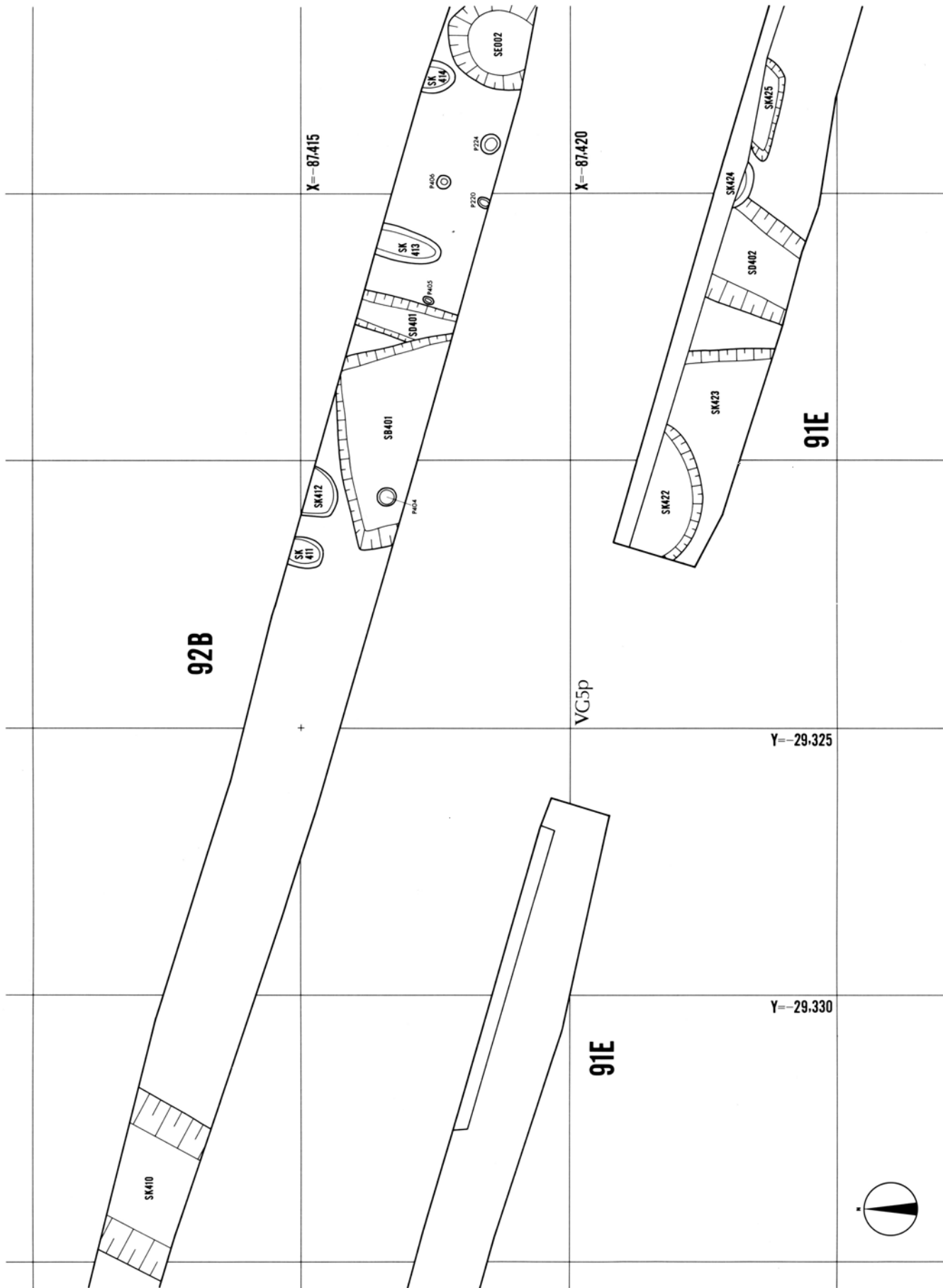
図版10 遺構図Ⅲ（第3面）



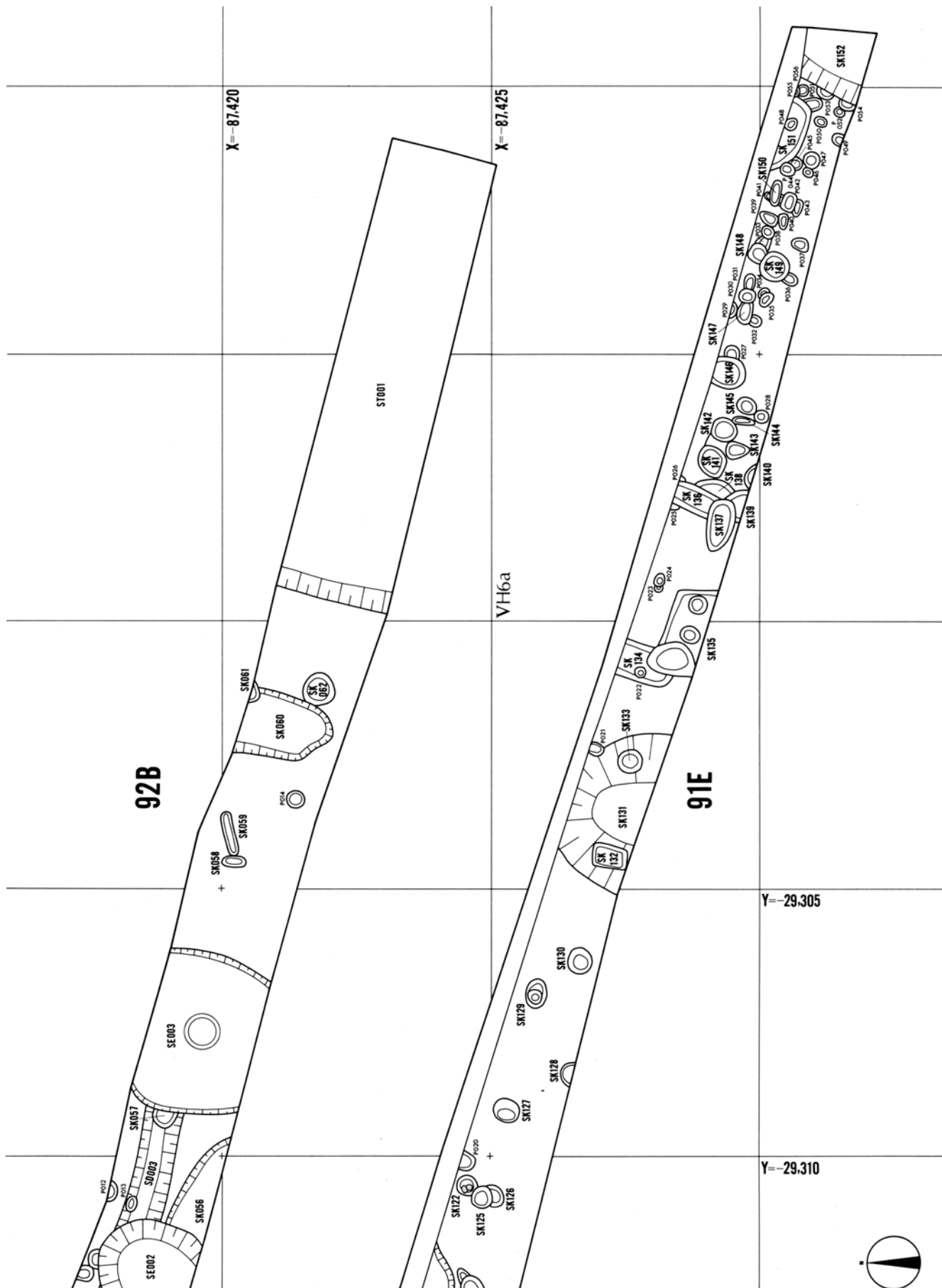
図版11 遺構図Ⅳ（第1面）



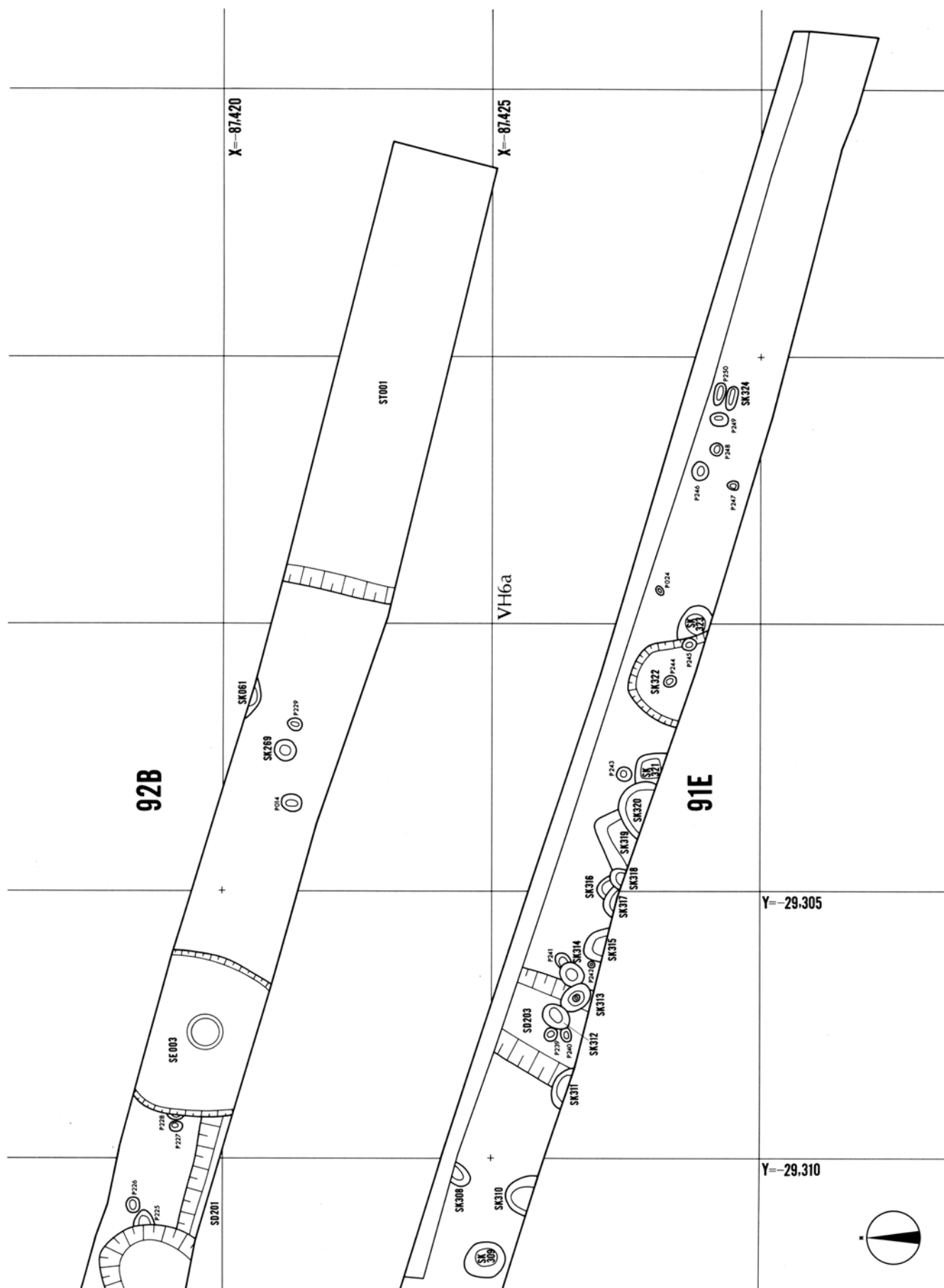
図版12 遺構図Ⅳ（第2面）



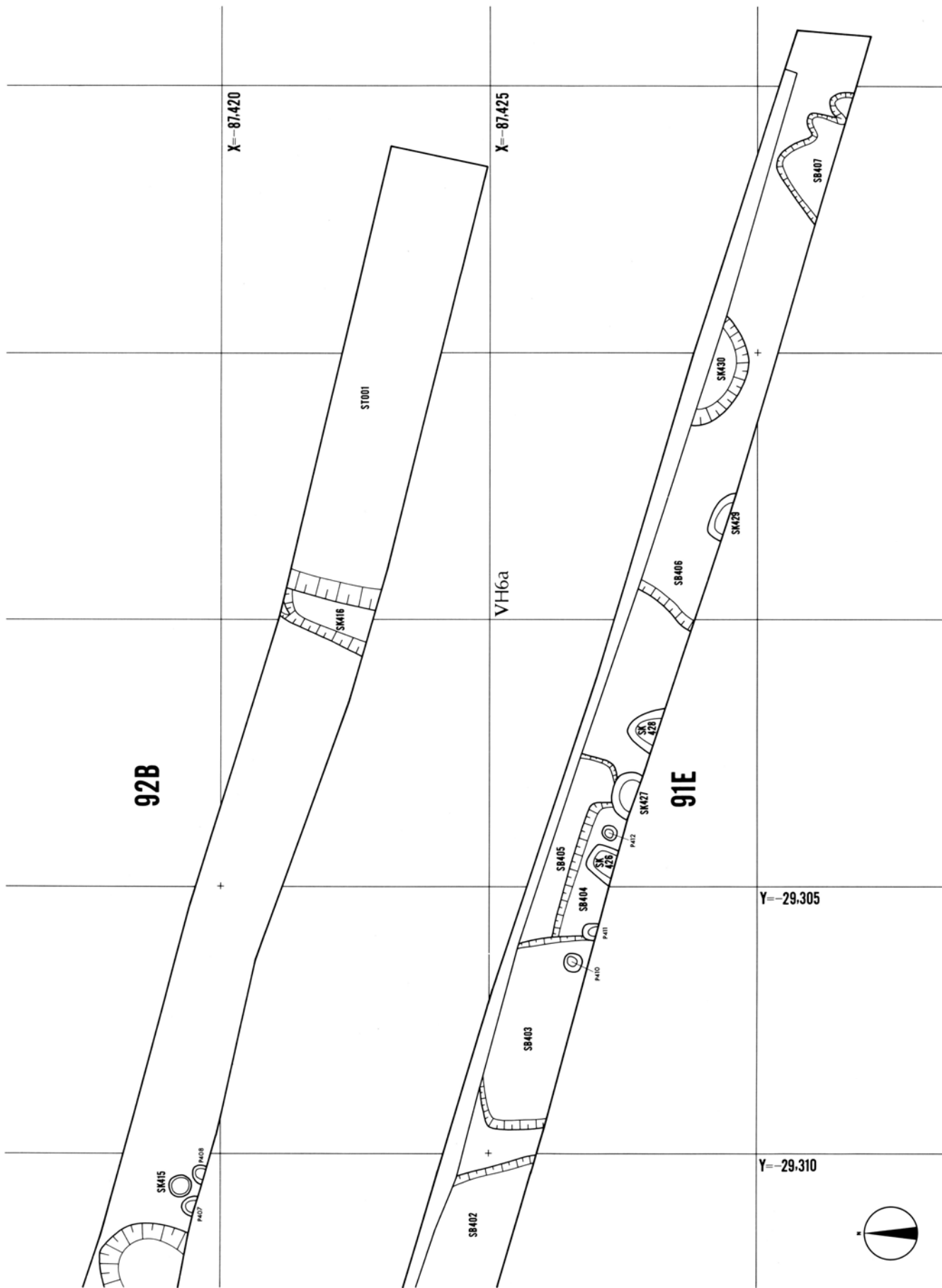
図版13 遺構図Ⅳ（第3面）



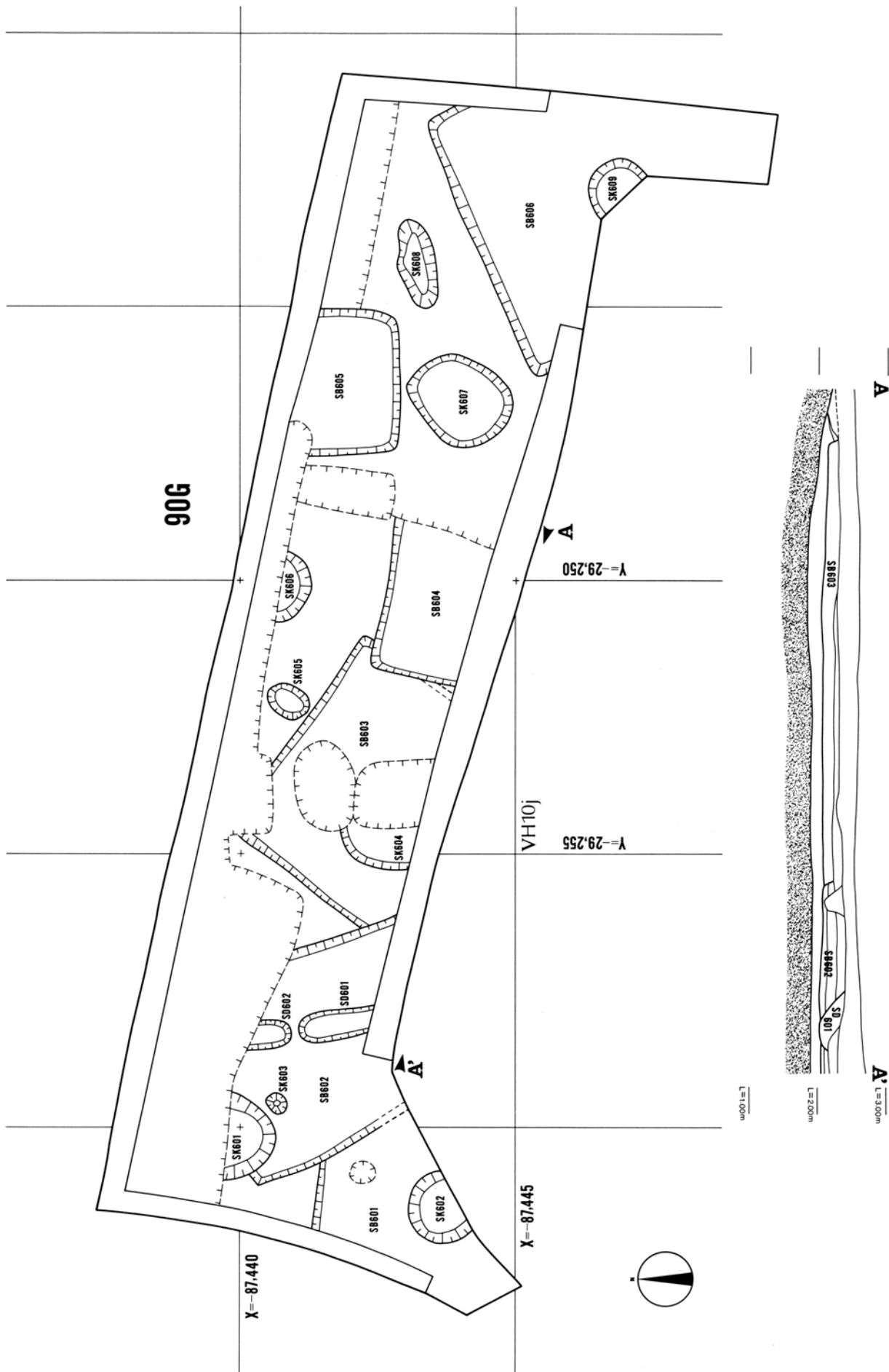
図版15 遺構図V（第1面）



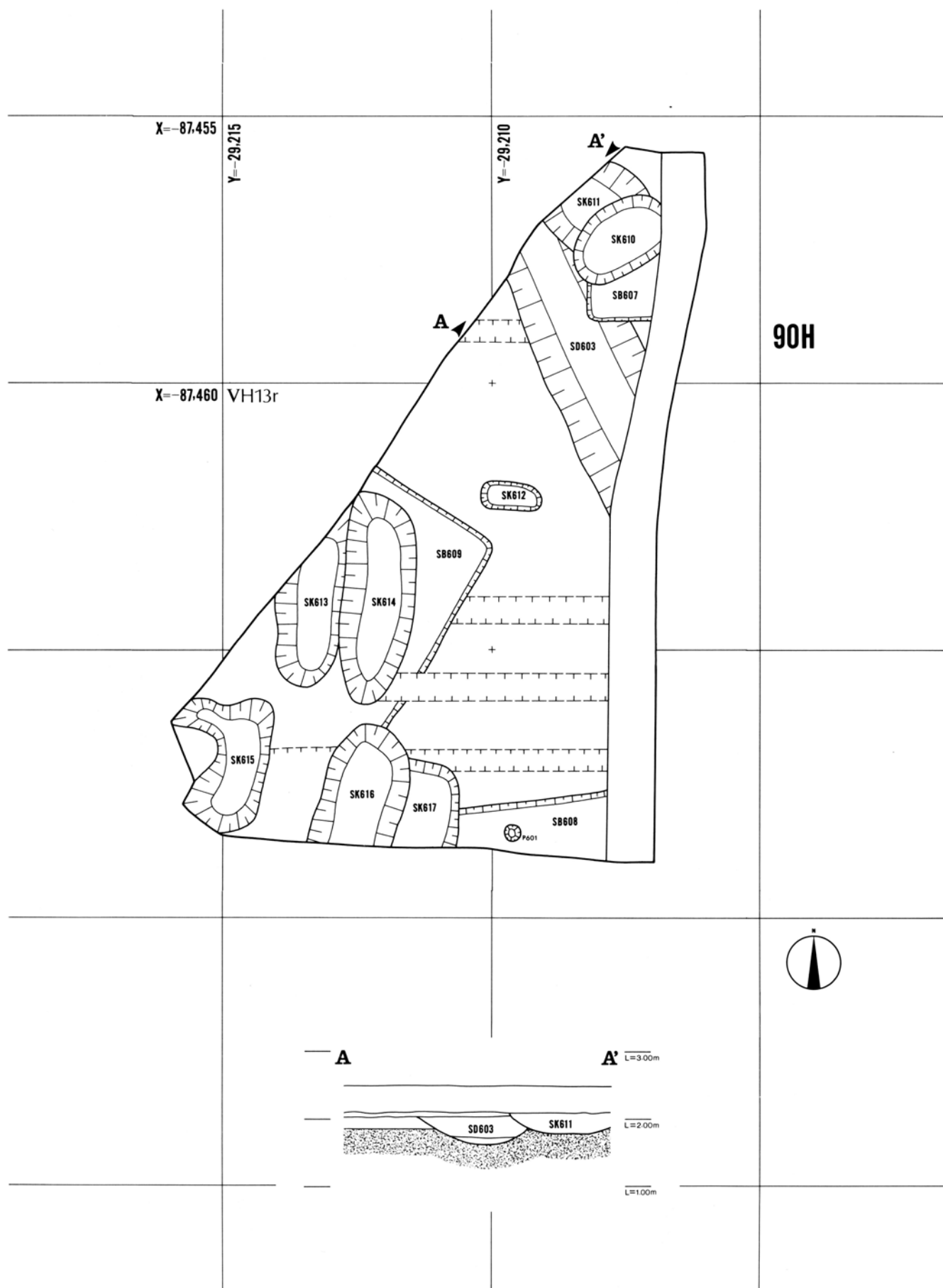
図版16 遺構図V (第2面)



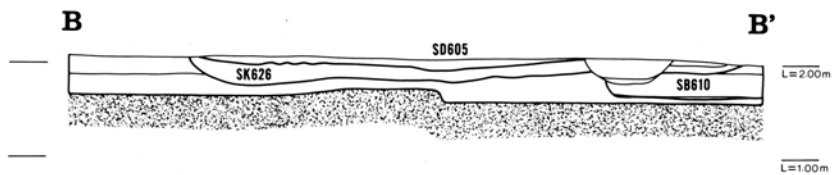
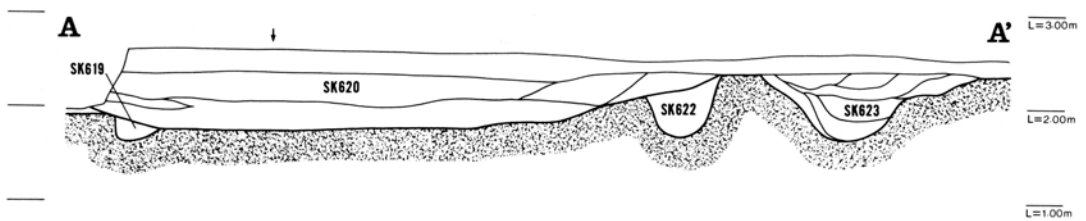
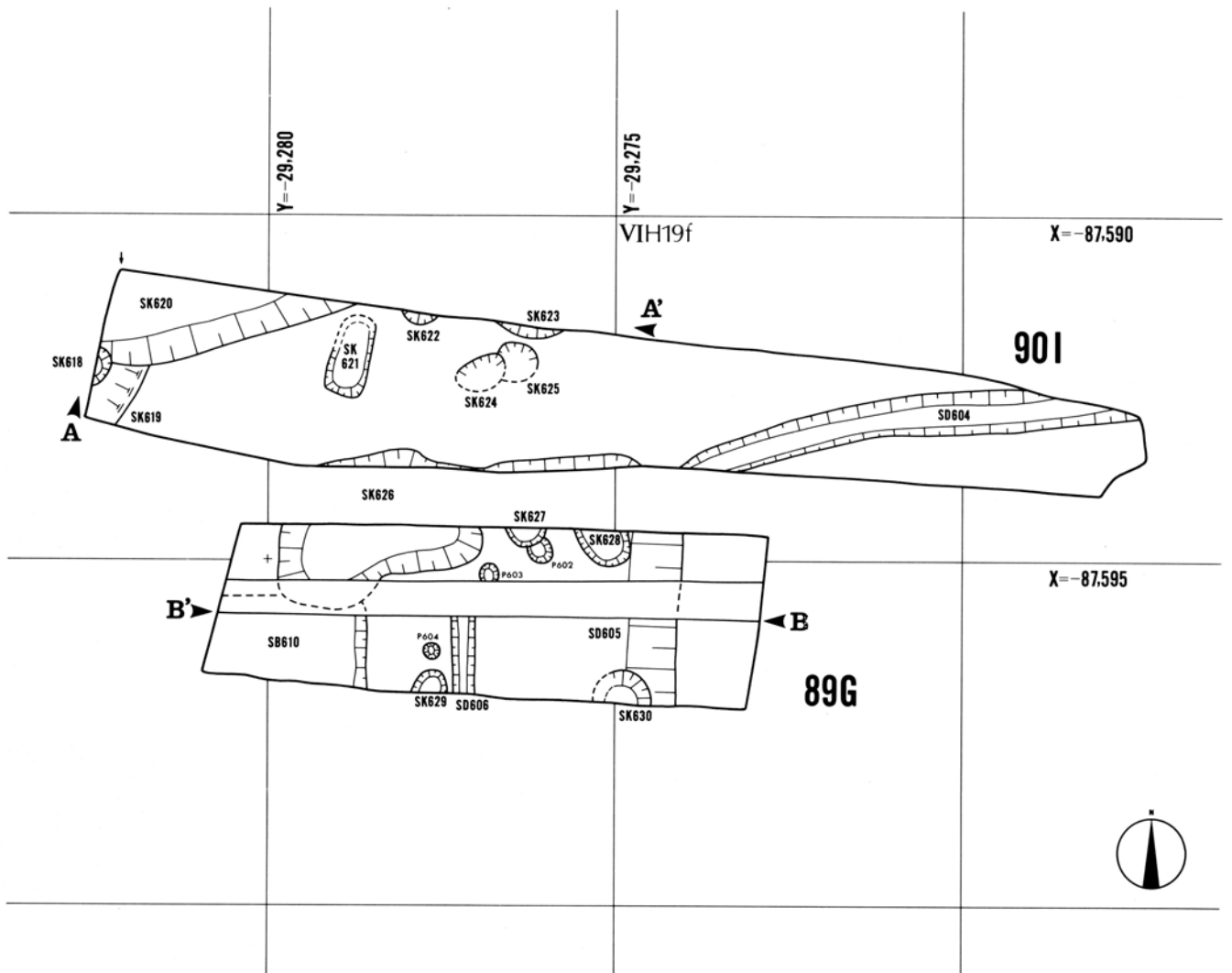
図版17 遺構図V（第3面）



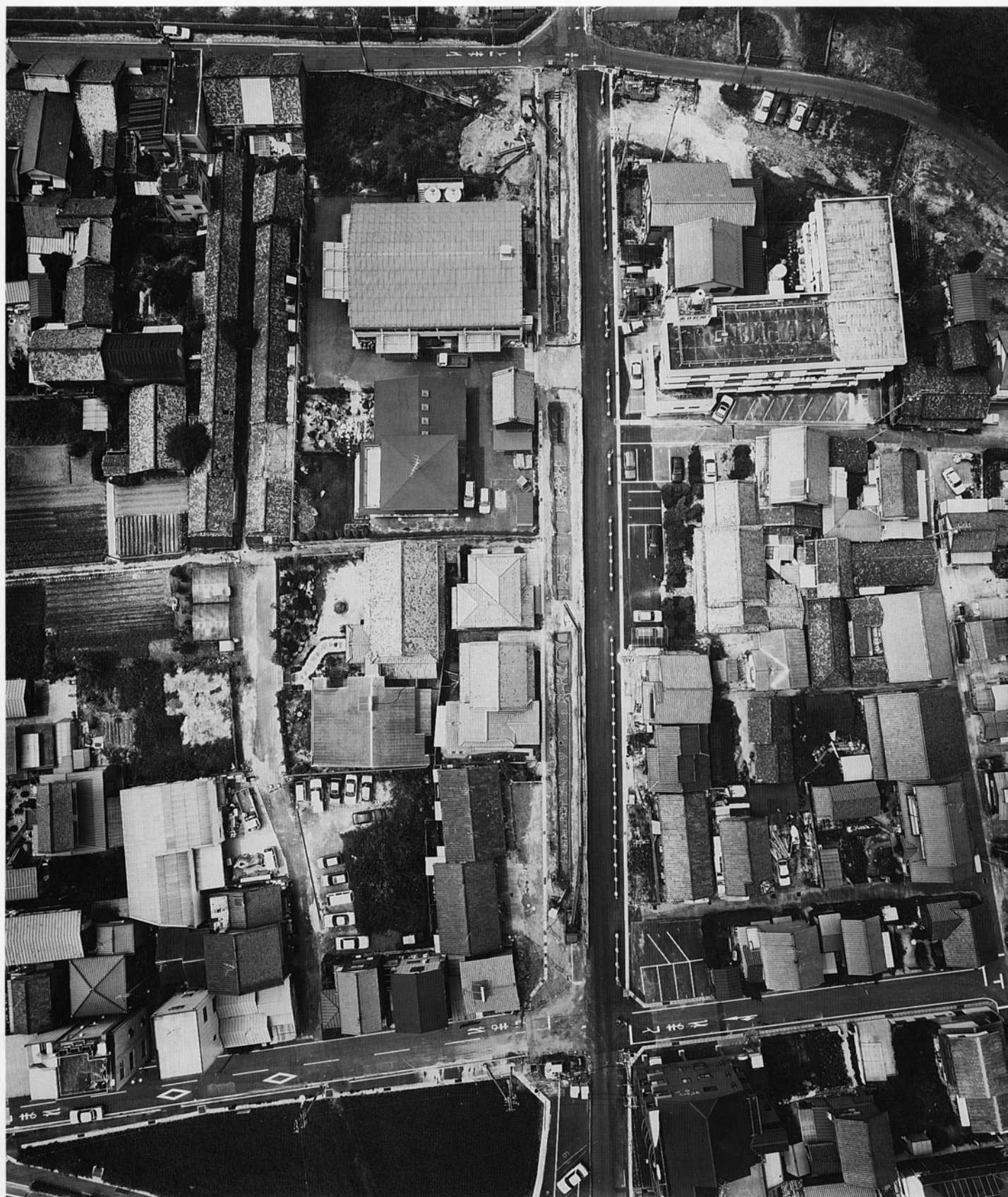
図版19 遺構図VI



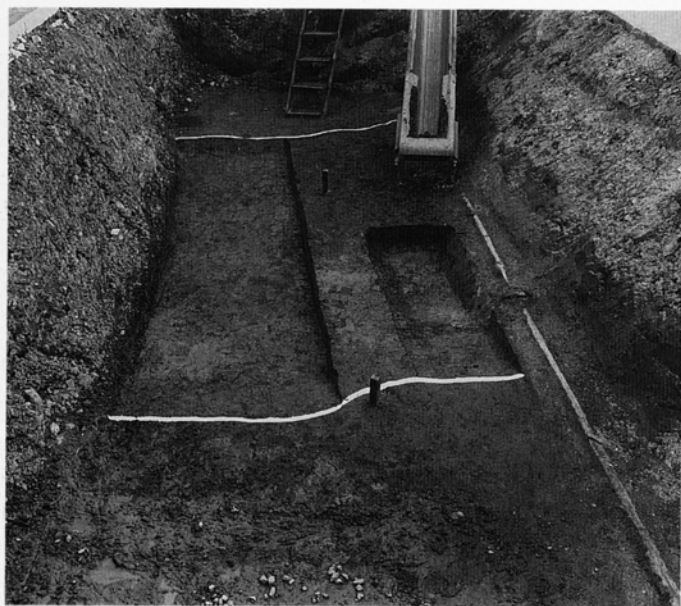
図版20 遺構図Ⅶ



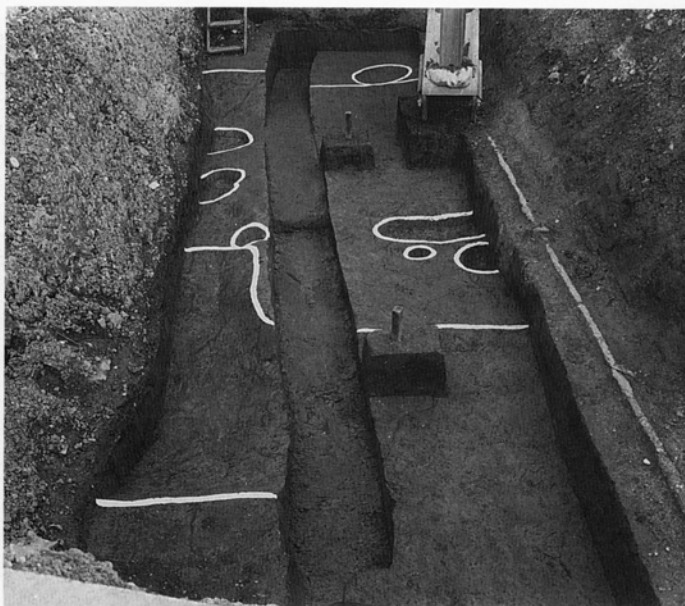
図版21 遺構図Ⅷ



調査区全景（航空写真）



89G区 (S D605)



89G区 (S K626他)



90G区 (東から)



90G区 (西から)



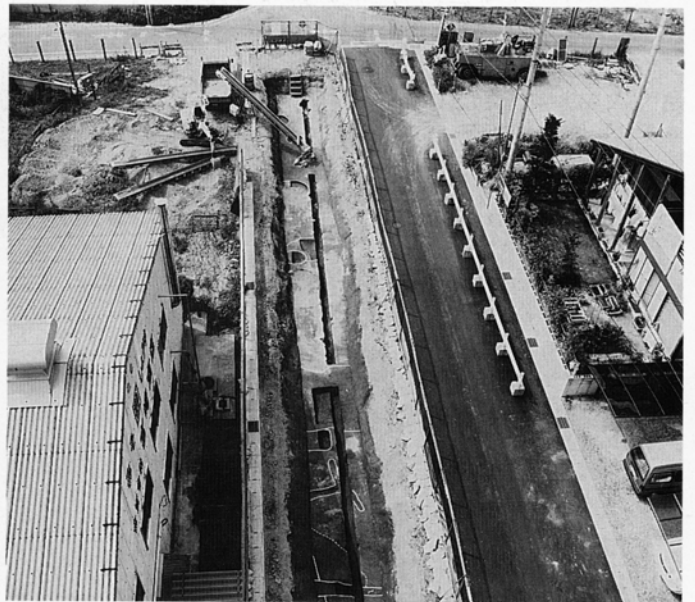
90H区 (北から)



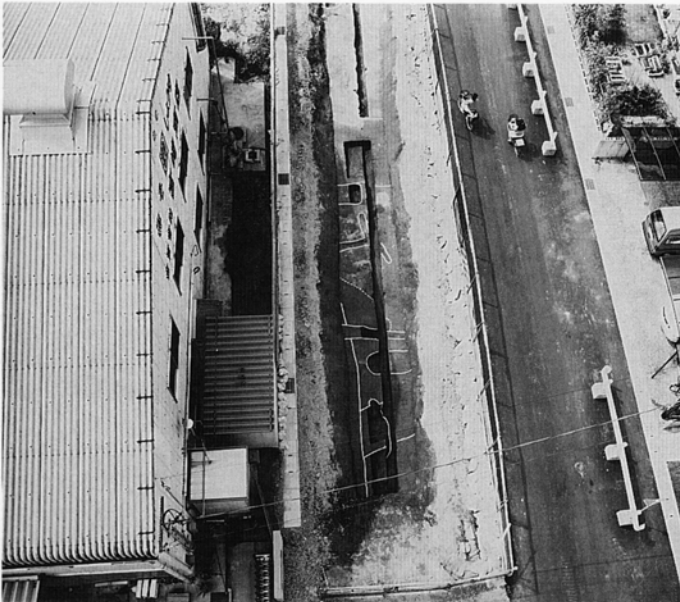
90H区 (南から)



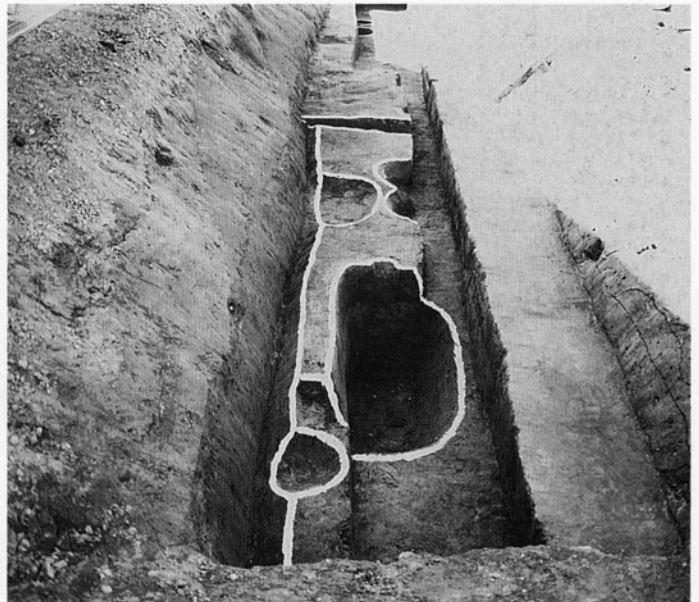
91 E 区から五条橋を臨む



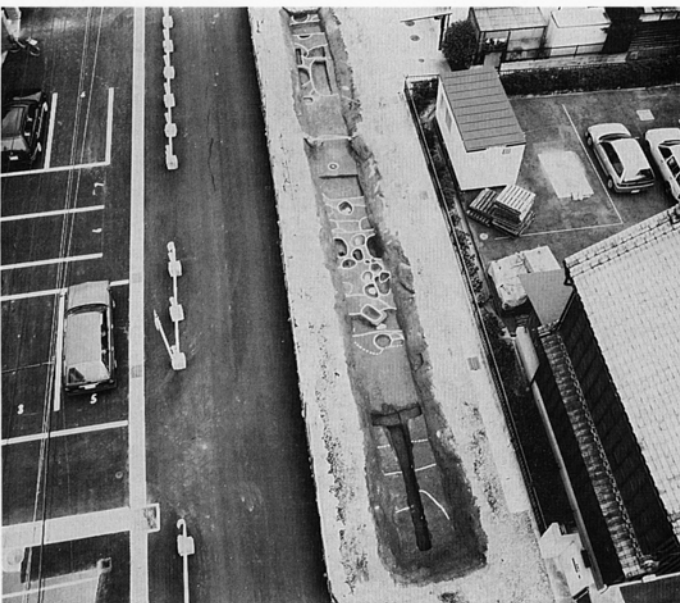
91 D 区第 1 面 (西)



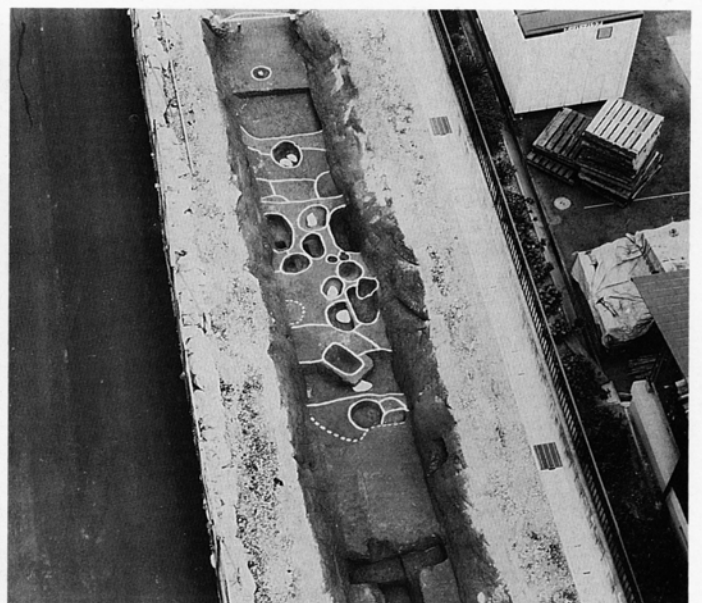
91 D 区第 1 面 (東)



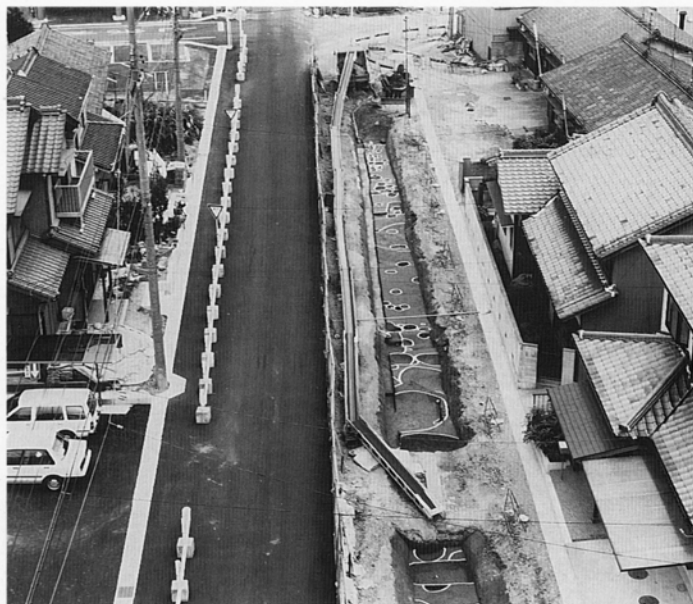
91 D 区第 2 面 (東)



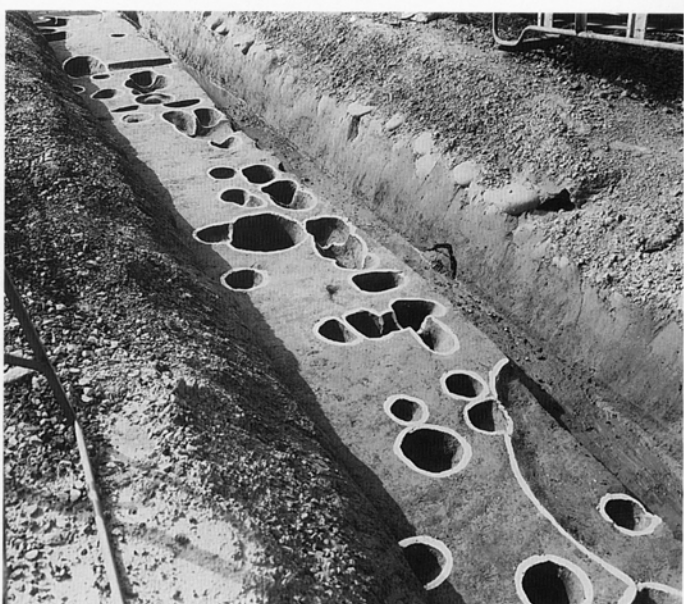
91 E 区第 1 面 (西)



91 E 区 (S A 001)



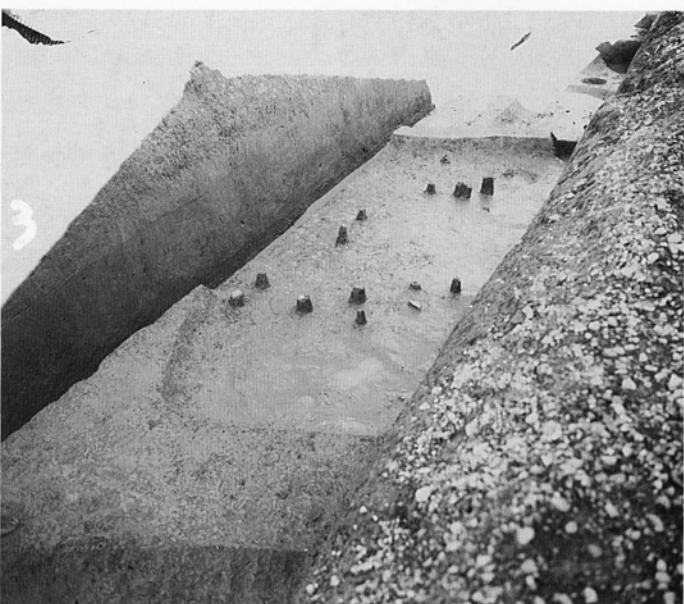
91 E 区第 1 面 (東)



91 E 区第 1 面 (東)



S B 403 ・ S B 404 ・ S B 405



S B 403



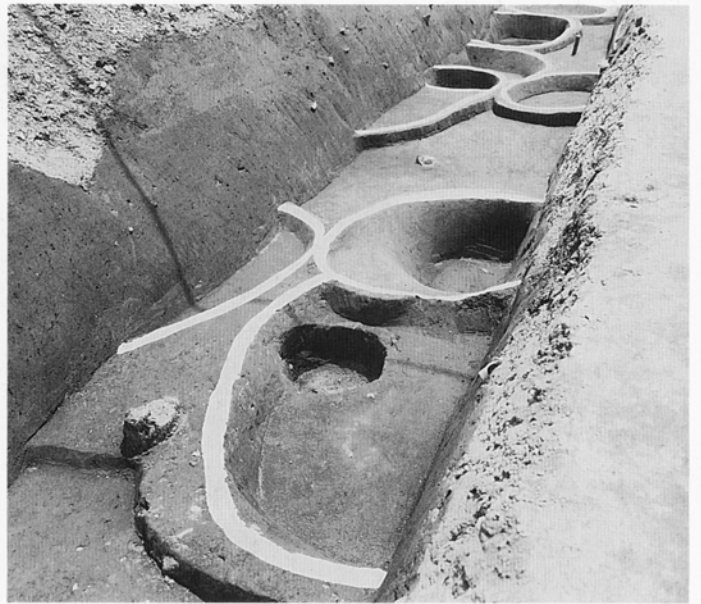
S B 501 ・ S B 502



S B 402



92A区第1面(西)



92A区第1面(東)



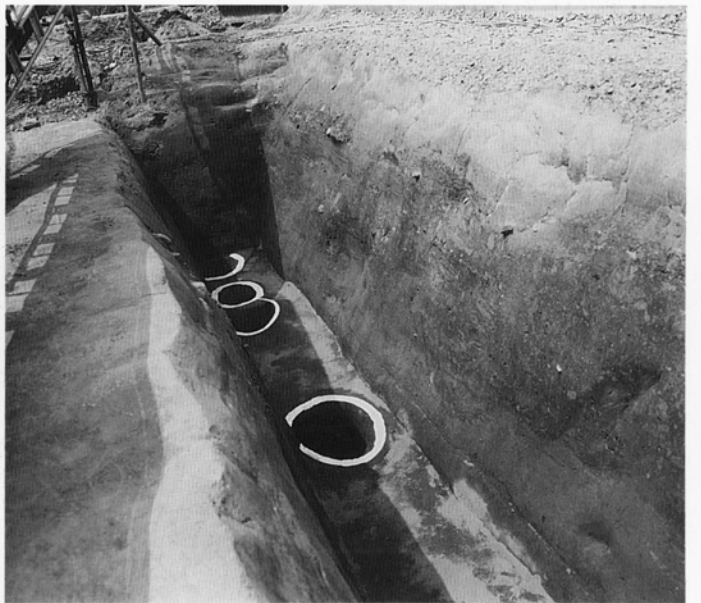
92A区第2面(全体)



92A区第2面(西)



92A区第2面(東)



92A区第3面(西)



92B区第1面(西)



92B区第1面(中央)



92B区第1面(東)



92B区第2面



S K 045



S B 401

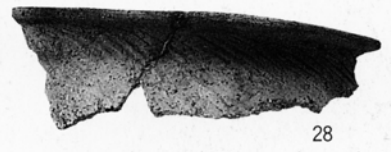
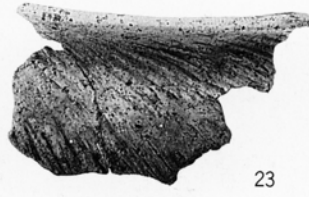
S B 401



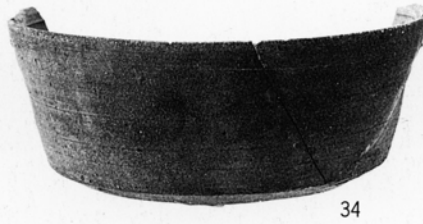
S B 502



S B 402



S B 404



S B 501



包含層



S K 250



110



114

S K 119



141



143

S K 024



158



161

旧五条川



195



198



194



199



200



201



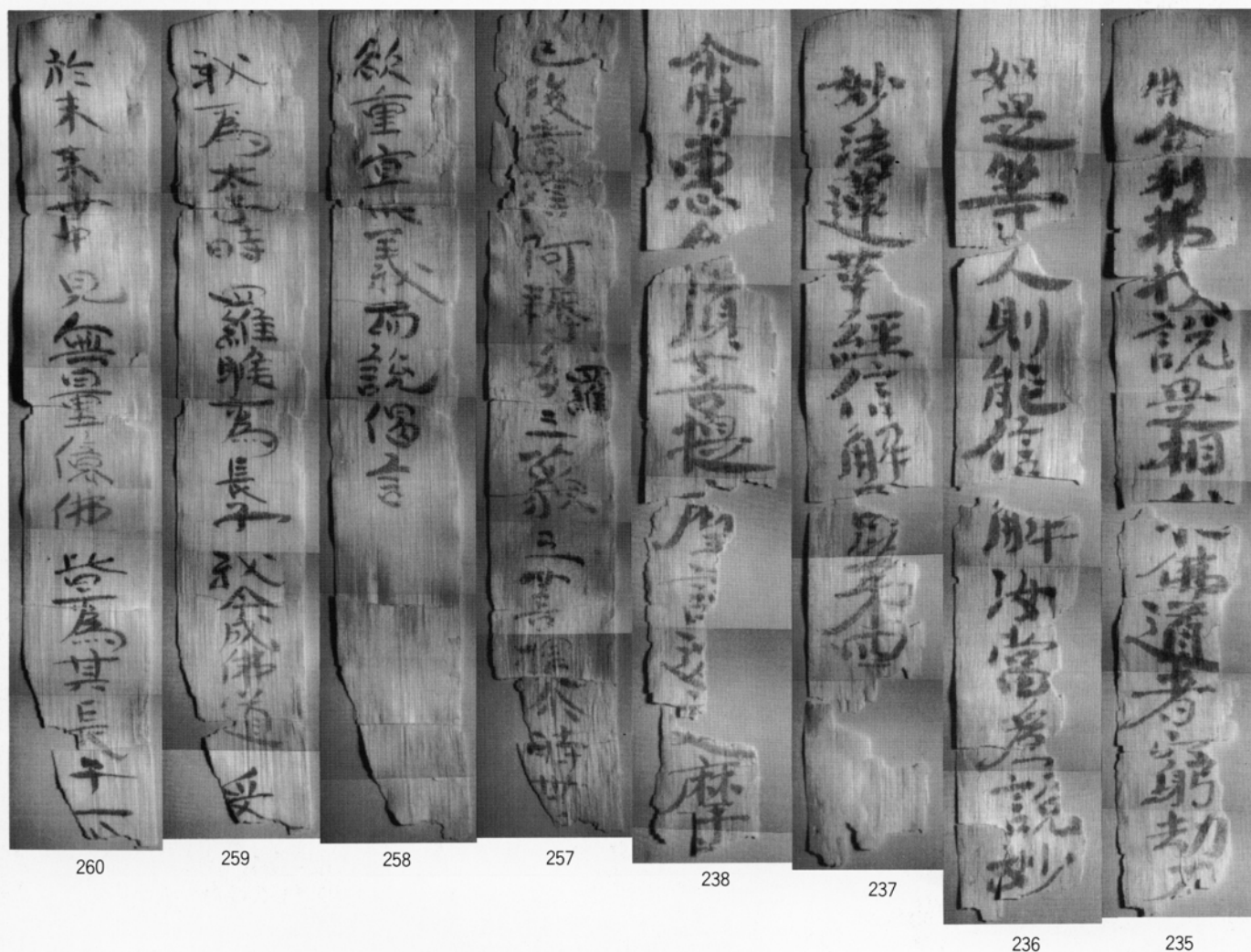
159



160



175





外 町 遺 跡

例 言

1. 本書は、愛知県西春日井郡新川町・清洲町に所在する外町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は愛知県土木部が進めている県道新川・甚目寺線建設に伴うもので、県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は平成3年4月～8月と平成4年5月～8月であり、平成4年度と平成5年度には報告書作成のための整理作業を実施した。調査面積は、平成3年度が1,890㎡であり、平成4年度が680㎡である。
4. 調査担当者は、以下の通りである。

平成3年度 城ヶ谷和広（主査・現愛知県立千種高等学校教諭）・小嶋廣也（調査研究員）・鈴木正貴（同）

平成4年度 鷲見豊（主査・現西春日井郡西春町立西春小学校教諭）・大竹正吾（調査研究員）・小嶋廣也（同）
5. 調査に当たっては次の各関係機関から御指導・御協力を得た。

愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・愛知県土木部名古屋土木事務所・新川町教育委員会
6. 遺物の整理、製図等については次の方々の協力を得た。

河合明美・伊藤直子（調査研究補助員）・木全左奈恵・小西恵子（発掘調査補助員）

石川倫子・加藤ちか子・山本章子・河野実佳子・中島由美子・柵木えみ子・藪田久子（整理補助員）

朝岡恵美子・石黒美佐子・岩田明美・稲垣智子・河村ひろみ・木全淑子・小井節子・斉藤夏美・桜井乃布香・志賀三津子・須田カツミ・関田美千子・中桐信子・久永弘子・福田妙子・堀田可代子・光岡香代子・百瀬詔子・山崎久美子・山之内なつ子・山本衣江（整理作業員）

小里恭子（学生アルバイト）

（以上敬称略）
7. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標Ⅶ系に準拠した。
8. 遺構番号は、次のアルファベットによる分類記号と、美濃街道に近いところから通し番号を付して表記している。

S D：溝 S E：井戸 S K：土坑 P it：柱穴（径50cm以下の土坑も含む）

S X：その他
9. 本書の執筆及び編集は、加藤安信調査課長の指導のもと小嶋が担当したが、第Ⅰ章第2節（1）・第Ⅱ章第1節は大竹正吾、第Ⅲ章第4節（6）・（7）は伊藤直子、第Ⅳ章は(株)バリノ・サーヴェイが分担執筆した。文責は、各文末に示した。
10. 本書をまとめるに当たり、次の各氏の御指導・御協力を得た。

安芸穂子・安藤次子・安藤美恵子・石井荘男・遠藤才文・大橋康二・尾野善裕・金子健一・金田 勉・小谷定男・千葉孝弥・前川嘉宏・村上伸之・新田 洋

（五十音順、敬称略）
11. 調査記録は本センターで保管している。
12. 出土品は愛知県埋蔵文化財調査センターにて保管している。

目 次

第Ⅰ章 調査概要

第1節 調査の経緯	1
1. 調査に至る経緯 ... 1	
2. 調査の経過 ... 2	
第2節 立地と歴史的環境	4
1. 立地 ... 4	
2. 歴史的環境 ... 5	

第Ⅱ章 遺 構

第1節 基本層序	7
第2節 中世～江戸時代中期の遺構	9
1. 概要 ... 9	
2. 溝 ... 10	
3. 礎石群 ... 11	
4. 土坑 ... 12	
5. 井戸 ... 12	
第3節 江戸時代後期の遺構	13
1. 概要 ... 13	
2. 溝 ... 15	
3. 土坑 ... 15	
4. 井戸 ... 17	
5. 畝状遺構と用水 ... 18	
6. 水田 ... 19	

第Ⅲ章 遺 物

第1節 出土遺物の概要	23
第2節 古代の遺物	23
第3節 中世の遺物	25
第4節 近世の遺物	26
1. 概要 ... 26	
2. 分類 ... 26	
3. 統計方法 ... 32	
4. 陶磁器類 ... 33	
5. 加工円盤 ... 87	
6. 瓦類 ... 91	
7. 人形・ミニチュア類 ... 96	
8. 木製品 ... 100	
9. 金属製品 ... 103	
10. 石・ガラス製品 ... 104	

第Ⅳ章 科学分析

第1節 ¹⁴ C年代測定	107
第2節 出土木製品の樹種	108
第3節 胎土重鉍物分析	110

第Ⅴ章 結 語

第1節 グリッド別遺物出土状況	117
第2節 遺物組成	118
第3節 まとめ	121

図版目次

図版 1	遺構配置図（ 1 ） 91 A 区・91 B 区	区東端 92 B 2 区調査区西半
図版 2	遺構配置図（ 2 ） 91 C 区・92 A 区・92 B 1 区東半	図版11 遺構（ 6 ） 92 B 2 区調査区西端・調査区中央・ S K 240・S K 241・S K 299・S K 261・S K 260 遺物出土状態
図版 3	遺構配置図（ 3 ） 91 D 1 区・92 B 1 区西半	図版12 近世の遺物（ 1 ） 供膳具（ 椀 ）
図版 4	遺構配置図（ 4 ） 91 D 2 区・92 B 2 区西半	図版13 近世の遺物（ 2 ） 供膳具（ 椀・小椀・皿 ）
図版 5	調査区周辺	図版14 近世の遺物（ 3 ） 供膳具（ 皿 ）
図版 6	遺構（ 1 ） 91 A 区調査区全景・S D 035・調査 区東半 91 B 区調査区全景・S D 025	図版15 近世の遺物（ 4 ） 供膳具（ 皿・鉢 ）
図版 7	遺構（ 2 ） 91 C 区調査区全景 91 D 1 区調査区全景・S K 036・S K 025遺物出土状態	図版16 近世の遺物（ 5 ） 調理具・貯蔵具
図版 8	遺構（ 3 ） 91 D 2 区調査区西半・調査区西端・ S K 230・S K 231・調査区中央・ 調査区全景	図版17 近世の遺物（ 6 ） 貯蔵具・灯火具・火具
図版 9	遺構（ 4 ） 92 A 区調査区全景・ピット列・東壁 セクション 92 B 1 区調査区全景・S K 075・S K 062遺物出土状態	図版18 近世の遺物（ 7 ） 火具・化粧具・神仏具・喫煙具・ 調度具
図版10	遺構（ 5 ） 92 B 1 区S D 014・S D 011・調査	図版19 近世の遺物（ 8 ） 調度具・蓋類・金属製品・加工円 盤・瓦類
		図版20 近世の遺物（ 9 ） 人形類・石製品・木製品 古代・中世の遺物

挿図目次

第 1 図	調査区位置図…………… 1	第 8 図	92 B 2 区東半平面図・断面図……………10
第 2 図	発掘調査・整理作業に参加して いただいた皆さん…………… 3	第 9 図	S D 035平面図・断面図……………10
第 3 図	外町遺跡周辺の自然堤防分布図………… 4	第10図	92 B 2 区調査区西端検出状況……………11
第 4 図	外町遺跡周辺の遺跡分布図…………… 6	第11図	92 B 2 区調査区中央検出状況……………11
第 5 図	土層セクション図①…………… 7	第12図	S K 240・S K 241, S K 259, Pit 272平面図・断面図……………11
第 6 図	土層セクション図②…………… 8	第13図	S K 260・S K 261平面図・断面 図……………12
第 7 図	下層主要遺構配置図…………… 9		

第14図	S E 201平面図・断面図……………12	第53図	近世の遺物 (13) S K 260 ……48
第15図	上面主要遺構配置図……………14	第54図	S K 289出土陶磁器類の用途組成…49
第16図	S D 002北壁セクション図……………15	第55図	近世の遺物 (14) S K 289 ……50
第17図	S K 186平面図・断面図……………15	第56図	S K 228出土陶磁器類の用途組成…51
第18図	S K 025平面図・断面図……………16	第57図	近世の遺物 (15) S K 228① ……52
第19図	S K 061・S K 062平面図・断面 図……………16	第58図	近世の遺物 (16) S K 228② ……53
第20図	S K 068平面図・断面図……………17	第59図	S K 223出土陶磁器類の用途組成…54
第21図	91D1 区畝状遺構平面図・断面図…18	第60図	近世の遺物 (17) S K 223① ……54
第22図	91C 区畝状遺構平面図・断面図…18	第61図	近世の遺物 (18) S K 223② ……55
第23図	S D 025東壁セクション図……………18	第62図	その他の土坑 (下面) 合計陶磁器 類の用途組成……………56
第24図	S D 014平面図・断面図……………19	第63図	近世の遺物 (19) その他の土坑 (下 面) ①……………57
第25図	92A 区東壁セクション図……………19	第64図	近世の遺物 (20) その他の土坑 (下 面) ②……………58
第26図	古代の遺物……………24	第65図	その他の土坑 (上面) 合計陶磁器 類の用途組成……………59
第27図	中世の遺物……………25	第66図	近世の遺物 (21) その他の土坑 (上 面) ①……………60
第28図	近世陶磁器類分類図 (1) ……27	第67図	近世の遺物 (22) その他の土坑 (上 面) ②……………61
第29図	近世陶磁器類分類図 (2) ……29	第68図	近世の遺物 (23) その他の土坑 (上 面) ③……………62
第30図	近世陶磁器類分類図 (3) ……31	第69図	近世の遺物 (24) その他の土坑 (上 面) ④……………63
第31図	近世出土陶磁器類の用途組成……………33	第70図	その他の遺構合計陶磁器類の用途 組成……………64
第32図	井戸合計陶磁器類の用途組成……………34	第71図	近世の遺物 (25) その他の遺構①…64
第33図	近世の遺物 (1) 井戸合計 ……34	第72図	近世の遺物 (26) その他の遺構②…65
第34図	S D 035出土陶磁器類の用途組成…35	第73図	近世の遺物 (27) その他の遺構③…66
第35図	近世の遺物 (2) S D 035 ……35	第74図	整地層出土陶磁器類の用途組成…67
第36図	S D 209出土陶磁器類の用途組成…36	第75図	近世の遺物 (28) 整地層①……………68
第37図	近世の遺物 (3) S D 209 ……36	第76図	近世の遺物 (29) 整地層②……………69
第38図	S D 202出土陶磁器類の用途組成…37	第77図	近世の遺物 (30) 整地層③……………70
第39図	近世の遺物 (4) S D 202 ……37	第78図	近世の遺物 (31) 整地層④……………71
第40図	S D 025出土陶磁器類の用途組成…38	第79図	近世の遺物 (32) 整地層⑤……………72
第41図	近世の遺物 (5) S D 025① ……39	第80図	近世の遺物 (33) 整地層⑥……………73
第42図	近世の遺物 (6) S D 025② ……40	第81図	近世の遺物 (34) 整地層⑦……………74
第43図	近世の遺物 (7) S D 025③ ……41	第82図	近世の遺物 (35) 整地層⑧……………75
第44図	近世の遺物 (8) S D 025④ ……42	第83図	近世の遺物 (36) 整地層⑨……………76
第45図	S D 002出土陶磁器類の用途組成…43	第84図	近世の遺物 (37) 整地層⑩……………77
第46図	近世の遺物 (9) S D 002① ……43		
第47図	近世の遺物 (10) S D 002② ……44		
第48図	その他の溝合計陶磁器類の用途組 成……………45		
第49図	近世の遺物 (11) その他の溝 ……46		
第50図	S K 240出土陶磁器類の用途組成…47		
第51図	近世の遺物 (12) S K 240 ……47		
第52図	S K 260出土陶磁器類の用途組成…48		

第85図	近世の遺物（38）整地層⑪……………78	第103図	近世の遺物（53）人形・ミニチュア類② 99
第86図	近世の遺物（39）整地層⑫……………79	第104図	近世の遺物（54）木製品①……………100
第87図	検出陶磁器類の用途組成……………80	第105図	近世の遺物（55）木製品②……………101
第88図	近世の遺物（40）検出①……………81	第106図	近世の遺物（56）木製品③……………102
第89図	近世の遺物（41）検出②……………82	第107図	近世の遺物（57）金属製品①……………103
第90図	その他陶磁器類の用途組成……………83	第108図	近世の遺物（58）金属製品②……………103
第91図	近世の遺物（42）その他①……………84	第109図	近世の遺物（59）石製品①……………104
第92図	近世の遺物（43）その他②……………85	第110図	近世の遺物（60）石製品②……………105
第93図	近世の遺物（44）その他③……………86	第111図	近世の遺物（61）石製品③……………106
第94図	加工円盤材質・転用遺物組成図……………87	第112図	材の顕微鏡写真……………109
第95図	近世の遺物（45）加工円盤①……………88	第113図	分析遺物実測図……………113
第96図	近世の遺物（46）加工円盤②……………89	第114図	試料の胎土重鉍物組成……………116
第97図	近世の遺物（47）加工円盤③……………90	第115図	グリッド別遺物出土状況図……………117
第98図	近世の遺物（48）瓦類①……………91	第116図	遺構別出土遺物の器種組成図……………119
第99図	近世の遺物（49）瓦類②……………92	第117図	遺構別出土遺物の材質組成図……………120
第100図	近世の遺物（50）瓦類③……………94	第118図	地籍図……………122
第101図	近世の遺物（51）瓦類④……………95	第119図	「須ヶ口古図」……………122
第102図	近世の遺物（52）人形・ミニチュア類①・98		

表 目 次

第1表	発掘調査・整理作業工程表……………3	第19表	S K 228出土陶磁器類集計表……………51
第2表	遺構一覧表（1）……………20	第20表	S K 223出土陶磁器類集計表……………54
第3表	遺構一覧表（2）……………21	第21表	その他の土坑（下面）合計陶磁器 類集計表……………56
第4表	遺構一覧表（3）……………22	第22表	その他の土坑（上面）合計陶磁器 類集計表……………59
第5表	近世陶磁器類分類表（1）……………26	第23表	その他の遺構合計陶磁器類集計表……………64
第6表	近世陶磁器類分類表（2）……………28	第24表	整地層出土陶磁器類集計表……………67
第7表	近世陶磁器類分類表（3）……………30	第25表	検出陶磁器類集計表……………80
第8表	近世出土陶磁器類集計表……………33	第26表	その他陶磁器類集計表……………83
第9表	井戸合計陶磁器類集計表……………34	第27表	加工円盤出土遺構一覧表……………87
第10表	S D 035出土陶磁器類集計表……………35	第28表	人形・ミニチュア類観察表……………97
第11表	S D 209出土陶磁器類集計表……………36	第29表	木製品出土遺構一覧表……………100
第12表	S D 202出土陶磁器類集計表……………37	第30表	金属製品出土遺構一覧表……………103
第13表	S D 025出土陶磁器類集計表……………38	第31表	石製品出土遺構一覧表……………104
第14表	S D 002出土陶磁器類集計表……………43	第32表	分析遺物観察表……………112
第15表	その他の溝合計陶磁器類集計表……………45	第33表	胎土重鉍物分析結果表……………115
第16表	S K 240出土陶磁器類集計表……………47		
第17表	S K 260出土陶磁器類集計表……………48		
第18表	S K 289出土陶磁器類集計表……………50		

第I章 調 査 概 要



第Ⅰ章 調査概要 目次

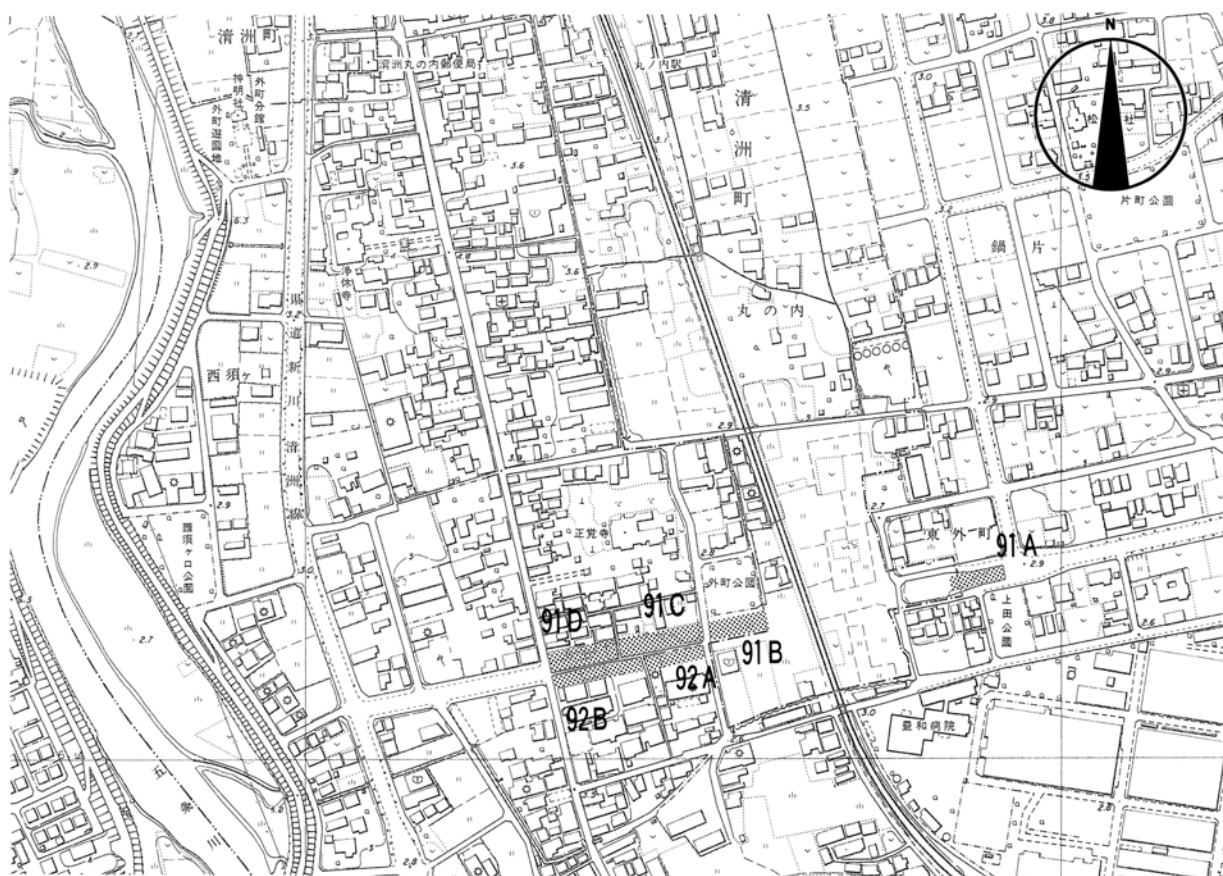
第1節 調査の経緯	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の経過	2
第2節 立地と歴史的環境	4
1. 立地	4
2. 歴史的環境	5

第1節 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

外町遺跡は、愛知県西春日井郡新川町大字須ヶ口字下外町・東外町と、同郡清洲町大字清洲字御船頭に所在する江戸時代を中心とした遺跡である。外町地区は、新川町の北西部にあたり隣接する清洲町との境界付近に位置し、現在は周辺に水田の点在する閑静な住宅地域となっている。遺跡は、尾張平野の中央部を南流する五条川の左岸に位置し、標高は約3m前後を測り、東になだらかに傾斜している。今回の調査区は中世以来の美濃街道に面しており、北方には清洲城下町遺跡が広がっている。

愛知県土木部名古屋土木事務所では、県道新川・甚目寺線建設を計画したが、その予定用地内に外町遺跡が所在しており、事前に発掘調査を実施し記録保存する必要性が認められた。このため、遺跡の発掘調査が計画され、愛知県土木部より愛知県教育委員会を通じて委託を受けた財団法人愛知県埋蔵文化財センターがこれを実施した。調査については、平成2年10月に実施した範囲確認調査による線引きに基づいて、本調査を平成3年度と平成4年度の2ヶ年に分けて実施した。発掘調査面積は、平成3年度 1,890㎡、平成4年度 680㎡で総計 2,570㎡に及ぶ。調査区は、各年度毎に廃土置き場、諸条件などを勘案して分割し、平成3年度にはA区～D区の4ヶ所、平成4年度にはA区・B区の2ヶ所を設定した。



第1図 調査区位置図 (1/5000)

2. 調査の経過

発掘調査は、各調査区ともバックホウにより、現地表面から表土を除去する作業から開始した。その後、建設省告示によって定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠した5 mグリッドを設定し、手掘りで包含層を掘削し遺構を検出する方法をとった。各調査区は、包含層が薄かったり、旧水田耕作土である黒灰色粘質土があらわれたりしてすぐにベース面が検出され、基本的には1面調査のみであった。しかし、美濃街道に面した調査区である91D区・92B区においては、整地層部分が確認され2度の生活面が想定されたため、2面調査を実施した。このため、本書では、表現上必要な場合のみ調査区名にアラビア数字を付け、上層検出面（以下上面）に1、下層検出面（以下下面）に2を付与して表現している。住宅移転に伴う攪乱が激しかったり、発掘調査の時期が梅雨や地下水位の上昇期にあたり夥しい湧水に悩まされ、作業は難航した。

遺構の測量については、ヘリコプター又はクレーンによる航空写真測量を実施し、調査区全面の1/50・1/100・1/200基本平面図を作成したほか、91A区・91D2区・92B2区については1/50基本平面図を、また重要部分については補助測量図を手測りにより実施した。

各調査区より出土した遺物は、2年分を合わせると27ℓ入りコンテナ約300箱に及ぶ。その大半は、近世陶磁器類や瓦類で占められているが、その他に木製品や金属製品、石製品、中世の山茶碗類、古代の須恵器・灰釉陶器などが見られる。出土遺物の整理については、発掘調査に継続して洗浄作業や出土地点の注記作業を実施した。平成4年度からは、発掘調査と並行して報告書作成に向けて、遺物実測図の作成や口縁部計測法によるカウントなどの整理作業を実施した。（小嶋 廣也）

また、発掘調査の参加者は以下の通りである。

発掘作業員

荒木優美子・飯田 弘子・石原八重子・伊藤 栄・伊藤 とよ・猪子とし子・猪子みよ子・
宇佐美秋子・江川 新・江本タケ子・大丸ひろ子・加藤 生代・加藤 信子・川口 絹代・
川崎 愛子・桑山 静江・黒谷日佐子・小出 艶子・後藤 恒一・後藤 久子・小西 恵子・
木場 哲・近藤 輝子・近藤 秀子・近藤 瑞子・佐藤富貴子・繁野なつ子・柴山江津子・
下谷 皆二・新海 澄子・園田 正利・滝川かすみ・田中 富子・棚橋 豊子・津川喜代子・
戸田 のぶ・内藤 春枝・長井 ちゑ・中沢 節子・中野 絹枝・中野 泰子・丹羽美代子・
波田野明美・服部三枝子・早川 茂子・早川 光雄・福尾かね子・福田 一子・堀田 方子・
松居 ヨキ・水野たつゑ・宮崎美穂子・三輪 君子・迎 廣・森川 富子・柳生 亘子・
山本真紀子・吉川 光子・吉野 加代・米丸 清子・若松 里美

学生アルバイト

伊藤 香代・大平 明夫・加藤久美子・苗村 明美・林 由香子・日栄 智子

（五十音順・敬称略）

<参考文献>

- 『愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成2年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1991
『愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成3年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1992
『愛知県埋蔵文化財センター 年報 平成4年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1993

時 期		91	92	93	94
工 程		4 5 6 7 8 9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12	1 2 3
発 掘	91 年 度	A 区 B 区 C 区 D 1 区 D 2 区			
		■ 空撮 5/23 ■ 空撮 7/3 ■ 空撮 7/23			
	92 年 度	A 区 B 1 区 B 2 区	■ 空撮 5/29 ■ 空撮 5/29 ■		
整 理	基礎整理	■ 洗浄・注記	■ 洗浄・注記	■ 接合	■ 分類
	報告書作成		■ 年報刊行	■ 年報刊行	■ カウント
			■ 遺 物	■ 実 測	■ 報告書刊行

第1表 発掘調査・整理作業工程表

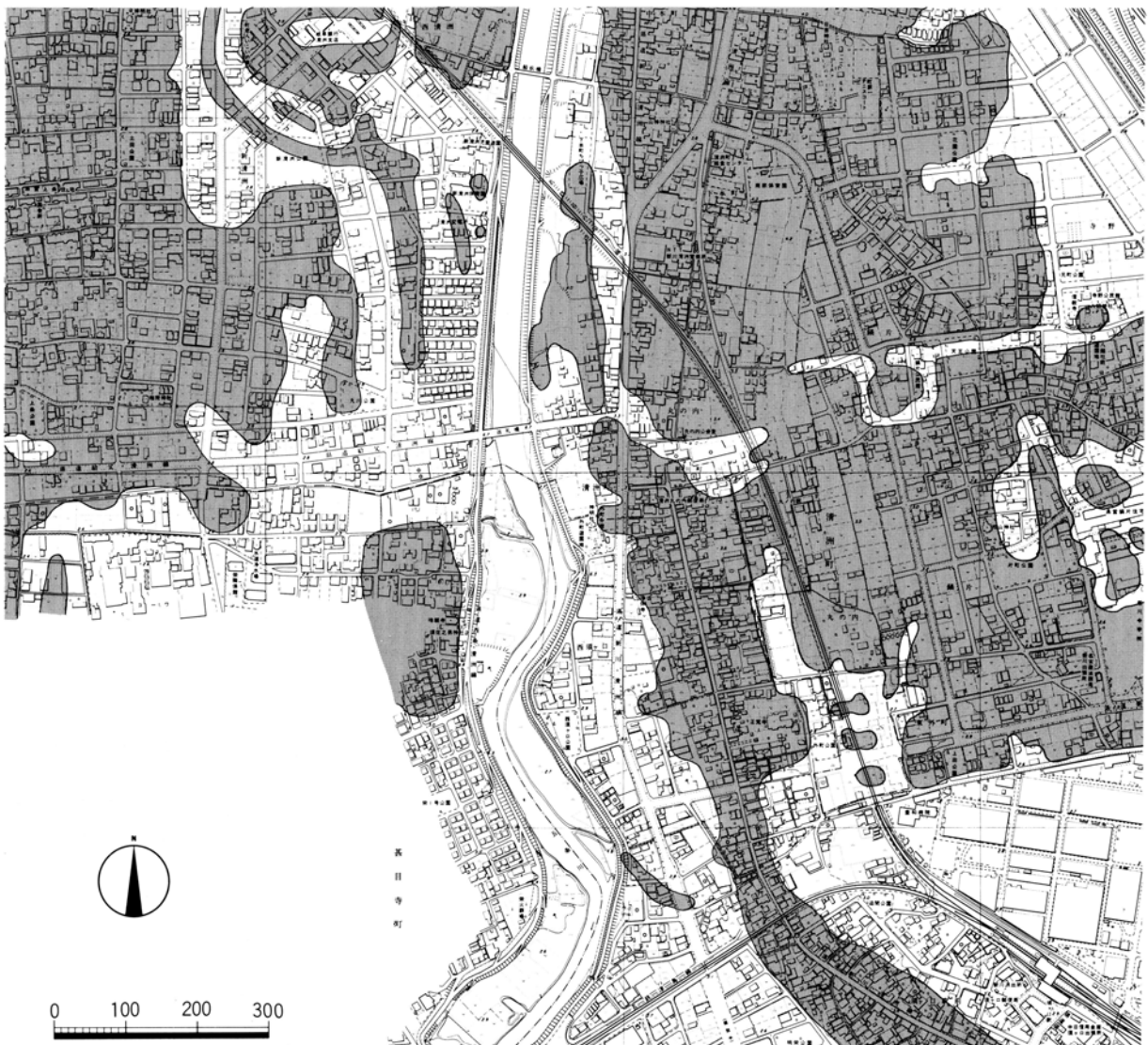


第2図 発掘調査・整理作業に参加していただいた皆さん

第2節 立地と歴史的環境

1. 立地

濃尾平野は、主に木曾川・長良川・揖斐川によって形成された沖積平野である。この地域の人々は、三川と深い結び付きを持って生活してきた。外町遺跡周辺の人々も庄内川水系の五条川と関わりを持ってきた。五条川は、現在、庄内川の水系となっているが、「御囲堤」の築堤により木曾川からの流入を閉鎖され、その上流部を1609年に放棄されるまで、木曾川の分流として犬山から、一之枝川として犬山扇状地、濃尾平野の南東部を流れていた。木曾川からの大量の土砂の流入によって、河道に沿って自然堤防が形成され、この微高地を利用し美濃街道が設置されている。街道沿いにある外町遺跡は、主としてこの自然堤防上に展開している。調査区は、五条川左岸の自然堤防とその後背湿地上に位置し、現地表の標高は2 m～3 mである。西端の91D, 92B区付近が最も高く、東へなだらかに傾斜している。91A, 91B, 91C, 92A区付近は、後背湿地上に位置する。 (大竹正吾)



第3図 外町遺跡周辺の自然堤防分布図（国土地理院土地条件図を改変・1:5000）

2. 歴史的環境

今回の発掘調査で、初めて先人の生活した痕跡が認められたのは、鎌倉時代中頃である。この時代の溝や土坑などの遺構と山茶碗類の遺物が確認されている。その後やや空白の時期があり、戦国時代後期から再び人々の居住が確認され、以後江戸時代を通じて現在に至っている。目をもう少し広げてみると、縄文時代末以来、この地域と周辺に連綿と人々が分散したり集中したりして生活していた様子を窺うことができる。

外町遺跡では、鎌倉時代以前の遺構は確認されていないが、遺物として須恵器や灰釉陶器などが遺構埋土や包含層などから出土している。遺跡基盤は砂層で、低湿地かつ脆弱な地盤の上に構築された遺構であるため、五条川や庄内川の水 flow や堆積によって破壊された可能性があると思われる。しかし、この周辺に人々が生活していたであろうことは十分に推定することができる。周辺の遺跡としては、弥生時代では、濃尾平野の拠点的な集落である朝日遺跡をはじめとして、阿弥陀寺遺跡・月縄手遺跡、古墳時代では、廻間遺跡や土田遺跡・月縄手遺跡・貴生町遺跡、古代では、大渕遺跡・甚目寺・尾張国分寺、中世では、方領遺跡・森南遺跡・清林寺遺跡・土田遺跡・廻間遺跡・朝日西遺跡・清洲城下町遺跡など、数多くの遺跡をみることができる。しかし、その集落構造までは明らかにされておらず、本遺跡もこの時期の人々の生活痕を確認しただけで、詳しいことはわかっていない。これからの調査成果を待たざるを得ないといえよう。

織田信長の居城地として知られる清須城は、本遺跡の北方に位置し、その周囲には下津城・岩倉城・小牧山城・那古野城などがある。清須城とその城下町は、信長以後、織田信雄・豊臣秀次・福島正則・松平忠吉・徳川義直と有力大名が次々と配される要地として、この地方の中心都市として機能し、慶長年間の「清須越」の頃には人口数万を擁した全国でも屈指の城下町となっていた。本遺跡においても、この時期に再び人々の生活の痕跡が現れてくるようになったことは先に述べた通りである。しかし、調査面積が狭く、全体を捉えることはできなかった。だが、この時期の遺構・遺物が確認されたことにより、清洲城下町の南のこの地域に外町が形成されていたことが明らかとなった。

清洲城下町も、慶長15年(1610)から3年の歳月をかけて行われた「清須越」により名古屋の地へと移り、城下町は解体された。そしてその後は美濃街道沿いの「清須宿」と周囲に展開する農村へと大きく変化していく。このため、この地も街道沿いに町屋が並び、周囲には田園風景が広がっていたものと思われる。美濃街道とは、熱田・佐屋の渡しを避けて、東海道宮の宿から名古屋城下を抜け(名古屋街道)清洲・稲葉・萩原・起・墨俣・大垣宿を通り垂井付近で中山道に合流する街道のことであるが、将軍の上洛時や朝鮮通信使・琉球王の通行に利用されたことからみても、単なる地方の支線というよりも主要幹線の一つであったと思われる。成立年代は明らかではないが、清洲城下町の成立・発展と無関係であったとは考えにくい。「清須越」によって失われてしまった活気も、清洲宿が成立し街道に多くの人々が往来することによって、街道沿いの町屋は息を吹き返していったのではないだろうか。その1つの地点として、本遺跡を位置づけることができるといえよう。(小嶋廣也)

<参考文献>

- 『愛知県歴史の道調査報告書Ⅳ ー美濃街道・岐阜街道ー』 愛知県教育委員会 1990
- 『清洲城下町遺跡』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1990
- 『清洲城下町遺跡Ⅱ』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992



- | | | | | | | |
|----------|-------------|------------|-----------|------------|-------------|---------|
| 1. 外町遺跡 | 8. 九ノ坪城 | 15. 松ノ木遺跡 | 22. 法性寺遺跡 | 29. 田端城 | 35. 浅野長勝邸跡 | 42. 五条橋 |
| 2. 重古城 | 9. 平田城 | 16. 廻間遺跡 | 23. 大潤遺跡 | 30. 押切城 | 36. 増田長盛邸跡 | 43. 高礼場 |
| 3. 岩倉城 | 10. 月繩手遺跡 | 17. 土田遺跡 | 24. 甚目寺 | 31. 名古屋城 | 37. 清洲宿本陣正門 | 44. 問屋 |
| 4. 伝法寺庵寺 | 11. 貴生町遺跡 | 18. 方領遺跡 | 25. 清林寺遺跡 | 32. 名古屋城 | 38. 外町一里塚道標 | |
| 5. 尾張国府 | 12. 朝日遺跡 | 19. 森南遺跡 | 26. 坂井戸城 | 三の丸遺跡 | 39. 須ヶ口一里塚 | |
| 6. 下津城 | 13. 朝日西遺跡 | 20. 屋敷遺跡 | 27. 小田井城 | 33. 長東正家邸跡 | 40. 美濃路道標 | |
| 7. 野崎城 | 14. 清洲城下町遺跡 | 21. 阿弥陀寺遺跡 | 28. 名塚砦 | 34. 清洲代官所跡 | 41. 江川一里塚跡 | |

第4図 外町遺跡周辺の遺跡分布図(1/25000)

第Ⅱ章 遺 構



第Ⅱ章 遺構 目次

第1節 基本層序 7

第2節 中世～江戸時代中期の遺構 ... 9

1. 概 要 9

2. 溝 10

3. 礎石群 11

4. 土 坑 12

5. 井 戸 12

第3節 江戸時代後期の遺構 13

1. 概 要 13

2. 溝 15

3. 土 坑 15

4. 井 戸 17

5. 畝状遺構と用水 18

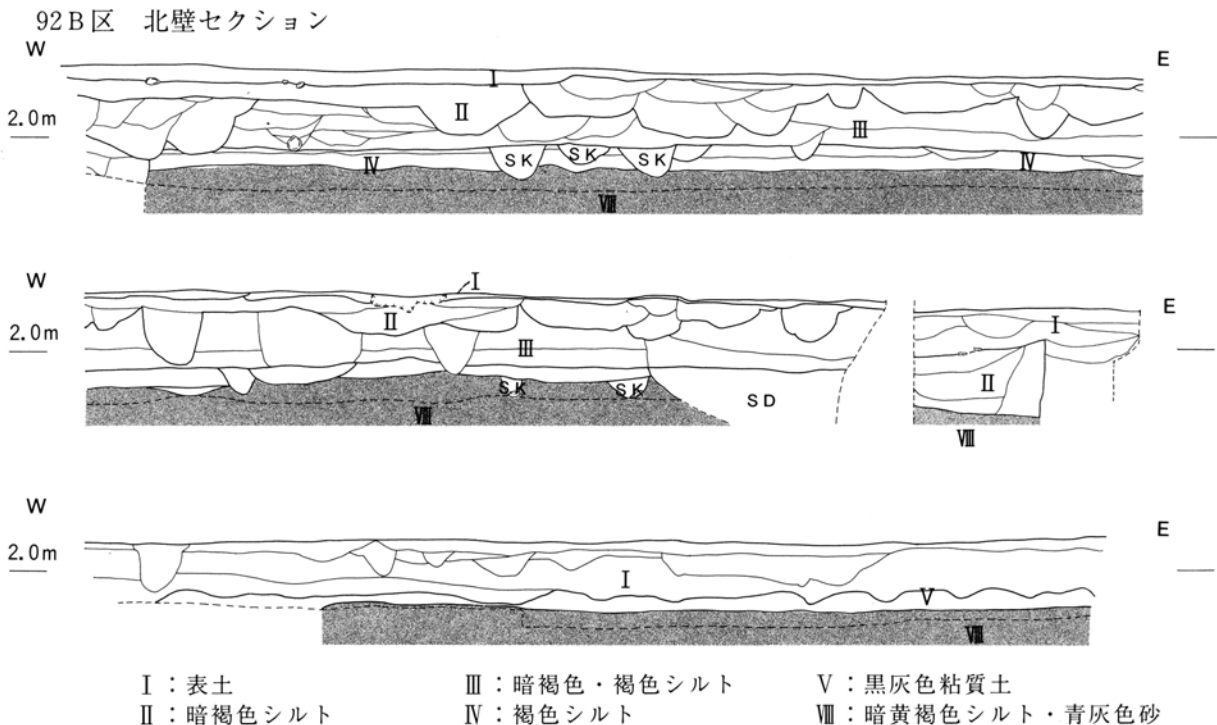
6. 水 田 19

遺構一覧表 20

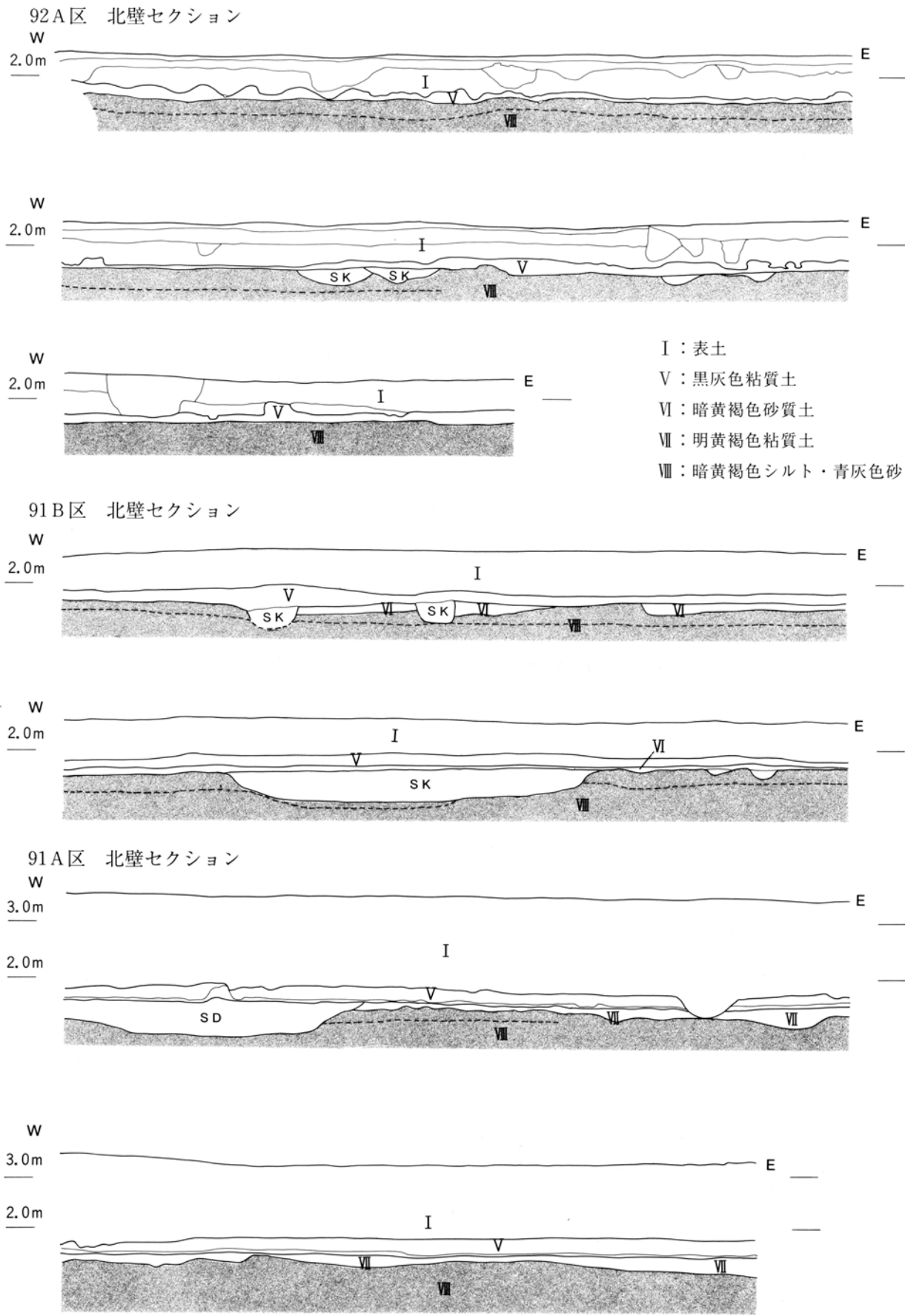
第1節 基本層序

今回の調査区は東西方向に広がっていて、西側の自然堤防上と東側の後背湿地上では、土層が大きく異なり、西側では5層、東側では3ないし4層に分けられる。西側では、第Ⅰ層は表土で、灰黒色土が薄く広がっている。その下の第Ⅱ層は暗褐色シルトで、江戸時代後期の遺物を多く含む包含層である。第Ⅲ層は、暗褐色及び褐色シルトから成り、この上面より江戸時代後期から幕末期の遺構が掘り込まれており、当時の生活面と考えられる。上面の遺構検出はこの高さで行った。出土遺物などから18世紀末から19世紀初頭の整地層と考えられる。第Ⅳ層は褐色シルトで、この上面から江戸時代中期の遺構が掘り込まれている。江戸時代前期から中期までの遺物が含まれている。下面の遺構検出はこの高さである。第Ⅷ層は地山で、褐色粘質土と青灰色砂から成る。褐色粘質土は砂が多く、自然堤防形成堆積物と思われる。

東側では、第Ⅰ層は表土であるが、1 m以上の盛土（現代）になっている。その下に、第Ⅴ層の旧水田耕作土である黒灰色粘質土がある。92A区の西側と92B区の東側では、畝状になっている。この旧水田は層序の前後関係・出土遺物などから、江戸時代から明治時代まで使われていたと推定できる。91B区では、第Ⅵ層は暗黄褐色砂質土から成り、江戸時代中期の遺物が含まれる。91A区では、第Ⅶ層は明黄褐色粘質土から成り、この上面で城下町後期の溝が掘り込まれている。部分的に、第Ⅵ・Ⅶ層が存在しない所もある。そして、第Ⅷ層として地山である暗黄褐色シルト及び青灰色砂になる。一部では、砂の代わりに粘質土から成り、地形的な落ち込みであると見られる。第Ⅷ層の上面から1 m程下には、植物片を多く含む暗赤灰色粘質土層が堆積している。この層の前後に流木が含まれ、放射性炭素（ ^{14}C ）年代測定の結果、縄文時代晩期後半に相当することが判明した。（大竹正吾）



第5図 土層セクション図① (1/100)



第6図 土層セクション図② (1/100)

第 2 節 中世～江戸時代中期の遺構

1. 概要

中世（鎌倉時代中頃）～江戸時代中期（18世紀末）までの遺構が存在する調査区は、91D2 区・92B1 区・92B2 区・92A 区・91A 区の 5 調査区である。各調査区の概要をここにまとめておきたい。ただし、検出面の標高が、そのまま当時の生活面ではないということを最初に断わっておく。

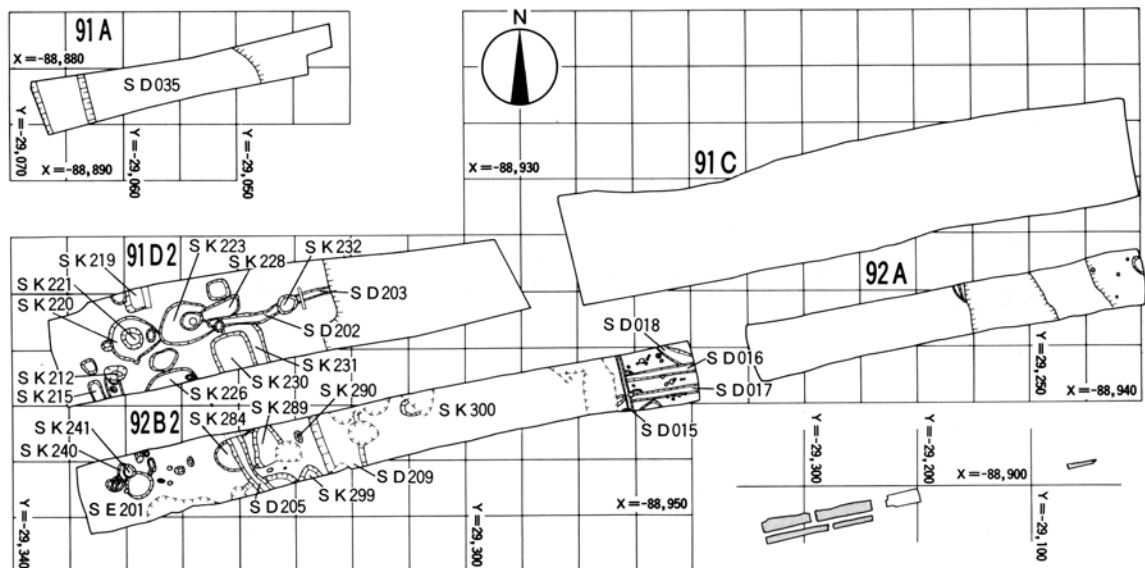
91A 区 今回の調査区で最も東端に位置している。現地表より検出面まで約 2 m あり、かなりの削平を受けている。表土を剥すと旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土が現れ、この層の下から遺構を検出した。標高は約 1.4m 前後で、ここでは城下町期末の溝を 1 条（S D 035）確認した。

91D2 区 美濃街道に面した調査区の下層で、上面の検出面より約 60cm の整地層を掘り下げて、標高約 1.6m 前後で遺構を検出した。時期は、出土遺物などから鎌倉時代中頃（13世紀中葉）～江戸時代中期（18世紀末）と思われる。居住域であったと考えられるが、建物跡などの明確な遺構を検出することはできなかった。

92A 区 91C 区の南側の調査区で、表土を剥すと、旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土と灰白色砂が現れた。これを剥した標高約 1.4～1.5m 前後で遺構を検出したが、遺物の出土量が少ないため時期を確定することができなかった。

92B1 区東半 上層の遺構は、92A 区と全く同じ状況であった。標高約 1.5m 前後で検出された溝やピットなどから、少量ではあるが山茶碗類が出土している。このことから、鎌倉時代中頃（13世紀中葉）と考えられ、92A 区の遺構も同様の時期が想定される。この部分では、下層の遺構面は確認されなかった。

92B2 区 91D 区の南側に位置する美濃街道に面した調査区の下層で、上面の検出面より約 40cm の整地層を掘り下げて、標高約 1.5～1.7m 前後で遺構を検出した。居住域に関連すると思われる廃棄土坑や井戸、礎石群が検出されたが、明確な建物配置は捉えられなかった。出土遺物などから、城下町期末～江戸時代初頭（17世紀初～中葉）と江戸時代中期（18世紀中葉～末）の 2 時期が考えられる。



第 7 図 下層主要遺構配置図

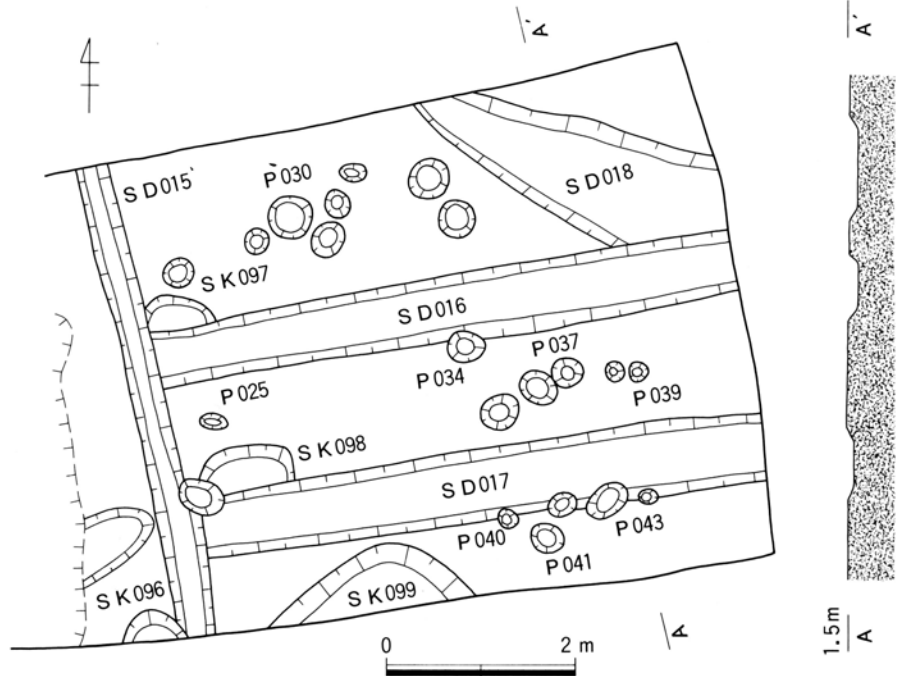
2. 溝

SD 015 92B1 区の東端部分で検出された南北 (N-14°-W) に走る溝で、幅約0.35~0.45m、深さは約 0.1mと浅く、上部の水田により削平されているものと考えられる。出土遺物はなく時期は不明であるが、SD 016とSD 017を切っており、これらよりも新しい時期と思われる。

SD 016 SD 015と直交し、SD 017と並行する (E-10°-N) 溝で、幅約0.75m、深さ約 0.1mを測る。第7型式 (13世紀中葉) の山茶碗類の小皿が出土しており、遺構の時期は鎌倉時代中頃と考えられる。

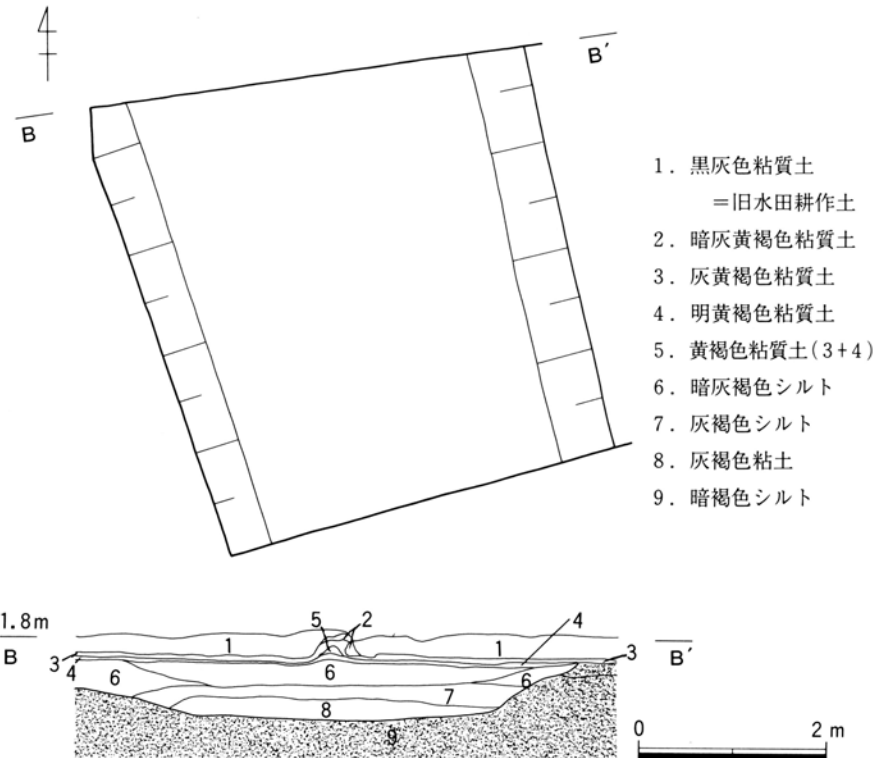
SD 017 SD 016と方向・規模が全く同じである。出土遺物はないが、SD 016と同じ時期が考えられる。

SD 018 上記3条の溝とは方向性が異なる (E-25°-S) 溝で、幅約0.65m、深さ0.07mと浅く、出土遺物はない。SD 016に切られており、これより古い時期が想定される。



第8図 92B2 区東半平面図・断面図 (1:80)

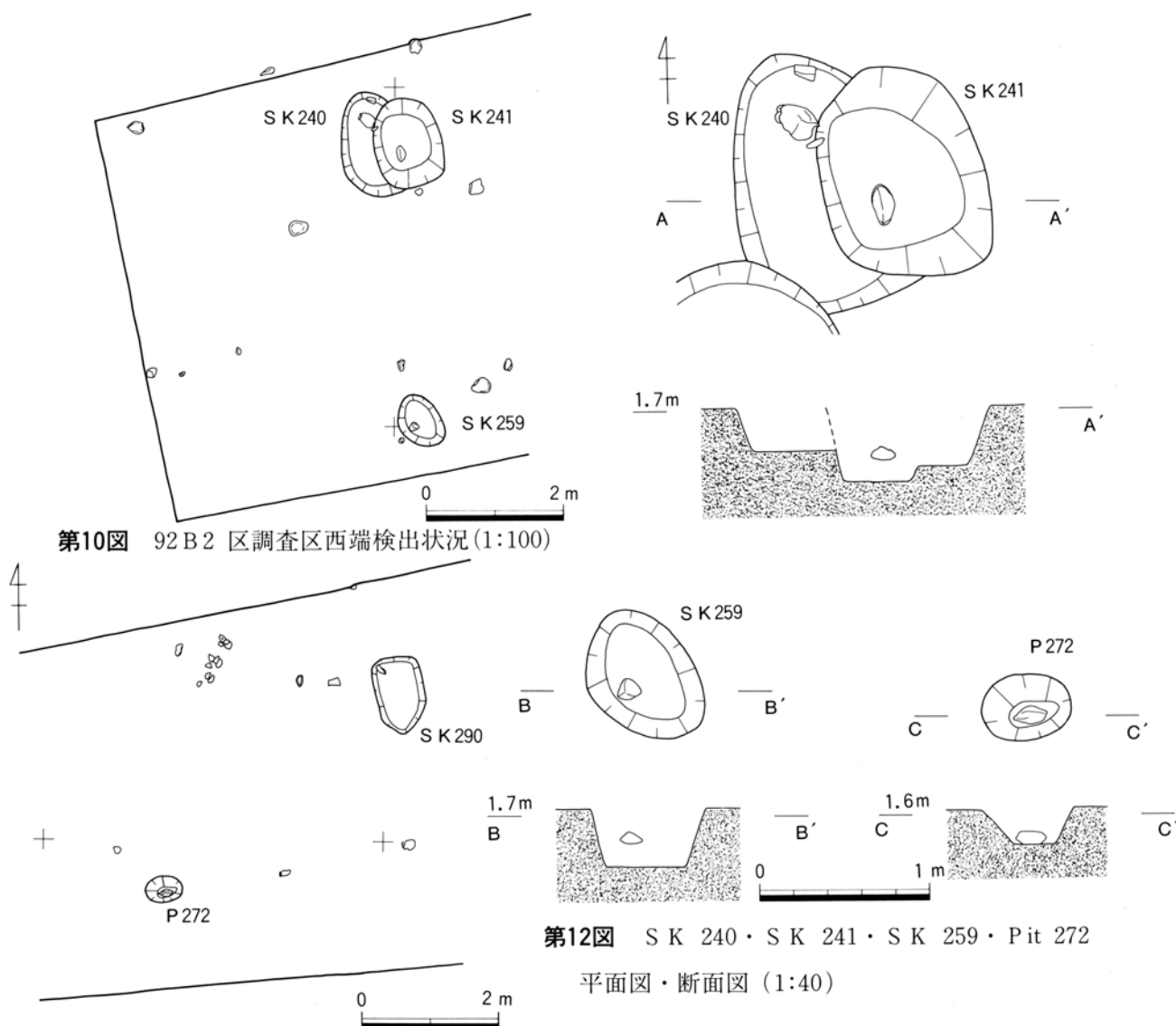
SD 035 91A区で検出された溝で、N-22°-Wの方向性をもち、幅約 4.5m、深さ約 0.6mを測る。備前の播鉢が出土しており、17世紀初頭には埋められたと考えられる。年代的に、清須城の外町を形成していた時期の区画溝と想定される。また、溝は上部の水田によりかなり削平されている可能性が高い。



第9図 SD 035平面図・断面図 (1:80)

3. 礎石群

発掘調査に入る前から、建物跡が検出される可能性のある調査区として、中世以来の美濃街道に面している91D区と92B区の2調査区を想定していたが、調査区が狭く、しかも中央に「御船頭道」と呼ばれる古い道が存在し調査不能であったため、全容を明らかにすることは難しかった。91D区では上層・下層ともに確認されず、92B2区の調査区の西端部分と中央部分で、僅かに清須城の外町を形成していた時期か江戸時代前期頃と思われる礎石群を検出することができた。調査区西端部分では、礎石が検出面と土坑の中から検出されたものとに分けられるが、両者とも建物としては並ばず、礎石建物を想定するに至らなかった。中央部分から検出された礎石群についても同様で、あるいは柵列を想定した方が良いかもしれない。ただ、礎石群の主軸がE-13°-Nとなっており、美濃街道や御船頭道に合っていること、礎石群の周辺の井戸や土坑から近世陶磁器類などの遺物が出土していることから見て、建物が存在していた可能性が高いと考えられる。数回にわたる建物の建て替えが行われ、また調査区が屋敷地の隅であることから建物自体が南側の調査区外に展開していたのではないかと想定される。



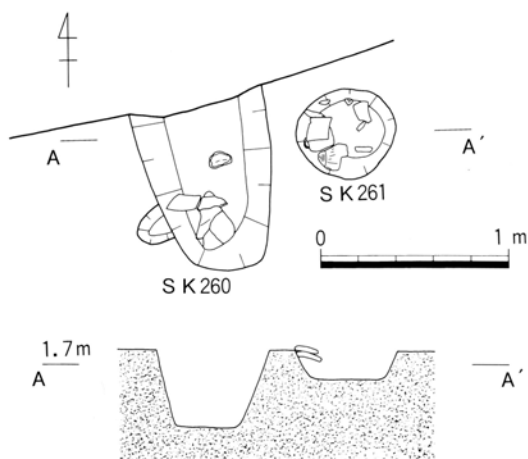
S K 240・241 S K 240は、92B2 区西端部分で検出され、長径約 1.7m、深さ約 0.4mの楕円形を呈した土坑である。出土した礎石の下から、志野の小椀や織部の椀が確認されたことから、時期は17世紀初頭の城下町期末と思われる。S K 240に隣接し、これを切っているS K 241は、長径約 1.5m、短径約 1.0m、深さ 0.5mの楕円形をした土坑である。出土遺物が少なく、時期の確定はできないが、S K 240との切り合い関係から、江戸時代初頭～中期と想定される。

S K 259 S K 259は、92B2 区西端部分の南側で検出され、長径 0.8m、短径約 0.7m、深さ約 0.4mのほぼ円形を呈した土坑である。出土遺物はなく、時期は不明であるが、礎石と思われる石を検出している。

Pit 272 Pit 272は、92B2 区中央部分に位置し、長径 0.5m、短径 0.4m、深さ 0.2mのほぼ円形を呈した柱穴である。ここでも出土遺物はなく、時期は不明であるが、礎石と思われる石を検出している。

4. 土坑

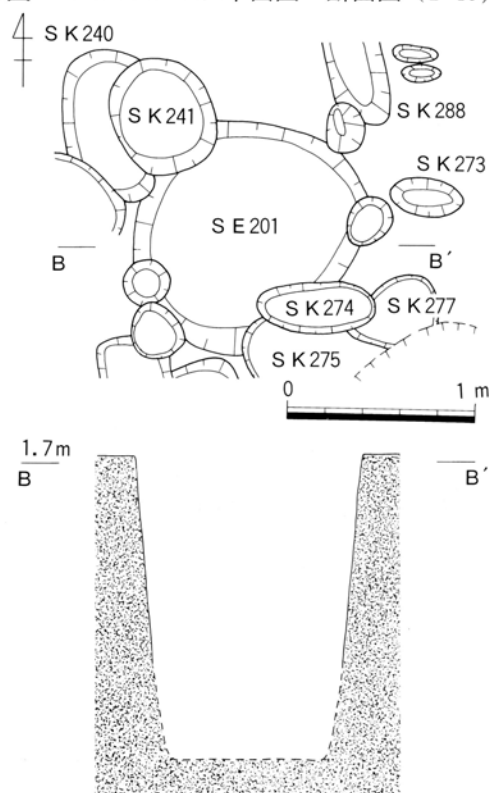
S K 260・261 S K 260は、92B2 区の西端部分の北壁付近で検出され、長径約 1.0m、短径約 0.7m、深さ約 0.4mの楕円形を呈した土坑である。出土遺物として、17世紀中葉と思われる内耳鍋があり、この頃の時期と考えられる。また、S K 261は、S K 260に隣接し、長径約 0.7m、短径 0.5m、深さ約 0.2mを測る円形の土坑である。時期は、出土した播鉢などから、18世紀



第13図 S K 260・261平面図・断面図 (1:40)

5. 井戸

S E 201 S E 201は、92B2 区西端部分の中央に位置しており、長径 2.6m、短径推定約 2.3m、深さ推定約 1.6mのほぼ円形の掘り形をしている。湧水が激しく、さらに掘り下げて構造物を確認することはできなかった。出土遺物が少なく、時期を決定することはできないが、隣接するS K 240・S K 241等の遺構に切られていることから、17世紀初頭以前の清須城の城下町後期と考えられる。(小嶋廣也)



第14図 S E 201平面図・断面図 (1:40)

第3節 江戸時代後期の遺構

1. 概要

江戸時代後期（19世紀代）の遺構は、全ての調査区から検出されている。まず、各調査区の概要を予めまとめておきたい。ただし、前述の通り、検出面の標高がそのまま当時の生活面ではないこと、明治に入ってから埋められた遺構もいくつか含まれていることを断わっておく。

91A区 今回の調査区の中では、最東端に位置する。前述したように、表土の下から旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土が現れたことから、水田が広がっていたと考えられる。

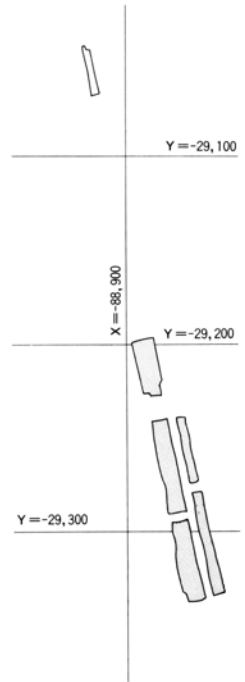
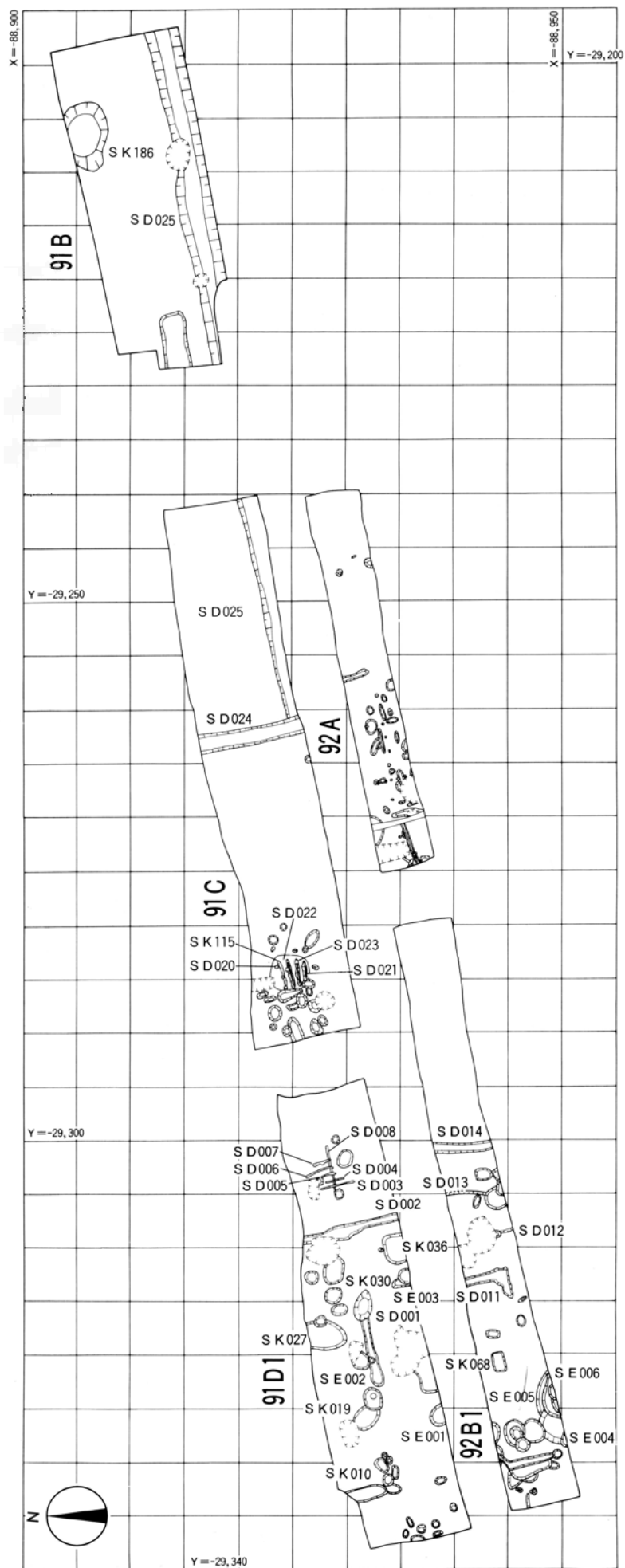
91B区 隣接する5つの調査区の中では、東側に位置している。ここでも、表土の下から旧水田耕作土が現れ、水田であったことが確認された。注目すべき遺構としては、用水と思われる溝SD 025とSK 186があげられる。遺構検出面の標高は、約1.5m前後である。

91C区 遺構がはっきりせず、性格が分かりにくかった調査区であるが、91B区からつづいているSD 025とそれに直交するSD 024が、切り合い関係は不明であるものの意味をもっている。個々の遺構の性格については不明であるが、SD 024以東の部分は、SD 025と旧水田耕作土が現れたことから水田であると考えられ、一方SD 024以西の部分はSK 115の上で検出された畝状遺構により畑地であったと想定される。遺構検出面の標高は、SD 024以西の部分で約1.9m前後、SD 024以東の部分では旧水田耕作土を除去したため約1.6m前後となった。

91D1区 美濃街道に面した調査区の上層で、遺構検出面は標高約1.9～2.2m前後で、西側が高く東に向かって緩やかに下がっていく。住居移転に伴う攪乱が多いが、大まかに性格を掴むことができた。調査区中央より西側には、居住域に関連する井戸や廃棄土坑がみられ、東端部分には畑地に関連する畝状遺構が分布している。この居住域と畑地を区画しているのが、SD 002と考えられる。しかし、居住域からは、建物跡と思われる遺構は確認されなかった。

92A区 前述の通り、表土の下から旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土が現れたことから、水田であったと考えられる。この耕作土を剥した検出面（標高約1.5m）において、西端部分で少数の遺構が検出された。小規模のものが多く、また攪乱も激しいことから、遺構の性格については不明な点が多い。

92B1区 美濃街道に面した調査区の上層で、遺構検出面の標高は、調査区の西端では約2.0mと高く、東に向かって次第に低くなり中央部分では約1.8m前後となっている。また、東端部分では、旧水田耕作土の黒灰色粘質土を取り除いて検出したため、一段低くなり標高は約1.5m前後となっている。住居転居に伴う攪乱が多いが、調査区の西半部分からは、建物跡に関連する礎石群や、井戸、廃棄土坑などが検出された。しかし、礎石群は散在的で建物にはならず、その性格を確認することはできなかった。また、東半部分には、畑地と水田が広がるようであるが、その境目ははっきりとしていない。91D1区で確認されたSD 002に連なるとみられる溝はSD 013で、これが居住域と畑地を区画するものと考えられる。また、その東側で検出された板組みの溝SD 014は、用水の役割を果たしていたようであり、ここで、畑地と水田が区分されていたと思われる。従って江戸時代後期には、美濃街道に面した部分に屋敷が並び、その裏手には溝で区画された畑地と水田が広がっているという景色が想定される。

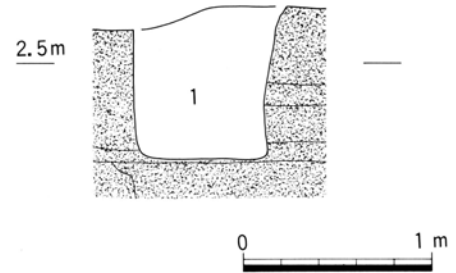


第15図 上層主要遺構配置図

2. 溝

S D 001 S D 001は、91D1 区の中央部分で検出された、幅 0.8～ 1.2m、深さ約 0.3mの溝で、美濃街道に直交、御船頭道に並行の方向性（E-12°-N）を持つ。溝の西側にはS E 001が、東側にはS K 030がある。このことから、これは排水用の溝と考えられ、S K 030は、その水を染み込ませるための汚水溜りのな性格を持つものと考えられる。時期は、出土遺物などから、19世紀中葉と思われる。

S D 002 S D 002は、91D1 区の中央部分で検出された溝で、幅 0.7～ 1.3m、深さ約 0.4mを測り、美濃街道とほぼ並行（N-16°-W）である。上部は後世の削平を受けていると思われる。街道に面した屋敷とその裏側に広がる畑地とを区画する溝で、時期は、出土遺物から19世紀中葉と思われる。



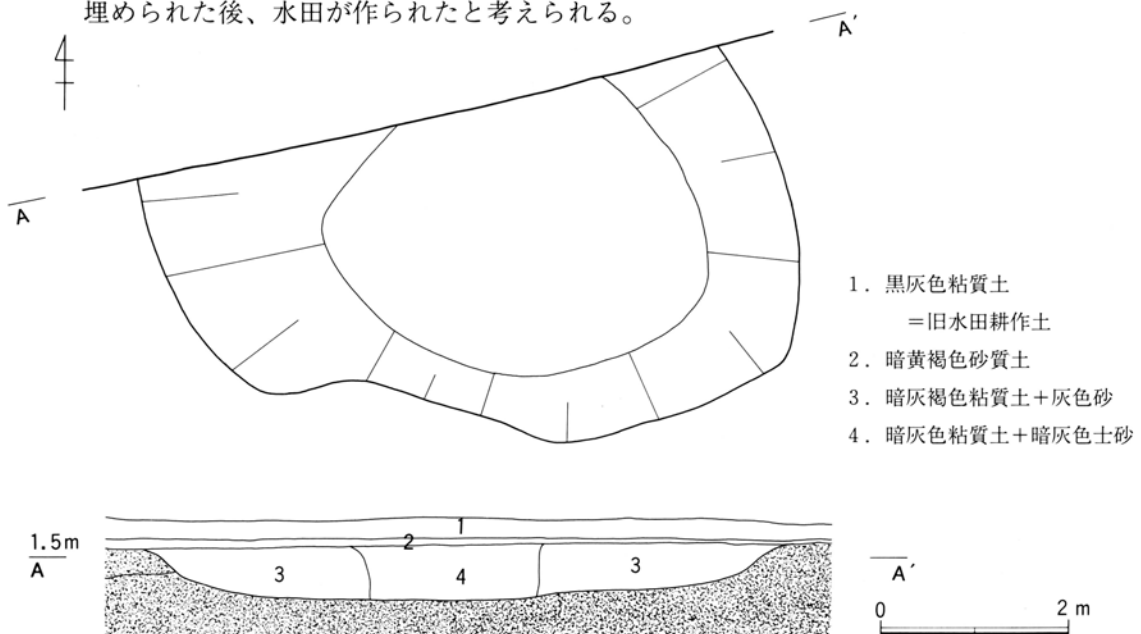
1. 青灰色粘質土

第16図 S D 002北壁セクション図（1:40）

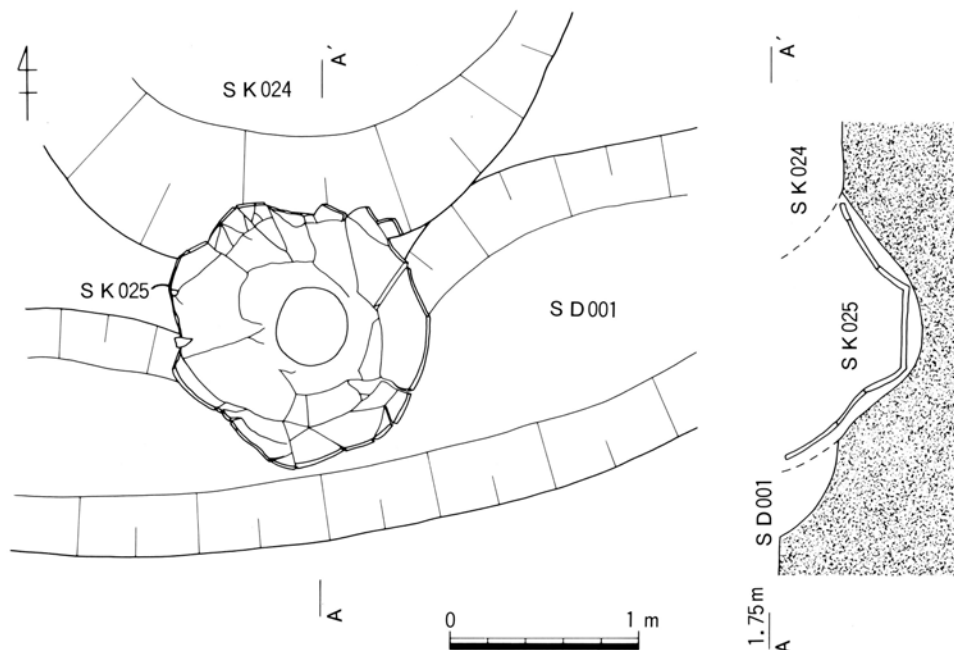
S D 013 S D 013は、92B1 区のほぼ中央部分で検出され、幅約 0.4m、深さ 0.2mと浅く、N-11°-Wの方向性を持つ溝である。すぐ北側に隣接する 91D1 区のS D 002に連なり、屋敷地と畑地とを区画している溝と思われる。出土遺物が極少量であるため、時期を特定することはできないが、S D 002と同様の時期（19世紀初頭～中葉）が想定される。

3. 土坑

S K 186 S K 186は、91B 区の東半部分の北壁付近で検出された、長径約 6.0m、短径約 4.0m、深さ約 0.6mの不定形をした土坑である。旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土の下で検出されたため、水田以前の遺構であると考えられ、水田がいつからつくられているのかを知る上で重要な遺構となった。出土遺物から、時期は19世紀初頭と想定され、従ってこの土坑が埋められた後、水田が作られたと考えられる。

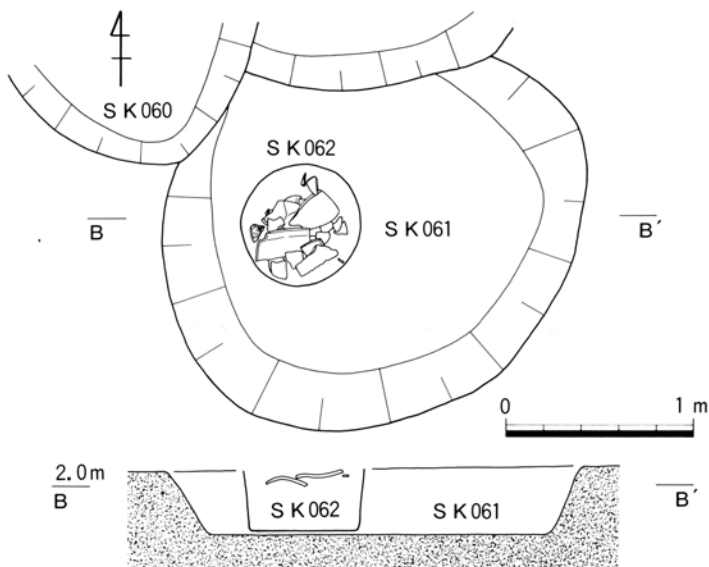


S K 025 S K 025は、91D1 区の中央部分で検出された、径約 0.6mの円形の土坑で、深さは約 0.3mを測る。この土坑には、常滑産の甕が埋められており、すぐ西隣にS E 002が在ることから、井戸水を貯めておく水甕を設置した土坑と推定される。甕は18世紀後葉の製品と思われるが、この土坑が、隣接するS D 001を切りS K 024に切られているため、時期を決定する上で重要な意味を持っている。S D 001は、S E 002の排水溝と思われるが、出土遺物より18世紀後葉、S K 024は19世紀中葉から、ほぼ18世紀末～19世紀初頭が推定される。



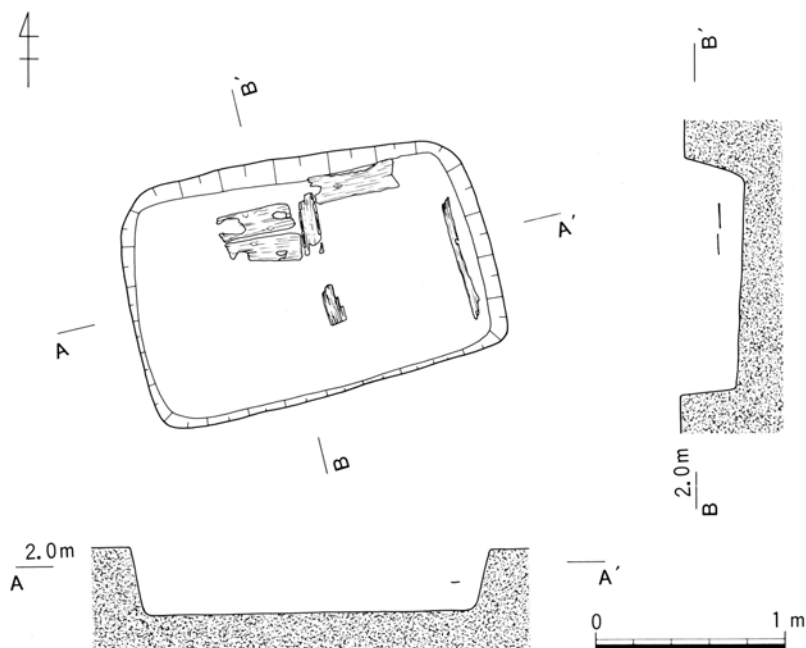
第18図 S K 025平面図・断面図 (1:40)

S K 061・062 S K 061は、92B1 区の西端部分の中央より検出された、径約 2.2m程のほぼ円形を呈した土坑であり、深さは約 0.4mである。また、S K 062は、92B1 区のS K 061内の中央部分より検出された、径0.65m、深さ約 0.4mを測る、円形の土坑である。S K 062では、瓦類や近世陶磁器類が集中して出土したため、検出段階で井戸ではないかと考えていたが、実際に掘り下げてみるとすぐに底が見えてしまったので、掘りかけて中断した井戸ではないかと想像される。時期は、出土遺物から19世紀代と思われるが、詳しい年代決定をするまでに至っていない。遺構の切り合い関係から想定してみると、周辺の遺構（19世紀後葉と思われるS K 058やS K 060など）に切られていることからして、19世紀初頭～中葉と考えられる。また、S K 062が、S K 061の埋土を切っていることから、こちらの方に新しい年代が与えられる。



第19図 S K 061・062平面図・断面図 (1:40)

S K 068 S K 068は、92B1 区のほぼ中央部分の北側で検出された、長径 1.8m、短径約 1.3m、深さ 0.4mを測る、隅丸方形の土坑である。検出した段階から炭を多く含んでおり、はっきりと検出することができた。近世陶磁器類などの遺物とともに、木片が出土している。この木片は、強度と厚さを持っていなかったために取り上げることはできなかった。これが、どのような性格を持つ遺構であるのか分かっていないが、風呂のようなものが想像される。また、時期は、出土遺物から19世紀中～後葉が想定される。



第20図 S K 068平面図・断面図 (1:40)

4. 井戸

S E 001・002 S E 001は、91D1 区の南側で検出された、径約 2.0mの円形の掘り形を持つ井戸である。S E 002は、91D1 区の中央で検出された、長径2.15m、短径1.75mの楕円形の掘り形を持つ井戸である。2基の井戸ともに、中央に漆喰の井戸杵が据えられてはいるが、江戸時代から使用されていたことが他の遺構や出土遺物などから想定される。湧水が激しかったため、下位の構造物や底を確認することはできなかった。

S E 003 S E 003は、91D1 区の中央部分の南壁付近で検出された、径約 1.5mの円形の掘り形を持つ井戸である。出土遺物から19世紀代と考えられる。井戸杵などの構造物や底は確認できなかった。

S E 004 S E 004は、92B1 区の南側で検出された、径約 3.5mの円形の掘り形を持つ井戸である。井戸杵などの構造物は確認できなかった。遺構の切り合い関係や出土遺物から、19世紀中葉と思われる。

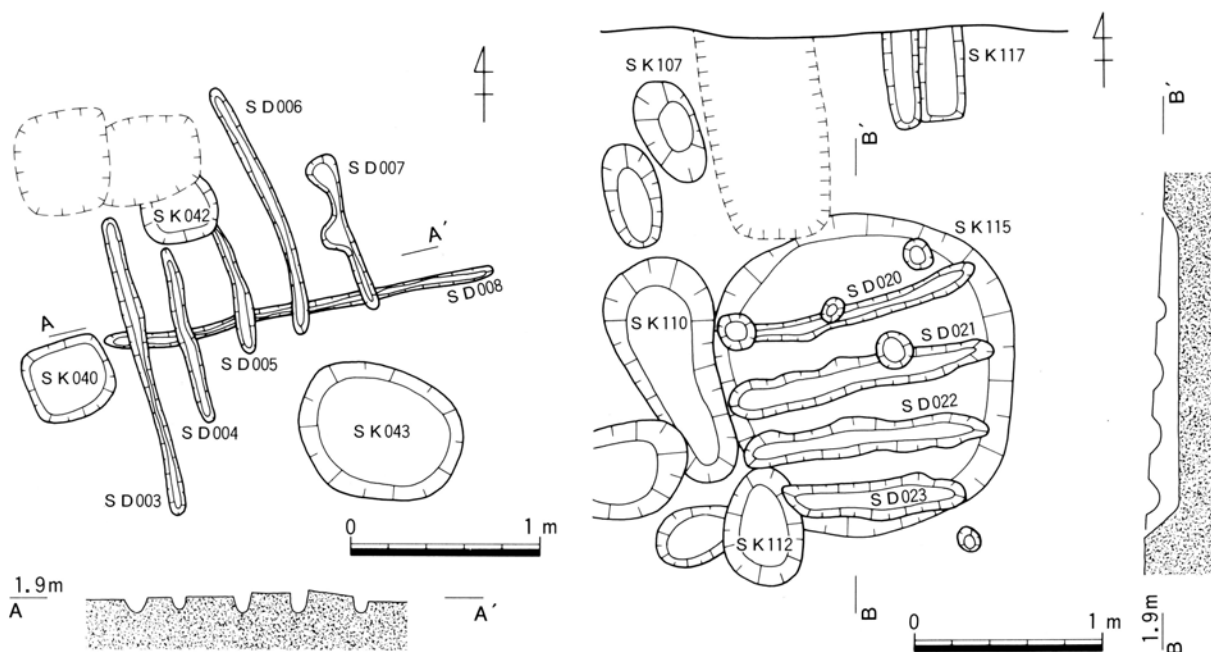
S E 005 S E 005は、92B1 区の南側で検出された、径約 1.5mの井戸である。径約 4.0mのほぼ円形の掘り形を持っている。井戸杵などの構造物は確認できなかった。遺構の切り合い関係や出土遺物から、19世紀前葉と推定される。

S E 006 S E 006は、92B1 区の南側で検出された、径約 1.5mの井戸である。径約 4.0mのほぼ円形の掘り形を持っている。井戸杵などの構造物は確認できなかった。遺構の切り合い関係や出土遺物から、19世紀後葉と推定される。

5. 畝状遺構と用水

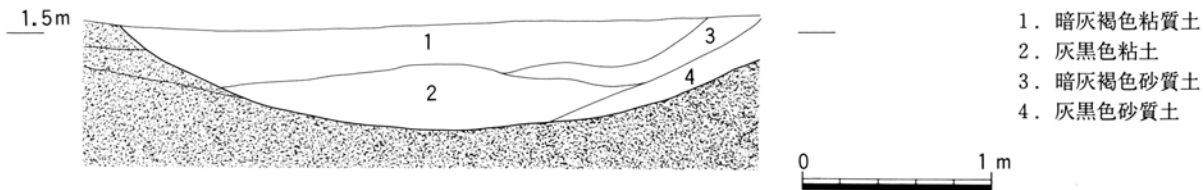
畝状遺構 91D1区と91C区の2つの調査区において、畑の畝と思われる浅い溝状遺構が検出された。

91D1区の東端部分では、SD 003～SD 008の6条が検出され、それぞれ、長さ約2～4m、幅0.1～0.2m、深さ0.1m前後と浅く、うち5条はほぼ美濃街道と同じ方向性(N-13°-W)を持ち、SD 008の1条だけが、これらと直交する方向性(E-11°-N)を持っている。また、91C区の西端部分からは、SK 115の上面よりSD 020～SD 023の4条が検出された。それぞれ、長さ約2～3m、幅0.2～0.4m、深さ約0.1mと浅く、91D1区のSD 008と同じ方向性(E-11°-N)を持っている。これらの浅い溝が、実用性のある溝とは考え難く、畑に伴う畝跡と見られ、この部分が畑地であったことが想定される。時期は、出土遺物が乏しくて確定することはできないが、切り合い関係からほぼ19世紀前葉と思われる。



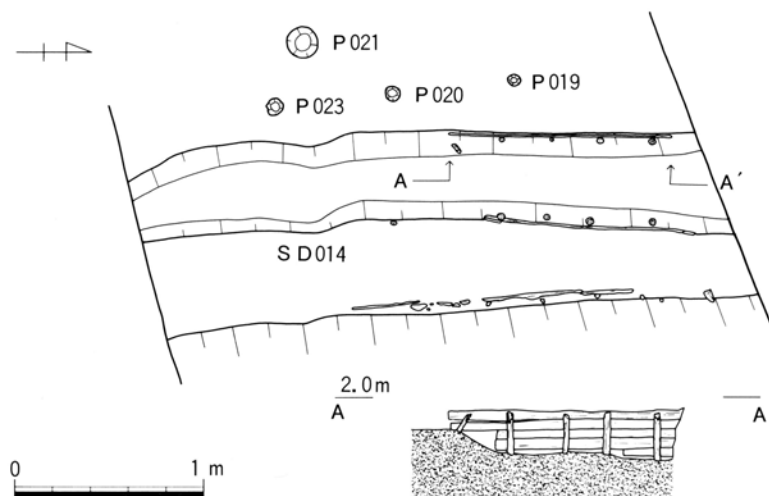
第21図 91D1区畝状遺構平面図・断面図(1:40) 第22図 91C区畝状遺構平面図・断面図(1:40)

SD 025 SD 025は、91B区の調査区全体の南側と91C区の東半部分の南側で検出された、幅約3.6m、深さ0.4～0.6mで西から東に向かって深くなり、E-10°-Nの方向性を持つ溝である。本遺構は、すぐ北側に広がる水田に水を引くための溝と考えられる。出土遺物には、18世紀代のものも含まれるが、19世紀初頭～中葉が中心であるため、この頃の時期と想定される。また、本遺構埋土の中から、8世紀代の須恵器、9～11世紀代の灰釉陶器などが集中して出土しているが、遺構の時期とは無関係で、SD 025廃絶前後に、周囲に分布していたそれらが埋土に混入されたものと考えられる。



第23図 SD 025東壁セクション図(1:40)

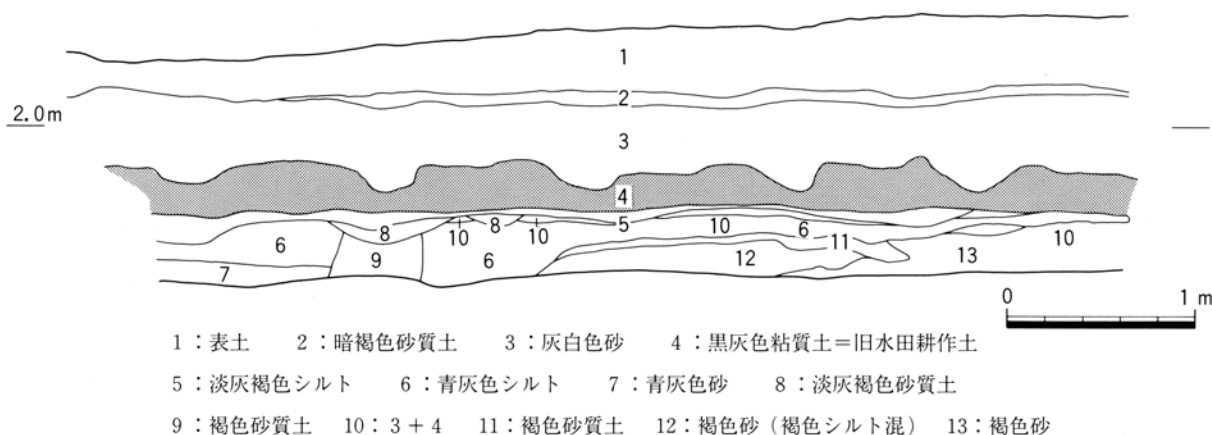
S D 014 S D 014は、92B1 区の中央部分で検出された、幅 0.9m、深さ 0.2mで、ほぼ南北（N-2°-E）に方向性を持つ溝である。この溝の両脇から、木組み遺構が確認されている。薄い板を縦に5枚ほど積み立て、それを押さえつけるように内側から杭が打ち込まれる構造になっている。さらに、その西側には、柵列のようなピット列がある。ここは、屋敷の裏手で畑地との境にあたり、畑へ水を引く用水とも、また、屋敷地からの排水溝とも考えられる。時期は、出土遺物から19世紀中～後葉と想定されるが、19世紀初頭の遺物も見られることから、溝の設置時期はさらに遡ることが考えられる。



第24図 S D 014平面図・断面図（1:40）

6. 水田

全ての調査区において、旧水田耕作土と思われる黒灰色粘質土が検出されている。この粘質土層は、植物遺体を含んでおり、鉄斑やマンガン斑も多くみられた。しかし、遺物はほとんど含まれていない。美濃街道に面した部分（91D区・92B区）には、古い時期から現在に至るまで人々が生活していた様子を窺うことができるが、その他の調査区（91A区・91B区・91C区・92A区）では、中世や清洲城下町期（17世紀初頭）までの遺構分布が認められるものの、それ以後の江戸時代になると遺構が希薄になっていくため、水田が広がっていったように思われる。（小嶋廣也）



第25図 92A区東壁セクション図（1:40）

<註>

江戸時代の時代区分については、本報告書では、説明の都合上、17世紀代を前期、18世紀代を中期、19世紀代を後期に便宜的に区分した。

上層の遺構

溝 (S D)

遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期	遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S D 001	91D1区	S D 02	(865)	120	(28)	江戸後期	S D 019	91C区	S D 07	(100)	10	17	—
S D 002	91D1区	S D 01	(670)	100	(36)	江戸後期	S D 020	91C区	S D 06	(260)	20	9	—
S D 003	91D1区	S D 03	325	18	(10)	—	S D 021	91C区	S D 05	290	35	8	—
S D 004	91D1区	S D 04	195	15	(9)	—	S D 022	91C区	S D 04	260	40	10	江戸後期
S D 005	91D1区	S D 05	(140)	15	(12)	—	S D 023	91C区	S D 03	195	30	12	—
S D 006	91D1区	S D 06	280	15	(13)	—	S D 024	91C区	S D 02	(780)	170	30	江戸後期
S D 007	91D1区	S D 07	175	25	(11)	—	S D 025	91C区	S D 01	(2070)	(200)	36	江戸後期
S D 008	91D1区	S D 08	425	10	(7)	—		91B区	S D 01	(3045)	300	56	江戸後期
S D 009	92B1区	S D 01	(140)	25	9	—	S D 026	91C区	S D 08	(350)	40	9	—
S D 010	92B1区	S D 02	(530)	55	10	—	S D 027	91C区	S D 09	165	40	7	—
S D 011	92B1区	S D 04	(605)	115	23	江戸後期	S D 028	91C区	S D 10	(255)	70	16	江戸後期
S D 012	92B1区	S D 05	(120)	15	6	江戸後期	S D 029	92A区	S D 06	(105)	20	4	—
S D 013	92B1区	S D 03	(425)	35	16	江戸後期	S D 030	92A区	S D 05	(75)	20	5	—
S D 014	92B1区	S D 06	(540)	90	20	江戸後期	S D 031	92A区	S D 04	(390)	45	10	江戸中期
S D 015	92B1区	S D 09	(485)	40	10	中世	S D 032	92A区	S D 01	255	40	8	—
S D 016	92B1区	S D 07	(580)	75	10	中世	S D 033	92A区	S D 02	170	40	8	—
S D 017	92B1区	S D 08	(565)	75	10	中世	S D 034	92A区	S D 03	95	35	12	中世
S D 018	92B2区	S D 108	(220)	65	(7)	中世	S D 035	91A区	S D 01	(435)	450	62	城下町後期

柱穴 (P i t)

遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期	遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
P i t 001	92B1区	P i t 02	30	10	6	江戸後期	P i t 038	92B1区	P i t 17	20	15	7	—
P i t 002	92B1区	P i t 01	65	40	8	江戸後期	P i t 039	92B1区	P i t 18	20	20	7	—
P i t 003	92B1区	P i t 03	(35)	35	11	江戸後期	P i t 040	92B1区	P i t 19	20	20	5	—
P i t 004	92B1区	P i t 04	60	45	11	江戸後期	P i t 041	92B1区	P i t 20	35	30	3	—
P i t 005	92B1区	P i t 05	60	45	14	江戸後期	P i t 042	92B1区	P i t 21	30	25	5	—
P i t 006	92B1区	P i t 06	(10)	10	4	—	P i t 043	92B1区	P i t 22	45	35	4	—
P i t 007	92B1区	P i t 07	10	10	5	—	P i t 044	92B1区	P i t 23	20	15	4	—
P i t 008	92B1区	S K 33	45	40	12	—	P i t 045	91C区	S K 30	40	40	18	—
P i t 009	92B1区	P i t 08	(30)	25	16	—	P i t 046	91C区	S K 42	25	20	5	—
P i t 010	92B1区	P i t 09	35	30	11	江戸後期	P i t 047	91C区	S K 41	35	30	10	—
P i t 011	92B1区	S K 41	(65)	(30)	9	—	P i t 048	91C区	S K 29	40	40	12	—
P i t 012	92B1区	S K 38	50	(30)	14	—	P i t 049	91C区	S K 18	30	25	8	—
P i t 013	92B1区	S K 39	(35)	25	14	江戸後期	P i t 050	91C区	S K 33	50	35	7	—
P i t 014	92B1区	S K 40	50	(25)	6	江戸後期	P i t 051	91C区	S K 31	(40)	30	3	—
P i t 015	92B1区	S K 44	40	25	21	江戸後期	P i t 052	92A区	S K 35	50	15	6	—
P i t 016	92B1区	S K 35	(45)	50	16	江戸後期	P i t 053	92A区	S K 38	(40)	25	6	—
P i t 017	92B1区	S K 64	50	(25)	8	—	P i t 054	92A区	P i t 14	35	20	3	—
P i t 018	92B1区	P i t 28	(50)	(22)	7	江戸後期	P i t 055	92A区	P i t 15	60	30	5	—
P i t 019	92B1区	P i t 10	10	10	5	江戸後期	P i t 056	92A区	P i t 01	25	25	9	—
P i t 020	92B1区	P i t 11	15	15	12	—	P i t 057	92A区	P i t 02	30	25	8	—
P i t 021	92B1区	P i t 13	35	30	13	江戸後期	P i t 058	92A区	P i t 03	30	25	8	—
P i t 022	92B1区	P i t 29	32	30	5	江戸後期	P i t 059	92A区	P i t 04	30	30	8	—
P i t 023	92B1区	P i t 12	15	15	9	—	P i t 060	92A区	P i t 05	25	20	7	—
P i t 024	92B1区	P i t 14	30	20	5	—	P i t 061	92A区	P i t 07	35	30	7	—
P i t 025	92B1区	P i t 30	45	45	3	江戸後期	P i t 062	92A区	P i t 08	(25)	20	5	—
P i t 026	92B1区	P i t 31	40	40	5	江戸後期	P i t 063	92A区	S K 06	35	15	3	—
P i t 027	92B1区	P i t 24	30	20	4	—	P i t 064	92A区	P i t 09	25	25	4	—
P i t 028	92B1区	P i t 25	30	25	5	—	P i t 065	92A区	S K 24	30	25	9	—
P i t 029	92B1区	P i t 32	40	30	6	江戸後期	P i t 066	92A区	P i t 10	25	20	4	—
P i t 030	92B1区	P i t 26	45	45	6	江戸後期	P i t 067	92A区	P i t 06	35	25	5	—
P i t 031	92B1区	P i t 27	30	25	3	—	P i t 068	92A区	S K 28	40	25	9	—
P i t 032	92B1区	P i t 33	50	40	3	江戸後期	P i t 069	92A区	P i t 16	35	30	5	—
P i t 033	92B1区	P i t 34	40	40	3	江戸後期	P i t 070	92A区	P i t 13	30	25	5	—
P i t 034	92B1区	P i t 15	40	35	5	—	P i t 071	92A区	P i t 12	30	25	4	—
P i t 035	92B1区	P i t 35	40	35	7	江戸後期	P i t 072	92A区	P i t 11	15	15	5	—
P i t 036	92B1区	P i t 36	40	30	6	江戸後期	P i t 073	91B区	P i t 02	25	20	5	—
P i t 037	92B1区	P i t 16	30	30	3	—	P i t 074	91B区	P i t 01	60	55	10	江戸後期

井戸 (S E)

遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期	遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S E 001	91D1区	S E 03	195	(100)	—	江戸後期	S E 004	92B1区	S K 14	(350)	(175)	(179)	江戸後期
S E 002	91D1区	S E 02	215	175	—	江戸後期	S E 005	92B1区	SK42-59	(430)	(190)	—	江戸後期
S E 003	91D1区	S E 01	(60)	145	—	江戸後期	S E 006	92B1区	SK47-48	(425)	(135)	—	江戸後期

土坑 (S K)

遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期	遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S K 001	91D1区	S K 28	(40)	45	25	江戸後期	S K 028	91D1区	S K 07	125	105	25	江戸後期
S K 002	91D1区	S K 27	85	60	32	—	S K 029	91D1区	S K 05	160	115	32	江戸後期
S K 003	91D1区	S K 25	110	50	40	江戸後期	S K 030	91D1区	S K 02	295	175	33	江戸後期
S K 004	91D1区	S K 26	30	25	15	江戸後期	S K 031	91D1区	S K 06	130	125	12	江戸後期
S K 005	91D1区	S K 24	135	(55)	5	—	S K 032	91D1区	S K 04	160	165	30	江戸後期
S K 006	91D1区	S K 23	85	70	38	江戸後期	S K 033	91D1区	S K 03	(250)	195	34	江戸後期
S K 007	91D1区	S K 22	90	55	9	江戸後期	S K 034	91D1区	S K 01	(135)	130	22	江戸後期
S K 008	91D1区	S K 21	85	80	20	江戸後期	S K 035	91D1区	S K 41	40	40	4	—
S K 009	91D1区	S K 36	(65)	65	37	江戸後期	S K 036	91D1区	S K 43	(150)	290	(5)	江戸後期
S K 010	91D1区	S K 30	(390)	140	30	江戸後期	S K 037	91D1区	S K 46	(300)	(235)	—	—
S K 011	91D1区	S K 31	(150)	(105)	28	江戸後期	S K 038	91D1区	S K 18	75	500	11	江戸後期
S K 012	91D1区	S K 32	120	105	28	江戸後期	S K 039	91D1区	S K 17	(140)	(80)	18	江戸後期
S K 013	91D1区	S K 34	110	65	8	江戸後期	S K 040	91D1区	S K 13	135	120	10	江戸後期
S K 014	91D1区	S K 33	140	90	20	江戸後期	S K 041	91D1区	S K 42	210	205	20	江戸後期
S K 015	91D1区	S K 35	75	60	11	江戸後期	S K 042	91D1区	S K 40	(80)	(65)	10	—
S K 016	91D1区	S K 39	65	55	14	江戸後期	S K 043	91D1区	S K 08	180	145	20	江戸後期
S K 017	91D1区	S K 19	115	80	6	江戸後期	S K 044	91D1区	S K 47	(70)	(70)	—	—
S K 018	91D1区	S K 20	95	75	31	江戸後期	S K 045	91D1区	S K 45	90	85	6	江戸後期
S K 019	91D1区	S K 37	(270)	(200)	30	江戸後期	S K 046	91D1区	S K 44	(145)	(85)	17	江戸後期
S K 020	91D1区	S K 10	(270)	(85)	38	江戸後期	S K 047	92B1区	S K 36	(100)	(160)	21	江戸後期
S K 021	91D1区	S K 16	(340)	(190)	30	江戸後期	S K 048	92B1区	S K 37	(155)	(35)	17	江戸後期
S K 022	91D1区	S K 14	285	150	24	江戸後期	S K 049	92B1区	S K 21	385	(115)	28	江戸後期
S K 023	91D1区	S K 12	60	55	6	—	S K 050	92B1区	S K 32	(160)	(150)	33	江戸後期
S K 024	91D1区	S K 11	(140)	165	15	江戸後期	S K 051	92B1区	S K 07	(170)	110	16	江戸後期
S K 025	91D1区	S K 48	65	60	31	江戸後期	S K 052	92B1区	S K 63	(75)	70	3	江戸後期
S K 026	91D1区	S K 09	(240)	(140)	(18)	江戸後期	S K 053	92B1区	S K 46	(145)	(170)	42	江戸後期
S K 027	91D1区	S K 15	(350)	265	23	江戸後期	S K 054	92B1区	S K 06	95	70	12	江戸後期

第2表 遺構一覧表 (1)

遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期	遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S K 055	92B 1区	S K 05	95	80	30	江戸後期	S K 122	91C 区	S K 19	65	40	9	江戸後期
S K 056	92B 1区	S K 45	180	(45)	5	江戸後期	S K 123	91C 区	S K 09	70	65	13	江戸後期
S K 057	92B 1区	S K 03	(195)	(65)	21	江戸後期	S K 124	91C 区	S K 08	95	75	12	—
S K 058	92B 1区	S K 25	(275)	205	35	江戸後期	S K 125	91C 区	S K 05	(680)	(485)	20	江戸後期
S K 059	92B 1区	S K 10	(120)	120	35	江戸後期	S K 126	91C 区	S K 07	215	195	9	—
S K 060	92B 1区	S K 09	130	125	25	江戸後期	S K 127	91C 区	S K 04	(990)	(370)	15	江戸後期
S K 061	92B 1区	S K 20	(200)	220	35	江戸後期	S K 128	91C 区	S K 02	120	50	21	江戸後期
S K 062	92B 1区	S K 24	65	65	36	江戸後期	S K 129	91C 区	S K 03	65	55	18	—
S K 063	92B 1区	S K 08	(160)	(55)	18	江戸後期	S K 130	91C 区	S K 06	60	55	13	—
S K 064	92B 1区	S K 62	(95)	65	31	江戸後期	S K 131	91C 区	S K 01	195	145	17	江戸後期
S K 065	92B 1区	S K 28	100	55	29	江戸後期	S K 132	91C 区	S K 51	-70	(60)	(29)	江戸後期
S K 066	92B 1区	S K 27	160	(45)	32	江戸後期	S K 133	91C 区	S K 35	(265)	(220)	8	江戸後期
S K 067	92B 1区	S K 15	(135)	80	35	江戸後期	S K 134	91C 区	S K 36	(95)	80	5	—
S K 068	92B 1区	S K 02	180	125	40	江戸後期	S K 135	91C 区	S K 39	(55)	50	28	—
S K 069	92B 1区	S K 11	80	75	28	城下町期か	S K 136	91C 区	S K 40	60	45	12	江戸後期
S K 070	92B 1区	S K 12	(90)	60	25	江戸後期	S K 137	91C 区	S K 37	(65)	40	12	—
S K 071	92B 1区	S K 13	90	70	25	江戸後期	S K 138	91C 区	S K 38	95	55	13	江戸後期
S K 072	92B 1区	S K 58	(70)	65	12	江戸後期	S K 139	91C 区	S K 32	(95)	(90)	13	—
S K 073	92B 1区	S K 43	(165)	245	22	江戸後期	S K 140	91C 区	S K 34	70	65	16	江戸後期
S K 074	92B 1区	S K 60	(165)	(65)	42	江戸後期	S K 141	91C 区	S K 28	140	40	11	江戸後期
S K 075	92B 1区	S K 01	125	75	26	江戸後期	S K 142	92A 区	S K 42	(255)	(60)	15	—
S K 076	92B 1区	S K 61	55	50	3	—	S K 143	92A 区	S K 37	(85)	(20)	6	—
S K 077	92B 1区	S K 16	110	90	36	江戸後期	S K 144	92A 区	S K 34	60	45	6	—
S K 078	92B 1区	S K 04	(105)	145	38	江戸後期	S K 145	92A 区	S K 33	70	55	11	江戸後期
S K 079	92B 1区	S K 17	95	40	25	江戸後期	S K 146	92A 区	S K 36	(105)	(25)	6	—
S K 080	92B 1区	S K 18	(85)	40	24	江戸後期	S K 147	92A 区	S K 39	80	45	6	江戸後期
S K 081	92B 1区	S K 22	(40)	65	46	江戸後期	S K 148	92A 区	S K 41	(265)	55	6	江戸後期
S K 082	92B 1区	S K 34	(70)	(25)	8	江戸後期	S K 149	92A 区	S K 40	(90)	35	6	—
S K 083	92B 1区	S K 23	(85)	75	34	江戸後期	S K 150	92A 区	S K 07	(60)	(30)	10	—
S K 084	92B 1区	S K 49	130	65	34	江戸後期	S K 151	92A 区	S K 08	(60)	(55)	10	—
S K 085	92B 1区	S K 57	70	(20)	4	—	S K 152	92A 区	S K 18	60	(35)	9	—
S K 086	92B 1区	S K 19	(190)	215	93	江戸後期	S K 153	92A 区	S K 19	65	45	11	—
S K 087	92B 1区	S K 26	(120)	(75)	79	江戸後期	S K 154	92A 区	S K 21	65	65	6	—
S K 088	92B 1区	S K 50	155	(60)	26	江戸後期	S K 155	92A 区	S K 20	90	(40)	5	—
S K 089	92B 1区	S K 31	165	115	90	江戸後期	S K 156	92A 区	S K 01	(140)	55	9	—
S K 090	92B 1区	S K 30	(140)	(65)	15	江戸後期	S K 157	92A 区	S K 02	(65)	(25)	8	—
S K 091	92B 1区	S K 56	105	(40)	25	江戸後期	S K 158	92A 区	S K 09	(115)	(50)	11	—
S K 092	92B 1区	S K 65	70	45	5	江戸後期	S K 159	92A 区	S K 22	(75)	(35)	7	—
S K 093	92B 1区	S K 66	(140)	(30)	5	江戸後期	S K 160	92A 区	S K 10	(55)	40	7	—
S K 094	92B 1区	S K 53	50	35	7	—	S K 161	92A 区	S K 11	105	(40)	10	—
S K 095	92B 1区	S K 29	75	45	11	江戸後期	S K 162	92A 区	S K 23	(170)	60	8	—
S K 096	92B 1区	S K 52	(30)	(65)	7	—	S K 163	92A 区	S K 25	145	(115)	6	—
S K 097	92B 1区	S K 55	75	(40)	4	—	S K 164	92A 区	S K 03	(55)	65	9	—
S K 098	92B 1区	S K 54	100	(45)	8	江戸後期	S K 165	92A 区	S K 04	110	(50)	7	—
S K 099	92B 1区	S K 51	220	(70)	10	城下町期か	S K 166	92A 区	S K 05	120	40	7	—
S K 100	91C 区	S K 27	70	70	24	—	S K 167	92A 区	S K 26	85	70	10	—
S K 101	91C 区	S K 23	110	85	25	江戸後期	S K 168	92A 区	S K 27	120	50	10	—
S K 102	91C 区	S K 54	(235)	115	26	江戸後期	S K 169	92A 区	S K 12	70	40	6	—
S K 103	91C 区	S K 53	165	115	25	—	S K 170	92A 区	S K 13	75	45	11	—
S K 104	91C 区	S K 26	120	80	30	—	S K 171	92A 区	S K 16	(215)	60	8	江戸後期
S K 105	91C 区	S K 22	155	120	13	江戸後期	S K 172	92A 区	S K 44	(125)	(52)	10	—
S K 106	91C 区	S K 44	115	60	12	江戸後期	S K 173	92A 区	S K 17	(140)	(40)	18	—
S K 107	91C 区	S K 43	120	60	13	江戸後期	S K 174	92A 区	S K 29	100	35	11	—
S K 108	91C 区	S K 52	(105)	60	30	江戸後期	S K 175	92A 区	S K 14	110	(75)	6	—
S K 109	91C 区	S K 50	150	100	22	—	S K 176	92A 区	S K 15	(55)	40	6	—
S K 110	91C 区	S K 57	245	80	22	江戸後期	S K 177	92A 区	S K 32	70	65	15	江戸後期
S K 111	91C 区	S K 56	70	60	41	—	S K 178	92A 区	S K 31	55	15	2	—
S K 112	91C 区	S K 55	125	85	31	江戸後期	S K 179	92A 区	S K 30	(95)	(40)	18	江戸後期
S K 113	91C 区	S K 49	130	(70)	70	—	S K 180	92A 区	S K 43	(140)	(45)	5	—
S K 114	91C 区	S K 59	290	(165)	4	江戸後期	S K 181	91B 区	S K 05	(475)	255	15	江戸後期
S K 115	91C 区	S K 58	345	300	12	江戸後期	S K 182	91B 区	S K 06	285	(170)	10	—
S K 116	91C 区	S K 16	(60)	35	18	—	S K 183	91B 区	S K 02	115	95	12	江戸後期
S K 117	91C 区	S K 15	(55)	50	15	—	S K 184	91B 区	S K 03	150	90	27	江戸後期
S K 118	91C 区	S K 14	55	40	11	—	S K 185	91B 区	S K 04	325	300	18	江戸後期
S K 119	91C 区	S K 13	95	85	11	—	S K 186	91B 区	S K 01	(600)	(310)	58	江戸後期
S K 120	91C 区	S K 46	70	60	9	—	S K 187	91B 区	S K 07	100	80	15	—
S K 121	91C 区	S K 47	(185)	120	43	江戸後期	—	—	—	—	—	—	—

その他の遺構 (S X)

遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期	遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S X 001	91D 1区	S X 01	(735)	(520)	14	江戸後期	S X 003	91C 区	S X 01	890	395	12	江戸後期
S X 002	91C 区	S X 02	(560)	370	15	江戸後期	S X 004	91A 区	S X 02	440	(430)	8	—

下 層 の 遺 構

遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期	遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S D 201	91D 2区	S D 102	165	40	21	—	S D 206	92B 2区	S D 106	255	50	25	江戸中期
S D 202	91D 2区	S D 101	(655)	100	25	江戸中期	S D 207	92B 2区	S D 101	92	20	5	—
S D 203	91D 2区	S D 103	(245)	40	18	江戸中期	S D 208	92B 2区	S D 102	64	18	4	江戸中期
S D 204	92B 2区	S D 103	(110)	40	10	江戸中期	S D 209	92B 2区	S D 104	(485)	(425)	30	江戸中期
S D 205	92B 2区	S D 105	(430)	110	30	江戸中期							

柱 穴 (P i t)

遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期	遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
P i t 201	91D 2区	S K 125	20	20	12	—	P i t 212	92B 2区	S K 158	30	25	6	—
P i t 202	91D 2区	S K 121	45	40	8	—	P i t 213	92B 2区	S K 157	25	20	3	江戸中期
P i t 203	91D 2区	S K 116	30	35	13	—	P i t 214	92B 2区	P i t 126	30	30	4	—
P i t 204	91D 2区	S K 120	45	45	13	—	P i t 215	92B 2区	P i t 137	20	17	7	—
P i t 205	91D 2区	P i t 101	25	25	19	江戸中期	P i t 216	92B 2区	S K 173	40	35	6	—
P i t 206	91D 2区	P i t 102	25	20	12	江戸中期	P i t 217	92B 2区	S K 148	(35)	50	24	—
P i t 207	91D 2区	S K 126	50	45	12	—	P i t 218	92B 2区	P i t 113	(20)	20	8	—
P i t 208	91D 2区	S K 112	30	30	25	—	P i t 219	92B 2区	P i t 122	15	10	3	—
P i t 209	91D 2区	S K 119	20	15	—	—	P i t 220	92B 2区	S K 195	40	20	5	—
P i t 210	91D 2区	S K 106	45	(20)	7	—	P i t 221	92B 2区	P i t 134	(10)	(5)	3	江戸中期
P i t 211	92B 2区	S K 205	(50)	(45)	7	江戸中期	P i t 222	92B 2区	P i t 135	20	15	18	江戸中期

第3表 遺構一覧表 (2)

遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期	遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
Pit223	92B2区	Pit121	15	10	5	—	Pit253	92B2区	Pit107	25	20	3	—
Pit224	92B2区	Pit123	20	15	18	江戸中期	Pit254	92B2区	S K183	40	20	3	—
Pit225	92B2区	Pit120	15	10	4	—	Pit255	92B2区	S K106	50	45	7	—
Pit226	92B2区	S K165	40	(25)	10	—	Pit256	92B2区	S K109	45	35	10	—
Pit227	92B2区	S K171	30	25	28	江戸中期	Pit257	92B2区	S K153	(24)	24	7	—
Pit228	92B2区	S K164	50	30	21	—	Pit258	92B2区	S K152	(22)	44	10	—
Pit229	92B2区	S K151	(28)	44	8	—	Pit259	92B2区	S K154	(32)	32	7	—
Pit230	92B2区	S K166	(45)	35	19	—	Pit260	92B2区	S K127	50	50	4	—
Pit231	92B2区	Pit118	15	10	18	—	Pit261	92B2区	Pit114	30	25	5	—
Pit232	92B2区	S K163	50	10	8	—	Pit262	92B2区	Pit115	(25)	25	7	—
Pit233	92B2区	Pit117	15	15	21	—	Pit263	92B2区	S K199	(35)	25	6	—
Pit234	92B2区	S K168	(25)	15	11	—	Pit264	92B2区	S K116	20	15	4	—
Pit235	92B2区	Pit138	(15)	10	2	—	Pit265	92B2区	Pit110	20	10	5	—
Pit236	92B2区	S K169	45	40	27	江戸中期	Pit266	92B2区	S K118	(45)	(15)	7	—
Pit237	92B2区	Pit136	(30)	25	28	—	Pit267	92B2区	Pit111	20	15	2	—
Pit238	92B2区	Pit119	15	15	17	—	Pit268	92B2区	S K202	40	20	5	—
Pit239	92B2区	Pit125	10	10	18	—	Pit269	92B2区	Pit112	35	30	7	—
Pit240	92B2区	S K172	(35)	25	10	—	Pit270	92B2区	S K187	40	35	35	江戸中期
Pit241	92B2区	Pit116	10	10	12	—	Pit271	92B2区	S K189	20	20	11	—
Pit242	92B2区	Pit140	(45)	(35)	13	—	Pit272	92B2区	S K190	50	40	20	—
Pit243	92B2区	Pit139	25	20	24	—	Pit273	92B2区	Pit131	15	10	16	—
Pit244	92B2区	S K170	(30)	50	20	—	Pit274	92B2区	Pit132	20	20	5	—
Pit245	92B2区	S K197	(45)	(20)	29	江戸中期	Pit275	92B2区	Pit133	30	20	12	—
Pit246	92B2区	Pit127	(15)	20	8	—	Pit276	92B2区	S K192	30	20	30	—
Pit247	92B2区	S K181	(20)	30	10	—	Pit277	92B2区	Pit134	40	15	5	—
Pit248	92B2区	S K117	(25)	(45)	8	—	Pit278	92B2区	Pit135	15	15	5	—
Pit249	92B2区	Pit128	20	15	5	—	Pit279	92B2区	S K114	45	20	8	—
Pit250	92B2区	Pit129	45	35	4	—	Pit280	92B2区	S K113	50	25	6	—
Pit251	92B2区	Pit130	20	15	3	—	Pit281	92B2区	S K203	50	20	14	—
Pit252	92B2区	S K182	50	20	2	—							
井戸 (S E)													
遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規 模 (cm)			時 期							
			長 辺	短 辺	深 さ								
S E201	92B2区	S K175	260	(225)	(164)	城下町後期							
土坑 (S K)													
遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規 模 (cm)			時 期	遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規 模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S K201	91D2区	S K122	(115)	30	22	江戸中期	S K251	92B2区	S K131	70	(30)	14	江戸中期
S K202	91D2区	S K118	70	30	38	江戸中期	S K252	92B2区	S K130	(95)	60	38	江戸中期
S K203	91D2区	S K115	(75)	80	20	江戸中期	S K253	92B2区	S K155	60	45	18	—
S K204	91D2区	S K113	85	(20)	12	—	S K254	92B2区	S K104	120	40	15	江戸中期
S K205	91D2区	S K128	130	(60)	17	江戸中期	S K255	92B2区	S K133	60	45	20	江戸中期
S K206	91D2区	S K131	85	65	10	江戸中期	S K256	92B2区	S K162	65	15	12	江戸中期
S K207	91D2区	S K123	100	25	22	—	S K257	92B2区	S K207	60	30	20	—
S K208	91D2区	S K133	65	50	21	江戸中期	S K258	92B2区	S K208	(52)	(45)	14	—
S K209	91D2区	S K132	85	70	18	江戸中期	S K259	92B2区	S K105	80	65	35	—
S K210	91D2区	S K129	105	95	29	江戸中期	S K260	92B2区	S K140	(95)	65	42	江戸初頭
S K211	91D2区	S K114	140	110	20	江戸中期	S K261	92B2区	S K174	65	50	17	江戸中期
S K212	91D2区	S K105	190	125	28	江戸中期	S K262	92B2区	S K134	(135)	(65)	20	江戸中期
S K213	91D2区	S K110	95	40	16	江戸中期	S K263	92B2区	S K150	(60)	(80)	37	江戸中期
S K214	91D2区	S K109	60	85	15	江戸中期	S K264	92B2区	S K179	(85)	(35)	8	—
S K215	91D2区	S K104	(140)	125	19	江戸中期	S K265	92B2区	S K180	(95)	(30)	2	江戸中期
S K216	91D2区	S K139	95	75	28	江戸中期	S K266	92B2区	S K135	135	35	43	江戸中期
S K217	91D2区	S K108	(155)	140	16	江戸中期	S K267	92B2区	S K136	56	32	20	江戸中期
S K218	91D2区	S K111	(60)	60	—	江戸中期	S K268	92B2区	S K107	85	80	33	江戸中期
S K219	91D2区	S K134	(170)	(150)	27	江戸中期	S K269	92B2区	S K143	(76)	54	39	江戸中期
S K220	91D2区	S K127	445	(440)	28	江戸中期	S K270	92B2区	S K142	92	54	37	—
S K221	91D2区	SK127F	215	185	24	江戸中期	S K271	92B2区	S K209	85	(60)	34	—
S K222	91D2区	S K138	125	50	19	江戸中期	S K272	92B2区	S K141	52	32	25	江戸中期
S K223	91D2区	S K101	(485)	375	18	江戸中期	S K273	92B2区	S K126	80	40	12	—
S K224	91D2区	S K107	270	200	30	江戸中期	S K274	92B2区	S K144	116	52	6	—
S K225	91D2区	S K117	100	(30)	—	—	S K275	92B2区	S K145	120	(80)	7	—
S K226	91D2区	S K103	(435)	(90)	36	江戸中期	S K276	92B2区	S K156	(65)	65	21	—
S K227	91D2区	S K136	190	165	26	江戸中期	S K277	92B2区	S K129	105	(65)	7	—
S K228	91D2区	S K135	(365)	120	32	江戸中期	S K278	92B2区	S K124	(40)	60	6	—
S K229	91D2区	S K124	100	(35)	17	—	S K279	92B2区	S K125	80	(65)	20	—
S K230	91D2区	S K102	(310)	335	23	江戸中期	S K280	92B2区	S K206	(110)	(75)	23	—
S K231	91D2区	S K130	(350)	(350)	17	江戸中期	S K281	92B2区	S K198	(120)	(75)	30	江戸中期
S K232	91D2区	S K137	175	165	22	—	S K282	92B2区	S K115	100	45	7	—
S K233	92B2区	S K185	(115)	(55)	32	江戸中期	S K283	92B2区	S K108	90	60	5	—
S K234	92B2区	S K147	60	50	22	江戸中期	S K284	92B2区	S K122	(355)	355	24	江戸中期
S K235	92B2区	S K184	(60)	(40)	9	江戸中期	S K285	92B2区	Pit104	46	38	18	江戸中期
S K236	92B2区	S K139	80	25	13	—	S K286	92B2区	Pit103	50	34	27	—
S K237	92B2区	S K138	95	30	24	—	S K287	92B2区	S K177	(60)	(35)	50	江戸中期
S K238	92B2区	S K121	(90)	60	14	江戸中期	S K288	92B2区	S K178	75	20	19	江戸中期
S K239	92B2区	S K146	(90)	50	35	—	S K289	92B2区	S K123	(350)	260	20	江戸中期
S K240	92B2区	S K101	170	(85)	36	城下町後期	S K290	92B2区	S K188	110	75	11	江戸中期
S K241	92B2区	S K102	130	105	47	江戸初頭	S K291	92B2区	S K210	65	(52)	15	—
S K242	92B2区	S K159	(85)	(35)	20	江戸中期	S K292	92B2区	S K191	65	30	16	—
S K243	92B2区	S K160	95	(45)	20	江戸中期	S K293	92B2区	S K204	(470)	(125)	57	—
S K244	92B2区	S K193	100	55	20	江戸中期	S K294	92B2区	S K103	(88)	76	21	江戸中期
S K245	92B2区	S K194	(80)	(80)	10	江戸中期	S K295	92B2区	Pit106	84	50	25	江戸中期
S K246	92B2区	S K120	(145)	(120)	20	—	S K296	92B2区	Pit105	56	28	28	—
S K247	92B2区	S K137	110	40	34	—	S K297	92B2区	Pit102	56	36	14	江戸中期
S K248	92B2区	S K196	60	25	14	—	S K298	92B2区	Pit101	52	30	8	—
S K249	92B2区	S K161	60	35	28	江戸中期	S K299	92B2区	S K167	(130)	230	30	江戸中期
S K250	92B2区	S K132	(70)	(40)	13	—	S K300	92B2区	S K176	(125)	180	6	江戸中期
その他の遺構 (S X)													
遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規 模 (cm)			時 期	遺構 番号	調査区	旧遺構 番号	規 模 (cm)			時 期
			長 辺	短 辺	深 さ					長 辺	短 辺	深 さ	
S X201	91D2区	S X101	—	—	—	江戸中期	S X202	92B2区	S X101	—	—	—	江戸中期

第4表 遺物一覧表 (3)

第Ⅲ章 遺 物



第Ⅲ章 遺物 目次

第1節 出土遺物の概要	23
第2節 古代の遺物	23
第3節 中世の遺物	25
第4節 近世の遺物	26
1. 概 要	26
2. 分 類	26
3. 統計方法	32
4. 陶磁器類	33
5. 加工円盤	87
6. 瓦 類	91
7. 人形・ミニチュア類	96
8. 木 製 品	100
9. 金属製品	103
10. 石 製 品	104

第1節 出土遺物の概要

今回の発掘調査で、各調査区より出土した遺物は、27ℓ入りコンテナにして約300箱に及んだ。その大多数を占めているのは、近世陶磁器類と瓦類である。その他に、銭・煙管などの金属製品や、椀・箸などの木製品、加工円盤、人形・ミニチュア類など、多種多様である。詳しくは後述することにするが、その出土状況を見てみると、遺構より出土しているものもあるが、3分の1近くが整地層と思われる土層中より出土している。従って、これらの大量の遺物は、おそらく整地という大規模な土木事業の時期を示していると思われる。大まかにいえば、整地以前の下面では18世紀末までの遺構・遺物が確認され、整地後の上面では19世紀代の遺構・遺物が検出されている。このことから、19世紀初頭に、この大規模で人為的な造成が行われていたことが窺えるのである。

また、近世陶磁器類以外にも、中世（鎌倉時代中葉）の山茶碗類や古代（奈良時代末～平安時代）の須恵器・灰釉陶器などが少量ながら出土している。山茶碗類については、整地層や遺構の埋土に見られることもままあるが、極僅かながら遺構の時期を決定する資料としての出土も見られる。この時期に、この地に人々が生活していたことが想定される。須恵器や灰釉陶器については、整地層や遺構の埋土からしか出土しておらず、この時期の遺構を確認することはできなかった。特に古代の遺物が、近世の遺構である91B区のS D 025の埋土の中から集中して出土していることは特筆される。

第2節 古代の遺物

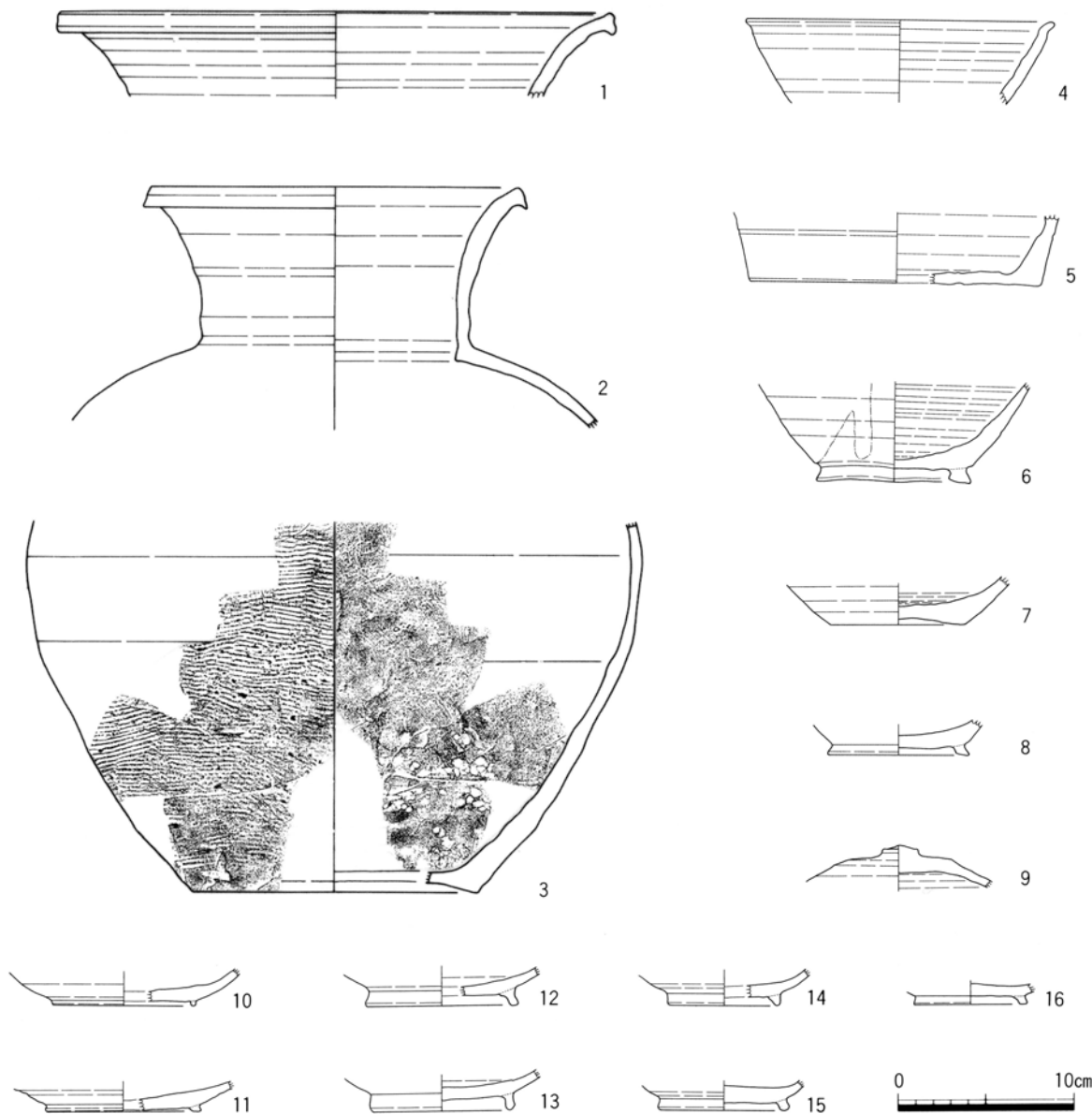
出土状況は第1節の通りであり、古代の遺構については確認できなかったが、遺物は破片点数にして272点出土している。その47.4%に当たる129点が、91B区で検出されたS D 025の埋土の中から出土している。S D 025は19世紀代の用水で、この時期まで遡ることは決してないことから、幕末の頃にこの遺構を埋めた土の中に含まれていたものと思われる。なお、このような理由により、細かな分類や口縁部計測法による遺物の集計については、今回は実施していない。

古代遺物の内訳は、須恵器が252点（92.6%）、灰釉陶器が20点（7.4%）である。遺物全体に占める割合は極めて低いが、見過ごすわけにはいかない数量である。須恵器の破片数252点の内、66.3%（167点）を占めているのが8世紀を中心とした甕であり、17.9%（45点）8世紀代の杯、8世紀後半を中心とした杯蓋や長胴壺、長頸瓶などのその他のものが15.9%（40点）となっている。そのほとんどが、猿投で生産された製品と思われる。また、灰釉陶器の破片数20点の内、椀が70.0%（14点）、皿が30.0%（6点）となっている。時期は、K-14～H-72（9世紀後葉～11世紀前葉）頃を中心としており、猿投や美濃で生産されたものである。

これらの遺物から、遅くとも8世紀後葉には、この地の周辺に人々が生活をしていた集落が存在していたことが想定できる。

<参考文献>

『愛知県古窯跡群分布調査報告（Ⅲ） 尾北地区・三河地区』 愛知県教育委員会 1983



遺物 番号	調査地点 調査区	器 種	器 形	法 量	(c m)			釉 薬 ・ 調 整 等		産地	時 期	備 考	登 録 番 号
				器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面				
1	91B	SD 025	須恵器	甕	—	31.1	—	—	ナデ	ナデ	猿投	7世紀末?	E-001
2	〃	〃	〃	〃	—	20.7	—	—	〃	タタキ	〃	8世紀末?	E-002
3	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	〃	〃	〃	8世紀末?	E-003
4	〃	〃	〃	有台碗	—	17.4	—	—	〃	ナデ	〃	8世紀後半	E-004
5	〃	〃	〃	長胴壺	—	—	—	16.5	〃	ケズリ	〃	7世紀後半	E-005
6	〃	〃	〃	長頸瓶	—	—	—	8.7	〃	〃	〃	8世紀後半	E-006
7	〃	〃	〃	壺か	—	—	—	7.6	—	—	猿投か	8世紀後半	E-007
8	〃	〃	〃	有台杯身	—	—	—	7.9	—	—	〃	8世紀後半	E-008
9	〃	〃	〃	杯蓋	—	—	—	—	—	—	〃	8世紀後半	E-009
10	〃	〃	灰釉陶器	碗	—	—	—	8.0	灰釉	ケズリ	猿投	9世紀中葉	E-010
11	〃	〃	〃	〃	—	—	—	8.7	〃	〃	猿投か	9世紀中葉	E-011
12	〃	〃	〃	〃	—	—	—	8.4	—	—	猿投	5世紀後半 ～10世紀前半	E-012
13	〃	〃	〃	〃	—	—	—	7.8	—	ケズリ	美濃	10世紀前半～後半	E-013
14	〃	〃	〃	〃	—	—	—	6.2	—	ケズリ・ナデ	〃	11世紀前半	E-014
15	〃	〃	〃	〃	—	—	—	7.1	灰釉	灰釉	猿投	11世紀前半	E-015
16	〃	〃	〃	皿	—	—	—	6.3	—	—	美濃か	11世紀前半	E-016

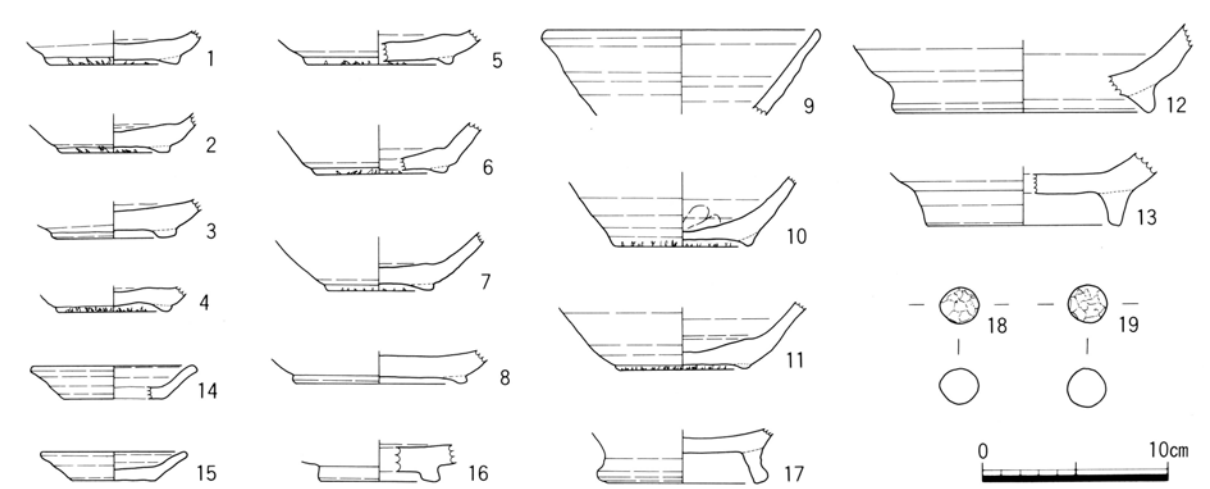
第26図 古代の遺物（1:4）

第3節 中世の遺物

遺構より出土した遺物は少なく、整地層や遺構の埋土から破片点数で 662点が出土している。その内訳は、山茶碗類が 660点（99.6％）と圧倒的な数を占めており、他に施釉陶器の壺（古瀬戸の四耳壺）と青磁の碗の破片が各 1 点ずつ（各 0.2％）出土しているのみである。山茶碗類については、碗が 435点（65.9％）と多く、次いで皿 208点（31.5％）、鉢が14点（ 2.1％）、陶丸などのその他のものが3点（ 0.5％）となっている。時期は、生産地の編年によると第7型式（13世紀中葉）のものが多く、13世紀代と思われる。また、生産地としては、猿投・瀬戸の他に常滑や渥美のものまでみることができ、当時の流通網の発達の様子を窺うことができる。なお、古代の遺物と同様に、分類・口縁部計測法による集計は実施していない。

<参考文献>

藤沢良祐 「瀬戸地区の北部系山茶碗」 『尾呂 本文編』 瀬戸市教育委員会 1990



遺物 番号	調査地点		器 種		法 量 (cm)				釉薬・調整等		産地	時 期	備 考	登 録 番 号
	調査区	遺構	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面				
1	91B	SD 025	山茶碗類	碗	—	—	—	6.7	自然釉	—	常滑	13世紀中葉	底部回転糸切痕	E-017
2	〃	〃	〃	〃	—	—	—	5.6	—	—	瀬戸	13世紀中葉	底部回転糸切痕	E-018
3	〃	〃	〃	〃	—	—	—	6.4	—	—	常滑	13世紀中葉	底部回転糸切痕	E-019
4	〃	〃	〃	〃	—	—	—	5.9	指ナデ	圧痕	瀬or猿	13世紀中葉	底部回転糸切痕	E-020
5	〃	〃	〃	〃	—	—	—	7.6	自然釉	自然釉	渥or常	13世紀代	底部回転糸切痕	E-021
6	〃	〃	〃	〃	—	—	—	6.8	〃	—	瀬or猿	13世紀中葉	—	E-022
7	〃	〃	〃	〃	—	—	—	5.6	〃	—	常滑	13世紀代	底部回転糸切痕	E-023
8	91D2	SK 228	〃	〃	—	—	—	8.8	〃	ナデ	猿or常	13世紀代	—	E-024
9	〃	SD 202	〃	〃	—	14.4	—	—	ナデ	〃	瀬戸	13世紀中葉	—	E-025
10	91D	南トレンチ	〃	〃	—	—	—	7.2	指ナデ	指ナデ	〃	13世紀代	高台内外に稜痕	E-026
11	92B2	SK 219	〃	〃	—	—	—	6.5	〃	〃	常滑	13世紀初	底部回転糸切痕, 高台に稜痕・砂痕	E-027
12	91B	南トレンチ	〃	鉢	—	—	—	13.6	ナデ	ナデ	瀬戸	13世紀中葉	—	E-028
13	〃	SD 025	〃	〃	—	—	—	10.1	—	自然釉	常滑	12世紀か?	内面摩滅	E-029
14	92B1	SK 099	〃	皿	1.8	8.4	—	5.3	指ナデ	指ナデ	〃	13世紀初	底部回転糸切痕	E-030
15	〃	SD 016	〃	〃	1.5	7.4	—	4.4	ナデ	ナデ	瀬戸	13世紀中葉	底部回転糸切痕	E-031
16	91D1	SD 002	青磁	碗	—	—	—	6.1	—	—	中国	13世紀中葉	龍泉窯	E-032
17	91B1	SD 025	施釉陶器	四耳壺	—	—	—	8.2	—	灰釉	瀬戸	13世紀代	—	E-033
18	91D	南トレンチ	山茶碗類	陶丸	—	—	—	—	—	—	〃	—	長径2.2cm, 短径1.9cm	E-034
19	92B	南 壁	〃	〃	—	—	—	—	—	—	〃	—	長径2.1cm, 短径2.0cm	E-035

第27図 中世の遺物（1：4）

第4節 近世の遺物

1. 概要

本遺跡より出土した近世の遺物は、多種多様な陶磁器類がその大半を占めており、その他にも瓦類・石製品・金属製品・木製品などがある。本節では、陶磁器類を中心に記述し、本センターの他の近世遺跡との比較・検討ができるように配慮して、用途による分類と口縁部計測法による器種組成を明らかにすることを第一義とする。そこから、各遺構の性格を明確にしていくことを目指したが、遺構出土の遺物量が少なかったため、残念ながら明確にできた遺構は少なかった。まず、はじめに分類と統計方法について述べてから、遺構別に遺物分析を行いたい。

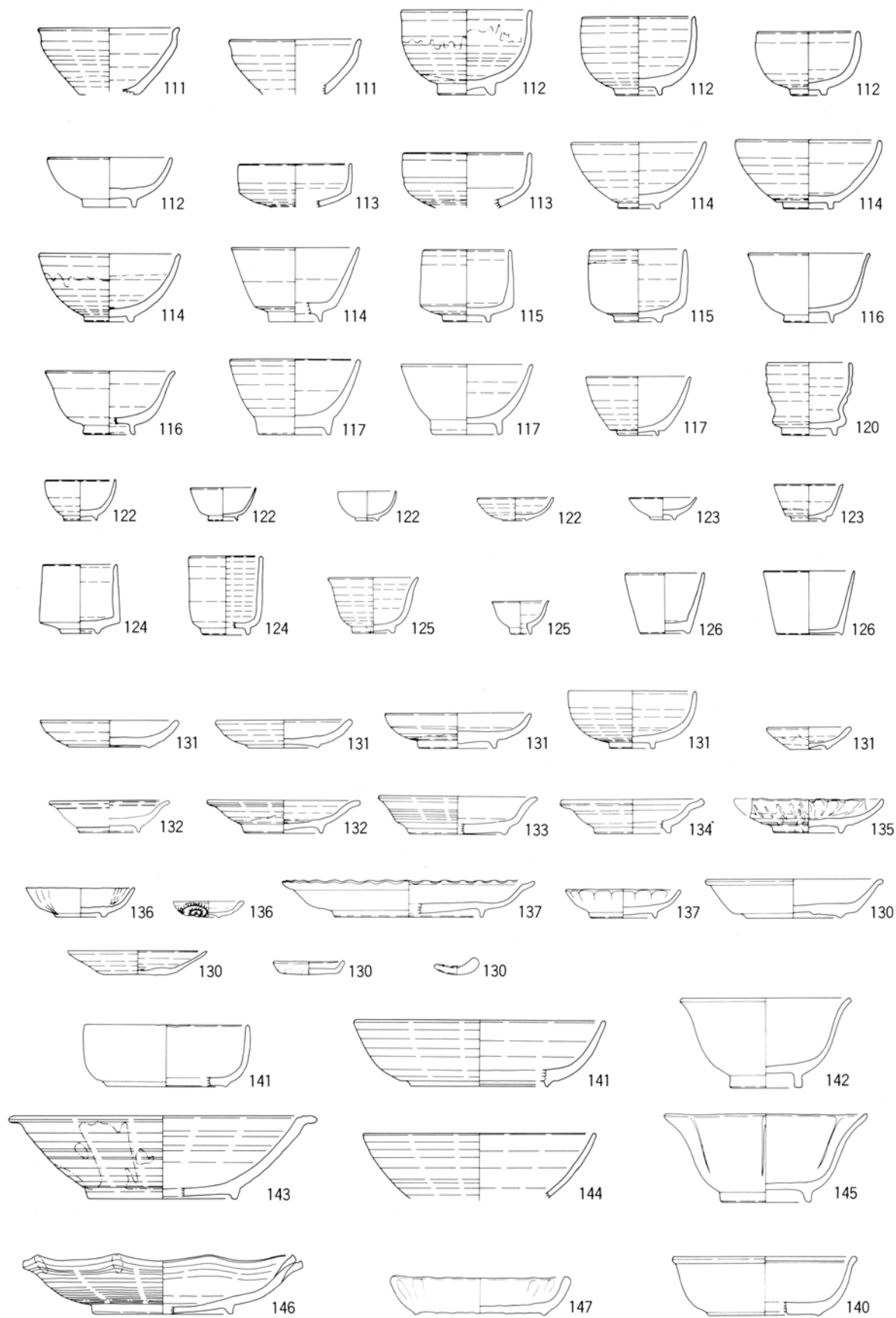
2. 分類

『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）』（1993）の分類と同様に、用途による分類を行った。用途については、1－供膳具、2－調理具、3－貯蔵具、4－灯火具、5－火具、6－化粧具、7－神仏具、8－喫煙具、9－調度具、0－その他に分類し、さらにそれぞれに器種・器形を組み合わせることで細分化した。一部は遺物の形態にこだわらず、使用痕の有無を重視し、例えば、皿でも口縁に油煙が付着していれば灯明皿に、火鉢でも口縁部に敲打痕があれば喫煙具に含めるといった方法で、統計処理を行っている。このため、一般に行われている形態による分類と誤差がでてくることを予め断わっておく。

それぞれの用途に基づく分類については、以下の第5表～第7表に示した分類表と第28図～第30図の分類図の通りである。

用 途		器 種		器 形		備 考
1	供膳具	1	椀	1	天目椀	口径8.5cm以上
				2	丸椀	天目茶椀、段付天目
				3	腰折椀	尾呂茶椀、御室茶椀
				4	平椀	柳茶椀
				5	筒椀	
				6	端反椀	
				7	広東椀	広東椀、小杉椀
				8	腰鍔椀	
				0	その他	
		2	小椀			口径8.5cm未満
			小坏	1	天目椀	
			猪口	2	丸椀	
				3	平椀	
				4	筒椀	
				5	端反椀	
				6	そば猪口	
				0	その他	
		3	皿			
				1	丸皿	
				2	端反皿	
				3	稜皿	
				4	折縁皿	
				5	菊皿	
				6	型打皿	
				7	ひだ、稜花皿	
				0	その他	土師質の皿（ロクロ・手捏ね）、玉縁皿など
		4	鉢			口径15cm以上
				1	丸鉢	
				2	端反鉢	大平鉢、黄瀬戸鉢
				3	折縁鉢	笠原鉢
				4	平鉢	
				5	型打鉢	
				6	稜花鉢	
				7	織部	向付
				0	その他	玉縁鉢など
		0	その他			

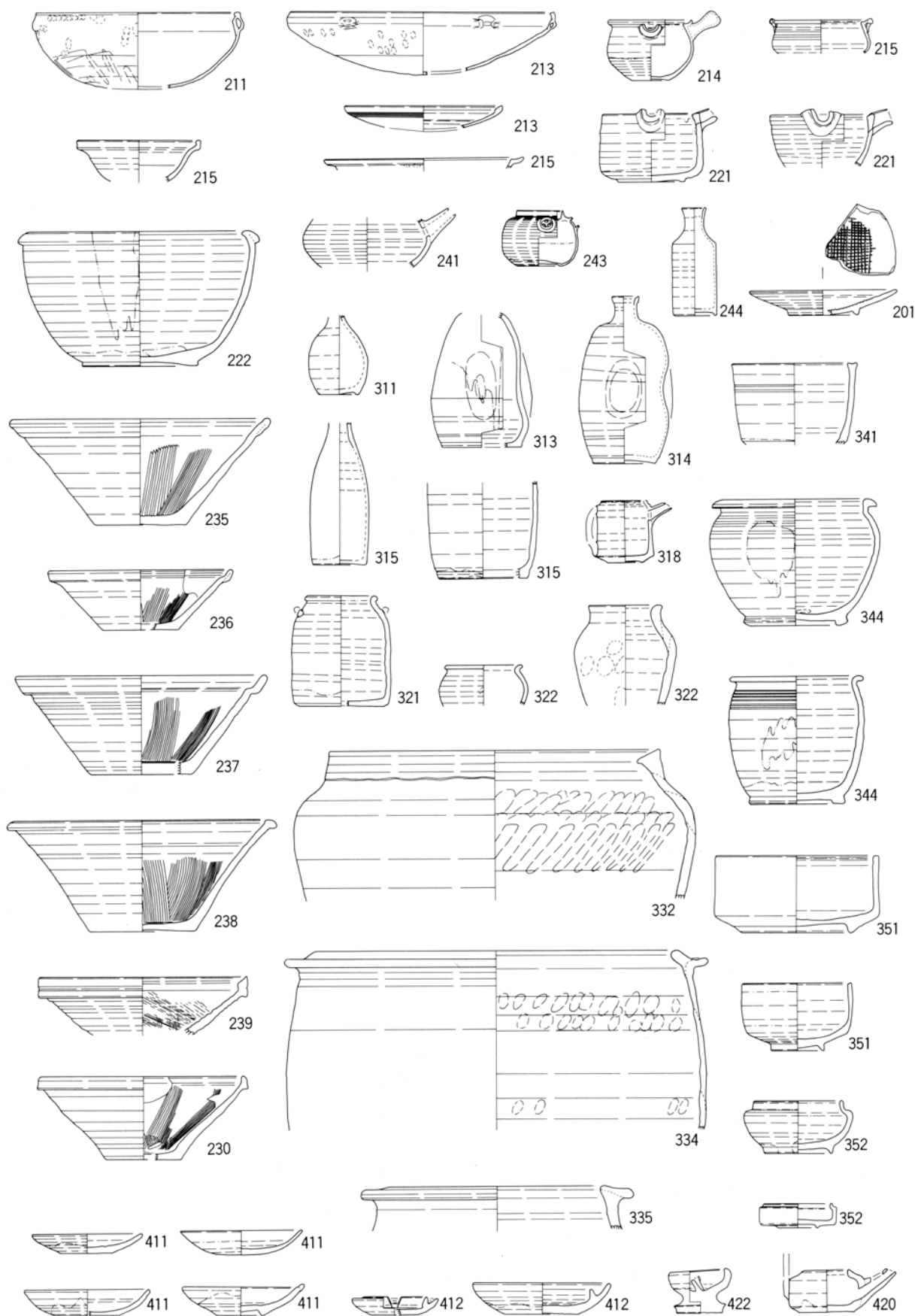
第5表 近世陶磁器類分類表（1）



第28図 近世陶磁器類分類図（1）

用 途	器 種	器 形	備 考
2 調理具	1 鍋, 釜	1 内耳鍋	
		2 羽釜	
		3 焙烙	
		4 行平	
		5 鍋	土鍋
		0 その他	
	2 鉢	1 片口鉢	
		2 捏ね鉢	
		0 その他	
	3 播鉢	1 I 類	1 6 C
		2 II 類	1 6 C
		3 III 類	1 7 C
		4 IV 類	1 7 C 後葉
		5 V 類	1 8 C 前半
		6 VI 類	1 8 C 後半
		7 VII 類	1 8 C 後葉
		8 VIII 類	1 9 C
		9 IX 類	備前播鉢, 堺播鉢
		0 その他	
	4 瓶	1 土瓶	
		2 銚子	
		3 急須	
		4 燗德利 A	
		5 燗德利 B	ちろり
		0 その他	
	0 その他	1 卸皿	
		0 その他	
3 貯蔵具	1 瓶	1 德利 A	高台あり
		2 德利 B	平底
		3 德利 C	断面が三角形のもの
		4 德利 D	断面が四角形のもの
		5 德利 E	高田德利など
		6 油德利	
		7 汁次 A	丸型
		8 汁次 B	筒型
		9 汁次 C	その他
		0 その他	しびんなど
	2 壺	1 蓋付壺	
		2 無蓋壺	
		3 茶壺	
		4 茶入	
		5 土師壺	
		0 その他	
	3 甕 A		常滑産
		1 I 類	N 字口縁
		2 II 類	Y 字口縁
		3 III 類	Y 字口縁
		4 IV 類	T 字口縁
		5 V 類	┐ 字口縁
		6 VI 類	その他
		0 その他	
	4 甕 B	1 半胴 A	
		2 半胴 B	口縁外反
		3 銭甕	
		4 甕	胴丸形
		0 その他	
	5 鉢	1 蓋物 A	蓋受け無
		2 蓋物 B	蓋受け有
		0 その他	
	0 その他		
4 灯火具	1 皿	1 灯明皿	口縁部に油煙の付着した皿すべて
		2 灯蓋	受皿
		3 行灯皿	盤形の皿
		0 その他	
	2 秉燭	1 I 類	受皿と灯芯たてが接合したもの
		2 II 類	脚付きのもの
		3 III 類	タンコロ
		4 IV 類	窓あきの蓋のつくもの
		5 V 類	軟質陶器系のもの
		0 その他	
	3 瓦燈	1 瓦燈	
		0 その他	
	4 燭台		蠟燭を乗せる台
		0 その他	

第6表 近世陶磁器類分類表(2)



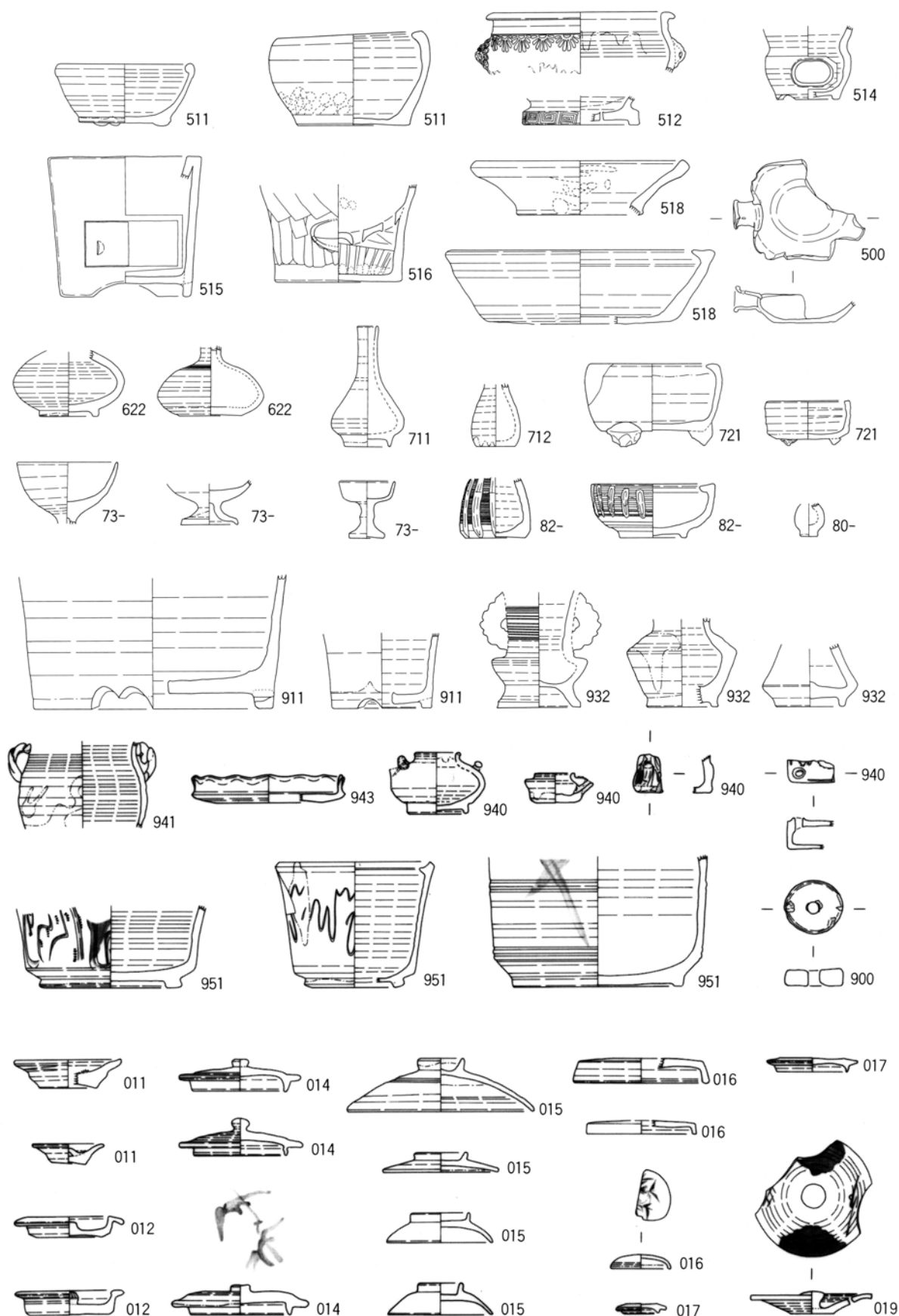
第29図 近世陶磁器類分類図(2)

用 途	器 種	器 形	備 考
5 火具	1 鉢	1 火鉢	
		2 瓶掛	
		3 風炉	
		4 こん炉 A	内部構造が一重のもの
		5 こん炉 B	内部構造が二重のもの
		6 蚊いぶし	
		7 火容	窓付きのもの
		8 火桶	
		0 その他	
	2 壺	1 火消し壺	蓋付きの火鉢
		0 その他	
	3 くど	1 くど A	口唇部が円筒状のもの
		2 くど B	口唇部がし字に外部へ屈曲するもの
	0 その他	1 五徳	三脚の環状台
		0 その他	さな・七厘五徳・十能等
6 化粧具	1 紅皿		
	2 壺	1 お歯黒壺	口縁部の一箇所が鳶口状を呈するもの
		2 髪油壺	
		3	転用品
		0 その他	
	3 びんだらい		
	0 その他		
7 神仏具	1 瓶	1 神酒徳利 A	鶴首
		2 神酒徳利 B	口唇部外反または玉縁状を呈するもの
		0 その他	
	2 香炉	1 筒型	
		2 袴腰型	
		0 その他	
	3 仏飯器		
	4 香合		蓋物 B の小型製品
	5 線香筒		
	0 その他		
8 喫煙具	1 火容		口縁部に敲打痕のあるものすべて
		1 筒型	小型の火鉢状を呈するもの
		2 香炉型	
		0 その他	
	2 灰落し		
	0 その他		鼻煙壺など
9 調度具	1 植木鉢	1 植木鉢	
		2 半胴	半胴甕の転用品
		3 転用	他器種の転用品
		4 蘭鉢	
		0 その他	
	2 餌鉢	1 餌鉢	環状の摘みのある半筒形の小椀
		2 餌搦鉢	搦鉢の小型製品
		0 その他	
	3 花生	1 筒型	体部から口縁にかけて直線的なもの
		2 壺型	口縁が外反するもの
		0 その他	
	4 水指	1 水指	壺型で有蓋
		2 建水	壺型で無蓋
		3 水盤	浅鉢状で口縁を折り返しているもの
		0 その他	水注、水滴など
	5 水甕	1 水甕	
		2 手洗鉢	口縁が外反するもの
		0 その他	
	6 壺	1 唾壺	
		0 その他	
	0 その他	1 柄杓	
		2 筒型	
		3 手桶	
		4 土管	
		0 その他	戸車など
0 その他	1 蓋	1 蓋 A	落し蓋で折り返しのないもの
		2 蓋 B	落し蓋で折り返しのあるもの
		3 蓋 C	偏平蓋でかえりのないもの
		4 蓋 D	偏平蓋でかえりのあるもの
		5 蓋 E	環状の摘みが付きかえしのないもの
		6 蓋 F	摘みがなくかえしのないもの
		7 蓋 G	摘みがなくかえしのあるもの
		8 蓋 H	湾曲した傘状を呈するもの
		9 蓋 I	有孔のものすべて
		0 その他	

第7表 近世陶磁器類分類表（3）

<分類表・分類図の見方>

分類は前述の通り、用途・器種・器形を3桁の数字で表しており、例えば、天目茶碗は供膳具（1）・碗（1）・天目碗（1）で111となる。



第30図 近世陶磁器類分類図（3）

3. 統計方法

陶磁器類の統計方法には、口縁部計測法を用いた。用途・器種・器形別に口縁部の残存率を計測し、個体数を算出する方法をとった。計測は、残存する口縁を接合した後、12分の1単位で行い、12分の1未満は0、12分の1以上で12分の2未満は1とし、以下順次2、3、……、11、12とカウントした。この集計が、接合後口縁残存率である。個体数は、これを12で割って小数点以下第2位まで求めたもの（小数点第3位を四捨五入）である。ここで注意しなくてはならないのは、個体数が組成分析を目的とした統計上の数値であって、個体識別に基づく数値とは異なっており、実体の個体数ではないということである。この数値を取り扱う際には、この点に留意して用いる必要があろう。なお、比較検討のため、接合前の破片点数と総破片数もあわせて集計した。

また、陶磁器類以外の遺物、例えば、瓦類、人形・ミニチュア類、木製品、金属製品、石製品については、計測の方法や遺存状況などに問題があるため、今回は取り上げなかった。

ただし、器種としての蓋については、身となる器種と一体のものであり、組成の統計処理上ダブルカウントとなるため、独立の用途0として1項をたてて集計し、用途組成図および本文中比率は、総出土遺物から蓋を除外した数値を表している。

ここで提示した数値は、あくまでも今回の発掘調査で出土した本遺跡出土の全遺物の比率・割合であって、必ずしも一般的な近世の遺物組成を示しているわけではない。しかし以下の個別遺構の記述に際しては、全体の概要で示した比率・割合（第31図・第8表）を近世遺物群のあり方の平均値と考え、これに対してどのように変化しているかを中心に見ていくことにする。

なお、本節では遺物についての記述を極力おさえ、遺構出土の遺物の組成の検討を中心に記述を行った。このため、個々の遺物についての記述は、各実測図の下に観察表のみに限った。また、各遺物の材質については、各実測図の通番の右側に、D：土器、T：陶器、J：磁器、N：軟質陶器、G：瓦質というアルファベットで表記してある。また、産地では、瀬戸・美濃の製品を瀬・美と略してある。各遺構・遺物の時期決定にあたっては、研究の進んでいる瀬戸・美濃産の陶磁器類や肥前産の陶磁器類などを手掛りとし、それぞれの年代観については各生産地で明らかになっているものによった。

<参考文献>

- 金子健一編 『名古屋城三の丸遺跡（Ⅲ）』 財愛知県埋蔵文化財センター 1992
遠藤才文編 『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）』 財愛知県埋蔵文化財センター 1993
『研究紀要V～Ⅷ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1986～1989
『有田町史 古窯編』 有田町史編纂委員会 1988
大橋康二 『考古学ライブラリー 55 肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社 1989
大橋康二 『別冊太陽 63 古伊万里』 平凡社 1988
井上喜久男 『尾張陶磁』 ニュー・サイエンス社 1992

以上の文献を参考にさせていただいたほか、大橋康二・遠藤才文の両氏には実地に御指導・御助言をいただいた。記して、謝意を表す次第である。

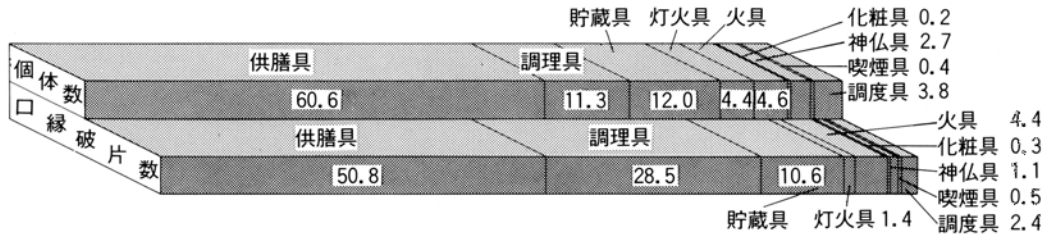
4. 陶磁器類

全体の概要

今回の発掘調査で出土した全近世陶磁器類は、総破片数で34,663点にのぼる。接合前口縁破片数は9,488点であり、総個体数は688.75個体である。数量的には少ないが、名古屋城三の丸遺跡と比較してみると、その概要を次のようにまとめることができる。

近世の土器・陶磁器類における組成の最大の特徴は、名古屋城三の丸遺跡でも指摘されているように、その用途・器種の多さと、土師質製品に比べて陶磁器類の比率が増大することにある。用途については、便宜的に10に分類したが、極少量のものも含め全ての用途において遺物が出土している。また、同一用途内における器種の多様化も見ることができる。比率としては、供膳具が60.6%と圧倒的に多く、次いで貯蔵具、調理具と続き、やはり日常的な生活に関わる遺物群が全体の83.9%を占めており、名古屋城三の丸遺跡（63.3%）よりも高い比率を示している。さらに、副次的な生活を示す遺物群としては、化粧具・神仏具・喫煙具・調度具などがあり、全体の16.1%を占めている。各種の遺物と対応する蓋は、接合前口縁破片数で 296点、個体数では 65.17個体となっている。

また、土師質製品と陶磁器類の比率を見てみると、土師質製品は 9.6%と低く、陶磁器類が陶器製品59.6%・磁器製品30.4%となり、その他の材質とした軟質陶器や瓦質の製品が 0.4%となっている。名古屋城三の丸遺跡に比べ、磁器製品の占める割合が高くなっているが、これは瀬戸での磁器生産の影響と見られ、外町遺跡の方により多くの磁器製品が流入していることが確認された。



第31図 近世出土陶磁器類の用途組成

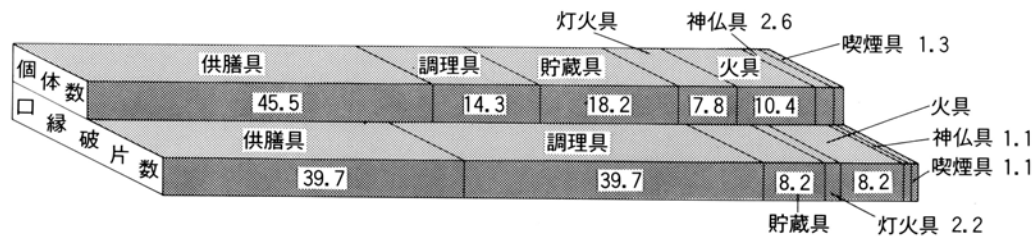
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗	0	934	1013	0	1947	0	1508	967	1	2476	0	4769	1894	5	6668
	小碗	0	187	469	0	656	0	170	263	1	434	0	341	783	1	1125
	皿	358	705	474	0	1537	188	892	318	4	1402	674	1904	525	5	3108
	鉢	0	233	154	7	394	0	238	108	6	352	0	867	212	17	1096
	その他	0	3	0	0	3	0	1	0	0	1	0	14	11	3	28
小計		358	2062	2110	7	4537	188	2809	1656	12	4665	674	7895	3425	31	12025
調理具	鍋釜	215	93	0	4	312	1378	99	0	26	1503	4180	561	0	66	4807
	鉢	0	203	0	0	203	0	315	0	0	315	0	860	0	0	860
	播鉢	0	197	0	0	197	0	712	0	0	712	0	2121	0	0	2121
	瓶	0	107	21	0	128	0	74	5	0	79	0	378	37	0	415
	その他	0	8	0	0	8	0	11	0	0	11	0	34	1	0	35
小計		215	608	21	4	848	1378	1211	5	26	2620	4180	3954	38	66	8238
貯蔵具	瓶	0	385	0	0	385	0	61	0	0	61	0	1438	9	1	1448
	壺	1	77	0	0	78	4	65	2	0	71	6	382	12	0	400
	甕A	0	207	0	0	207	0	541	0	0	541	0	8021	0	0	8021
	甕B	1	127	0	0	128	1	219	0	0	220	7	1263	1	0	1271
	鉢	0	64	28	0	92	0	56	12	0	68	0	116	20	0	136
その他		0	5	0	0	5	0	14	1	0	15	5	24	1	0	30
小計		2	865	28	0	895	5	956	15	0	976	18	11244	43	1	11306
灯火具		27	281	19	7	327	19	101	5	0	125	39	168	8	0	215
火具		121	214	0	0	342	138	261	1	7	407	342	974	4	12	1332
化粧具		0	3	12	0	15	0	19	9	0	28	0	46	20	0	66
神仏具		0	106	97	0	203	4	62	37	0	103	7	141	113	0	261
喫煙具		3	28	0	0	31	3	44	3	0	50	3	75	6	0	84
調度具		38	223	24	0	285	21	184	12	1	218	60	594	41	3	698
蓋		31	536	201	14	782	27	194	72	3	296	37	300	97	4	438
合計		795	4926	2512	32	8265	1783	5841	1815	49	9488	5360	25391	3795	117	34663

第8表 近世出土陶磁器類集計表

井戸出土遺物合計

本遺跡で検出された井戸から出土した遺物の合計は、総破片数で 594点、接合前口縁破片数が 188 点で、総個体数は6.92個体であり、出土量は極めて少ない。この内、供膳具が 2.92個体・45.5%と比率が比較的低く、調理具・貯蔵具はそれぞれ0.92個体・14.3%、1.17個体・18.2%と比率が高い。他に、灯火具と火具・神仏具・喫煙具の比率も高く、それぞれ0.50個体・7.8%、0.67個体・10.4%、0.17個体・2.6%、0.08個体・1.3%を占めている。

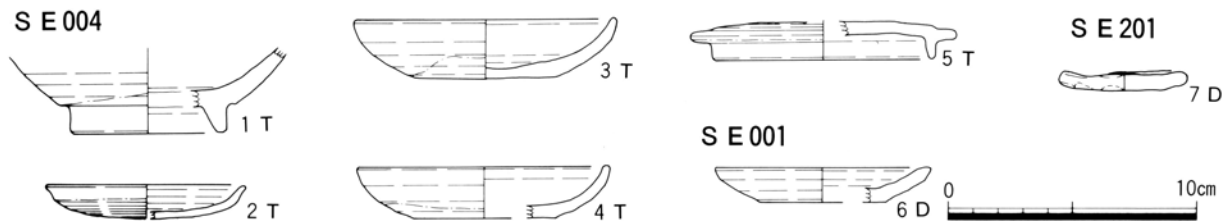
また、土師質製品の占める割合が22.9%と高く、特に土師質の皿が63.2%を占めている点は特筆すべきで、これに対して、陶磁器類の占める割合はそれぞれ65.1%・12.0%と低くなっている。



第32図 井戸合計陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		9	2		11		33	6		39		122	17		139
	小椀		1	5		6		1	3		4		3	4		7
	皿	12	4	2		18	4	19	3		26	10	28	6		44
	鉢					0		4			4		17			17
	その他					0					0				3	3
小計		12	14	9	0	35	4	57	12	0	73	10	170	27	3	210
調理具	鍋・釜	6				6	57				57	100	2		1	103
	鉢		4			4		6			6		8			8
	擂鉢		1			1		10			10		45			45
	瓶					0					0		5			5
	その他					0					0					0
小計		6	5	0	0	11	57	16	0	0	73	100	60	0	1	161
貯蔵具	瓶		3			3		3			3		18			18
	壺		5			5		4			4		9			9
	甕A		1			1		3			3		109			109
	甕B		1			1		2			2		19			19
	鉢		4			4		3			3		11			11
小計		0	14	0	0	14	0	15	0	0	15	0	166	0	0	166
灯火具			6			6	1	3			4		6			6
火具			0	8		8	1	14			15	4	23			27
化粧具						0					0		1	1		2
神仏具			1	1		2		1	1		2		1	3		4
喫煙具			1			1		2			2		2			2
調度具						0					0	2	6	1		9
蓋			1	5		6	1	3			4		7			7
合計			19	54	10	83	64	111	13	0	188	116	442	32	4	594

第9表 井戸合計陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	器種	用途	器種	器形	法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録番号
						器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
1	92B1	SE 004	供膳具	椀	丸椀	—	—	—	6.0	灰釉	灰釉	瀬・美		E-036
2	〃	〃	灯火具	皿	灯明皿	1.5	7.8	—	3.6	鉄釉	鉄釉	〃	見込みに重ね焼きの剥離痕 (径4.2cm)	E-037
3	〃	〃	〃	〃	〃	2.4	10.3	—	5.6	〃	〃	〃	胎部から底部にかけて焼けた痕	E-038
4	〃	〃	〃	〃	〃	2.1	10.0	—	5.7	灰釉	灰釉	〃	胎部から底部にかけて焼けた痕	E-039
5	〃	〃	その他	蓋	その他	—	8.8	10.6	—	—	〃	京焼系?		E-040
6	91D1	SE 001	供膳具	皿	その他	1.4	8.6	—	5.1	ナデ	ナデ	不明	ロクロ成形	E-041
7	92B1	SE 201	〃	〃	〃	0.8	4.5	—	—	—	指押え	〃	非ロクロ成形	E-042

第33図 近世の遺物 (1) 井戸合計 (1:3)

溝

S D 035 本遺構の時期は、17世紀初頭に比定される。

91A区で検出された溝であるが、出土した遺物は総破片数で41点、口縁部破片数で28点、個体数は2.83個体と少量で統計上の処理には不向きであるが、数少ない清須城の城下町期の遺構として注目される。供膳具が2.67個体・94.1%、調理具と喫煙具がそれぞれ0.08個体・2.9%である。供膳具は、手捏ねの小型の土師質の皿のみで、調理具では、備前の播鉢が出土しており年代決定の指標となった。

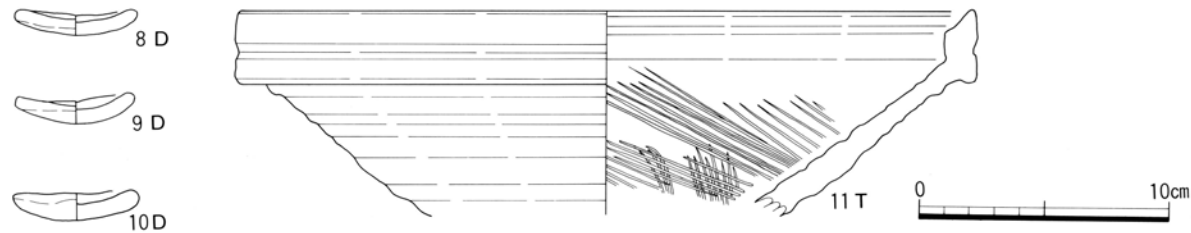
また、土師質製品と陶磁器類の割合は、土師質製品が94.1%と圧倒的に多く、磁器製品は1点も出土していない。この点が、この遺構を他の近世の遺構と性格を異にしているところである。



第34図 S D 035出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗					0					0		1			1
	小碗					0					0					0
	皿	32	0			32	23	1			24	25	2			27
	鉢		0			0		1			1		1			1
	その他					0					0					0
調理具	小計	32	0	0	0	32	23	2	0	0	25	25	4	0	0	29
	鍋・釜	0				0	1				1	5				5
	鉢					0					0					0
	播鉢		1			1		1			1		2			2
	瓶					0					0					0
貯蔵具	その他					0					0					0
	小計	0	1	0	0	1	1	1	0	0	2	5	2	0	0	7
	瓶					0					0					0
	壺					0					0					0
	甕A					0					0		4			4
灯火具	甕B					0					0					0
	鉢					0					0					0
	その他					0					0					0
	小計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0	0	4
	灯火具					0					0					0
火具	火具					0					0					0
	化粧具					0					0					0
	神仏具					0					0					0
	喫煙具		1			1		1			1		1			1
	調度具					0					0					0
蓋	蓋					0					0					0
	合計	32	2	0	0	34	24	4	0	0	28	30	11	0	0	41

第10表 S D 035出土陶磁器類集計表



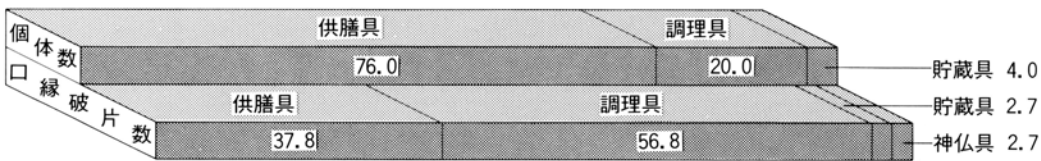
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 種			法 量 (cm)				釉 薬 ・ 調 整 等		産 地	備 考	登 録 番 号	
		用 途	器 種	器 形	器高	口 径	胴 径	底 径	内 面	外 面				
8	91A	SD 035	供膳具	皿	その他	1.1	4.5	—	—	—	板状圧痕	不明	非ロクロ成形	E-043
9	〃	〃	〃	〃	〃	1.3	4.4	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形, 外面に焼けた痕	E-044
10	〃	〃	〃	〃	〃	1.2	4.1	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-045
11	〃	〃	調理具	播鉢	Ⅸ類	—	29.0	—	—	—	—	備前	焼き締め	E-046

第35図 近世の遺物 (2) S D 035 (1:3)

S D 209 本遺構の時期は、17世紀中葉に比定される。

92B2 区で検出された溝であるが、出土した遺物は総破片数で 190点、接合前口縁破片数で38点、個体数は2.50個体と少量で統計上の処理には不向きであるが、江戸時代前期の遺構として注目される。供膳具・調理具・貯蔵具の3用途のみで、供膳具が1.58個体・76.0%、調理具が0.42個体・20.0%、貯蔵具が0.08個体・4.0%、他に蓋類が0.42個体となっている。供膳具として、土師質の皿では手捏ねで小型のものとロクロ成形のものが0.58個体、鉢では笠原鉢が0.42個体出土している。碗と皿の比率では、1：2.50と皿が大きく上回っている。

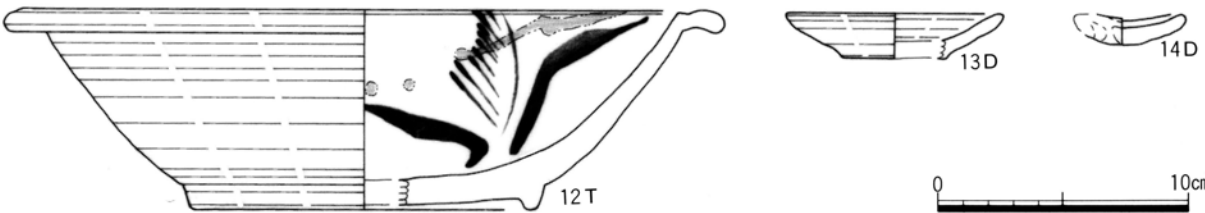
また、土師質製品と陶磁器類の割合は、土師質製品が36.7%と依然として多く、これに対して陶磁器類の占める割合はそれぞれ56.7%・6.7%となっている。



第36図 S D 209出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		3			3		6			6		26	2		28
	小碗		1			1		1			1		1			1
	皿	7	1	2		10	3	2	1		6	4	4	1		9
	鉢		5			5		1			1		3			3
	その他					0					0					0
	小計	7	10	2	0	19	3	10	1	0	14	4	34	3	0	41
調理具	鍋、釜	4				4	17				17	69				69
	鉢					0					0		1			1
	播鉢		1			1		4			4		13			13
	瓶					0					0		1			1
	その他					0					0					0
	小計	4	1	0	0	5	17	4	0	0	21	69	15	0	0	84
貯蔵具	瓶					0					0		1			1
	壺					0					0		1			1
	甕A					0					0		55			55
	甕B		1			1		1			1		5			5
	鉢					0					0					0
	その他					0					0					0
灯火具	小計	0	1	0	0	1	0	1	0	0	0	0	62	0	0	62
	灯火具					0					0					0
火具						0					0		1			1
化粧具						0					0					0
神仏具			0			0		1			1		1			1
喫煙具						0					0					0
調度具						0					0					0
蓋			5			5		1			1		1			1
合計		11	17	2	0	30	20	17	1	0	38	73	114	3	0	190

第11表 S D 209出土陶磁器類集計表



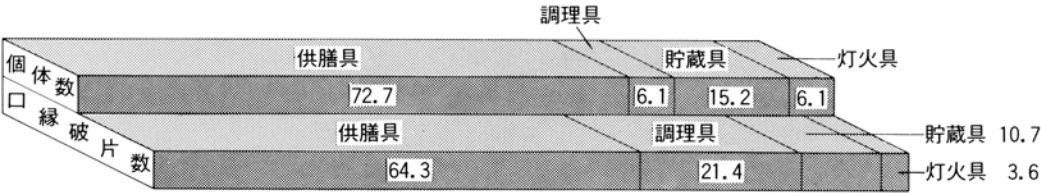
遺物番号	調査地点	器種	用途	器種	器形	法量 (cm)	釉薬・調整等	産地	備考	登録番号
12	92B2	SD 209	供膳具	鉢	折縁鉢	7.9 27.2 - 13.6	長石釉	瀬・美	鉄絵。赤文。緑釉筆散らし。見込みと高台内にトチン痕	E-047
13	〃	〃	〃	皿	その他	1.8 8.4 - 4.1	ナデ	不明	ロクロ成形、底部回転糸切痕か	E-048
14	〃	〃	〃	〃	〃	1.3 - - -	指押え	〃	非ロクロ成形	E-049

第37図 近世の遺物（3） S D 209（1：3）

S D 202 本遺構の時期は、18世紀後葉に比定される。

91D2 区で検出された溝であり、出土した遺物は総破片数で94点、接合前口縁破片数で29点、個体数は 2.75個体と少量であるが、江戸時代中期の遺構として注目される。供膳具が2.00個体・72.7%と多く、次いで貯蔵具が0.42個体・15.2%、調理具と灯火具がそれぞれ0.17個体・ 6.1%となっている。

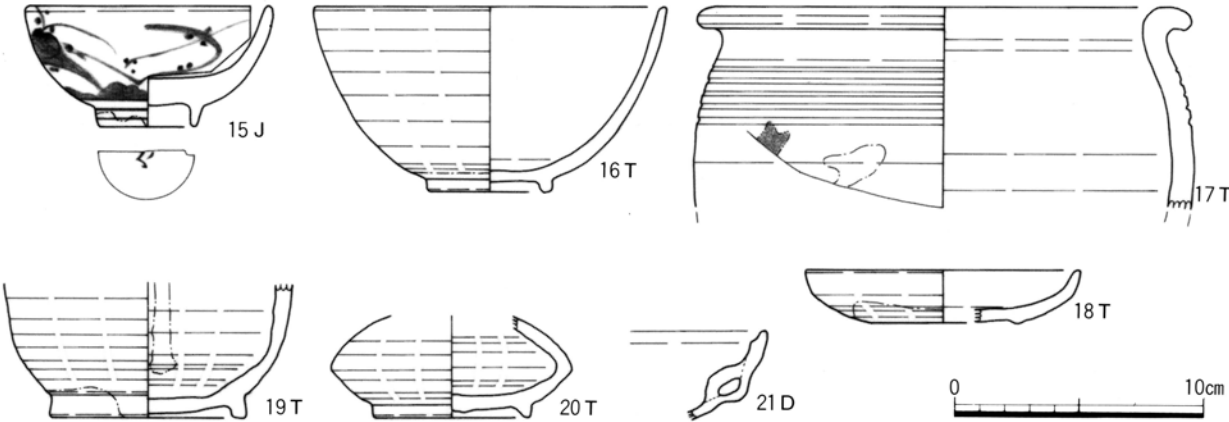
また、土師質製品と陶磁器類の割合についても、土師質製品が 3.0%と極少量となり、これに対し陶磁器類がそれぞれ78.8%・18.2%と増加していることが確認される。



第38図 S D 202出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		15	6		21		11	1		12		24	1		25
	小碗					0					0					0
	皿		3			3		5			5		9			9
	鉢		0			0		1			1		2			2
	その他					0					0					0
小計		0	18	6	0	24	0	17	1	0	18	0	35	1	0	36
調理具	鍋・釜	1				1	3				3	14				14
	鉢					0					0		1			1
	搗鉢		1			1		3			3		9			9
	瓶					0					0		1			1
	その他					0					0					0
小計		1	1	0	0	2	3	3	0	0	6	14	11	0	0	25
貯蔵具	瓶					0					0		2			2
	壺					0					0		1			1
	甕A		5			5		2			2		2			2
	甕B		0			0		1			1		20			20
	鉢					0					0					0
小計		0	5	0	0	5	0	3	0	0	3	0	26	0	0	26
灯火具			2			2		1			1		1			1
火具						0					0		2			2
化粧具						0					0		1			1
神仏具						0					0					0
喫煙具						0					0					0
調度具						0					0		2			2
蓋			0			0		1			1		1			1
合計		1	26	6	0	33	3	25	1	0	29	14	79	1	0	94

第12表 S D 202出土陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録番号
		用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
15	91D2	SD 202	供膳具	碗	丸碗	4.8	9.3	—	3.8	—	肥前	染付, 岩に梅樹文, 18世紀後半	E-050
16	〃	〃	〃	〃	〃	7.4	13.8	—	4.4	灰釉	瀬・美		E-051
17	〃	〃	貯蔵具	甕B	甕	—	18.0	—	〃	〃	〃	鉄絵	E-052
18	〃	〃	灯火具	皿	灯明皿	2.1	10.8	—	5.8	〃	〃	碁笥底, 胎部から底部に油煙付着	E-053
19	〃	〃	貯蔵具	壺	その他	—	—	—	7.6	ナデ	鉄釉	〃	E-054
20	〃	〃	化粧具	壺	髪油壺	—	—	9.5	6.0	〃	灰釉	〃	E-055
21	〃	〃	調理具	鍋・釜	焙烙	28.1	—	—	—	指押え	不明	外面に煤付着	E-056

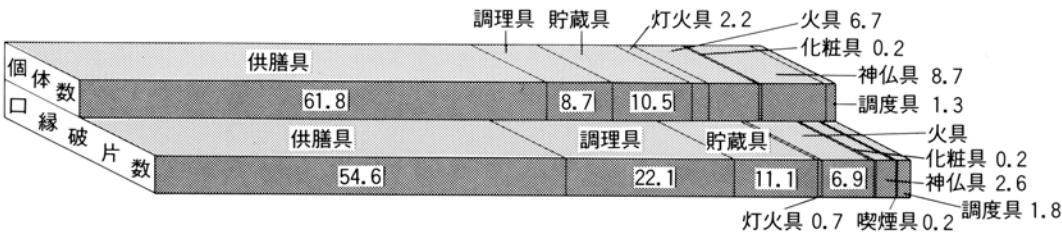
第39図 近世の遺物 (4) S D 202 (1:3)

S D 025 本遺構の時期は、19世紀中葉に比定される。

91B区と91C区で検出された溝であるが、出土した遺物は総破片数で2,564点、接合前口縁破片数では648点、個体数62.83個体である。供膳具が32.50個体・61.8%、調理具が4.58個体・8.7%、貯蔵具が5.50個体・10.5%、灯火具が1.17個体・2.2%、火具が3.50個体・6.7%、化粧具が0.08個体・0.2%、神仏具が4.58個体・8.7%、喫煙具は0.00個体、調度具が0.67個体・1.3%、蓋が10.25個体となっている。これを、近世の用途組成の平均値(P33)と比較してみると、供膳具・化粧具はよく似た数値をしているが、調理具・貯蔵具・灯火具などの日常生活用具は減少しており、副次的な生活用具である火具・神仏具がそれぞれ1.5倍・3.2倍に増加している。

器種別にみると、供膳具では椀対皿の比率が2.25：1と2倍程の比率差となっており、名古屋城三の丸遺跡の同時期の遺構ほどではないが、椀対皿の比率が逆転することが確認された。調理具では、鍋・釜類の占める割合が38.2%と増加しており、貯蔵具では、徳利などの瓶類が66.7%と高くなっていることがこの遺構の特徴といえる。

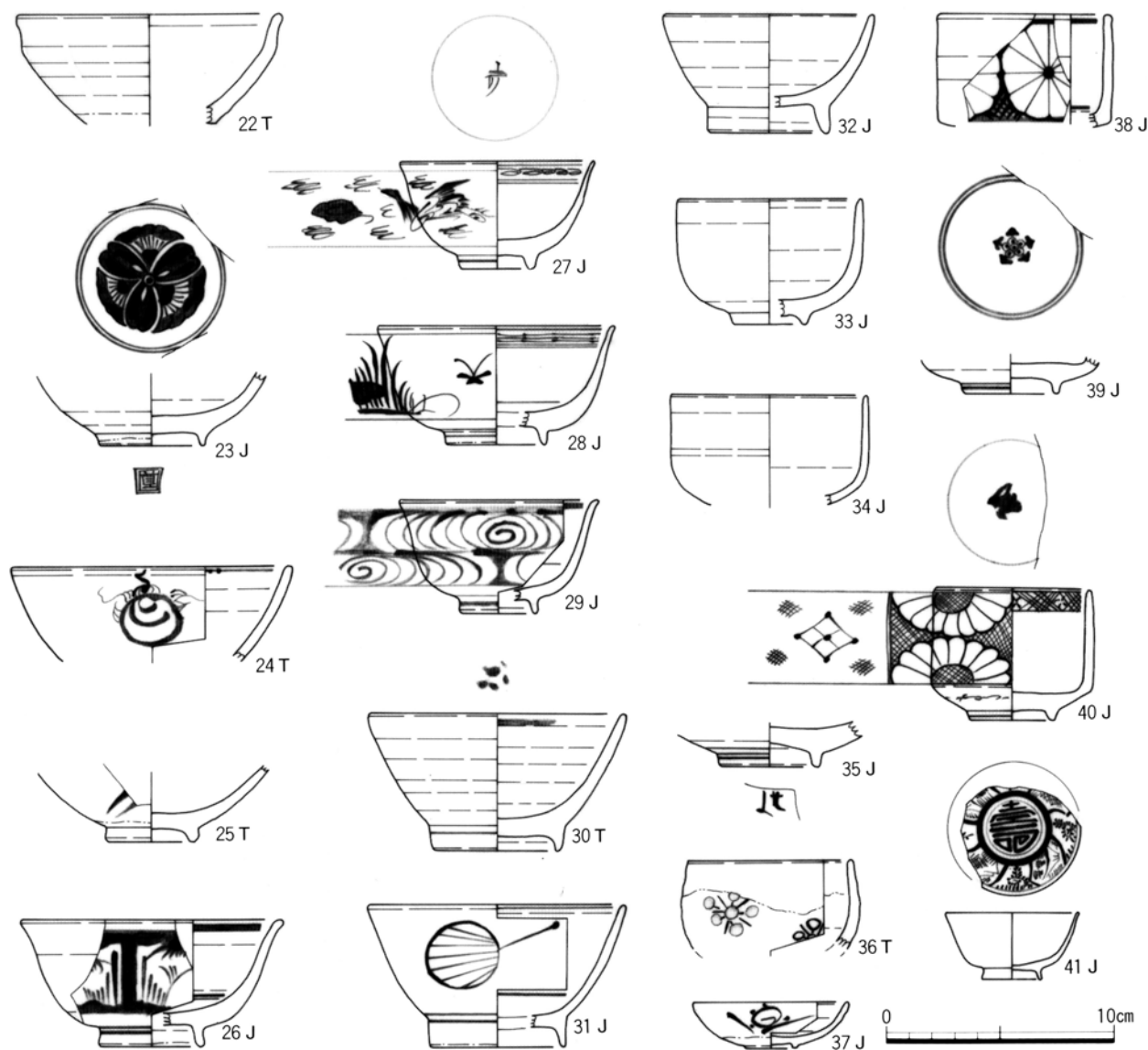
また、土師質製品と陶磁器類の割合は、土師質製品が2.8%と18世紀代に比べて少量となり、これに対して陶磁器類では、陶器製品が54.0%であるが、磁器製品が43.2%と平均値(30.4%)を越えて増加していることが確認される。これは、18世紀末頃から瀬戸・美濃地方の諸窯において磁器生産が開始されており、この影響が少なからずこの数値に反映しているであろうと考えられる。この数値を、名古屋城三の丸遺跡の同時期の遺構と比較してみると、磁器製品の占める割合が2倍程に増加していることがわかる。このため、瀬戸・美濃産の磁器製品は、武士階級よりも町人層に広く浸透していったのではないかと想定される。



第40図 S D 025出土陶磁器類の用途組成

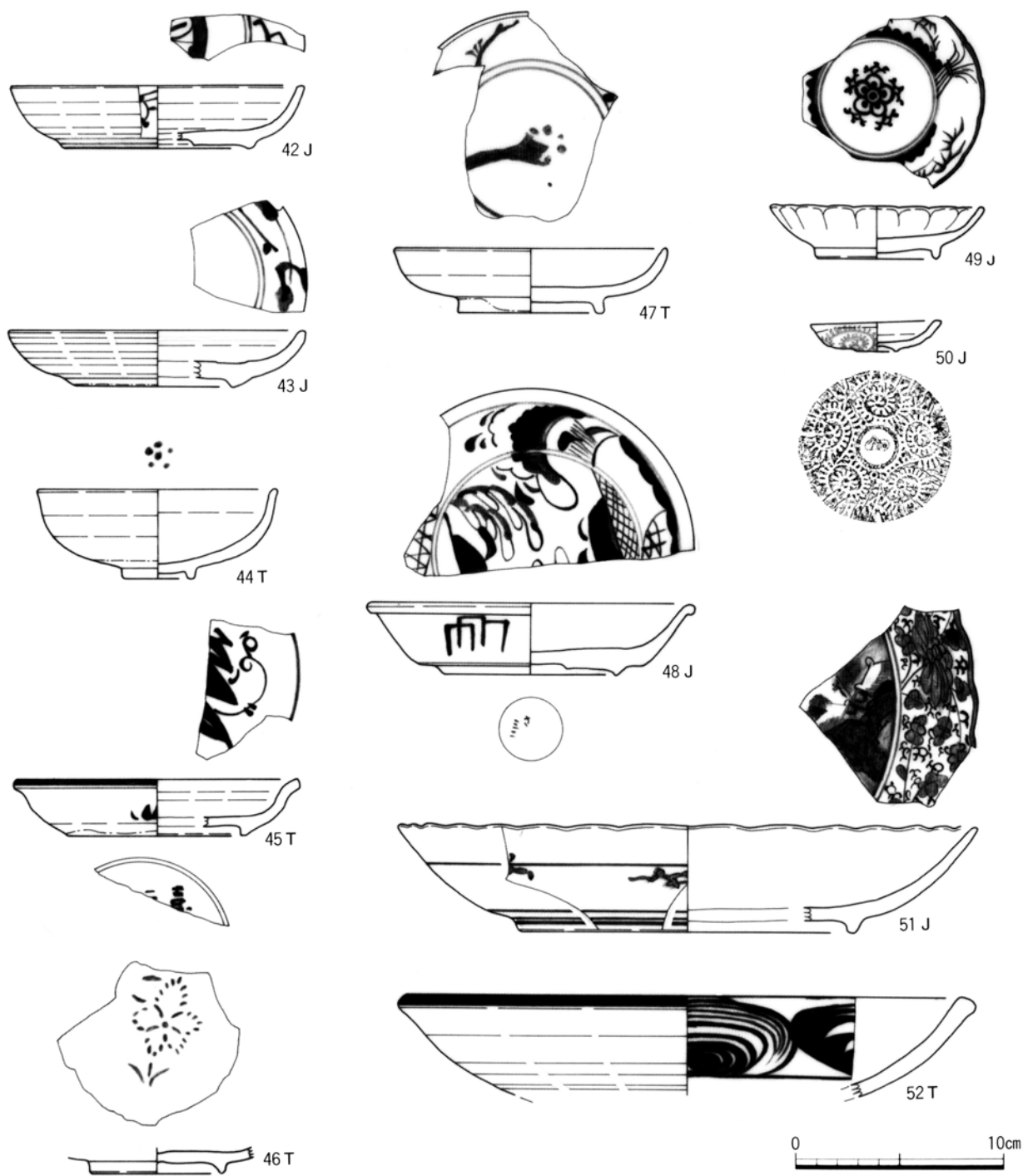
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		35	105		140		83	79		162		354	162		517
	小椀		23	69		92		23	29		52		33	38		71
	皿	3	59	41		103	3	62	19		84	34	149	38		221
	鉢		19	36		55		20	16		36		50	20		70
	その他					0					0		3			3
	小計	3	136	251	0	390	3	188	143	0	334	34	589	258	1	882
調理具	鍋・釜	15	6			21	22	7			29	138	37			176
	鉢		14			14		44			44		90			90
	播鉢		10			10		52			52		171			171
	瓶		10			10		10			10		22	2		24
	その他					0					0		5			5
	小計	15	40	0	0	55	22	113	0	0	135	138	325	2	1	466
貯蔵具	瓶		44			44		5			5	3	116		1	120
	壺		5			5		5			5		23	8		31
	甕A		11			11		37			37		717			717
	甕B		2	0		2		15			15		103			103
	鉢		4			4		6			6		10			10
	その他					0					0		4			4
	小計	0	66	0	0	66	0	68	0	0	68	3	973	8	1	985
灯火具			14			14		4			4	1	10			11
	火具	3	39			42	13	29			42	24	81			105
化粧具			1			1		1			1		3	2		5
	神仏具		44	11		55		10	6		16		14	8		22
喫煙具			0			0		1			1		1			1
	調度具		8	0		8		10	1		11		42	3		45
蓋			59	64		123		23	13		36		28	14		42
	合計	21	407	326	0	754	38	447	163	0	648	200	2066	295	3	2564

第13表 S D 025出土陶磁器類集計表



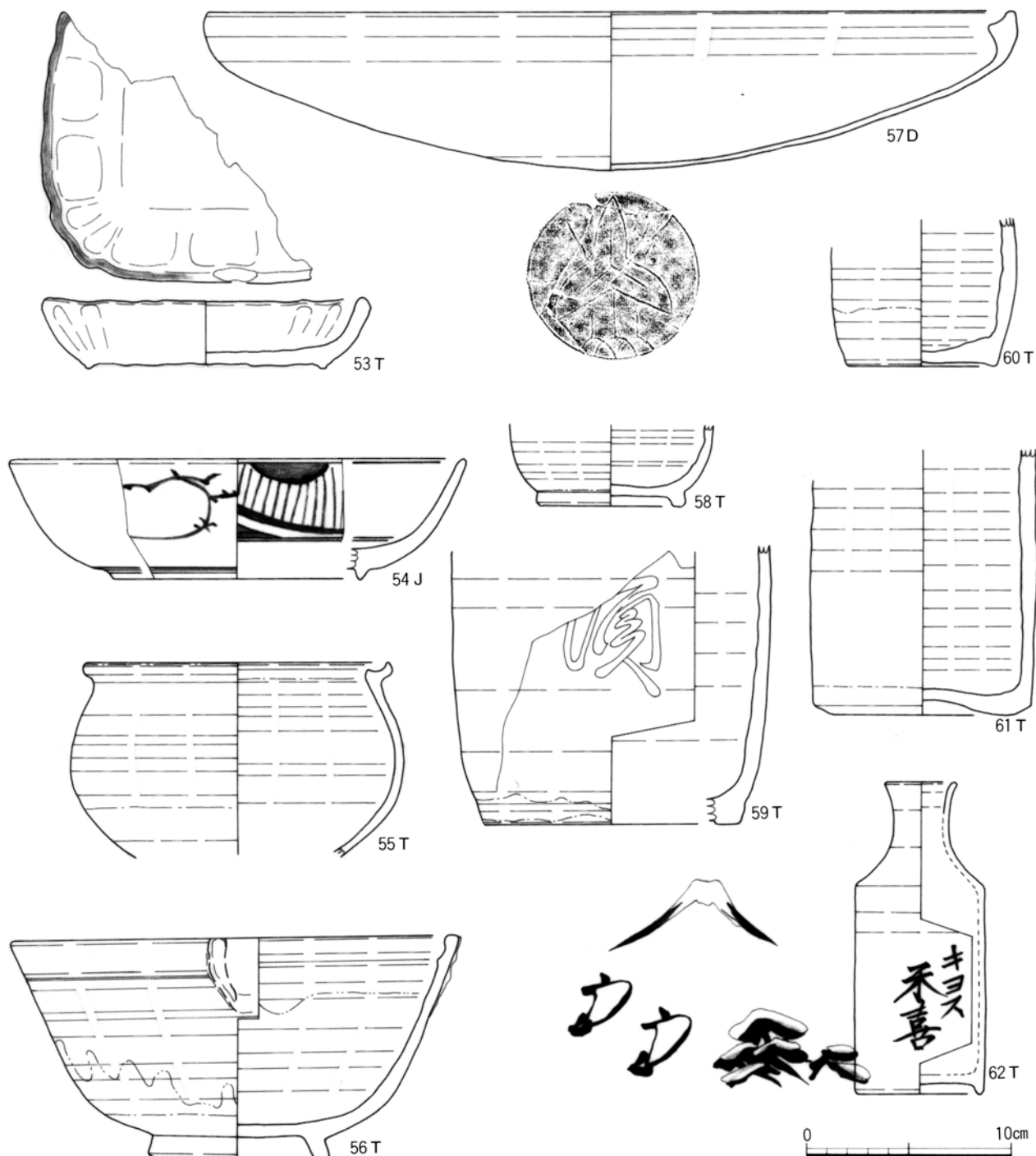
遺物 番号	調査地点	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
22	91B	SD 025	供膳具	椀	天目椀	—	11.4	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	大室V期（16世紀末）	E-057
23	91C	〃	〃	〃	丸椀	—	—	—	4.5	—	青磁	肥前	吉磁染付、三ツ銀古文・三重方形枠内に「萬」字、 19世紀代	E-058
24	〃	〃	〃	〃	〃	—	12.1	—	—	透明釉	透明釉	瀬・美	呉須絵・鉄絵、宝珠文、19世紀前半～中	E-059
25	91B	〃	〃	〃	〃	—	—	—	3.7	灰釉	灰釉	〃	鉄絵、柳文か	E-060
26	91C	〃	〃	〃	端反椀	5.6	11.2	—	4.4	—	—	〃	染付、竹文か、19世紀中	E-061
27	91B	〃	〃	小椀	〃	4.7	8.3	—	3.0	—	—	〃	染付、飛鳥文・鶴文・変形寿文、 見込みにトナシ痕あり、19世紀中	E-062
28	〃	〃	〃	椀	〃	5.2	10.2	—	4.2	—	—	〃	染付、草花文・蝶文、19世紀中	E-063
29	91C	〃	〃	〃	〃	5.0	8.5	—	3.2	—	—	肥前か	染付、渦巻文、19世紀中	E-064
30	〃	〃	〃	〃	広東椀	6.0	10.8	—	5.4	透明釉	透明釉	瀬・美	呉須絵、梅花文、19世紀前半	E-065
31	91B	〃	〃	〃	〃	6.2	11.0	—	5.8	—	—	肥前	染付、団扇文、19世紀代	E-066
32	91C	〃	〃	〃	〃	5.2	9.0	—	5.1	白磁	白磁	瀬・美	19世紀中～後半	E-067
33	〃	〃	〃	小椀	丸椀	5.5	7.8	—	3.0	青磁	青磁	肥前	青磁、19世紀中	E-068
34	〃	〃	〃	〃	〃	—	8.4	—	—	白磁	白磁	〃	〃	E-069
35	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	4.2	—	—	〃	染付、底部に変形「大明年製」、19世紀代	E-070
36	〃	〃	〃	〃	〃	—	7.1	—	—	透明釉	透明釉	瀬・美	鉄絵・白泥、梅花文か、再生織部、19世紀初	E-071
37	〃	〃	〃	〃	〃	2.0	6.6	—	2.2	—	—	〃	染付、草花文、19世紀中	E-072
38	〃	〃	〃	〃	筒椀	—	7.2	—	—	—	—	肥前	染付、菊花散し文、19世紀前半	E-073
39	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	4.0	—	—	〃	染付、五弁花（手描き）、18世紀後半	E-074
40	91B	〃	〃	〃	〃	5.7	6.6	—	3.7	—	—	〃	染付、菊花文・幾何文・五弁花（コンニャク印）、 1780～1810	E-075
41	〃	〃	〃	〃	丸椀	2.9	5.8	—	2.6	—	透明釉	肥前か	上絵付、新唐草文・山水文・変形寿、 19世紀中～後半	E-076

第41図 近世の遺物（5） SD 025①（1:3）



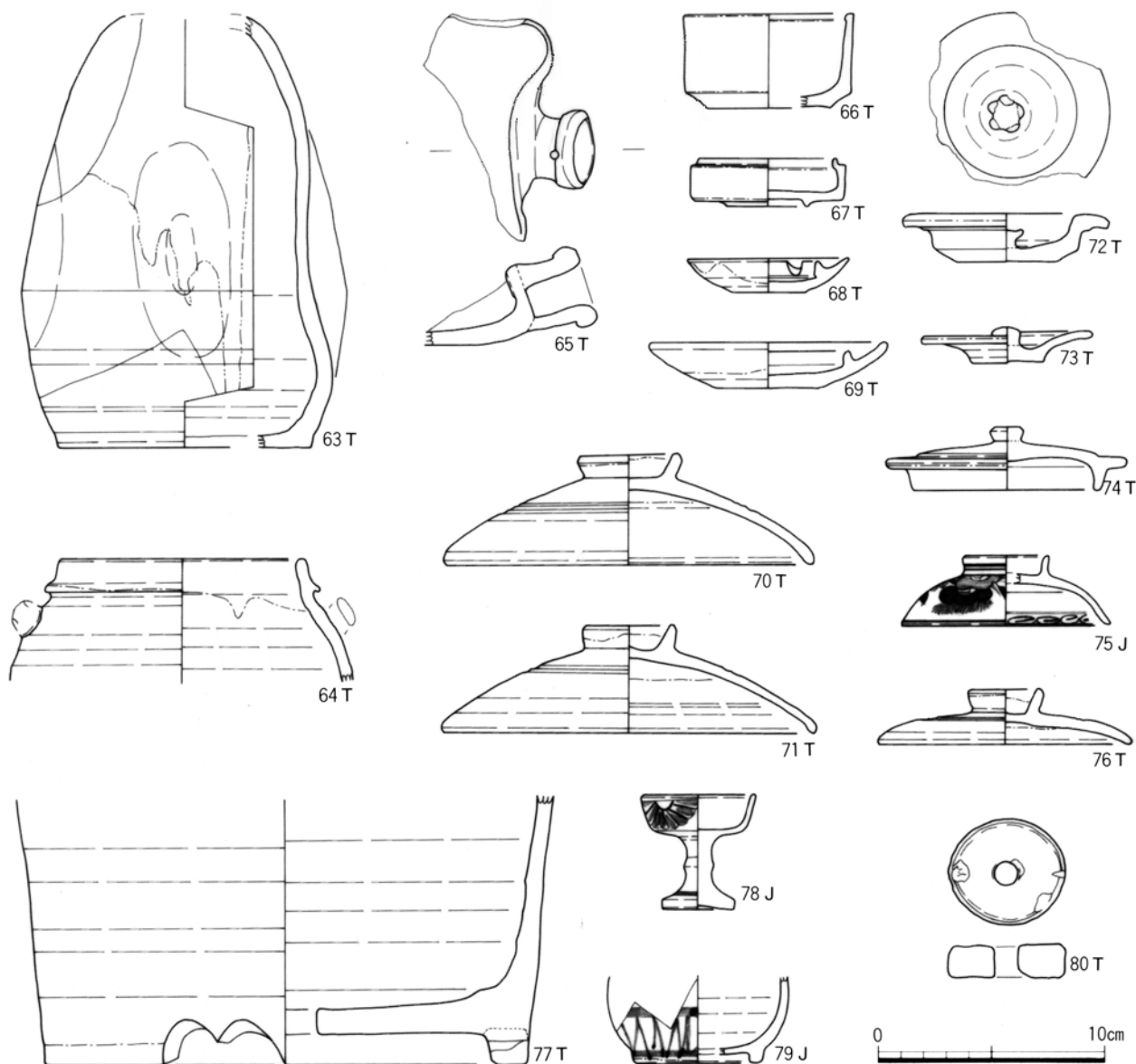
遺物 番号	調査地点		器 種			法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登 録 番 号
	調査区	遺構	用 途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
42	91C	SD 025	供膳具	皿	丸皿	3.0	13.8	—	8.9	—	—	肥前	染付,唐草文,蛇ノ目凹型高台,19世紀代	E-077
43	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	14.2	—	7.4	—	—	〃	染付(鉄須と鉄軸),草花文,見込み蛇ノ目軸刺 ぎ,19世紀前半	E-078
44	91B	〃	〃	〃	〃	4.3	11.2	—	3.4	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵,梅花文	E-079
45	91C	〃	〃	〃	端反皿	2.7	13.2	—	8.4	〃	〃	〃	鉄絵,草花文,高台内に墨書	E-080
46	91B	〃	〃	〃	その他	—	—	—	6.3	〃	〃	〃	呉須絵,草花文(型紙摺絵)	E-081
47	〃	〃	〃	〃	丸皿	3.1	12.9	—	7.0	〃	〃	〃	呉須絵,唐草文・梅花文,高台内にトチン痕	E-082
48	〃	〃	〃	〃	〃	3.4	15.0	—	8.2	—	—	肥前	染付,岩文,蛇ノ目凹型高台, 焼き継ぎ番号(朱書き)三三三,19世紀	E-083
49	91C	〃	〃	〃	ひだ,棧花皿	2.5	10.0	—	5.0	—	—	瀬・美	染付,唐文・十草文・五弁花(手描き),11筋, 19世紀中	E-084
50	〃	〃	〃	〃	型打皿	1.4	6.1	—	2.0	白磁	白磁	〃	蛸唐草文,19世紀中～後半	E-085
51	〃	〃	〃	〃	ひだ,棧花皿	5.1	27.3	—	15.8	—	—	肥前	染付,牡丹唐草文・山水樓閣文,口縁部に焼 き継ぎの痕,18世紀前半	E-086
52	〃	〃	〃	〃	丸皿	—	26.4	—	—	透明釉	透明釉	瀬・美	鉄絵,馬の目皿	E-087

第42図 近世の遺物 (6) S D 025② (1:3)



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	釉葉・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
53	91B	SD 025	供膳具	鉢	織部	3.4	—	—	—	長石釉	長石釉	瀬・美	志野, 口鏝, 17世紀初	E-088
54	91C	〃	〃	〃	丸鉢	5.8	21.7	—	11.8	—	—	〃	染付, 唐草文, 19世紀中	E-089
55	〃	〃	調理具	鍋, 釜	行平	—	14.5	—	—	灰釉	灰釉	〃	外側下部に煤付着	E-090
56	〃	〃	〃	鉢	片口	10.8	21.3	—	8.0	〃	〃	〃	見込みにトチン痕	E-091
57	〃	〃	〃	鍋, 釜	焙烙	7.7	38.7	—	—	—	—	不明	外面煤付着, 底部に沢湯文	E-092
58	〃	〃	貯蔵具	瓶	德利A	—	—	—	6.8	—	灰釉	瀬・美	高台部釉拭き取りか	E-093
59	〃	〃	〃	〃	德利E	—	—	—	12.2	—	〃	〃	釘引き「須」の文字	E-094
60	91B	〃	〃	〃	〃	—	—	—	7.2	—	〃	〃		E-095
61	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	11.0	8.8	鉄釉	鉄釉	〃	E-096
62	91C	〃	調理具	〃	燗德利A	15.2	3.3	6.3	5.9	透明釉	透明釉	〃	長石釉・鉄絵, 山水文・「キヨス米喜」か	E-097

第43図 近世の遺物 (7) S D 025③ (1:3)



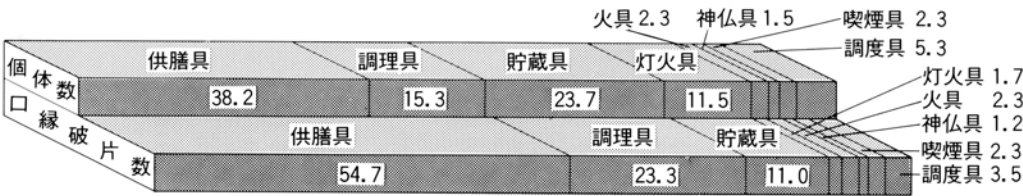
遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
63	91B	SD 025	貯蔵具	瓶	徳利C	—	—	14.2	11.0	鉄釉	鉄釉	瀬・美	べかんこ徳利	E-098
64	〃	〃	〃	壺	蓋付壺	—	10.6	—	—	灰釉	灰釉	〃	口縁部釉剥ぎ取り、御菌黒壺か？	E-099
65	〃	〃	火具	その他	その他	4.3	—	—	—	—	—	〃	十能	E-100
66	〃	〃	貯蔵具	鉢	蓋物A	4.2	7.4	—	5.4	灰釉	灰釉	〃	口縁部釉拭き取り	E-101
67	〃	〃	〃	〃	蓋物B	2.1	6.0	6.8	3.6	〃	〃	〃	口縁部釉拭き取り	E-102
68	〃	〃	灯火具	皿	灯蓋	1.5	7.0	—	3.2	鉄釉	—	〃	底部回転ヘラ削り	E-103
69	〃	〃	〃	〃	〃	2.0	10.2	—	4.6	透明釉	透明釉	〃	重ね焼きの剝離痕(同じ物の重ね焼きか)	E-104
70	91C	〃	その他	蓋	蓋E	4.9	16.0	—	—	灰釉	灰釉	〃	線刻3本	E-105
71	〃	〃	〃	〃	〃	4.7	16.2	—	—	〃	〃	〃	線刻2本	E-106
72	91B	〃	〃	〃	蓋B	2.1	9.1	—	—	ケズリ	鉄釉	〃	壺の蓋か？	E-107
73	91C	〃	〃	〃	蓋A	1.6	7.4	—	—	—	灰釉	〃	口縁周辺に鉄釉	E-108
74	91B	〃	〃	〃	蓋D	2.8	8.2	10.6	—	—	〃	〃	土瓶の蓋か？、口縁部に煤付着	E-109
75	91C	〃	〃	〃	蓋E	3.1	9.1	—	—	—	—	〃	染付、牡丹文・渦巻文・19世紀中	E-110
76	〃	〃	〃	〃	〃	2.4	11.0	—	—	灰釉	灰釉	〃	線刻3本	E-111
77	〃	〃	調度具	植木鉢	植木鉢	—	—	—	20.8	—	〃	〃	高台に切込み3ヶ所あり	E-112
78	〃	〃	神仏具	仏飯器	—	5.0	4.8	—	3.0	—	—	〃	色絵(朱彩・金彩)、花文、19世紀後葉	E-113
79	〃	〃	神仏具	瓶	神酒徳利A	—	—	—	5.2	—	—	肥前	染付、網目文か、18世紀後半	E-114
80	91B	〃	調度具	その他	その他	1.5	—	5.1	—	—	—	不明	戸車、1.2×1.3cmの穴、周辺部摩滅痕	E-115

第44図 近世の遺物(8) S D 025④(1:3)

S D 002 本遺構の時期は、19世紀中葉に比定される。

91D1 区で検出された溝であるが、出土した遺物は総破片数で 872点、接合前口縁破片数で 176点、個体数は 12.08個体と少量ではあるが、江戸時代後期の区画溝として注目される。供膳具が4.17個体・38.2%と減少し、貯蔵具・灯火具・喫煙具・調度具が2.58個体・23.7%、1.25個体・11.5%、0.25個体・2.3%、0.58個体・5.3%と多くを占めている。

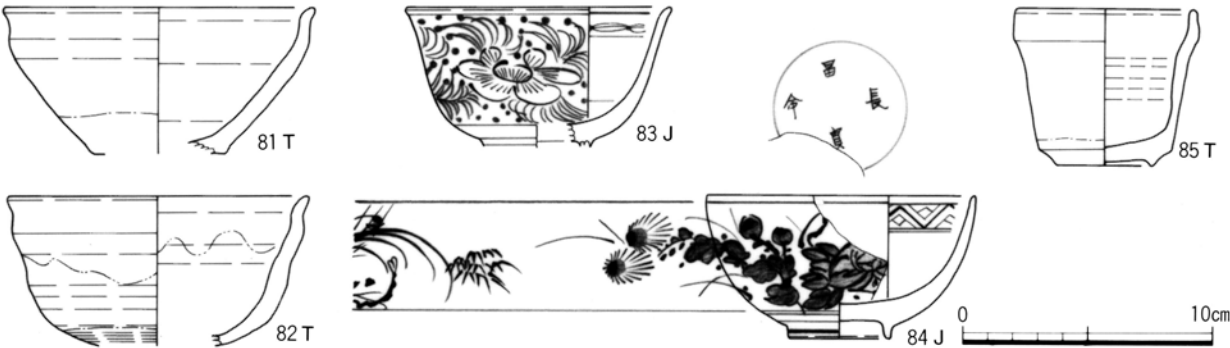
また、土師質製品と陶磁器類の割合では、土師質製品が同時期である S D 025と同様で 2.8%と少量となり、これに対して陶磁器類がそれぞれ72.4%・24.8%となっている。



第45図 S D 002出土陶磁器類の用途組成

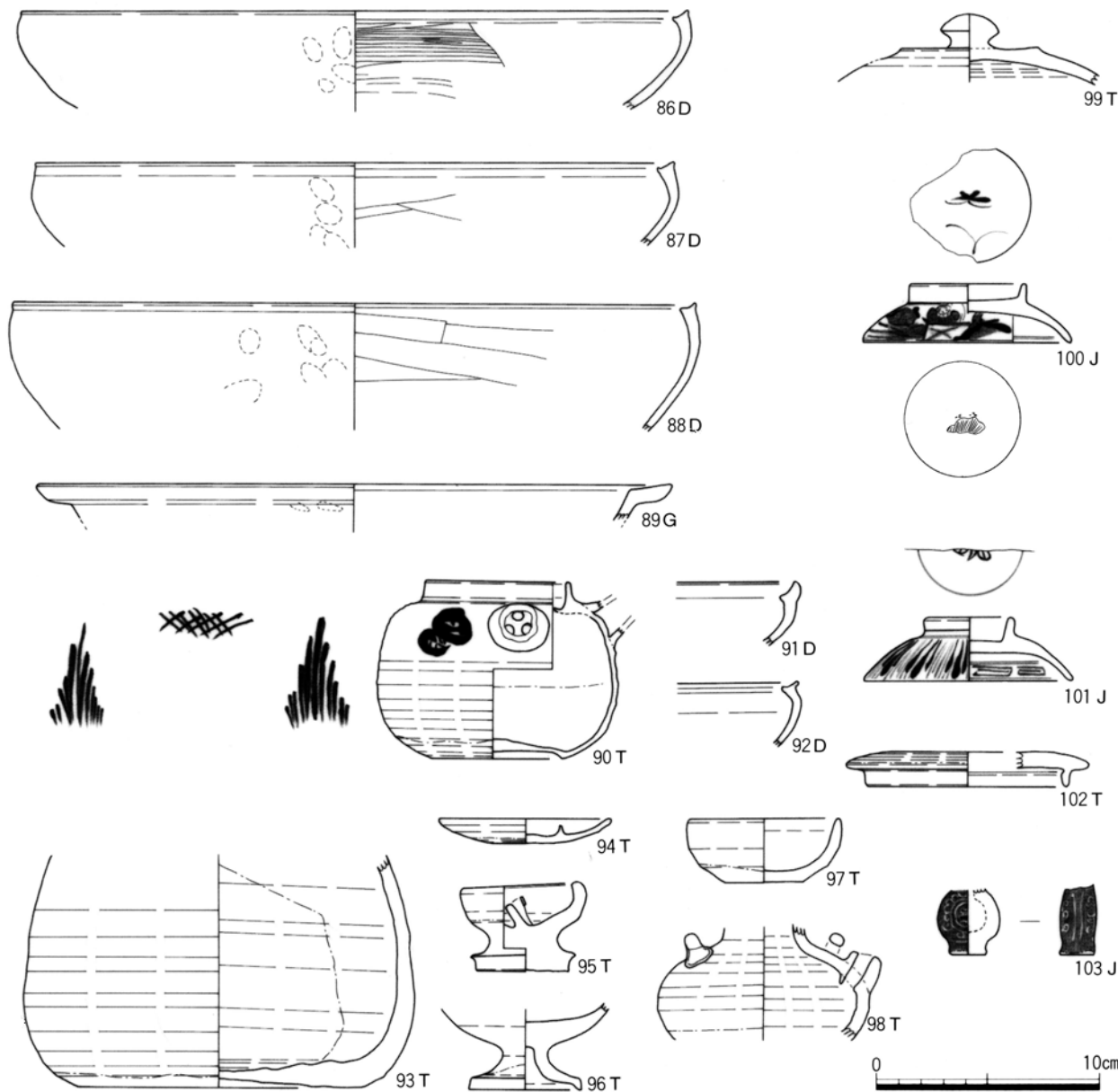
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		13	17		30		31	21		52		138	26		164
	小碗		5	4		9		8	6		14		23	6		29
	皿	0	8	1		9	9	9	1		19	10	29	8		47
	鉢		2	0		2		5	4		9	1	41	4		46
	その他					0					0		1			1
調理具	小計	0	28	22	0	50	9	53	32	0	94	11	232	44	0	287
	鍋・釜	2	1		0	3	16	3		1	20	59	13		4	76
	鉢		1			1		4			4		10			10
	搦鉢		4			4		14			14		40			40
	瓶		12			12		1			1		5	2		7
貯蔵具	その他		0			0		1			1		2			2
	小計	2	18	0	0	20	16	23	0	1	40	59	70	2	4	135
	瓶		24			24		2			2		36			36
	壺	0	0			0	1	1			2	1	5			6
	甕A		6			6		13			13		267			267
灯火具	甕B		0			0		1			1		35			35
	鉢		1			1		1			1		1			1
	その他					0					0					0
	小計	0	31	0	0	31	1	18	0	0	19	1	344	0	0	345
	灯火具		12	3		15		1	2		3		3	2		5
化粧具	火具	0	3			3	1	3			4	6	47	3		56
	化粧具					0					0					0
	神仏具			2		2			2		2		3	4		7
	喫煙具	2	1			3	1	3			4	1	4	1		6
	調度具		6	1		7		4	2		6		13	2		15
蓋	蓋		6	8		14		2	2		4		14	2		16
	合計	4	105	36	0	145	28	107	40	1	176	78	730	60	4	872

第14表 S D 002出土陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	器種	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	釉薬・調整等	産地	備考	登録番号
81	91D1 SD 002	供膳具	碗	天目碗	—	12.2	—	—	—	鉄釉	瀬・美	高台脇鉄化粧, 大窯Ⅱ期	E-116
82	〃	〃	〃	〃	その他	—	11.8	—	—	〃	〃	うのふ軸流し掛け	E-117
83	〃	〃	〃	〃	端反碗	—	10.4	—	—	—	〃	染付, 花文, 19世紀代	E-118
84	〃	〃	〃	〃	丸碗	5.7	10.5	—	4.0	—	〃	染付, 花樹文・「富貴長命」, 19世紀代	E-119
85	〃	〃	〃	小碗	その他	6.2	6.9	—	3.8	灰釉	〃	碁笥底	E-120

第46図 近世の遺物（9） S D 002①（1:3）



遺物 番号	調査地点	器 種	用途	器種	器形	法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	登録 番号	
	調査区	遺構				器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
86	91D1	SD 002	調理具	鍋, 釜	焙烙	—	29.3	—	—	—	指押え	不明	外面に煤付着	E-121
87	〃	〃	〃	〃	〃	—	28.1	—	—	ナデ	〃	〃	外面に煤付着	E-122
88	〃	〃	〃	〃	〃	—	30.1	—	—	ヨコハケ	〃	〃	外面に煤付着	E-123
89	〃	〃	〃	〃	鍋	—	27.4	—	—	—	〃	〃	外面に煤付着	E-124
90	〃	〃	〃	瓶	急須	7.9	6.4	—	5.8	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄銚, 銅緑釉, 胎部から底部に煤付着	E-125
91	〃	〃	〃	鍋, 釜	焙烙	—	37.6	—	—	ヨコハケ	指押え	不明	外面に煤付着	E-126
92	〃	〃	〃	〃	〃	—	29.6	—	—	ナデ	〃	〃	外面に煤付着	E-127
93	〃	〃	火具	鉢	火鉢	—	—	—	12.7	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切痕, 内部油煙付着	E-128
94	〃	〃	灯火具	皿	灯蓋	1.1	7.6	—	2.2	白磁	白磁	〃	19世紀代	E-129
95	〃	〃	〃	乗燭	Ⅱ類	3.8	5.3	—	4.1	鉄釉	鉄釉	〃	底部回転糸切痕, 底部にトチン痕	E-130
96	〃	〃	神仏具	仏飯器	—	—	—	—	5.0	灰釉	灰釉	〃		E-131
97	〃	〃	調度具	餌鉢	餌鉢	2.8	6.6	—	3.5	鉄釉	鉄釉	〃	柿釉か	E-132
98	〃	〃	〃	水指	その他	—	—	9.4	—	〃	〃	〃	鉄化粧	E-133
99	〃	〃	その他	蓋	その他	—	—	—	—	灰釉	灰釉	〃		E-134
100	〃	〃	〃	〃	蓋E	2.6	9.1	—	—	—	—	肥前	つまみ径5.0cm, 染付, 蝶文・山水文か	E-135
101	〃	〃	〃	〃	〃	2.9	9.8	—	—	—	—	瀬・美	つまみ径3.9cm, 染付, 条線文	E-136
102	〃	〃	〃	〃	その他	1.6	10.4	—	8.9	ナデ	灰釉	〃		E-137
103	〃	〃	喫煙具	その他	その他	—	—	—	1.5	—	—	中国	鼻煙壺, 染付, 唐草文・寿文, 最大幅2.7cm, 最大厚1.6cm	E-138

第47図・近世の遺物 (10) S D 002② (1:3)

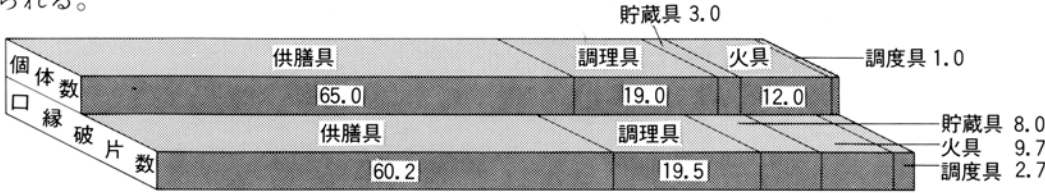
その他の溝合計

全調査区で検出された溝の内、遺構で掲載した溝以外から出土した遺物については、総破片数で454点、接合前口縁破片数で117点、個体数は8.58個体となり、出土遺物量は意外と少ない。化粧具・喫煙具は出土しておらず、供膳具が5.42個体・65.0%、調理具が1.58個体・19.0%、貯蔵具が0.25個体・3.0%、火具が1.00個体・12.0%、調度具が0.08個体・1.0%、蓋が0.25個体となっており、灯火具と神仏具は破片だけが出土している。これを、近世の用途組成の平均値（P33）と比較してみると、供膳具はよく似た数値を示しているが、貯蔵具・調度具は大幅に減少しており、調理具・火具はそれぞれ1.7倍・2.6倍に増加している。

器種別にみると、供膳具では椀対皿の比率が1.38：1となっており、名古屋城三の丸遺跡の同時期の遺構ほどではないが、椀対皿の比率が逆転することが確認された。調理具では、鍋・釜類の占める割合が68.4%と増加している。他の遺構と比較すると、火具の占める割合も高くなっている。

また、土師質製品と陶磁器類の割合では、土師質製品が6.8%と低くなっており、これに対して陶磁器類では、陶器製品が42.7%であるが、磁器製品が49.5%と平均値（30.4%）を越えて増加していることが確認される。これは、19世紀中葉の溝であるS D 025やS D 002とほぼ同様の結果を見せており、材質において磁器製品の占める割合が増えていることがわかる。このことは、19世紀前葉～中葉にかけて次第に磁器製品の生産量増大と普及、消費の増大が進んだことを大きく反映しているものといえよう。

なお、次に図示した遺構の時期については、91D1区で検出されたS D 001は19世紀前葉、92B1区で検出されたS D 011は19世紀中葉～後葉、同じく92B1区で検出されたS D 014は19世紀中葉と考えられる。

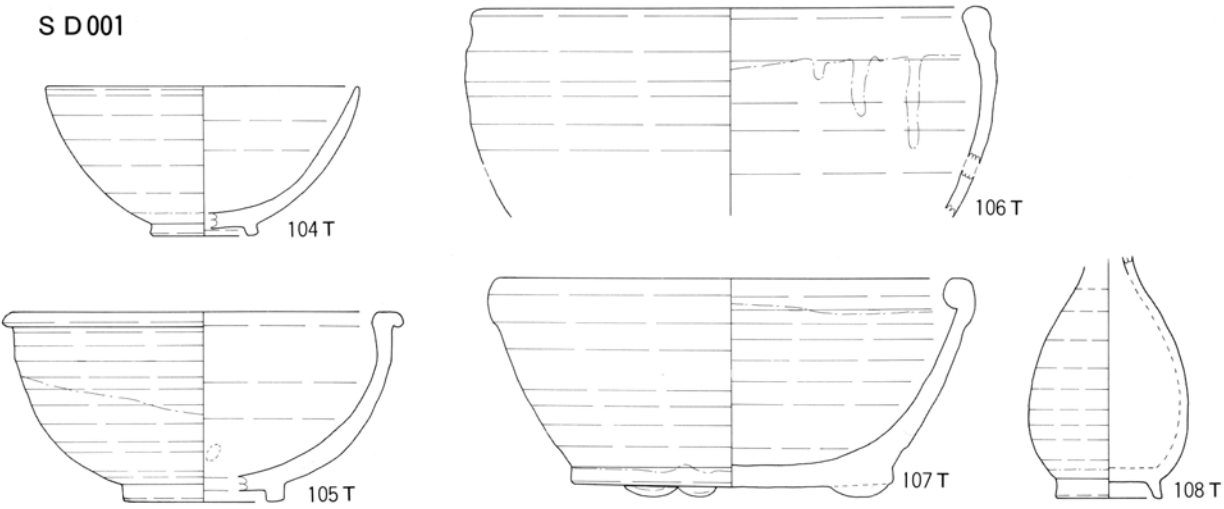


第48図 その他の溝合計陶磁器類の用途組成

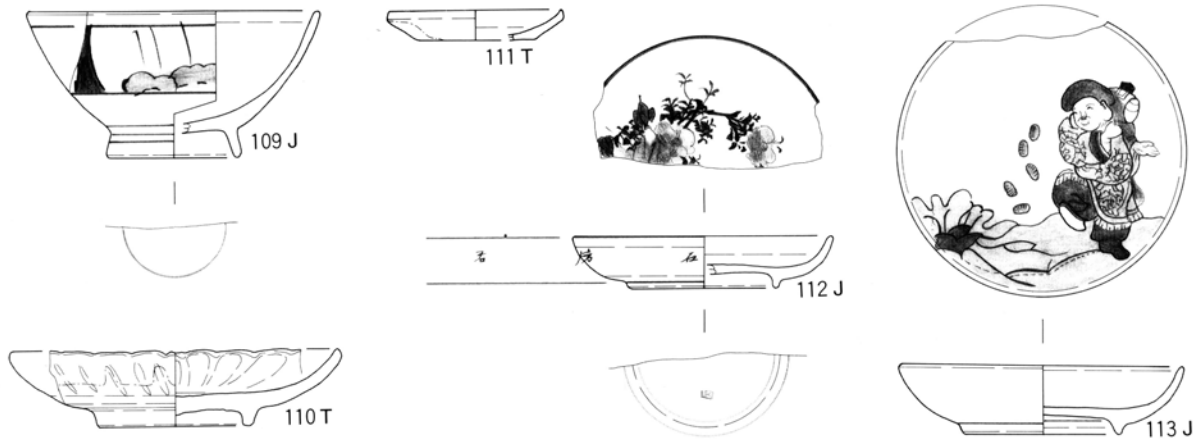
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		6	21		27		18	21		39		57	40		97
	小椀		1	8		9		1	5		6		1	7		8
	皿		7	19		26		10	7		17	25	21	12		58
	鉢		2	1		3		3	3		6		14	4		18
	その他					0					0					0
	小計	0	16	49	0	65	0	32	36	0	68	25	93	63	0	181
調理具	鍋、釜	0	12		1	13	12	2		1	15	37	11		4	52
	鉢		4			4		4			4		16			16
	播鉢		2			2		2			2		10			10
	瓶		0			0		1			1		2	1		3
	その他					0					0					0
	小計	0	18	0	1	19	12	9	0	1	22	37	39	1	4	81
貯蔵具	瓶					0					0		13			13
	壺					0					0		4			4
	甕A		3			3		8			8		108			108
	甕B		0			0		1			1	2	7			9
	鉢					0					0			1		1
	その他					0					0					0
灯火具	小計	0	3	0	0	3	0	9	0	0	9	2	132	1	0	135
	火具					0					0		1			1
化粧具			5	7		12	3	8			11	10	24			34
神仏具						0					0			3	3	6
喫煙具						0					0					0
調度具		1	0			1	1	2			3	2	7			9
蓋		1	0	2		3	1	2	1		4	1	3	3		7
合計		7	44	51	1	103	17	62	37	1	117	77	302	71	4	454

第15表 その他の溝合計陶磁器類集計表

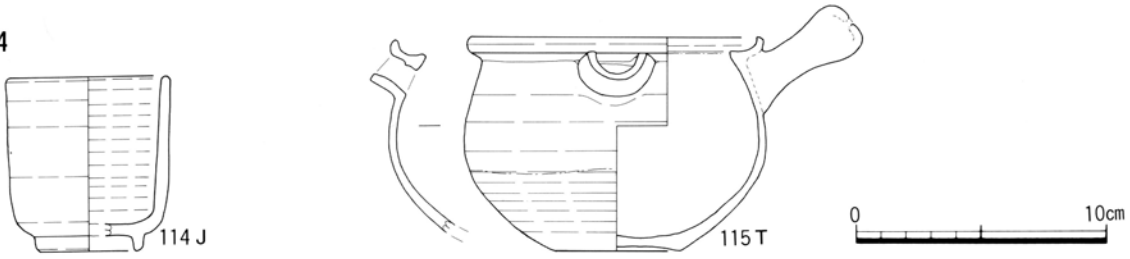
S D 001



S D 011



S D 014



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器 種			法 量 (cm)				釉 薬 ・ 調 整 等		産 地	備 考	登 録 番 号
			用 途	器 種	器 形	器 高	口 径	胴 径	底 径	内 面	外 面			
104	91D1	SD 001	供膳具	碗	平碗	6.0	12.3	—	4.1	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵, 柳文か, 18世紀末	E-139
105	〃	〃	調理具	鉢	片口	7.6	15.0	—	6.1	〃	〃	〃	見込みにトチン痕, 高台部に煤付着	E-140
106	〃	〃	〃	〃	その他	—	19.8	—	—	〃	〃	〃	〃	E-141
107	〃	〃	火具	鉢	火鉢	8.7	18.3	—	12.8	鉄釉	鉄釉	〃	口縁上部に重ね焼きの剥離痕	E-142
108	〃	〃	調理具	瓶	燗德利 A	—	—	6.4	4.2	—	灰釉	〃	〃	E-143
109	92B1	SD 011	供膳具	碗	平碗	5.8	11.4	—	5.2	—	—	〃	染付	E-144
110	〃	〃	〃	皿	菊皿	3.0	12.8	—	5.9	灰釉	灰釉	〃	丸ノミで調整, 断面にスス付着	E-145
111	〃	〃	〃	〃	丸皿	1.2	6.8	—	4.6	〃	ナデ	〃	底部回転糸切痕	E-146
112	〃	〃	〃	〃	〃	2.1	10.2	—	5.8	—	—	〃	染付	E-147
113	〃	〃	〃	〃	〃	2.7	11.2	—	6.2	—	—	〃	染付	E-148
114	〃	SD 014	供膳具	小碗	筒碗	6.9	6.2	—	3.9	白磁	白磁	〃	〃	E-149
115	〃	〃	調理具	鍋, 釜	行平	8.5	11.5	—	5.1	灰釉	灰釉	〃	口縁部釉剥ぎ, 底部スス付着	E-150

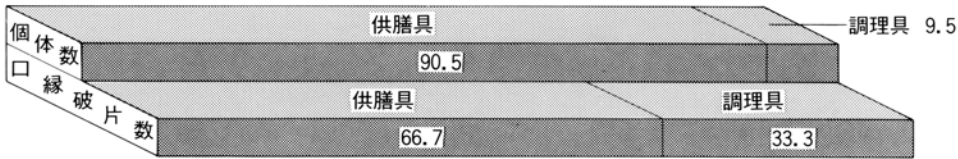
第49図 近世の遺物 (11) その他の溝 (1:3)

土坑

SK 240 本遺構の時期は、16世紀末～17世紀初頭と比定される。

92B2 区で検出された土坑で、出土した遺物は総破片数で64点、接合前口縁破片数で15点、個体数は1.75個体と少ないが、城下町期の遺構として注目される。供膳具が1.58個体・90.5%とほとんどを占め、調理具が0.17個体・9.5%、他に貯蔵具・喫煙具・蓋が破片のみ出土している。志野の小碗・丸皿から時期を決定したが、大窯Ⅱ期（16世紀中葉）の播鉢も出土している。

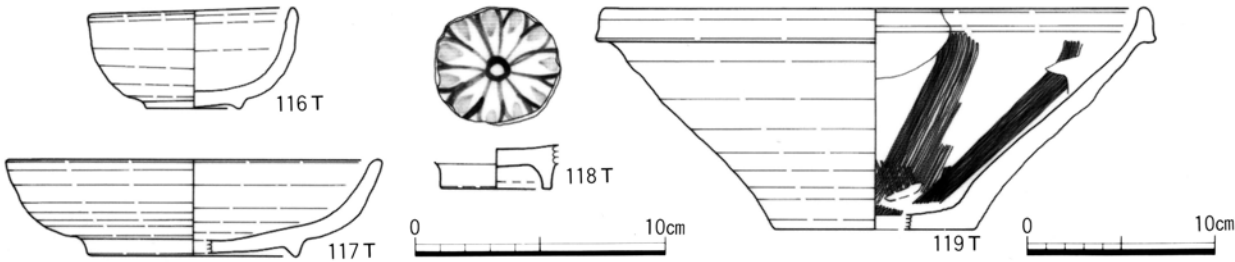
また、材質において皿や鍋などの土師質製品の占める割合が19.0%と他の同時期の遺構に比べて高くなっている。陶磁器類の占める割合は、陶器製品が81.0%となっており、磁器製品の出土は見られない。



第50図 SK 240出土陶磁器類の用途組成

用 途	器 種	接 合 後 口 縁 残 存 率					接 合 前 口 縁 破 片 数					総 破 片 数				
		土 器	陶 器	磁 器	その他	計	土 器	陶 器	磁 器	その他	計	土 器	陶 器	磁 器	その他	計
供 膳 具	碗					0					0		8			8
	小 碗		12			12		4			4		5			5
	皿	3	0			3	3	2			5	4	8			12
	鉢		4			4		1			1		2			2
	そ の 他					0					0					0
	小 計	3	16	0	0	19	3	7	0	0	10	4	23	0	0	27
調 理 具	鍋 , 釜	1				1	3				3	21	6			27
	鉢					0					0					0
	播 鉢		1			1		2			2		2			2
	瓶					0					0					0
	そ の 他					0					0					0
	小 計	1	1	0	0	2	3	2	0	0	5	21	8	0	0	29
貯 蔵 具	瓶					0					0		3			3
	壺					0					0					0
	甕 A					0					0					0
	甕 B					0					0		3			3
	鉢					0					0					0
	そ の 他					0					0					0
	小 計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	0	0	6
	灯 火 具					0					0					0
火 具					0					0					0	
化 粧 具					0					0					0	
神 仏 具					0					0					0	
喫 煙 具					0					0		1			1	
調 度 具					0					0					0	
蓋					0					0		1			1	
合 計		4	17	0	0	21	6	9	0	0	15	25	39	0	0	64

第16表 SK 240出土陶磁器類集計表



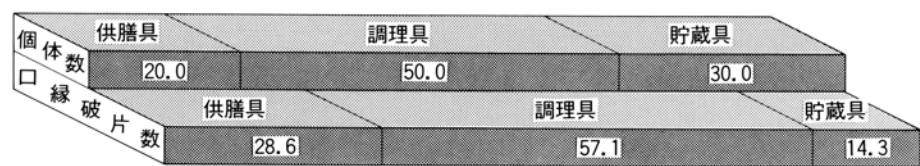
遺物番号	調査地点	遺構	用途	器種	器形	法量 (cm)			釉薬・調整等		産地	備考	登録番号
116	92B2	SK 240	供膳具	小碗	丸碗	3.9	8.1	—	3.7	内面 長石釉 外面 長石釉	瀬・美	志野, 17世紀前半	E-151
117	〃	〃	〃	皿	丸皿	3.8	14.9	—	8.3	〃 〃	〃	志野か, 17世紀前半	E-152
118	〃	〃	〃	鉢	織部	—	—	—	4.4	灰釉 灰釉	〃	鉄絵・赤土, 織部	E-153
119	〃	〃	調理具	播鉢	その他	11.7	28.4	—	10.5	鉄釉 鉄釉	〃	底部回転糸切痕, 錆釉, 大窯Ⅱ期	E-154

第51図 近世の遺物 (12) SK 240 (119は1:4, 他は1:3)

S K 260 本遺構の時期は、17世紀末～18世紀初頭と比定される。

92B2 区で検出された土坑で、出土した遺物は総破片数で20点、接合前口縁破片数で7点、個体数0.83個体と少ないが、江戸時代前期または中期の遺構として注目される。供膳具が0.17個体・20.0%、調理具が0.42個体・50.0%、貯蔵具が0.25個体・30.0%を占め、日常的な生活に関連する遺物だけが出土している。このことより、供膳具に分類された碗や皿の出土がかなり少ないとはいえ、生活に密着した土坑であると思われる。

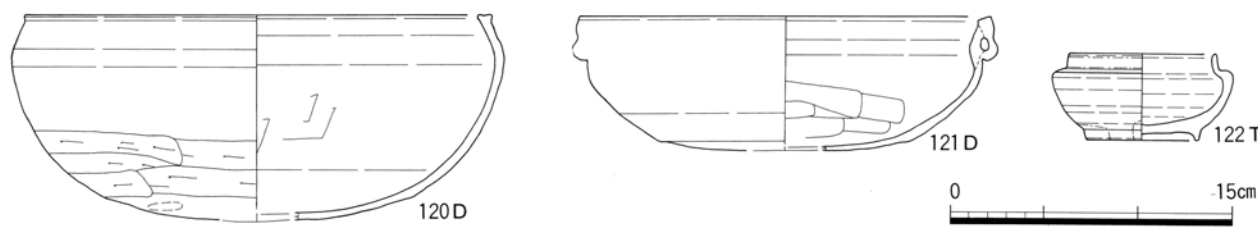
また、材質面においては、内耳鍋がまとまって出土しているため、土師質製品の占める割合が50.0%と高くなっている。これに対して、陶磁器類は、陶器製品が50.0%で、磁器製品は破片で1点出土しているのみに留まっている。



第52図 S K 260出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗			2		2			2		2			3	1	4
	小碗					0					0					0
	皿					0					0	1				1
	鉢					0					0					0
	その他					0					0					0
	小計	0	2	0	0	2	0	2	0	0	2	1	3	1	0	5
調理具	鍋・釜	5				5	4				4	8				8
	鉢					0					0					0
	搗鉢					0					0					0
	瓶					0					0					0
	その他					0					0					0
	小計	5	0	0	0	5	4	0	0	0	4	8	0	0	0	8
貯蔵具	瓶					0					0					0
	壺					0					0					0
	甕A					0					0		5			5
	甕B					0					0		1			1
	鉢			3		3		1			1		1			1
	その他					0					0		1			0
	小計	0	3	0	0	3	0	1	0	0	1	0	7	0	0	7
灯火具						0					0					0
火具						0					0					0
化粧具						0					0					0
神仏具						0					0					0
喫煙具						0					0					0
調度具						0					0					0
蓋具						0					0					0
合計		5	5	0	0	10	4	3	0	0	7	9	10	1	0	20

第17表 S K 260出土陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	器種	法量 (cm)	釉薬・調整等	産地	備考	登録番号
120	92B2 SK 260	調理具 鍋・釜 内耳鍋	器高 24.8 口径 26.2 胴径 22.0 底径 22.7	内面 ナデ・ケズリ 外面 ケズリ	不明	足付内耳鍋	E-155
121	〃	〃	〃	〃	〃	〃	E-156
122	〃	貯蔵具 鉢 蓋物B	器高 4.6 口径 7.7 胴径 9.7 底径 6.0	鉄化粧+灰釉 鉄化粧+灰釉	瀬・美	口縁部釉剥ぎ取り, 尾呂の時期	E-157

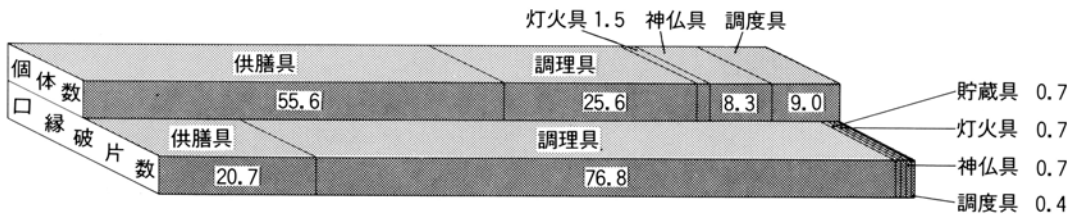
第53図 近世の遺物 (13) S K 260 (1:4)

S K 289 本遺構の時期は、18世紀後葉～18世紀末と比定される。

92B2 区で検出された土坑で、出土した遺物は総破片数で 649点、接合前口縁破片数では 285点、個体数は 11.08個体で、江戸時代中期の遺構として注目される。供膳具が6.17個体・55.6%、調理具が2.83個体・25.6%、灯火具が0.17個体・1.5%、神仏具が0.92個体・8.3%、調度具が1.00個体・9.0%となっており、貯蔵具・火具・喫煙具は出土しているが、化粧具・蓋類は全く出土していない。全体の平均値（P33）と比較してみると、調理具・神仏具・調度具がそれぞれ 2.3倍・3.1倍・2.3倍と比率が増えているのに対し、供膳具・灯火具が減少しているのが、この遺構の特徴であるように思われる。そして、名古屋城三の丸遺跡におけるこの時期の器種組成の内、碗対皿が1：2の割合で出土していたのに対して、この遺構では1.61：1とその比率が逆転するほど皿の出土量が極端に少ない。また、調理具においても、名古屋城三の丸遺跡における鍋・釜対挿鉢の比率が1：2であるのに対して、ここでは33：1となっていて、極端に挿鉢の出土量が少ないことも読み取ることができる。

また、材質面においては、土師質製品の占める割合が36.8%と高くなっており、その67.3%を鍋・釜類が占めている。これに対して、陶磁器類は、陶器製品が63.2%とやはり高く、磁器製品は1点も出土していない。

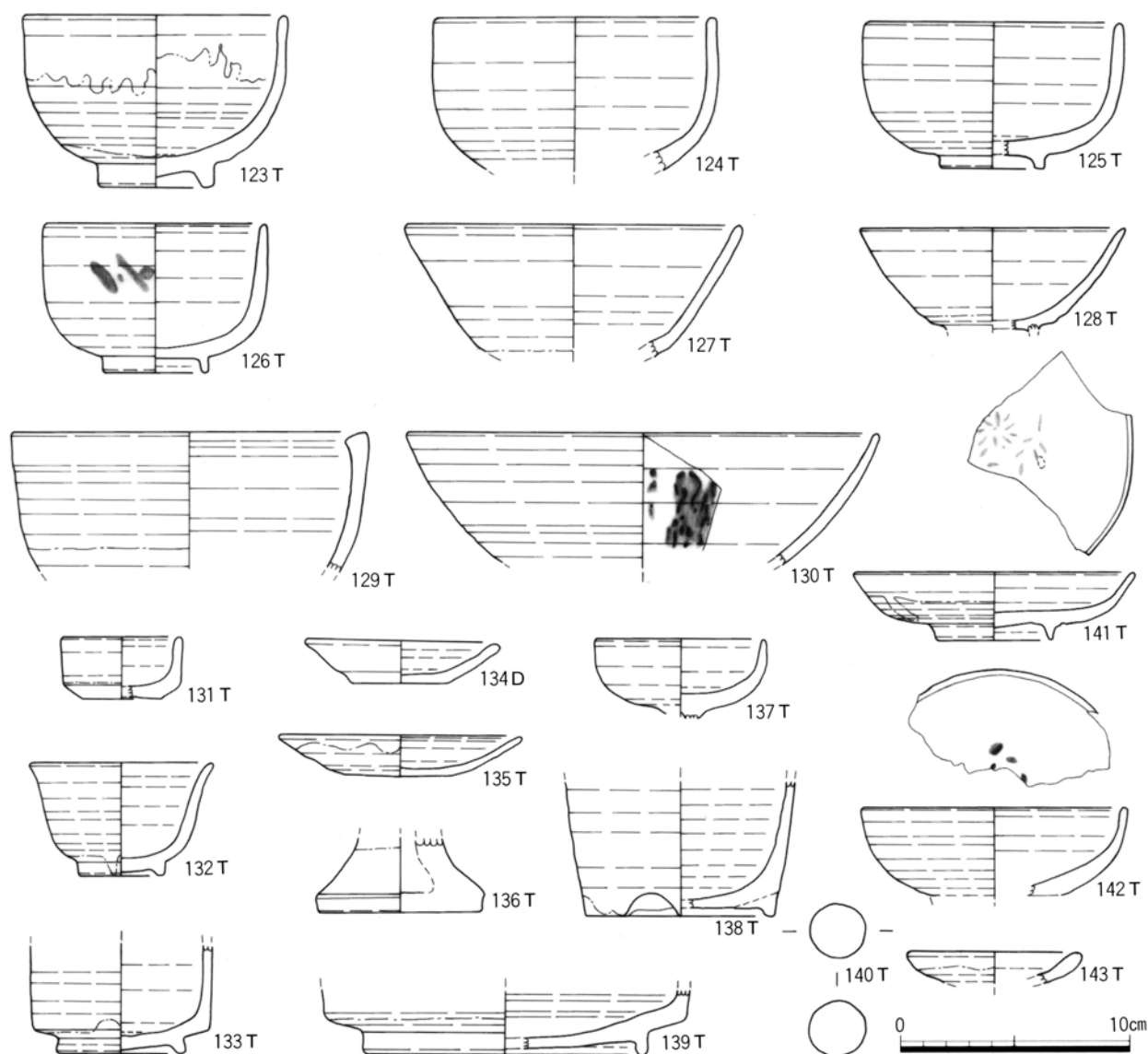
これらの点から、本遺構は近世の遺構であるとはいえ、その用途組成は、前時代である戦国時代のものに近い数値を示しているものといえる。



第54図 S K 289出土陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		32			32		28			28		84			84
	小碗		5			5		2			2		2			2
	皿	16	7			23	6	18			24	11	32			43
	鉢		14			14		5			5		12			12
	その他					0					0		1			1
調理具	小計	16	58	0	0	74	6	53	0	0	59	11	131	0	0	142
	鍋、釜	33				33	212	53			212	407	1			408
	鉢		0			0		4			4		5			5
	挿鉢		1			1		3			3		18			18
	瓶					0					0		1			1
貯蔵具	その他					0					0					0
	小計	33	1	0	0	34	212	7	0	0	219	407	25	0	0	432
	瓶					0					0		7			7
	壺					0					0		3			3
	甕A					0					0		33			33
灯火具	甕B		0			0		2			2		12			12
	鉢					0					0					0
	その他					0					0					0
	小計	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2	0	55	0	0	55
	灯火具		2			2		2			2		5			5
神仏具	火具					0					0		5			5
	化粧具					0					0					0
	神仏具		11			11		2			2		2			2
	喫煙具					0					0		1			1
	調度具		12			12		1			1		7			7
蓋	蓋					0					0					0
	合計	49	84	0	0	133	218	67	0	0	285	418	231	0	0	649

第18表 S K 289出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点	調査区	遺構	器 用途	器 種	器 形	法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登 録 番 号
							器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
123	92B2	SK	289	供膳具	碗	丸碗	7.4	11.2	—	4.8	鉄釉	鉄釉	瀬・美	尾呂茶碗。灰釉流し掛け、削り出し高台	E-158
124	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	11.9	—	—	灰釉	灰釉	〃		E-159
125	〃	〃	〃	〃	〃	〃	6.4	10.8	—	4.4	〃	〃	〃	高台置付部分に使用による摩滅痕	E-160
126	〃	〃	〃	〃	〃	〃	6.5	9.4	—	4.4	〃	〃	〃	呉須絵	E-161
127	〃	〃	〃	〃	〃	平碗	—	14.3	—	—	〃	〃	〃		E-162
128	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	11.4	—	—	〃	〃	〃		E-163
129	〃	〃	〃	〃	鉢	丸鉢	—	15.2	—	—	〃	〃	〃		E-164
130	〃	〃	〃	〃	〃	平鉢	—	20.2	—	—	〃	〃	〃	鉄絵・摺絵	E-165
131	〃	〃	〃	調度具	餌鉢	餌鉢	2.7	5.1	—	3.4	〃	〃	〃	底部回転糸切痕、底部に焼けた痕	E-166
132	〃	〃	〃	供膳具	小碗	端反碗	4.9	7.7	—	3.6	〃	〃	〃		E-167
133	〃	〃	〃	貯蔵具	瓶	その他	—	—	7.8	5.4	〃	〃	〃	汁次、火を受け灰釉が白泥化	E-168
134	〃	〃	〃	供膳具	皿	その他	1.9	8.1	—	4.1	指ナデ	指ナデ	不明	ロクロ成形、底部回転糸切痕	E-169
135	〃	〃	〃	灯火具	皿	灯明皿	1.8	10.3	—	4.5	鉄釉	鉄釉	瀬・美	見込みに重ね焼きの剝離痕(径5.2cm)	E-170
136	〃	〃	〃	〃	乗燭	Ⅱ類	—	—	—	6.9	灰釉+鉄釉	鉄釉	〃	底部回転糸切痕	E-171
137	〃	〃	〃	神仏具	仏飯器	—	—	7.2	—	—	灰釉	灰釉	〃	口縁部に煤付着	E-172
138	〃	〃	〃	調度具	植木鉢	植木鉢	—	—	—	8.1	ナデ	〃	〃	底部に切込み、底部にトチン痕	E-173
139	〃	〃	〃	その他	その他	その他	—	—	—	12.0	灰釉	〃	〃	底部に焼けた痕	E-174
140	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	不明	陶丸、長径2.4cm、短径2.3cm、重さ13.8g	E-175
141	〃	〃	〃	供膳具	皿	丸皿	3.0	12.0	—	5.0	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵・摺絵か、見込みにトチン痕	E-176
142	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	11.3	—	—	〃	〃	〃	鉄絵・呉須絵、梅花文か	E-177
143	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	7.4	—	—	〃	〃	〃		E-178

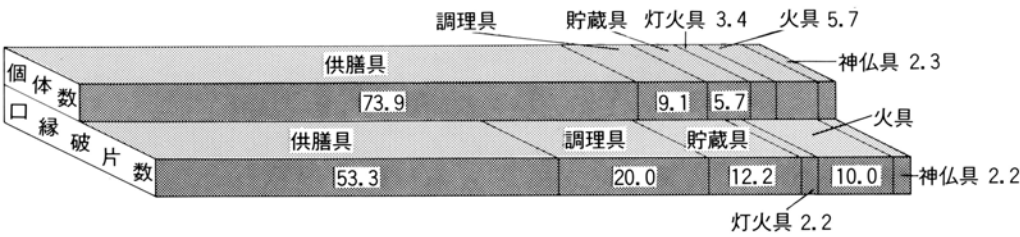
第55図 近世の遺物 (14) S K 289 (1:3)

S K 228 本遺構の時期は、18世紀末と比定される。

91D2 区で検出された土坑で、出土した遺物は総破片数で 376点、接合前口縁破片数では92点、個体数は7.58個体と少量である。同時期の前掲の S K 289とは、やや異なった組成比率や割合をしている。供膳具が5.42個体・73.9%、調理具が0.67個体・ 9.1%、貯蔵具が0.42個体・ 5.7%となり、供膳具の占める割合がかなり高くなっているが、全体としては近世の組成の平均値（P33）とよく似た値を示している。他に火具が0.42個体・ 5.7%と、その比率がやや増加している。また、器種の組成でも、碗対皿の比率が2.69：1となっており、皿の出土量が少ないことがわかる。調理具においても、播鉢の出土量が非常に少ないことを読み取ることができる。名古屋城三の丸遺跡における近世陶磁器類の組成と本遺跡の組成が大きく食い違ってくるのが、単に都市に暮らす武士階級と農村に暮らす民衆の生活の格差によって生じてくるものであるのではないだろうか。

また、破片ではあるが、蓋類・化粧具・調度具が僅かに出土していることも付け加えておく。

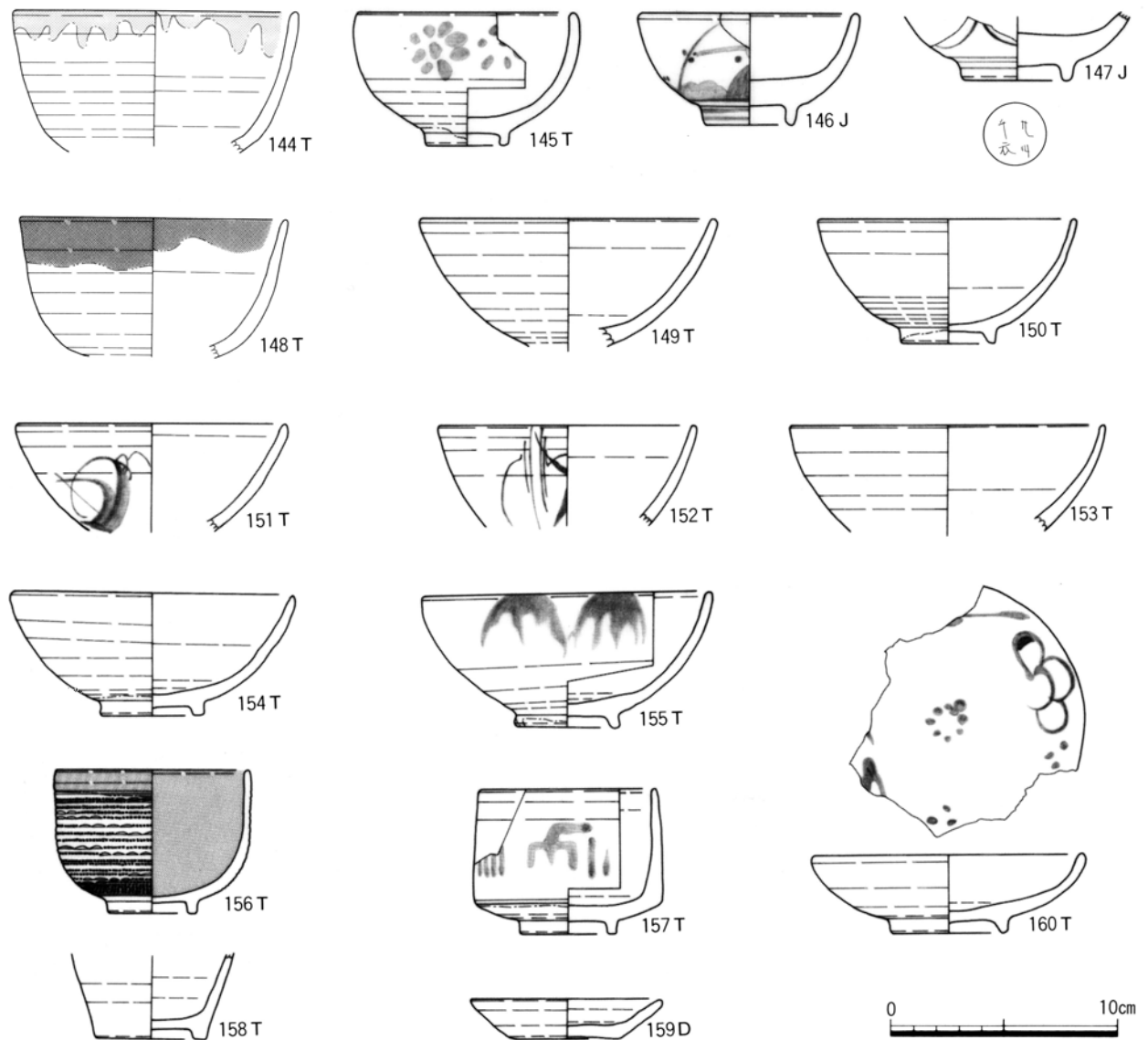
さらに、材質面においては、土師質製品が、14.3%と高い割合を占めており、この時期の遺構としてはこの位の値を示すのかも知れない。これに対して陶磁器類は、陶器製品が80.2%と依然多く、磁器製品が 5.5%しか出土していない。



第56図 S K 228出土陶磁器類の用途組成

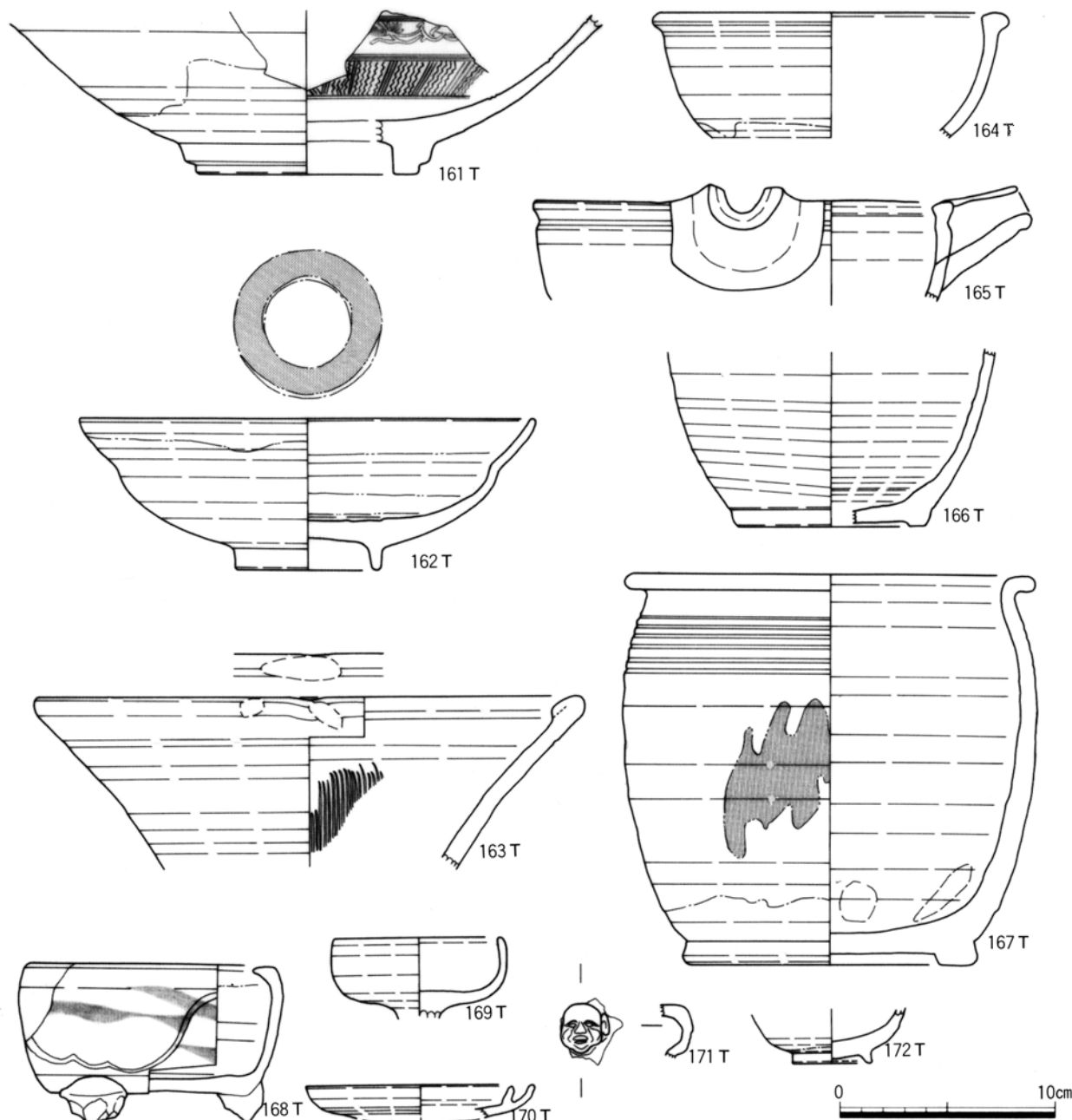
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		36	5		41		32	2		34		71	6		77
	小碗		2			2		4			4		7			7
	皿		10	6	0	16		1	4	1	6		1	7	1	9
	鉢			6		6			4		4			48		48
	その他					0					0					0
	小計		10	50	5	0	65	1	44	3	48		1	133	7	141
調理具	鍋、釜		3			3		13			13		31			31
	鉢			5		5			5		5			11		11
	播鉢					0					0			2	5	7
	瓶					0					0			1		1
	その他					0					0					0
	小計		3	5	0	0	8	13	5	0	18		31	14	0	50
貯蔵具	瓶			1		1			2		2			13		13
	壺					0					0			1		1
	甕 A			0		0			6		6			98		98
	甕 B			1		1			1		1			16		16
	鉢			3		3			2		2			3		3
	その他					0					0					0
灯火具	小計		0	5	0	0	5	0	11	0	11		0	131	0	131
	火具			3		3			2		2			2		2
化粧具	神仏具			0		0		2			2		5	40		45
	調度具					0					0			1		1
蓋	燵煙具			2		2			2		2			2		2
	調度具					0					0			2		2
合計	蓋			3		3			2		2			2		2
	合計		13	73	5	0	91	16	73	3	92		37	327	7	376

第19表 S K 228出土陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器 用途	器 種	器 形	法 器高	量 口径	(cm) 胴径	調整等 底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
144	91D2	SK 228	供膳具	碗	丸碗	—	12.2	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	灰釉流し掛け, 尾呂茶碗	E-179
145	〃	〃	〃	〃	〃	5.8	9.3	—	3.4	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 梅花文	E-180
146	〃	〃	〃	〃	〃	5.9	9.4	—	3.9	—	—	肥前	染付, 岩に梅樹文, 18世紀後半	E-181
147	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	4.6	—	—	肥前系	染付, 丸文・高台内・重圍縁に「大明年製」, 高台砂融着, 18世紀前半～中	E-182
148	〃	〃	〃	〃	〃	—	13.6	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	うのふ釉流し掛け	E-183
149	〃	〃	〃	〃	平碗	—	12.7	—	—	灰釉	灰釉	〃		E-184
150	〃	〃	〃	〃	〃	5.4	11.1	—	4.1	〃	〃	〃		E-185
151	〃	〃	〃	〃	〃	—	11.6	—	—	〃	〃	〃	鉄絵, 柳文	E-186
152	〃	〃	〃	〃	〃	—	10.9	—	—	〃	〃	〃	鉄絵, 柳文	E-187
153	〃	〃	〃	〃	〃	—	13.6	—	—	〃	〃	〃		E-188
154	〃	〃	〃	〃	〃	5.4	12.1	—	4.3	〃	〃	〃		E-189
155	〃	〃	〃	〃	〃	5.9	12.5	—	4.3	〃	〃	〃	呉須絵, 笹文	E-190
156	〃	〃	〃	小碗	丸碗	6.3	8.3	—	3.9	緑釉	緑釉+灰釉	〃		E-191
157	〃	〃	〃	〃	筒碗	6.3	7.6	—	4.1	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 源氏香文	E-192
158	〃	〃	〃	〃	そば猪口	—	—	—	4.6	〃	〃	〃		E-193
159	〃	〃	〃	皿	その他	1.7	8.2	—	4.7	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切痕	E-194
160	〃	〃	灯火具	皿	灯明皿	3.4	11.6	—	4.9	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵, 梅花文, 口縁一部に油煙付着	E-195

第57図 近世の遺物 (15) S K 228① (1:3)



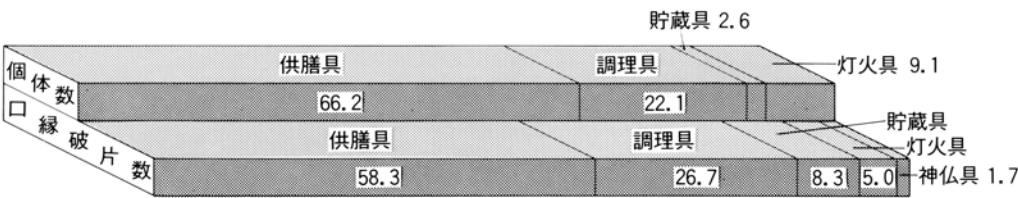
遺物 番号	調査地点		器 種			法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登 録 番 号
	調査区	遺構	用 途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
161	91D2	SK 228	供膳具	鉢	折縁鉢	—	—	—	10.1	白泥+灰釉	白泥+灰釉	関西	三島手, 白泥象嵌唐草文	E-196
162	〃	〃	〃	〃	その他	6.9	20.6	—	6.5	〃	〃	肥前	白泥による刷毛目, 輪壳部分に鉄化粧	E-197
163	〃	〃	調理具	播鉢	V類	—	24.8	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数17本, 1cmに4本, 18世紀初	E-198
164	〃	〃	〃	鉢	片口	—	15.7	—	—	灰釉	灰釉	〃		E-199
165	〃	〃	〃	〃	〃	—	18.8	—	—	鉄釉	鉄釉	〃		E-200
166	〃	〃	貯蔵具	瓶	徳利A	—	—	—	8.5	ナデ	鉄釉	〃		E-201
167	〃	〃	〃	甕B	甕	18.0	18.0	—	13.0	灰釉	灰釉	〃	鉄釉流し掛けか, 見込みにトチン痕あり	E-202
168	〃	〃	神仏具	香炉	筒型	7.2	11.2	—	9.2	長石釉	長石釉	〃	鉄絵	E-203
169	〃	〃	〃	仏飯器	—	—	7.5	—	—	灰釉	灰釉	〃		E-204
170	〃	〃	灯火具	皿	灯臺	—	10.4	—	—	鉄釉	鉄釉	〃		E-205
171	〃	〃	調度具	水指	その他	—	—	—	—	指押え	灰釉	〃	水滴か	E-206
172	〃	〃	供膳具	小碗	丸碗	—	—	—	3.6	灰釉	灰釉	〃		E-207

第58図 近世の遺物 (16) SK 228② (1:3)

S K 223 本遺構の時期は、18世紀末と比定される。

91D2 区で検出された土坑で、出土した遺物は総破片数で 161点、接合前口縁破片数では61点、個体数は7.42個体と遺物量は少ないが、前掲のS K 228と同時期で、供膳具などの日常的な生活に関連する遺物群が高い割合を占めている。供膳具が4.25個体・66.2%と多く、調理具が1.42個体・22.1%、貯蔵具が0.17個体・2.6%であり、他に灯火具が0.58個体・9.1%と高い割合を示している。

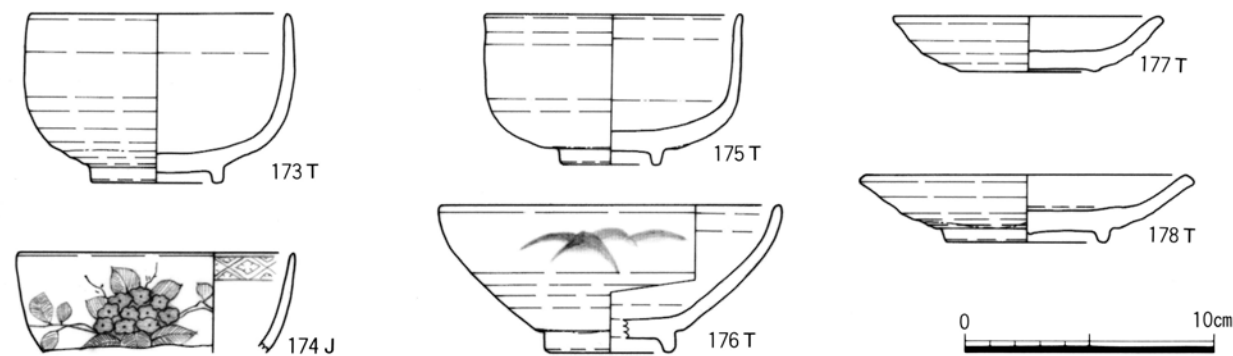
さらに、材質面においては、土師質製品の占める割合が 9.0%で、全て皿だけで占められている。これに対して、陶磁器類は、陶器製品が87.6%とやはり高く、磁器製品は 3.4%にすぎない。



第59図 S K 223出土陶磁器類の用途組成

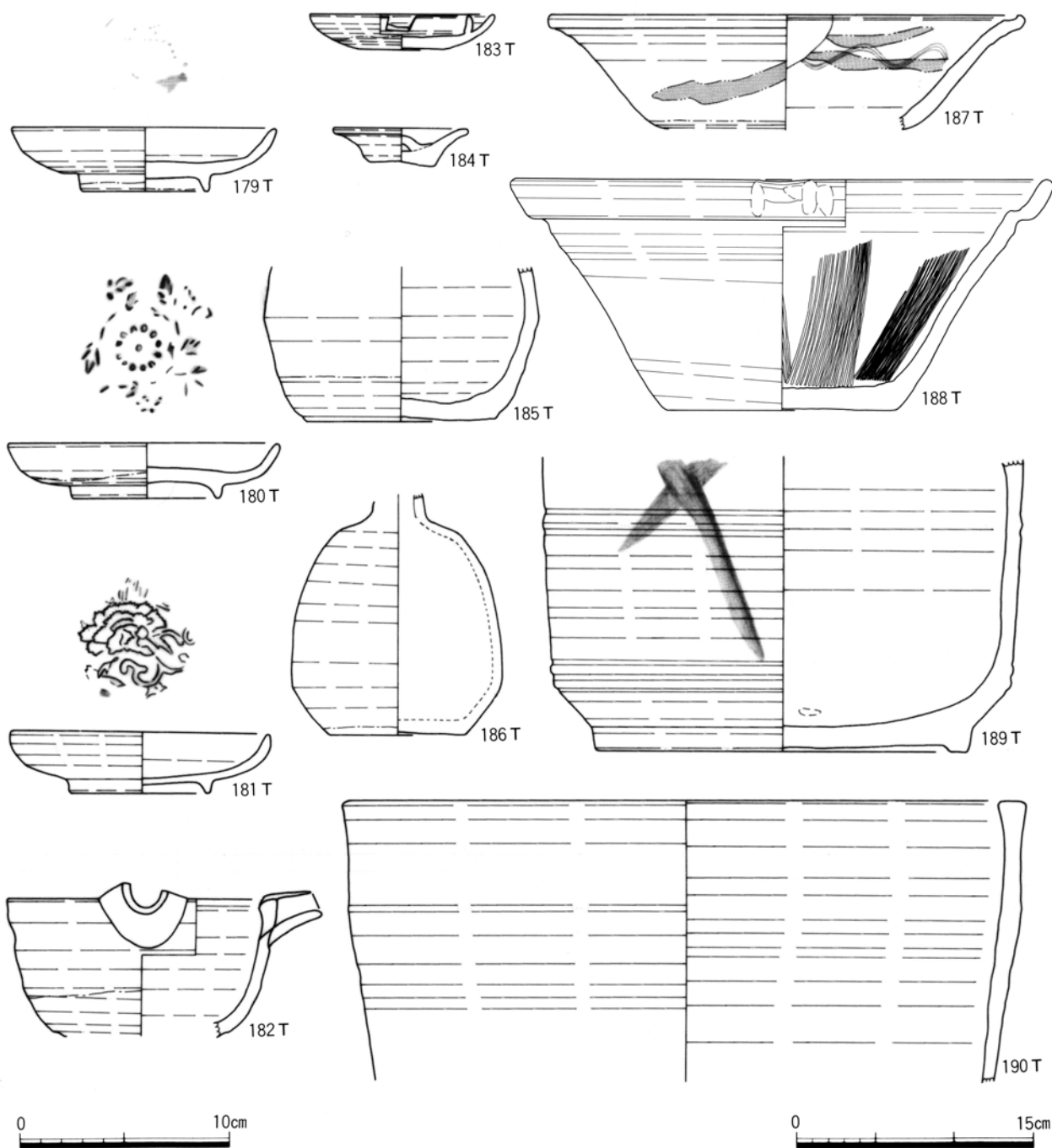
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		18	3		21		12	2		14		27	2		29
	小碗					0					0					0
	皿	8	20			28	8	10			18	11	16			27
	鉢		2			2		3			3		6			6
	その他					0					0					0
調理具	小計	8	40	3	0	51	8	25	2	0	35	11	49	2	0	62
	鍋、釜					0					0	12				12
	鉢		5			5		4			4		5			5
	搗鉢		12			12		12			12		22			22
	瓶					0					0					0
貯蔵具	その他					0					0					0
	小計	0	17	0	0	17	0	16	0	0	16	12	27	0	0	39
	瓶					0					0		6			6
	壺		0			0		1			1		7			7
	甕A					0					0		23			23
灯火具	甕B		2			2		4			4		15			15
	鉢					0					0					0
	その他					0					0					0
	小計	0	2	0	0	2	0	5	0	0	5	0	51	0	0	51
	灯火具		7			7		3			3		3			3
神仏具	火具					0					0		3			3
	化粧具					0					0					0
	神仏具		0			0		1			1	1	1			2
	喫煙具					0					0					0
	調度具					0					0					0
蓋	蓋		12			12		1			1		1			1
	合計	8	78	3	0	89	8	51	2	0	61	24	135	2	0	161

第20表 S K 223出土陶磁器類集計表



遺物番号	調査地点	遺構	器種			法量 (cm)				釉薬・調整等		産地	備考	登録番号
			用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
173	91D2	SK 223	供膳具	碗	丸碗	6.8	10.2	—	5.1	灰釉	灰釉	瀬・美		E-208
174	〃	〃	〃	〃	〃	—	10.8	—	—	—	—	肥前	染付、割小菱・花樹文	E-209
175	〃	〃	〃	〃	〃	6.0	10.0	—	4.0	灰釉	灰釉	瀬・美		E-210
176	〃	〃	〃	〃	平碗	5.9	13.4	—	4.9	〃	〃	〃	呉須絵、笹文	E-211
177	〃	〃	〃	皿	丸皿	2.2	10.6	—	5.4	長石釉	長石釉	〃	内外面に砂融着、高台に重ね焼きの剝離痕	E-212
178	〃	〃	〃	〃	〃	2.7	12.6	—	6.3	灰釉	灰釉	〃	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	E-213

第60図 近世の遺物 (17) S K 223① (1:3)



遺物 番号	調査地点	器種	用途	器種	器形	法量 (cm)				釉葉・調整等		産地	備考	登録 番号
	調査区	遺構				器高	口径	胴径	底径	内面	外面			
179	91D2	SK 223	供膳具	皿	丸皿	3.0	12.2	—	5.9	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵	E-214
180	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	12.6	—	6.9	〃	〃	〃	鉄絵・型紙摺絵, 花樹文	E-215
181	〃	〃	〃	〃	〃	2.9	12.0	—	6.5	〃	〃	〃	呉須絵・型紙摺絵, 花樹文	E-216
182	〃	〃	調理具	鉢	片口	—	12.6	—	—	〃	〃	〃		E-217
183	〃	〃	灯火具	皿	灯蓋	1.7	8.5	—	4.0	鉄釉	鉄釉	〃	内外面に油煙付着, 外面胎部に重ね焼きの剥離痕	E-218
184	〃	〃	その他	蓋	蓋A	1.6	6.3	—	3.0	ナデ	ナデ	〃	底部回転糸切痕, 自然釉かかる	E-219
185	〃	〃	貯蔵具	瓶	德利E	—	—	12.8	8.8	〃	灰釉	〃		E-220
186	〃	〃	〃	〃	德利B	—	—	9.8	6.3	—	鉄釉	〃	底部にトチン痕	E-221
187	〃	〃	供膳具	鉢	端反鉢	—	29.6	—	—	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	〃	緑釉筆散らし	E-222
188	〃	〃	調理具	搗鉢	Ⅶ類	14.5	33.6	—	14.3	鉄釉	鉄釉	〃	磨目数17本, 1cmに3〜4本, 底部回転糸切痕	E-223
189	〃	〃	調度具	水甕	水甕	—	—	—	23.4	灰釉	灰釉	〃	鉄絵	E-224
190	〃	〃	貯蔵具	甕B	半胴A	—	40.0	—	—	鉄釉	鉄釉	〃		E-225

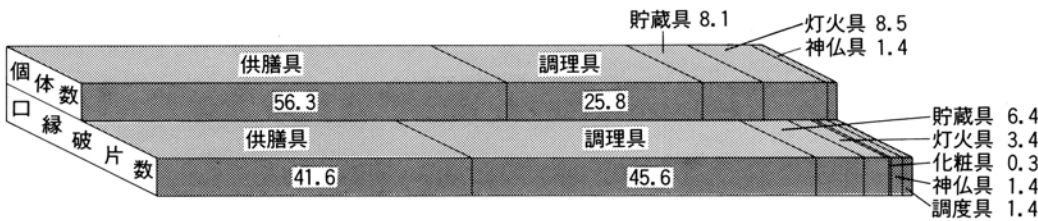
第61図 近世の遺物 (18) S K 223② (187~190は1:4, 他は1:3)

その他の土坑（下面）合計

91D区と92B区の下面で検出された土坑とピットから出土した遺物の合計で、出土した遺物は総破片数で1,116点、接合前口縁破片数では302点、個体数は26.83個体で、ほぼ18世紀中葉～18世紀末頃と思われる遺構が多く、同時期のSD 202・SK 289・SK 228・SK 223とも、組成の比率や割合が数値の増減はあるもののよく似た値を示している。供膳具が13.83個体・56.3%と多く、調理具が6.33個体・25.8%、貯蔵具が2.00個体・8.1%、灯火具が2.08個体・8.5%、神仏具が0.33個体・1.4%、蓋類が2.25個体、他に化粧具・調度具が出土しており、喫煙具は出土していない。全体の平均値（P33）と比較してみると、調理具・灯火具の比率がそれぞれ2倍以上に増えており、供膳具以外の用途の陶磁器類は逆に減少している。

また、器種の組成では、供膳具で碗対皿が1.15：1と比率は近づいてはいるが、依然碗の方が高くなっている。鉢の出土量が少ないことも注意する必要がある。調理具では鍋・釜対播鉢が、2.33：1と播鉢の出土量がやはり少ない傾向にある。

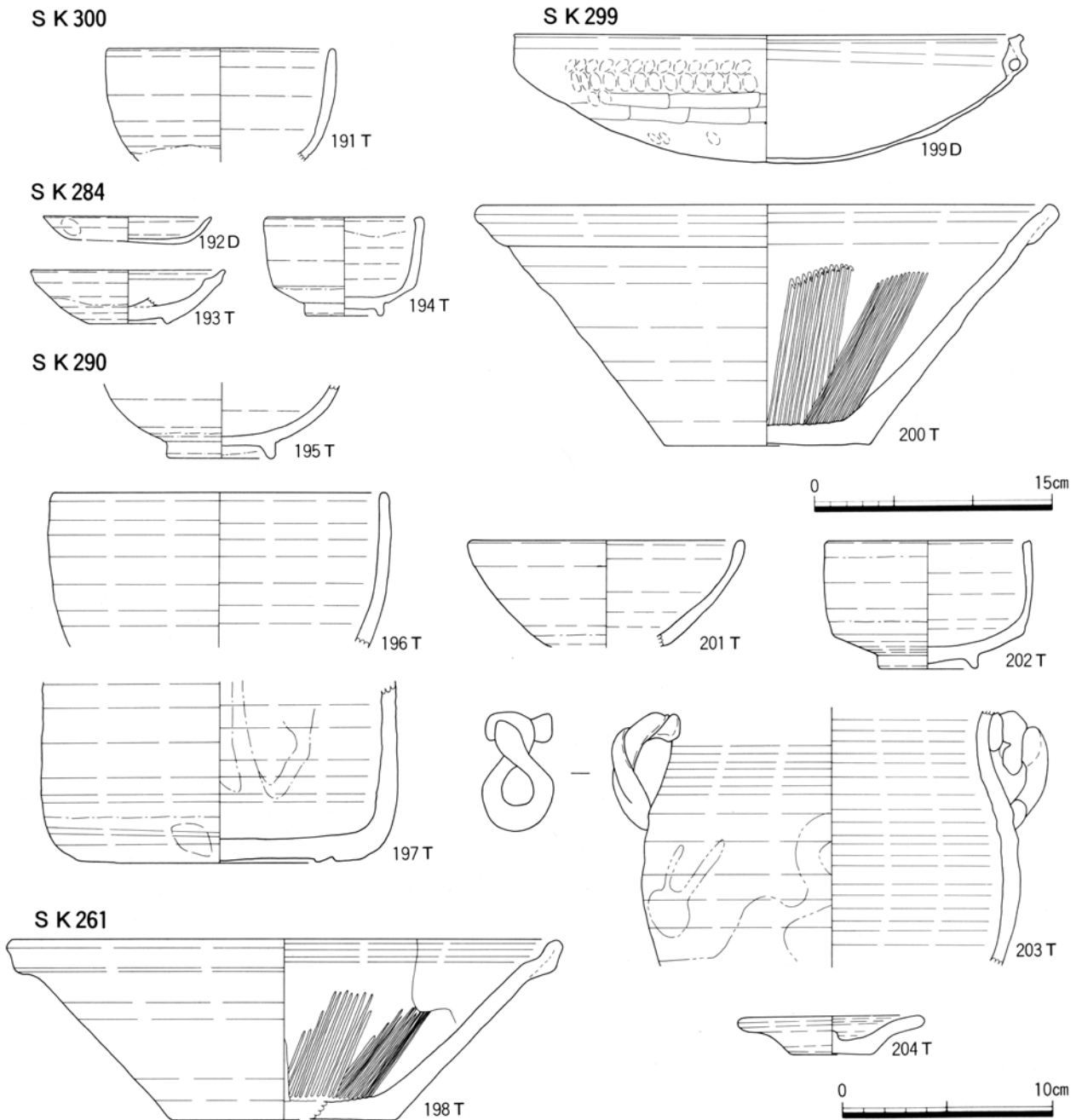
さらに、材質面においては、土師質製品の占める割合が21.7%と全体の平均値（9.7%）よりかなり高く、鍋・釜類58.6%、皿類35.7%がその大部分を占めている。これに対して、陶磁器類の占める割合は、陶器製品が75.2%と高い比率を示しており、磁器製品は3.1%にとどまっている。



第62図 その他の土坑（下面）合計陶磁器類の用途組成

用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		73	8		81		57	5		62		112	7		119
	小碗		3			3		5			5		14	2		16
	皿	25	48	0		73	13	28	3		44	49	65	3		117
	鉢		9			9		12			12	2	57			59
	その他					0					0					0
調理具	小計	25	133	8	0	166	13	102	8	0	123	51	248	12	0	311
	鍋・釜	41	1			42	101	1			102	462	3			465
	鉢		16			16		9			9		14			14
	播鉢		18			18		24			24		58			58
	瓶					0					0		2			2
貯蔵具	その他					0					0		1			1
	小計	41	35	0	0	76	101	34	0	0	135	462	78	0	0	540
	瓶		3			3		1			1		28			28
	壺	1	8			9	3	4			7	3	10			13
	甕A		3			3		4			4		142			142
灯火具	甕B		3			3		4			4		28			28
	鉢		6			6		3			3		4	1		5
	その他					0					0					0
	小計	1	23	0	0	24	3	16	0	0	19	3	212	1	0	216
	灯火具		3	22		25		9			10		1	10		11
化粧具	火具					0					0	2	3			5
	化粧具				0	0			1		1			1		1
	神仏具		2	2		4		4			4		6	1		7
	喫煙具					0					0					0
	調度具		0			0		4			4		10			10
蓋	蓋		27			27		6			6	1	14			15
	合計	70	242	10	0	322	118	175	9	0	302	520	581	15	0	1116

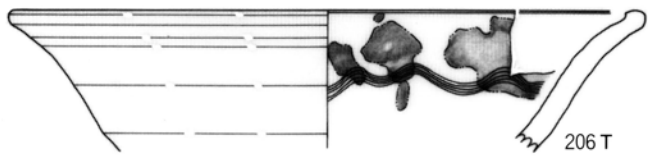
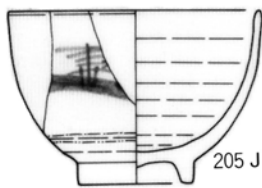
第21表 その他の土坑（下面）合計陶磁器類集計表



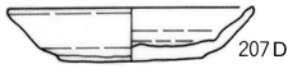
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
191	92B2 SK 300	供膳具	碗	丸碗	—	11.0	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美		E-226
192	〃 SK 284	〃	皿	その他	1.3	8.1	—	5.6	ナデ	指押え・ナデ	不明	ロクロ成形	E-227
193	〃 〃	灯火具	皿	灯明皿	2.6	9.3	—	3.9	鉄釉	鉄釉	瀬・美	基筒底	E-228
194	〃 〃	貯蔵具	鉢	蓋物A	4.9	7.5	—	3.7	灰釉	灰釉	〃	口縁部釉拭き取り	E-229
195	〃 SK 290	供膳具	碗	丸碗	—	—	—	5.0	〃	〃	〃	高台畳付部分に使用による摩滅痕	E-230
196	〃 〃	調理具	鉢	捏ね鉢	—	15.3	—	—	〃	〃	〃		E-231
197	〃 〃	調度具	その他	筒型	—	—	16.6	9.4	鉄釉	鉄釉	〃		E-232
198	〃 SK 261	調理具	搥鉢	V類	8.5	25.4	—	10.5	〃	〃	〃	底部回転糸切痕、櫛目11本、1cm単位に4本	E-233
199	〃 SK 299	〃	鍋、釜	焙烙	7.9	31.7	—	—	ナデ	指押え・ケズリ	不明	内耳2ヶ所、櫛で穿穴	E-234
200	〃 〃	〃	搥鉢	VI類	14.9	35.7	—	12.7	鉄釉	鉄釉	瀬・美	底部回転糸切痕、櫛目12本、1cm単位に3本	E-235
201	〃 〃	供膳具	碗	平碗	—	12.6	—	—	灰釉	灰釉	〃	呉須絵、笹文か	E-236
202	〃 〃	貯蔵具	鉢	蓋物A	6.0	9.4	—	4.6	〃	〃	〃	口縁部外側釉剥ぎ取り	E-237
203	〃 〃	調度具	水指	水指	—	—	17.8	—	—	鉄釉	〃	灰釉流し掛け	E-238
204	〃 〃	その他	蓋	蓋A	1.8	8.7	—	—	ナデ	灰釉	不明	底部回転糸切痕	E-239

第63図 近世の遺物 (19) その他の土坑 (下面) ① (198・199は1:4, 他は1:3)

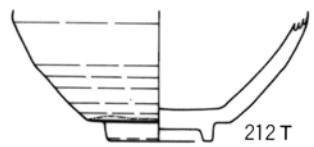
S K 210



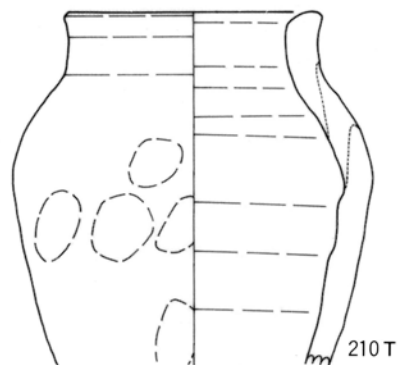
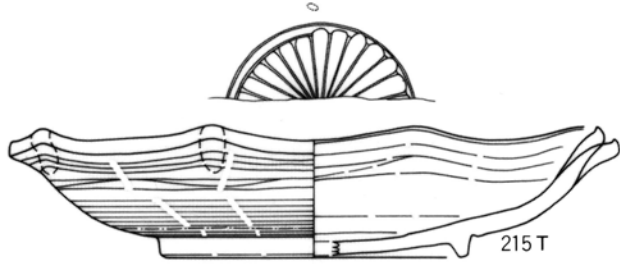
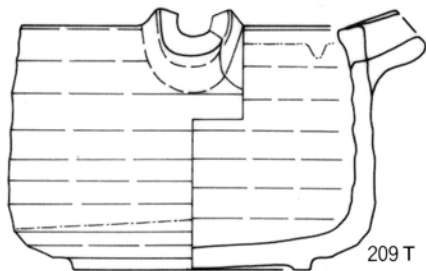
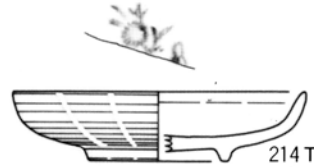
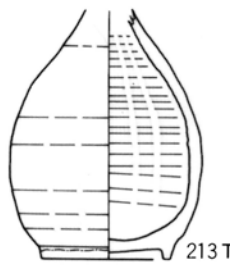
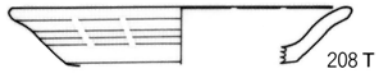
S K 211



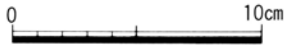
S K 220



S K 217



S K 219



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器 種			法 量 (cm)				釉 葉 ・ 調整等		産 地	備 考	登 録 番 号
			用 途	器 種	器 形	器 高	口 径	胴 径	底 径	内 面	外 面			
205	91D2	SK 210	供膳具	碗	丸碗	7.2	10.4	—	4.6	—	—	肥前	茶付、山本文、高台脇に鉄化粧、高台に砂藏者、1640—1650	E-240
206	〃	〃	〃	鉢	端反鉢	—	24.9	—	—	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	瀬・美		E-241
207	〃	SK 211	灯火具	皿	灯明皿	2.2	10.1	—	6.0	ナデ	ナデ	不明	底部回転糸切痕、口縁一部に油煙付着	E-242
208	〃	SK 217	〃	〃	〃	〃	—	13.9	—	灰釉	灰釉	瀬・美	口縁一部に油煙付着	E-243
209	〃	〃	調理具	鉢	片口	9.7	13.3	—	9.3	鉄化粧	鉄釉	〃	17世紀中	E-244
210	〃	〃	貯蔵具	壺	無蓋壺	—	—	14.3	—	ケズリ	指押え	常滑	焼き締め、外面に自然釉かかる	E-245
211	〃	SK 220	供膳具	碗	平碗	—	—	—	4.3	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵、柳文	E-246
212	〃	〃	〃	〃	腰折碗	—	—	—	4.2	〃	〃	〃	〃	E-247
213	〃	〃	貯蔵具	瓶	徳利 A	—	—	7.6	5.1	ナデ	〃	〃	〃	E-248
214	〃	〃	供膳具	皿	丸皿	2.7	11.5	—	5.5	灰釉	〃	〃	呉須絵・型紙摺絵、花樹文か	E-249
215	〃	〃	〃	鉢	稜花鉢	5.3	23.3	—	12.0	鉄釉	鉄釉	不明	押印・菊花文、見込み・高台にトチン痕	E-250
216	〃	SK 219	〃	皿	丸皿	2.1	12.0	—	6.6	長石釉	長石釉	瀬・美	〃	E-251
217	〃	〃	その他	蓋	蓋 A	2.5	9.3	—	5.0	ナデ	ナデ	不明	外面に自然釉かかる、回転糸切痕	E-252

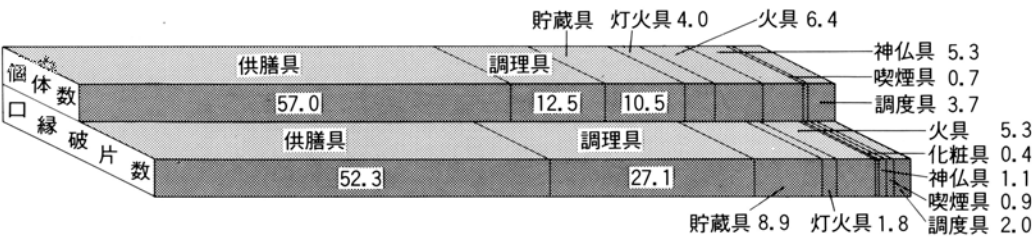
第64図 近世の遺物 (20) その他の土坑 (下面) ② (1:3)

その他の土坑（上面）合計

全ての調査区の上面で検出された土坑とピットから出土した遺物の合計で、出土した遺物は総破片数で 3,785点、接合前口縁破片数は 1,011点、個体数は 78.17個体で、ほぼ19世紀前葉～19世紀中葉と思われる遺構が多く、同時期の S D 002・S D 025とも、組成の比率や割合が数値の増減はあるもののよく似た値を示している。供膳具が 41.58個体・57.0％と多く、調理具が9.08個体・12.5％、貯蔵具が7.67個体・10.5％、灯火具が2.92個体・4.0％、火具が4.67個体・6.4％、化粧具が 0.00個体、神仏具が3.83個体・5.3％、喫煙具が0.50個体・0.7％、調度具が2.67個体・3.7％、蓋類が5.25個体となっており、全体の平均値（P33）と比較してみると、火具・神仏具・喫煙具の比率が上がっている他はよく似た数値を示している。

また、器種の組成では、供膳具で碗対皿が 3.77：1 となり、碗の占める割合が高くなる傾向がある。鉢の出土量が全体的に少ないことも、特色の1つとしてあげることができる。調理具では鍋・釜対播鉢が、2.85：1 となっており、さらにその比率が広がっている。

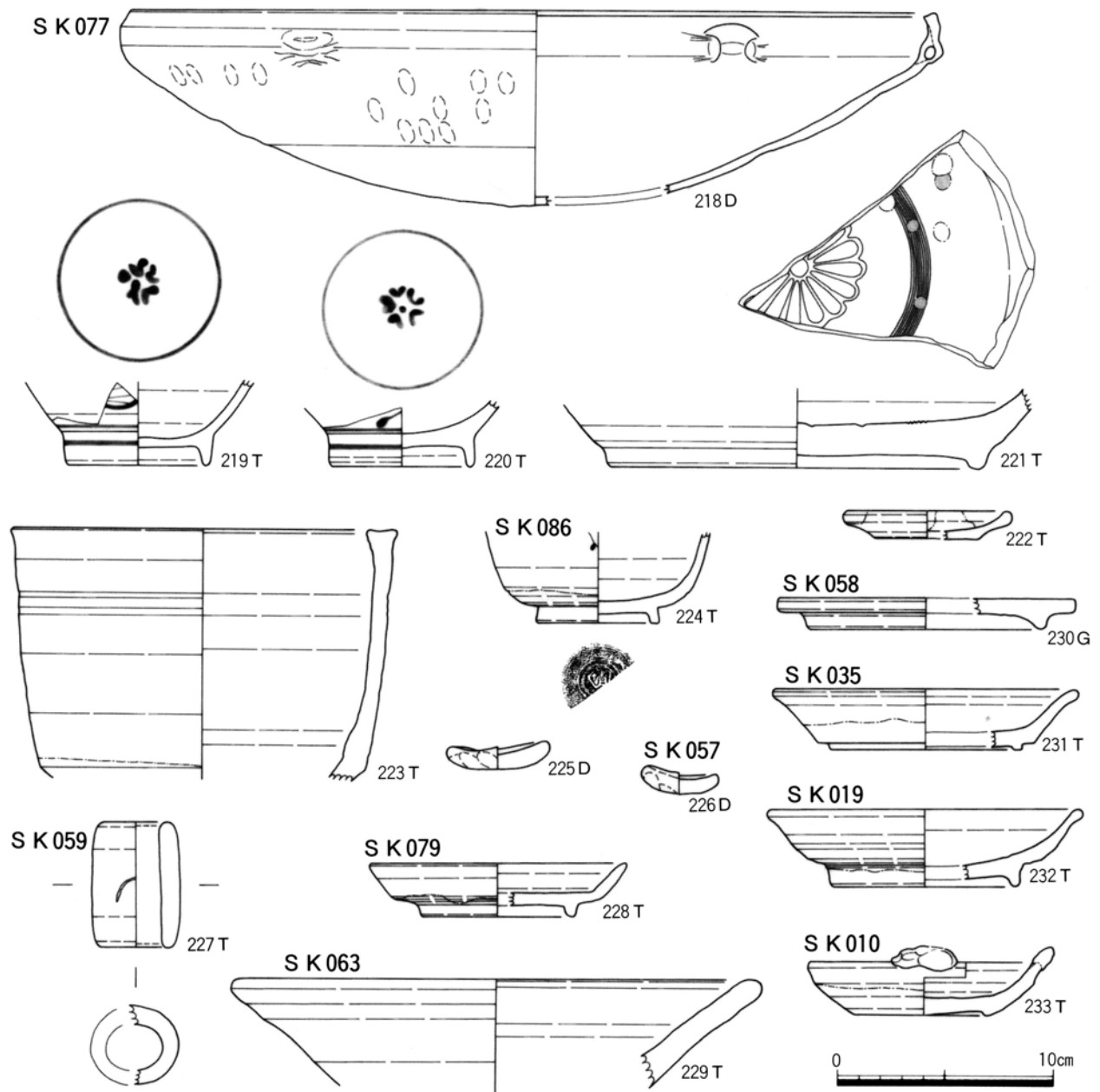
さらに、材質面においては、土師質製品の占める割合が 6.6％と全体の平均値（9.6％）よりも減少しているが、鍋・釜類と皿類が74.2％とその大半を占めている。これに対して、陶磁器類の占める割合は、陶器製品が49.3％とやや減少し、磁器製品が43.5％と全体の平均値（30.4％）を大きく上まっている。さらに、その他の材質である軟質陶器や瓦質の製品も 0.6％出土している。



第65図 その他の土坑（上面）合計陶磁器類の用途組成

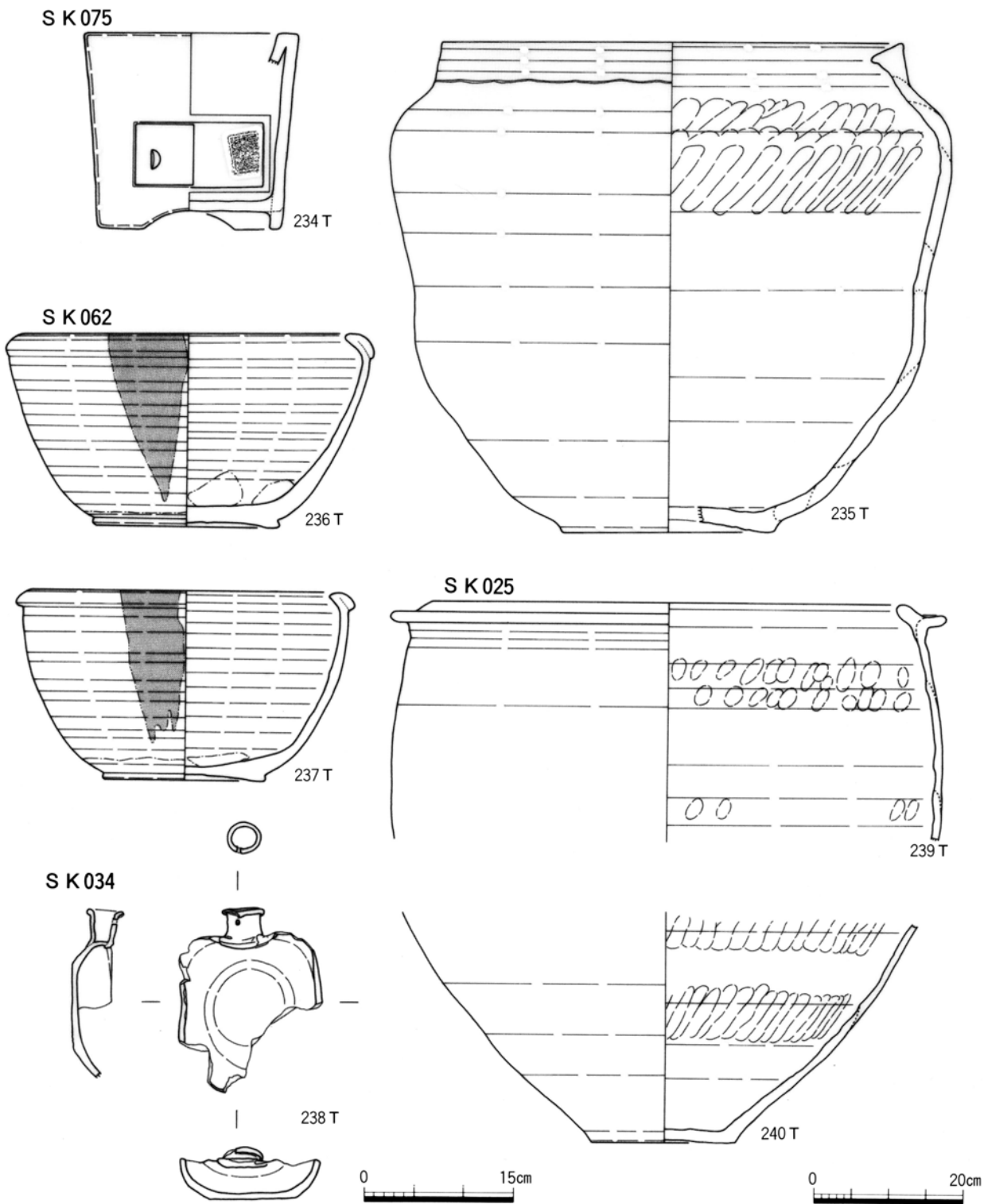
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		85	170		255	1	155	143		299		497	267		764
	小碗		17	90		107		18	27		45		32	42		74
	皿	23	19	54		96	15	61	46		122	43	149	62		254
	鉢		20	18		38		37	11		48		60	49		109
	その他		3			3		1			1		1	1		2
調理具	小計	23	144	332	0	499	16	272	227	0	515	43	739	421	0	1203
	鍋・釜	23	14		0	37	144	19		5	168	557	69		9	635
	鉢		31			31		47			47		117			117
	播鉢		13			13		38			38		152			152
	瓶		18	9		27		7	4		11		52	13		65
貯蔵具	その他		1			1		3			3		4			4
	小計	23	77	9	0	109	144	114	4	5	267	557	394	13	9	973
	瓶		25			25		4			4		164			164
	壺		7			7		7			7		58	1		59
	甕A		17			17		39			39		874			874
灯火具	甕B	1	34			35	1	26			27	2	123			125
	鉢		3	4		7		6	4		10		12	6		18
	その他		1			1		1			1		1			1
	小計	1	87	4	0	92	1	83	4	0	88	2	1232	7	0	1241
	灯火具		35			35	5	13			18	8	19			27
火具	火具		8	44		56	13	37		2	52	44	128		2	174
	化粧具		0			0		4			4		10	1		11
	神仏具		7	39		46		5	6		11		9	13		22
	喫煙具		1	5		6	1	8			9	1	15			16
	調度具		2	29	1	32	2	16	2		20	2	66	7		75
蓋	蓋		4	34	23	63	4	18	4	1	27	4	33	4	2	43
	合計		62	462	408	6	938	186	570	247	8	1011	661	2645	466	3785

第22表 その他の土坑（上面）合計陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 用途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
218	92B1 SK 077	調理具	鍋・釜	焙烙	8.9	36.7	—	—	—	指押え	不明	内耳3ヶ所、櫛で穿穴	E-253
219	〃 〃	供膳具	椀	広東椀	—	—	—	6.3	透明釉	透明釉	瀬・美	呉須絵、丸文か	E-254
220	〃 〃	〃	〃	〃	—	—	—	6.3	〃	〃	〃	呉須絵、団扇文か	E-255
221	〃 〃	〃	鉢	端反鉢	—	—	—	16.8	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	〃	黄瀬戸鉢、緑釉筆散し、櫛描きによる同心円 と菊花の押印。見込みにトチン痕	E-256
222	〃 〃	灯火具	皿	灯明皿	1.3	7.4	7.8	4.8	灰釉	—	〃	底部回転糸切痕	E-257
223	〃 〃	貯蔵具	甕B	半胴A	—	17.2	—	—	鉄釉	鉄釉	〃	口縁部にトチン痕	E-258
224	〃 SK 086	供膳具	椀	丸椀	—	—	—	5.5	灰釉	灰釉	関西か	呉須絵、高台内部に押印	E-259
225	〃 〃	〃	皿	その他	1.0	4.3	—	—	指押え・ナデ	指押え・ナデ	不明	非ロクロ成形	E-260
226	〃 SK 057	〃	〃	〃	1.4	3.0	—	—	—	指押え	〃	非ロクロ成形	E-261
227	〃 SK 059	その他	その他	その他	5.8	—	4.0	—	—	—	〃	土鉢、重さ40.7g	E-262
228	〃 SK 079	灯火具	皿	灯明皿	2.5	10.5	—	6.8	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みにトチン痕。高台より胎部にかけて焦 げた痕	E-263
229	〃 SK 063	火具	鉢	火桶	—	23.3	—	—	—	タタキ	常滑	—	E-264
230	〃 SK 058	その他	蓋	蓋G	1.5	13.4	—	10.5	指ナデ	ヘラ削り	不明	火消し壺の蓋、内面に煤付着	E-265
231	91D1 SK 035	供膳具	皿	稜皿	2.9	13.7	—	8.8	灰釉	灰釉	瀬・美	—	E-266
232	〃 SK 019	〃	〃	丸皿	3.6	14.0	—	8.3	〃	〃	〃	見込み・高台置付部分に重ね焼きの剝離痕	E-267
233	〃 SK 010	灯火具	皿	灯明皿	2.4	10.4	—	5.9	鉄釉	鉄釉	〃	口縁一部と外面に油煙付着	E-268

第66図 近世の遺物（21） その他の土坑（上面）①（1:3）



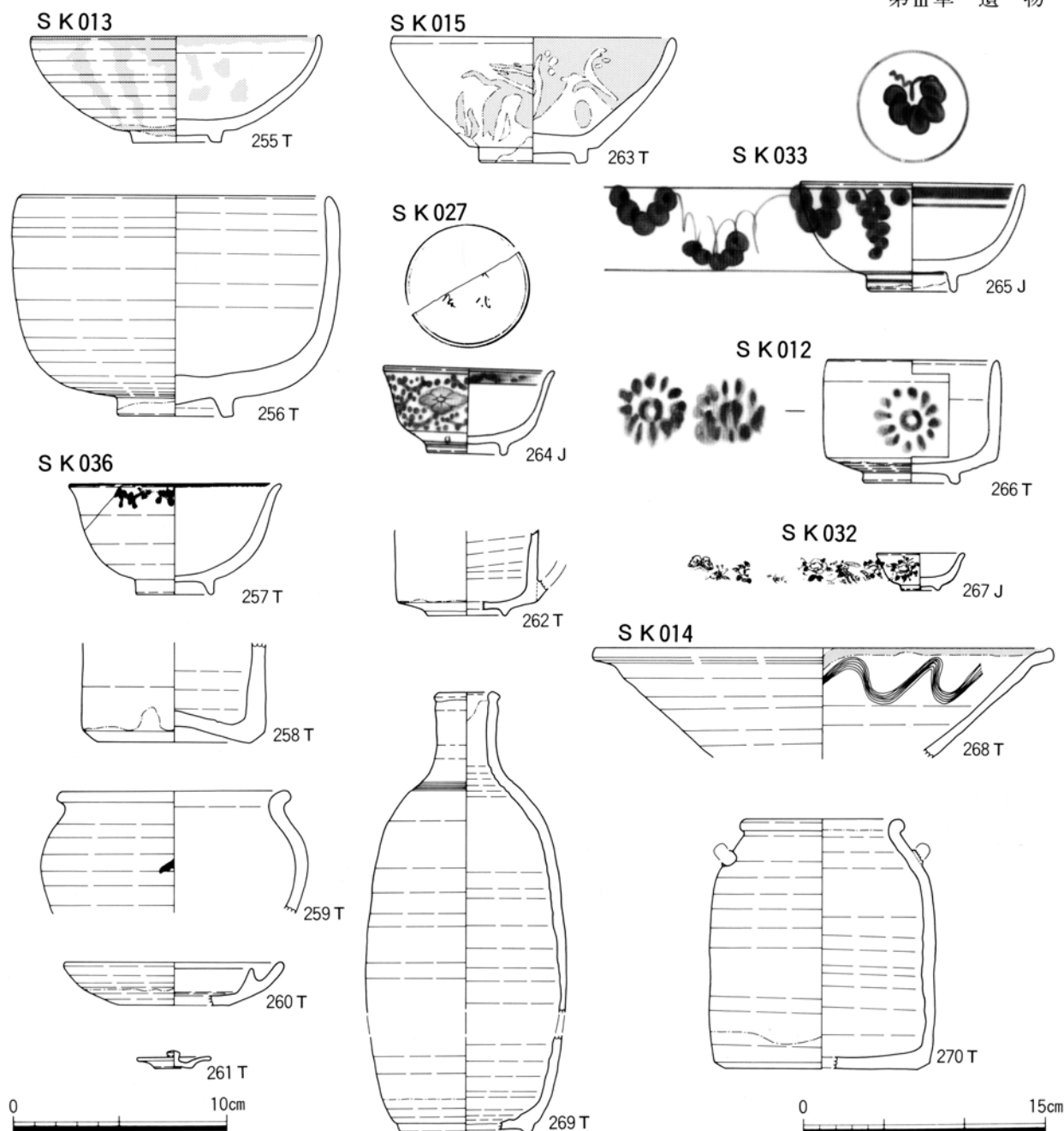
遺物 番号	調査地点	器 種			法 量 (cm)				釉 薬 ・ 調 整 等		産 地	備 考	登 録 番 号	
調査区	遺構	用 途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面				
234	92B2	SK 075	火具	鉢	こん炉A	—	—	—	—	—	不明	押印	E-269	
235	〃	〃	貯蔵具	甕A	Ⅱ類	49.4	46.4	—	21.8	指押え・ナデ	ナデ	常滑	焼き締め	E-270
236	〃	SK 062	調理具	鉢	捏ね鉢	19.4	32.9	36.4	17.9	灰釉	灰釉	瀬・美	銅緑釉流し掛け、見込みに釉剥ぎ取り	E-271
237	〃	〃	〃	〃	〃	19.0	31.0	33.8	15.9	〃	〃	〃	銅緑釉流し掛け、見込みに釉剥ぎ取り	E-272
238	91D1	SK 034	火具	その他	その他	5.2	—	—	—	鉄釉	鉄釉	不明	10代	E-273
239	〃	SK 025	貯蔵具	甕A	Ⅳ類	—	—	—	—	指押え・ナデ	ナデ	常滑	240と同一個体	E-274
240	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	19.4	〃	〃	〃	239と同一個体	E-275

第67図 近世の遺物 (22) その他の土坑 (上面) ② (234～238は1:6, 他は1:8)

S K 123



— 62 —



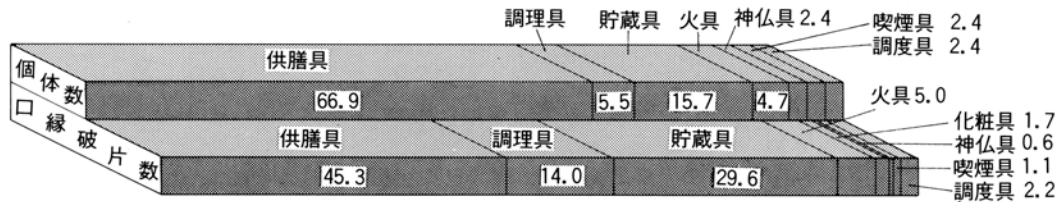
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 用途	器種	器形	法量 (cm)	釉薬・調整等	産地	備考	登録 番号
255	91D1 SK 013	供膳具	椀	平椀	器高 5.0 口径 13.2 胴径 — 底径 4.1	白泥+灰釉 白泥+灰釉	関西	白泥による刷毛目	E-290
256	〃 〃	〃	〃	丸椀	器高 10.3 口径 14.1 胴径 — 底径 5.3	灰釉 灰釉	瀬・美		E-291
257	〃 SK 036	〃	〃	端反椀	器高 5.2 口径 9.8 胴径 — 底径 3.6	〃 〃	〃	鉄絵, 口化粧	E-292
258	〃 〃	貯蔵具	瓶	その他	— — — 7.0	鉄釉 鉄釉	不明	底部鉄化粧	E-293
259	〃 〃	〃	壺	無蓋壺	— 10.4 — —	〃 〃	瀬・美		E-294
260	〃 〃	灯火具	皿	灯臺	器高 2.0 口径 10.1 胴径 — 底径 5.0	〃 〃	〃	内径7.2cm, 胎部に重ね焼きの剥離痕	E-295
261	〃 〃	その他	蓋	蓋A	器高 0.8 口径 3.4 胴径 — 底径 1.7	ナデ ナデ	不明	つまみ径0.6cm	E-296
262	〃 〃	調度具	餌鉢	餌鉢	— — — 3.6	〃 鉄釉	瀬・美		E-297
263	〃 SK 015	供膳具	椀	平椀	器高 4.9 口径 13.0 胴径 — 底径 5.0	白泥+灰釉 白泥+灰釉	関西	白泥による刷毛目	E-298
264	〃 SK 027	〃	小椀	端反椀	器高 4.1 口径 8.2 胴径 — 底径 3.9	— —	瀬・美	染付, 見込み「成化」製・花唐草文	E-299
265	〃 SK 033	〃	椀	丸椀	器高 5.3 口径 10.8 胴径 — 底径 4.1	— —	〃	染付, 葡萄文	E-300
266	〃 SK 012	〃	〃	筒椀	器高 6.0 口径 8.2 胴径 — 底径 4.5	灰釉 灰釉	〃	呉須絵, 梅花文	E-301
267	〃 SK 032	〃	小椀	端反椀	器高 1.7 口径 4.0 胴径 — 底径 1.7	— —	〃	染付 (刷絵), 草花文・蝶文	E-302
268	〃 SK 014	〃	鉢	端反鉢	— 28.2 — —	黄瀬戸釉 黄瀬戸釉	〃	黄瀬戸鉢, 緑釉筆散し, 18世紀末	E-303
269	〃 〃	貯蔵具	瓶	德利E	— 3.4 12.3 7.9	ナデ 灰釉	関西	白泥による刷毛目	E-304
270	〃 〃	〃	壺	蓋付壺	器高 15.5 口径 9.2 胴径 — 底径 11.9	〃 鉄釉	瀬・美	口縁上部に重ね焼きの剥離痕	E-305

第69図 近世の遺物 (24) その他の土坑 (上面) ④ (268~270は1:4, 他は1:3)

その他の遺構合計

全調査区で検出されたS X記号の遺構から出土した遺物の合計で、出土した遺物は破片数で 641点、口縁破片数は 183点あり、個体数は 11.83個体である。供膳具が7.08個体・66.9%、調理具が0.58個体・5.5%、貯蔵具が1.67個体・15.7%、火具が0.50個体・4.7%、化粧具が0.00個体、神仏具が0.25個体・2.4%、喫煙具が0.25個体・2.4%、調度具が0.25個体・2.4%、蓋類が1.25個体となっており、灯火具は破片のみが出土している。用途の組成は、ほぼ全体の平均値（P33）に近い値を読み取れるが、鍋・釜類は0.08個体と少なく、調理具は半減し、喫煙具が0.50個体と多くなっている。

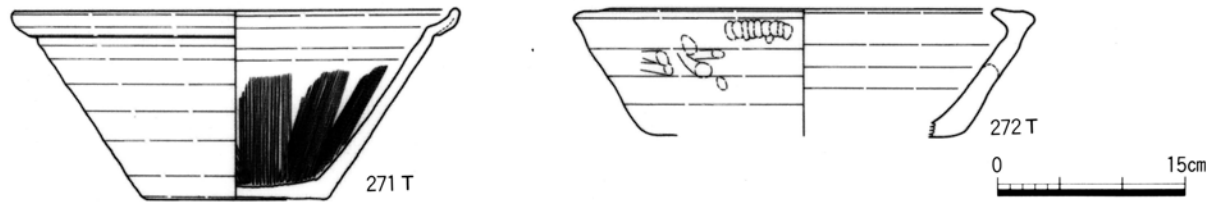
また、土師質製品と陶磁器類の割合は、それぞれ 4.2%・73.2%・22.5%となっており、土師質製品・磁器製品ともに比率が低く、陶器製品が多い。



第70図 その他の遺構合計陶磁器類の用途組成

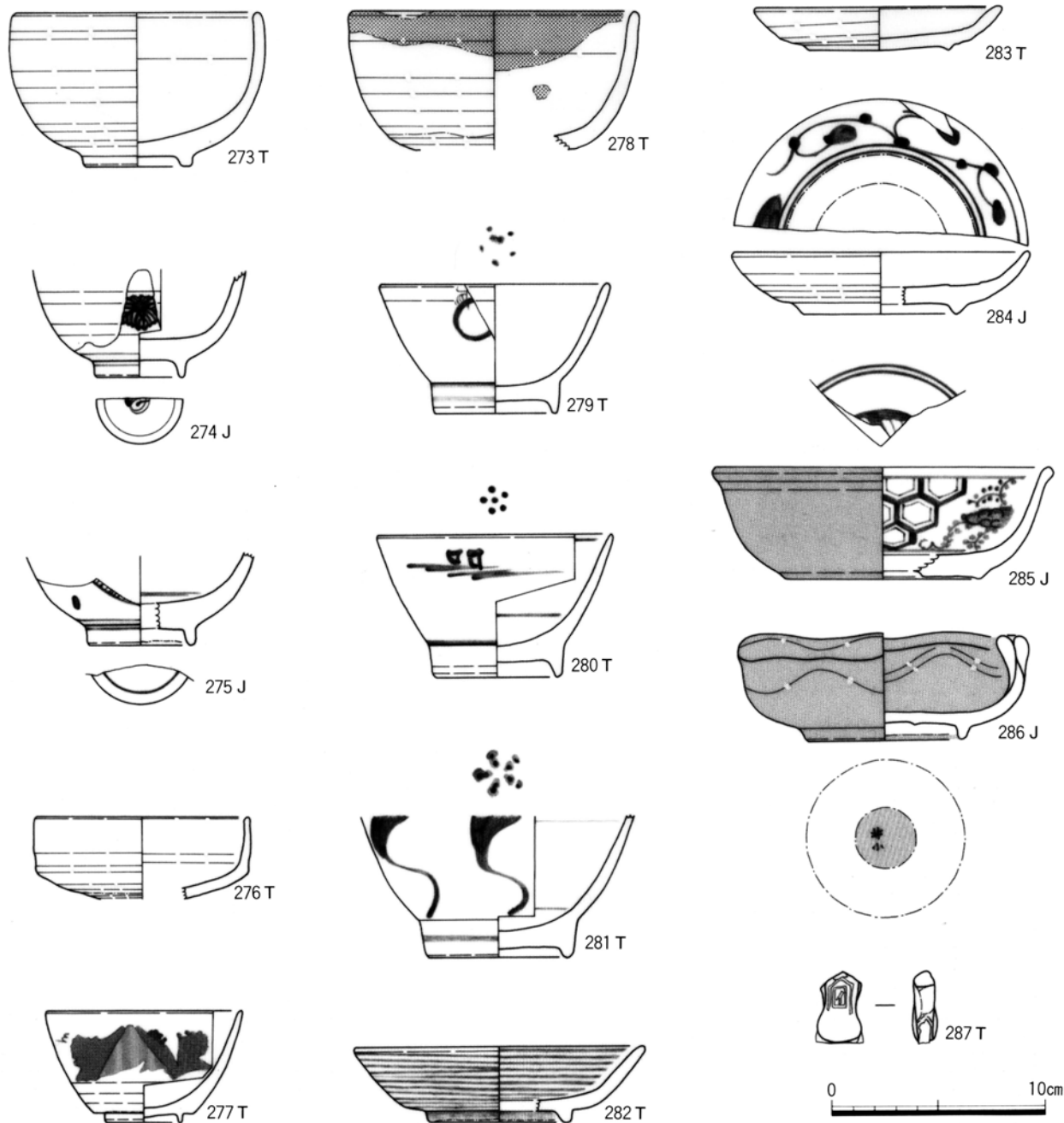
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	椀		32	9		41		30	13		43		81	38		119
	小椀		3	8		11		4	6		10		4	11		15
	皿	0	18	7		25	3	14	4		21	8	35	4		47
	鉢		0	8		8		3	4		7		5	4		9
	その他					0										
調理具	小計	0	53	32	0	85	3	51	27	0	81	8	125	57	0	190
	鍋・釜	0	1			1	6	1		1	8	27	5		1	33
	鉢		0			0		5			5		11			11
	播鉢		6			6		12			12		77			77
	瓶					0					0		1			1
貯蔵具	その他					0					0					0
	小計	0	7	0	0	7	6	18	0	1	25	27	94	0	1	122
	瓶		0			0		1			1		21			21
	壺		3			3		2			2	1	5			6
	甕A		14			14		39			39		189			189
灯火具	甕B		1			1		5			5	1	34			35
	鉢					0					0		7			7
	その他		2			2		6			6		6			6
	小計	0	20	0	0	20	0	53	0	0	53	2	262	0	0	264
	灯火具					0					0		3			3
化粧具	火具		4	2		6	2	7			9	11	21			32
	化粧具			0		0		3			3		6			6
	神仏具			3		3		1			1		1			1
	喫煙具			3		3		3			3		5			5
	調度具			3		3		4			4	1	12	1		14
蓋	蓋		2	13		15	1	3			4	1	3			4
	合計		6	104	32	0	142	12	143	27	183	50	532	58	1	641

第23表 その他の遺構合計陶磁器類集計表



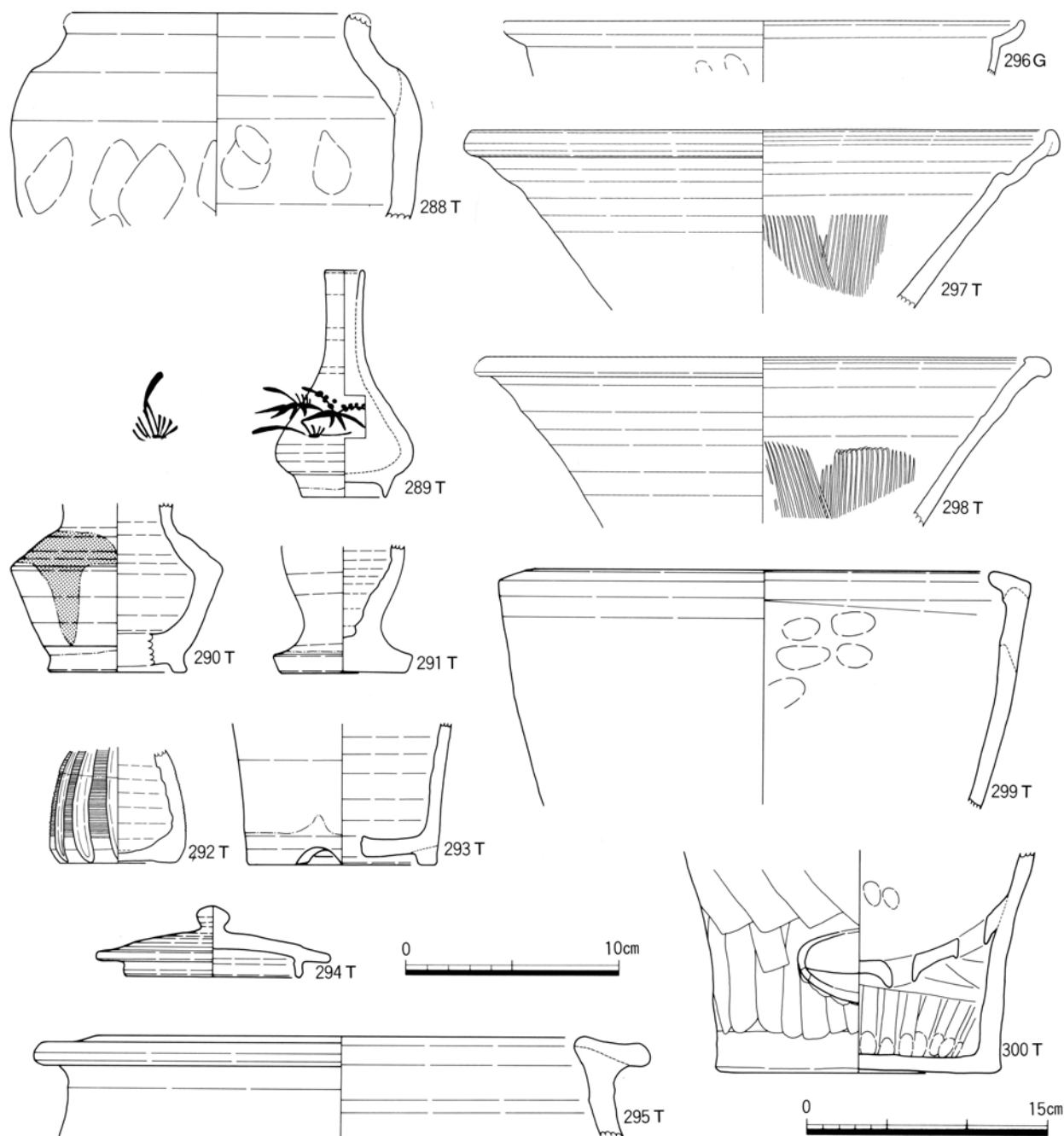
遺物番号	調査地点	器種	法量 (cm)	釉薬・調整等	産地	備考	登録番号
271	92B2 SX 202	調理具 播鉢 VI類	器高15.0 口径35.5 胴径14.4	鉄釉 鉄釉	瀬・美	横目数16本・1cmに4本、底部回転糸切痕、内面に使用による摩滅	E-306
272	ク	火具 鉢 火桶	10.2 30.6	ナデ 指押えナデ	常滑		E-307

第71図 近世の遺物 (25) その他の遺構① (S X 202) (1:6)



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 用途	器 種	器 形	法 量 (cm)	釉 葉・調整等	産 地	備 考	登 録 番 号
273	92B2 SX 201	供膳具	碗	丸碗	7.3 11.1 — 4.8	灰釉 灰釉	瀬・美	高台量付部分にトチン痕、重ね焼きの剥離痕	E-308
274	〃 〃	〃	〃	〃	— — — 4.0	— —	肥前	染付、亀文（コンニャク印）、高台内に高 福、高台に砂融着、18世紀前半—中	E-309
275	〃 〃	〃	〃	〃	— — — 4.7	— —	〃	染付、丸文、高台に砂融着、18世紀後半	E-310
276	〃 〃	〃	〃	腰折碗	— 9.8 — —	灰釉 灰釉	瀬・美		E-311
277	〃 〃	〃	〃	平碗	5.2 9.1 — 3.6	〃 〃	信楽	色絵（金・銀・朱）、17世紀末か	E-312
278	〃 〃	〃	〃	丸碗	— 13.1 — —	鉄釉 鉄釉	瀬・美	灰釉流し掛け	E-313
279	〃 〃	〃	〃	広東碗	6.0 10.5 — 5.6	灰釉 灰釉	〃	鉄須絵・鉄絵、五弁花（コンニャク印）、宝 珠文	E-314
280	〃 〃	〃	〃	〃	6.6 10.8 — 5.6	〃 〃	〃	呉須絵、五弁花（コンニャク印）	E-315
281	〃 〃	〃	〃	〃	— — — 6.4	〃 〃	〃	呉須絵、五弁花（コンニャク印）・ねじり花文	E-316
282	〃 〃	〃	皿	丸皿	3.5 13.2 — 6.4	白泥+灰釉 白泥+灰釉	〃	白泥による刷毛目	E-317
283	〃 〃	〃	〃	〃	2.0 11.5 — 6.6	長石釉 長石釉	〃	見込みにトチン痕	E-318
284	〃 〃	〃	〃	〃	2.9 13.7 — 7.2	— —	肥前	染付、蔓草文、見込み蛇ノ目軸刺ぎ、重ね焼 きの剥離痕（径約7.2cm）、18世紀後半	E-319
285	〃 〃	〃	鉢	その他	5.2 15.5 — 9.0	— 青磁	〃	青磁染付、亀甲・梅樹文・三ツ銀杏文、蛇ノ 目凹形高台、18世紀後半	E-320
286	〃 〃	〃	〃	〃	4.8 12.8 — 7.3	青磁 〃	〃	蛇ノ目凹形高台、焼き継ぎ痕、高台内に朱書 き「井小」か、18世紀後半	E-321
287	〃 〃	調理具	その他	その他	— — — —	— 鉄釉	瀬・美	押印・卸皿の柄か	E-322

第72図 近世の遺物（26） その他の遺構②（S X 201）（1:3）



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
288	92B2	SX 201	貯蔵具	壺	無蓋壺	—	13.2	—	—	指押え・ナデ	指押え・ナデ	常滑		E-323
289	〃	〃	神仏具	瓶	神酒徳利A	10.6	1.8	6.4	3.9	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵、松竹梅文	E-324
290	〃	〃	調度具	花生	壺型	—	—	9.7	6.3	鉄釉	鉄釉	〃	灰釉流し掛け	E-325
291	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	5.6	ケズリ	灰釉	〃	底部回転糸切痕、底部使用による摩滅痕	E-326
292	〃	〃	喫煙具	灰落し	—	—	—	—	5.4	ナデ	灰釉+鉄釉	〃	底部回転糸切痕、へらによる筋彫り、口縁部 敲打痕	E-327
293	〃	〃	調度具	植木鉢	植木鉢	—	—	—	8.6	〃	灰釉	〃	高台に切り込み、高台置付部分にトチン痕	E-328
294	〃	〃	その他	蓋	蓋D	3.3	10.7	—	8.1	〃	鉄釉	〃	つまみ径1.5cm、灰釉流し掛けか	E-329
295	〃	〃	貯蔵具	甕A	V類	—	29.8	—	—	〃	指押え・ナデ	常滑		E-330
296	〃	〃	調理具	鍋、釜	鍋	—	32.2	—	—	〃	指押え	不明	外面煤付着	E-331
297	〃	〃	〃	播鉢	V類	—	36.2	—	—	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数15本、1cmに4本	E-332
298	〃	〃	〃	〃	〃	—	33.8	—	—	〃	〃	〃	櫛目数21本、1cmに3本	E-333
299	〃	〃	火具	鉢	火鉢	—	28.8	—	—	指押え・ナデ	ナデ	常滑	内面煤付着	E-334
300	〃	〃	〃	〃	蚊いぶし	—	—	—	17.5	指押え	ケズリ	〃	内面煤付着	E-335

第73図 近世の遺物 (27) その他の遺構③ (S X 201) (294~300は1:4, 他は1:3)

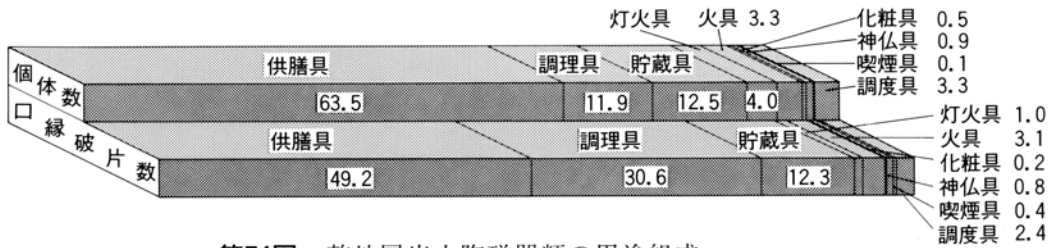
整地層の出土遺物合計

91D区と92B区にみられた整地層から出土した遺物の合計で、出土した遺物は総破片数は10,701点、接合前口縁破片数は 2,899点、個体数は181.08個体であり、全出土遺物の3分の1～4分の1を占めている。供膳具は107.83個体・63.5%、調理具は 20.17個体・11.9%、貯蔵具は 21.25個体・12.5%、灯火具は6.83個体・ 4.0%、火具は5.58個体・ 3.3%、化粧具は0.83個体・ 0.5%、神仏具は1.58個体・ 0.9%、喫煙具は0.17個体・ 0.1%、調度具は5.58個体・ 3.3%、他に蓋類が 11.25個体となっている。数値の増減はあるが、ほぼ全体の組成の比率や割合に近い数値を示している。

また、器種の組成では、供膳具で碗対皿が1.39：1と全体の比率よりやや低く、土師質の皿を灯火具に含めると1.70：1となり、やや平均値に近づく。さらに、皿対鉢は2.87：1となり、全体の比率（3.90：1）よりも鉢の出土量の増加が目立っている。調理具においては、搗鉢の占める割合が鍋・釜類とほぼ同等となっており、多くの搗鉢が整地の際に一括投棄されたものと考えられる。

材質の面から見てみると、土師質製品が 9.1%、陶磁器類では陶器製品が65.2%、磁器製品が25.3%、その他の材質とした軟質陶器や瓦質の製品が 0.5%となっており、多少の増減はあるが全体の平均値（P33）によく似た値を示している。

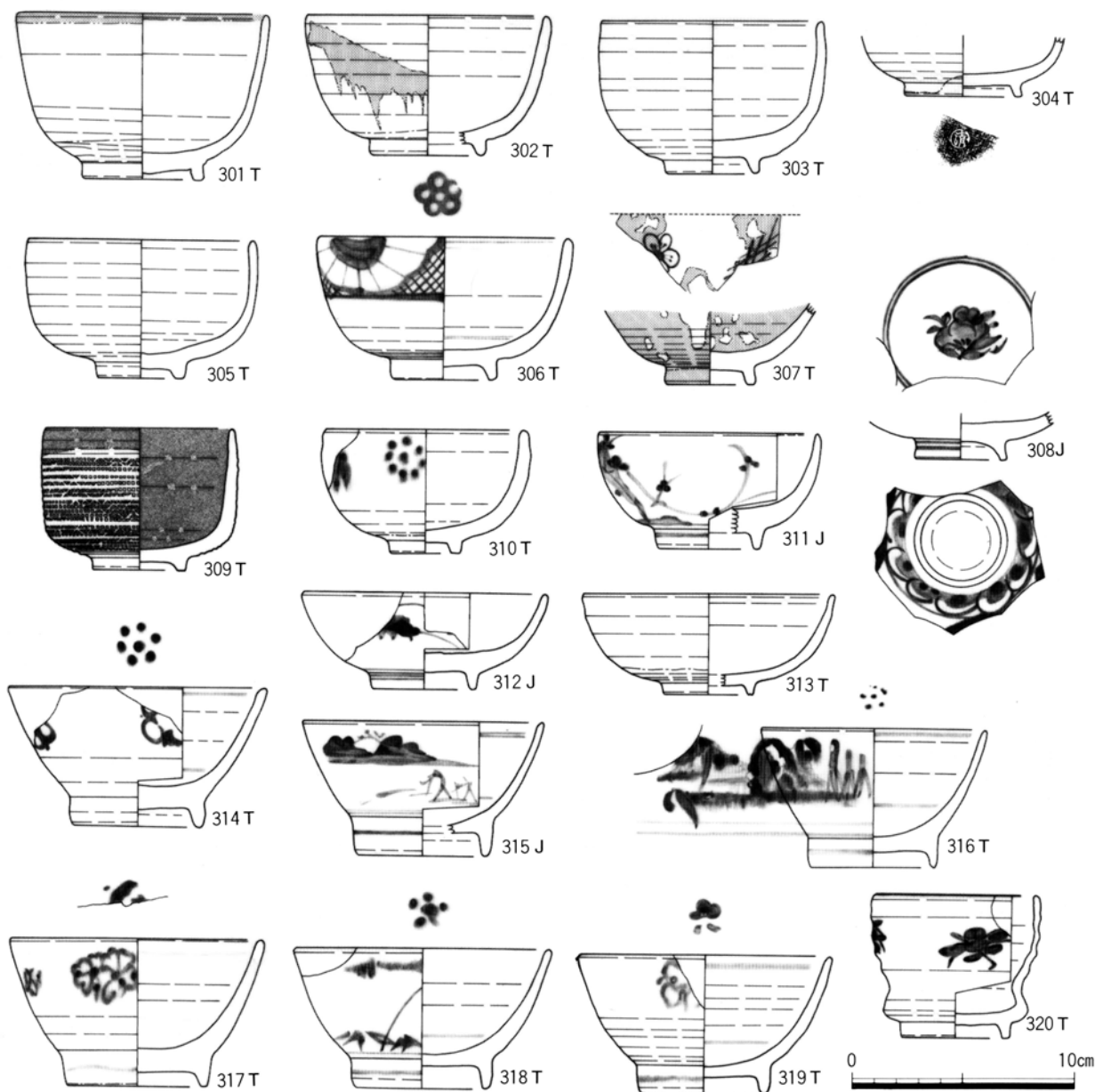
出土遺物から整地層の時期については、一部古いものも含まれているとはいえ、ほぼ18世紀末～19世紀前葉と想定される。従って、この時期に、大規模な整地事業を伴う人為的造成が行われたものと考えられる。



第74図 整地層出土陶磁器類の用途組成

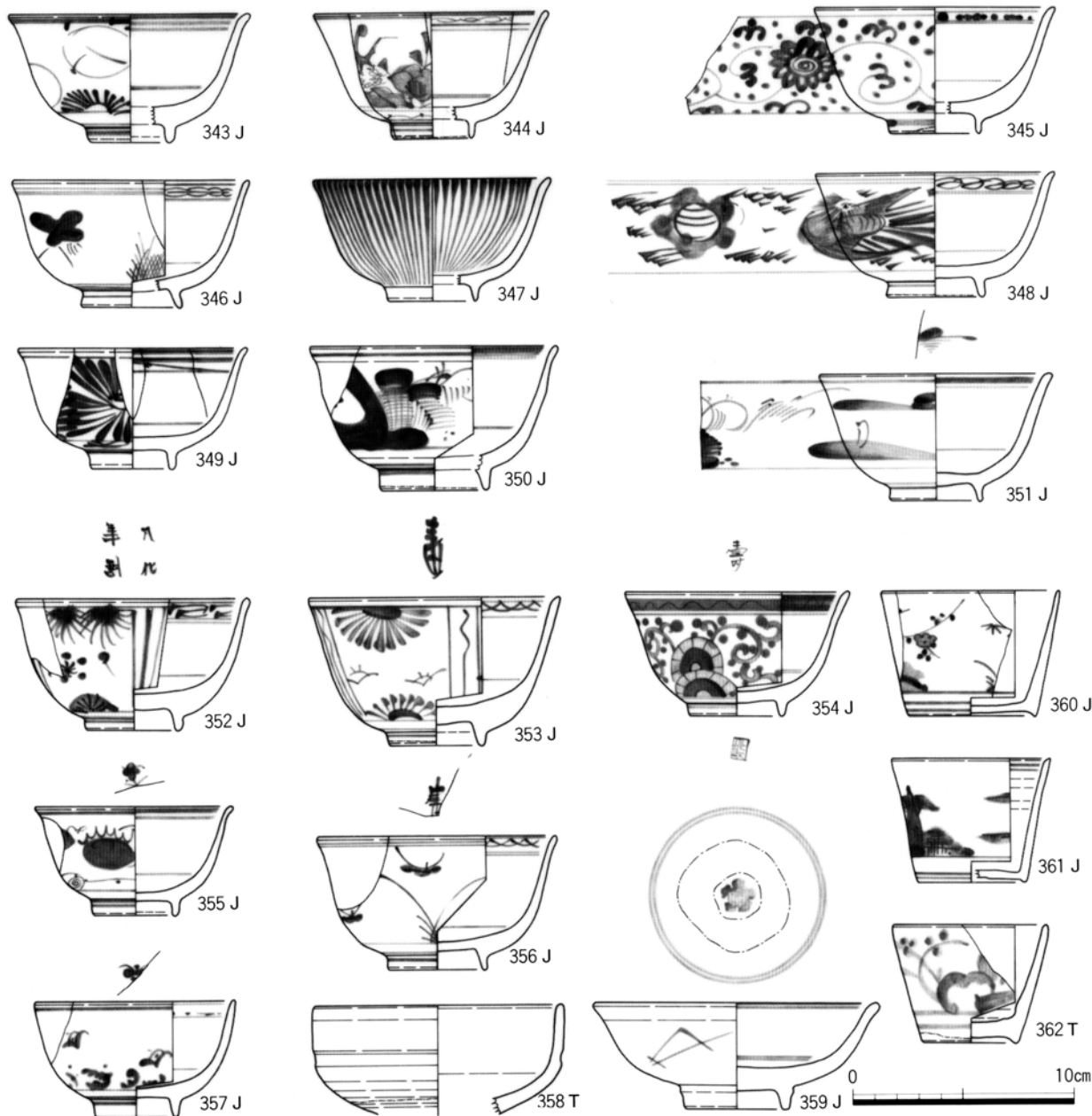
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		291	268		559		467	292		759		1443	575	2	2020
	小碗		33	64	0	97		30	57	1	88		68	489	1	558
	皿	94	276	103	0	473	38	320	85	1	444	220	585	154	2	961
	鉢		120	38	7	165		83	14	6	103		272	35	16	323
	その他					0					0		1			1
調理具	小計	94	720	473	7	1294	38	900	448	8	1394	220	2369	1253	21	3863
	鍋・釜	53	23		3	79	385	24		8	417	1374	115		20	1509
	鉢		56			56		90			90		234			234
	搗鉢		76			76		340			340		691			691
	瓶		26			26		17			17		54			54
貯蔵具	その他		5			5		3			3		12	1		13
	小計	53	186	0	3	242	385	474	0	8	867	1374	1106	1	20	2501
	瓶		97			97		14			14		342	2		344
	壺		22			22		13			13	1	90			91
	甕A		58			58		201			201		2729			2729
灯火具	甕B		46			46		97			97		410			410
	鉢		11	19		30		11	5		16		27	9		36
	その他		2	0		2		7	1		8		11	1		12
	小計	0	236	19	0	255	0	343	6	0	349	1	3609	12	0	3622
	灯火具	5	63	14		82	2	26	1		29	13	53	2		68
火具	火具	30	37	0		67	42	45	1		88	73	194	1	1	269
	化粧具		2	8		10		4	1		5		10	4		14
	神仏具		15	4		19		17	7		24		43	28		71
	喫煙具	0	2			2	1	9			10	1	19	4		24
	調度具	7	47	13		67	3	60	6		69	11	151	15		177
蓋	蓋	9	108	18		135	9	41	14		64	9	63	20		92
	合計	198	1416	549	10	2173	480	1919	484	16	2899	1702	7617	1340	42	10701

第24表 整地層出土陶磁器類集計表



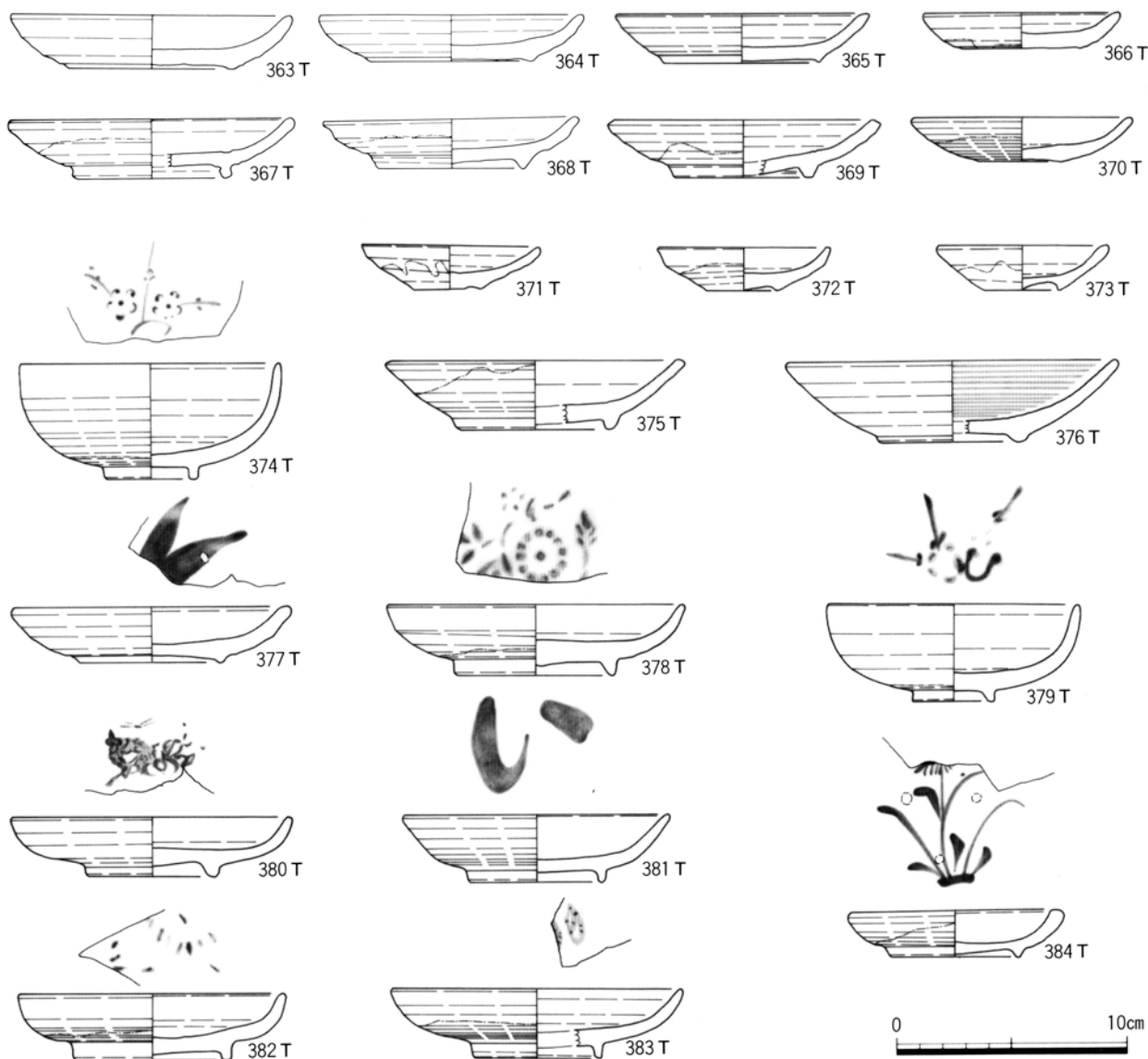
遺物 番号	調査地点		器 種			法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登 録 番 号
	調査区	遺構	用 途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
301	92B2	整地層	供膳具	椀	丸椀	7.5	11.0	—	5.2	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部灰釉, 高台鉄化粧	E-336
302	〃	〃	〃	〃	〃	6.3	10.7	—	4.9	〃	〃	〃	灰釉流し掛け	E-337
303	〃	〃	〃	〃	〃	6.9	9.8	—	4.7	灰釉	灰釉	〃	〃	E-338
304	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	5.1	〃	〃	関西か	高台内に押印	E-339
305	91D2	〃	〃	〃	〃	6.2	10.0	—	3.8	〃	〃	瀬・美	〃	E-340
306	92B2	〃	〃	〃	〃	6.4	11.0	—	4.3	〃	〃	〃	呉須絵, 菊花散し文か	E-341
307	91D2	〃	〃	〃	〃	—	—	—	3.9	白泥+透明釉	白泥+透明釉	関西	鉄絵, 梅文	E-342
308	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	4.0	—	—	肥前	染付, 草花文, 18世紀後半	E-343
309	〃	〃	〃	〃	筒椀	6.4	8.5	—	4.1	鉄釉	鉄釉+灰釉	瀬・美	鎧茶椀, 高台にトチン痕	E-344
310	〃	〃	〃	〃	丸椀	5.6	8.9	—	3.0	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 梅花文	E-345
311	〃	〃	〃	〃	〃	5.2	9.8	—	4.5	—	—	肥前	染付, 岩に梅花文, 18世紀後半	E-346
312	〃	〃	〃	〃	〃	4.3	10.8	—	4.5	—	—	〃	染付, 海老文か, 見込み蛇ノ目軸刺ぎ, 高台砂藏着, 18世紀中—末	E-347
313	〃	〃	〃	〃	〃	4.5	11.1	—	3.8	灰釉	灰釉	瀬・美	〃	E-348
314	〃	〃	〃	〃	広東椀	6.7	11.4	—	5.6	〃	〃	〃	呉須絵, 見込み五弁花(コンニャク印)・梅花文	E-349
315	〃	〃	〃	〃	〃	6.0	10.7	—	5.8	—	—	〃	染付, 山水文か, 19世紀前半	E-350
316	〃	〃	〃	〃	〃	6.2	10.0	—	5.5	灰釉	灰釉	〃	呉須絵, 見込み五弁花(コンニャク印)・山水文, 雲に飛鳥文	E-351
317	92B2	〃	〃	〃	〃	6.6	11.1	—	5.8	〃	〃	〃	呉須絵, 見込み五弁花(コンニャク印)・花文	E-352
318	91D2	〃	〃	〃	〃	6.2	11.4	—	5.7	〃	〃	〃	呉須絵, 見込み五弁花(コンニャク印)・竹笹文	E-353
319	〃	〃	〃	〃	〃	6.2	11.1	—	5.4	〃	〃	〃	呉須絵, 見込み五弁花(コンニャク印)・梅花文	E-354
320	〃	〃	〃	小椀	その他	6.4	7.2	—	4.8	長石釉	長石釉	〃	鉄絵, 口化粧	E-355

第75図 近世の遺物 (28) 整地層① (1:3)



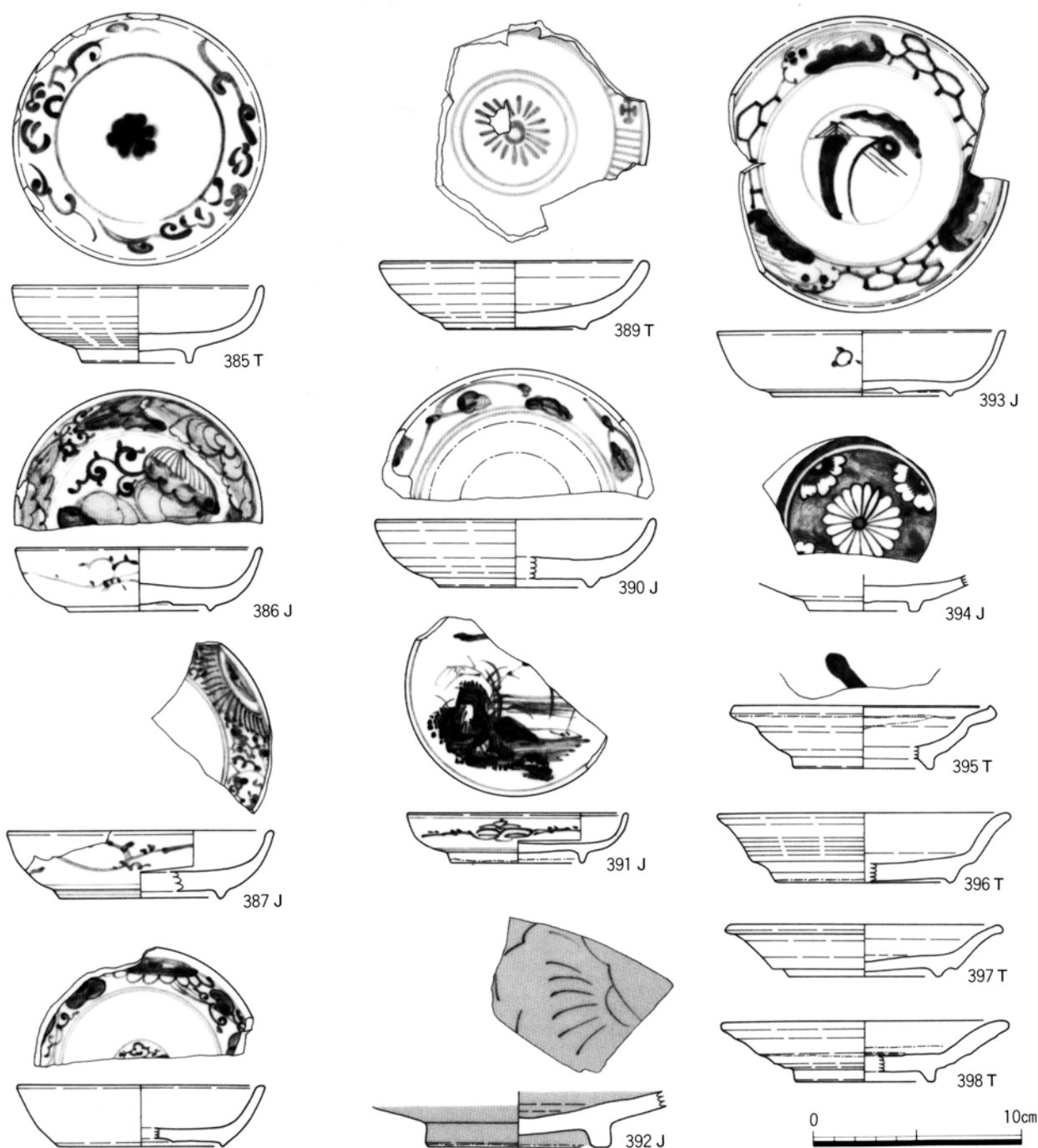
遺物 番号	調査地点 調査区	遺構 遺構	器 用途	種 器種	形 器形	法 器高	量 口径	(cm) 胴径	調整等 底径	釉薬・調整等 内面	調整等 外面	産地	備考	登録 番号
343	91D2	整地層	供膳具	碗	端反碗	5.8	10.7	—	3.4	—	—	瀬・美	染付, 花文・丸文	E-378
344	〃	〃	〃	〃	〃	5.7	10.4	—	3.4	—	—	〃	陶胎染付?, 草花文・唐草文	E-379
345	〃	〃	〃	〃	〃	5.7	10.8	—	4.0	—	—	〃	染付, 花唐草文	E-380
346	〃	〃	〃	〃	〃	5.8	10.5	—	4.4	—	—	〃	染付, 草文・蝶文	E-381
347	〃	〃	〃	〃	〃	5.5	10.5	—	3.8	—	—	〃	染付, 麦藁手, 焼き継ぎ痕	E-382
348	〃	〃	〃	〃	〃	5.6	10.7	—	4.4	—	—	九谷か	染付, 宝珠・鳳凰文, 見込みに「壽」	E-383
349	〃	〃	〃	〃	〃	5.5	10.2	—	3.7	—	—	瀬・美	染付, 花文, 見込みに変形文字	E-384
350	〃	〃	〃	〃	〃	6.5	11.0	—	4.8	—	—	〃	染付, 山水文	E-385
351	〃	〃	〃	〃	〃	5.7	10.4	—	4.0	—	—	〃	染付, 草花文, 岩に波濤文	E-386
352	〃	〃	〃	〃	〃	6.9	10.2	—	4.1	—	—	肥前か	染付, 松竹梅文・見込みに「大化年製」	E-387
353	〃	〃	〃	〃	〃	6.6	11.2	—	4.2	—	—	瀬・美	染付, 菊花・草花文・見込みに「壽」	E-388
354	〃	〃	〃	〃	〃	5.5	9.9	—	4.2	—	—	〃	染付, 唐草文?, 見込みに「壽」	E-389
355	〃	〃	〃	〃	〃	4.9	8.7	—	3.7	—	—	〃	染付, 宝珠文・草花文	E-390
356	〃	〃	〃	〃	〃	6.1	10.6	—	4.4	—	—	〃	染付, 草文・蝶文・見込みに変形「壽」	E-391
357	〃	〃	〃	〃	丸碗	5.2	8.9	—	3.8	—	—	〃	染付	E-392
358	〃	〃	〃	〃	腰折碗	—	11.0	—	—	灰釉	灰釉	〃	〃	E-393
359	〃	〃	〃	〃	端反碗	4.8	12.6	—	4.6	—	—	肥前	染付, 五弁花(コシニヤク印)・折れ松葉, 見込みに蛇ノ目細刺ぎ, 高台部無蓋, 18世紀後半	E-394
360	〃	〃	〃	小碗	そば猪口	5.6	8.0	—	5.8	—	—	〃	染付, 松竹梅文, 18世紀前半~中	E-395
361	〃	〃	〃	〃	〃	5.6	7.1	—	4.8	—	—	肥前系	染付, 山水文, 蛇ノ目凹形高台	E-396
362	〃	〃	〃	〃	〃	5.3	6.8	—	4.2	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵, 岩に梅樹文	E-397

第77図 近世の遺物 (30) 整地層③ (1:3)



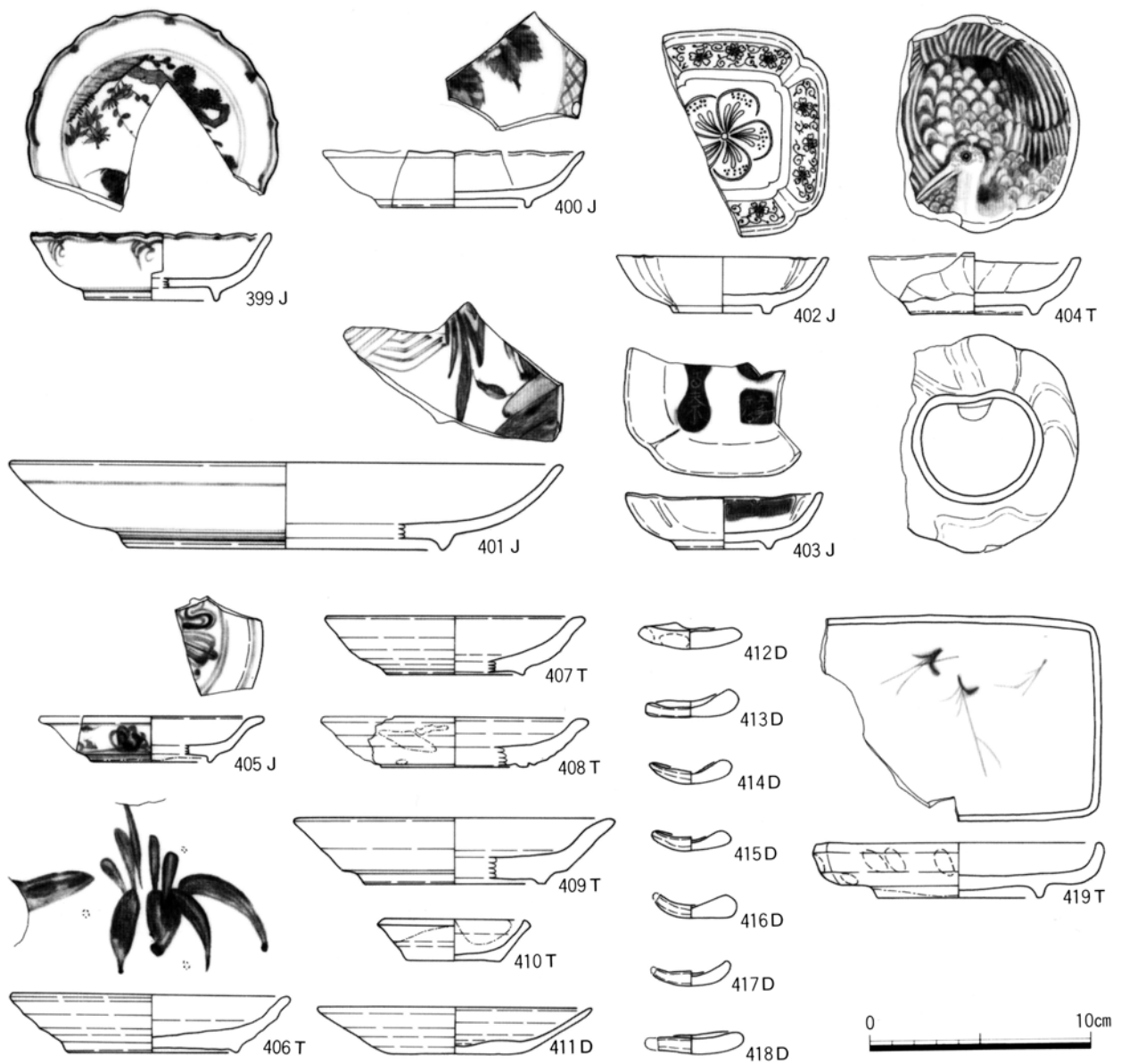
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 種			法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登録 番号	
		用 途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面				
363	91D2	整地層	供膳具	皿	丸皿	2.4	12.0	—	7.2	長石釉	長石釉	瀬・美	見込み・高台内部にトチン痕	E-398
364	92B2	〃	〃	〃	〃	2.1	11.1	—	7.0	〃	〃	〃	高台畳付部分に重ね焼きの剝離痕	E-399
365	〃	〃	〃	〃	〃	2.2	10.6	—	6.6	灰釉	灰釉	〃	見込みと高台内にトチン痕、重ね焼きの剝離痕	E-400
366	〃	〃	〃	〃	〃	1.6	9.4	—	5.1	長石釉	長石釉	〃	〃	E-401
367	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	12.2	—	6.3	灰釉	灰釉	〃	見込み・高台畳付部分に重ね焼きの剝離痕 (径約7.6cm)	E-402
368	91D2	〃	〃	〃	〃	2.1	10.3	—	6.2	〃	〃	〃	見込み・高台部分に重ね焼きの剝離痕 (径約 6.2cm)	E-403
369	92B2	〃	〃	〃	〃	2.5	11.2	—	5.8	〃	〃	〃	見込み・高台畳付部分に重ね焼きの剝離痕 (径約6.2cm)	E-404
370	91D2	〃	〃	〃	〃	1.9	9.4	—	3.7	〃	〃	〃	見込みにトチン痕	E-405
371	〃	〃	〃	〃	〃	1.9	7.6	—	2.8	〃	〃	〃	高台部分に重ね焼きの剝離痕	E-406
372	〃	〃	〃	〃	〃	1.9	7.3	—	3.1	〃	〃	〃	碁笥底	E-407
373	〃	〃	〃	〃	〃	2.0	7.2	—	3.3	〃	〃	〃	碁笥底	E-408
374	〃	〃	〃	〃	〃	5.0	11.1	—	4.0	〃	〃	〃	呉須絵・鉄絵、梅樹文	E-409
375	〃	〃	〃	〃	〃	3.0	12.4	—	6.3	〃	〃	〃	見込み・高台部分に重ね焼きの剝離痕	E-410
376	〃	〃	〃	〃	〃	3.5	14.1	—	6.1	白泥+灰釉	〃	〃	刷毛目文、見込みにトチン痕	E-411
377	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	11.7	—	6.2	長石釉	長石釉	〃	鉄絵・器文、見込み・高台内にトチン痕、高 台畳付部分に剝離痕	E-412
378	〃	〃	〃	〃	〃	3.1	12.7	—	6.6	灰釉	灰釉	〃	鉄絵・摺絵、草花文、見込み・高台部分にト チン痕	E-413
379	〃	〃	〃	〃	〃	4.2	10.8	—	3.5	〃	〃	〃	呉須絵・鉄絵、梅樹文	E-414
380	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	11.9	—	5.4	〃	〃	〃	呉須絵	E-415
381	〃	〃	〃	〃	〃	2.9	11.3	—	5.7	〃	〃	〃	呉須絵、「い」	E-416
382	〃	〃	〃	〃	〃	2.9	11.3	—	6.4	〃	〃	〃	鉄絵・摺絵、梅花文か	E-417
383	92B2	〃	〃	〃	〃	3.0	12.4	—	5.4	〃	〃	〃	鉄絵	E-418
384	91D2	〃	〃	〃	〃	2.0	8.9	—	5.5	〃	〃	〃	呉須絵、草花文	E-419

第78図 近世の遺物 (31) 整地層④ (1:3)



遺物 番号	調査地点		器 種			法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登 録 番号
	調査区	遺構	用 途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
385	91D2	整地層	灯火具	皿	灯明皿	3.7	11.8	—	5.1	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵，唐草文，口縁部油煙付着	E-420
386	〃	〃	供膳具	皿	丸皿	3.1	11.7	—	6.7	—	—	肥前か	染付，牡丹唐草文，蛇ノ目凹形高台，19世紀代	E-421
387	〃	〃	〃	〃	〃	3.2	12.4	—	7.7	—	—	肥前	染付，牡丹唐草文・唐草文・高台内に一重圈線， 漆喰多痕（断面に漆付着），18世紀中～末	E-422
388	〃	〃	〃	〃	〃	2.9	11.7	—	7.8	—	—	瀬・美	染付，蛇ノ目凹形高台，19世紀中	E-423
389	92B2	〃	〃	〃	〃	3.3	12.5	—	6.5	灰釉	灰釉	〃	鉄絵	E-424
390	91D2	〃	〃	〃	〃	3.3	13.2	—	7.3	—	—	肥前	染付，草花文，見込み蛇ノ目軸刺ぎ，18世紀 後半	E-425
391	〃	〃	〃	〃	〃	2.4	10.5	—	6.3	—	—	瀬・美	染付，山水文・花唐草文，19世紀前半	E-426
392	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	8.5	青磁	青磁	肥前	青磁大皿，陰刻，1630～1640	E-427
393	〃	〃	〃	〃	〃	3.2	13.7	—	8.4	—	—	肥前系	染付，山水文か，蛇ノ目凹形高台，19世紀代	E-428
394	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	5.1	—	—	肥前	染付，菊花文，高台砂融着，1610～1630	E-429
395	92B2	〃	〃	〃	折縁皿	3.0	12.3	—	6.6	灰釉	指ナデ	瀬・美	鉄絵	E-430
396	91D2	〃	〃	〃	稜皿	3.3	13.8	—	8.2	〃	灰釉	〃	見込みにトチン痕	E-431
397	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	12.8	—	7.2	〃	〃	〃	見込み・高台内部にトチン痕	E-432
398	〃	〃	〃	〃	丸皿	2.9	13.1	—	6.5	〃	〃	〃	輪秃皿，見込みに重ね焼きの剝離痕	E-433

第79図 近世の遺物（32） 整地層⑤（1:3）



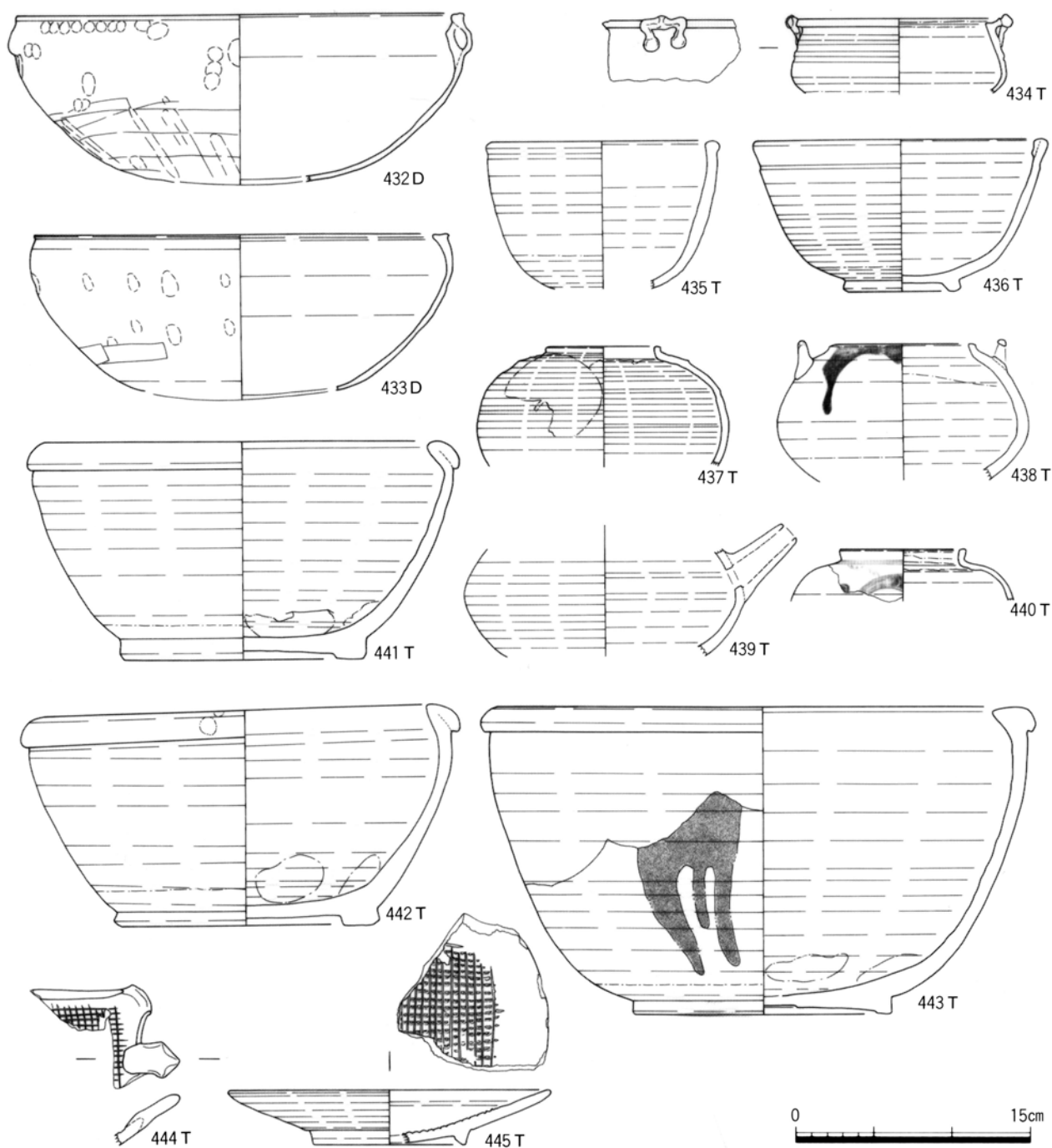
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器		器種	器形	法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登録 番号
		用 途	器 種			器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面			
399	91D2	整地層	供膳具	皿	型打皿	3.0	10.5	—	5.9	—	—	瀬・美	染付, 松竹梅文, 口化粧, 19世紀前半	E-434
400	92B2	〃	〃	〃	ひだ・稜花皿	2.5	11.6	—	6.5	—	—	〃	染付	E-435
401	〃	〃	〃	〃	丸皿	3.9	24.4	—	14.1	—	—	肥前	染付	E-436
402	91D2	〃	〃	〃	型打皿	—	—	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	ねじ梅文	E-437
403	92B2	〃	〃	〃	〃	2.3	8.6	—	4.2	—	—	肥前	染付	E-438
404	91D2	〃	〃	〃	〃	2.6	—	—	5.9	鉄釉	鉄釉	瀬・美	鶴文, 付高台	E-439
405	92B2	〃	〃	〃	端反皿	2.1	9.8	—	5.3	—	—	肥前	染付	E-440
406	91D2	〃	〃	〃	丸皿	2.6	12.2	—	7.5	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵・笹文, 見込み・高台内にトチン痕	E-441
407	92B2	〃	〃	〃	〃	2.7	11.4	—	6.0	灰釉	灰釉	〃	〃	E-442
408	〃	〃	〃	〃	〃	2.2	11.3	—	6.5	長石釉	長石釉	〃	高台豊付部分に重ね焼きの剝離痕	E-443
409	91D2	〃	〃	〃	稜皿	3.0	14.0	—	8.0	灰釉	灰釉	〃	見込み・高台にトチン痕	E-444
410	〃	〃	〃	〃	その他	1.8	6.3	—	4.2	〃	〃	〃	底部回転糸切痕	E-445
411	〃	〃	〃	〃	〃	2.1	12.0	—	5.8	ナデ	ナデ	不明	ロクロ成形, 底部回転糸切痕	E-446
412	92B2	〃	〃	〃	〃	1.2	5.0	—	—	—	指押え	〃	非ロクロ成形	E-447
413	〃	〃	〃	〃	〃	1.3	3.8	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-448
414	〃	〃	〃	〃	〃	0.6	3.3	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-449
415	〃	〃	〃	〃	〃	0.9	3.1	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-450
416	〃	〃	〃	〃	〃	1.1	3.1	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-451
417	91D2	〃	〃	〃	〃	1.1	3.7	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-452
418	92B2	〃	〃	〃	〃	1.0	—	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-453
419	91D2	〃	〃	〃	型打皿	2.5	—	—	7.2	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵, 折れ松葉文, 長径12.6cm, 短径9.1cm	E-454

第80図 近世の遺物 (33) 整地層⑥ (1:3)



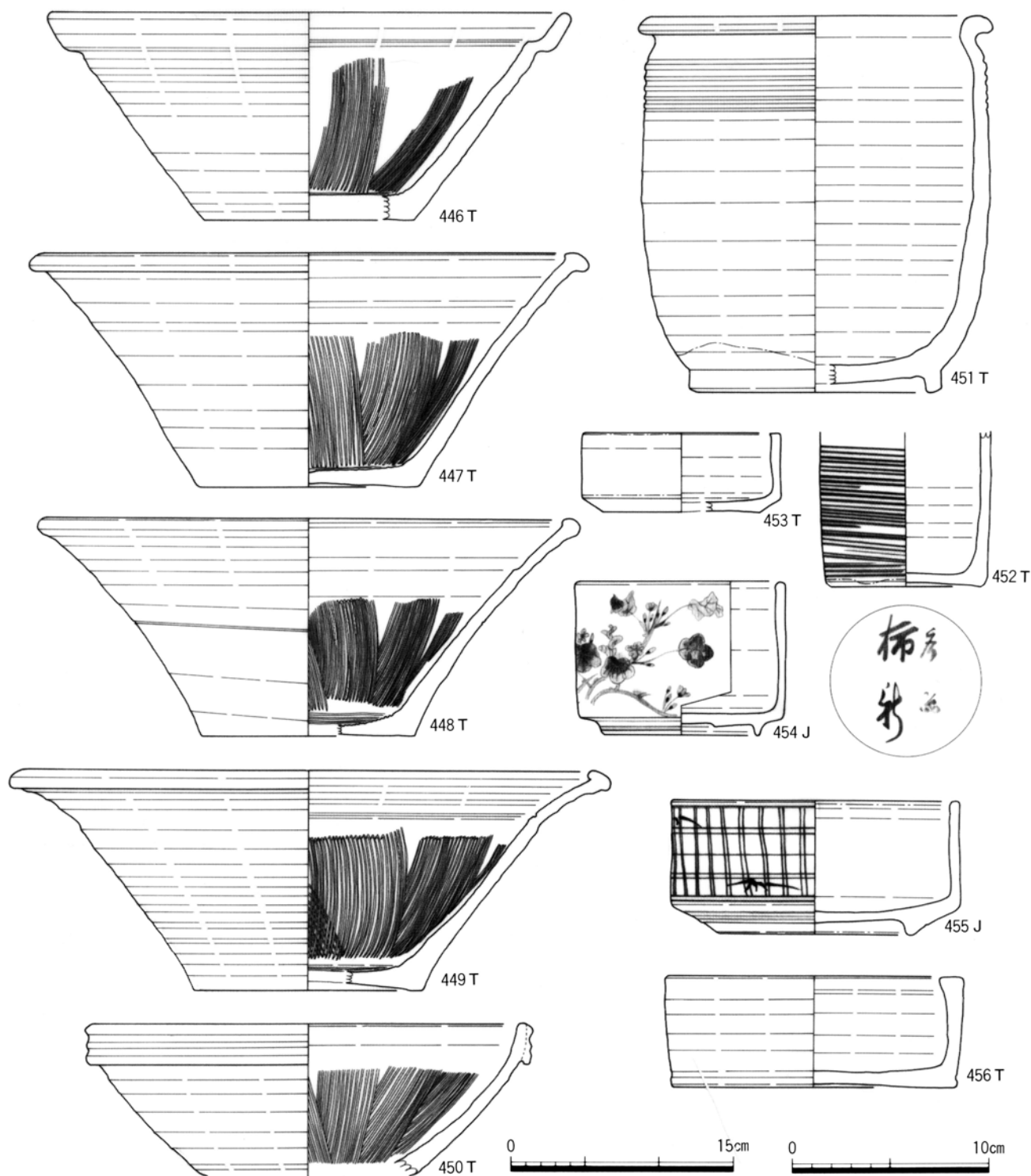
遺物 番号	調査地点	器 種			法 量 (cm)			釉薬・調整等		産 地	備 考	登録 番号		
調査区	遺構	用 途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面				外 面	
420	91D2	整地層	供膳具	皿	丸皿	5.2	25.4	—	13.0	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵、馬の目文、見込みにトチン痕	E-455
421	〃	〃	〃	〃	〃	4.0	20.7	—	10.3	灰釉	灰釉	〃	鉄絵、吹き墨、橘文か	E-456
422	〃	〃	〃	〃	〃	2.6	17.7	—	7.4	長石釉	長石釉	〃	呉須絵、楓文か	E-457
423	〃	〃	〃	鉢	端反鉢	9.0	20.3	—	9.7	〃	〃	〃	鉄絵・呉須絵、牡丹文か	E-458
424	〃	〃	〃	〃	折縁鉢	7.2	25.8	—	12.9	灰釉	灰釉	〃	鉄絵・黍文、緑釉筆散し、笠原鉢	E-459
425	〃	〃	〃	〃	端反鉢	5.1	18.8	—	11.4	黄瀬戸釉	黄瀬戸釉	〃	黄瀬戸鉢、緑釉筆散し、見込みにトチン痕	E-460
426	〃	〃	〃	〃	〃	7.7	26.8	—	15.0	〃	〃	〃	黄瀬戸鉢、緑釉筆散し、口縁部に剥離痕	E-461
427	〃	〃	〃	〃	その他	6.1	15.0	—	7.5	灰釉	灰釉	〃	呉須絵、亀甲文・梅樹文・源氏香文、19世紀中	E-462
428	〃	〃	〃	〃	丸鉢	5.1	16.8	—	9.8	—	—	肥前系	赤付、草花文か・唐草文、焼き継ぎ痕、18世紀後半～19世紀初	E-463
429	〃	〃	〃	〃	皿	丸皿	4.0	14.6	—	9.2	—	肥前	赤付、蛇・牡丹・波文、唐草文、蛇ノ目凹形高台、口縁部に切り込み痕、18世紀後半	E-464
430	〃	〃	〃	鉢	その他	4.8	15.1	—	9.2	—	青磁	〃	青磁染付、花弁文、蛇ノ目凹形高台、焼き継ぎ痕、18世紀後半	E-465
431	〃	〃	〃	皿	その他	3.4	14.9	—	9.1	灰釉	灰釉	瀬・美	呉須絵、蛇ノ目凹形高台、19世紀前半	E-466

第81図 近世の遺物 (34) 整地層⑦ (1:4)



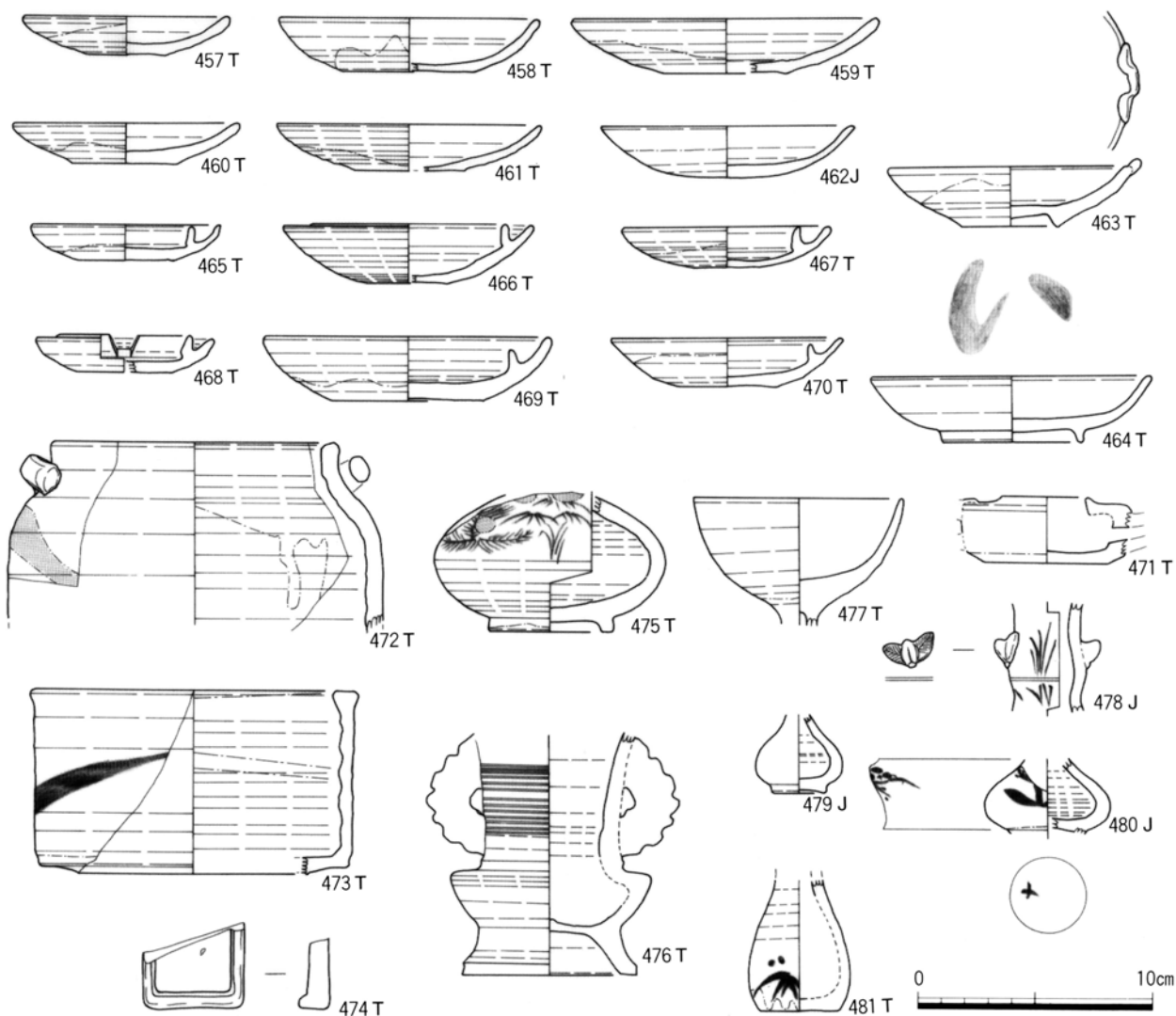
遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
432	92B2	整地層	調理具	鍋, 釜	内耳鍋	—	28.5	—	—	横ハケ	指押え・ナデ	不明	外面に煤付着	E-467
433	〃	〃	〃	〃	〃	—	26.4	—	—	〃	指押え・ナデ	〃	外面に煤付着	E-468
434	91D2	〃	〃	〃	鍋	—	12.9	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	胎部に煤付着	E-469
435	92B2	〃	〃	鉢	片口	—	14.1	—	—	〃	〃	〃	〃	E-470
436	91D2	〃	〃	〃	〃	9.7	18.2	—	6.9	〃	〃	〃	〃	E-471
437	〃	〃	〃	瓶	土瓶	—	7.0	16.0	—	透明釉	鉄化粧+透明釉	〃	白泥	E-472
438	〃	〃	〃	〃	〃	—	8.7	16.2	—	灰釉	灰釉	〃	底部に煤付着	E-473
439	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	18.0	—	ナデ	鉄釉	〃	〃	E-474
440	〃	〃	〃	〃	〃	—	8.0	—	—	透明釉	白泥+透明釉	〃	呉須絵	E-475
441	〃	〃	〃	鉢	捏ね鉢	13.9	25.2	—	15.2	灰釉	灰釉	〃	見込みに釉剥ぎ(5カ所)	E-476
442	〃	〃	〃	〃	〃	13.9	24.0	—	16.1	〃	〃	〃	見込みに釉剥ぎ(5カ所), 見込みと口縁部にナデ, 緑釉筆致し	E-477
443	〃	〃	〃	〃	〃	19.6	33.0	—	16.3	〃	〃	〃	鉄釉流し掛け, 見込みに釉剥ぎ, 底部に剥離痕	E-478
444	〃	〃	〃	その他	卸皿	—	—	—	—	鉄釉	鉄釉	〃	〃	E-479
445	92B2	〃	〃	〃	〃	3.5	20.1	—	9.6	〃	〃	〃	内側に煤付着	E-480

第82図 近世の遺物 (35) 整地層⑧ (1:4)



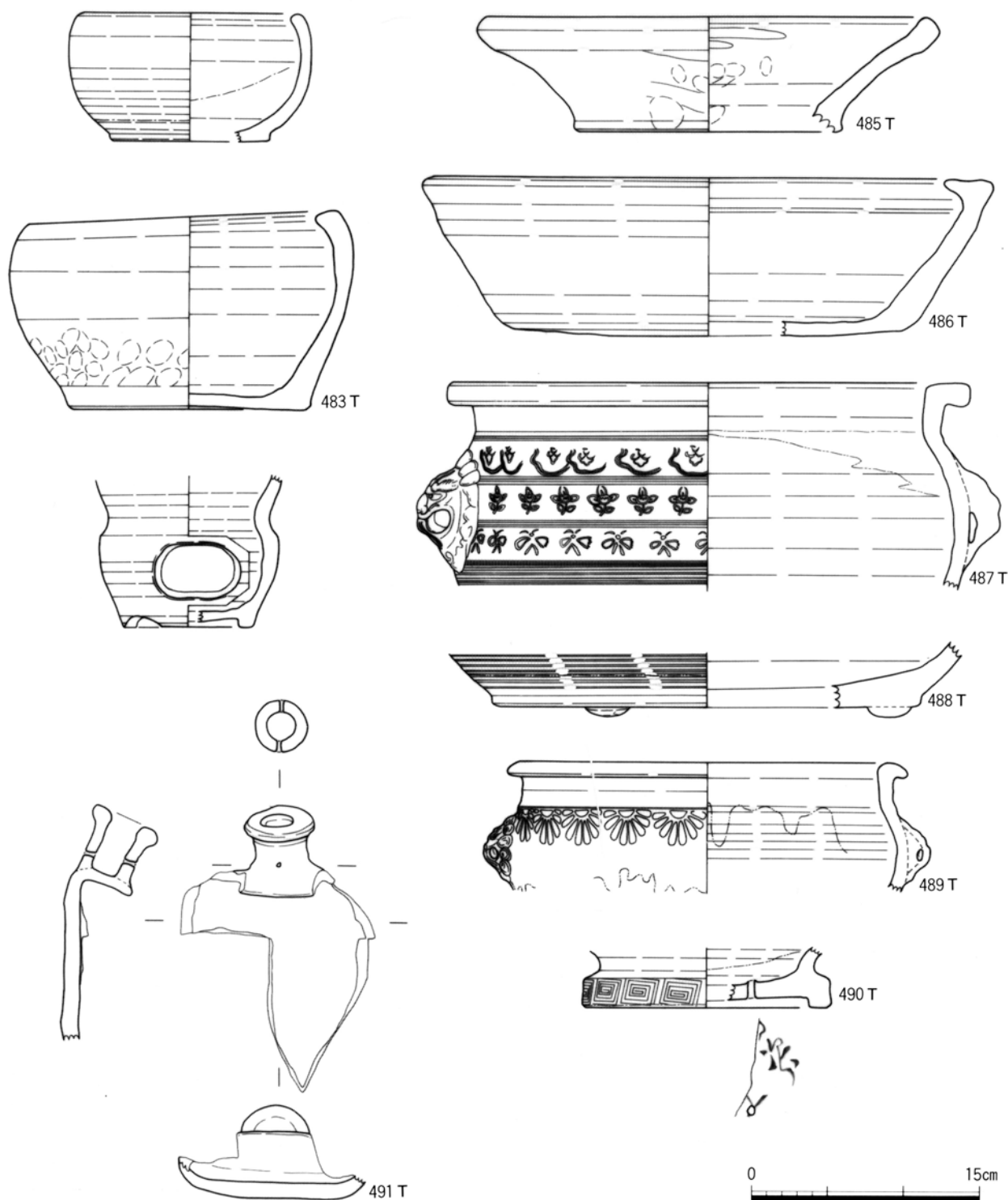
遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
446	91D2	整地層	調理具	搦鉢	Ⅵ類	14.0	34.6	—	14.0	鉄釉	鉄釉	瀬・美	櫛目数17本, 1 cmに4本, 底部回転糸切痕	E-481
447	〃	〃	〃	〃	Ⅶ類	15.7	35.8	—	14.5	〃	〃	〃	櫛目数21本, 1 cmに4本, 底部にトチン痕	E-482
448	〃	〃	〃	〃	〃	14.6	35.5	—	14.3	〃	〃	〃	櫛目数23本, 1 cmに5本	E-483
449	〃	〃	〃	〃	〃	14.9	38.2	—	15.2	〃	〃	〃	櫛目数26本, 1 cmに4本, 底部にトチン痕・剥離痕	E-484
450	〃	〃	〃	〃	〃	—	21.8	—	—	〃	〃	〃	櫛目数14本, 1 cmに4本	E-485
451	〃	〃	貯蔵具	甕B	甕	19.1	16.6	17.6	12.0	〃	〃	〃	見込みにトチン痕	E-486
452	〃	〃	〃	瓶	徳利E	—	—	8.6	7.6	灰釉	白泥+灰釉	〃	白泥による刷毛目, 墨書, 底部に重ね焼きの剥離痕	E-487
453	〃	〃	〃	鉢	蓋物A	4.0	9.9	—	7.9	〃	灰釉	〃	〃	E-488
454	〃	〃	〃	〃	〃	7.8	10.2	—	7.7	—	—	肥前	染付, 草花文, 蛇ノ目凹形高台	E-489
455	〃	〃	〃	〃	〃	7.0	14.3	—	9.6	—	—	肥前系	染付, 二重格子に漢文, 口縁部釉剥ぎ, 19世紀前半	E-490
456	〃	〃	〃	〃	その他	5.7	14.6	—	14.1	鉄釉	—	常滑か	〃	E-491

第83図 近世の遺物 (36) 整地層⑨ (446～450は1:4, 他は1:3)



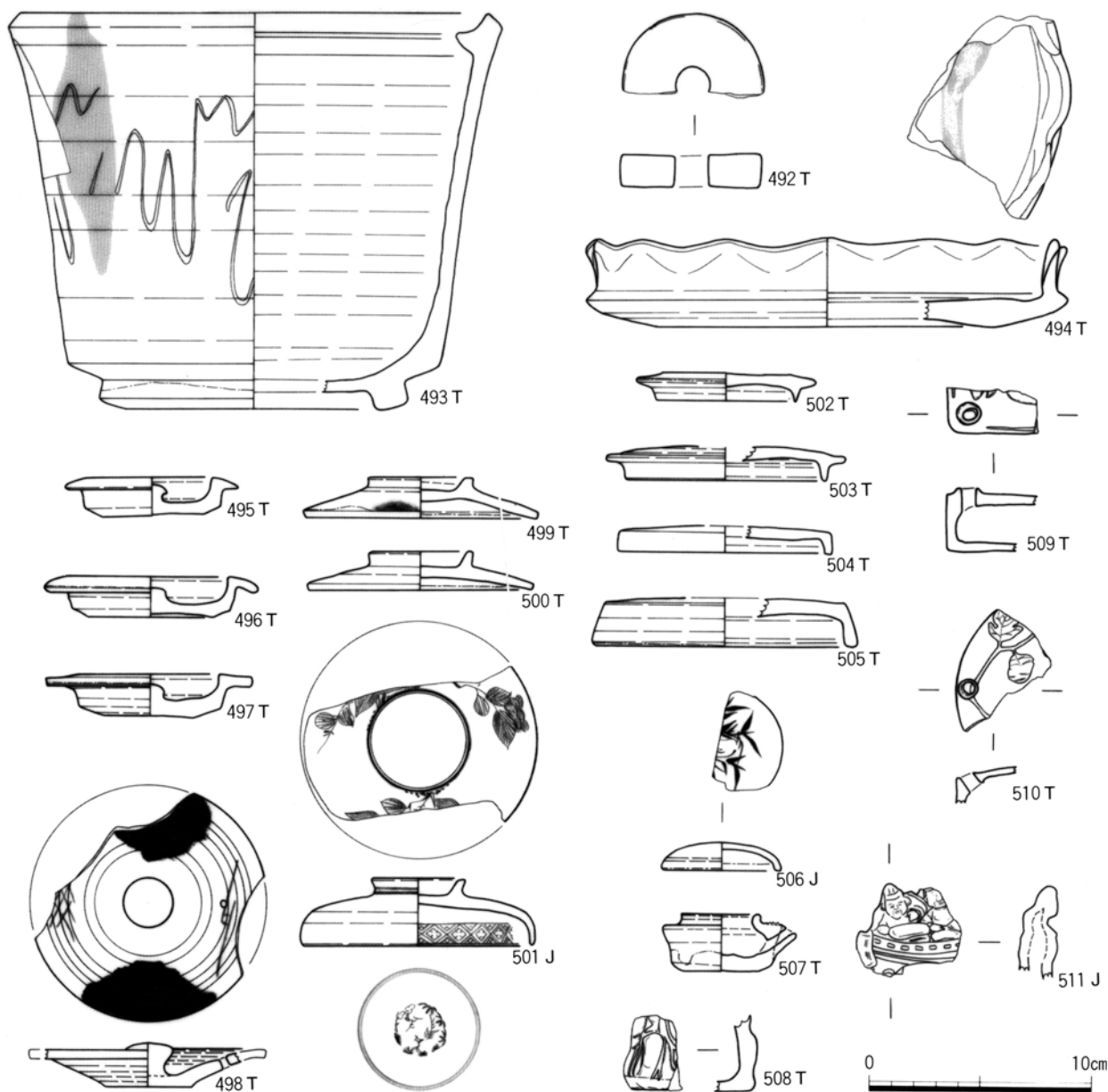
遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
457	91D2	整地層	灯火具	皿	灯明皿	1.6	8.6	—	3.3	灰釉	灰釉	瀬・美		E-492
458	92B2	〃	〃	〃	〃	2.3	10.8	—	5.5	鉄釉	鉄釉	〃	見込み部分に重ね焼きの剝離痕（径約4.0cm）	E-493
459	91D2	〃	〃	〃	〃	2.3	12.8	—	5.2	〃	〃	〃	見込み・胎部に重ね焼きの剝離痕（径約5.2cm）	E-494
460	〃	〃	〃	〃	〃	1.7	9.4	—	4.6	〃	〃	〃	見込み重ね焼きの剝離痕（径約3.8cm）	E-495
461	〃	〃	〃	〃	〃	2.0	11.1	—	4.7	灰釉	灰釉	〃	見込みに重ね焼きの剝離痕	E-496
462	〃	〃	〃	〃	〃	2.2	10.7	—	2.8	白磁	白磁	肥前系		E-497
463	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	10.2	—	4.1	鉄釉	鉄釉	瀬・美		E-498
464	〃	〃	〃	〃	〃	2.8	11.8	—	5.8	灰釉	灰釉	〃	呉須絵、「い」、口縁部に油煙付着	E-499
465	〃	〃	〃	〃	灯蓋	1.5	8.0	—	4.0	鉄釉	鉄釉	〃		E-500
466	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	10.5	—	3.4	〃	ケズリ	〃	口縁部・胎部に重ね焼きの剝離痕（径約8.1cm）	E-501
467	〃	〃	〃	〃	〃	1.7	8.6	—	2.8	〃	鉄釉	〃	胎部に重ね焼きの剝離痕（径約5.9cm）	E-502
468	92B2	〃	〃	〃	〃	1.6	7.5	—	4.0	〃	〃	〃	内口径5.5cm、見込み部分に煤付着、外側胎部に重ね焼きの剝離痕（径5.5cm）	E-503
469	91D2	〃	〃	〃	〃	2.8	11.9	—	6.4	〃	〃	〃	胎部に重ね焼きの剝離痕（径約9.0cm）	E-504
470	92B2	〃	〃	〃	〃	2.1	9.7	—	4.1	〃	〃	〃	内外側の胎部に重ね焼きの剝離痕（同じ灯明皿の重ね焼きか）	E-505
471	91D2	〃	〃	乗燭	その他	2.8	3.7	—	5.3	灰釉	灰釉	〃		E-506
472	92B2	〃	貯蔵具	壺	蓋付壺	—	11.8	15.9	—	鉄釉	鉄釉+灰釉	〃		E-507
473	〃	〃	神仏具	香炉	筒形	7.8	12.5	—	9.7	指ナデ	灰釉	〃	鉄絵	E-508
474	91D2	〃	調度具	その他	その他	1.8	3.6	4.3	—	灰釉	〃	不明	陶硯、底部にトチン痕	E-509
475	〃	〃	化粧具	壺	髪油壺	—	—	9.8	5.2	ナデ	〃	瀬・美	鉄絵、松竹梅文	E-510
476	〃	〃	調度具	花生	壺型	—	—	—	7.3	〃	鉄釉	〃		E-511
477	〃	〃	神仏具	仏飯器	—	—	8.4	—	—	鉄釉	〃	〃		E-512
478	〃	〃	調度具	花生	壺型	—	—	—	—	ナデ	透明釉	肥前	染付、貼付文	E-513
479	〃	〃	神仏具	瓶	神酒徳利B	—	—	3.7	2.2	〃	青磁	〃	底部鉄化粧	E-514
480	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	5.3	—	〃	透明釉	〃	染付、梅樹文、墨書「ナ」	E-515
481	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	4.3	3.3	—	灰釉	瀬・美	呉須絵、笹文、底部回転糸切痕	E-516

第84図 近世の遺物（37） 整地層⑩（1:3）



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
482	91D2	整地層	火具	鉢	火鉢	8.4	14.4	—	10.2	鉄釉	鉄釉	瀬・美		E-517
483	〃	〃	〃	〃	〃	12.7	20.1	—	15.5	ナデ	指押え・ナデ	常滑か		E-518
484	〃	〃	〃	〃	その他	—	—	10.6	8.5	—	—	不明	高台部に切込み	E-519
485	92B2	〃	〃	〃	火桶	7.6	23.2	—	16.4	指押え・ナデ	指押え・ナデ	常滑		E-520
486	〃	〃	〃	〃	〃	10.4	36.2	—	25.6	指押え	指押え	〃		E-521
487	91D2	〃	〃	〃	瓶掛	—	31.0	—	—	鉄釉+鉄化粧	鉄釉	瀬・美	貼付文・押印	E-522
488	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	27.6	鉄化粧	鉄釉+鉄化粧	鉄釉	〃		E-523
489	〃	〃	〃	〃	〃	—	24.2	26.8	—	銅緑釉+鉄釉	銅緑釉+鉄釉	〃	貼付文・押印	E-524
490	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	16.0	鉄釉	銅緑釉	〃	重文、高台内に重ね焼きの痕（径約12.2cm）、 墨書	E-525
491	〃	〃	〃	その他	その他	—	—	—	—	〃	鉄釉	〃	十能、重ね焼きの剥離痕（径約9.2cm）	E-526

第85図 近世の遺物（38） 整地層Ⅺ（1:4）

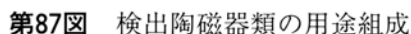


遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 種			法 量 (cm)				釉薬・調整等		産 地	備 考	登録 番号	
		用途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	内 面	外 面				
492	91D2	整地層	調度具	その他	その他	1.5	—	—	—	—	不明	戸車、最大径6.2cm、内径1.5cm、使用による 摩滅痕	E-527	
493	〃	〃	〃	水甕	水甕	17.7	20.9	—	11.6	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みにトチン痕	E-528
494	〃	〃	〃	水指	水盤	3.9	21.2	—	15.0	長石釉	長石釉	〃	緑釉筆散し	E-529
495	〃	〃	その他	蓋	蓋B	1.7	7.7	—	4.5	鉄釉	鉄釉	〃		E-530
496	92B2	〃	〃	〃	〃	1.8	9.6	—	5.6	ヘラ削り	〃	〃		E-531
497	91D2	〃	〃	〃	〃	1.9	9.2	—	4.2	鉄釉	ケズリ	〃	口縁部に煤付着	E-532
498	〃	〃	〃	〃	蓋I	2.0	10.6	—	3.9	ナデ	灰釉	〃	鉄絵、底部回転糸切痕、つまみ径2.1cm	E-533
499	〃	〃	〃	〃	蓋E	1.9	10.3	—	—	灰釉	〃	〃	つまみ径4.6cm	E-534
500	〃	〃	〃	〃	〃	1.7	10.0	—	—	〃	〃	〃	つまみ径4.4cm	E-535
501	〃	〃	〃	〃	〃	3.1	10.3	—	—	—	—	肥前	つまみ径4.1cm、染付、割小髷・松竹梅文・ 草花文	E-536
502	〃	〃	〃	〃	蓋G	1.2	8.0	—	6.2	ナデ	灰釉	瀬・美		E-537
503	92B2	〃	〃	〃	その他	—	10.4	—	8.8	灰釉	指ナデ	〃		E-538
504	91D2	〃	〃	〃	蓋F	1.2	9.5	—	—	ナデ	灰釉	〃		E-539
505	92B2	〃	〃	〃	〃	2.2	11.5	—	10.4	灰釉	〃	〃	口縁部釉剥ぎ	E-540
506	91D2	〃	〃	〃	〃	1.3	5.2	—	—	—	—	肥前	染付、草本文か、19世紀初	E-541
507	〃	〃	調度具	水指	その他	2.6	3.3	—	3.3	鉄釉	鉄釉+鉄化粧	瀬・美	底部回転糸切痕、水注	E-542
508	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	指押え	灰釉	〃	水滴、型打ち	E-543
509	〃	〃	〃	〃	〃	2.8	—	—	—	〃	〃	〃	水滴、型打ち、穴径1.2cm	E-544
510	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	灰釉	〃	〃	水滴、型打ち	E-545
511	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	透明釉	〃	水滴、型打ち	E-546

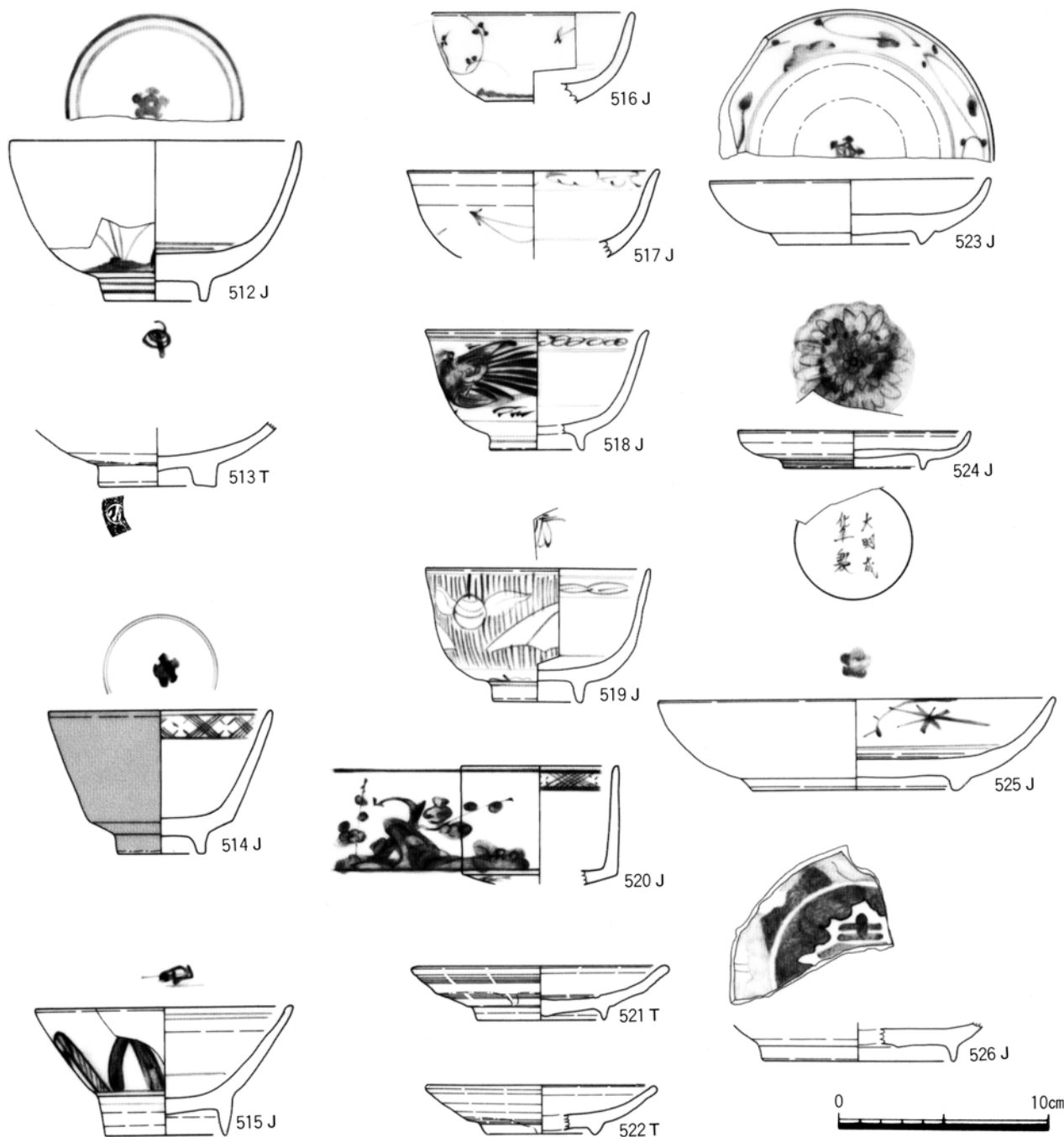
第86図 近世の遺物 (39) 整地層⑫ (1:3)

全ての調査区の包含層より出土した遺物を「検出」として扱う。出土した遺物の合計は、総破片数で 5,680点、接合前口縁破片数は 1,458点、個体数は 82.00個体である。供膳具は 44.75個体・61.2%、調理具は7.67個体・10.5%、貯蔵具は 10.08個体・13.8%、灯火具は2.75個体・3.8%、火具は3.67個体・5.0%、化粧具は0.00個体、神仏具は0.42個体・0.6%、喫煙具は0.33個体・0.5%、調度具は3.42個体・4.7%であり、他に蓋類が8.92個体出土している。化粧具や神仏具を除き、多少の数値の増減はあるが、ほぼ全体の組成の比率や割合に近い数値を示している。

材質の面からも、土師質製品が10.5%、陶磁器類では、陶器製品が64.0%、磁器製品が25.3%となっていて、多少の数値の増減はあるが、全体の平均値（土師質：9.6%・陶器：59.6%・磁器：30.4%）によく似た数値である。その他の材質としたものが0.2%出土している。

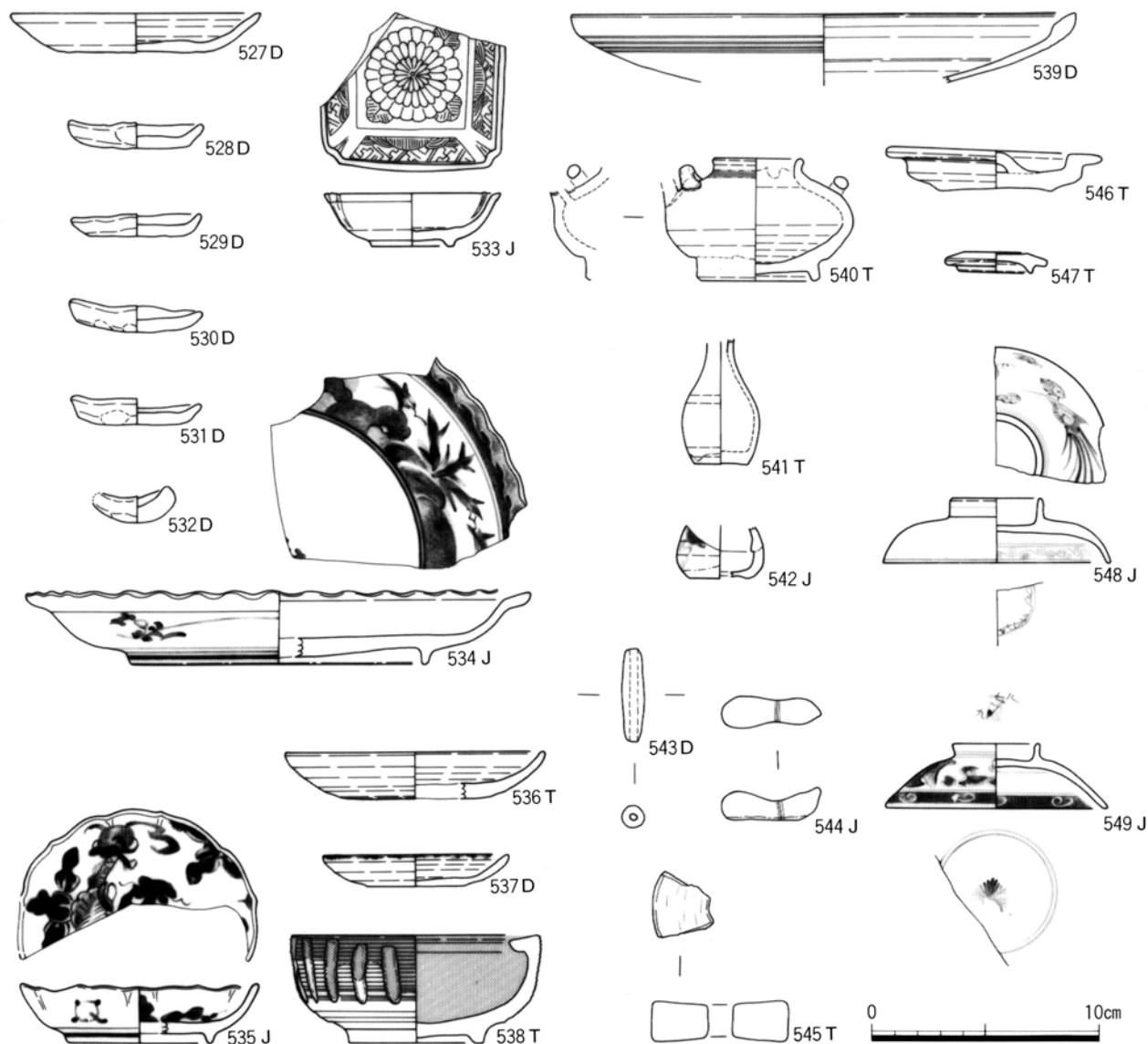


第25表 検出陶磁器類集計表



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器 用途	器 種	器 形	器高	口径	胴径	底径	釉葉・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
512	91D2	検Ⅱ	供膳具	碗	丸碗	7.6	13.5	—	4.8	—	—	肥前	染付、五弁花（コンニャク印）・渦巻、18世紀中～末	E-547
513	91D1	検Ⅰ	〃	〃	その他	—	—	—	5.5	鉄釉	鉄釉	不明	高台置付部分に押印	E-548
514	91D2	検Ⅱ	〃	〃	平碗	6.8	10.4	—	4.1	—	青磁	肥前	青磁染付、割小菱、見込み五弁花（コンニャク印）、18世紀中～末	E-549
515	91D1	検Ⅰ	〃	〃	広東碗	6.2	12.0	—	5.7	—	—	瀬・美	染付、連弁文、見込みに岩に波瀾文、1820～	E-550
516	〃	〃	〃	〃	丸碗	—	9.4	—	—	—	—	肥前	染付、岩に梅花文、18世紀中～末	E-551
517	91D2	検Ⅱ	〃	〃	端反碗	—	11.9	—	—	—	—	〃	染付、折れ松葉文、18世紀中～末	E-552
518	91B	検Ⅰ	〃	〃	〃	5.7	10.5	—	4.4	—	—	瀬・美	染付、19世紀中	E-553
519	91D1	〃	〃	〃	〃	6.3	10.5	—	4.3	—	—	関西	染付、条線に宝珠文・見込み寿文、19世紀中	E-554
520	91D2	検Ⅱ	〃	〃	小碗	—	7.4	—	—	—	—	肥前	染付、梅樹文・割小菱、18世紀末～1810	E-555
521	92B1	検Ⅰ	〃	〃	皿	2.6	11.8	—	6.0	灰釉	灰釉	瀬・美	見込み部分にトチン痕（高台径約6.0cm）	E-556
522	〃	〃	〃	〃	〃	2.3	10.7	—	5.1	〃	〃	〃	高台から胎部にかけて火を受けている	E-557
523	91D2	検Ⅱ	〃	〃	〃	3.1	13.2	—	6.9	—	—	肥前	染付、草花文、見込み五弁花（コンニャク印）、見込み蛇ノ目軸刺し、18世紀後半	E-558
524	91D1	検Ⅰ	〃	〃	〃	1.8	10.9	—	6.6	—	—	瀬・美	染付、牡丹文、高台内一重圈線に「大明成化年製」、19世紀代	E-559
525	〃	〃	〃	〃	〃	4.4	18.6	—	9.8	—	—	肥前	染付、五弁花（コンニャク印）、見込み蛇ノ目軸刺し、18世紀後半	E-560
526	91C	〃	〃	〃	その他	—	—	—	9.0	—	—	〃	染付、蛇ノ目凹型高台、焼継ぎ痕、19世紀中以降	E-561

第88図 近世の遺物（40） 検出①（1:3）



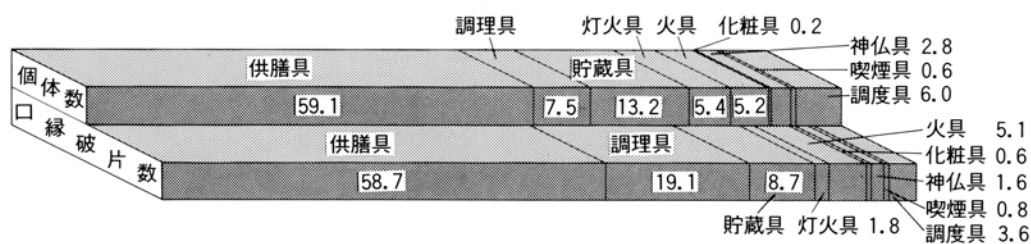
遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器 用途	器 器種	器 器形	法 器高	量 口径	(cm) 胴径	調整等 底径	釉薬・調整等 内面	調整等 外面	産地	備考	登録 番号
527	91D2	検Ⅱ	供膳具	皿	その他	1.7	10.8	—	4.8	ナデ	ナデ	不明	ロクロ成形	E-562
528	〃	〃	〃	〃	〃	1.2	5.8	—	—	—	指押え	〃	非ロクロ成形	E-563
529	〃	〃	〃	〃	〃	1.0	5.6	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-564
530	〃	〃	〃	〃	〃	1.2	5.7	—	—	—	指押え	〃	非ロクロ成形	E-565
531	〃	〃	〃	〃	〃	1.2	5.6	—	—	—	〃	〃	非ロクロ成形	E-566
532	91D1	検Ⅰ	〃	〃	〃	1.6	2.5	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-567
533	〃	〃	〃	〃	型打皿	2.3	7.6	—	3.6	白磁	白磁	瀬・美	陶刻、菊花文、高台置付部分に重ね焼きの刻 彫痕、19世紀代	E-568
534	91D2	検Ⅱ	〃	〃	ひだ・棧皿	3.2	22.0	—	13.0	—	—	肥前	染付、墨弾き、波文、岩に草花文・唐草文、 高台内部に鈔着、1690—1730	E-569
535	91B	検Ⅰ	〃	〃	型打皿	2.5	10.4	—	6.2	—	—	〃	染付、口縁部に焼継痕あり、18世紀末—19世 紀初	E-570
536	92B1	〃	〃	〃	丸皿	2.1	11.1	—	4.0	鉄釉	鉄釉	瀬・美	口縁部に油煙付着	E-571
537	91D2	検Ⅱ	灯火具	皿	灯明皿	1.4	8.1	—	4.3	指ナデ	指ナデ	不明	口縁部に油煙付着	E-572
538	91D1	検Ⅰ	喫煙具	灰落し	—	4.7	10.6	—	5.9	灰釉	灰釉+鉄釉	瀬・美	ヘラによる筋彫り、高台置付部分にトチン痕	E-573
539	〃	〃	調理具	鍋、釜	焙烙	—	22.8	—	—	ナデ	—	不明	—	E-574
540	92B1	〃	調度具	水指	その他	5.4	3.8	8.2	4.9	ナデ	鉄釉	瀬・美	水注	E-575
541	91D1	検Ⅰ	神仏具	瓶	神酒徳利B	—	—	3.4	2.3	—	灰釉	〃	底部回転糸切痕	E-576
542	〃	〃	〃	〃	〃	—	—	3.8	2.5	指押え	—	〃	色絵か	E-577
543	91C	〃	調度具	その他	その他	4.1	0.4	1.0	—	—	—	不明	土錘	E-578
544	92B1	〃	〃	〃	〃	1.5	—	—	—	—	褐釉	瀬・美	箸置、長さ4.4cm、最大幅1.4cm	E-579
545	91C	〃	〃	〃	〃	1.8	—	—	—	灰釉	灰釉	〃	戸車	E-580
546	91D1	〃	その他	蓋	蓋G	1.7	9.6	—	4.8	ナデ	〃	〃	底部回転糸切痕	E-581
547	92B1	〃	〃	〃	蓋B	0.8	4.3	—	3.1	ナデ	灰釉・ナデ	〃	—	E-582
548	〃	〃	〃	〃	蓋E	2.9	10.0	—	4.0	—	—	〃	染付、松竹梅文・飛雲飛鳥文、19世紀代	E-583
549	91B	〃	〃	〃	〃	2.9	9.7	—	3.8	—	—	〃	染付、焼き継ぎ痕、墨弾き、19世紀中	E-584

第89図 近世の遺物 (41) 検出② (1:3)

その他遺物合計

全ての調査区の表土層や壁など、遺構や整地層、検出以外から出土した遺物を全て「その他」として扱った。出土した遺物の合計は、総破片数が 6,661点、接合前口縁破片数は 1,951点、個体数は181.67個体である。供膳具は 94.17個体・59.1%、調理具は 11.92個体・ 7.5%、貯蔵具は 21.08個体・13.2%、灯火具は8.58個体・ 5.4%、火具は8.25個体・ 5.2%、化粧具は0.33個体・ 0.2%、神仏具は4.50個体・ 2.8%、喫煙具は0.92個体・ 0.6%、調度具は9.50個体・ 6.0%であり、他に蓋類が 22.42個体出土している。「その他」だけでも、全出土遺物の4分の1近くが出土しており、遺構から出土した遺物の少なさがわかる。調理具を除けば、多少の数値の増減はあるが、ほぼ全体の組成の比率や割合に近い数値を示している。

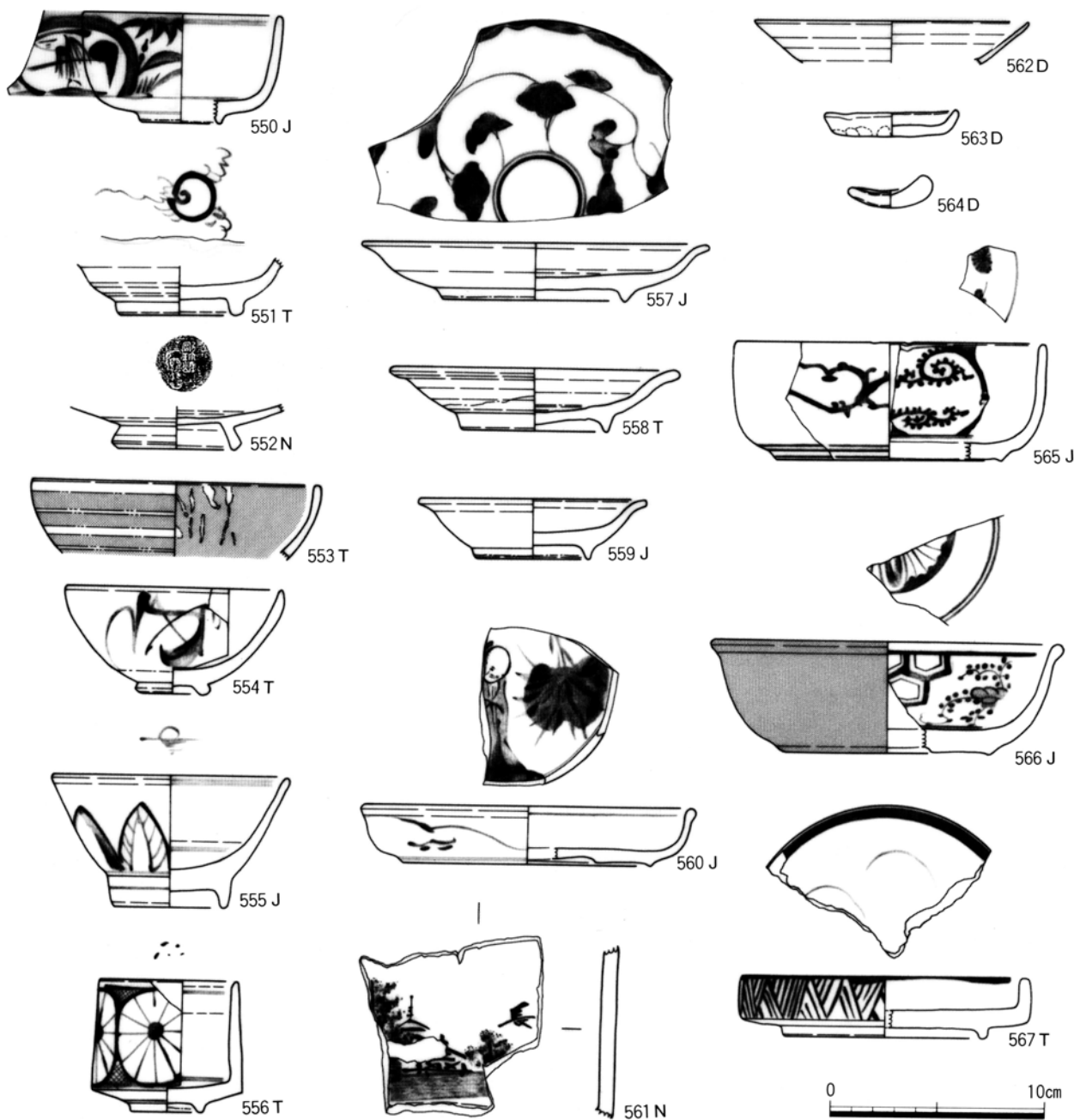
材質の面から見てみると、土師質製品が 8.3%、陶磁器類では陶器製品が53.2%、磁器製品が37.8%となっており、磁器製品の全体に占める割合が高く、この数値が整地層や検出とともに全体の平均値を大きく引き上げている。従って、他の遺跡と用途・器種の組成を比較する場合、この部分の数値を除いた遺構出土のみで考える必要がある。 (小嶋廣也)



第90図 その他陶磁器類の用途組成

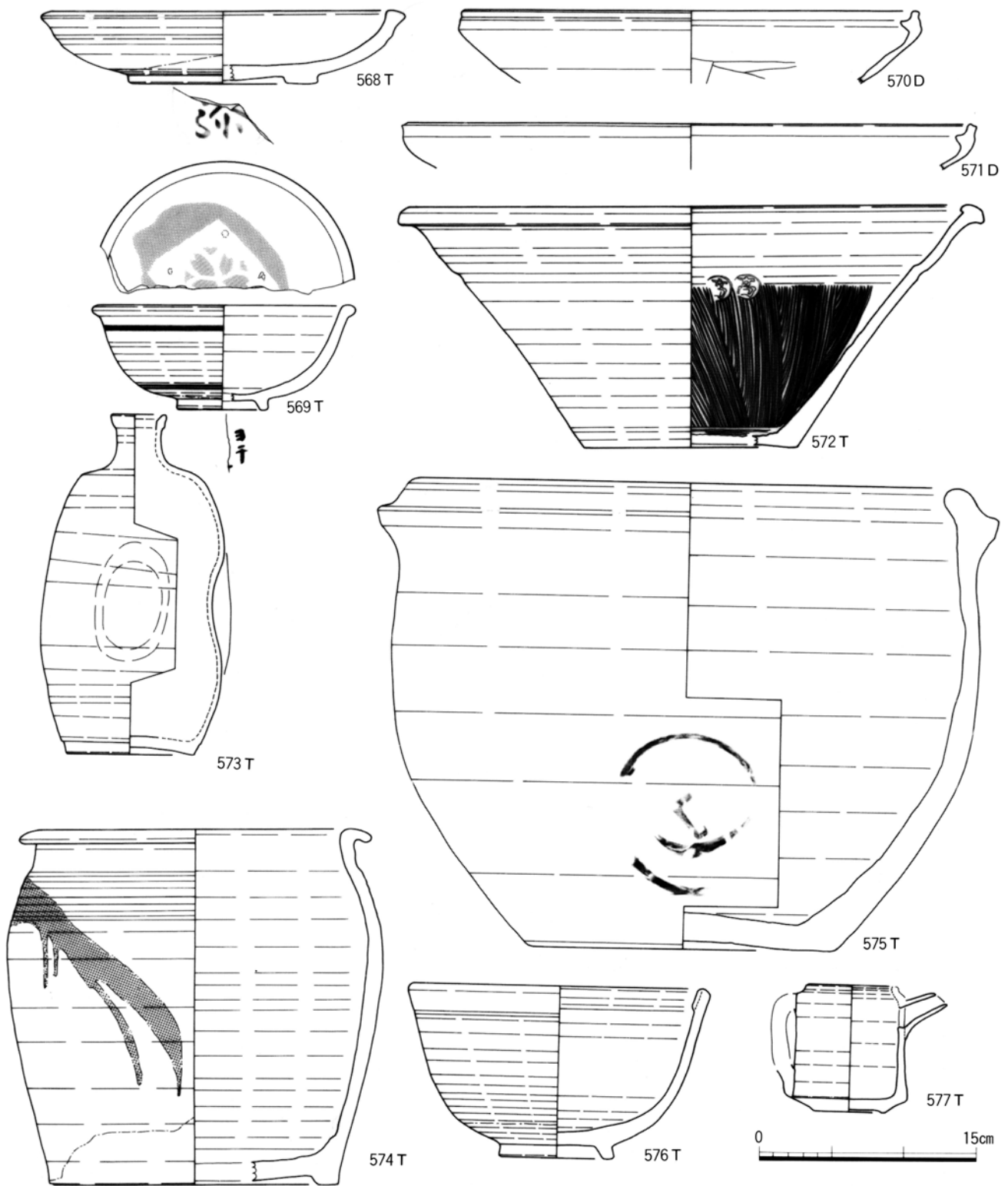
用途	器種	接合後口縁残存率					接合前口縁破片数					総破片数				
		土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計	土器	陶器	磁器	その他	計
供膳具	碗		154	286		440		297	251	1	549		1017	445	1	1463
	小碗		68	164		232		45	78		123		80	113		193
	皿	49	148	198		395	27	206	110	3	346	99	464	170	3	736
	鉢		20	43		63		27	41		68		163	59		222
	その他					0					0			10		10
小計		49	390	691	0	1130	27	575	480	4	1086	99	1724	797	4	2624
調理具	鍋、釜	16	12			28	146	25		4	175	375	137		6	518
	鉢		57			57		73			73		237			237
	擂鉢		28			28		85			85		490			490
	瓶		30			30		20			20		134	11		145
	その他					0					0		4			4
小計		16	127	0	0	143	146	203	0	4	353	375	1002	11	6	1394
貯蔵具	瓶		143			143		18			18		377	5		382
	壺		20			20		16			16		86			86
	甕A		41			41		72			72		1030			1030
	甕B		24			24		39			39		253			253
	鉢		20	5		25		13	2		15		22	2		24
その他						0					0	1				1
小計		0	248	5	0	253	0	158	2	0	160	1	1768	7	0	1776
灯火具		19	82	2		103	10	22	1		33	14	29	3		46
火具		57	41		1	99	46	48		1	95	116	260		1	377
化粧具			0	4		4		6	5		11		8	7		15
神仏具		0	16	38		54	4	14	11		29	4	29	39		72
喫煙具			11	0		11		12	3		15		18	1		19
調度具		27	78	9		114	14	52	1		67	27	154	8		189
蓋		14	167	76	12	269	10	62	28	2	102	18	93	36	2	149
合計		182	1160	825	13	2180	257	1152	531	11	1951	654	5085	909	13	6661

第26表 その他陶磁器類集計表



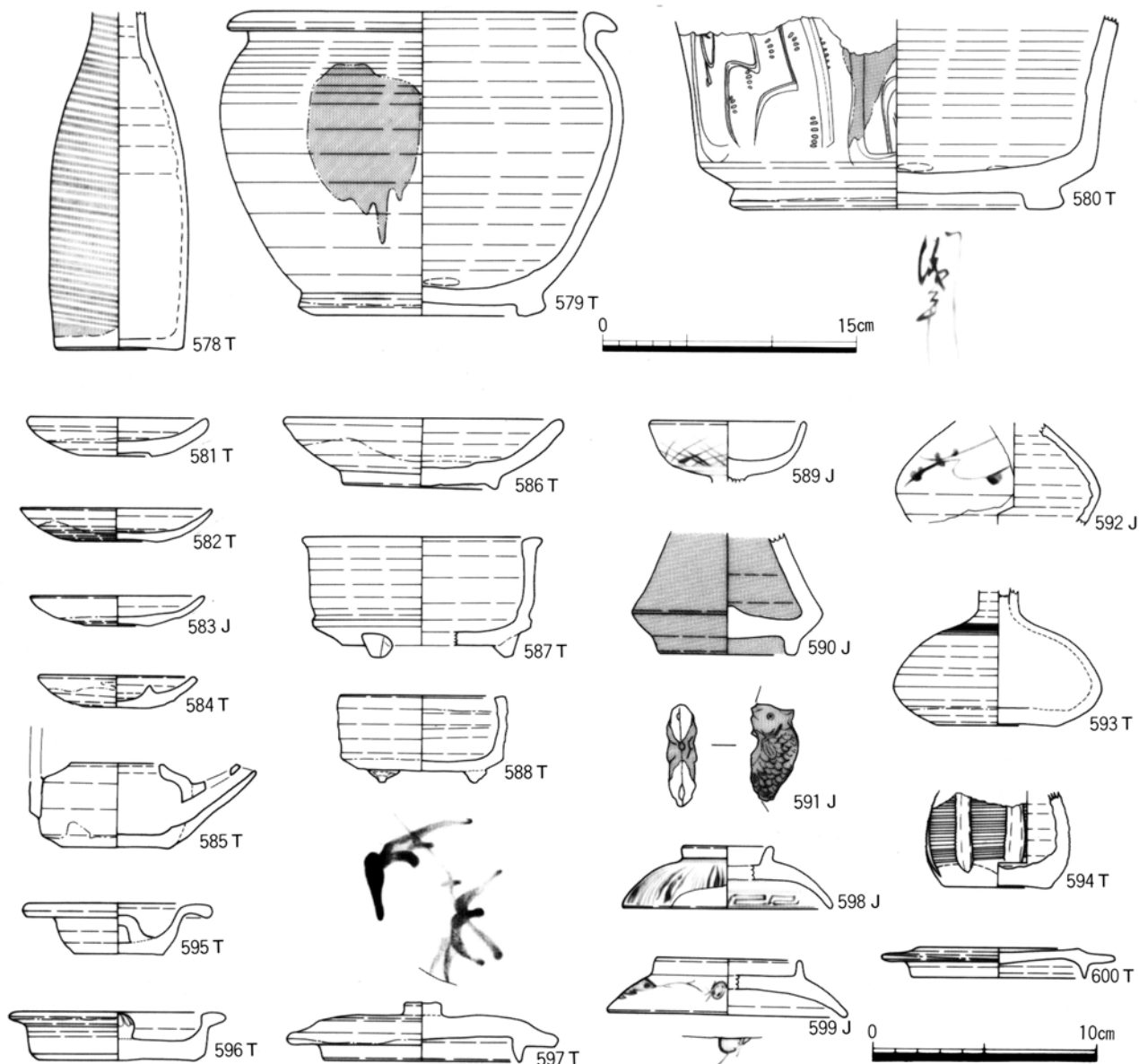
遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	器 用途	器種	器形	器高	口径	底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号	
550	91D	南トレンチ	供膳具	碗	丸碗	5.1	9.0	—	3.6	—	—	瀬・美	染付、竹の子握り文、19世紀前半	E-585
551	〃	表土	〃	〃	〃	—	—	—	5.4	灰釉	灰釉	〃	呉須絵、宝珠文	E-586
552	92B	〃	〃	〃	その他	—	—	—	5.3	透明釉	透明釉	不明	見込みに押印	E-587
553	91D	南トレンチ	〃	〃	平碗	—	13.0	—	—	白泥+灰釉	白泥+灰釉	関西	白泥による刷毛目文	E-588
554	〃	〃	〃	〃	〃	4.9	9.9	—	3.2	灰釉	灰釉	瀬・美	鉄絵、柳文、18世紀後半	E-589
555	〃	〃	〃	〃	広東碗	6.1	10.8	—	5.1	—	—	〃	染付、連弁文・岩に波濤文、19世紀中～幕末	E-590
556	〃	〃	〃	〃	小碗 筒碗	6.1	6.4	—	3.3	灰釉	灰釉	〃	呉須絵、菊花散し文、見込み五弁花	E-591
557	92B	北壁	〃	皿	端反皿	2.7	15.8	—	8.4	—	—	中国	化粧掛け、染付、草花文、墨弾き、高台置付部分に砂懸、17世紀代（明末～清初）	E-592
558	91D	表土	〃	〃	〃	2.9	13.0	—	6.7	灰釉	灰釉	瀬・美	〃	E-593
559	〃	南トレンチ	〃	〃	〃	2.8	10.4	—	5.2	青磁	青磁	〃	青磁皿、19世紀代	E-594
560	〃	〃	〃	〃	丸皿	2.8	13.1	—	9.4	—	—	肥前系	染付、樹下唐人文・唐草文、蛇ノ目凹形高台、重ね焼きの刷懸（径約6.7cm）、ハマ模、18世紀末～19世紀初	E-595
561	92B	南壁	〃	〃	その他	—	—	—	—	—	—	不明	化粧掛け、鉄絵	E-596
562	91D	表土	〃	〃	〃	—	12.5	—	—	ナデ	ナデ	〃	ロクロ成形	E-597
563	〃	〃	〃	〃	〃	1.2	6.0	—	5.0	〃	指押え	〃	非ロクロ成形	E-598
564	〃	〃	〃	〃	〃	1.5	3.3	—	—	—	—	〃	非ロクロ成形	E-599
565	〃	北トレンチ	〃	鉢	丸鉢	5.6	14.2	—	10.4	—	—	肥前	染付、見込み松竹梅文・蘭唐草文・唐草文、蛇ノ目凹形高台、18世紀中～末	E-600
566	〃	南トレンチ	〃	〃	その他	5.2	16.0	—	9.4	—	青磁	肥前系	青磁染付、亀甲・梅樹文・三ツ銀杏文、蛇ノ目凹形高台、重ね焼きの刷懸（径約8.4cm）、18世紀後半	E-601
567	92B	表土	〃	〃	織部	2.9	13.0	—	9.2	長石釉	長石釉	瀬・美	鉄絵、高台置付部分使用による摩滅痕	E-602

第91図 近世の遺物（42） その他①（1:3）



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	器 用途	器種	器形	法 器高	量 口径	(cm) 胴径	底径	釉葉・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号	
568	91D	南トレンチ	供膳具	皿	丸皿	5.0	23.4	—	12.4	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みにトチン痕、墨書「弥」	E-603
569	〃	〃	〃	鉢	その他	7.3	17.3	—	5.9	〃	〃	〃	鉄須絵・型紙、吹き墨、見込みにトチン痕、墨書	E-604
570	〃	〃	調理具	鍋、釜	焙烙	—	31.0	—	—	ヨコハケ	—	不明	外面に煤付着	E-605
571	〃	〃	〃	〃	〃	—	38.6	—	—	—	—	〃	外面に煤付着	E-606
572	〃	〃	〃	播鉢	Ⅷ類	16.3	38.2	—	14.6	鉄釉	鉄釉	瀬・美	磨目数23本、1 cmに4本、押印「高」、底部にトチン痕	E-607
573	91C	〃	貯蔵具	瓶	徳利D	23.6	3.6	13.0	8.7	〃	〃	〃	〃	E-608
574	92B	北壁	〃	甕B	甕	24.7	21.2	—	19.7	〃	〃	〃	灰釉流し掛け	E-609
575	〃	南壁	〃	甕A	Ⅳ類	32.4	36.8	—	20.4	—	—	常滑	〃	E-610
576	〃	〃	調理具	鉢	捏ね鉢	11.9	20.0	—	7.6	灰釉	灰釉	瀬・美	見込みにトチン痕	E-611
577	〃	表土	貯蔵具	瓶	汁次B	8.8	5.7	—	4.8	鉄釉	鉄釉	〃	口縁部釉剥ぎ取り	E-612

第92図 近世の遺物 (43) その他② (1:4)



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	用途	器種	器形	器高	口径	胴径	底径	釉薬・調整等 内面	外面	産地	備考	登録 番号
578	92B	表土	貯蔵具	瓶	德利E	—	—	8.2	7.0	白泥+灰釉	灰釉	瀬・美	白泥による刷毛目文	E-613
579	〃	南壁	〃	甕B	甕	17.8	20.1	24.0	12.5	鉄釉	鉄釉	〃	灰釉流し掛け、見込みにトチン痕	E-614
580	91D	南トレンチ	調度具	水甕	水甕	—	—	—	18.2	灰釉	灰釉	〃	銅線軸流し掛け、見込みにトチン痕、墨書 (浅草)	E-615
581	〃	表土	灯火具	皿	灯明皿	1.7	7.8	—	2.9	〃	〃	〃	口縁部に油煙付着、基筒底	E-616
582	〃	〃	〃	〃	〃	1.5	8.4	—	3.4	鉄釉	鉄釉	〃	見込みに重ね焼きの剝離痕(径約4.3cm)	E-617
583	〃	南トレンチ	〃	〃	〃	1.3	7.7	—	2.8	白磁	白磁	〃	〃	E-618
584	92B	南壁	〃	〃	灯蓋	1.4	6.8	—	3.0	灰釉	灰釉	〃	内口径2.9cm	E-619
585	〃	〃	〃	乗燭	その他	3.7	4.1	—	4.7	〃	〃	〃	注口部に油煙付着	E-620
586	〃	トレンチ	〃	皿	灯明皿	3.2	12.1	—	6.8	長石釉	長石釉	〃	見込み蛇ノ目釉剥ぎ、口縁部に煤付着	E-621
587	〃	南壁	神仏具	香炉	筒形	5.3	10.8	—	8.1	ナデ	〃	〃	〃	E-622
588	91D	南トレンチ	〃	〃	〃	3.9	7.3	—	5.5	灰釉	〃	〃	足付き3カ所	E-623
589	〃	〃	〃	仏飯器	—	—	6.8	—	—	—	—	〃	染付、草文か、1820~1860	E-624
590	〃	〃	調度具	花生	その他	—	—	8.4	6.0	青磁	青磁	肥前	青磁、高台に砂融着、17世紀末~18世紀中	E-625
591	〃	表土	〃	〃	壺型	—	—	—	—	—	青磁	〃	箸置か、底部に穿孔(径4mm)	E-626
592	〃	北トレンチ	化粧具	壺	髪油壺	—	—	9.1	—	ヘラ削り	—	肥前	染付、梅花文、18世紀	E-627
593	〃	表土	〃	〃	〃	—	—	—	—	灰釉	灰釉	瀬・美	〃	E-628
594	〃	南トレンチ	喫煙具	灰落し	—	—	—	6.4	4.8	指ナデ	鉄釉	〃	櫛引き、ヘラによる筋彫り	E-629
595	〃	〃	その他	蓋	蓋B	2.3	8.4	—	4.0	ナデ	〃	〃	底部回転糸切痕	E-630
596	〃	〃	〃	〃	〃	2.1	9.6	—	6.9	ケズリ・ナデ	〃	〃	〃	E-631
597	92B	表土	〃	〃	蓋G	1.3	10.5	10.7	7.8	ヘラ削り	灰釉	〃	〃	E-632
598	〃	西壁	〃	〃	蓋D	2.6	11.7	—	8.7	ナデ	〃	〃	つまみ径1.7cm、呉須絵、笹文	E-633
599	91D	南トレンチ	〃	〃	蓋E	2.8	9.2	—	3.9	—	—	〃	染付、雷文・条線文、19世紀中	E-634
600	〃	〃	〃	〃	〃	2.5	10.5	—	6.4	—	—	肥前系	染付、1780~1840	E-635

第93図 近世の遺物(44) その他③(578~580は1:4, 他は1:3)

5. 加工円盤

本遺跡の遺構や整地層の中から、小型で周囲を打ち欠き調整あるいは研磨されて円形に加工された陶片が多数出土している。以下、これらを加工円盤と称して、その概略を見ていきたい。

加工円盤は、総計で 172点出土しており、91B 区の S D 025で13点出土した以外、居住域と思われる91D 区と92B 区から集中して出土している。今回の統計処理では、疑わしいものは全て除外した。重量は、それぞれの器種や材質により異なるが、形態としては、径が 2.5cm前後の小型のもの、 3.5 cm前後の中型のもの、それ以上の大型のものの3種類があるようである。転用されている器種としては、調理具の播鉢の破片を加工しているものが47点（27.3%）と多く、貯蔵具である常滑産の甕Aの破片が35点（20.3%）、供膳具である椀の破片が31点（18.0%）、貯蔵具の甕Bの破片が18点（10.5%）、調理具の捏ね鉢の破片が13点（ 7.6%）であり、他に供膳具である皿・鉢、調理具である鍋・釜、貯蔵具である瓶・德利、火具である火鉢・瓶掛、神仏具である御神酒德利、調度具である水甕・手洗鉢、瓦類などの破片の使用も見られ、多種多様である。また、材質面から見てみると、陶器製品が 162点（94.2%）と最も多く、磁器製品・土師質製品・瓦類は少数である。

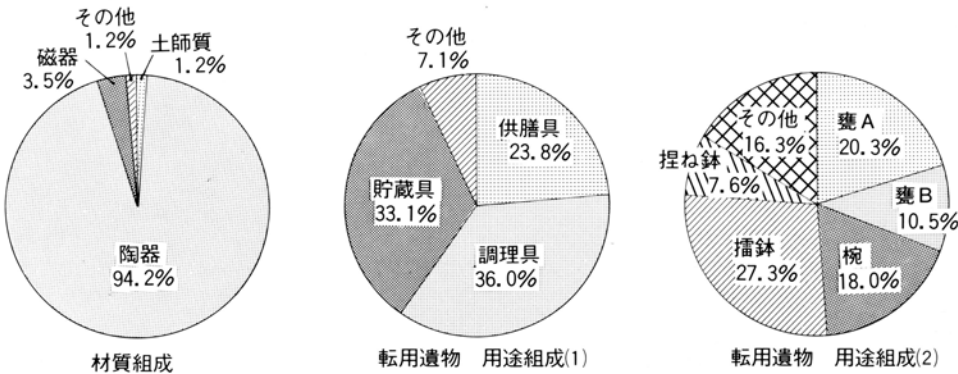
加工円盤の用途については、呪術具・冥銭・遊具・飛礫など様々な説があり、未だ定説はない。本遺跡における加工円盤については、出土状況や形態などから推定してみると、出土地点の大部分が居住域付近に限定されていること、多種多様な器種が利用されていることなどから、子供たちが投げて遊ぶ遊具であった可能性が高いものと考えられる。（小嶋廣也）

<参考文献>

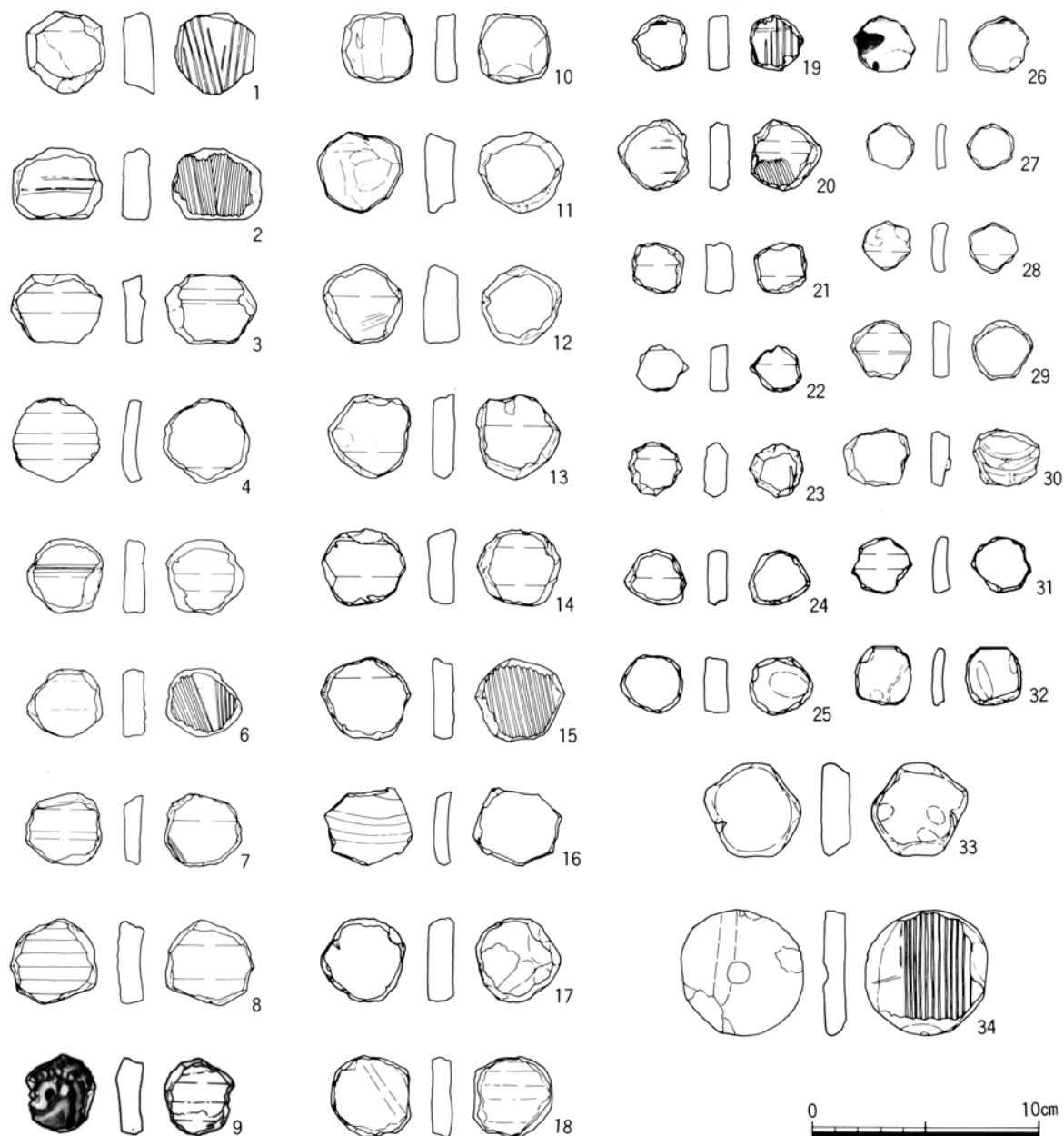
赤塚美智子 「第Ⅴ章 考察 4. 加工円盤」 『土田遺跡』（財愛知県埋蔵文化財センター 1987

調査区	91D1	91D2	91D1	91D1	91D1	91D1	91D1	91D1	92B2	92B1	92B1	92B1	92B1	92B2	92B2	91C	91C	92A	91B	91B	91D2	92B2	その他	計
遺構番号	SD002	SD202	SK015	SK019	SK022	SK027	SK034	SK036	SD104	SE004	SK077	SK079	SK087	SK088	SK240	SK289	SK105	SK003	SK177	SD025	SK181	整地層	整地層	
甕 A	1		1	1				2			2			1		1			2		2	3	19	35
甕 B								1									1			1	3	3	9	18
椀		1						2				1	1						1		3		22	31
播鉢	3				1	1	1	2	1	2									9		7	7	13	47
捏ね鉢	1										2										4		6	13
その他								1			1				1	1	1	1	1		5		15	28
計	5	1	1	1	1	1	1	8	1	2	5	1	1	1	1	2	1	2	1	13	1	24	13	172

第27表 加工円盤出土遺構一覧表

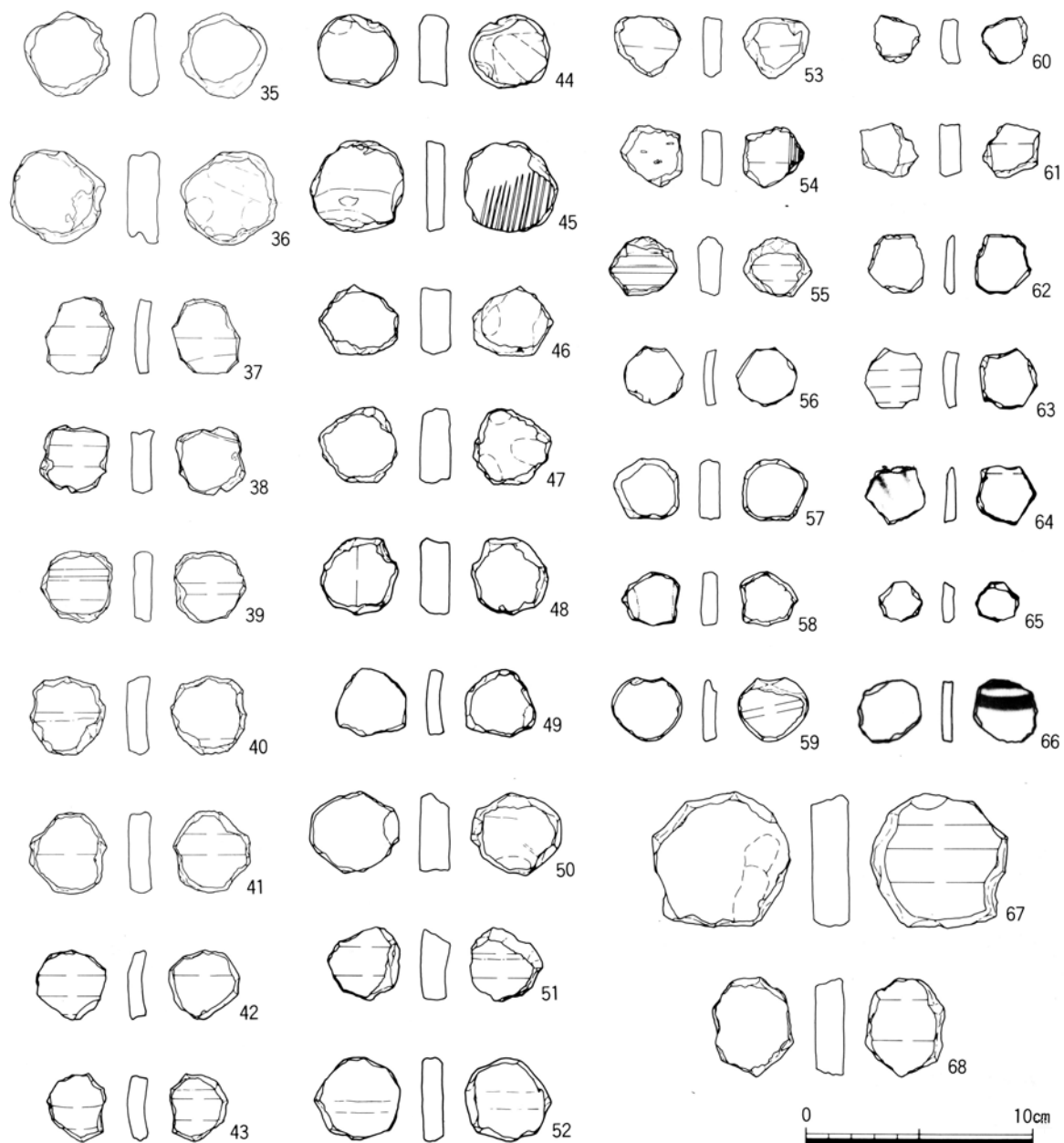


第94図 加工円盤材質・転用遺物組成図



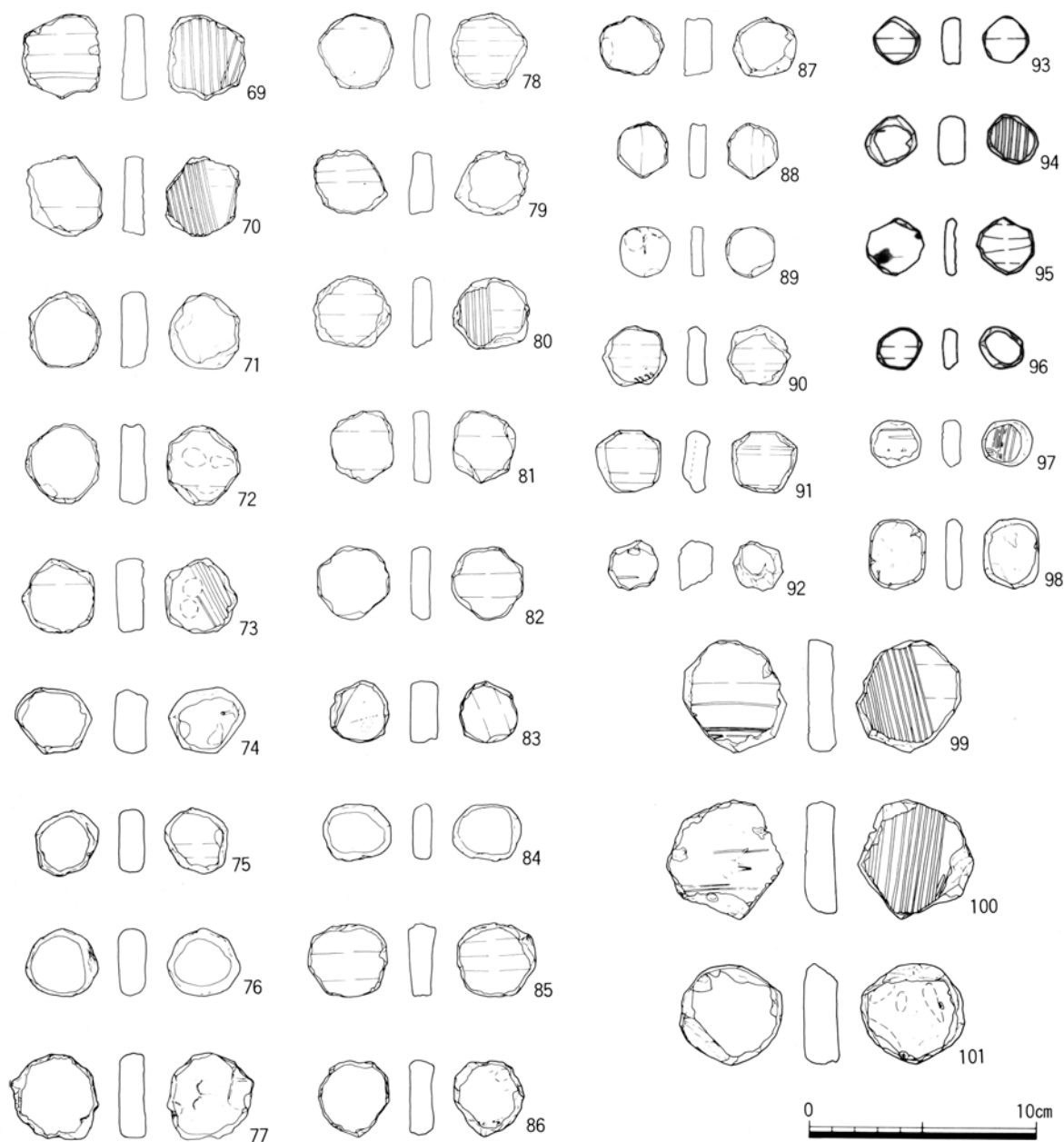
遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	法 量 (cm・g)	釉薬等	備 考	登録 番号	遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	法 量 (cm・g)	釉薬等	備 考	登録 番号
		長径 短径 厚さ 重さ						長径 短径 厚さ 重さ			
1	91D1 SD002	3.7 3.4 1.3 18.8	鉄釉	搦鉢	E-636	18	91D 南トレンチ	3.5 3.4 0.9 14.1	灰釉	捏ね鉢	E-653
2	〃 〃	3.9 3.1 1.2 20.2	〃	〃	E-637	19	91D1 SK027	2.5 2.3 0.9 6.4	鉄釉	搦鉢	E-654
3	〃 〃	3.9 3.0 0.9 13.1	〃	〃	E-638	20	〃 SK036	3.1 3.0 0.9 10.0	〃	〃	E-655
4	〃 SK036	3.3 3.2 0.7 10.8	〃	椀	E-639	21	〃 SK022	2.2 2.2 1.2 7.7	〃	〃	E-656
5	91D2 整地層	3.3 3.3 1.0 13.5	〃	搦鉢	E-640	22	91D2 SX201	2.2 2.0 0.8 4.6	灰釉	椀	E-657
6	〃 〃	3.3 3.1 1.0 11.4	〃	〃	E-641	23	〃 整地層	2.4 2.3 1.0 6.0	鉄釉	搦鉢	E-658
7	〃 〃	3.4 3.3 0.8 10.8	〃	〃	E-642	24	〃 〃	2.5 2.4 0.8 6.9	—	鉢	E-659
8	〃 〃	3.9 3.7 1.0 19.5	〃	甕B-4	E-643	25	91D1 検 I	2.7 2.4 1.1 8.9	指押え	甕A	E-660
9	〃 〃	3.5 2.8 1.1 13.0	〃	瓶掛	E-644	26	〃 〃	2.6 2.4 0.4 3.7	—	染付椀	E-661
10	〃 〃	3.2 3.0 1.0 12.4	灰釉	捏ね鉢	E-645	27	〃 〃	2.1 2.0 0.4 2.1	鉄釉	椀	E-662
11	〃 〃	3.7 3.5 1.3 22.0	—	甕A	E-646	28	91D 南トレンチ	2.2 2.1 0.7 3.0	灰釉	〃	E-663
12	〃 〃	3.5 3.4 1.6 19.8	—	〃	E-647	29	〃 〃	2.7 2.5 0.8 6.1	鉄釉	〃	E-664
13	〃 〃	3.7 3.6 1.0 17.1	鉄釉	甕B-4	E-648	30	〃 〃	2.9 2.5 1.0 6.7	ナデ	皿	E-665
14	〃 〃	3.6 3.3 1.2 17.4	灰釉	捏ね鉢	E-649	31	〃 〃	2.5 2.4 0.8 4.9	灰釉	椀	E-666
15	91D 南トレンチ	3.9 3.7 0.9 16.8	鉄釉	搦鉢	E-650	32	〃 表土	2.5 2.4 0.5 4.7	〃	〃	E-667
16	〃 〃	3.6 3.2 0.7 10.3	〃	椀	E-651	33	91D1 検 I	4.1 4.1 1.2 22.8	指押え	甕A	E-668
17	〃 〃	3.7 3.6 1.1 18.0	指押え	甕A	E-652	34	〃 〃	5.6 5.3 1.0 39.3	鉄釉	搦鉢	E-669

第95図 近世の遺物 (45) 加工円盤① (1:3)



遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	法 量 (cm・g)				釉薬等	備 考	登録 番号	遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	法 量 (cm・g)				釉薬等	備 考	登録 番号
			長径	短径	厚さ	重さ							長径	短径	厚さ	重さ			
35	91D1	SD002	3.7	3.7	1.3	18.2	灰釉	捏ね鉢	E-670	52	91D	表土	3.7	3.6	0.9	15.1	鉄釉	甕B-4	E-687
36	〃	SK019	4.1	4.1	1.4	25.6	指押え	甕A	E-671	53	91D1	SK034	2.7	2.6	0.8	6.8	〃	搦鉢	E-688
37	〃	SK036	3.3	2.9	0.6	7.3	ナデ	瓶	E-672	54	〃	SK036	2.6	2.5	0.9	7.4	〃	〃	E-689
38	91D2	整地層	2.9	2.8	1.0	9.9	鉄釉	甕B-4	E-673	55	〃	〃	3.0	2.6	1.1	8.2	〃	甕B-4	E-690
39	〃	〃	3.1	3.1	0.8	9.7	〃	〃	E-674	56	91D2	整地層	2.6	2.4	0.4	4.2	透明釉	椀	E-691
40	〃	〃	3.4	3.3	1.0	11.9	灰釉	捏ね鉢	E-675	57	91D1	検I	2.8	2.6	0.9	9.3	鉄釉	甕B-4	E-692
41	〃	〃	3.6	3.2	0.9	14.0	〃	〃	E-676	58	〃	〃	2.4	2.3	0.7	5.7	〃	〃	E-693
42	〃	〃	3.1	3.0	0.7	7.5	鉄釉	椀	E-677	59	〃	〃	3.0	2.7	0.6	6.0	—	内耳鍋	E-694
43	〃	〃	3.0	2.5	0.8	7.4	〃	瓶掛	E-678	60	〃	〃	2.0	1.9	0.8	3.4	灰釉	椀	E-695
44	〃	〃	3.5	3.1	1.2	16.2	指押え	甕A	E-679	61	〃	〃	2.4	2.3	1.0	6.0	鉄釉	甕B-4	E-696
45	91D1	検I	4.0	4.0	0.8	17.1	鉄釉	搦鉢	E-680	62	91D	南トレンチ	2.6	2.4	0.4	3.3	灰釉	椀	E-697
46	〃	〃	3.5	3.4	1.3	15.2	指押え	甕A	E-681	63	〃	表土	2.5	2.4	0.6	4.5	〃	〃	E-698
47	〃	〃	3.2	3.1	1.3	14.3	〃	〃	E-682	64	〃	〃	2.5	2.4	0.5	3.4	〃	〃	E-699
48	〃	〃	3.3	3.3	1.3	17.7	—	手洗鉢	E-683	65	〃	〃	1.9	1.7	0.6	1.9	〃	〃	E-700
49	〃	〃	2.9	2.8	0.7	6.8	灰釉	椀	E-684	66	〃	〃	2.8	2.6	0.5	5.3	—	染付皿	E-701
50	91D	南トレンチ	3.9	3.5	1.3	21.1	指押え	甕A	E-685	67	91D1	検I	6.0	5.8	1.6	79.5	—	甕A	E-702
51	〃	〃	3.1	3.1	1.3	13.8	鉄釉	火鉢	E-686	68	91D	南トレンチ	4.3	3.4	1.3	25.0	灰釉	手洗鉢	E-703

第96図 近世の遺物 (46) 加工円盤② (1:3)



遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	法 量 (cm・g)	長径	短径	厚さ	重さ	釉薬等	備 考	登録 番号	遺物 番号	調査地点 調査区 遺構	法 量 (cm・g)	長径	短径	厚さ	重さ	釉薬等	備 考	登録 番号
69	92B1 SE004	3.8	3.4	1.1	16.7		鉄釉	擂鉢	E-704	86	92B 南壁	3.3	3.1	1.0	12.0		—	甕A	E-721
70	〃	3.5	3.1	1.0	12.9		〃	〃	E-705	87	92B1 SK088	2.8	2.6	1.2	10.2		—	〃	E-722
71	〃 SK077	3.3	3.1	1.1	13.5		—	甕A	E-706	88	〃 SK079	2.5	2.2	0.7	5.0		灰釉	椀	E-723
72	〃	3.5	3.2	1.2	13.0		—	〃	E-707	89	92B2 SK240	2.2	2.2	0.5	3.2		—	内耳鍋	E-724
73	92B2 整地層	3.2	3.2	1.2	15.6		鉄釉	擂鉢	E-708	90	〃 整地層	2.8	2.6	0.8	6.7		鉄釉	擂鉢	E-725
74	〃	3.3	2.8	1.4	14.2		—	甕A	E-709	91	〃	2.8	2.6	1.0	9.8		〃	〃	E-726
75	〃	2.8	2.8	1.1	10.5		鉄釉	甕B-4	E-710	92	〃	2.2	2.1	1.5	7.3		—	甕A	E-727
76	92B1 検I	3.2	3.0	1.2	12.8		—	甕A	E-711	93	〃	2.0	2.0	0.8	4.2		鉄釉	甕B-4	E-728
77	〃	3.7	3.6	1.2	18.0		—	〃	E-712	94	92B1 検I	2.3	2.1	1.2	6.8		〃	擂鉢	E-729
78	〃	3.3	3.3	0.6	9.6		灰釉	瓶	E-713	95	〃	2.5	2.5	0.5	3.9		—	御神酒德利	E-730
79	92B2 検II	2.9	2.8	1.1	10.5		鉄釉	擂鉢	E-714	96	92B2 検II	1.9	1.8	0.6	3.5		灰釉	椀	E-731
80	92B 北トレン	3.3	3.1	0.8	11.6		〃	〃	E-715	97	92B 南壁	2.2	2.1	0.8	4.3		鉄釉	擂鉢	E-732
81	〃 北壁	3.2	2.7	0.8	7.4		〃	〃	E-716	98	〃 北壁	3.1	2.5	0.7	7.5		灰釉	椀	E-733
82	〃 北壁	3.2	3.2	0.8	12.4		灰釉	水甕	E-717	99	92B2 整地層	4.8	4.5	1.2	30.7		鉄釉	〃	E-734
83	〃 表土	2.7	2.6	1.2	11.9		鉄釉	甕B-4	E-718	100	〃 SD209	5.1	4.9	1.4	40.1		〃	擂鉢	E-735
84	〃 北壁	3.0	2.4	0.8	7.7		—	甕A	E-719	101	〃 SK289	4.4	4.4	1.5	34.3		—	甕A	E-736
85	〃 北壁	3.5	3.2	1.2	14.6		灰釉	椀	E-720										

第97図 近世の遺物 (47) 加工円盤③ (1:3)

6. 瓦類

出土した瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、棧瓦、平瓦、鬼瓦の6種類である。軒棧瓦が主体を占める。鬼瓦については、良好な資料の出土が見られなかったため、図示はしていない。また、刻印のある瓦は、破片資料から抽出したものである。

以下、種類別にその詳細を見ていきたい。

軒丸瓦（1～4）　すべて連珠三つ巴紋である。珠文の数は推定で1は13個、2～4は12個である。

巴の巻き込み方向も1のみ右巻きで、他はすべて左巻きである。珠文径と巴頭が小さく尾が長いタイプ（1・2）と、珠文径と巴頭が大きく尾が短いタイプ（3・4）の2つのタイプがある。

軒平瓦（5）　瓦当文は、中心飾りに3葉と3つの珠点を置き、左右に唐草文を配している。

軒平部（6～12）　平部のみ残存しているもので、軒平瓦か軒棧瓦の平部である。

軒棧瓦（13～22）　丸部が左側にあるもの（13～21）と、右側にあるもの（22）がある。前者には瓦当径の大（13・14）、中（15～20）、小（21）の3種があり、大は珠文数が8個、中は12個、小は11個である。小のものは1点のみしか認められていないが、丸部は中と同じで、平部の文様が異っている。平部との組合せの傾向として、瓦当径の大きなものには11・12のような文様がつけられ、中の瓦当径のものには、おそらく7のような文様の平部が組み合わされていたと思われる。

丸部（23～28）　軒丸部のみの残存であるが、軒丸瓦か軒棧瓦のいずれかである。巴の巻き込み方向に左右の別がある。左巻きのもの（23～26）は珠文数が12個で、巴径、巴頭の大きさ、尾の長さ、珠文径などに違いがある。右巻きのもの（27・28）は、2点とも小振りで珠文数は10個で、巴径や珠文径も小なつくりである。

棧瓦（29・30）　2点とも、頭に切り込みをもつものである。

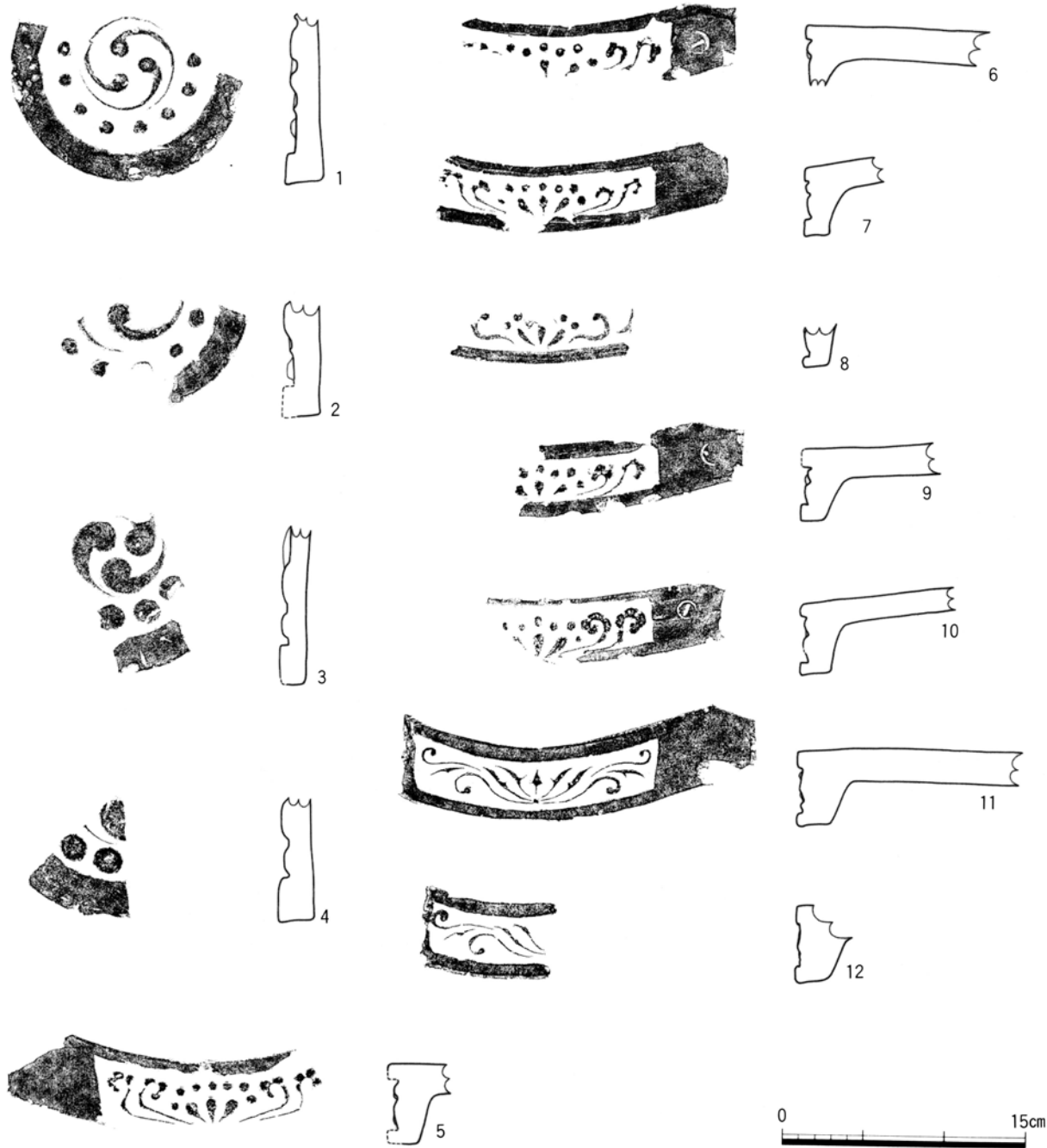
丸瓦（31・32）　凹部に、布製紐痕や棒状圧痕が全体にわたって見られる。側縁部の面取り角度が内側に傾斜している。凸面は、体部に匏磨きが施されている。

刻印のある瓦（33～38）　破片資料からの抽出のため、詳細は不明であるが、ここでは主な6点を図示した。33～37は平瓦、棧瓦の木口にあり、38は文様面に捺されている。文様面に刻印のある例としては、他に6・9・10がある。9は判別困難なものであるが、丸に二の字が捺されている。33は製作者の姓名と思われる「知多小八□長」という印が捺されている。製作者の刻印とすれば、供給元を示す資料として注目される。34・35のような刻印が最も多く、丸に一の文様である。36・37の山に本、38の丸に本は屋号ではないかと考えられる。

（伊藤直子）

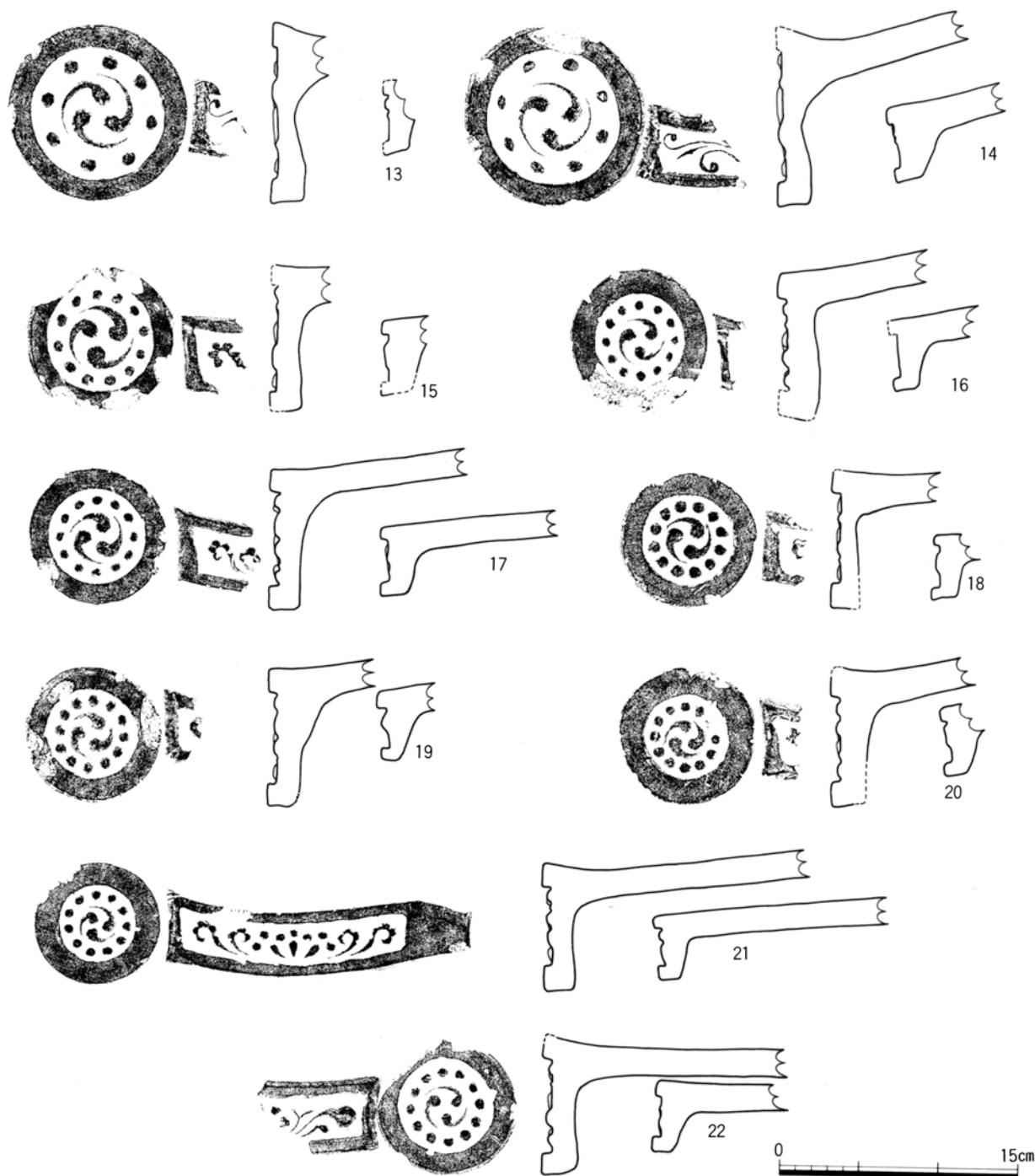
<参考文献>

『東京大学本郷構内の遺跡　山上会館・御殿下記念館地点』　東京大学埋蔵文化財調査室　1990



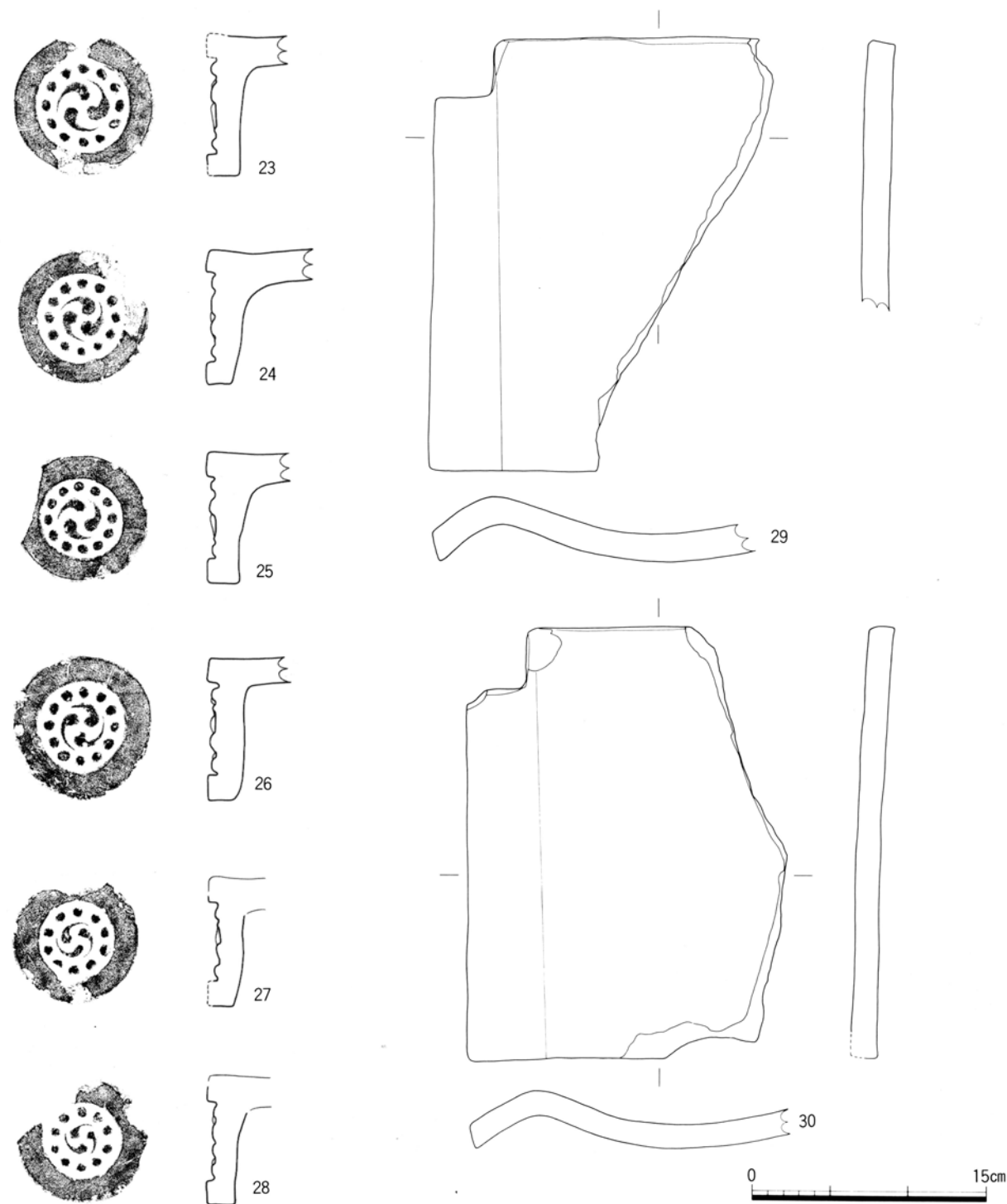
遺物 番号	調査地点		種 類	軒 丸 部 (cm)					軒 平 部 (cm)				備 考	登録 番号
	調査区	遺 構		径	内区径	珠文径	珠文数	巴 径	幅	内区幅	厚 さ	内区厚		
1	91D1	SK020	軒丸瓦	14.5	10.5	1.1	(8)	6.2	—	—	—	—		E-737
2	〃	検Ⅰ	〃	—	—	1.4	(5)	—	—	—	—	—		E-738
3	91D2	整地層	〃	—	—	1.4	(3)	6.0	—	—	—	—		E-739
4	〃	〃	〃	—	—	1.9	(2)	—	—	—	—	—		E-740
5	〃	〃	軒平瓦	—	—	—	—	—	—	—	4.9	3.1		E-741
6	〃	〃	軒平部	—	—	—	—	—	—	—	4.6	3.0	軒平瓦か軒棧瓦, 刻印	E-742
7	〃	SK240	〃	—	—	—	—	—	—	13.5	4.3	2.5	〃	E-743
8	91D1	検Ⅰ	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〃	E-744
9	91C	SD024	〃	—	—	—	—	—	—	—	4.5	2.4	〃, 刻印	E-745
10	91D1	検Ⅰ	〃	—	—	—	—	—	—	—	4.3	2.9	〃, 〃	E-746
11	91D2	SK240	〃	—	—	—	—	—	21.6	14.8	4.7	2.8	軒棧瓦	E-747
12	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	4.8	2.7	〃	E-748

第98図 近世の遺物 (48) 瓦類① (1:4)



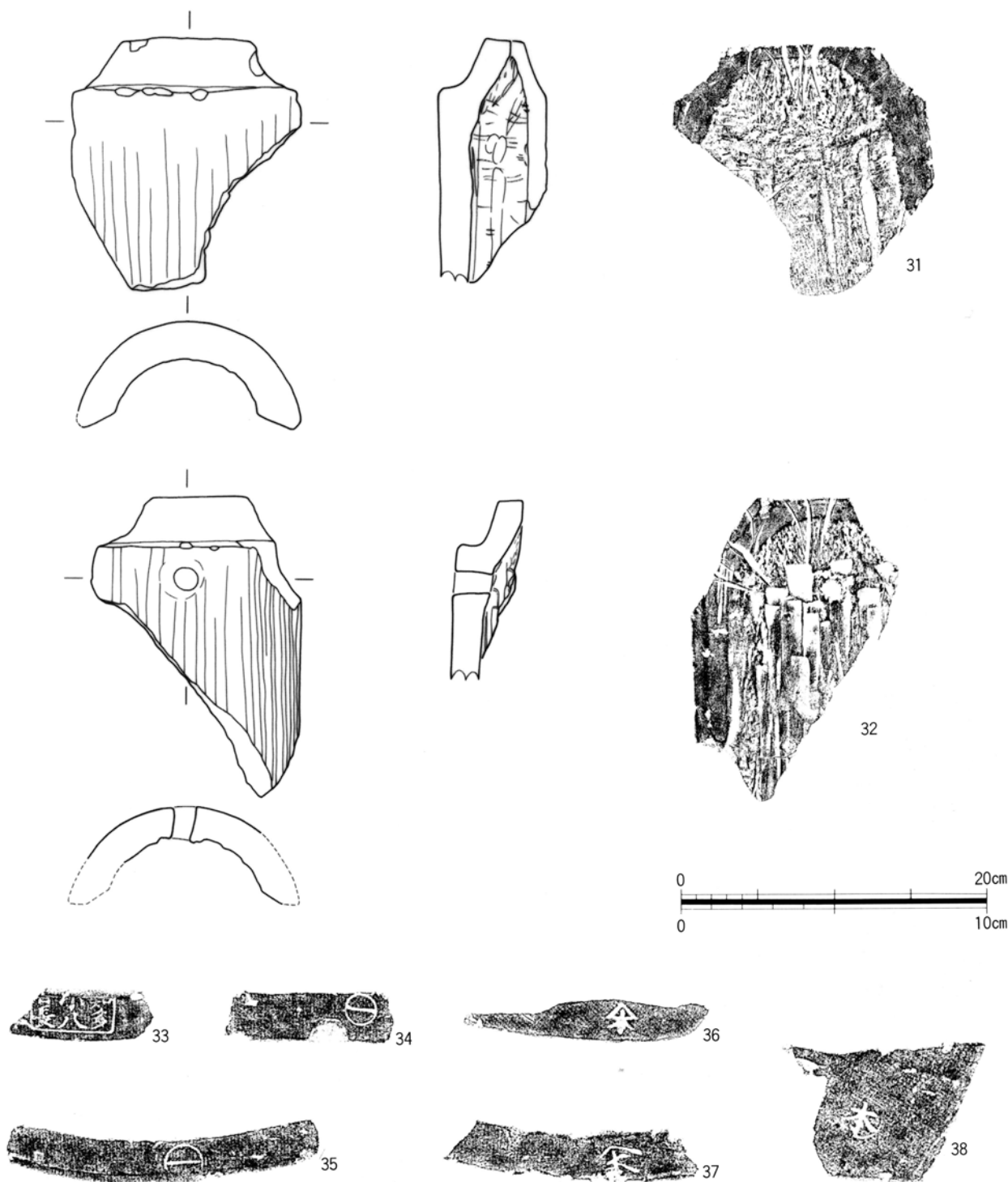
遺物 番号	調査地点 調査区 遺 構	種 類	軒 丸 部 (cm)					軒 平 部 (cm)				備 考	登録 番号
			径	内区径	珠文径	珠文数	巴 径	幅	内区幅	厚 さ	内区厚		
13	91D1	SK014	軒棧瓦	11.5	8.2	1.2	8	5.0	—	—	4.7	2.8	E-749
14	〃	SD002	〃	11.6	8.3	1.1	8	5.1	—	—	4.7	2.8	E-750
15	〃	検Ⅰ	〃	9.3	6.7	0.9	12	4.3	—	—	4.8	3.1	E-751
16	91D2	整地層	〃	8.9	6.0	0.9	12	3.1	—	—	4.5	2.9	E-752
17	91D1	SK019	〃	8.9	5.9	0.9	12	3.6	—	—	4.3	2.6	E-753
18	〃	SE002	〃	8.8	5.7	0.9	12	3.1	—	—	4.2	2.6	E-754
19	91D2	整地層	〃	8.7	5.8	0.9	12	3.1	—	—	4.2	2.5	E-755
20	91D1	SD002	〃	8.9	5.3	0.9	12	2.6	—	—	4.5	2.6	E-756
21	91D2	整地層	〃	8.2	4.9	0.8	11	3.7	19.5	14.0	4.2	2.5	E-757
22	91D1	SD002	〃	8.9	6.0	0.9	12	—	—	—	4.5	2.6	E-758

第99図 近世の遺物 (49) 瓦類② (1:4)



遺物 番号	調査地点 調査区 遺 構	種 類	軒 丸 部 (cm)					軒 平 部 (cm)				備 考	登録 番号
			径	内区径	珠文径	珠文数	巴 径	幅	内区幅	厚 さ	内区厚		
23	91D2	整地層	軒丸部	9.0	6.1	0.9	12	—	—	—	—	—	E-759
24	〃	〃	〃	8.8	5.8	1.0	12	—	—	—	—	—	E-760
25	〃	〃	〃	8.4	5.3	0.8	12	—	—	—	—	—	E-761
26	〃	〃	〃	9.4	5.9	1.0	12	—	—	—	—	—	E-762
27	〃	〃	〃	8.3	5.0	0.8	10	—	—	—	—	—	E-763
28	〃	〃	〃	8.3	4.9	0.9	10	—	—	—	—	—	E-764
29	〃	〃	棧瓦	—	—	—	—	—	—	—	—	最大長20.5cm, 最大幅27.8cm, 厚さ1.9cm	E-765
30	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	〃 20.2cm, 〃 27.6cm, 〃 1.6cm	E-766

第100図 近世の遺物 (50) 瓦類③ (1:4)



遺物 番号	調査地点 調査区 遺 構	種 類	軒 丸 部 (cm)					軒 平 部 (cm)				備 考	登録 番号
			径	内区径	珠文径	珠文数	巴 径	幅	内区幅	厚 さ	内区厚		
31	91D2	整地層	丸瓦	—	—	—	—	—	—	—	—	最大長16.4cm, 最大幅14.8cm, 厚さ2.5cm	E-767
32	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	〃 19.8cm, 〃 13.8cm, 〃 2.0cm	E-768
33	91D1	SK014	平か椀	—	—	—	—	—	—	—	—	刻印「知多小八□長」	E-769
34	〃	SK036	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	〃 「丸に一」	E-770
35	91D2	SK240	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	〃 「 〃 」	E-771
36	〃	整地層	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	〃 「山に本」	E-772
37	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	—	—	—	〃 「 〃 」	E-773
38	〃	〃	軒平部	—	—	—	—	—	—	—	—	〃 「丸に本」	E-774

第101図 近世の遺物 (51) 瓦類④ (31・32は1:4, 他は1:2)

7. 人形・ミニチュア類

本項で対象とする遺物は、土師質・陶質・磁質の人形類とミニチュア類に限定し、陶磁器類の分類に含まれるものについては、その用途に準じて他項（4. 陶磁器類）において扱うものとする。また、出土地点を確定し得る資料が少量であったため、空間的な広がりあるいは集中を捉えるまでには至らなかった。形状を確認することのできたものは、人形類32点、ミニチュア類8点、その他（人形類やミニチュア類と限定できない小型製品）が23点で、総数にして63点であった。材質面から見てみると、土師質が大部分を占める。胎土の色調では淡橙色が多く、これと橙色とが4分の3を占め、残りはほとんどが白色系である。素地に施釉や着彩をしていたことがわかるものもあるが、本来どの程度の割合でそうした手が加えられていたかは明らかではない。

（1）人形類

人形類は土製品が主で、他に陶製、磁製のものがある。人物・動物を祖形とし、その多くは型起しによって成形されている。人形4点（7～10）は、手捻りである。型起しのものについては、型押しの際に使用した雲母粉の付着や内面に指頭圧痕が確認できる。

これらについてモチーフによる分類を行うと、以下ようになる。人物をモチーフとしたものには神像も含め、大黒天（1・2）、恵比寿（3）、天神（4・5）、人型（6～10）がある。すべて、土師質である。1の大黒天は、打出の小槌を右手に持して袋を背負い、俵の上に乗っている。俵には、宝珠が描かれているが、胸部にも同形でやや小振りの宝珠と思われるものが描かれている。陰刻部分に墨が残ることから、墨入れされていた可能性がある。2の大黒天は、やや小型であるが、全面に朱彩が残っている。3の恵比寿は両手で鯛を抱えるもので、中空で底部に穿孔がある。4は檀上の座像で、天神あるいは雛人形の男雛とも考えられる。5は全体に透明釉、衣など部分的には緑釉が施されていたようである。6は型起しの人物像で、着物の左袖と裾以外を欠損しているため特定はできない。7は童子と考えられる。8・9は脚部の作り方から他の製品との組合せが想定される。10は座像で、人物ではなく猿を象った可能性もある。11は色絵の唐子座像で、部分的に赤の彩色が残っている。型起し成形で中空であり、18世紀前半の有田の製品である。

動物をモチーフにしたものには、鳥（12・13・14・18）、猿（15）、馬（16・17）があり、このうち18は、鳩笛の形態に似ている。12・15・18が磁製の他は、すべて土師質製品である。12は11と同様に18世紀前半の有田産磁製品で、鳥の羽が赤と黒の彩色で描かれている。13・14はどちらも中空で型起し成形であり、13は頭部～肩部、14は尾部のみの残存であるが、ほぼ同形態のものと思われる。15の三猿は、胡粉を塗り全体に赤茶色の顔料が塗られていたようである。16・17の馬は、どちらも型作りの前後二枚合わせで、16には馬の鞍の上に手捻りの人形が乗せられていたようである。また、尾は線刻によって表現されている。17も同様の馬であると考えられるが、細部については明かではない。18は透明釉が施され、尾の部分に笛の吹き口があったものと思われる。

（2）ミニチュア類

ここでミニチュア類として扱うのは、日常雑器や建造物を模倣した小型の製品であるが、原型とは

実際の使用方法が異なるものとする。

形態が明確なものには、日常雑器をモチーフとした蓋(19)、風炉(20)、植木鉢(21)がある。19の磁質の釜の蓋は型作りであり、胡粉を塗った上に黄色の彩色が施されていたようである。20の風炉は、型作りで内面には指撫でによる成形痕が見られる。底部外面に三足が付いていたと考えられる形跡があり、完形品では三足付きの風炉であったと思われる。21の植木鉢は、ろくろ成形で素焼きの陶器である。底部に径約6mmの孔があいている。建造物をモチーフとしたものとして家(22)があり、型起こしで対角線で二つ合わせになっている。

(3) その他

(1)・(2)に含まれないものとして、面(23・24)、面型(25)、土製の鈴(26~28)、六角形の台座(29)、扇型製品(30)、松の実を象った製品(31)が出土している。23は岡女を象った面であり、その緻密な胎土から京都伏見産であることがうかがわれる。裏面には左右に梁が渡されており、その中央にある穿孔は紐を通すため、あるいは金具に刺すためにあけられたのではないだろうか。24は帽子を被った翁の面で、目の部分に穿孔があり、目・眉・髪などに黒の彩色の痕が残っている。25の面型には、型を使用して面を作成した際の雲母粉が見られる。額に三本の皺が刻まれている。26・27・28は土鈴であり、表面に朱彩が残っている。内部に土玉が入ったものが2点ある。29の台座は上面に剝離痕が認められ、二段になった台座の周囲には型押しで付けられた文様が残されている。30は扇型に、型押しの日の出・松の木・岩が表現されているものだが、単独で存在していたとは考えがたい。31は白磁製で、欠損状態から他の製品の一部とも思われる。

(伊藤直子)

<参考文献>

塩見青嵐 『伏見人形』 河原書店 1967

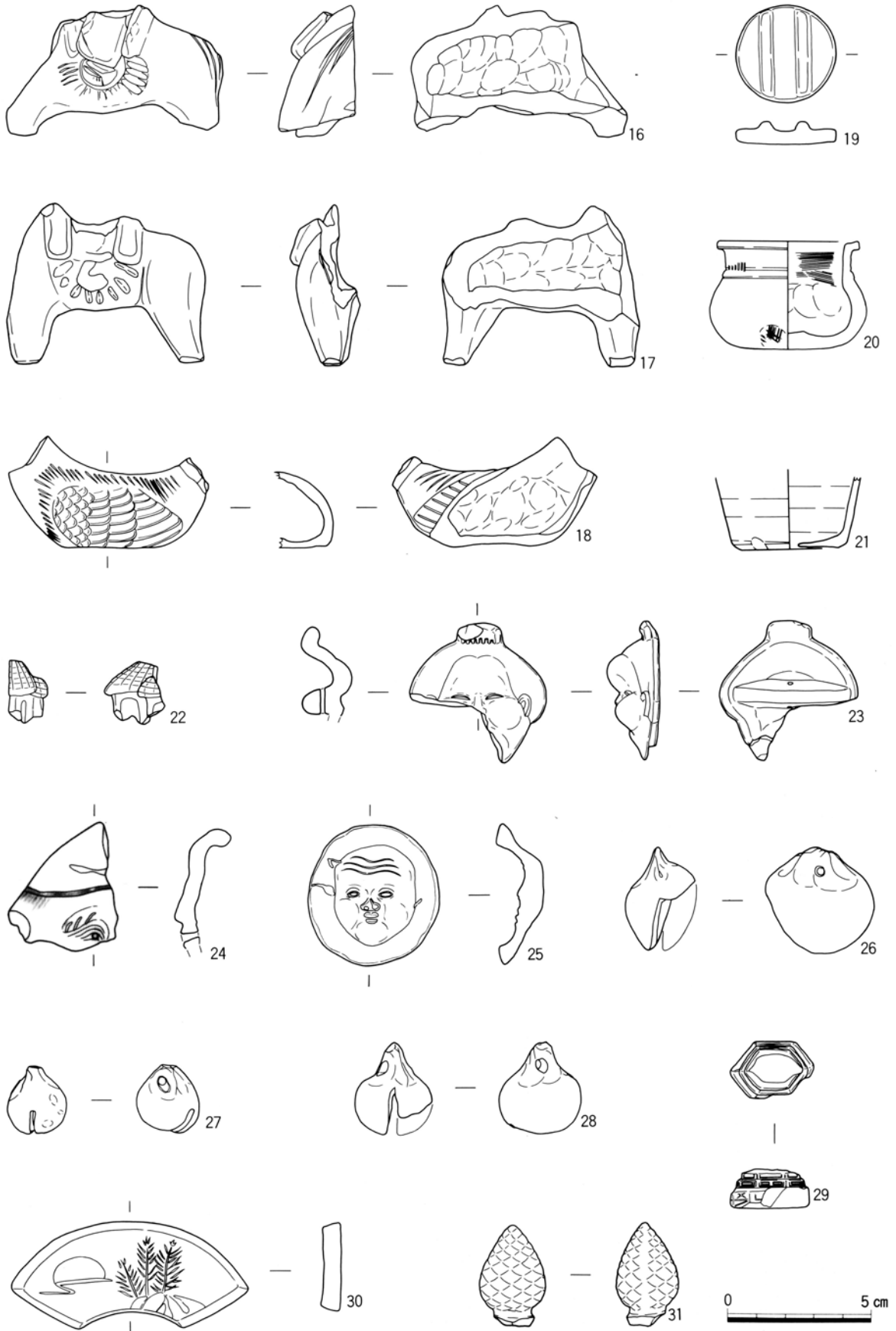
『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』 (財)愛知県埋蔵文化財センター 1992

遺物 番号	調査地点 調査区	遺構	材質	釉薬	種類		成形 技法	法 量 (cm)			備考	登録 番号
					種類	形状		高さ	最大幅	その他		
1	91B	SD025	土師質	—	人形類	大黒天	型作り	4.5	2.7	奥行1.7	墨入れか、底部穿孔	E-775
2	91D1	検Ⅰ	〃	—	〃	〃	〃	3.4	2.1	〃 2.1	外面に雲母付着	E-776
3	92B	南壁	〃	—	〃	恵比寿	〃	5.1	2.8	〃 1.3	底部穿孔	E-777
4	91D1	SD002	〃	透明釉	〃	天神	〃	3.2	3.7	〃 0.8	緑釉かかる	E-778
5	92B2	整地層	〃	—	〃	〃	〃	2.5	3.0	〃 1.6	底部穿孔	E-779
6	91D1	検Ⅰ	〃	—	〃	人型	〃	3.8	3.4	〃 1.5	底部穿孔	E-780
7	92B1	SK057	〃	—	〃	〃	手捻り	3.2	2.3	〃 1.3	〃	E-781
8	〃	SK077	〃	—	〃	〃	〃	4.1	3.4	〃 1.6	馬乗りか	E-782
9	92B	トレンチ	〃	—	〃	〃	〃	3.3	3.0	〃 1.9	〃	E-783
10	〃	南壁	〃	—	〃	〃	〃	4.2	3.2	〃 1.8	〃	E-784
11	91D2	SD202	磁質	透明釉	〃	〃	〃	2.3	3.0	〃 4.3	色絵(赤)	E-785
12	91D1	検Ⅰ	〃	〃	〃	鳥	〃	5.7	1.1	〃 4.0	色絵(赤・黒)、鶏か	E-786
13	91D2	SX201	土師質	—	〃	〃	型作り	4.6	3.2	〃 1.5	〃	E-787
14	91B	SD025	〃	—	〃	〃	〃	3.1	3.0	〃 4.2	底部穿孔	E-788
15	92B	表土	磁質	—	〃	猿	〃	2.9	4.6	〃 2.5	赤茶色の彩色、三猿	E-789
16	91D2	SK228	土師質	—	〃	馬	〃	4.5	7.3	〃 1.6	人乗せ	E-790
17	92B1	検Ⅰ	〃	—	〃	〃	〃	5.6	6.7	〃 2.1	〃	E-791
18	91D1	〃	磁質	透明釉	〃	鳥	〃	3.8	7.1	〃 3.3	鳩笛	E-792
19	〃	〃	〃	—	ミニチュア類	蓋	〃	1.9	3.4	厚さ0.7	黄色の彩色	E-793
20	〃	SK011	土師質	—	〃	風炉	〃	3.7	5.5	底径3.0、口径4.9	三足付きか	E-794
21	91D2	整地層	陶質	—	〃	植木鉢	ろくろ	2.5	5.0	底径3.4	〃	E-795
22	92B1	SK068	土師質	—	〃	家	型作り	2.2	1.9	〃 1.3	〃	E-796
23	92B	トレンチ	〃	—	その他	岡女面	〃	5.9	4.8	〃 1.8	胎土はきめ細かく褐色	E-797
24	91C	SD025	〃	—	〃	翁面	〃	4.2	3.8	〃	眼・眉・髪等に黒彩色	E-798
25	92B1	SD011	〃	—	〃	面型	〃	4.9	4.6	奥行0.9	内面に雲母粉を残す	E-799
26	91D2	整地層	〃	—	〃	土鈴	手捻り	3.7	3.2	〃	赤色の彩色	E-800
27	92B2	〃	〃	—	〃	〃	〃	2.4	2.1	〃	赤色の彩色、土玉入り	E-801
28	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	3.3	2.8	〃	土玉入り	E-802
29	91D1	SK011	〃	—	〃	台座	型作り	1.4	2.9	奥行1.9	六角形	E-803
30	91C	検Ⅰ	〃	—	〃	扇形製品	〃	3.2	8.4	厚さ0.7	日の出・松の木・岩	E-804
31	92B1	SD011	磁質	透明釉	〃	松の実	〃	3.5	2.4	奥行2.4	〃	E-805

第28表 人形・ミニチュア類観察表



第102図 近世の遺物 (52) 人形・ミニチュア類① (1:2)



第103図 近世の遺物 (53) 人形・ミニチュア類② (1:2)

8. 木製品

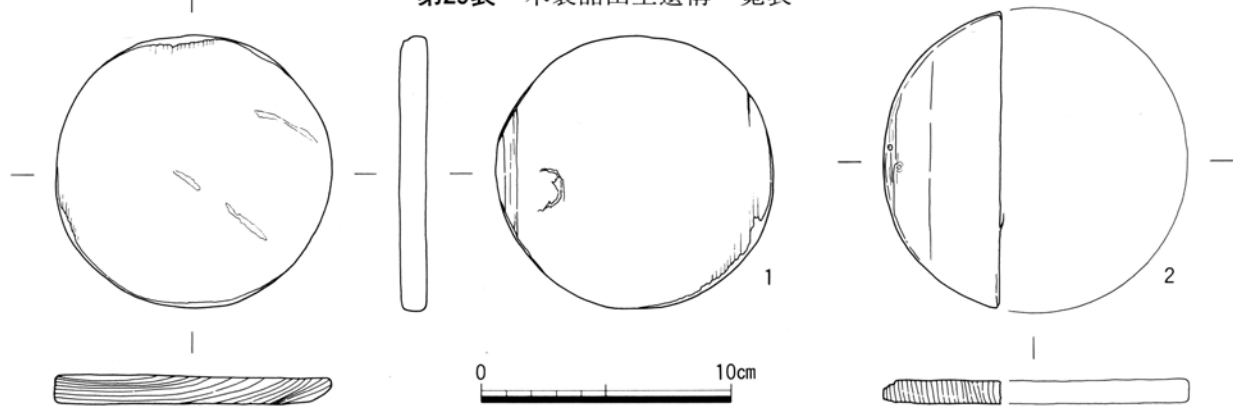
本遺跡の遺構や整地層などより出土した木製品は、用途不明のものまで含めると破片で48点ある。遺構より出土したものは少なく、また全体の点数も少ないために、木製品の詳細な分類は実施していない。出土した遺物は、下駄が11点、箸が4点、曲物の底が3点、椀・桶の横板・箱の一部が各2点、建具・扇・栓・刷毛などが各1点、不明のものが20点であり、他に漆片が91D2区で検出されたSK101・SK127から出土している。

1・2は曲物の底板で、径が10cm前後の小型品で、柄杓のようなものと想定される。側板も一部出土しており、かなり薄く削られ接合部分には桜の皮が用いられていたようである。3～5は下駄で、3・4は一木造り、5は差し歯のもので、焼印が見られる。全体的に、一木造りの下駄が多いように思われる。6は漆椀であり、黒漆が内外面に塗られてはいるが、文様のような加飾は見られない。7は箱の一部と思われるが、外面には黒漆が塗られ、上部には金具が取り付けられている。8は箸であり、他に同様の大きさのものが3本出土している。9は底部にピンのような金具があることから扇子の要の部分、10は刷毛の柄の部分と思われる。11は竹製で、用途は不明である。12は桶の側板と思われるが、その径の大きさから大型の製品であることが想定される。13は建具の一部と見られる。

今回の調査では、遺構より出土した木製品が少ないとはいえ、居住域と考えられる91D区や92B区の区画溝や井戸、水田の用水の溝などから多く出土している。(小嶋廣也)

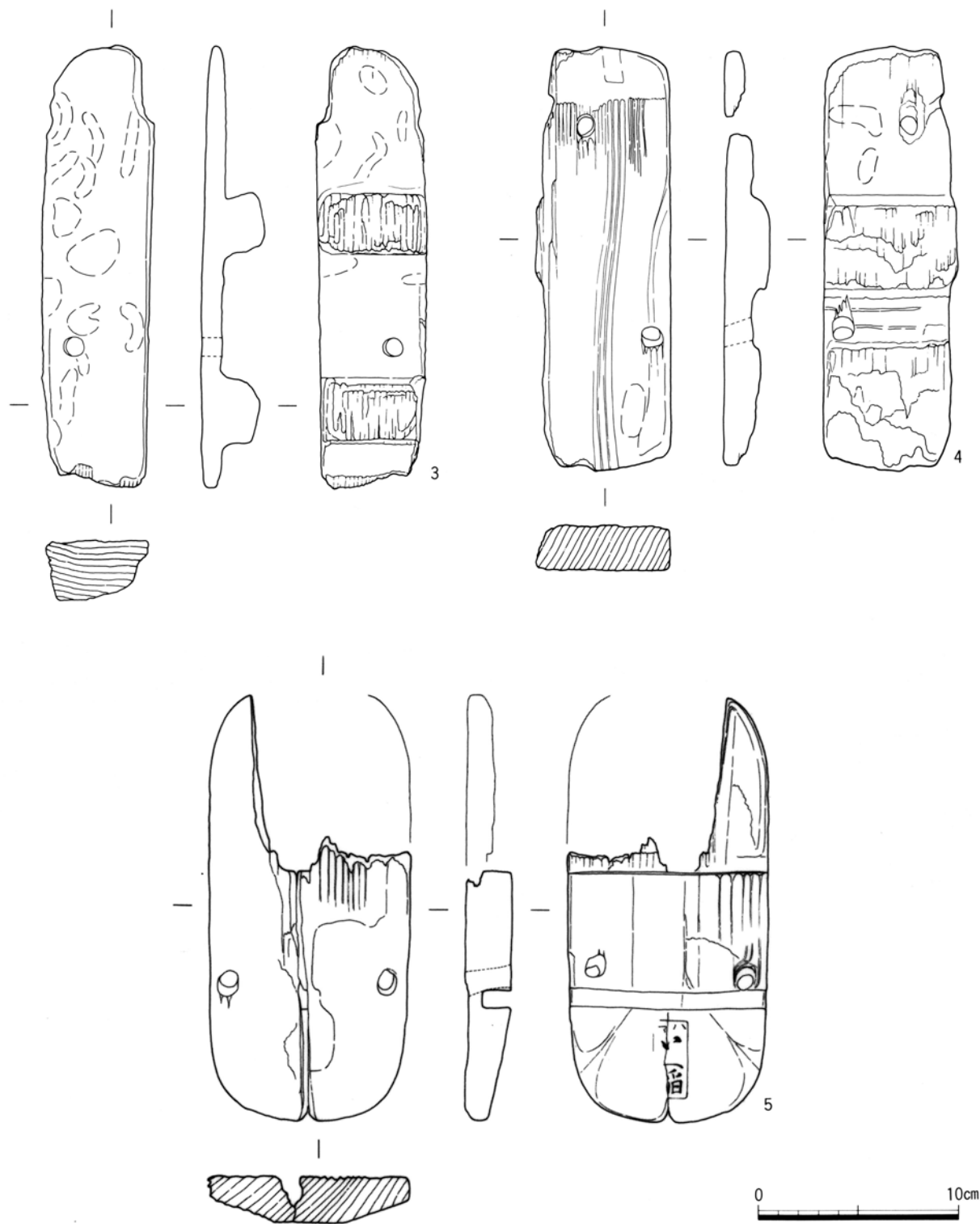
調査区	92B1	92B1	92B1	92B1	92B1	92B1	91C	91C	91D2	92B2	その他	計
遺構番号	SD011	SD014	SK086	SK090	SE004	SE006	SD025	SK125	整地層	整地層		
椀											2	2
箸										1	3	4
曲物							1		1		1	3
桶							1				1	2
下駄	3				1		2		2		3	11
箱								1			1	2
扇											1	1
刷毛											1	1
建具											1	1
栓											1	1
用途不明	2	1	1	2	1	2	2			1	8	20
計	5	1	1	2	2	2	6	1	3	2	23	48

第29表 木製品出土遺構一覧表



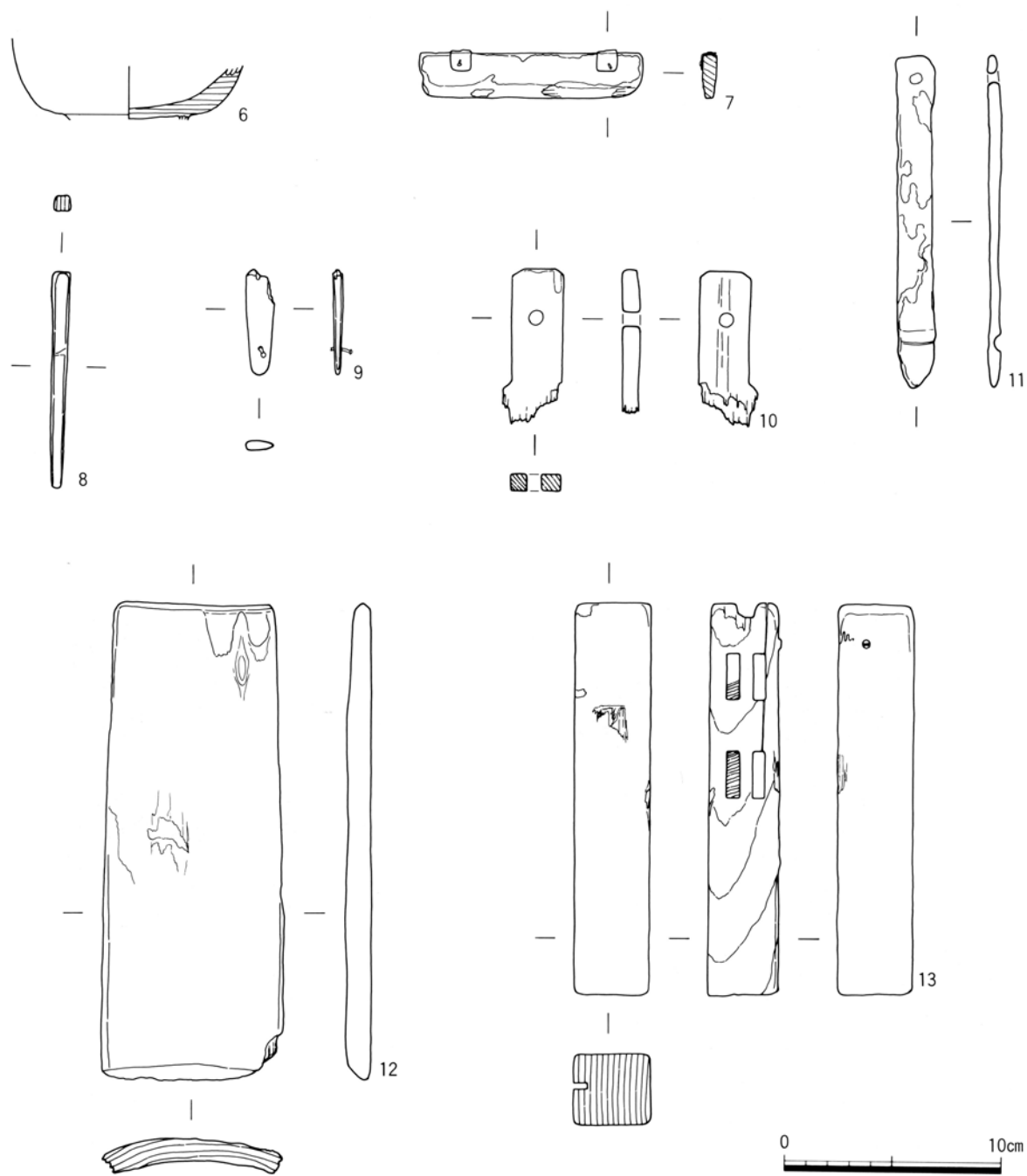
遺物番号	調査地点		種類	法量 (cm)			備考	登録番号
	調査区	遺構		長さ	幅	厚さ		
1	91D2	整地層	曲物の底	10.9	—	1.2		W-001
2	92B1	トレンチ	〃	12.3	—	1.0		W-002

第104図 近世の遺物 (54) 木製品① (1:3)



遺物 番号	調 査 地 点		種 類	法 量 (cm)			備 考	登録 番号
	調 査 区	遺 構		長さ	幅	厚さ		
3	91C	SD025	下駄	21.8	—	2.9	一木造り	W-003
4	91D2	整地層	〃	20.8	—	2.2	一木造り	W-004
5	91D1	検 I	〃	20.2	9.8	2.3	差し歯, 焼印	W-005

第105図 近世の遺物 (55) 木製品② (1:3)



遺物 番号	調査地点		種類	法量 (cm)			備考	登録 番号
	調査区	遺構		長さ	幅	厚さ		
6	91D	南トレンチ	漆椀	—	—	—	内外面黒漆	W-006
7	91C	SK125	箱	10.2	2.2	0.7	外面黒漆	W-007
8	91D	南トレンチ	箸	9.9	—	0.8		W-008
9	91D1	検Ⅰ	扇か	—	1.3	0.4		W-009
10	91D2	検Ⅱ	刷毛か	—	2.3	0.8		W-010
11	91C	SD025	不明	15.0	1.8	0.6		W-011
12	〃	〃	桶	21.8	8.3	1.2		W-012
13	91D1	検Ⅰ	建具	17.9	3.5	3.3		W-013

第106図 近世の遺物 (56) 木製品③ (1:3)

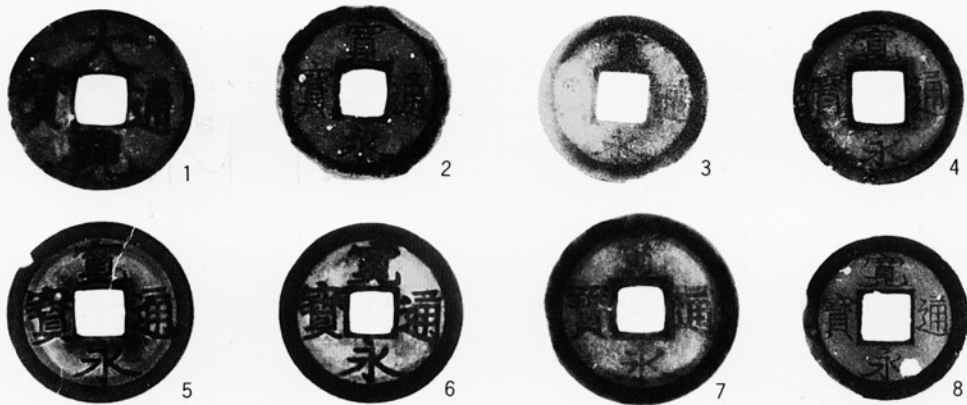
9. 金属製品

本遺跡の遺構や整地層などから出土した金属製品は、銅・真鍮製品が19点、鉄製の釘や針金、鎌の刃などが出土している。残念ながら鉄製品については、明確な形状を残しているものが非常に少ない。ここでは、銅・真鍮製品のみを扱うこととする。

銅・真鍮製品では、銭貨が15枚出土しており、1枚は大観通宝で、他は全て寛永通宝である。古寛永が7枚、新寛永が4枚で、判別できないものが3枚である。他に、煙管が2点あり、雁首・吸口が各1点ずつ出土している。9は真鍮製の雁首で、火皿がやや小さく脂返しの部分の湾曲がなくなっており、新しい時期のものと想定される。10は吸口で、ラウとの接合部分に段があり、やや古い時期のものと考えられる。11は半球状の形態をしており、用途は不明である。 (小嶋廣也)

調査区		91D1	91D1	91D1	92B2	その他	計
遺構	番号	SK019	SK021	SK036	整地層		
銭貨	大観通宝				1		1
	古寛永通宝	1	1			5	7
	新寛永通宝			1		3	4
	不明					3	3
煙管	雁首					1	1
	吸口				1		1
不明		1				1	2
計		2	1	1	2	13	19

第30表 金属製品出土遺構一覧表



遺物番号	調査地点		種類	材質	法量 (cm・g)			備考	登録番号
	調査区	遺構			径	孔径	重さ		
1	92B2	整地層	大観通宝	銅	2.4	0.7	2.9	北宋銭, 1107年初鑄	M-001
2	91D1	SK019	寛永通宝	〃	2.3	0.6	2.8	古寛永	M-002
3	〃	SK021	〃	〃	2.2	0.7	1.8	〃	M-003
4	〃	SK036	〃	〃	2.3	0.7	2.0	新寛永	M-004
5	〃	検Ⅰ	〃	〃	2.5	0.6	2.0	古寛永	M-005
6	91D	トレンチ	〃	〃	2.4	0.6	2.2	〃	M-006
7	91D1	検Ⅰ	〃	〃	2.5	0.6	3.0	新寛永	M-007
8	92B	トレンチ	〃	〃	2.2	0.7	2.3	〃	M-008

第107図 近世の遺物 (57) 金属製品① (1:1)



遺物番号	調査地点		種類	材質	法量 (cm・g)			備考	登録番号
	調査区	遺構			首の長さ	火皿径	高さ		
9	91D	南トレンチ	煙管 (雁首)	真鍮	6.0	1.4	2.2		M-009
10	92B2	整地層	〃 (吸口)	銅	1.1	—	—		M-010
11	91D1	SK019	不明	〃	高さ 0.9	径 1.6	—		M-011

第108図 近世の遺物 (58) 金属製品② (1:3)

10. 石・ガラス製品

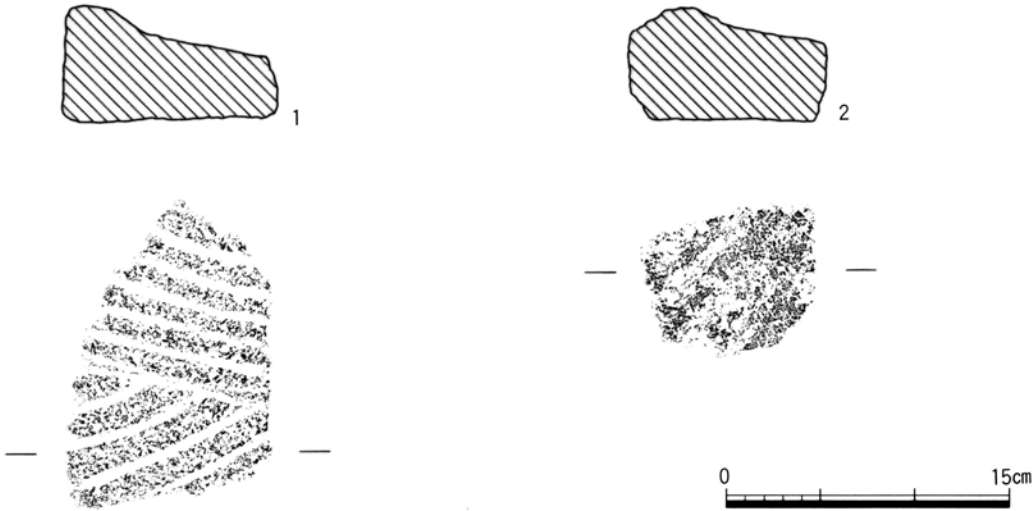
本遺跡の遺構や整地層などから出土した石・ガラス製品は78点あり、すべて石製品である。石製品では、砥石が58点と多く、硯が9点、石臼が8点、碁石（黒石のみ）が3点である。

1～3は、花崗岩製の石臼である。すべて上臼であり、上縁・くぼみが確認され、目が刻まれている。4～10は砥石で、頁岩製のものがほとんどであるが、6は泥岩製、9が砂岩製である。11は碁石で、頁岩（那智黒石）製の黒石で、他の1点も黒石であり、白石は出土していない。12～18は、硯で、頁岩製のものが多いが、14・16は泥岩製である。12・13には文字が刻まれ、「外町中」や「大」・「冬」と読み取れる。また、16では両面に使用痕が確認される。

ガラス製品については、明治以降の瓶類が多く、明確に江戸時代と断定できるものがないため、今回は図示していない。(小嶋廣也)

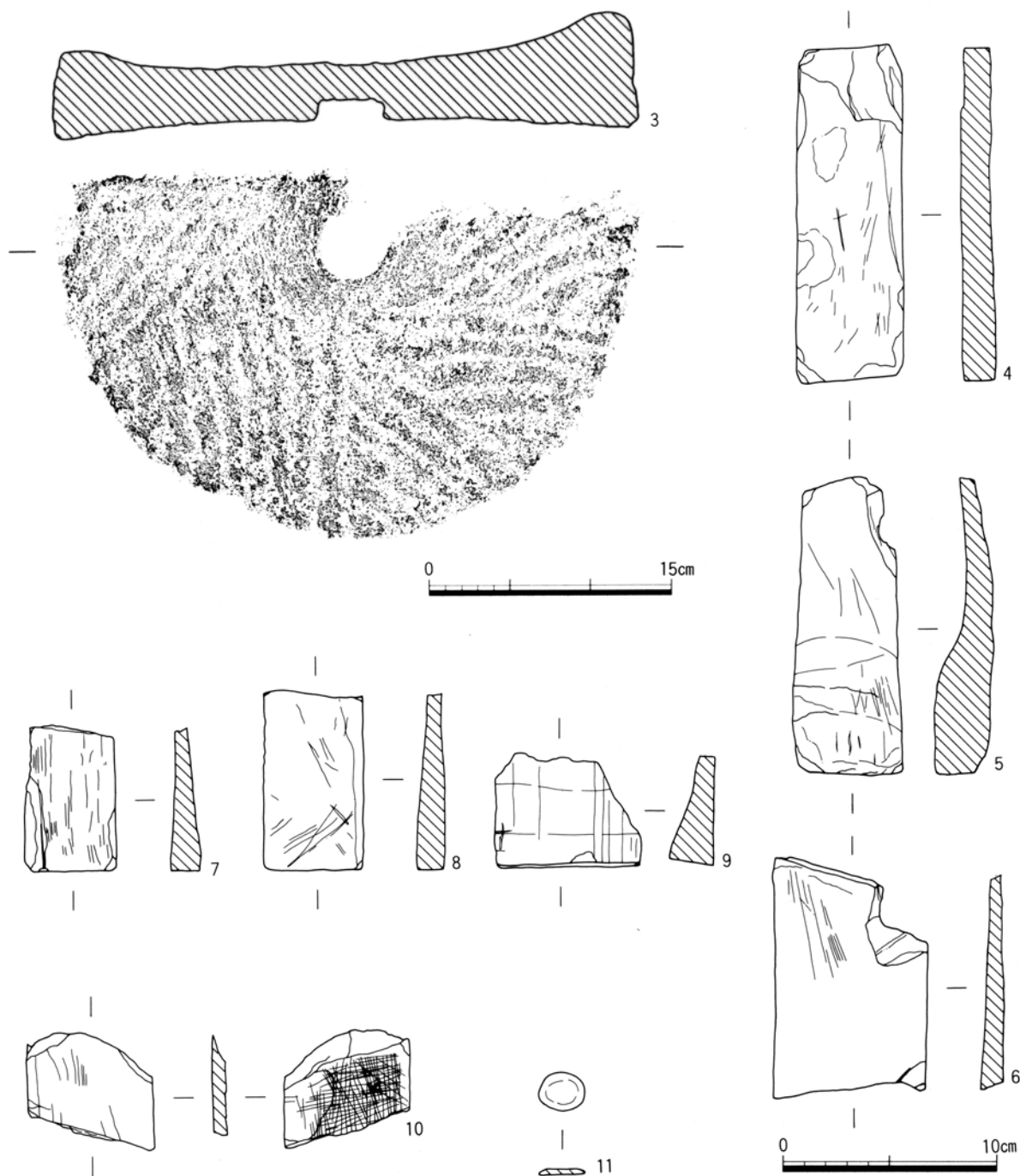
調査区	91D1	91D1	91D1	91D1	91D1	91D1	91D2	91D2	91D2	92B1	92B1	92B1	92B2	92B2	91C	91C	91B	91D	92B	その他	計
遺構番号	SD001	SK010	SK014	SK018	SK030	SK036	SK209	SK223	SK228	SD011	SD013	SE006	SK289	SE201	SD025	SK115	SD025	整地層	整地層		
石 臼	2							1										2		3	8
砥 石		1	1	1	1	3	1		2	1	1	2	1	1	1	1	2	12	8	17	58
硯		1																2	1	4	9
碁 石																	1			2	3
計	2	2	1	1	1	3	1	1	2	1	1	2	1	1	1	1	3	16	9	26	78

第31表 石製品出土遺構一覧表



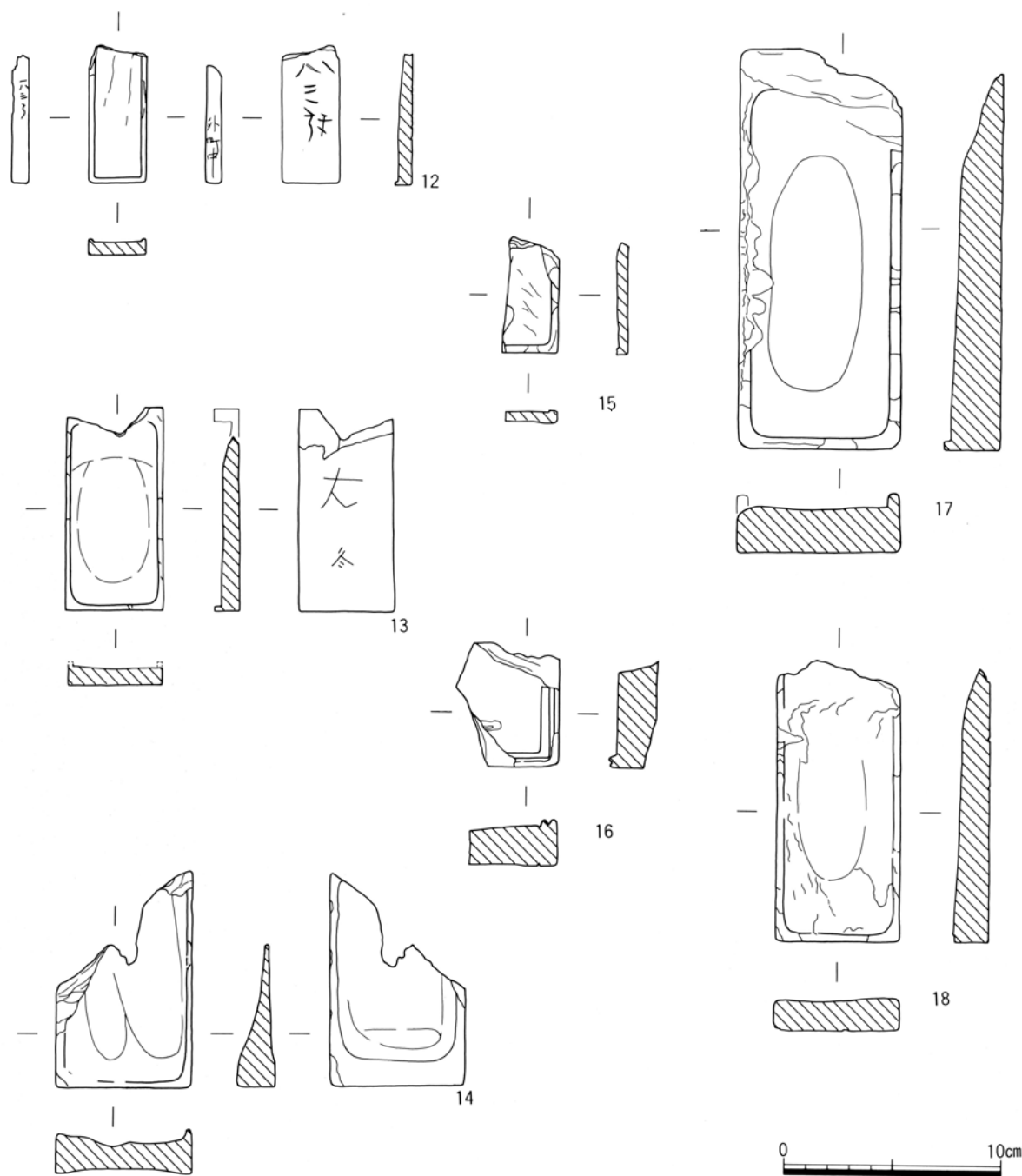
遺物 番号	調査地点		種 類	法 量 (cm)			石 材	備 考	登録 番号
	調査区	遺 構		厚さ	長径	短径			
1	91D2	整地層	石臼	6.2	—	—	花崗岩	上臼	S-001
2	〃	SK223	〃	—	—	—	〃	〃	S-002

第109図 近世の遺物（59） 石製品① （1:4）



遺物 番号	調 査 地 点		種 類	法 量 (cm)			石 材	備 考	登録 番号
	調査区	遺 構		厚さ	縦	横			
3	91D2	整地層	石臼	5.4	—	—	花崗岩	上臼, 径34.9cm	S-003
4	91D1	SK010	砥石	1.5	15.4	4.9	頁岩		S-004
5	91D2	検Ⅱ	〃	2.6	—	5.1	〃		S-005
6	91B	SD025	〃	0.9	—	7.0	〃		S-006
7	91D1	検Ⅰ	〃	1.3	—	4.1	泥岩		S-007
8	91D2	整地層	〃	1.3	—	4.6	頁岩		S-008
9	91B	SD025	〃	2.0	—	6.1	砂岩		S-009
10	91D	表土	〃	0.7	—	5.3	頁岩		S-010
11	91B	SD025	基石	0.3	—	—	那智黒石	黒色珪質頁岩, 黒石, 径2.1cm	S-011

第110図 近世の遺物 (60) 石製品② (3は1:4, 他は1:3)



遺物 番号	調査地点		種類	法量 (cm)			石 材	備 考	登録 番号
	調査区	遺 構		厚さ	縦	横			
12	91D1	検 I	硯	0.8	—	2.7	頁岩	両側面・裏に刻文字あり	S-012
13	〃	SK010	〃	1.1	—	4.4	〃	裏に刻文字あり	S-013
14	〃	検 I	〃	2.0	—	6.2	泥岩	両面使用痕あり	S-014
15	〃	SK018	〃	0.6	—	—	頁岩		S-015
16	91D2	整地層	〃	2.0	—	—	泥岩	火山灰を含む	S-016
17	91D1	検 I	〃	2.6	—	7.5	頁岩		S-017
18	91D2	整地層	〃	1.7	—	5.7	〃		S-018

第111図 近世の遺物 (61) 石製品③ (1:3)

第Ⅳ章 科学分析



第Ⅳ章 科学分析 目次

第 1 節 ¹⁴C 年代測定 107

第 2 節 出土木製品の樹種 108

第 3 節 胎土重鉍物分析 110

第 1 節 ¹⁴C 年代測定

1. 試料

試料は、外町遺跡（愛知県西春日井郡新川町所在）の基盤層から出土した木片 3 点である（¹⁴C－1～3）。外町遺跡は、清洲城下町遺跡の外側にある中・近世の遺跡である。
今回は、基盤層の年代を知るために¹⁴C年代測定を行い、さらに樹種同定も行った。

2. 測定

測定は、学習院大学放射性炭素年代測定室が行った。

3. 結果

結果は、以下の通りである。

試料No.	年代（1950年よりの年数）	Code No.	樹種同定結果
¹⁴ C－1	2390±80y. B. P. （440 B. C. ）	GaK-16020	モミ属の一種
¹⁴ C－2	2560±80y. B. P. （610 B. C. ）	GaK-16021	マツ属複雑維管束亜属の一種
¹⁴ C－3	2100±80y. B. P. （150 B. C. ）	GaK-16022	モミ属の一種

4. 考察

測定の結果、2,560～2,100年前（いずれも±80年）となった。これらの年代は、縄文時代晩期後半に相当し、外町遺跡の基盤層とした年代観とどうであろうか。今回の試料は、遺跡の立地する地形・地理および試料採取位置の基本層序が知られていなかったため、年代観についての検討はできない。

第2節 外町遺跡より出土した木製品の樹種

1. 試料

外町遺跡は、愛知県西春日井郡新川町・清洲町に位置する中・近世の遺跡である。試料は、本遺跡の基盤層である砂層から出土した木片3点である。基盤層の年代は、放射性炭素(^{14}C)年代測定法により、約2,600～2,100年前と考えられる。

2. 方法

剃刀の刃を用いて、試料の木口・柁目・板目の3断面の徒手切片を作成、ガム・クロラールで封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

3. 結果

試料はC-1、C-3がモミ属の一種に、C-2がマツ属複維管束亜属の一種に同定された。試料の細胞学的特徴や現生種の一般的な性質を以下に記す。

・マツ属複維管束亜属の一種 (*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.) マツ科

早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく、樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状、単列、1～15細胞高。

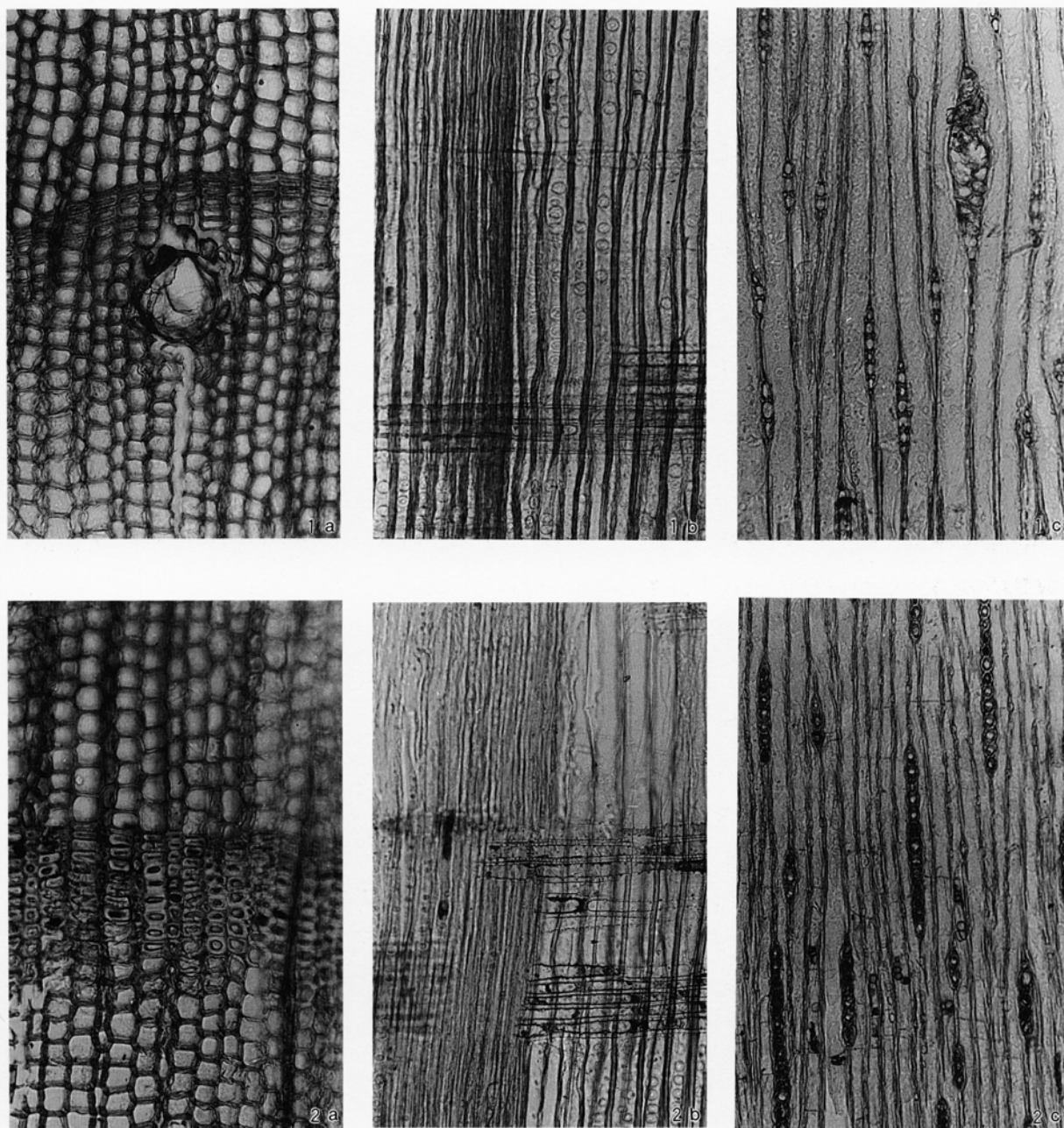
複維管束亜属いわゆる二葉松類には、アカマツ (*Pinus densiflora*)、クロマツ (*P. thunbergii*)、リュウキュウマツ (*P. luchuensis*) の3種がある。アカマツとクロマツは本州・四国・九州に分布するが、クロマツは暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。リュウキュウマツは琉球列島特産である。

・モミ属の一種 (*Abies* sp.) マツ科

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は薄く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はないが、傷害樹脂道が認められることがある。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は粗く、末端壁には数珠状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

モミ属には、モミ (*Abies firma*)、ウラジロモミ (*A. homolepis*)、アオモリトドマツ (*A. mariesii*)、シラベ (*A. veitchii*)、アカトドマツ (*A. sachalinensis*) の5種があり、アカトドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州(秋田・岩手県以南)・四国・九州の低地～山地に、ウラジロモミは本州中部(福島県以南)・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、アオモリトドマツは本州(福島県以北)の亜高山～高山帯に、シラベは本州中部(福島県以南)・奈良県・四国に、アカト

ドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に生育する。



1. マツ属複維管束亜属の一種 (C-2) a (木口) $\times 77$, b (柁目) $\times 77$, c (板目) $\times 77$
 2. モミ属の一種 (C-1) a $\times 77$, b $\times 77$, c $\times 77$

第112図 材の顕微鏡写真

第3節 胎土重鉍物分析

はじめに

外町遺跡では、江戸時代の美濃街道沿いの町屋の状況が発掘され、瀬戸・美濃産の陶磁器類が多量に出土している。さらに、在地とされている内耳鍋や焙烙などの土器も認められている。これら江戸時代の在地とされている土器は、その生産地や流通、時期的変遷など研究されてはいるが、陶磁器類などに比べると不明な部分はまだ多いといえる。

本分析は、在地とされている土器の鍋と焙烙の胎土の状況を把握し、そこから上記の問題について検討を行うことを目的とする。愛知県下の遺跡より出土した土器の胎土については、これまでの弥生土器から江戸時代の瓦に至るまでの多数の分析例から、ある程度の時代を越えた地域性が認められている。本分析でも主にこれらの結果との比較から考察を進める。また、出土例の豊富な近世遺跡における土師質皿や焙烙の胎土とも比較を行い、「在地」という意味の検証もしたい。

1. 試料

試料は、愛知県下5ヶ所の遺跡から出土した鍋または焙烙30点である。内訳は、外町遺跡10点（試料番号1～10）、清洲城下町遺跡5点（試料番号11～15）、名古屋城三の丸遺跡5点（試料番号16～20）、清水遺跡5点（試料番号21～25）、吉田城遺跡5点（試料番号26～30）である。地域的にみれば、外町遺跡と清洲城下町遺跡は濃尾平野中部地域であり、名古屋城三の丸遺跡は濃尾平野中東部、清水遺跡は西三河地域であり、吉田城遺跡は東三河地域とすることができる。

各試料の出土した調査区、遺構及び器種は、分析結果を呈示した第33表と第114図に併記する。

2. 分析方法

これまで、愛知県の胎土分析では、一貫して胎土中の砂分の重鉍物組成を胎土の特徴としてきた。本分析でも、この方法に従う。処理方法は以下の通りである。

土器片をアルミナ製乳鉢を用いて粉碎し、水を加え超音波洗浄措置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm－1/8mmの粒子をポリタングステン製ナトリウム（比重約2.96）により重液分離、重鉍物を偏光顕微鏡下にて同定した。同定の際、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを不透明鉍物とし、それ以外の不透明粒および変質などで同定の不可能な分子は「その他」とした。鉍物の同定粒数は250個を目標とし、その粒数%を算出し、グラフに示す。グラフでは、同定粒数が100個未満の試料については粒数%を求めずに主な産出鉍物を呈示するにとどめる。

3. 分析結果

30点の試料のうち、同定粒数100個以上を得られたのは4点のみであった。これまでの重鉍物を十分に得られた試料の分量に比べて、今回の試料の分量は特に少ないとはいえない。したがって、今回の試料の胎土は、特に重鉍物の含量が少ないということをまず指摘できる。このような状況から、分

析結果は、ほとんど主な鉱物を呈示するだけになった。以下に各遺跡ごとに結果を述べる。(第33表・第114図)

(1) 外町遺跡試料

10点の試料のうち、同定粒数100個以上を得られたのは、試料番号6と7の2点のみである。また、試料番号2については、ほぼ100個に近いとみて組成を呈示する。試料番号2は、不透明鉱物が最も多く、少量の角閃石、ジルコン、ザクロ石を伴う。角閃石は、他の2鉱物よりもやや多い。この組成は、これまでの愛知県の土器胎土における「西三河型」に相当する。試料番号6は、「その他」が最も多いが、それを除けば斜方輝石が最も多く、少量の角閃石と不透明鉱物、微量の単斜輝石とザクロ石を含む。この組成は、いわゆる「両輝石型」であり、濃尾平野中部の土器に多いA類(平成5年報告朝日遺跡胎土分析)に相当するとみることができる。試料番号7も「その他」が非常に多いが、それを除けば不透明鉱物が少量含まれ、微量の斜方輝石、角閃石、酸化角閃石、ジルコンを伴う。不透明鉱物以外の鉱物が微量なため、「西三河型」にも「両輝石型」にも明瞭に分類することはできない。しかし、類似した組成は、勝川遺跡や月縄手遺跡など濃尾平野東部の遺跡から出土した土器に比較的多く認められる。

同定粒数100個未満の試料では、試料番号3、4、8、9の4点は、同定粒数が20個以下のため、主な鉱物を呈示することもしない。他の試料のうち、試料番号1は不透明鉱物、試料番号5は斜方輝石と不透明鉱物、試料番号10は斜方輝石、角閃石、ザクロ石、緑レン石をそれぞれ主な鉱物とする。これらの中で、試料番号5は「両輝石型」の傾向を示す可能性があるが、試料番号10の鉱物の組み合わせは、三河地域に多いものである。

(2) 清洲城下町遺跡

同定粒数100個以上の試料はない。また試料番号15は、同定粒数20個以下なので主な鉱物も呈示しない。4点の試料のうち、試料番号11、12、14の3点はザクロ石を主な鉱物とする。試料番号11では他に斜方輝石と角閃石、試料番号12では他にジルコンが呈示される。試料番号13は、酸化角閃石が主な鉱物である。

主な鉱物として呈示しなかった微量の鉱物も考慮すれば、ほとんどの試料に角閃石やジルコン、ザクロ石といった要素があることから、全体的な傾向としては、「西三河型」に近いといえる。

(3) 名古屋城三の丸遺跡

同定粒数100個以上の試料はない。また試料番号17は、同定粒数20個以下なので主な鉱物も呈示しない。4点の試料とも、角閃石とザクロ石を主な鉱物とする。さらに、試料番号18では不透明鉱物、試料番号19ではジルコンと不透明鉱物、試料番号20ではジルコンが呈示される。

主な鉱物の組み合わせからみれば、「西三河型」の傾向が非常に強く認められる結果である。

(4) 清水遺跡

同定粒数100個以上の試料はない。また試料番号25は、同定粒数20個以下なので主な鉱物も呈示しない。4点の試料とも、角閃石を主な鉱物とする。さらに、試料番号21ではジルコンとザクロ石、試料番号22ではザクロ石、試料番号24ではカンラン石と斜方輝石が呈示される。

外町遺跡

遺跡の位置と主な鉱物の組み合わせから、どの試料も「西三河型」の胎土に近いものであろう。試料番号24に認められるカンラン石も西三河地域の土器胎土に認められることがあり、同地域の自然堆積の粘土中にも含まれることが当社の分析により確かめられている。

(5) 吉田城遺跡

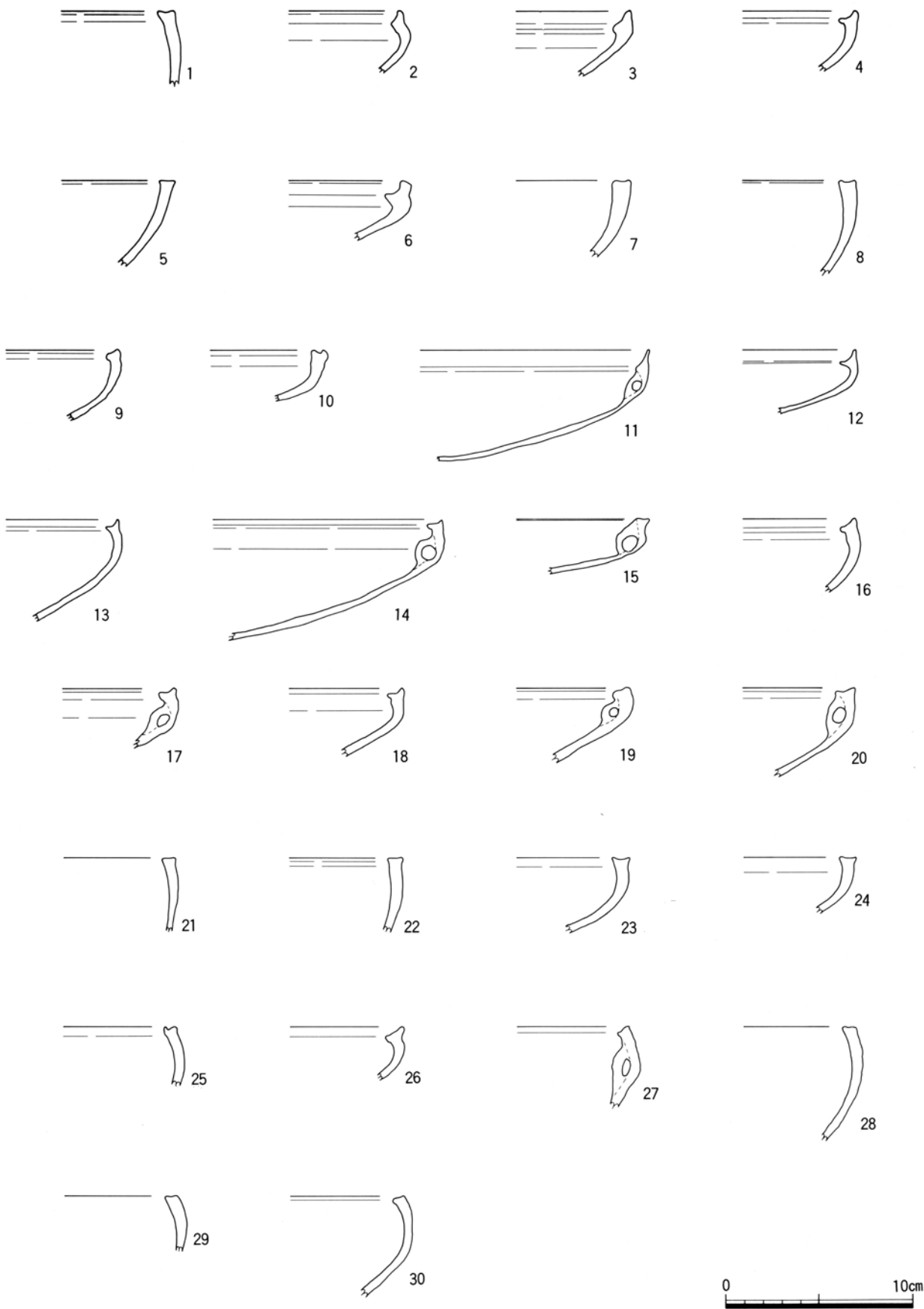
5 点の試料のうち、同定粒数 100個以上を得られたのは、試料番号27の 1 点のみである。その組成は、「その他」が最も多いが、それを除けば酸化角閃石がやや多く、少量の斜方輝石と角閃石、微量のジルコンとザクロ石および不透明鉱物を含む。ここで、酸化角閃石も角閃石とみれば、この組成は「西三河型」に相当する。

同定粒数 100個未満の 4 点の試料は、全て不透明鉱物を主な鉱物とする。そのうち試料番号26、28、30の 3 点は角閃石が呈示され、さらに試料番号28と30の 2 点はザクロ石も呈示される。試料番号30は他に酸化角閃石も主な鉱物とする。試料番号29は、他にカンラン石を主な鉱物とする。

主な鉱物として呈示しなかった微量の鉱物も考慮すれば、ほとんどの試料に角閃石やジルコン、ザクロ石といった要素がある。またカンラン石については前述のような例があり、また酸化角閃石も試料番号27と同様に考えることができる。したがって、全体的な傾向としては、「西三河型」に近いといえる。さらに、試料番号28と30には、非常に微量の紅柱石が認められていることも「西三河型」に近いとされる要素である。

遺物 番号	調 査 地 点			材質	器種	法 量 (cm)				軸薬・調整等		備 考	時 期
	遺 跡 名	調査区	遺 構			器高	口径	胴径	底径	内面	外面		
1	外町遺跡	I SS91B	SD025	土師質	鍋	—	19.0	19.7	—	—	指押痕	外面煤付着	19世紀中
2	〃	〃	〃	〃	焙烙	—	38.0	38.8	—	—	—	〃	〃
3	〃	I SS91D	SD002	〃	〃	—	38.2	38.4	—	—	—	〃	〃
4	〃	〃	整地層	〃	〃	—	35.5	35.8	—	ナデ	指押痕	〃	18世紀末～19世紀
5	〃	〃	〃	〃	鍋	—	25.2	25.4	—	—	—	〃	〃
6	〃	〃	〃	〃	焙烙	—	36.6	37.4	—	—	—	〃	〃
7	〃	〃	〃	〃	鍋	—	34.7	35.0	—	ナデ	指押痕	〃	〃
8	〃	〃	〃	〃	〃	—	29.4	—	—	〃	〃	〃	〃
9	〃	〃	〃	〃	焙烙	—	34.8	35.2	—	—	〃	〃	〃
10	〃	〃	検Ⅱ	〃	〃	—	41.6	42.2	—	—	—	〃	〃
11	清洲城下町遺跡	I KJ61B	SK45下	〃	〃	5.9	35.4	—	—	—	—	〃	19世紀中
12	〃	〃	SK45	〃	〃	—	34.6	—	—	—	—	〃	〃
13	〃	I KJ89B	SX01	〃	〃	—	32.0	—	—	—	—	〃	18世紀後半
14	〃	〃	〃	〃	〃	6.5	30.4	—	—	—	—	〃	〃
15	〃	〃	〃	〃	〃	—	30.0	—	—	—	—	〃	〃
16	名古屋城三の丸遺跡	Ⅱ NS91	SK101	〃	〃	—	48.8	49.4	—	ナデ	—	〃	19世紀中
17	〃	〃	〃	〃	〃	—	34.3	34.6	—	〃	指押痕	〃	〃
18	〃	〃	SK333	〃	〃	—	31.5	31.8	—	〃	〃	〃	〃
19	〃	〃	〃	〃	〃	—	34.2	34.6	—	—	〃	〃	〃
20	〃	〃	〃	〃	〃	—	34.3	—	—	—	〃	〃	〃
21	清水遺跡	Ⅲ SK90A	SK18上層	〃	鍋	—	28.5	29.0	—	—	—	〃	18世紀代
22	〃	〃	SK18中層	〃	〃	—	16.6	—	—	—	指押痕	〃	〃
23	〃	〃	SK18下Ⅰ層	〃	焙烙	—	30.0	—	—	—	〃	〃	〃
24	〃	〃	〃	〃	〃	—	27.9	—	—	—	—	〃	〃
25	〃	〃	SK18下Ⅱ層	〃	鍋	—	28.6	29.4	—	—	—	〃	〃
26	吉田城遺跡	Ⅳ TY90	SK01	〃	焙烙	—	34.8	35.0	—	—	指押痕	〃	19世紀前半
27	〃	〃	〃	〃	鍋	—	21.8	23.0	—	—	—	〃	〃
28	〃	〃	SD06	〃	〃	—	26.2	27.8	—	ナデ	指押痕	〃	〃
29	〃	〃	〃	〃	〃	—	26.8	28.0	—	〃	—	〃	〃
30	〃	〃	SD08	〃	焙烙	—	26.6	27.6	—	—	—	〃	19世紀代

第32表 分析遺物観察表



第113图 分析遗物实测图 (1:3)

4. 考察

今回の分析結果からは、胎土の重鉍物組成をこれまでの分析と同等に評価することはできないが、結果の項で述べた胎土のおおよその傾向に基づいて考察を進めたい。

本分析の試料は、いわゆる「在地」の土器といわれてきたものであるが、上記の胎土の傾向は、必ずしも厳密な意味での「在地」を示唆する結果とはいえない。濃尾平野中部に位置する外町遺跡での「在地」の範囲を尾張地域に想定するとすれば、在地の可能性の高い試料は、「両輝石型」の胎土を示す試料番号6と「両輝石型」に近いあるいはその傾向のある試料番号5と7ぐらいであり、他の試料は尾張地域産である可能性を指摘することができない。逆に試料番号2のように西三河地域からの搬入を示唆する試料が混在するのである。さらに、外町遺跡に近接する清洲城下町遺跡では、尾張地域産を示す「両輝石型」はほとんどなく、三河地域の胎土の傾向の強い試料のみとなっている。名古屋城三の丸遺跡では、西三河地域からの搬入品である可能性が高い試料ばかりであり、「両輝石型」の胎土を読み取ることはできない。一方、西三河地域にある清水遺跡の土器は、「西三河型」の傾向を示唆する胎土のものばかりであり、東三河地域にある吉田城遺跡の土器胎土からは、「西三河型」の傾向が窺える。これらの傾向が、近世の鍋や焙烙などの土製品をめぐるどのような事情を反映しているかは、現在ではまだ解析することができない。ただし、より詳細な地域単位でみれば、そこには地域間の流通があったといえる。さらに、今回の結果では、西三河地域を中心とした流通事情も示唆される。そして、外町、清洲城下町、名古屋城三の丸の3遺跡における胎土の違いは、その社会的な環境（例えば町屋や武家地）や時代によって、その流通事情に変化があったことを表している可能性が高い。ところで、当社の分析による近世の江戸の遺跡から出土した焙烙の胎土は、全て関東地方産の可能性の高いものであったが、その中で時代によって若干の組成の違いがあるという指摘もできた。すなわち、江戸の焙烙も関東という広がりで見れば「在地」で間違いはないのであるが、関東の中での産地の違いは存在し、消費地では時代によってその流通事情が異なっていたと考えられるのである。

以上のことから、これまで単に「在地」とされていた近世の鍋や焙烙などの土製品も、愛知県や関東という比較的広い地域でみるならば「在地」で片付けることもできようが、それよりも狭い地域（関東ならば県程度、愛知県ならば尾張と三河程度の広がり）を設定するならば、産地や流通事情の解析が重要となってくる。今後、近世のいわゆる「在地」の土器について、その編年が進展するようであれば、それに基づいた胎土分析をすることによって、より詳細な解析が可能となるであろう。また、遺跡や遺構の性格まで把握することも、胎土分析をより有意義なものとするための条件であるといえる。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

*酸化角閃石は、自然には一般に火山岩中に産する鉱物である。はじめ普通角閃石（本文では角閃石としている）として晶出したものが噴火の後に酸化して生じたものとされており、約 800℃の加熱により変化する（黒田・諏訪，1983）。愛知県周辺の地質を考慮すれば、吉田城遺跡試料中の酸化角閃石が火山岩に由来する可能性は低い。それよりも、800℃という温度に注目すれば、土器焼成により

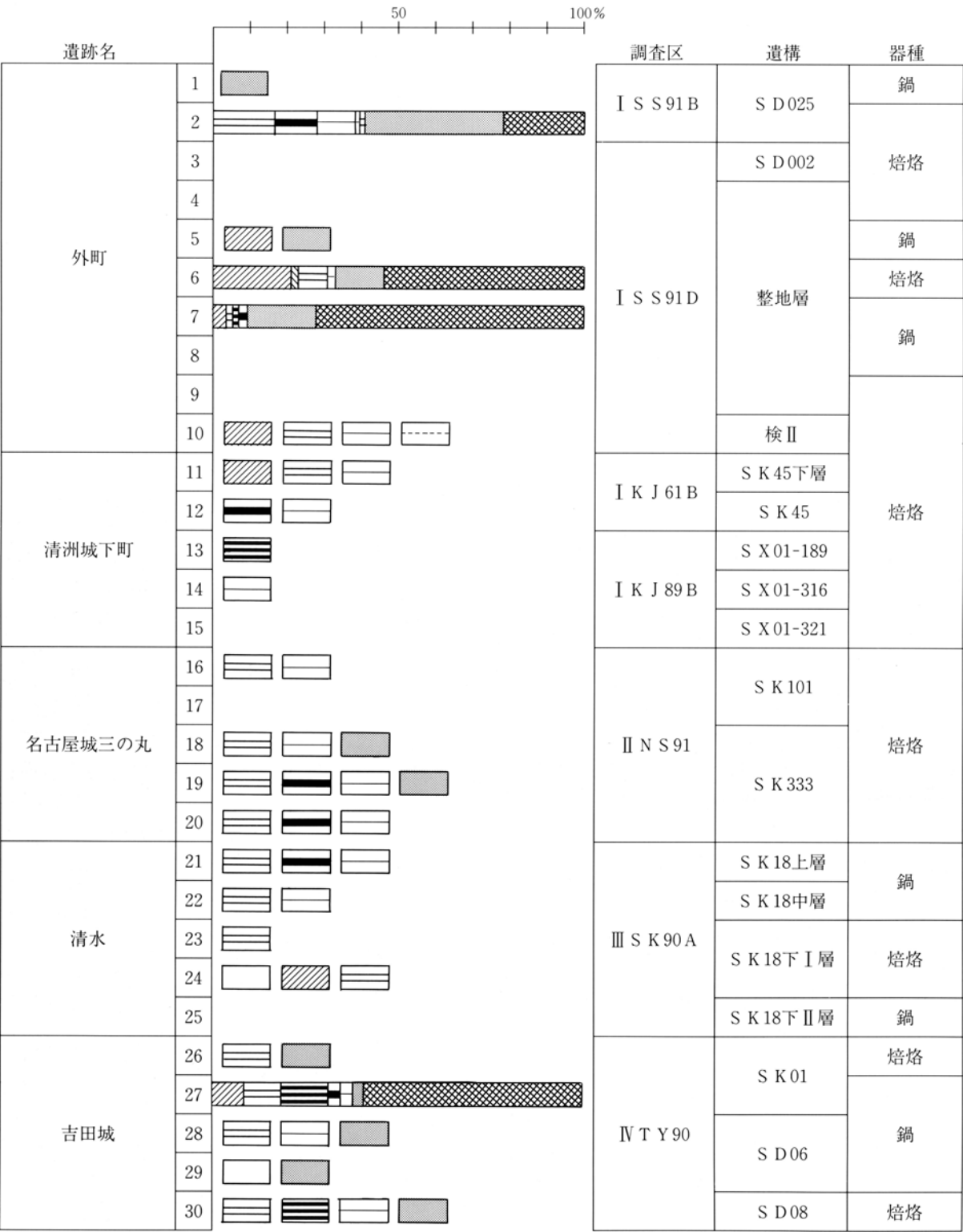
普通角閃石が変化した可能性が考えられる。焼成時の火のまわり具合などで、部分的に普通角閃石が変化するのではないだろうか。したがって、焼成前の素地を考える場合には、酸化角閃石も普通角閃石に入れて考える。

<参考文献>

黒田吉益・諏訪兼位 『偏光顕微鏡と造岩鉱物（第2版）』 P343 共立出版 1983

試 料 番 号	重 鉱 物 組 成													重 鉱 物 同 定 粒 数
	カン ラン 石	斜 方 輝 石	単 斜 輝 石	角 閃 石	酸 化 角 閃 石	黒 柱 石	褐 色 黒 雲 母	ジ ル コ ン	ザ ク ロ 石	緑 レ ン 石	電 気 石	不 透 明 鉱 物	そ の 他	
1	0	1	0	1	0	0	0	0	1	0	0	23	27	53
2	0	0	0	16	0	0	0	11	10	1	1	36	21	96
3	0	4	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	8	14
4	0	2	0	2	2	0	0	0	1	1	0	1	11	20
5	0	5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	12	18	36
6	0	21	2	8	0	0	0	0	2	0	0	13	54	100
7	0	4	0	2	2	0	0	3	0	0	1	21	83	116
8	0	0	0	4	0	0	0	0	1	0	0	4	6	15
9	0	0	0	0	0	0	0	1	2	0	0	1	15	19
10	0	3	0	2	1	0	0	0	2	5	0	1	11	25
11	0	4	1	6	0	0	0	0	6	0	0	1	11	29
12	0	1	0	1	0	0	0	7	4	1	0	0	56	70
13	0	0	0	2	4	0	0	1	1	0	0	0	21	29
14	0	0	0	0	0	0	0	3	6	1	0	3	50	63
15	0	0	0	2	0	0	0	0	2	0	0	0	12	16
16	1	2	0	9	0	0	0	3	8	0	0	1	39	63
17	0	1	0	2	1	0	2	0	2	0	0	0	11	19
18	0	0	1	7	0	0	0	3	7	0	0	7	9	34
19	0	1	0	17	0	0	3	5	4	2	0	6	37	75
20	0	1	0	3	1	0	0	2	11	2	0	0	57	77
21	0	1	0	4	0	0	0	5	7	0	0	0	12	29
22	0	0	0	8	0	0	0	1	5	0	0	0	7	21
23	0	1	0	18	0	0	0	0	0	0	0	3	2	24
24	5	6	0	8	0	0	0	1	1	1	0	4	6	32
25	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	6
26	0	0	0	7	0	0	0	1	1	0	2	5	4	20
27	0	10	0	11	15	0	0	4	4	0	1	3	67	115
28	5	4	3	8	0	1	0	2	8	0	0	14	6	51
29	6	1	3	1	1	0	0	0	2	0	0	4	7	25
30	1	3	0	7	5	2	0	3	8	0	0	12	43	84

第33表 胎土重鉱物分析結果



(1. カンラン石 2. 斜方輝石 3. 単斜輝石 4. 角閃石 5. 酸化角閃石 6. ジルコン
7. ザクロ石 8. 緑レン石 9. 不透明鉱物 10. その他)

第114図 試料の胎土重鉱物組成

第V章 結 語

第Ⅴ章 結 語 目次

第1節	グリッド別遺物出土状況 …	117
第2節	遺物組成 ……………	118
第3節	まとめ ……………	121

扉写真 「清洲總圖 其二」

『尾張名所圖會 下巻』（愛知県郷土資料刊行会 1973）P5より転載

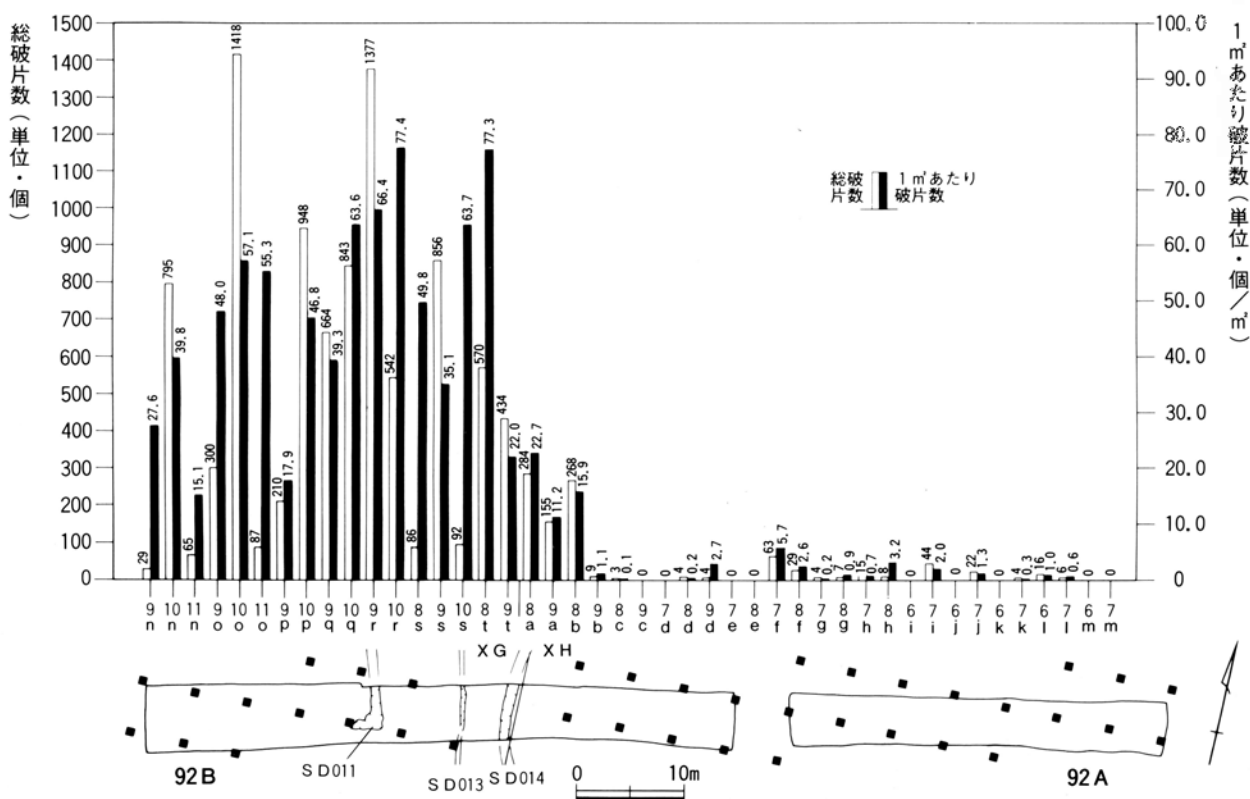
第1節 グリッド別遺物出土状況

今回の発掘調査において、6つの調査区より出土した遺物量は、27ℓ入りのコンテナで約300箱、破片総数で約4万点程になっている。その大半は、前述の通り近世陶磁器類と瓦類によって占められている。今回、遺構出土の遺物が少ないこと、明確に住宅を示す遺構を確認できなかったことなどから、居住域の範囲を限定することができなかったため、居住域を大量の出土遺物の出土状況から分析してみたい。ただし、その検証は、92A区と92B区の2つの調査区に限定して行う。

まず、92A区で出土した全遺物量は218点で、92B区より出土した全遺物量は10,043点におよび、92B区の遺物量の多さに気づく。これをグリッド毎に遺物の出土状況を見てみると、XH8a・9a付近を境にして、その東側では遺物の出土が極端に希薄になっていくことが見受けられる。このあたりは、既に畑地や田地であったことが確認されており、江戸時代を通じて人々の生活の痕跡を見ることはできない。しかし、畑地や田地の下からは鎌倉時代中頃と思われる溝やピットが確認されている。

また、1㎡あたりの出土遺物量とは、グリッド毎の総破片数を調査面積で割ったものであり、1㎡から何点の遺物が出土しているのかを表している。これによれば、XG8t・9tあたりまで出土量の多いことが分かる。

以上のことから、XG8t・9tあるいはXH8a・9a辺りを居住域の境とみることができよう。これを遺構と関連させて考えてみると、92B1区のXG9s・9t付近で検出された溝SD013及び、隣の調査区である91D1区の溝SD002を屋敷境の溝と捉えることができる。また、92B2区で確認されたSD209も、XG9r・9s・10r・10sに位置し、やはりこのあたりに屋敷地の境を想定することができよう。



第115図 グリッド別遺物出土状況図

第2節 遺物組成

1. はじめに

本報告書では、『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）』を参考に、近世陶磁器類の分類・用途組成などを中心にまとめた。ただし、近世陶磁器類の平均値の出し方、分類や統計処理の方法をどのようにそろえていくのかなど、現状では検討すべき課題が多く残されている。今後、同様の分類・統計処理がによる結果が蓄積されていき、初めてデータとして利用することが可能となっていくものと思われる。すなわち、データの比較から、時期による遺物組成（例えば、用途・材質・産地など）の特徴や画期、社会的な階級や身分による格差などが明かとなっていくだろう。『名古屋城三の丸遺跡（Ⅲ）』においても、用途・材質・産地別にデータが紹介されており、同様の統計処理をすれば有効な資料を得ることができるものと思われる。本書に示した資料は、あくまで名古屋城三の丸地点の武士階級とは異なった一般の町人層の資料としての価値をもつものである。

本節で用いるのは、第Ⅲ章の遺物編で提示した各遺構出土の近世陶磁器類用途組成図と材質組成であり、それらをまとめたものが第116図と第117図（接合後口縁部残存率を全体の残存率で割った割合が示してある）である。全体とは近世陶磁器類の全出土遺物を示し、本遺跡における平均値を表している。整地層・SK（上面）合計・SK（下面）合計も参考資料としてあげてあるが、整地層からは全出土遺物の約3分の1が出土しており、整地が行われた時期である18世紀末～19世紀初頭を反映する資料と考えてもよい。SK（上面）合計・SK（下面）合計についても、それぞれ19世紀代と18世紀代を代弁する資料として見ておきたい。SK 240～SD 002については時期別に並べてある。それぞれの時期は、SK 240が16世紀末～17世紀初頭、SD 035が17世紀初頭、SD 209が17世紀中葉、SK 260が17世紀末～18世紀初頭、SD 202が18世紀後葉、SK 289が18世紀後葉～末、SK 228・SK 223が18世紀末、SD 025・SD 002が19世紀中葉となっている。

以下、用途と材質について年代を追って見ていくが、遺構より出土した遺物が少ないこともあり、これがそのまま近世における町屋の特徴を忠実に反映しているかどうかの検討は、今後の資料の増加に委ねるしかないが、1つの傾向を提示しておきたい。

2. 遺物の用途組成の推移

出土遺物の用途組成図（第116図）については、各遺構出土の遺物で用いたグラフをまとめたものであるが、ここでは化粧具・神仏具・喫煙具・調度具をその他の用途の遺物としてまとめて表示している。

全体として、各遺構より出土した遺物量が大きく違うので、単純に比較することはできないが、供膳具・調理具・貯蔵具の割合が年代によって減少しているように見える。しかし、個体数（接合後口縁残存率の合計を12で割った値）自体は増加しているので、絶対量を考慮に入れて比較する必要があるといえよう。

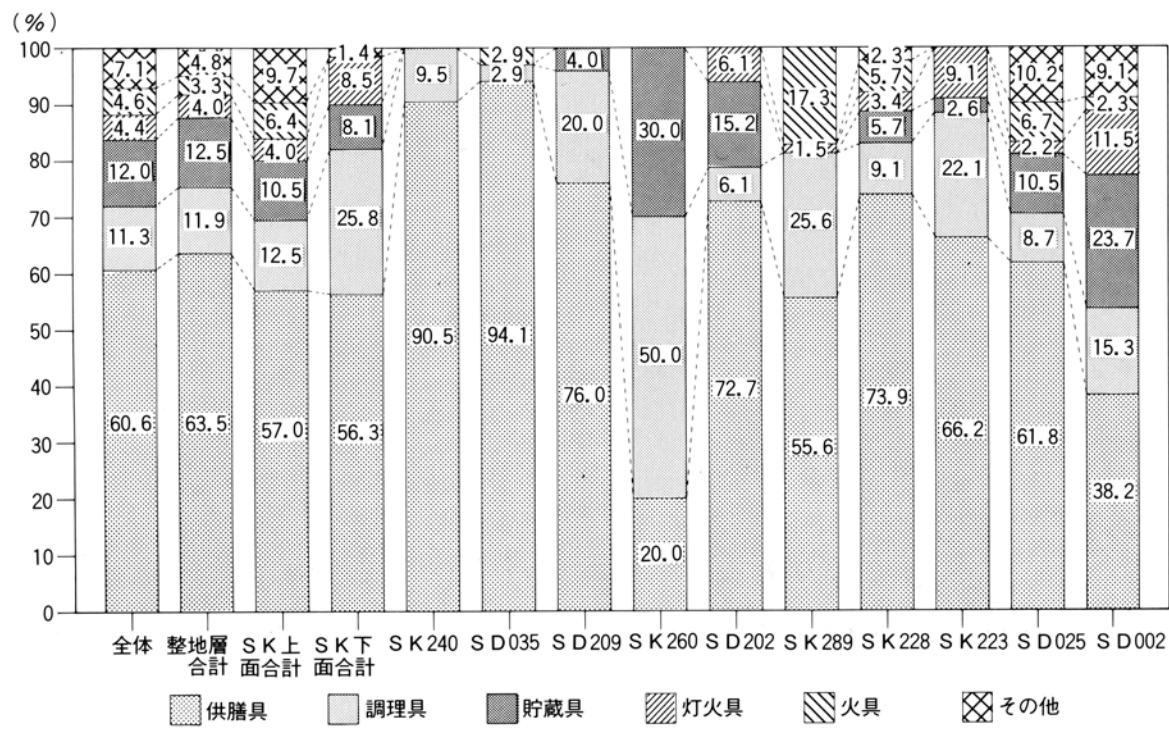
概ね17世紀代は、日常的な生活に関連する遺物群である供膳具・調理具・貯蔵具がその大半を占めている。これは、ある意味において近世の初期には、器種の細分化が進んでいないことを示している

ようにも解釈される。18世紀代になると、17世紀代に比べて出土遺物量が増加していく。17世紀代と比較して供膳具などの日常的な生活に関連する遺物群の占める割合が相対的に減少し、これに代わって灯火具や火具の割合が大きくなってきていることがわかる。出土量は少ないが、その他の用途の遺物もみることができる。19世紀代になると、さらに出土遺物量が急増し、供膳具・調理具・貯蔵具・灯火具・火具などの遺物の比率が相対的に減少し、その他の用途の遺物群の占める割合が増加していく。器種が、この時期になって多様化していることを示すものであろう。

3. 遺物の材質組成の推移

出土遺物の材質組成図（第 117図）は、第Ⅲ章の遺物編で各遺構毎に提示した集計表の個体数を材質毎に比率として示したものである。2と同様に、絶対量の変化は考慮に入っていない。

17世紀代では、土師質製品の占める割合が高く、磁器製品は破片だけが出土している。名古屋城三の丸遺跡では、磁器製品の占める割合が約10%前後を示しているが、この時期にはまだ高級品として流通し、町人層の生活の道具として利用されてはいなかったことを表わすものだろう。18世紀代には、土師質製品の占める割合が相対的に減少し、磁器製品の破片数が増加し始める。19世紀代になると、土師質製品が極端に減少し、磁器製品が急増していくことが読み取れる。土師質製品の比率の減少は、そのまま出土量の減少には結び付かず、量的には一定量を保持している状況にあり、安定した出土量を示しているものと思われる。また、磁器製品の比率の増加は、18世紀末に瀬戸で磁器の生産が開始されたことを反映しているものと思われる。19世紀代になると、その他の材質とした軟質陶器や瓦質製品が1%弱出土してくる。



第116図 遺構別出土遺物の器種組成図

4. まとめと今後の課題

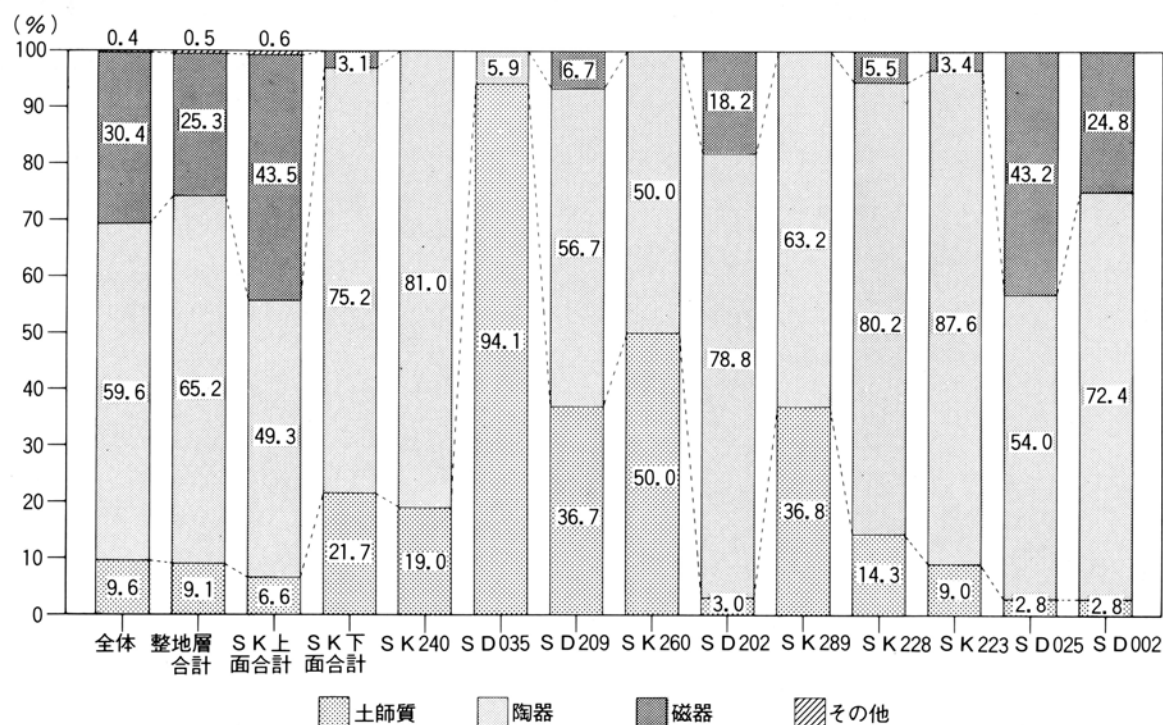
以上、年代毎に各遺構より出土した遺物の器種組成と材質組成について見てきた。名古屋城三の丸遺跡と同様に、本遺跡でも17世紀末～18世紀初頭と18世紀末～19世紀中葉に2つの画期を見い出すことができるだろう。まず、17世紀末～18世紀初頭にかけては、灯火具・火具に分類される遺物の増加がみられる。また、18世紀末～19世紀中葉には、出土遺物量が増大し、その他に分類した化粧具・神仏具・喫煙具・調度具などの遺物や磁器製品が急増し、かつ軟質陶器類や瓦質製品が出てくる点に特色がある。これらの時期に、人々の生活において何等かの変化があったことを窺うことができる。

以上に示した結果は、今回の発掘調査の出土遺物によるものであり、本遺跡の全てにあてはまるものではないし、況や江戸時代の全ての遺跡にあてはまるものでもない。まだまだ、多くの問題点が残されている。例えば、器種分類で用いた用途についても、本当にその用途で利用されたのかという疑問は残されており、これからの検討が必要になってくる。また、遺構出土の遺物が少ないものを、単純に他の遺跡のデータと比較していいのか、絶対量の変化など、まだまだ多くの問題点を含んでいる。これらを解決していくためには、共通の分析法によるデータの比較が必要であろう。それによって、初めて名古屋城三の丸遺跡などの上級武士と他の遺跡の下級武士、本遺跡の町人層の社会生活の具体的な内容が、出土遺物から比較・検討されていくものと考えられる。

<参考文献>

遠藤才文編 『名古屋城三の丸遺跡（Ⅳ）』（財愛知県埋蔵文化財センター 1993

遠藤才文 「名古屋城三の丸における陶磁器の消費動向」 『近世陶磁器の諸様相 第5回関西近世考古学研究大会 発表要旨』 1993



第117図 遺構別出土遺物の材質組成

第3節 まとめ

以上、今回の発掘調査の結果を項目毎に区分し、事実関係をでき得る限り詳細に報告してきた。最後に、明らかにし得た内容をまとめておきたい。

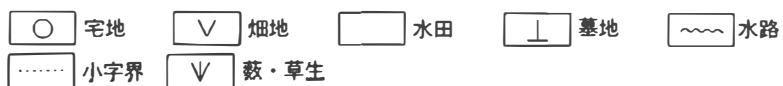
まず、遺構については、住居移転に伴う攪乱を多く受けており、しかも調査区が幅約5mと狭かったため、復元して遺構を捉えることは難しかった。しかし、『尾張名所図会』（本章扉写真）や「須ヶ口古図」（第119図）を見てみると、美濃街道に沿って屋敷が立ち並び、その裏手には畑地や田地が展開している様子を窺うことができる。今回、屋敷地を明確に検出することはできなかったが、溝によって畑地や田地とは区分されていたようで、江戸時代を通じてこのような風景が広がっていたものと思われる。その他、江戸時代以前の清洲城下町期の溝・土坑、井戸なども検出されており、清洲城下町の外郭に外町が形成されていたこと、さらに、鎌倉時代中頃の土坑・ピットなども確認され、人々がこの地に生活しはじめた時期として、中世あるいは古代にまで遡ることが確認された。しかし、ここが居住域なのか墓域になるのかまではわからなかった。

遺物については、個々の遺物に関する記述を省略して、近世陶磁器類を主に用途によって分類し、遺構毎にその違いを明らかにしてきた。しかし、遺構より出土した遺物よりも整地層や包含層出土の遺物の方が多く、主眼であった各遺構や各時期の用途組成・材質組成の相違を明確にできたとはいえない。遺物の器種組成を見ることで、その遺構の性格を考える資料にするという当初の目的は、19世紀代については出土遺物量も多く実現できたと思われるが、17・18世紀代については、出土遺物量が少なく不十分なまま終わっている。名古屋城三の丸遺跡との比較・検討も不十分で、近世陶磁器類の器種組成・材質組成による相違、身分による遺物の格差という点が明確にできなかったこと、さらには、その記述が近世陶磁器類に終始し、その他の出土遺物である人形類・木製品・金属製品・石製品などに十分な検討を加えることができなかったことが残念である。全出土遺物の総合的な分析によって、上記の遺物を検討していく必要があり、これから近世遺跡の調査を行うにあたっては、同一の分析・統計方法をとることによって、他の近世遺跡と比較・検討できるデータが蓄積されていくことが強く希望される。近世遺跡における、分析方法の統一化が求められるのである。

近年、各地で近世遺跡の発掘調査が急増している。しかし、江戸時代を考古学の対象として発掘調査するようになったのは、まだここ数十年と浅い。これに対して、文献の分野においては、かなりの成果が示されてきている。いづれにおいても、近世の遺跡を調査する場合には、単に考古学の分野だけではなく、歴史学、文献史学、建築史、都市史など多くの学問領域の成果をも踏まえた上で、調査・整理を実施していかなければ当時の人々の生活の実相は解明できないと実感した。（小嶋廣也）

<参考文献>

『新川町の文化財 第一集』 新川町教育委員会 1987



第118図 地籍図（愛知県公文書館所蔵の明治17年の地籍字分全図の一部）

図 版

凡 例

1. 遺構記号

S D : 溝 S E : 井戸 S K : 土坑
P : 柱穴 (径50cm以下の土坑を含む)
S X : その他

2. 遺構基準線

国土座標第Ⅶ系による

3. 縮率

遺構図 : 1:200

遺 物 : 遺物番号の右側に記号で示してある

● : 1:2

★ : 1:3

◆ : 1:4

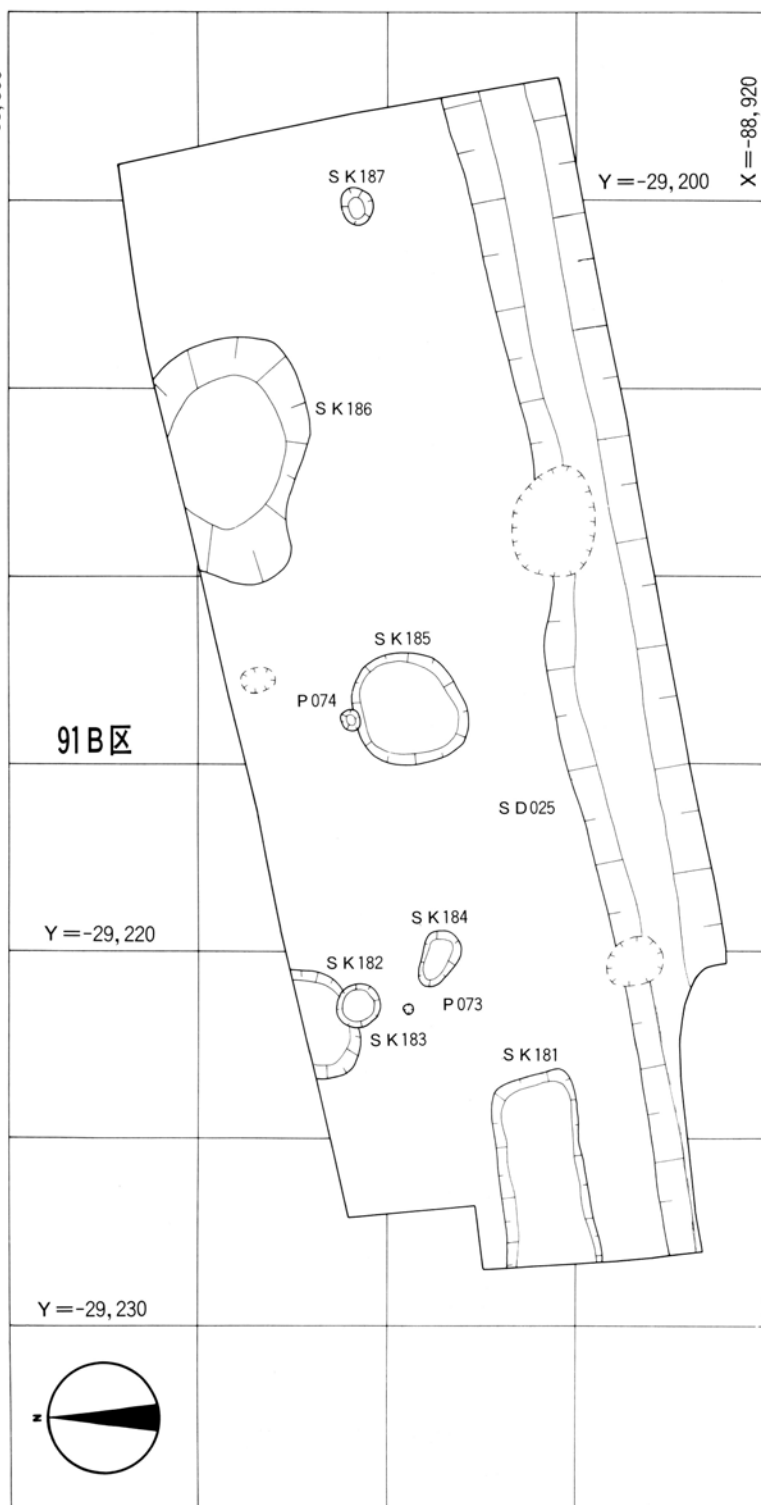
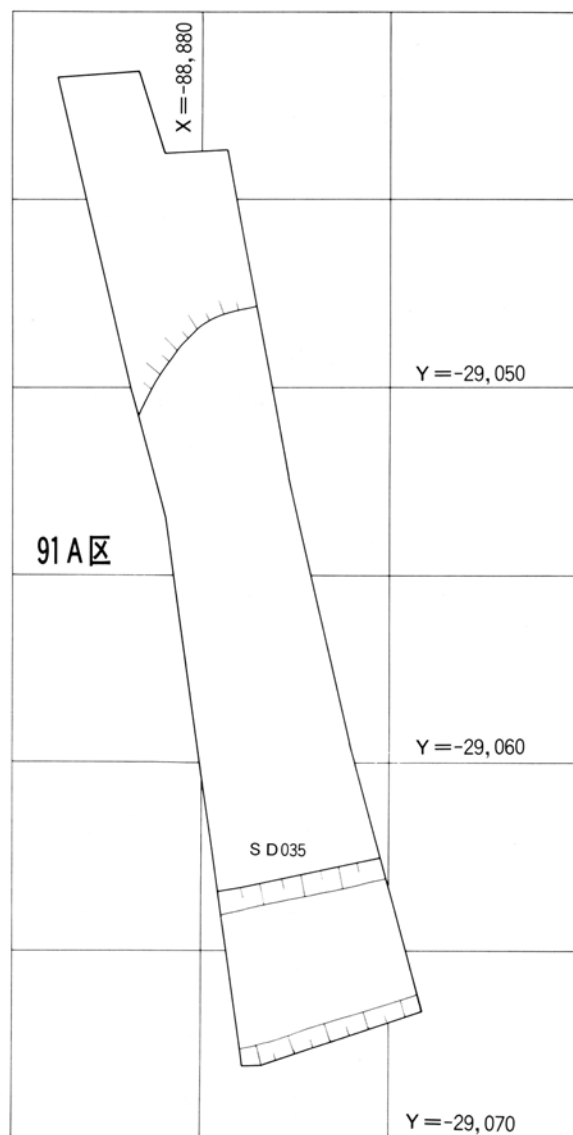
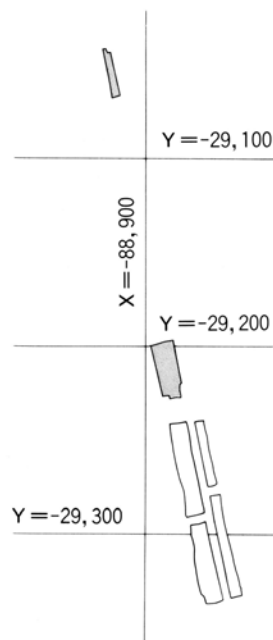
■ : 1:6

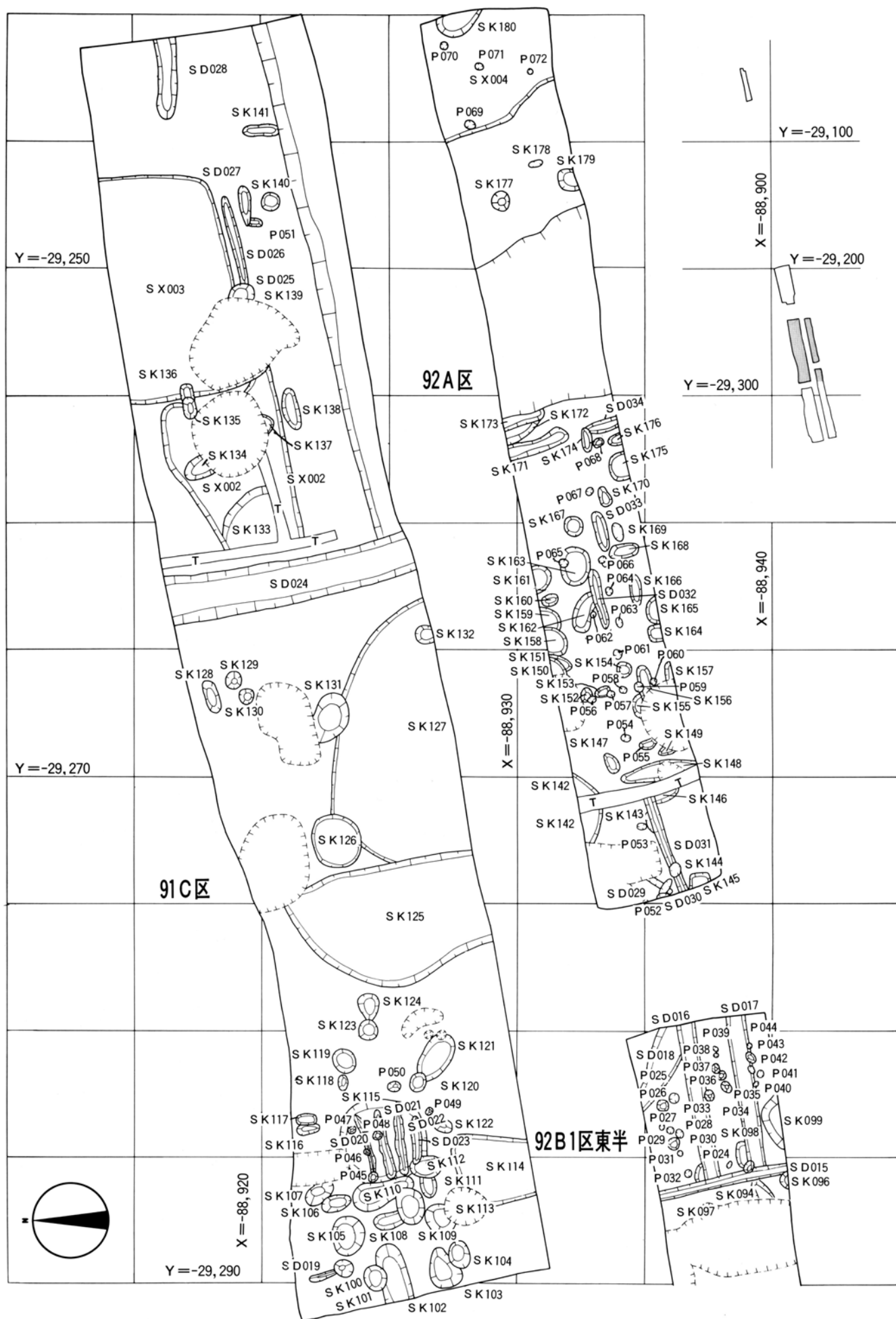
▲ : 1:8

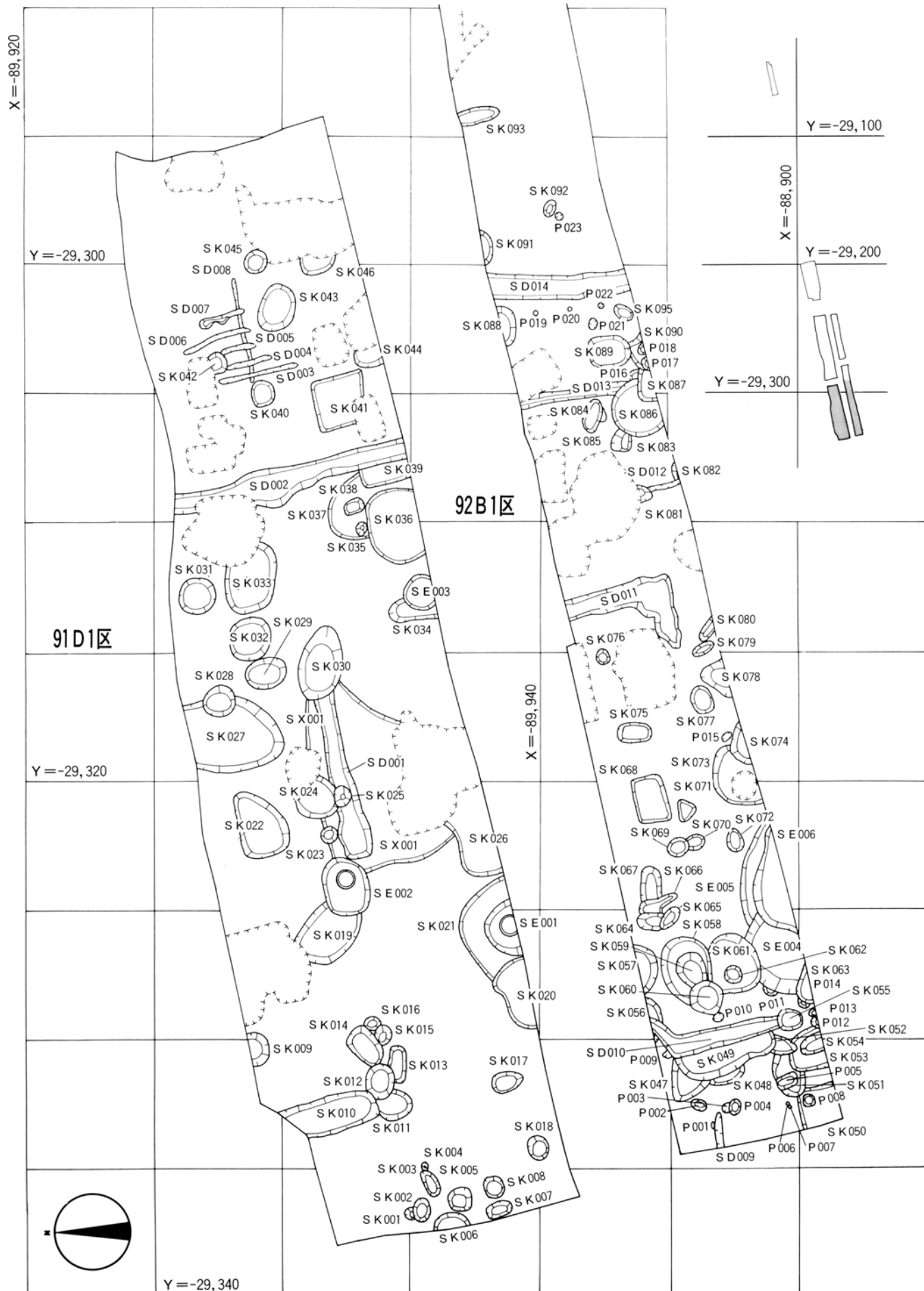
なお、図面の掲載されていない遺物
については、それぞれの通番の最後に
つづいた番号をつけてある

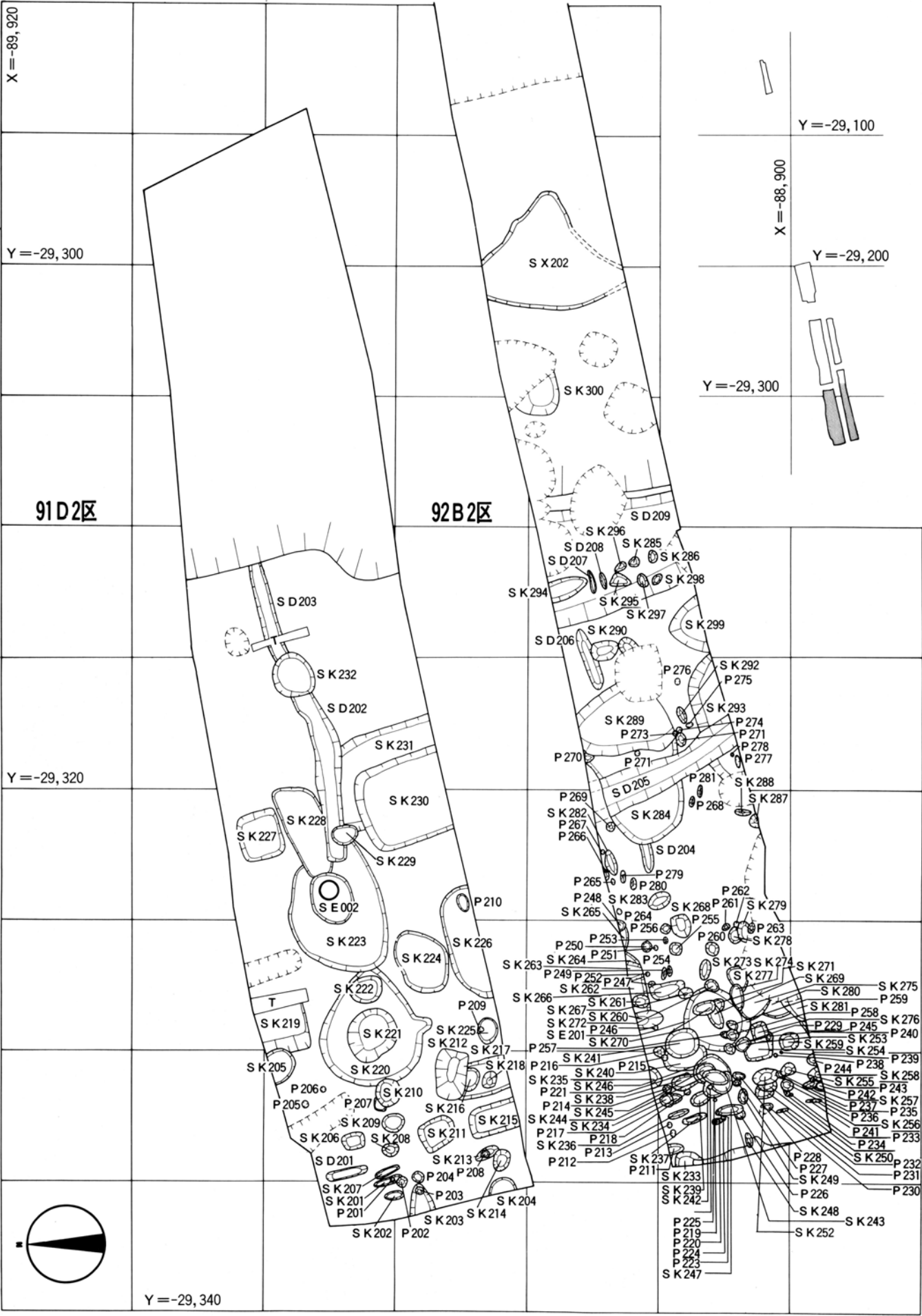
図版 目次

- 図版 1 遺構配置図 (1)
91 A 区・91 B 区
区東端
92 B 2 区調査区西半
- 図版 2 遺構配置図 (2)
91 C 区・92 A 区・92 B 1 区東半
- 図版 3 遺構配置図 (3)
91 D 1 区・92 B 1 区西半
- 図版 4 遺構配置図 (4)
91 D 2 区・92 B 2 区西半
- 図版 5 調査区周辺
- 図版 6 遺構 (1)
91 A 区調査区全景・S D 035・調査区東半
91 B 区調査区全景・S D 025
- 図版 7 遺構 (2)
91 C 区調査区全景
91 D 1 区調査区全景・S K 036・S K 025遺物出土状態
- 図版 8 遺構 (3)
91 D 1 区調査区西半・調査区西端・S K 230・S K 231・調査区中央・調査区全景
- 図版 9 遺構 (4)
92 A 区調査区全景・ピット列・東壁セクション
92 B 1 区調査区全景・S K 075・S K 062遺物出土状態
- 図版 10 遺構 (5)
92 B 1 区 S D 014・S D 011・調査
- 図版 11 遺構 (6)
92 B 2 区調査区西端・調査区中央・S K 240・S K 241・S K 299・S K 261・S K 260遺物出土状態
- 図版 12 近世の遺物 (1)
供膳具 (椀)
- 図版 13 近世の遺物 (2)
供膳具 (椀・小椀・皿)
- 図版 14 近世の遺物 (3)
供膳具 (皿)
- 図版 15 近世の遺物 (4)
供膳具 (皿・鉢)
- 図版 16 近世の遺物 (5)
調理具・貯蔵具
- 図版 17 近世の遺物 (6)
貯蔵具・灯火具・火具
- 図版 18 近世の遺物 (7)
火具・化粧具・神仏具・喫煙具・調度具
- 図版 19 近世の遺物 (8)
調度具・蓋類・金属製品・加工円盤・瓦類
- 図版 20 近世の遺物 (9)
人形類・石製品・木製品
古代・中世の遺物



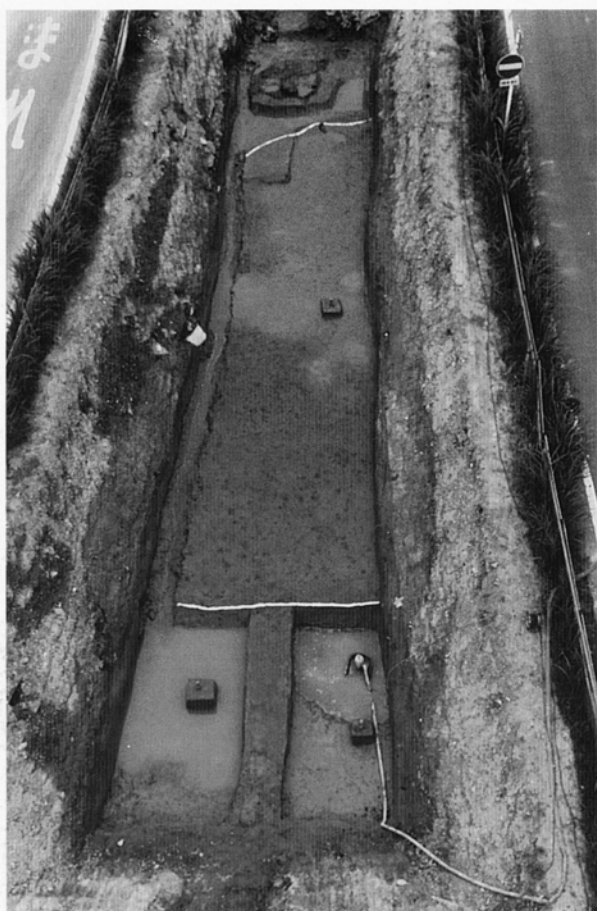




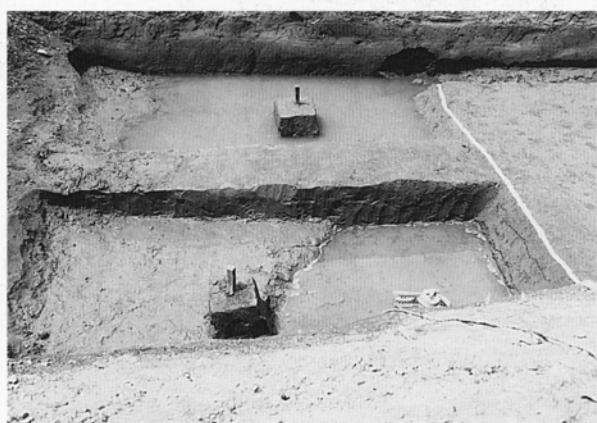


図版5 調査区周辺（左が北）





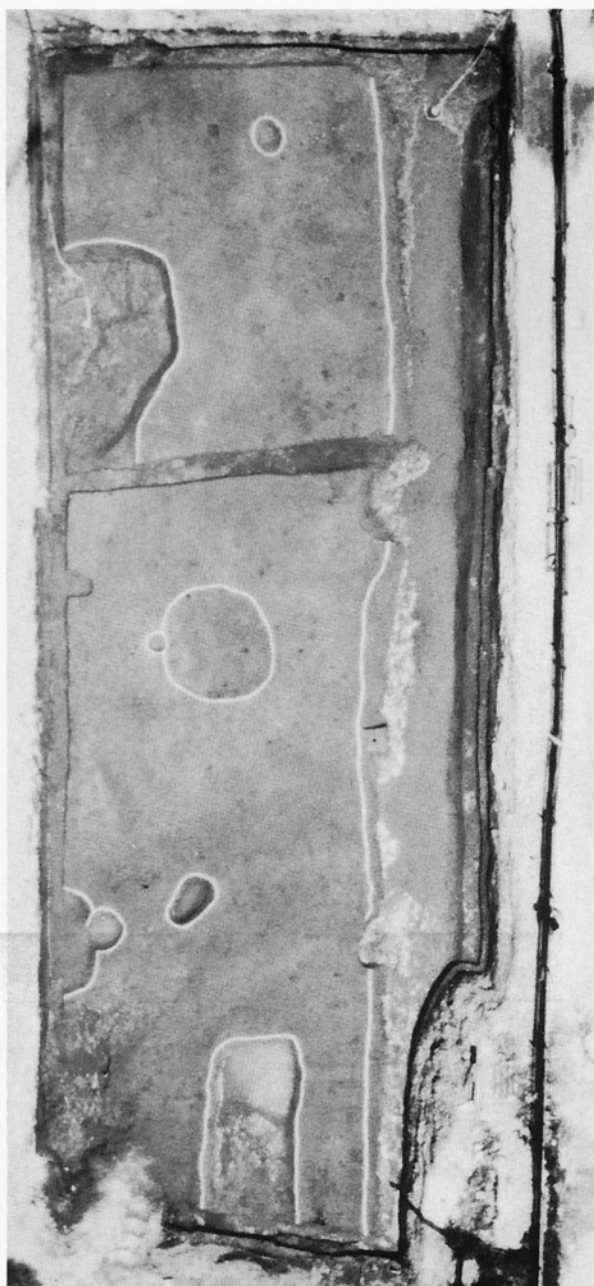
▲91A区 調査区全景(西から)



▲91A区 SD 035(南から)



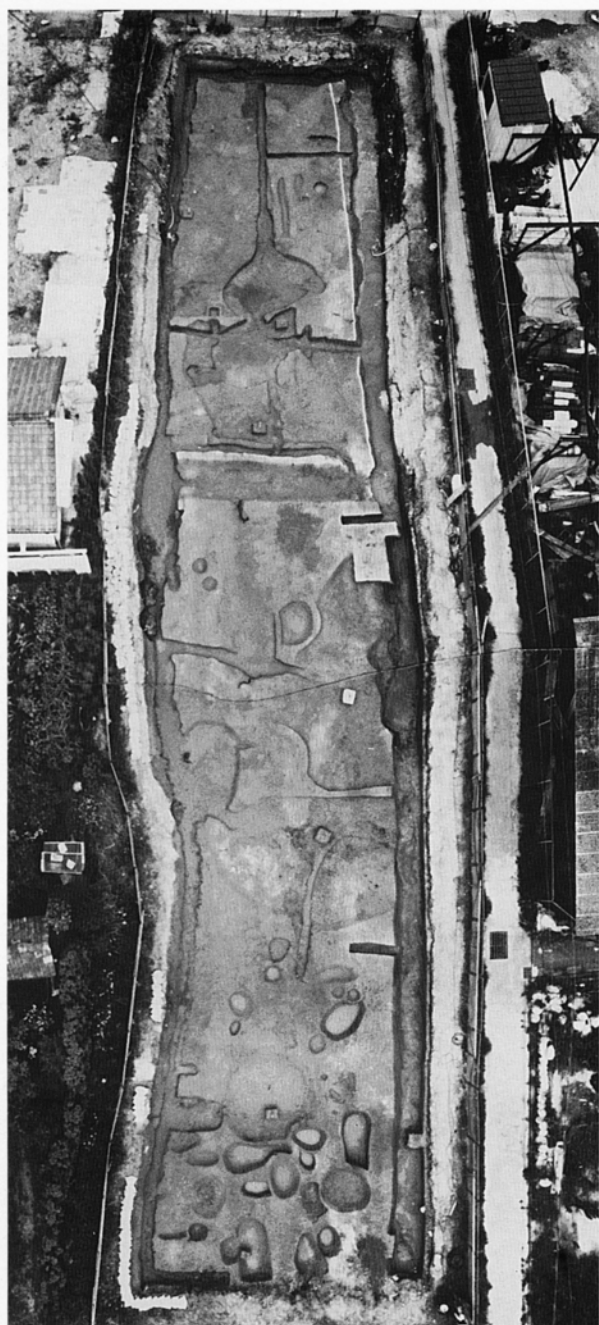
▲91A区 調査区東半(東より)



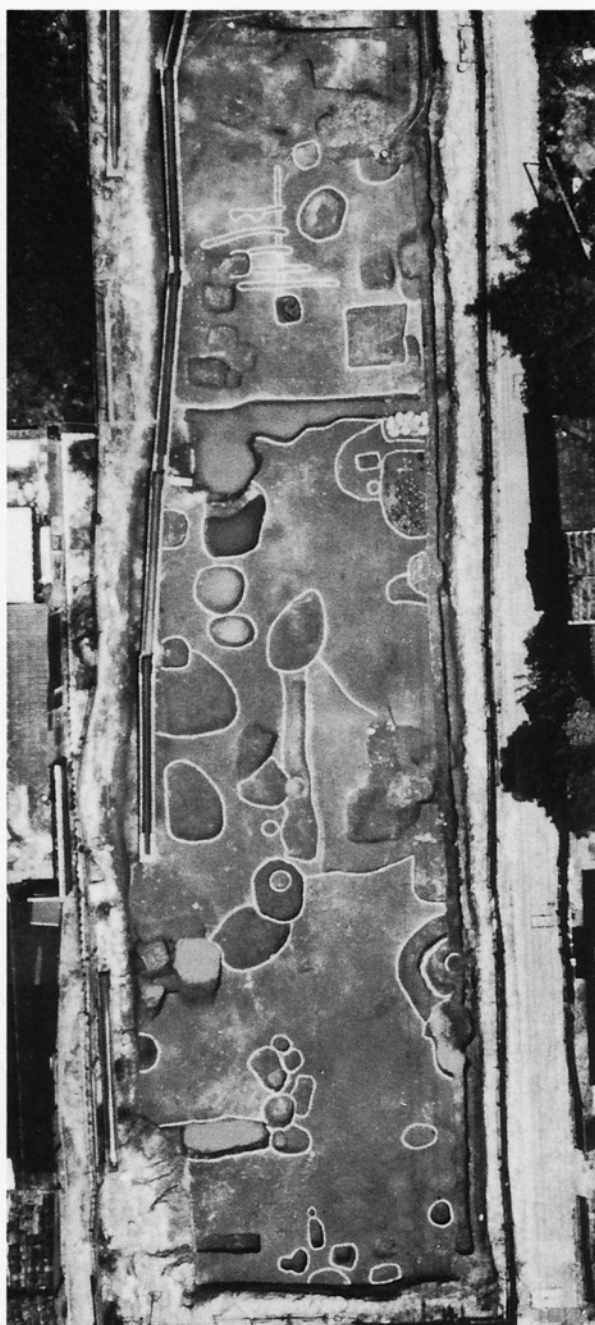
▲91B区 調査区全景(左が北)



▲91B区 SD 025(西から)



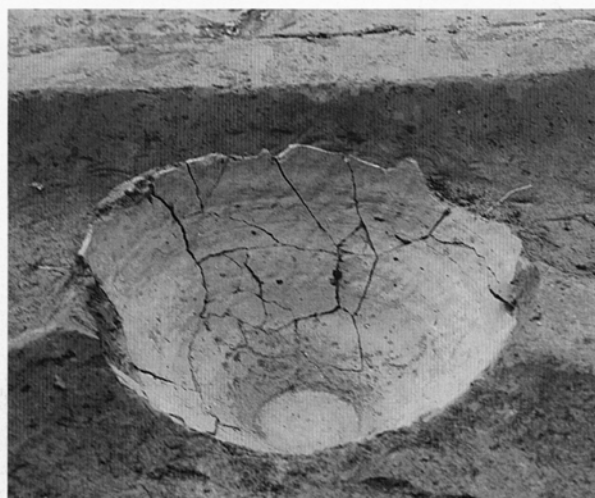
▲91C区 調査区全景 (左が北)



▲91D1区 調査区全景 (左が北)



▲91D1区 SK 036遺物出土状態 (西から)



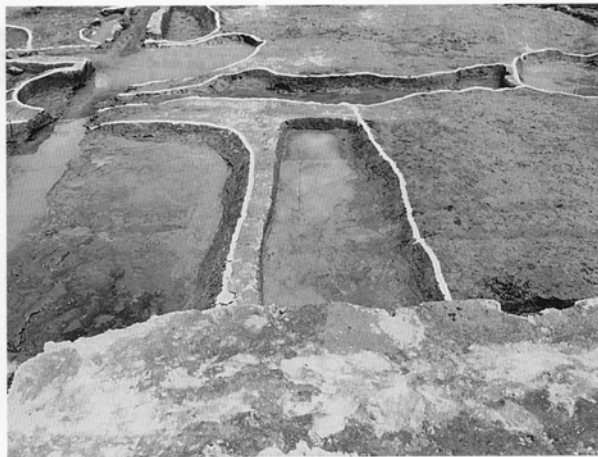
▲91D1区 SK 025遺物出土状態 (北から)



▲91D2 区 調査区西半 (東から)



▲91D2 区 調査区西端 (南から)



▲91D2 区 SK 230・SK 231 (北から)



▲91D2 区 調査中央 (南から)



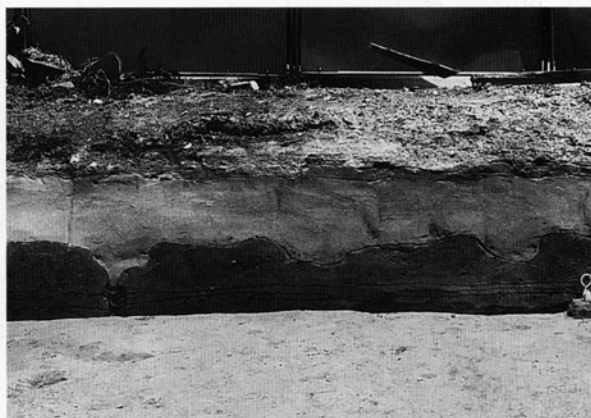
▲91D2 区 調査区全景 (西から)



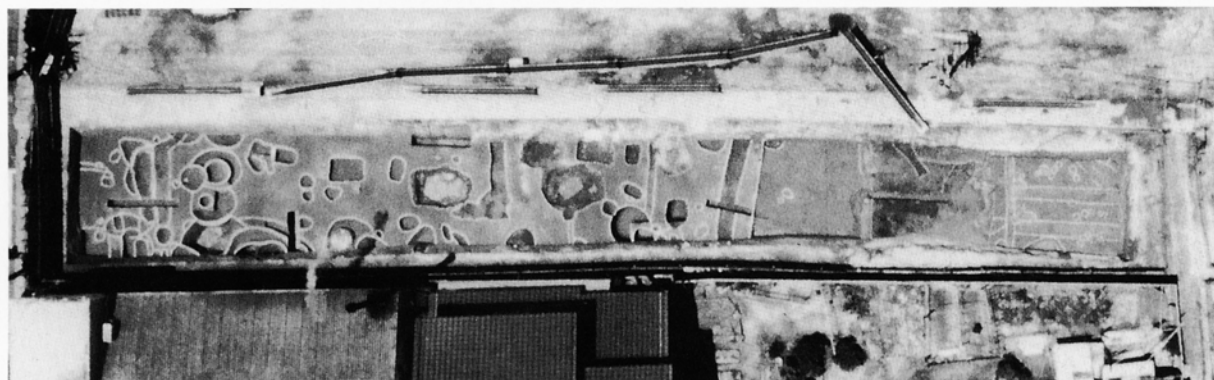
▲92A区 調査区全景（上が北）



▲92A区 ピット列（西から）



▲92A区 東壁セクション（西から）



▲92B1区 調査区全景（上が北）



▲92B1区 SK 075遺物出土状態（西から）



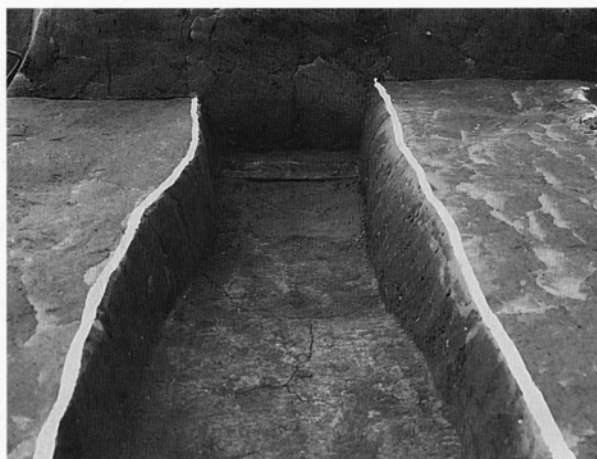
▲92B1区 SK 062遺物出土状態（西から）



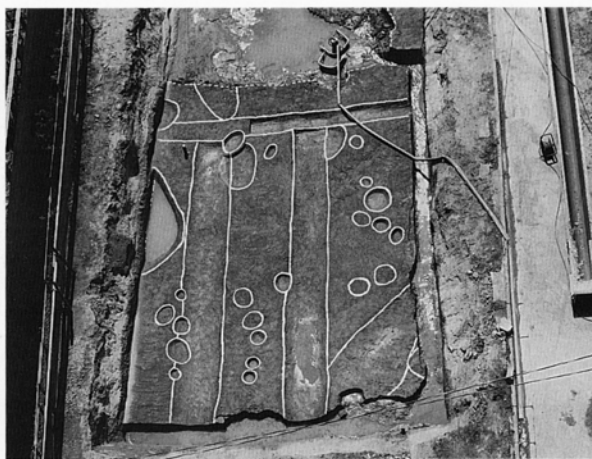
▲92B1区 SD 014 (南から)



▲92B1区 SD 014 (東から)



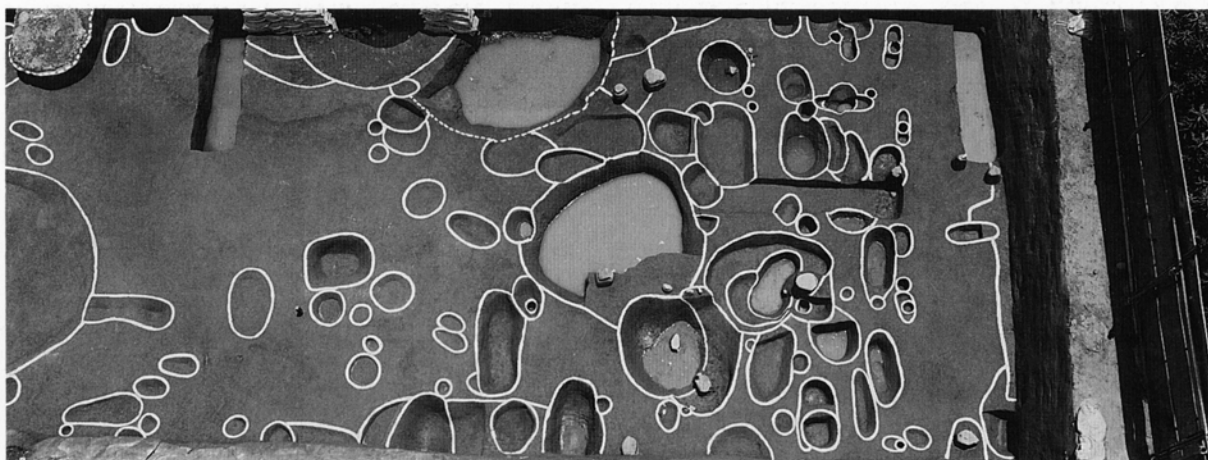
▲92B1区 SD 011 (南から)



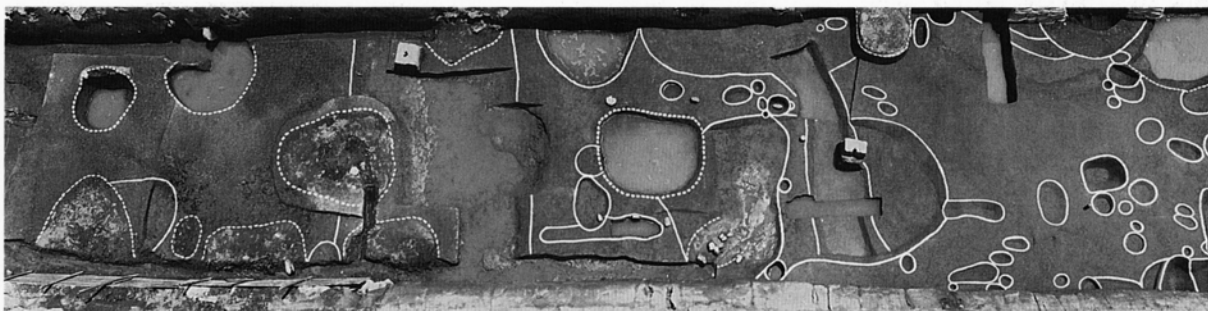
▲92B1区 調査区東端 (東から)



▲92B2区 調査区西半 (東から)



▲92B2 区 調査区西端 (北から)



▲92B2 区 調査区中央 (北から)



▲92B2 区 SK 240・SK 241遺物出土状態 (西から)



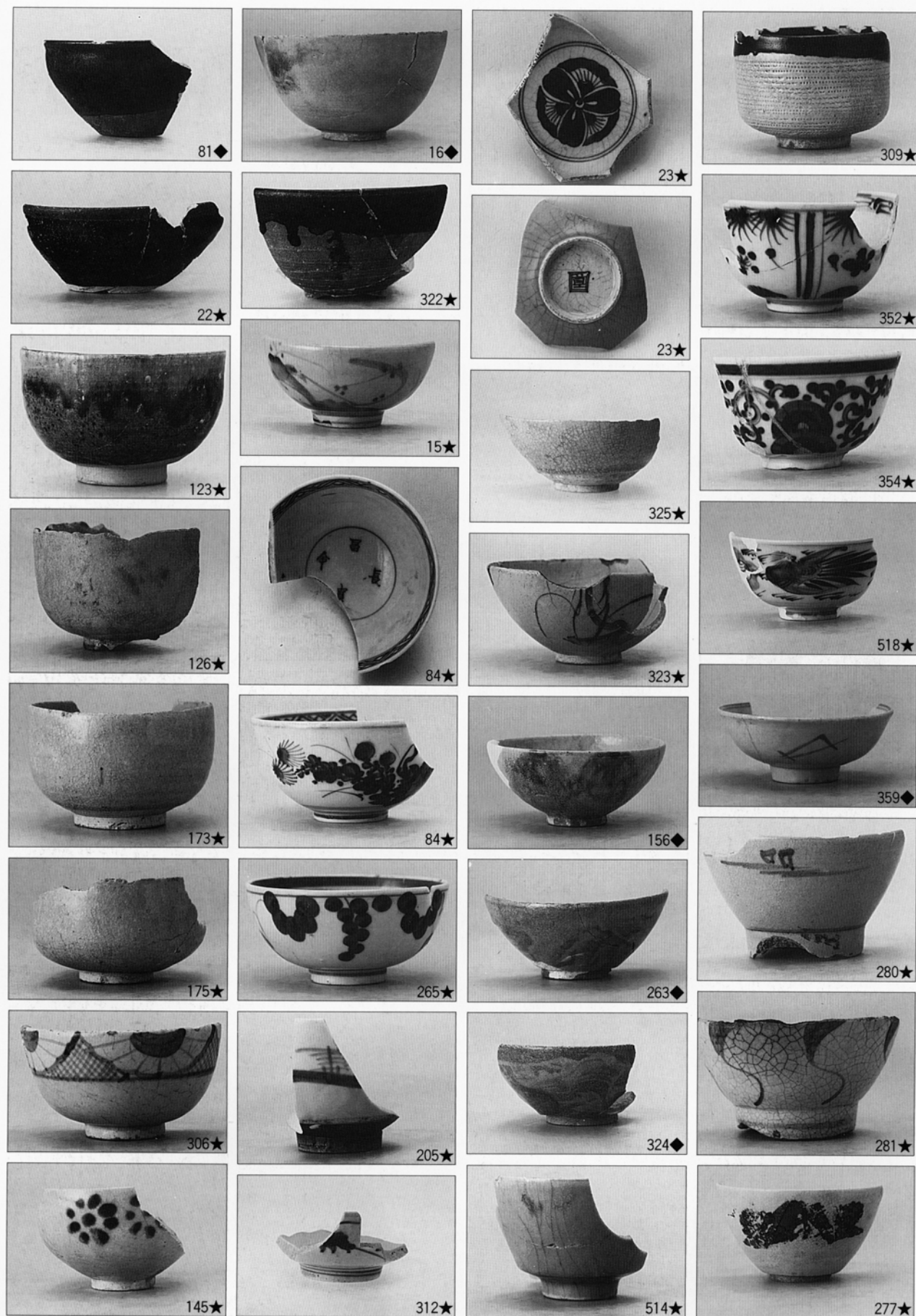
▲92B2 区 SK 299遺物出土状態 (南から)

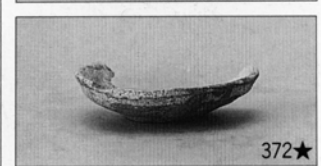
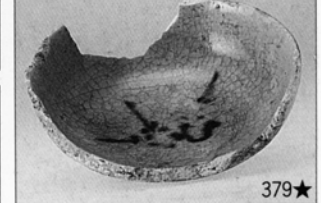
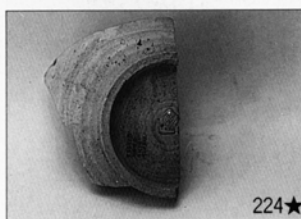
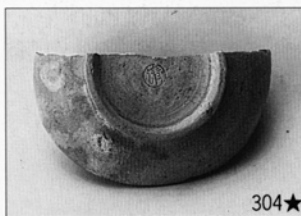
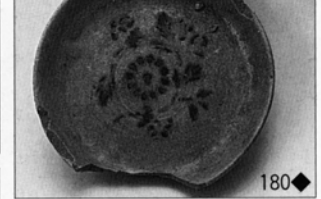
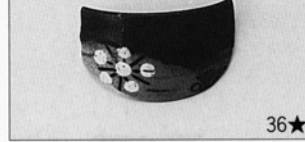
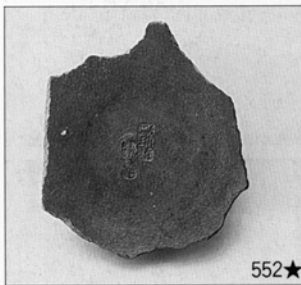
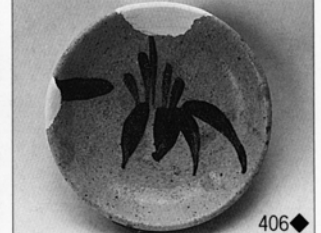
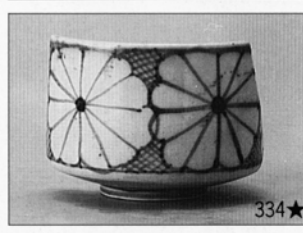
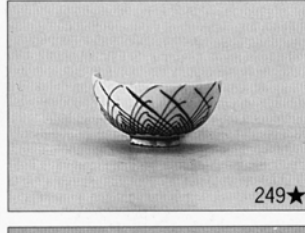
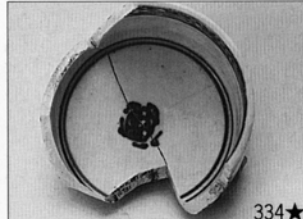
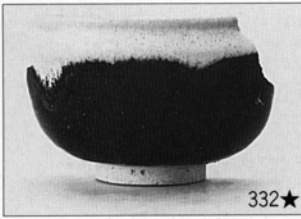


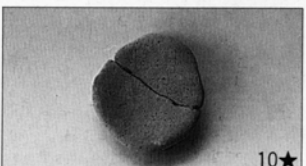
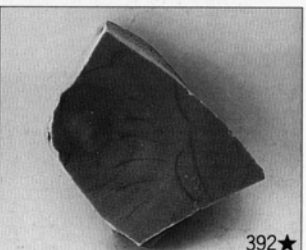
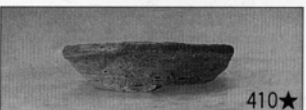
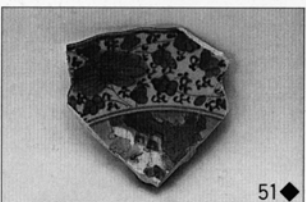
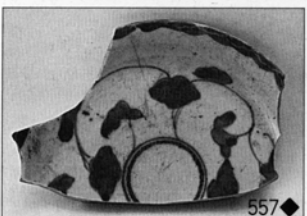
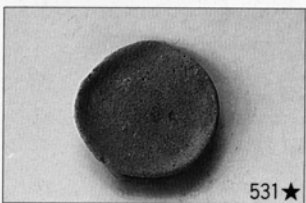
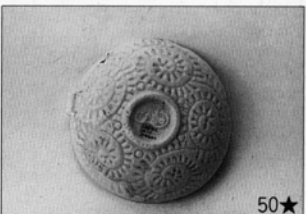
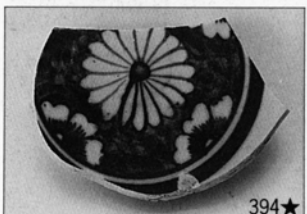
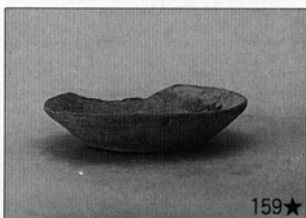
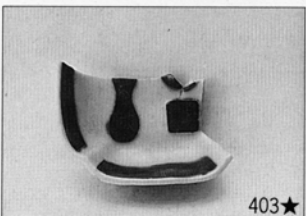
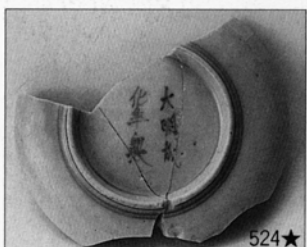
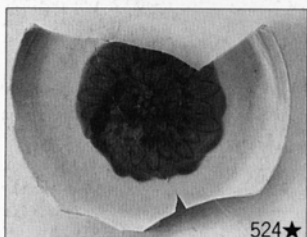
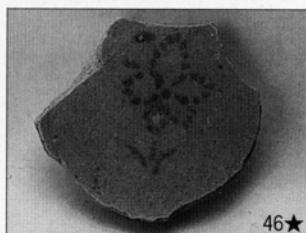
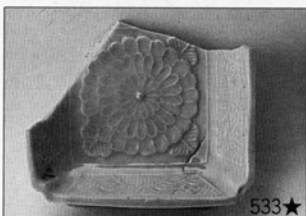
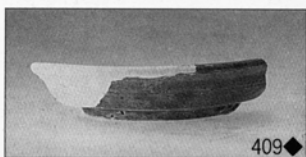
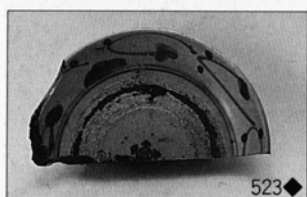
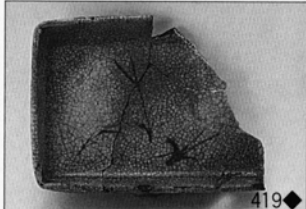
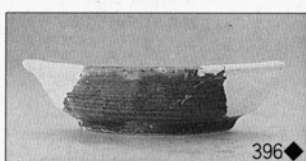
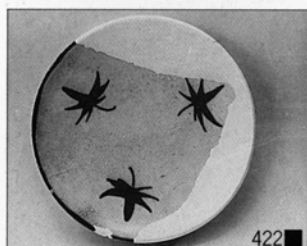
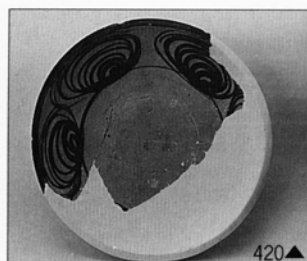
▲92B2 区 SK 261遺物出土状態 (北から)



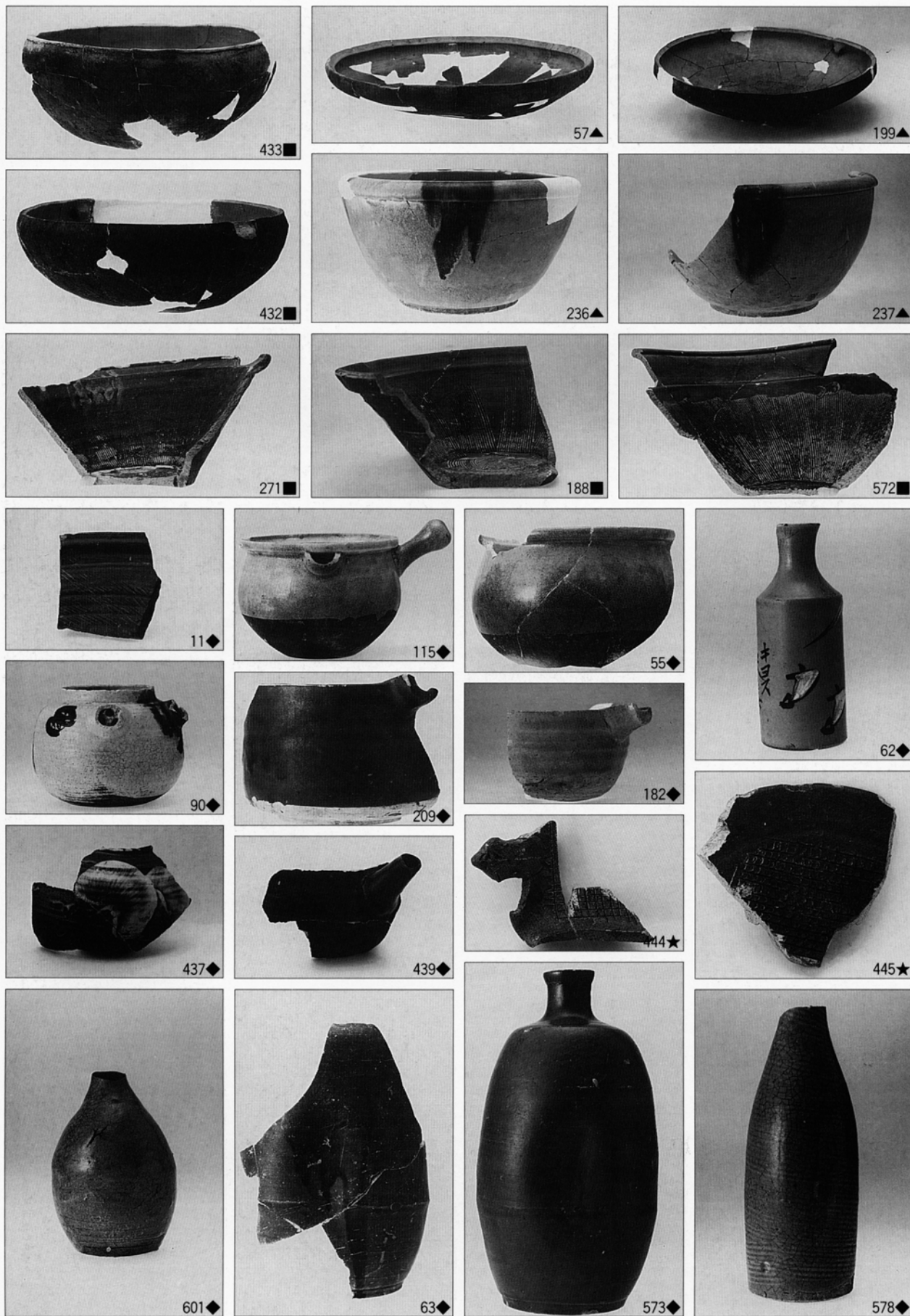
▲92B2 区 SK 260遺物出土状態 (北から)



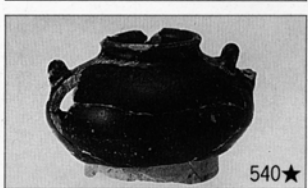
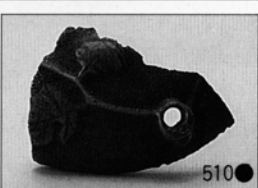
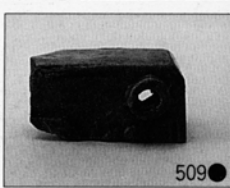
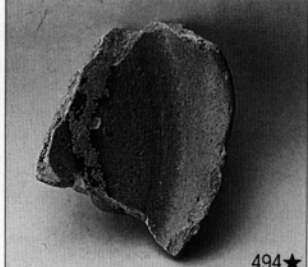
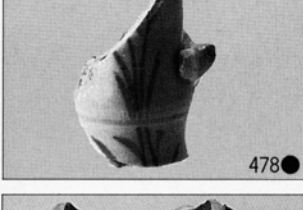
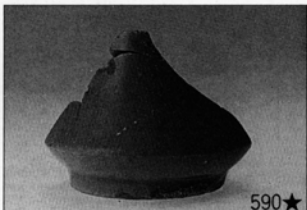
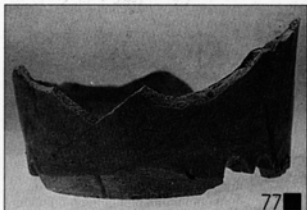
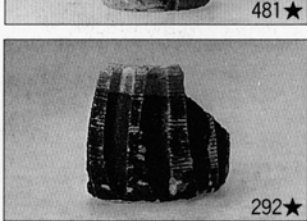
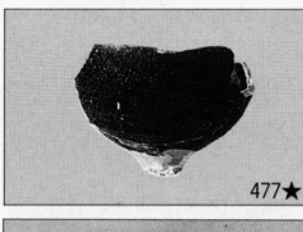
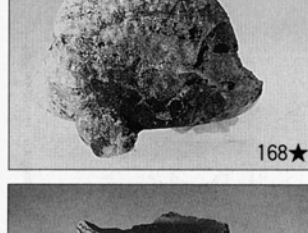
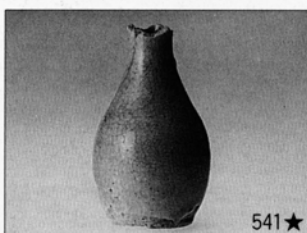
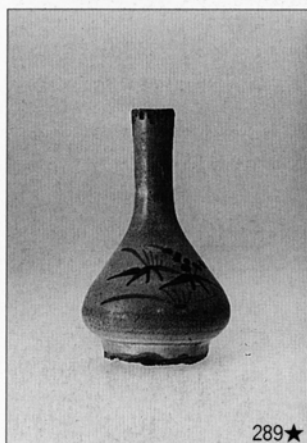
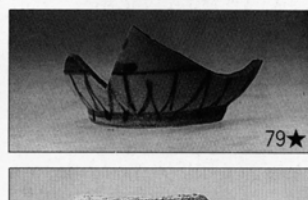
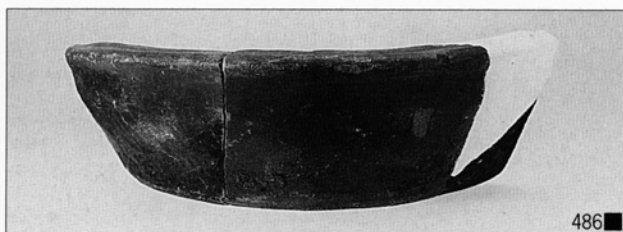
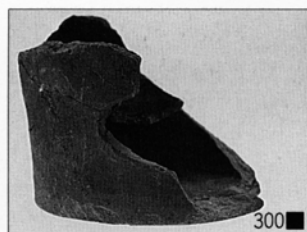


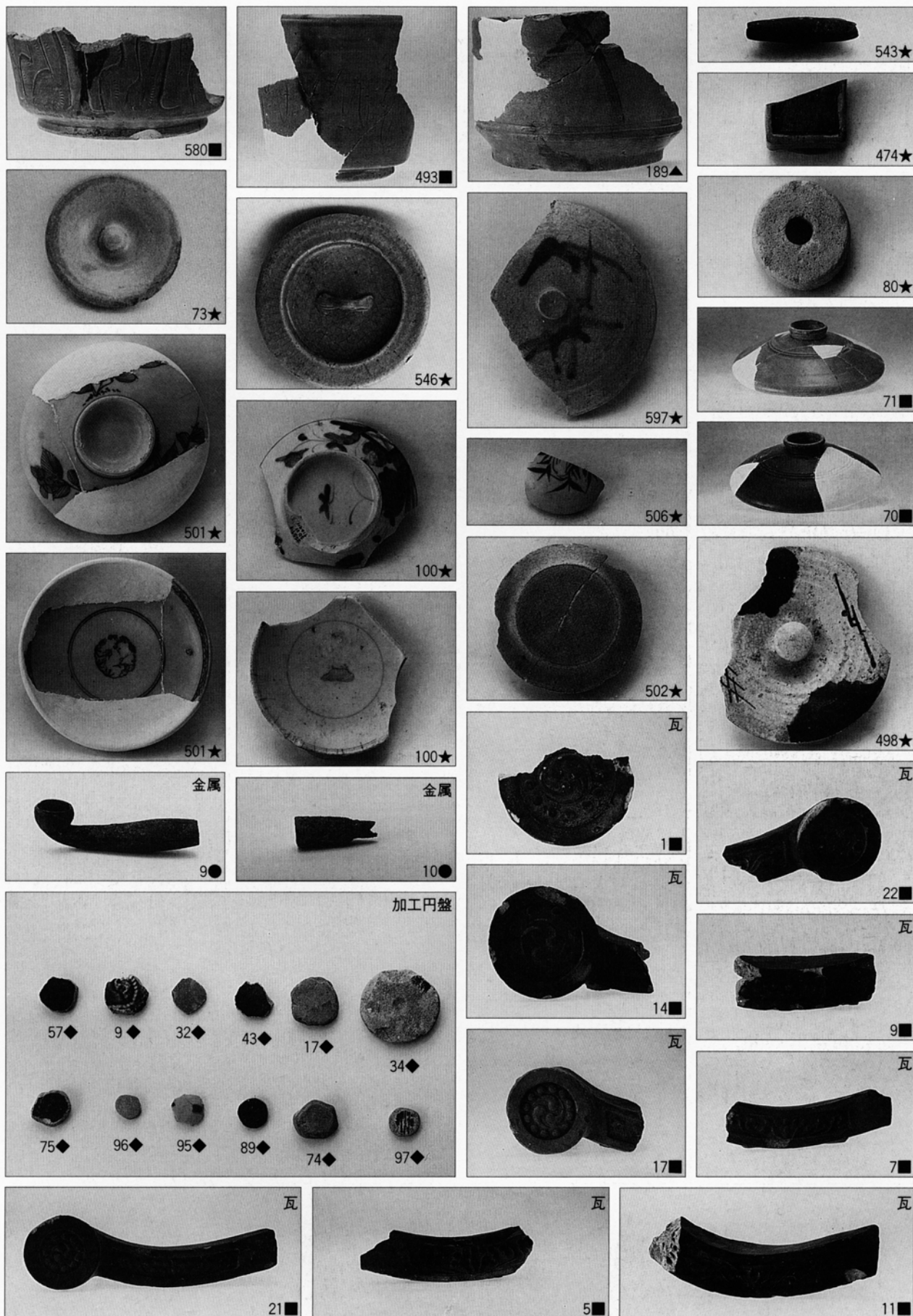


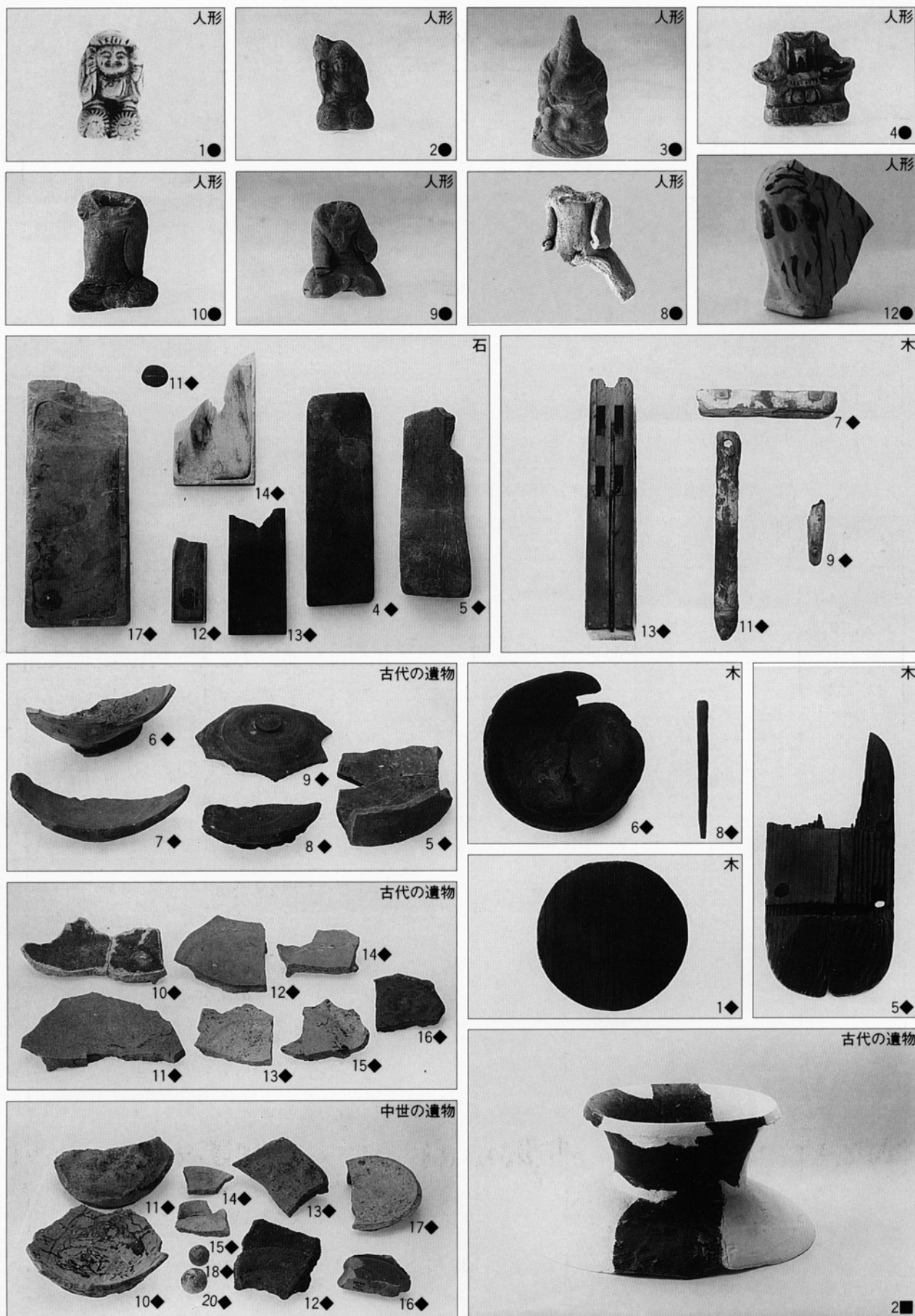












報 告 書 抄 録

フリガナ	キヨスジョウカマチイセキサン		ソトマチイセキ					
書名	清洲城下町遺跡Ⅲ ・ 外町遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第50集							
編著者名	小嶋廣也・鈴木正貴・城ヶ谷和広・大竹正吾・伊藤直子							
編集機関	財団法人愛知県埋蔵文化財センター							
所在地	〒498 愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24							
発行年	西暦1994年 3 月30日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
キヨスジョウカマチ 清洲城下町	ニシカスガイゲンキヨスチョウ 西春日井郡清洲町 オオアザキヨスホカ 大字清洲他	23346	21002	35°12'36"	136°50'42"	19900201 19900228	50㎡ (89 G)	道路建設
				35°12'41"	136°50'43"	19901101 19901227	180㎡ (90 G)	
				35°12'40"	136°50'45"	19901101 19901227	160㎡ (90 H)	
				35°12'36"	136°50'42"	19910108 19910131	50㎡ (90 I)	
				35°12'42"	136°50'38"	19910801 19910930	500㎡ (91 D)	
				35°12'41"	136°50'40"	19910801 19910930	347㎡ (91 E)	
				35°12'42"	136°50'38"	19920701 19920930	400㎡ (92 A)	
				35°12'41"	136°50'40"	19920701 19920930	610㎡ (92 B)	

フリガナ 所収遺跡名		フリガナ 所 在 地		コ ー ド		北 緯 ° ' "	東 経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
				市町村	遺跡番号					
ソト 外	マチ 町	ニシカスガイグンシンカワチョウ 外町西春日井郡新川町 オオアザスガグチホカ 大字須ヶ口他	23347		35°11'54"	136°50'50"	19910520 19910612	195㎡ (91 A)	道路建設	
					35°11'53"	136°50'44"	19910426 19910528	595㎡ (91 B)		
					35°11'52"	136°50'42"	19910529 19910708	600㎡ (91 C)		
					35°11'52"	136°50'41"	19910705 19910824	500㎡ (91 D)		
					35°11'51"	136°50'42"	19920506 19920612	300㎡ (92 A)		
					35°11'51"	136°50'41"	19920506 19920713	380㎡ (92 B)		
所収遺跡名		種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物		特 記 事 項			
清 洲 城 下 町 外 町	集落跡	古 代	竪穴住居・溝など	須恵器，土師器など						
	城館跡	戦国時代	掘立柱建物・溝・土坑など	瀬戸・美濃陶器，土師器，朝鮮陶器，柿経，石製品など						
	集落跡	江戸時代	井戸・土坑など	肥前磁器，瀬戸・美濃陶器など						
	集落跡	鎌倉時代	溝・ピットなど	山茶碗類など						
	集落跡	戦国時代	溝・井戸・土坑・礎石群	瀬戸・美濃陶器類，備前播鉢など						
	集落跡	江戸時代	溝・井戸・土坑・ピット・畝跡・水田跡など	瀬戸・美濃・肥前・関西陶磁器，信楽陶器，常滑陶器，中国磁器，加工円盤，瓦類，人形・ミニチュア類，木製品，金属製品，石製品など						

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第50集

清洲城下町遺跡Ⅲ・外町遺跡

1994年3月30日

編集・発行 財団法人愛知県埋蔵文化財センター

印刷 マツモト印刷株式会社
